



熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査

本文編・付論

1975

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第16集





一熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査

本 文 編

1 9 7 5

熊本県教育委員会

序 文

城南町塚原古墳群の調査報告を熊本県文化財調査報告第16集として刊行することになりました。

塚原古墳群は、江戸時代に編纂された『肥後国誌』や『古今肥後見聞雑記』に、塚原台地に 散在したという「九十九塚」の伝承が記録されていますので、古墳群の存在はかなり古くから 知られていたものと思われます。又、昭和32年以降、城南町一帯の遺跡の総点検と調査が行わ れ、昭和40年に公刊された『城南町史』に収録されています。これらの調査記録とともに、塚 原台地の古墳についても詳しく紹介されています。

ところが、台地上の一部に、日本道路公団によって進められていた九州縦貫自動車道の建設が計画されることになりました。計画地内には、古墳1基と、すでに盛土を失なった古墳の推定地等があり、県教育委員会は、日本道路公団の委託によって、昭和47年4月発掘調査を開始しました。

2年余りの歳月を費した調査で、総数 101基に及ぶ古墳等を発掘し、多大な成果をあげることができました。

一方、全国的な文化財に対する関心の高揚とともに、この古墳群の保存を強く要望する声が多方面から起り始めました。この為各関係機関で遺跡保存のための協議がくり返し行われました。そして昭和49年12月3日、文化庁次長・日本道路公団副総裁・熊本県知事・熊本県城南町長の四者間で、「塚原台地の工事方法の変更等について」の協定書がとりかわされ、現在その方針に基づき、具体的な保存計画について関係方面で努力中であります。

本県教育委員会では、学術調査上の成果をここに集録し、公刊することになりました。不備な点も多々あるとは思いますが、永く文化財の研究・保護のために活用されることを希望します。

最後に、調査にあたり日本道路公団・城南町当局・地元塚原地区をはじめ方々には、多大な御協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。

昭和50年3月

熊本県教育長 富 永 俊 夫

例 言

- (1) 本書は、熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の発掘調査報告書であり、熊本県文化財調査報告第16集として刊行するものである。
- (2) 調査は、熊本県が九州縦貫自動車道建設工事に伴って、日本道路 公団との間で取りかわした「発掘調査委託契約」に基き熊本県教育 委員会が実施したものである。
- (3) 調査は、昭和47年4月26日からいて昭和50年3月ま
- (4) 本書は、全体を本文編と別書資料編に分けた。本文編には、調査 に伴って専門学者に依頼した調査・測定・鑑定等の報告を付論とし て掲載した。
- (5) 挿図・表は序章よりⅢ章まで通して番号を用いた。なお、付論の 挿図・表の番号は各論ごとで統一した。

出土遺物のうち土師器・須恵器については1から 646まで 番号を用い、これは第二章第1節の「出土土器観察結果一覧表」の 番号及び第一章第2

- る。なお縄文土器・鉄器・玉類については番号を改めた。
- (6) 本報告書の作製及び執筆は、隈昭志の指導のもとに、野田・松本 ・島津・江本が担当し、付論6を緒方が担当した。

人骨・馬歯・地質等の調査、研究については、内藤芳篤・坂田邦 洋・籾倉克幹・吉倉真・大迫靖雄・杉元安弘・松本雅明・富田紘一 ・西健一郎の諸先生方の玉稿を頂載することができた。記して感謝 の意を表するものである。

本 文 目 次

序 章
第1節 塚原古墳群の位置および歴史的環境
1. 位 置1
2. 歴史的環境2
第2節 調査の経過12
1. 分布調査以後12
2. 調査直前の塚原台地12
3. 調査組織14
4. 発掘調査の経過17
第1章 調 査23
第1節23
1. 調査の概要23
2. 遺跡の層位および層序23
3. 古墳群の配置25
第2節 方形周溝墓の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第3節 円墳・前方後円墳の調査89
第4節 石棺・石蓋土壙・竪穴遺構の調査
第 5 節 墓道の調査
第 6 節 中世墳墓群の調査
第7節 まとめ
第 2 章 遺物・遺構の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第1節 遺 物
1. 出土土器の観察
2. 土師器の類別
3. 土師器の年代的位置259
4. 須恵器について
5. 玉 類26
6. 縄文時代その他の遺物 268

	1.	墳墓の類別		•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	••••••		· 291
	2.	遺構の新旧	関係			•••••			• 292
	3.	古墳群の形	成過程		······································	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		• 293
	4.	熊本県の方	形周溝墓・			•••••			298
第3節	塚	原古墳群…	•••••		・あとがきし	にかえて・			• 300
			表	E]	次			
								•	
第 1.表	••••		塚原古墳郡	詳周辺の遺	遺跡一覧表·				7
第2表	•••••		発掘調査征	亍程表 (1)		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •			18
第 3 表	•••••		発掘調査征	行程表 (2)					18
第4表	• • • • • •		発掘調査征	行程表 (3)			•••••		19
第 5 表	••••		発掘調査征	行程表 (4)		••••••			19
第6表	••••		発掘調査征	亍程表 (5)		•••••			20
第7表	••••		東B区墓記	道楕円穴計	∤測表⋯⋯				• 161
第8表	•••••		塚原中世界	費墓一覧表	₹⋯⋯	•••••			· 163
第 9 表	••••		前方後円均	費対比表…		•••••			· 179
第10表	•••••		塚原古墳郡	詳石棺・石	話土壙一 覧	竟表	•••••		· 180
第11表	• • • • •		九州横口記	式石棺(妻	入)地名表·	•••••	•••••		· 181
第12表	••••		·塚原古墳郡	#主体部-	-覧表	•••••	••••••	•••••	· 182
第13表	••••		土師器類別	別表	•••••	•••••	•••••	折) こみ
第14表	••••		塚原古墳郡	詳出土須恵	慧器一覧表·	•••••	•••••	•••••	· 262
第15表	••••		·塚原古墳郡	詳出土須惠	思 器時期別2	分類表…	•••••		· 264
第16表	••••		·塚原古墳郡	詳出土玉類	項墳墓別一覧	覧表			· 265
第17表	••••		·塚原古墳郡	洋出土玉 類	頁一覧表…	•••••	•••••		· 265
第18表	••••		·縄文土器b	出土地点-	-覧表				· 278
第19表	•••••		·縄文土器	観察結果-	-覧表	•••••			· 280

挿図 目 次

第 1 図 塚原古墳 第 2 図 塚原古墳 第 3 図 調査前の	の位置				
					1
単第 3 図 調査前の	周辺の遺跡	弥分布 図			6
	塚原古墳群				13
第 4 図 塚原台地	の土層模式[図			24
第 5 図 塚原古墳	群の配置図	(付図)			(折りこみ)
第 6 図 方形周溝	墓の計測法				27
第 7 図 1号方形	周溝墓				28
第 8 図 1号方形	周溝墓主体部	部			29
第 9 図 1号方形	周溝墓周溝边	貴物出土状	況		30
第10図 2・3号	方形周溝墓				31
第11図 2号方形	周溝墓主体部	爭			32
第12図 2号方形	周溝墓周溝边	貴物出土状	況(1)		33
第13図 2号方形	周溝墓周溝边	貴物出土状	況(2)		34
第14図 3号方形	周溝墓周溝边	貴物出土状	況		35
第15図 4号方形	周溝墓				36
第16図 4号方形	周溝墓主体部	部			37
第17図 5号方形	周溝墓				38
第18図 5号方形	周溝墓周溝道	貴物出土状	況(1)		39
第19図 5号方形	周溝墓周溝道	貴物出土状	况(2)		40
第 2 0 図 6 ・ 7 号	方形周溝墓				42
第 2 1 図 6・7 号	方形周溝墓網	縦横断面図			(折りこみ)
第22図 6号方形	周溝墓主体部	部			(折りこみ)
第23図 6号方形	周溝墓周溝	貴物出土状	況(1)		44
第24図 6号方形	周溝墓周溝	貴物出土状	況(2)		45
第25 図 7号方形	周溝墓主体部	部			46
第26図 7号方形	周溝墓周溝	遺物出土状	況		47
第27図 8号方形	周溝墓、丸山	□6 号墳、	中世墳墓	群	49
第28図 8号方形	周溝墓周溝	貴物出土状	況(1)		50
第29図 8号方形	周溝墓周溝	貴物出土状	况(2)		51
第30図 9号方形	周溝墓				52
第31図 9号方形	周溝墓周溝	貴物出土状	況		53
第 3 2 図 10号方形					54
	周溝墓周溝		-		55
	34 号方形周》		B区墓道		56
	周溝墓1号3				57
• • • • • • • • • • • • • • • •	周溝墓2号3				58
第 3 7 図 11号方形	周溝墓3号3	王体部			59

挿図番号	図 版 名 称	頁
第38図	12号方形周溝墓1号主体部	60
第39図	15号方形周溝墓	61
第40図	15号方形周溝墓周溝遺物出土状況	62
第41図	16号方形周溝墓、西側A区墓道	63
第42図	16号方形周溝墓主体部	64
第43図	17号方形周溝墓	65
第44図	17 号方形周溝墓主体部・周溝遺物出土状況	66
第45図	18・19・38号方形周溝墓、丸尾8号墳、第16・17号石棺、	67
	石蓋土壙、東側 A 区墓道	67
第46図	18号方形周溝墓周溝遺物出土状況	68
第47図	19号方形周溝墓主体部	69
第48図	21・22・23号方形周溝墓	70
第49図	22号方形周溝繤周溝遺物出土状況	72
第50図	22号方形周溝墓主体部	72 · 73
第51図	27号方形周溝墓	74
第52図	27号方形周溝墓周溝遺物出土状況	74
第53図	28号方形周溝墓	75
第 5 4 図	30号方形周溝墓	75
第55図	30号方形周溝墓主体部	76
第56図	30号方形周溝墓周溝遺物出土状況	77
第57図	31号方形周溝墓	78
第58図	31号方形周溝墓主体部	79
第59図	31号方形周溝墓周溝遺物出土状況	80
第60図	35号・36号方形周溝墓	81
第61図	35号方形周溝墓主体部	82
第62図	35・36号方形周溝墓周溝遺物出土状況	83
第63図	35 号方形周溝墓周溝遺物出土状況	84
第64図	36号方形周溝墓主体部	85
第65図	36号方形周溝墓周溝遺物出土状況	86
第66図	39号方形周溝墓	87
第67図	39号方形周溝墓主体部	88
第68図	円墳各部の名称と計測法	89
第69図	丸山 3 号墳	90
第70図	丸山3号墳周溝遺物出土状況(1)	91
第71図	丸山3号墳周溝遺物出土状況(2)	92
第72図	丸山 4 号墳	94
第73図	丸山 6 号墳及び中世墳墓群	(折りこみ)
第74 図	丸山 6 号墳周溝遺物出土状況	96
第75図	丸山 7 号墳	98

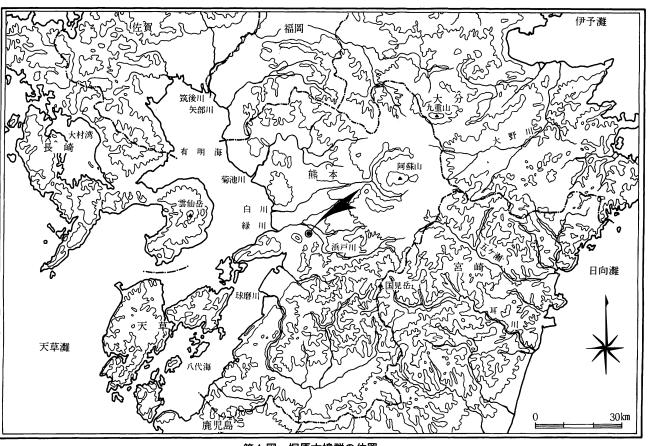
.

挿図番号	図 版 名 称	頁
第76図	 丸山7号墳周溝遺物出土状況(1)	99
第77図	丸山 7 号墳周溝遺物出土状況(2)	100
第78図	丸山 7 号墳周溝遺物出土状況(3)	101
第79図	丸山8号墳	102
第80図	丸山8号墳主体部	103
第81図	丸山9号墳	104
第82図	丸山9号墳主体部	105
第83図	丸山10号墳	106
第84図	丸山11号墳	107
第85図	丸山12号墳	107
第86図	丸山12号墳主体部	108
第87図	丸山13号墳	109
第88図	丸山13号墳主体部	110
第89図	丸山13号墳周溝遺物出土状況	111
第90図	丸山14号墳	112
第91図	丸山14号墳主体部	113
第92図	丸山15号墳	113
第 9 3 図	丸山16号墳	114
第94図	丸山16号墳主体部	114
第 9 5 図	丸山17号墳	115
第96図	丸山17号墳主体部	116
第97図	丸山18・35号墳	117
第98図	丸山18・35号墳主体部	118
第99図	丸山19号墳	119
第100 図	丸山19号墳主体部	120
第101 図	丸山21号墳	120
第102 図	丸山21号墳主体部	121
第103 図	丸山23号墳	121
第104 図	欠 番	
第 105 図	丸山23号墳周溝遺物出土状況	121
第106 図	丸山24号墳	122
第107 図	丸山26号墳	124
第108 図	丸山27号墳	125
第109 図	丸山28号墳	126
第110 図	丸山29号墳	127
第 111 図	丸山34号墳	129
第112 図	丸山34号墳主体部	130
第 113 図	丸山34 号墳周溝遺物出土状況	128

挿図番号	図 版 名 称	頁
第114 図	第 9 号石棺出土鉄鏃·直刀	131
第 115 図	丸尾 5 号墳主体部	132
第 116 図	丸尾 5 号墳周溝遺物出土状況(1)	133
第 117 図	丸尾 5 号墳周溝遺物出土状況(2)	134
第 118 図	丸尾 5 号墳周溝遺物出土状況(3)	135
第 119 図	丸尾 5 号墳周溝遺物出土状況(4)	136
第 120 図	丸尾 6 号墳周溝遺物出土状況	137
第 121 図	丸尾 7 号墳、25・26号方形周溝墓	138
第 122 図	丸尾 7 号墳主体部	139
第 123 図	丸尾8号墳周溝遺物出土状況	140
第 124 図	くぬぎ塚古墳全体図	142
第 125 図	くぬぎ塚古墳墳丘断面図	143
第 126 図	くぬぎ塚古墳主体部	144
第 127 図	琵琶塚古墳全体図	146
第 128 図	琵琶塚古墳後円部墳丘断面図	(折りこみ)
第 129 図	1 ・2 ・3 ・4 号石棺	147
第 130 図	5 ・6 ・7 号石棺	148
第 131 図	8 ・9 ・10号石棺	150
第 132 図	11・12・13・14号石棺・竪穴	151
第 133 図	11・12・13・14 号石棺・竪穴断面図	154
第 134 図	15号石棺	156
第 135 図	16号石棺	157
第136 図	17号石棺	158
第137 図	石蓋土壙	159
第 138 図	東側B区墓道	161
第 139 図	土器の計測法・記号	185
第 140 図	くぬぎ塚古墳墳丘下出土土器	269
第 141 図	縄文式土器 (1)	270
第 142 図	縄文式土器 (2)	271
第 143 図	縄文式土器 (3)	272
第 144 図	縄文式土器 (4)	273
第 145 図	縄文式土器 (5)	274
第 146 図	石 器	276
第 147 図	県内方形溝墓分布図	298

序章

第1節 塚原古墳群の位置及び歴史的環境



第1図 塚原古墳群の位置

(第1図)

1 位 置

九州の屋根とも呼ばれる九州山地に源を発する白川・緑川の二大河川は、広大な熊本平野を 形成し、いずれも有明海に注いでいる。平野の西北部にそびえる金峰山は海側を遮断し、南で は九州山地から雁回山、宇土半島を経て天草の島々へとつづく地塊が、熊本平野と八代平野と を分っている。

ここに報告する塚原古墳群は熊本平野の南端、熊本県下益城郡城南町にあり、熊本市の市街地より南へ14kmの地点に位置している。町の北部を緑川が流れ、熊本市と上益城郡嘉島町とに境を接している。また下益城郡中央町、豊野村に源を発する浜戸川(廻江川)は、町の中央部を貫流し富合町を経て緑川に注いでいる。浜戸川が緑川に合流するあたりは、肥沃な水田地帯が広がり、最近まで条里遺構の区画をよく残していた。緑川と浜戸川に挟まれた舞ノ原台地西端の隈庄・宮地地区はこの町の中心部となっている。中心部に小高くそびえる隈庄城、さらに

酒蔵など古い街並を残している。

古墳群は限庄の町よりさらに南へ1km、浜戸川中流の大字塚原に所在している。遺跡は浜戸川およびその他の小支流によって形成された洪積台地の一つ、通称塚原(つかばる)と呼ばれる台地一帯に散在する墳墓を総称している。塚原台地は標高20~30m 前後の比較的平坦な地形で、総面積は30万㎡におよんでいる。主に桑園・栗園などに利用されている。現在の集落は台地の北側傾斜面から水田地帯に集中していて、台地上には家一軒見い出すことはできない。

この塚原台地の古墳は、かなり古くから知られていたらしく、『古今肥後見聞雑記』には、「同郡塚原村二九十九塚有、村号是によると云り』とあり、また『肥後国誌』にも同様の記事が見られる。塚原台地はもとより浜戸川中流域一帯は熊本平野でも屈指の古墳密集地帯であり、古代文化のいちはやく栄えた地域として著名である。一方、県下において考古学的調査の行なわれた最初の地域でもあった。特に阿高・御領の貝塚の調査成果なしには九州における縄文文化を論ずることは出来ないし、弥生・古墳時代はもとより歴史時代に至っても、今やこの地域を除外しては、肥後における古代文化を解明することは出来ないのである。

2 歴史的環境

城南町は古くから遺跡の宝庫として知られる町である。とくに故小林久雄氏などによる調査研究活動はあらためて驚くべきものがあり、その過程で多くの研究者をも育てた。氏は晩年に至り、初代町長の席にありながら町史編纂事業を推し進め、その成果は昭和40年3月『城南町史』として完成している。氏の死後4年目の春のことであった。『城南町史』の編集・執筆にあたられた松本雅明・三島格・花岡興輝氏をはじめ多くの人々の血のにじむような活動もさることながら、その業績は今も燦然と輝いている。その後各種の開発事業、とくに九州自動車道建設に伴う一連の考古学調査によって、次々と新しい知見がもたらされた。昭和47年の尾窪中世墳墓群の調査、昭和48年の沈目遺跡古墳時代集落址の調査などは、この地域の古代~中世に至る文化解明に重大な手がかりを得たといえる。

城南町の各遺跡は、いずれも緑川・浜戸川の両河川を中心に展開するものであり、主として 浜戸川流域から緑川流域へと移行する開拓の歴史を指摘することができる。以下、九州自動車 道建設に伴う塚原古墳群の発掘調査を報告するにあたり、本地域の遺跡の概要を紹介し、その 歴史的環境の一端にふれてみたい。

縄文時代

九州地方のなかでも熊本県は縄文遺跡の密集地帯であるが、なかんずく宇城地方 (宇土・上益城・下益城郡) は縄文遺跡の宝庫である。城南町の地勢を大まかに区分すると、 中央町・豊野村に源を発し、城南町を東西に貫流する浜戸川を中心として、北に舞ノ原台地、 南に塚原台地・東阿高の台地および雁回山にわけられる。それぞれの地区に縄文時代の遺跡が みられる。以下、各期ごとの概要を記す。

早期 この期は押型文土器と藤式土器の一部が代表する。押型文土器は、大字沈目出土のものが「沈目式」として著名である。文様は楕円・山形・格子をもち、厚手の作りで、文様も粗

大なものが多い。舞ノ原台地の辺縁部の沈目を中心として、塚原台地および東阿高台地 (御領 貝塚) から出土する。轟式土器は沈目および塚原で発見されている。

前期 この期は曽畑式土器、轟式土器、塞ノ神式土器などが代表する。城南町内には、ほとんど出土をみないが、わずかに塚原、沈目などで出土している。曽畑式土器は、阿高貝塚から発見されているのみである。

中期 この期の代表は阿高式土器である。この名称の標式となったのは城南町阿高貝塚で、 多くの調査が行われたが正式の報告は出ていない。太形凹文と呼ぶ、豪快な曲線文様をもち、 九州地方の中期の代表的形式である。

後・晩期 この期になると遺跡数の増加がみられる。

城南町に見られるのは、南福寺式・出水式・鐘ヶ崎式・御手洗式・西平式・御領式・黒川式などである。とくに、注目される遺跡としては近年発見された黒橋貝塚がある。この貝塚は昭和48年の浜戸川の洪水によって露出・発見されたもので、貝層の分布範囲は約6,000㎡に及ぶ大貝塚であった。出土の土器は、少量の阿高式土器の他に南福寺・出水式・北久根山式など、後期前半期のものを主体とし、瀬戸内地方の福田KI式など縄文時代の交流を示す遺物があった。また土器以外の遺物としては、従来後期後半に中九州に登場すると考えられていた、石錘・土器片錘など留意すべき遺物も少なくない。西日本の後期の代表形式とされている御領式の標式遺跡は、大字東阿高御領にある御領貝塚で、マシジミを主体とする淡水産の大貝塚である。御領式期になると、浜戸川下流の水田地帯を除いて、ほとんど全町域の台地部に遺跡が分布すると言っても過言ではない。

以上、各期の概要を述べたが、現在の城南町は有明海から約10kmはなれているが、縄文期には、阿高・宮地・吉野山麓などの台地裾部までは海が湾入していたことが、貝塚の分布で知れる。近接する阿高貝塚と御領貝塚でそれぞれ主体をなす貝が海水産・淡水産と違うのは、古くから指摘されているごとく、中期から後期にかけて、大規模な海退があった為であるが、一方この海退は、台地の前面に新たな低湿地を現出せしめ、次期の稲作を基礎とする弥生文化定着の一大条件になったことは想像にかたくない。

弥生時代

弥生時代前期に比定される遺跡の顕著な例は未だ発見されていないが、九州自動車道建設に伴う一連の発掘調査によって、二遺跡から弥生前期に比定しうる遺物を検出している。まず、緑川と支流御船川が合流するあたり御船町秋只久保遺跡があげられる。ここでは、帰帆山古墳(全壊、横穴式石室墳?)の盛土直下の包含層中に一群の凸帯文土器が出土した。これらの出土遺物については、熊本県文化財調査報告等18集に報告されているので詳細ははぶくが、弥生前期の所産であろうと思われる。出土地点が、帰帆山頂から北へのびる丘陵尾根部(海抜40米)に位置することなど、特異な出土例として注目される。次に城南町沈目遺跡出土例である。沈目遺跡は、舞ノ原台地の南辺、浜戸川の北岸に位置する縄文~歴史時代に至る重複遺跡である。昭和47年九州自動車道建設に伴う発掘調査の際同遺跡第4号溝より検出した数点が報告されて

いるが、遺構との関連は判明していない。以上のように、調査の対象となった土地そのものが、 台地や丘陵部に限られたために、一般的に、低湿地内の微高地に展開した初期弥生文化とは異 なった様相を示している。

更に周辺部に目をむけると、昭和49年の都市河川環境整備事業による江津湖苗代津遺跡の調査の成果は極めて重要である。この一帯は、江津塘すなわち江津川南岸の築堤による旧地形からの変容をみるが、遺跡周辺は標高 5 m以下の低湿湧水地帯であり、縄文晩期および弥生前期の遺構、遺物を発見している。ちなみに、周辺の弥生前期の遺物を出土した遺跡を挙げれば次のとうりである。

熊本市御幸部町八万塚

熊本市田迎町二石

熊本市画津町中ノ島

能本市健軍町広木

熊本市画津町上江津

上益城郡甲佐町麻生原

上益城郡甲佐町八ッ割

上益城郡御船町久保遺跡

下益城郡城南町沈目遺跡

これ等の遺跡の分布から知れることは、前期の分布の範囲が熊本平野周辺部に限られていること、立地状況が、台地上と湿地部に区別できることである。八万塚・二石・中ノ島等は、加勢川によって形成された、自然堤防上に立地する。麻生原、八ッ割、沈目、久保などは典型的な台地上の遺跡である。弥生文化の開始については、生活空間の変遷という視点より次の形が考えられる。①水田農耕の開始に伴う生活立地の冲積面への進出 ②縄文的立地の継続である。城南町周辺の先述した二つの立地も以上の類型にあてはまるものであり、後者の前期遺跡に古いものがみられる。このことは、中九州における弥生文化の受容が、縄文生活自体のなかで行なわれたことを示すものであろうか。

比較的、豊富な遺物が出土した、苗代津遺跡を例にとると、前期末の土器の様相を示す突帯 文土器と共に、輝石安山岩性の粗雑な打製石鍬を出土しており、前期末にもなおかつ縄文的色 彩の濃い、熊本地方の弥生前期の姿を反映している。

弥生中期以降になると、遺跡の数・遺物の量からも、前期と比較にならないほど豊富である。 弥生中期中葉に位置するいわゆる須玖式土器は、この地域を分布の南限として比較的多く見られ、城南町宮地一町畑遺跡・同祇園寺・七所宮周辺をあげることができる。特に一町畑・祇園 寺周辺には甕棺の破片等が多く散布しているので、かなり大きな墓域を形成していたことが知れる。これら弥生中期頃の遺跡は現在知りうる限り、舞ノ原台地西端の台地縁辺部にのみみられることから、この期における集落・墓域の立地の特色を見るのである。次に弥生中期後半の熊本市黒髪町出土土器を標準とする黒髪式土器は熊本平野を中心に北は筑後川流域、南では人吉盆地を経て一部は鹿児島県の大口盆地にまで達している。この黒髪式土器は、この地域でも、 かなり顕著にみられるものであり、城南町宮地山ノ上・同祇園寺周辺・同宮地山内遺跡などがあげられる。すなわち、須玖→黒髪期の遺跡は舞ノ原台地の西側に集中してみられる。宮地囲貝塚は、学術調査が実施された数少ない弥生期の遺跡の1つであり、黒髪式の系統をうけついだ時期のもので、この地方の弥生後期前半の良好な資料となっている。注目されるのは多種の石包丁の出土で、この種の石包丁は、舞ノ原台地から、甲佐麻生原にかけてみられ、稲作の定着を思わせる。さらに、この地の弥生後期の特徴として注目されるのは、免田式土器の出土である。免田式土器は、人吉盆地を中心としながら、上益城郡矢部町、阿蘇郡内など、山地部に比較的多く分布するが、平野部との接点にあたる、城南町には例外的に多く出土するようにみえる。宮地出土の草袋形脚付土器などの特異な形を生み出すにいたる。

古墳時代

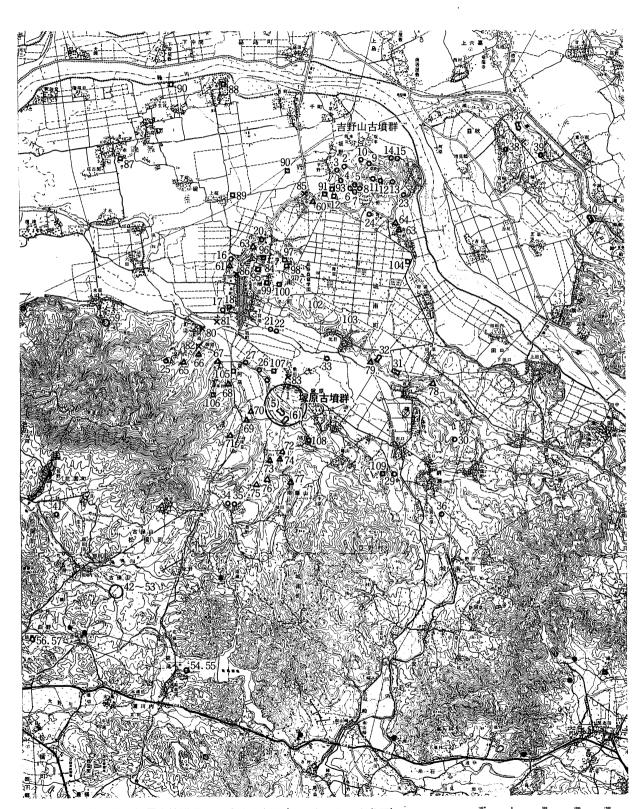
塚原古墳群をめぐる諸古墳については、調査が施された一部の例を除き、必ずしもその内容が判明したとはいいがたい。城南町を中心とする浜戸川流域の古墳は、概略7支群、50余基におよぶ古墳と12群、約390基の横穴群をあげることができる。とくに吉野山・舞ノ原台地および塚原台地周辺は、数・分布密度のうえからも、他を圧している。これらの古墳を、墳形別でみると、舞ノ原台地南東部と塚原台地のそれぞれ2基、計4基の前方後円墳をのぞき、他はすべて円墳である。ここでは、そのうちのいくつかについて紹介しょう。

吉野山(標高88.7m)周辺の古墳は、16基の円墳(現存6基)と墳形の明らかでないもの6基(現存1基)および4つの横穴群からなる。このうち特に注目されるのは、吉野山山頂出土の舟形石棺である。発見はかなり古く、天明4年(1784)肥後藩の国学者寺本直廉の著作になる『古今肥後見聞雑記』によっても、うかがい知ることができる。この舟形石棺は、梅原末治博士らがこの地域を調査した大正の頃までは、棺身を残していたらしいが、その後行方不明になってしまった。熊本県史蹟調査報告によると、棺材は阿蘇凝灰岩でつくられ、棺蓋の形態は不明であるが、棺身は長さ2.5m、巾は頭部で

る。両端に縄掛突起を有し(尾部を欠失)つくりつけの枕をもつ。舟形石棺の分布は、県北部でも特に菊地川流域が顕著で、20数基の古墳が知られている。中でも熊本県玉名郡岱明町院塚古墳は、全長78米の前方後円墳で、後円部中央に、4基の舟形石棺を配置し、このうち3号石棺には、画文帯神獣鏡1面、鉄剣・玉類等を伴出している。後円部墳丘裾部には底部を穿孔した土師器壺形土器が出土し、その成立年代は、5世紀前半と考えられる。吉野山山頂出土のこの石棺は、遺物が伴出していないために、その年代を明らかにしがたいが、院塚古墳など県内諸例からみて、5世紀前半と考えられる。以下この地区の古墳については、第1表にまとめたが、いずれも年代が降るものと思われる。

舞ノ原台地西部すなわち宮地・下宮地・限庄をふくむ一帯には、小規模な円墳が6基(現存2基)と3群20数基の横穴群を数えるのみであって、先述の吉野山、あるいは塚原台地の古墳群などに対して、独立の古墳群を形成するにはいたっていない。

舞ノ原台地南端の城南町沈目・陳内地区は、吉野山古墳群、さらには浜戸川をはさんだ対岸



第2図 塚原古墳群周辺の遺跡分布図(第4表~第 表参照)

第1表 塚原古墳群周辺の遺跡一覧表

遺跡番号	名 称	遺 跡 の 概 要	所 在 地	備 考
1	塚原古墳群	前方後円墳2、円墳53、方形	城南町塚原字丸山、丸尾、塚原、北原	第 表参照
2	東天神原1号墳(甲)	周海墓3 円墳・ 16~18m		現存
3	東天神原 2 号墳(乙)	円墳・径4m、箱	/ 坂野字天神原	現存
4	東天神原3号墳(丙)	不明、	· 坂野字天神原	現存
5	大塚山古墳	円墳・径20~40m、横穴式石室	· 坂野字天神原	消滅
6	大塚山西古墳	円墳、箱	が	消滅
7	大塚山南古墳	円墳	が	消滅
8	大塚山東古墳	円墳、径22m	が	現存
9	迫1号墳	不明 箱式石棺	が	現存
1 0	迫2号墳	不明 箱式石棺	/ 坂野字迫	現存
11	吉野山古墳	不明 舟形石棺	・	「能本原の機調を
1 2	山ノ寺古墳	不明 箱式石棺	・	消滅 報告 大正7年 熊本県教育会
1 3	山畑古墳	不明 箱式石棺	/	現存
1 4	坂本古墳	円墳 横穴式石室(装飾)		方式 「京都 考古学 消滅 研究報
15	収平口項 鎧塚古墳	円墳・役4m	/ 坂野子山畑 / 坂野字山畑	現存
16	西原古墳	不明	クロスタン ・	3C1T
17	四原百項 一ノ町古墳	円墳	〃 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
1 8	ーク町百項 下宮地古墳	门坝	〃 一	(月 <i>0</i> 枚
	ド呂地古頃 城ノ鼻古墳	 不明 箱式石棺	/ 西地子下西地	
1 9		「小明・相式句格 円墳・横穴式石室	· 克州宁京士	現存
2 0	熊寺古墳		タング 宮地字宮本 アマルニーア	· 現什
2 1	三ッ石1号墳(甲)	円墳・径12~9m 不明	ク 下宮地三ッ石	
2 2	三ッ石2号墳(乙)	円墳・径9~5m 不明	ア宮地三ッ石 第14中部は	
2 3	葉山古墳	円墳・径20~14m 不明	※地字葉山	
2 4	保生園内古墳	円墳 横穴式石室	/ 吉野字丸山	
2 5	影熊古墳	円墳不明	/ 阿高字影熊	
2 6	岸1号墳(甲)	円墳 箱式石棺	東阿高字岸 ボロスカル	
2 7	岸 2 号墳(乙)	円墳不明	東阿高字岸	
2 8	岸 3 号墳(丙)	円墳・径5~8m 不明	/ 東阿高字岸	
2 9	権現尾古墳	円墳・径20~14m	/ 鰐瀬字権現尾	
3 0	土鹿野古墳	円墳・径5m	/ 土鹿野字免ノ上	
3 1	狐塚古墳	前方後円墳・全長23m	/ 陳内字狐塚	
3 2	甚九郎山古墳	前方後円墳・全長36.9m	/ 沈目字奥野	
3 3	小木古墳	円墳・径7~10m 不明	塚原字下道	
3 4	六地蔵1号墳	円墳・径12.5~12m 不明	/ 尾窪字六地蔵	
3 5	六地蔵2号墳	円墳不明	/ 尾窪字六地蔵	
3 6	鏡ノ巣古墳	円墳・径14.5m	ク 鰐瀬字免の本	
3 7	長塚古墳		御船町豊秋字久保	
3 8	帰帆山古墳		. "	
3 9	小坂大塚古墳		/ 小坂字下原	
4 0	今城大塚古墳	古墳(前方後円墳)	ルルス・ボール 海川字大塚	
4 1	夫婦塚古墳	古墳(円墳)	松橋町古保山字夫婦塚	
4 2	古保山・池尾 1 号古墳	古墳(円墳)	が 古保山字夫婦塚	
4 3		古墳(円墳)	が 古保山字夫婦塚	
4 4	/ 畑中古墳		方保山字夫婦塚	
4 5	〃 中ノ原古墳	古墳(円墳)	水 古保山字夫婦塚	
4 6	• 真っ辻古墳	古墳(前方後円墳)	/ 古保山字夫婦塚	

遺跡番号	名 称	遺跡の概要	所 在 地	備考
4 7	〃 鳴滝古墳	古墳(円墳)	方保山字夫婦塚	
4 8	夕 三本木戸古墳	古墳(円墳)	ø 古保山字夫婦塚	
4 9	〃 大道夫婦塚男古墳	古墳(円墳)	ø 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力	
5 0	大道夫婦塚女古墳	古墳(円墳)	ø 力 方 な な 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	
5 1	〃 笹原夫婦塚男古墳	古墳(円墳)	ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø	
5 2	笹原夫婦塚女古墳	古墳(円墳)	ø 方保山字夫婦塚	
5 3	〃 中原古墳	古墳(円墳)	ø 力 方 な な 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	
5 4	山口1号古墳	古墳	ク 南萩尾	
5 5	山口2号古墳	古墳	〃 南萩尾	
5 6	ガローバル1号古墳	古墳	〃 曲野	
5 7	ガローバル2号古墳	古墳(円墳)	/ 曲野	
5 8	宇賀岳古墳	古墳	ø 宇賀岳	
5 9	木原古墳群	古墳群	富合町木原字西蔵	
6.0	今村横穴群	20基	城南町今吉野字東原	
6 1	城鼻横穴群	不明 箱式石棺	〃 隈庄字古城	
6 2	宮本横穴群	5 基	ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø ø	
6 3	出水居屋敷横穴群	2~3基	// 出水字居屋敷	
6 4	西窪横穴群	10基	/ 出水字西窪	
6.5	阿弥陀尾横穴群	155基	ヶ 阿高字影熊・東阿高字山口	
6 6	御領横穴群	10基	東阿高字八尾	
6 7	アンドン坂横穴群	5基	東阿高字千々室	
68	飛ノ尾横穴群	69基	東阿高字南飛尾	
6 9	ウシクビ横穴群	6基		
7 0	一位田横穴群	16基	東阿高字一位田	
7 1	一尾横穴群	12基	〃 東阿高字一尾	
7 2	ハツゴダン横穴群	22基	《 尾窪字古川	
7 3	ウルノ横穴群	15基	〃 長窪字櫨野	
7 4	ツル横穴群	20基	〃 尾窪字鶴	
7 5	尾窪横穴群			
7 6	メリ穴横穴群	6 基	《 尾窪字南櫨野	
77	長原横穴群	5 基	ø 南藤山字長原	
7 8	天ノ平横穴群	63基	〃 陳内字錦川	
7 9	沈目横穴群	6 基	〃 沈目字奥野	
8.0	阿高貝塚	貝塚	ø 豊田字阿高	
8 1	黒橋貝塚	貝塚	〃 下宮地字萱木	
8 2	御領貝塚	貝塚	〃 東阿高字御領	
8 3	敷田貝塚	貝塚	城南町 塚原字敷田	
8 4	ソビエ石貝塚	貝塚	富合町平原字ソビエ石	
8 5	今村貝塚	貝塚	ø 宮地字今村	
8 6	囲 貝塚	貝塚	〃 塚原字囲	
8 7	赤見遺跡	散布地	〃 杉上字赤見	
8.8	永 遺跡	散布地	〃 杉上字永	
8 9	碇 遺跡	散布地	〃 杉上字碇	
9 0	丹生宮河底遺跡	散布地	〃 杉上字丹生宮	
9 1	西天神原遺跡 A	散布地		
9 2	西天神原遺跡 B	散布地		
9 3	東天神原遺跡	散布地	〃 坂野字東天神原	
9 4	杉上メド町遺跡	散布地	, 杉上	

遺跡番号	名 称	遺跡の概要	所	f 在 地	備考
9 5	祇園地遺跡	散布地・墓地(弥生)	"	宮地字祇園地	
9 6	一丁畑遺跡	散布地	"	宮地字一丁畑	
9 7	新御堂遺跡 A	散布地	"	宮地字新御堂	
9 8	新御堂遺跡 B	散布地	"	宮地字新御堂	
9 9	構口遺跡	散布地・墓地(弥生)	"	宮地字構口	
100	安幕遺跡	散布地・墓地(弥生)	"	隈庄字安幕	
101	向権現遺跡	散布地	"	下宮地字向権現	
102	迎原遺跡	散布地	"	沈目字迎原	
103	沈目遺跡	散布地	"	沈目字池頭・塚本	
104	山ノ神遺跡	散布地	"	出水字山の上	
105	竹部遺跡	散布地	"	塚原字竹部	
106	黒木塚遺跡	散布地・墓地(弥生)	"	塚原字尾窪	
107	松ノ手遺跡	散布地	"	塚原字松手	
108	黒木塚遺跡	散布地・墓地(弥生)	"	塚原字黒木塚	
109	山ノ神遺跡	古墳	"	鰐瀬字山の神	
110	道上遺跡	散布地	"	陳内字道上	
111	近道遺跡(近道原)	散布地	"	陳内字近道原	
112	舞原遺跡	散布地	"	陳内字舞原	
113	狐塚遺跡	散布地	"	陳内字狐塚	
114	三石野遺跡	散布地	"	尾窪字三石野・的場	
115	星野屋敷遺跡	散布地	"	藤山字上柿田	,
116	志道寺遺跡	散布地	"	鰐瀬字志道寺	
117	宮ノ前遺跡	散布地	"	鰐瀬字宮ノ前	
118	土鹿野遺跡	散布地	"	鰐瀬字土鹿野	
119	南原遺跡	散布地	"	鰐瀬字南原	
120	野田窯跡	窯跡	"	鰐瀬字野田	
121	東亀島瓦窯跡	窯跡	"	鰐瀬字東亀島	

,

.

の塚原古墳群とならぶ主要な古墳群で、前方後円墳2基、円墳4基、2群70数基の横穴群からなっている。

同町沈目字奥野所在の甚九郎山古墳は、全長36.9米、後円部径21米、前方部径15米、後円部高さ4.5米、前方部高さ4米の前方後円墳である。昭和33年、同町陳内字狐塚所在の狐塚古墳、(前方後円墳)とともに、熊本日日新聞社主催による発掘調査が行なわれている。この古墳には、葺石・周構等は認められなかったが、墳丘は盛り土によって築造されていた。主体部は、後円部の中ほどに位置していたが、旧陸軍の監視所を築いた際、ことごとく破壊され、遺物もほとんど伴出しなかった。しかしわずかに残された凝灰岩の石材から、巨石を用いた横穴式石室であろうと推定された。この玄室側壁部と考えられた石材には、線刻と赤・白・青色による彩色による装飾文様がみられる。装飾手法の類似する宇土郡松橋町宇賀嶽古墳との対比から、本古墳の年代が、6世紀後半頃に降るものであることを物語っている。ちなみに本古墳は、標高30mの地点に位置し、主軸方位は前方部を浜戸川の水田地帯にむけたほぼ南北を指し、後円部の主体部長軸は東西である。

他の一基の前方後円墳である狐塚古墳は、甚九郎山古墳の東南部約240mの地点、同じく浜戸川の水田地帯をみおろす舞ノ原台地上に位置する。墳丘は、永い間の耕作によって周囲からけずりとられて旧状を察し得ない。現存部で全長約23m、高さ約4mを測る。後円部の中心部には粘土や凝灰岩の礫を敷きつめた、楕円形の土壙墓6基が発見された。主体部は旧状をよく保っていたにもかかわらず、このうち4基(1・3・4・5号)の土壙墓に極めて乏しい副葬品が検出されただけであった。調査者によると、「個々の屍床におさめられた副葬品は、前方後円墳の主にふさわしからぬ、馬具の残欠や、最初から折れていたとしか思えない鉄鏃、そのほか片耳分の金環などを、まるで投げこんだようにおさめていたのである」と記されているほどである。こうしたありかたは、いわゆる前方後円墳にみられる一般的な現象からはほど遠いものがある。このことは、この地域の古墳文化を考える場合、一面的には単に地域的な在り方を示すものであったが、他面的には同一文化圏の中に、いわば持てる者と持たざる者との政治的に相対する首長者層を想定しうるものではなかろうか。

以上、2基の前方後円墳の位置する舞ノ原台地から浜戸川をはさんだ対岸の台地を通称塚原台地と呼ぶ。総面積約30ヘクタールのいわば独立状の平坦な台地である。北西部より入り組む谷によって台地は南北に二分され、南側の台地は触手のように細長くのびていて、その先端部は著名な阿高の御領貝塚と相対する。

先述の『古今肥後見聞記』や『肥後国誌』の記述にもあるように、かなりの数の古墳が散在していたことが知られる。しかし、大正末から昭和にかけての耕地整理等の開発に伴ない多くの古墳が台地上から消え去った。昭和47年春、調査の為に古墳群を訪れた際、現存する古墳は、前方後円墳2基を含む11基のみであった。わずか数年の間にさらに2基の古墳が失われていた。以下、これらのうち主要な古墳を紹介しょう。

まず前方後円墳は、従来、現存する琵琶塚・花見塚古墳と土取塚古墳のあわせて3基とされている。しかし、今回の調査では土取塚古墳の推定地がすっぽり調査予定地内に含まれていた

ので、この古墳の確認に全力を傾けたけれども、所在を明らかにすることが出来なかった。その詳細については、後述するので、ここでは現存2基の前方後円墳を中心にして略述したい。琵琶塚古墳は、いわゆる柄鏡式の前方後円墳と考えられているが、現在は周囲から削られて著しく変容している。しかし、今回の調査で、後円部の東側部分を検出したことによって、全長70mを越すことは確実であり、調査後の今も本古墳群の主墳であることには変りはない。築造年代は主体部未調査のために明らかではないが、周溝内遺物や採取された円筒埴輪などから、5世紀後半頃に成立したものと考えられる。

花見塚古墳は、現在全長33m、後円部12.5m、高さ3mの前方後円墳であり琵琶塚古墳北西部 mの地点に位置する。墳丘は周囲から著しく削りとられているものの、復原すると全長40数mに及ぶものと思われる。主体部は、大正初期に盗掘破壊され、このとき種々の遺物が出土したといわれるが、散逸して不明である。

円墳のうち特に重要な古墳は、将軍塚古墳と石之室古墳である。将軍塚古墳は、すでに無く、原位置の発見につとめたが、確認出来なかった。この調査を行った故小林久雄氏の記録によると、主体部は割石小口積の横穴式石室であり、ほぼ 1.5mの方形の玄室に短かい羨道を有するものと考えられる。この際出土した副葬品は、変形獣首鏡1面、鉄鍬4個、鉄矛4本、横矧板式の短甲、直刀、鉄鏃、刀子、玉類などが出土したといわれるが、そのうちのかなりのものが散逸している。豊富な副葬品からみて、本古墳群の中で年代をおさえうる数少ない古墳であっただけに、その損失は残念である。

石之室古墳は、琵琶塚古墳の西約50mの地点、台地の南端部に位置する。この古墳の主体部である横口式家形石棺は、玉名郡菊水町江田の舟山古墳のものとともに著名である。奥壁と両側石の上縁部には斜行交叉の、その下には横位の二条の平行沈線文を施している。塚原台地唯一の装飾古墳である。

塚原台地の西側を流れる浜戸川の小支流である滑川両岸の阿高・尾窪の谷部崖面には、13群 350基以上の横穴群があるが、未調査のため詳細は不明である。

浜戸川をさらに上った鰐瀬地区にも円墳数基が点在する。また木原山北麓にも、円墳・石棺等が点在し、一群を形成している。 (野 田)

第2節 調査の経過

1 分布調査以後 北九州を起点として福岡・熊本を経て鹿児島・宮崎にいたる九州縦貫自動車道の建設事業が始まったのは、昭和43年のことであった。昭和45

本道路公団から九州縦貫自動車道建設に伴う託麻~松橋間23.3kmに

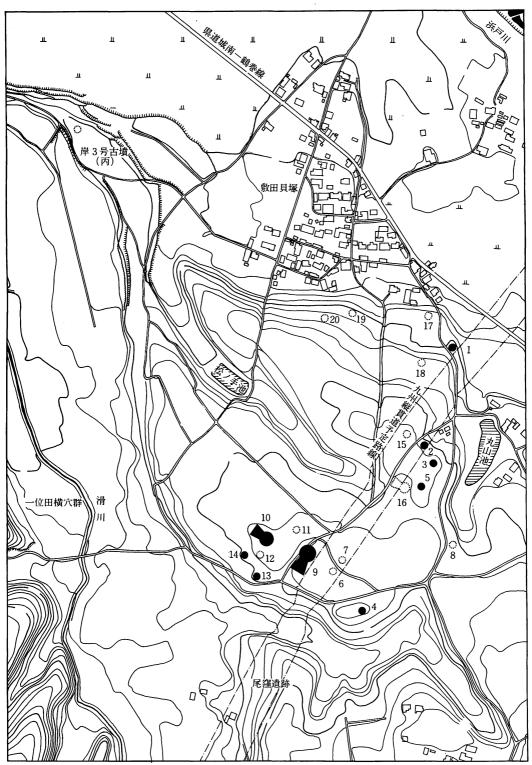
査の依頼を受けた。この調査には、松本雅明熊本大学教授を中心とする県内の研究者と当時の 社会教育課があたることになった。この調査結果は、同年、分布調査報告書としてまとめられ (註1)

この調査報告書の冒頭には「一今回の縦貫道では、塚原古墳群・松橋の夫婦塚などの主要な高塚古墳は破壊を免れ、ただ一つ塚原のリュウガン塚のみがかかる予定である。一城南町塚原には地下に埋蔵する可能性があるものが多く、発掘には細心の注意を要する。」とある。調査は、飽託郡託麻村(現熊本市)、上益城郡益城町・御船町、上益城郡甲佐町・下益城郡城南町、下益城郡松橋町の4つの区間にわけて実施された。とくに城南町の塚原古墳群の調査表を見ると「一塚原古墳群は『古今肥後見聞記』『肥後国誌』等の古くからの文献に記載され、県内でも最も著名な古墳群の一つで、おそらく益城国造肥君の墳墓群であろうか。以前にはかなりの数の古墳が存在したと伝えられるが、現存するものは13基だけである。古くからの耕作等で墳丘等が失われているため、当初の古墳配置は明らかではないが、地下に石棺等の遺構の遺存が考えられる」とあって、再三にわたって本古墳群の重要性が強調されている。

分布調査の結果に基づき、熊本県教育委員会は、日本道路公団との間に熊本〜松橋間の埋蔵 文化財について、『発掘調査委託契約書』をとりかわした。翌々年の昭和47年の春、熊本県教 育委員会に文化課が新設されるのと軌を一にして、本調査を開始することになったのである。

2 調査直前の塚原台地 昭和47年4月、発掘調査を前に文化課係員による現地調査が実施された。この時、分布調査が実施されてから約2年の歳月が流れていた。破壊のスピードは予想以上に早く、分布調査報告 現存13基とあった古墳群はそのうちの数基を失なうというありさまで、唯一自動車道用地内に一部分が入るくぬぎ塚古墳の場合も、墳丘は周囲から著しく切り取られ、今まさに消滅寸前といった状態にあった。城南町史の編纂事業のために総点検された昭和30年頃の塚原台地には、消滅したもので所在地点が明らかな古墳をも加えると20数基が確認されている。さらに現地での聞き込み調査で、新たに確認しえたものをも含めると30基前後の古墳を数えることができた。また用地内を中心として、台地一帯に土師器、須恵器、弥生式土器、縄文式土器等が極めて密に散布することなどから、発掘調査の範囲は用地内ほぼ全域におよぶであろうことは容易に予測できた。

特に北側台地くぬぎ塚古墳および三段塚古墳(現存・用地外)の西側にほぼ隣接して丸山6号墳が、さらに南の凹地に土取塚古墳(消滅)、くぬぎ塚の北側傾斜面の将軍塚古墳(消滅)は、机上操作でも確実に用地内に存在したことが明確であった。また南側台地では、用地外で



第3図 調査前の塚原台地古墳分布図

R例 1. りゅうがん塚古墳 5. 丸山 2 号古墳 9. 琵琶塚古墳 13. 石之室古墳 17. 丸尾 1 号古墳 2. くぬぎ塚古墳 6. 丸山 3 号古墳 10. 花見塚古墳 14. 日焼塚古墳 18. 丸尾 2 号古墳 3. 三段塚古墳 7. 丸山 4 号古墳 11. 北原 1 号古墳(甲) 15. 将軍塚古墳? 19. 丸尾 3 号古墳4. 丸山 1 号墳? 8. 丸山 5 号古墳? 12. 北原 2 号古墳(乙) 16. 土取塚古墳? 20. 丸尾 4 号古墳

はあるが、琵琶塚古墳・花見塚古墳(いずれも前方後円墳)・石ノ室古墳(円墳)等を中心とする一帯は台地上で最大の古墳密集地である。琵琶塚古墳の東側には、丸山3・4号の2基の円墳が存在したとの記録が残っている。

3 調査組織 前述のごとく、熊本県教育委員会は九州縦貫自動車道建設用地内の発掘調査につき日本道路公団と協議した結果、発掘調査事業は県教育委員会が主体となって行なうこととし、ただちに塚原古墳群の調査班が組織された。調査は昭和47年から2カ年にわたり継続して実施され、昭和47年度に第1次調査、同48年

として出土遺物の整理および報告書の作製を行なった。

なお発掘調査組織は以下のとうりである。

調査総括	田	辺	哲	夫	熊本県教育庁文化課・課長
	浜	田		勝	同・課長補佐
	前	田	利	郎	同・課長補佐
調査責任者	隈		昭	志	同・文化財調査係長
調査事務担当者	栗	崎	辰	之	同・主幹
	松	本		巽	同・庶務担当参事
	西	野	英	俊	(前庶務担当主事)
	村	田	_	美	(前文化財係長)
	松	田	安	雄	(前文化財係長)
	上	野	辰	男	・ 等 正 勝 ・ 東 光 昭
調査指導助言者	坂	本	経	堯	(肥後考古学会長)
	松	本	雅	明	(熊本大学法文学部教授・東洋史)
	井	上	辰	雄	(熊本大学法文学部教授・日本史)
	玉	分	直		(熊本大学法文学部教授・考古学)
	吉	倉		真	(熊本大学理学部教授・動物学) 執筆者
	内	藤	芳	篤	(長崎大学医学部教授・人類学) 執筆者
	坂	田	邦	洋	(長崎大学医学部助手・人類学) 執筆者
	大	迫	靖	雄	(熊本大学教育学部助教授・農学) 執筆者
	籾	倉	克	幹	(九州農政局主任地質官・地質学) 執筆者
	原	П	長	之	(熊本県文化財専門委員・考古学)
	鏡	山		猛	(九州歴史資料館長・考古学)
	圌	崎		敬	(九州大学文学部教授・考古学)
	森		貞〉	欠郎	(九州産業大学教授・考古学)
	Ξ	島		格	(福岡市立歴史資料館長・考古学)
	西	谷		正	(九州大学文学部助教授・考古学)

大 場 磐 雄 (国学院大学客員教授・考古学)
乙 益 重 隆 (国学院大学文学部教授・考古学)
杉 原 荘 介 (明治大学文学部教授・考古学)
大 塚 初 重 (明治大学文学部教授・考古学)
小 田 富士雄 (別府大学文学部教授・考古学)
森 浩 一 (同志社大学文学部教授・考古学)
近 藤 義 郎 (岡山大学文学部教授・考古学)

この他、富田紘一(熊本市立博物館)、西健一郎(肥後考古学会員)、高橋一夫(埼玉県立博物館)、管谷宣則(天理参考館学芸員)、下條信行(福岡市立歴史資料館)、置田雅昭 (天理参考館)、北野耕平(古代学研究会)の諸氏に指導助言をいただいた。

(八生多号码)、103	-1 441	1 ()	J1 (-	P 101 71	は、 が明氏に旧等の音で いただいた。
調査主任	野	田	拓	治	熊本県教育庁文化課学芸員
調査員	江	本		直	同 学芸員
	緒	方		勉	(同参事) 高 木 正 文 (同学芸員)
	松	本	健	郎	(同技師) 島津 義昭 (同学芸員)
	丸	山	武	水	(同調査員)安達武敏 (同調査員)
	松	村	道	博	(同調査員) 牧 野 吉 秀 (現玉名市職員)
	野	田	民	子	(同調査員)
人骨調査関係	内	藤	芳	篤	(長崎大学医学部教授)
	稚	吉	敏	男	(長崎大学医学部助教授)
	坂	田	邦	洋	(長崎大学医学部助手)
	長	崎		洋	(長崎大学医学部助手)
	本	田	圭	吾	(長崎大学医学部文部技官)
	吉	村		淳	(長崎大学医学部文部技官)
	池	田	治	子	(長崎大学医学部学生)
	岡	本	純	英	(長崎大学医学部学生)
	草	野	祐	幸	(長崎大学医学部学生)
	永	武		毅	(長崎大学医学部学生)
整理員	山	城	仁	恵	大畑 美鶴 照屋 富枝
	石	橋	律	子	本 郷 二三子 上 村 喜美子
	野	田	民	子	早 野 弘 子 徳 永 雅 子
	岡	田	秀	生	永 田 千代子 寺 田 京 子
地元作業員	高	崎	峰	子	田畑 美佐子宮本正成
	宮	本	۶ ح	〈子	助 崎 ゆきえ 杉 本 美恵子
	清	田	悦	子	田 中 あき子 大 川 悦 子
	大	Щ	久	江	西国満子 西国ふじえ
	堀	Ш	初	枝	原 二枝 米村トメ

原口マサエ 石田聖子 坂口夏枝 谷 川 ちどり 梅 田 さつみ 福 丸 あや子 村 中 初 子 米 村 正 子 米 原 房 江 清田純一 高崎洋一 堀 田 幸 博 須佐美 薫 西国誠司 西国繁生 森田真也 塚 本 誠 雄 田畑正史 田畑淳二 芦田 徹 村 橋 国 雄 崎 雄 二 豊 崎 晃 一 高 大 森 動 豆 塚 仁 手 島 睦 夫 甲斐英子 秋 芳 光 海 秋 芳 あや子 伊藤静江 伊藤玉子 田畑明美

協力団体・個人

宇土高校社会科クラブ(卯野木盈二教諭) 鹿本高校考古学部(上妻信寛教諭) 鹿本商工高校考古学部(杉本武彦教諭) 玉名高校考古学部(鶴上寛治教諭) 熊本第二高校考古学部(高野啓一教諭) 玉名女子高校考古学部(平島清春教諭) 佐藤伸二(熊本大学) 池田栄史(国学院大学学生) 中村幸史郎(山鹿市教育委員会) 下村悟史(別府大学学生) 赤瀬恵(球磨農業高校教諭) 佐田茂(九州大学文学部助手) 高倉洋彰 沢皇臣 後藤直 山崎純男 柳田康雄宮小路賀宏

4 発掘調査の経過

発掘調査は、2年間の長期にわたる為、調査の経過について細部にわたって記述することは困難である。したがって本節では、第2~6表の『発掘調査行程表』に経過をまとめ、主な事柄について補足記述するに留めたい。

調査は、昭和47年4月から昭和48年3月末日までを昭和47年度事業として第1次調査を、引き続き昭和49年3月末日までを昭和48年度事業として第2次調査を実施した。また、出土遺物の整理及び、報告書作製は、昭和49年度事業として実施したものである。尚、現地における発掘調査は、昭和47年4月から昭和49年3月まで、23ヶ月余りを費やした。

昭和47年度の調査

現地における調査は、昭和47年4月26日に開始し、まず、調査地区を中心とした地形測量を実施した。また、これと並行して調査区内で唯一墳丘を残していたくぬぎ塚古墳の地形測量を行った。こうして実際の発掘に着手したのは、5月27日のことである。以後、昭和48年3月まで、台地の北側頂部(I区)の完掘を目標に調査を経続した。

くぬぎ塚古墳の調査が終結真近の8月10日に、くぬぎ塚西側にトレンチを設定して遺構確認の為の調査を始めた。そして、8月28日には、1・2・3号の3基の方形周溝墓を同時に検出した。実に、最初の方形周溝墓の発見である。又、9月5日に4号、9月末より10月始めにかけて、5・6・7号方形周溝墓を相次いで検出した。これら各方形周溝墓の発見から調査終了までに費した日数は、第2~6表に示したとおりである。

又、48年3月までは、8~15号までの8基の方形周溝墓と32号方形周溝墓と丸山6・7・ 8号古墳、丸尾5号墳主体部及び、墓道の一部を検出し、調査を実施した。

一方、昭和47年11月頃から翌年2月までの間、方形周溝墓発見のニュースは、全国的に広まり、一部研究者の間で遺跡の保存を要望する声も起り始める。3月18日には、肥後考古学会主催による遺跡見学会が実施され、県内外あわせて数千人の見学者が現地を訪れた。続いて、3月20日には、肥後考古学会(坂本経堯会長)・熊本史学会(松本雅明会長)より、国・県・日本道路公団に対して、『塚原古墳群保存に対する陳情書』が提出された。又、22日には、城南町教育長及び、城南町文化財専門委員会から、当局に対して『城南町塚原古墳群保存についての陳情書』が提出された。

昭和48年度調査

昭和48年度の調査は4月10日より開始し、調査区はI区からI区に移り、表土を取り除く作業を開始した。以後8月末頃までには、I区のほど全面の表土を取り除き、古墳・石棺等の配置状況が明らかになった。

8月末より9月末までは、Ⅲ区の表土除去作業を行い、配置状況が明らかになった。各古墳・石棺について調査を費した日数は、第2~6表に示した通りである。昭和49年3月には、

	期日			昭	和	47	年									昭和	1 4	8年					昭	和4	9年	備	考
墳墓往	名称	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	1/用	5
< A	ぬぎ塚古墳					_	•																			地形測量	も含む
	ままま おおまま ままま おおまま かんしょう かんしょう おおま おおま おおま おおま かんしょう しゅうしゅう しゅう					\perp	_																			1~4号	
2	/ /					\perp	_		Ì																	調査	
																							ł				
3	"					٦	_																				
4	"					ľ	_																	1			
5	"				ĺ		-	1																			
6	"								'																	6~7号 調査	は
7	"							\vdash	-													ļ					
8	"								-	_	_	}					ĺ										
9	"					-				_	-													l			
10	,										-	_							l				l	l			
11	"								- 1		L										1					11~14号 調査	けは
12	,,										_																
13	,,										_																
14	,										_																
15																											
	"						•	$\lceil \rceil$																			
16	"																				-			•	1	16~19月 調査	きは
17	"								İ										ĺ		 			-	1		
18	"																				-			•	1		
19	"																				—	j			-	}	

第2表 発掘調査行程表(1)

	期日				昭	和	47 £	Ę.			昭 和 48 年												和49)年	/#:	-tv.
墳墓名科	F 7.77	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月 12月	1月	2月	3月	備	考
20号方	形周溝墓																				+					
21	"																				-					
22	"																				-					
23	,																				-					
24	"																								丸 .	
25	"																				-	1			丸調丸尾	
26	"		ĺ	ĺ		ĺ						ĺ	ĺ					ĺ			-	1			調	
27	"				1												-								27 調査	
28	"	1				1						1					-									
29	"																					-				
30	"							ļ				١,							-				-	ł		
31	"																		-				-	+		
32	"									•	-															
33	"																								}	
34	"																									
35	"																	-	-					-	35~36 ⁵ 調査	号は並行
36	"																	-	-							
37	"																			-						
38	"																			ł						
39	"																							-		

第3表 発掘調査行程表(2)

		_	期·日				昭	和 4	17年	:			Γ				В	召禾	1 48	年					昭	和49	年	/#	±z.
Ŀ	貴墓名	3称	× 1	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備	考
	丸山	13 -	号古墳																	-									
	"	4	"																	-	-							丸山 行調査	
	"	6	"								-	•	-																
	"	7	"								-	-																	
	"	8	"									_	ĺ																
	"	9	"																-							_		前期はフ 出、後期 掘り上げ 作業を示	[°] ラン は周
	"	10	"																-									掘り上げ 作業を示	大実測
	"	11	"	ı																\vdash						=			
	"	12	"														İ		-	_						-			
	"	13	"																١.	-						-	-		
	"	14	"																	-						-	-		
	"	15	"																	-	1					-	-		
	"	16	"																	-	t					-	-		
	"	17	"																	_	1					-	-		
	"	18	"																	-	1					•	-		
	"	19	"																	-	†					-	-		
	"	20	"								-																		
1	"	21	"																		_						-		
	"	22	"																							-			
	"	23	"				L																			_	_		

第4表 発掘調査行程表(3)

	期日	Т			昭	和	47	年					_			昭	和 4	8 年				一昭	和4	9年	(#	考
墳墓名称	×11	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月 12	月 1月	2月	3月	備	
丸山24号																							•	+		
	"																							L		
v 26																										
<i>"</i> 27	"																							-		
1 28	"																			_				-		
# 29	"																			-				-		
% 30	"																			-						
% 31	"	ļ																		_						
% 32	"																									
% 33																				_						
% 34	"																		L				\perp			
% 35	"																		_	ł		-				
% 36	"								l		ĺ								-	1		-				
琵琶塚	话 墳						_													_	-			-		
丸尾 5	号古墳					-	1														-	2		ĺ	丸尾 5 元 主体部構	号、①は 食出と人
% 6	"																				l 	-			丸尾 5 元 主件調査 清調査	②は周 · 実測
<i>"</i> 7	"																				-	-				
% 8	"																				-	+				
" 9	"																					-				
塚原1	号石 棺																			_						

第5表 発掘調査行程表(4)

		期	日		昭和47年 昭和48年 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月														昭	和49	9年	/## =#z						
墳墓名	称	#		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
塚原		ラ石 を	棺																		1 1 1							2・3・4号 周溝 査
"	4 5 6	"																		-								5・6号は丸山 17・19号と並行 調査
"	7 8 9	4	,																								_	
" "	10 11 12		, , ,															-										11〜14号 と並行調
,	13 14 15 16		, , ,														_							-				号
*	17 18		,																				- -				-	18号は位置確認 のみ
竪墓	穴		学構 道						_			_					_		<u> </u>			_	_					

第6表 発掘調査行程表(5)

文化課学芸員、技師の応援を受けて、調査は全て終了した。

一方、遺跡の保存への動きは、4月15日に肥後考古学会他、県内研究団体による第2回遺跡見学会が行われた。昭和48年5月15日に、城南町長・城南町議会議長・城南町教育長・城南町文化財専門委員会代表から日本道路公団に対して、『城南町塚原古墳群保存についての陳情書』が提出された。こうした動きを経て、昭和49年12月には、文化庁次長・日本道路公団副総裁・熊本県知事・熊本県城南町長の四者間で、『塚原台地の工事方法の変更等について』の協定がとりかわされ、遺跡保存の基本方針が方向づけられたのである。

資料 発掘調査委託契約書

- 1 委託名 九州自動車道(熊本~松橋間) 埋蔵文化財発掘調査
- 委託期間 昭和 年 月 日から 昭和 年 月 日まで
- 3 委託金額 金 円

日本道路公団福岡支社、支社長吉田喜市(以下「甲」という。)は、熊本県知事沢田一精 (以下「乙」という。)に頭書の発掘調査の実施を次の条項により委託する。

- 第1条 甲は、別紙発掘調査計画書に基づき頭書の委託金額の範囲内で頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。
- 第2条 甲又は乙の都合により、委託期間を延長し、若しくは発掘調査計画を変更し、又は 発掘調査を中止するときは、事前に協議して書面により定めるものとする。
- 第3条 乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し、甲に提出しなければならない。
- 第4条 乙は、第3条の資金計画書に基づき、頭書の発掘調査を実施するために必要な経費 の概算払いを甲に請求することができる。
- 2 甲は、前項の請求があったときは頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して、請求書を受理 した日から15日以内に乙に所要の額を支払うものとする。
- 第5条 甲は、必要と認めるときは、頭書の発掘調査の処理状況について調査し、又は報告 書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。
- 2 乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。
- 3 乙は、発掘調査の実施にあたり、作業箇所に作業表示旗をかかげ、発掘調査関係者には 腕章等を着用させなければならない。
- 4 乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく完了書を作製し、委託期間内に甲に提出しなければならない。
- 5 乙は、費用精算調書を作製し、委託期間内に甲に提出しなければならない。
- 第6条 この契約に基づく費用精算調書その他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指 定しない限り、乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条 乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等はすべて甲に帰属するものとする。

ただし、甲は発掘され又は発見された埋蔵文化財に関する甲の権利を放棄するもの、 とする。

- 第8条 発掘調査に関する文化財保護法等に関する諸手続については、乙が代行するものと する。
- 第9条 乙の責に帰する事由により頭書の期限内に第5条第4項に規定する完了書を提出しないときは、甲は遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算して提出当日までの遅滞日数につき頭書の委託金額に対して、日歩2銭7厘の割合で計算した金額を徴収することができる。
- 2 甲の責に帰する事由により第4条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は 甲に対して日歩2銭7厘の割合で遅延利息の支払いを請求することができる。
- 第10条 乙の責に帰すべき事由により、甲が契約を解除したときは、乙は、頭書の委託金額 の10分の1を違約金として、甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。
- 第11条 この契約を変更する必要が生じたときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書2通を作成し、当事者記名押印のうえ各自1通を保有する。

昭和 年 月 日

甲 福岡市中央区天神2丁目13番7号 日本道路公団福岡支社

支社長 吉田喜市

乙 熊本市水前寺6 丁目18番1号

熊本県 知事 沢田一精

第一章 調 査

第1節

1 調査の概要

発掘調査予定地は、塚原台地の基部をほぼ北から南方向へゆるやかな曲線を描いて貫ぬく九州自動車道の路線内を対象とした。路線幅は地形の変化によって一定しないが、おおむね40~65mである。調査地区は、北側で浜戸川の旧河道水田面に接し、南側は台地南端までの全長550m、総面積約3万平方メートルに達した。尚、日本道路公団表示によれば、STA 176~STA 181までの範囲である。

調査区域のほとんどは台地部であるが、台地は北西側より入り込む谷(松の手谷)によって南北にほぼ2等分できる。従って各地区の名称は、地形の変化や調査の進行状況等にあわせて北側台地南半の頂部をⅠ区とし、南側台地全域をⅡ区とし、北側台地北半の傾斜面をⅢ区とした。尚、各区についてはあえて細区分をしなかった。

初期の調査では、遺構の確認のために、トレンチ、グリットを併用して調査を進めたが、

(1) Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区とも、すべて平担な畑地で、耕作による上部からの削平が著しいこと。(2)また、地形等を考慮して調査区全域に設定したトレンチ及びグリットでは遺構の確認に困難を極めたこと。(3)特に1~4号方形周溝墓を検出したⅠ区北側の場合には遺構が近接し、上部からの削平が著しいこと。この為グリットによる調査では、ややもすると遺構の全体的な形状を見失う恐れのあること。などの点から、20m四方前後の広いグリットを設定し調査を進め、最終的には耕作土をすべて取り除くという方法をとり、又、ぼう大な量にのぼる排上の運搬処理のために機械力を駆使した。

Ⅱ区及びⅢ区の一部は、トレンチを設定して調査を進めたものの、遺構の検出には困難を極めた。又、時間的な制約もあり、機械力(バックフォー)による表土除去作業を行い遺構の検出を行った。種々の条件から機械力を動員する方法を取らざるを得ず、細部における見落しや部分破壊等があったことはどうしても否定できない。しかし一方では、利点として各遺構の全体的な状況が把握でき、広範囲の遺構の配置状態が短期間に集約できたことがあげられる。

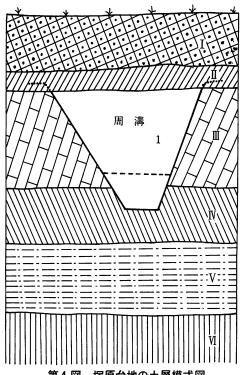
2 遺跡の層位及び層序 (第4図)

塚原台地における土層推積状況と遺構の関連については、最も保存状態のよかったくぬぎ塚 古墳墳丘下における層序を基準として、Ⅰ、Ⅱ・Ⅲ区にそれぞれ設定した土層観察のグリット における所見を総合すると第4図のようになる。

I 層は表土層(耕作土)で厚さは地点によって異なる。

Ⅱ 層黒色土層はくぬぎ塚古墳の調査結果(第2章第3節くぬぎ塚古墳を参照)でも明らかなとおり、古墳築造期における文化層であり、Ⅱ 層下部及びⅢ 層黄褐色、 Ⅰ 層(沖積火山灰土)の

上面にかけて縄文文化後・晩期に比定できる土器が出土する。尚、Ⅱ 層黒色土層の厚さは、地 形の凹凸等の条件により大きく異っている。



第4図 塚原台地の土層模式図

Ⅲ層は、平均50cmの厚さで堆積し、上面では先に述べたとり縄文晩期の土器が出土するが、 以下では硬質砂岩を主とする集石、及び押型文土器が出土する。集石と押型文土器との関連に ついては末調査である為明らかにできなかった。

IV層は、軽石等を含む黒褐色土層で、遺物等は全く含まない。又、地点によって厚さが異なり皆無の地域も見られ、不安定な層と見ることができる。

V層は、赤褐色ないし黄褐色土層(阿蘇新期ローム)である。

以上のように、I~V層は塚原台地の標準的な層序である。しかし地点によってはⅡ層が欠失してⅠ・Ⅲ・Ⅳ・V層の順で堆積する場合と、Ⅳ層が皆無でⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴの順で堆積する場合がある。又、Ⅱ・Ⅳ層が無く、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ層の地点も見られる。

遺構特に方形周溝墓・古墳の周溝では、Ⅱ層中より切り込まれている。くぬぎ塚古墳の場合では、盛土直下のⅡ層の厚さは10cm内外であることから、古墳築造期におけるⅡ層の堆積状態が堆定できる。周溝内の堆積土は3~4層に区分できる。上部より1は黒色土層で、Ⅱ層の連続である。2・3は遺物包含層であり、4層は周溝掘削直後の再堆積土層である。周溝はⅢ・Ⅵまで切り込まれ、まれに大型の周溝の場合にはⅤ層に及んでいる。

尚、塚原台地の地質上の特色については、付論1「塚原周辺の地形・地質」を参照されたい。

3 古墳群の配置 (第5図)

各遺構については、後章で述べているが、本節では、検出した遺構及び調査区外の古墳等の 配置状況の概要について述べる。

調査区内には、方形周溝墓39基、前方後円墳1基(他1基は不明)、円墳・小円墳合わせて34基、石棺18基、石蓋土壙1基の他竪穴遺構、墓道等を検出した。調査区外に計16基を数えた。現存する古墳は8基で、前方後円墳2基(琵琶塚古墳を含む)、円墳5基、他の8基については消滅した古墳であり、詳細を明らかにしえない。今、これらの墳墓の配置状態をまとめると次のようになる。

方形周溝墓

39基の方形周溝墓は、台地の南端部を除いてほぼ全面に分布している。特に台地北半のⅢ区に20基、I区に13基、南半のⅢ区に6基を数え、分布の中心はI区、すなわち北側台地の頂部周辺にある。また方形周溝墓の規模は一辺25m以上のものから、一辺8m以下のものまであり一定しないが、概して、大型のものはI区を中心にあり、Ⅲ区、Ⅲ区と西に移るにつれ小規模化する傾向がみらる。又、小規模なものでは、重復して築造された例が多くみられる。

円墳及び小円墳

円墳の規模は、方形周溝墓の場合より著しく差がみられ、おおむね周溝の外径が30m以上のものと、それ以下のものとに分け、仮に前者を円墳と呼び、後者を小円墳と呼ぶことにした。これによると、大型の円墳は I 区に 3 基(くぬぎ塚古墳・丸山 6 号墳・三段塚古墳)みられ、方形周溝墓群の東から南側を取り囲むように分布する。又、Ⅲ区では、2 基のやや大型の円墳(丸尾5・6 号古墳)を中心に、大小の方形周溝墓が取り囲んでいて、 I 区とⅢ区では配置状態に大きな差がみられる。 Ⅲ区では、丸山 4 号墳 1 基のみ検出したが、本墳と琵琶塚(前方後円墳)が核となり、これらの周囲を数多くの小円墳及び石棺・方形周溝墓が取り巻いている。

前方後円墳

塚原台地の前方後円墳については、3基存在したとの記録を残しているが、現存するものは 琵琶塚古墳、花見塚古墳の2基である。

調査区内には琵琶塚古墳の後円部東側周溝の一部を検出した。台地の南端に位置している。又 調査区内の I ~ II 区にまたがって存在したという土取塚古墳は、堆定地点が土取りの為大きく 凹地となっていて検出することはできなかった。

2基の前方後円墳については、前項で述べたとおり、南側台地における主墳的な位置を占めることについては今回の調査所見によっても変わることはない。調査区内の円墳、小円墳群と共に、調査区外では、北原1号古墳(甲)、北原2号墳(乙)、石之室古墳、日焼塚等の円墳が取り巻いている。

石 棺

石棺は18基を検出した。石棺には、安山岩の板石と凝灰岩の切石を用いたものとの2種があって、両者の比率は安山岩製1基に対して、凝灰岩製17基である。分布状熊からみると、小円

墳あるいは方形周溝墓に付帯した状態で分布している。

又、安山岩を用いたものは、組合式箱式石棺で、 I 区の北端に1基のみ検出した。

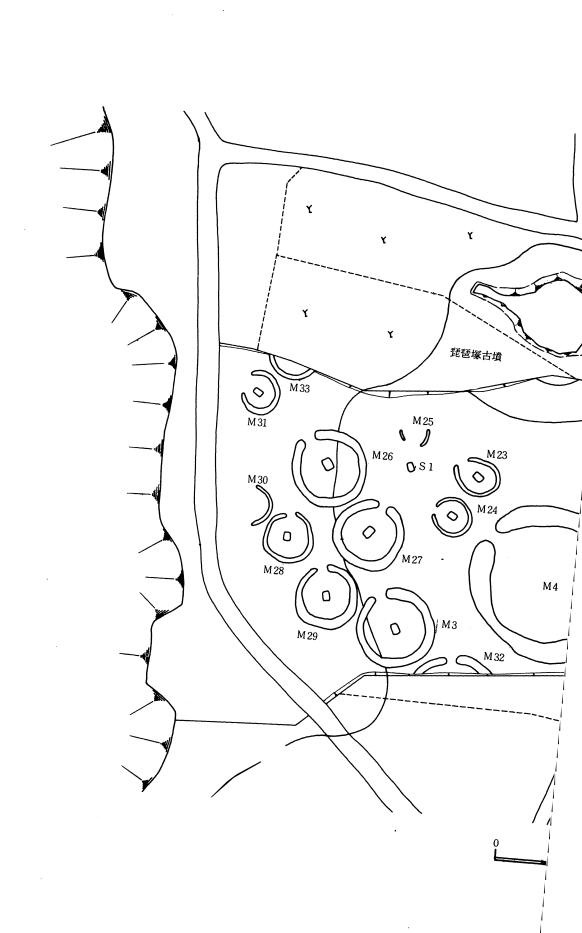
石蓋土壙

石蓋土壙は1基で、Ⅲ区18号方形周溝墓の方形台状部上に築かれている。

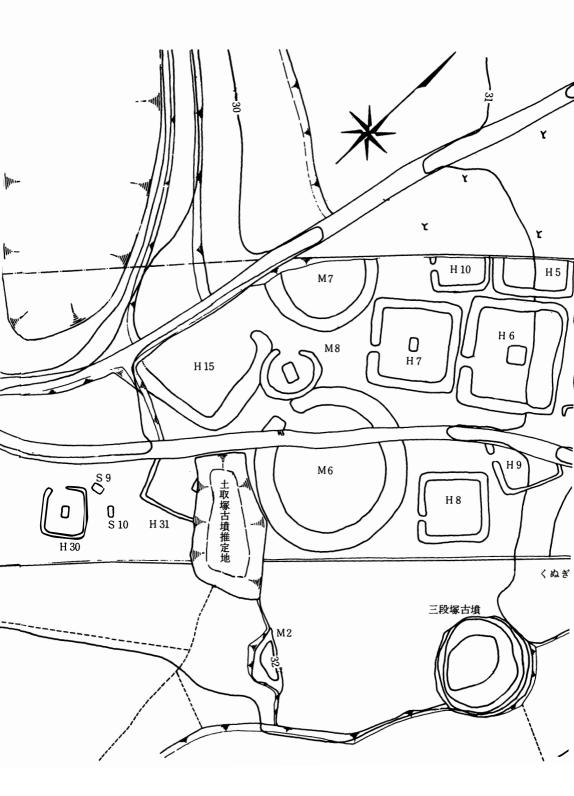
菓 道

墓道は、I~Ⅲ区にかける台地の北側傾斜面に東西2条を検出し、それぞれ東墓道、西墓道とした。西墓道は全長約70m、東墓道は全長約70mを測り、両墓道は台地の頂部に移行するにしたがい、くぬぎ塚古墳陸橋部西側では合流するかに見える。

以上が各遺構のおおまかな配置状況であるが、詳細については、第3章第1節にまとめた。



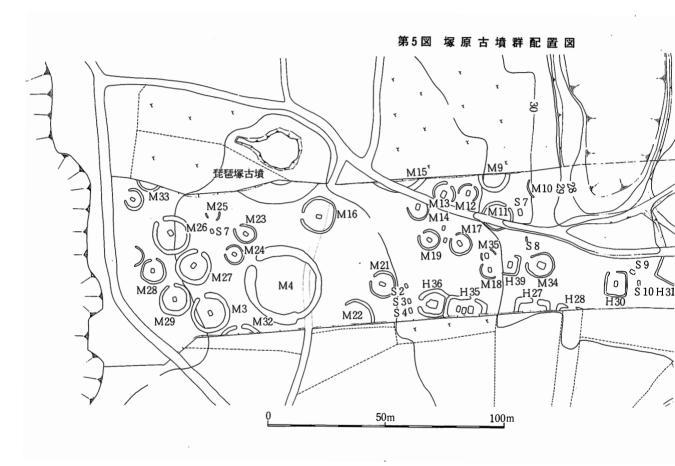


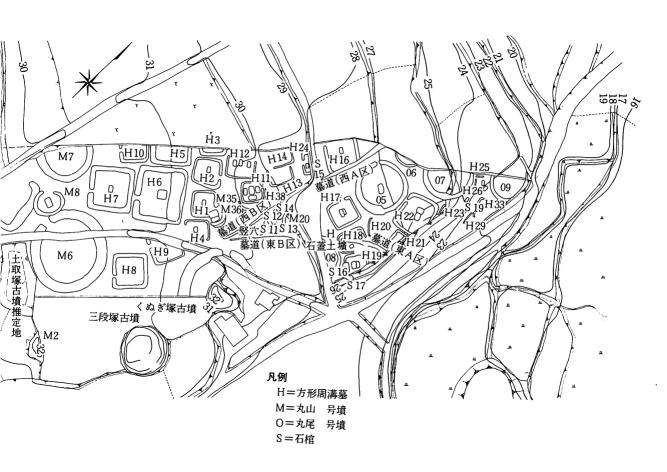


第5図 塚原古墳群配置図

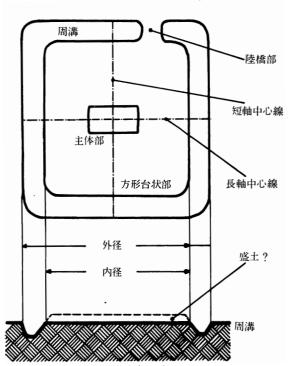








第2節 方形周溝墓の調査



第6図 方形周溝墓各部の名称と計測法

方形周溝墓各部の名称と計測法

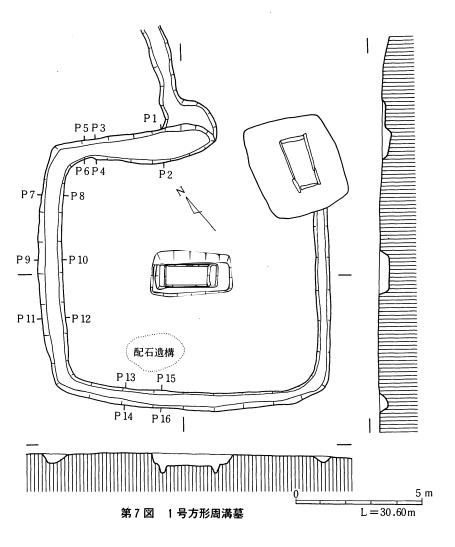
以下本節において遺構の調査内容を記述するに際して 第6図に示したとおり、方形周溝墓各部の名称と計測部 位の統一を行った。まず、周溝により方形に区画された 部分は**方形台状部**、周溝の一部を掘り残された部分を**陸** 橋部とした。計測部位は、主体部の長軸中心線上とこれ に直行する短軸中心線とをそれぞれ内径、外径として表 わした。

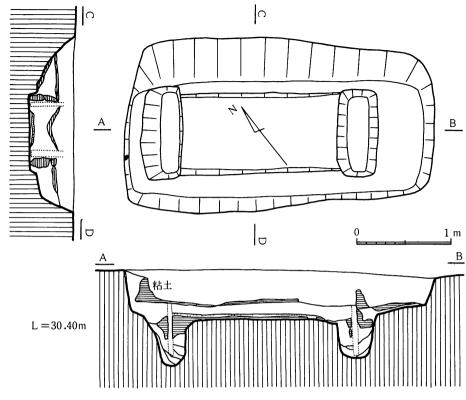
形態と規模(第7図)

東側を除く三辺の溝はわずかに外側へ張り出している。北辺の中央から北東隅に遍して陸橋部を有する。陸橋部の東側は丸山36号の主体部により切られている。周溝の幅・深さは一定ではなく、東側が狭い。幅60cm~100cm、深さは25cm~35cmを測る。周溝断面形は三角形・逆梯形など一定しないが、いずれの場合も溝の外側が急な傾向にある。長軸中心線上の外径11.65m、内径10.0m、短軸中心線上の外径11.16m、内径9.02mを測る。また北側の溝の終端から北東部に延びる浅い溝がある。落ち込み土は周溝と同様黒色土であるが、溝巾は一定でなく、溝底は凸凹がみられ遺物はみられなかった。恐らく人為的な遺構ではないのではなかろうか。

主体部 (第8図)

長径3.26m、短径1.83mの土壙に埋設された組合せ式木棺で、木質部の残存はなく、外被の粘土のみ残る。棺床には4cm~5cmの厚さに赤色顔料が残る。





第8図 1号方形周溝墓主体部

遺物出土状況 (第9図)

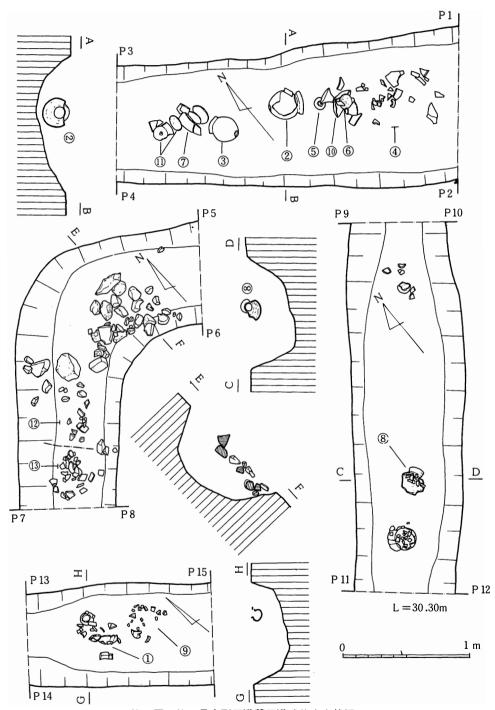
周溝内の堆積土は2層からなり、上部の暗褐色土を I 層、下部の黄褐色粘質土を I 層とした。 R一段とB一段に囲まれた北辺の陸橋部西側周溝には、計7個体分の土師器を検出した。② ・③・④はいずれも底部に穿孔のある壺、⑤は小型丸底壺、⑥・⑦・⑩・⑪は高坏で、いずれ も I 層、暗褐色土に出土し、下面は II 層に接していた。

R-RとR-Rに囲まれた北西部隅の周溝には、3ないし4個体分の土師器と、砂岩礫の流れ込みが検出できた。⑫・⑬は高坏で散乱した状態で出土した。なお、砂岩礫の流れ込みについては、方形台状部の南西部に一部に確認した押型文土器を伴なう配石遺構との関連を孝えねばならないだろう。

B-R₀とR₁-R₀に囲まれた西辺中央部周溝には、3個体の土師器を検出した。このうち⑥の壺のみを図示したが、他はいずれも壺で、うち1点は小型丸底壺である。⑧は溝底より20cm上部のⅡ層、に出土した。

 R_3 - R_4 と R_5 - R_6 に囲まれた南辺西寄りの周溝には3個体分の土師器が出土した。①は壺、⑨は小型丸底壺で、溝底より $15\sim20$ cm上部のII層、より出土した。

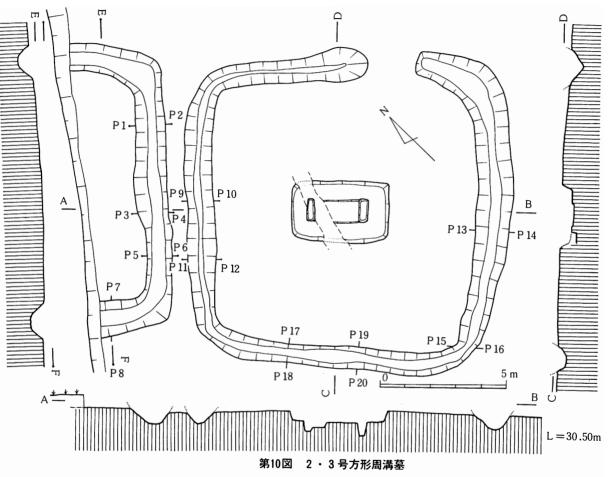
以上、1号方形周溝墓の周溝は、溝の上部は削り取られ、遺存状態の良い5・6号方形周溝墓にみられた I 層、黒色土尺と層と、II 層の一部は失なわれていた。したがって、出土土器の



第9図 第1号方形周溝墓周溝遺物出土状況

形態と規模 (第10図)

隅丸のほぼ正方形プランを呈する。周溝の幅・深さは一定ではなく、幅は $95cm\sim1.65m$ 、深さは $35cm\sim50cm$ を測る。



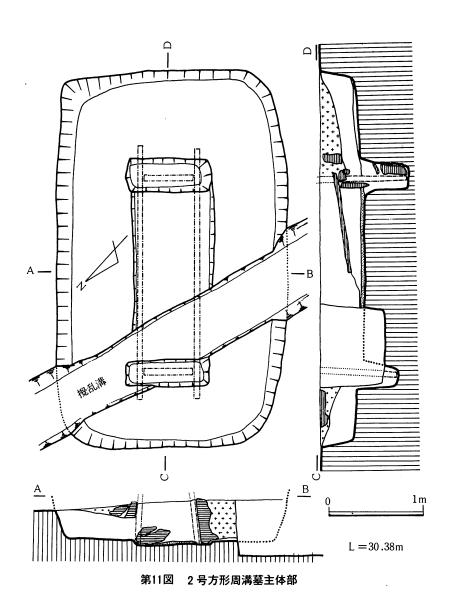
周溝の断面形も、、場所によって多少異るが、底面を有する逆梯形が基本で、その切り込み面などのコーナーの角度はゆるやかである。

一辺の中央からやや一方に遍した位置に陸橋部を有する。陸橋部の幅は 1.9m を測る。

全体の大きさは、長軸中心線上の外径 12.90m、内径 10.40m、短軸中心線上の外径 12.61 m、内径 10.35mを測り、ほぼ中央に主体部を有する。主体部の長軸線と、陸橋部を有する一辺とは平行関係にある

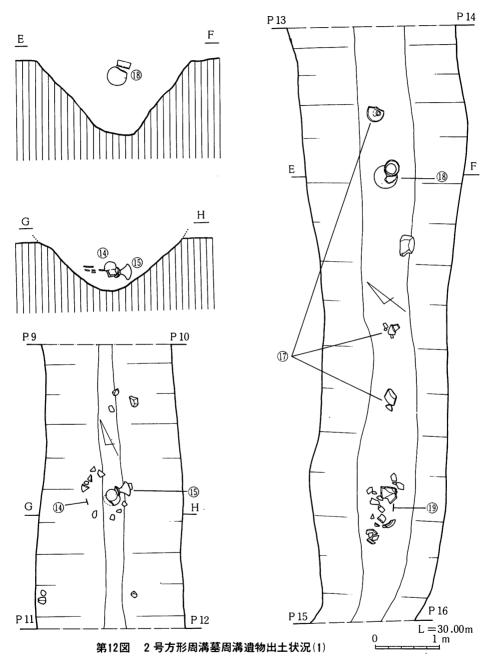
主体部(第11図)

長径3.62m、短径2.45mの土壙に埋設された組合せ式木棺であるが、木質部は腐触し去って 残存しない。小口板を組み込む穴および粘土、床面となる赤色顔料含有土の遺存状態から復原 したのが第11図である。これによれば、木棺の大きさは、内法で 1.9m×60cm程度であったと 孝えられる。このように、木質部の残存はなくても、それを被履する粘土が、木質の腐触後も 原形を保って遺存することから、木棺の規模・形態を復原することが可能である。

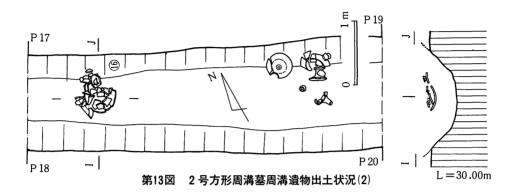


遺物出土状態 (第12:13図)

主体部からの出土はなく、すべて周溝内からの出土である。土師器のみが出土した。周溝内 に堆積した土は上下2層に区分できる。上層は有機質を含んだ黒色土層で、下層は黄褐色砂質 土層である。出土した土師器類はすべて上層の黒色土層中から出土したものである。すなわち、 溝底に密着したものはなく、溝底から20~75cm高いレベルでの出土である。



平面的にみると、陸橋部を有する一辺以外の三辺から出土しているが、全体の量は必ずしも多くはない。西辺の中央部近くでは、小型丸底壺(第12図⑭)、小型器台(第12図⑮)がまとまって出土した。⑭・⑮はセットをなすもので、⑮の上に⑭が置かれた状態で横転し破損したものと孝えられる。東辺の周溝では南東部コーナー近くに、壺2、高坏1の3個体が出土した。第12図の⑭は壺であるが、1個所に破砕した状態で出土したが、他の壺 ⑱ と、高坏 ⑰ は



形態と規模(第10図)

全体の約4を検出したのみで、他は調査区域外にあるため、全体像を知ることはできないが、 隣接する2号あるいは1号方形周溝幕と形態・規模とも類似していると孝えられる。

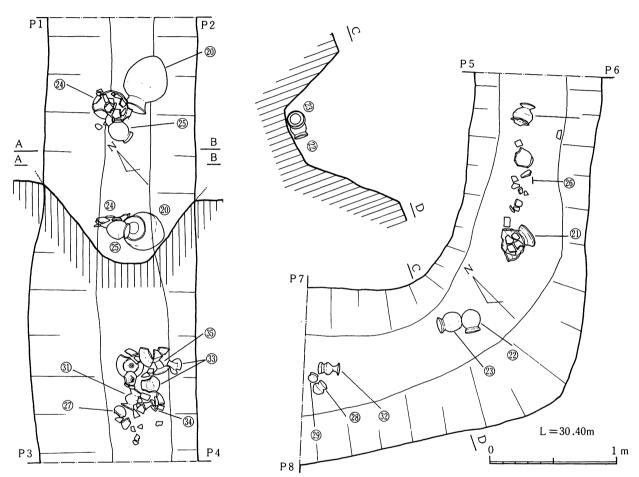
検出した面での計測値は、外径 11.50 m 、内径8.90 m 。周溝の幅は $1 \sim 1.4 \text{m}$ で、深さは50 m cm前後である。検出したコーナーはいずれも隅丸である。検出した部分には陸橋部はない。

主体部

主体部の位置は調査区域外にあるため未調査である。

遺物出土状況(第14図)

周溝内から16個体分の土師器が出土した。東辺の北よりに、壺型土器(第14図@@@)がまとまって出土し、これより約2mはなれて、高坏3(第14図③~⑤)、台付小型壺(第14図③)小型丸底壺(第14図②)が一括して出土した。南東コーナーでは壺・台付鉢・小型丸底壺などが出土している。ここれらの土器で、②~②・⑩は溝底に密着して出土し、②~②・②は溝底より浮いており、上部の黒色土からの出土である。



第14回 3号方形周溝墓周溝内遺物出土状況

形態と規模(第15図)

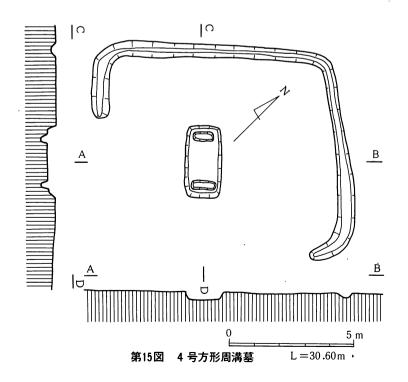
耕作等による攪乱・削平を受けているため、周溝の全体を検出できなかった。北西辺・北東辺は検出できたが、南西・南東辺が不明である。形態、規模を復原すると、隅丸の長方形プランで、長軸線上の外径 8.5m前後、短軸線上の外径 10.50m前後と推定される。周溝の幅は40~85cm、深さは20cm前後できわめて浅いが、上部の削平のためこのような数値になっている。周溝の断面はU字状に近い。陸橋部の位置は不明である。方形台状部のほぼ中央に主体部がある。

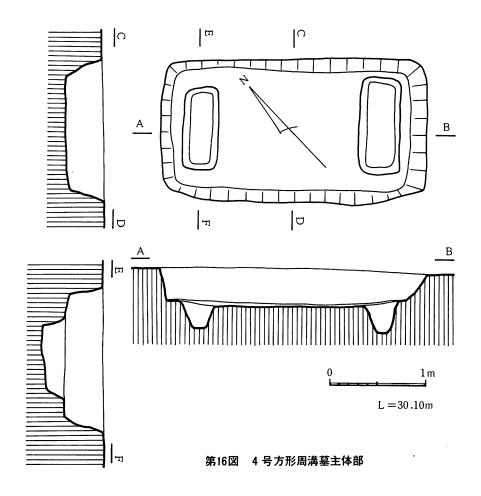
主体部 (第16図)

長径2.85m、短径 1.5mの隅丸長方形の土壙に組み込まれた組合せ式木棺である。木質部の残存はなく、粘土の残存も状態が悪いため復原は不可能である。土壙の両端には小口板を納める穴が掘り込まれている。土壙の深さは40cm前後で、両端の穴はさらにそれから30cm前後掘り込まれている。

遺物出土状況

主体部からの出土はなく、周溝内からも土師器高坏の脚部片1点が出土したのみである。



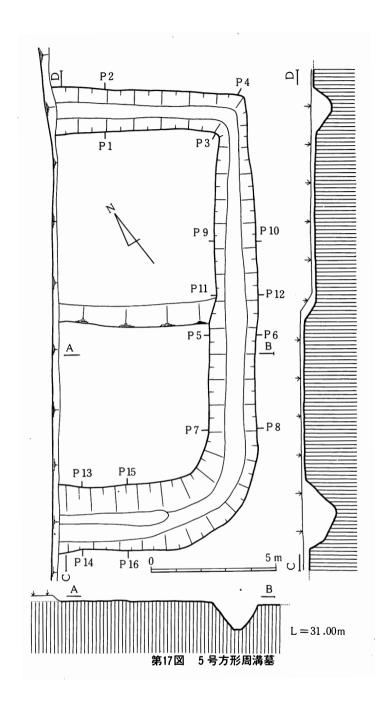


形態と規模(第17図)

調査区域と調査区域外にまたがるため、全体の約分を検出したにとどまった。

南北の外径18m、内径約14mの、やや大型の周溝で区画される。北東コーナーは鋭く屈曲するが、南東コーナーは隅丸である。周溝は、東辺の南半から南辺にかけては $1.9\sim2.5m$ 、深さ 1.2m 前後を測るが、東辺の北半と北辺は上部が削平されていて、幅 $1.6\sim1.9m$ 、深さ70 cm前後である。断面形は逆梯形である。後世の削平によって、北半分は南半分より約40cm低くなっている。

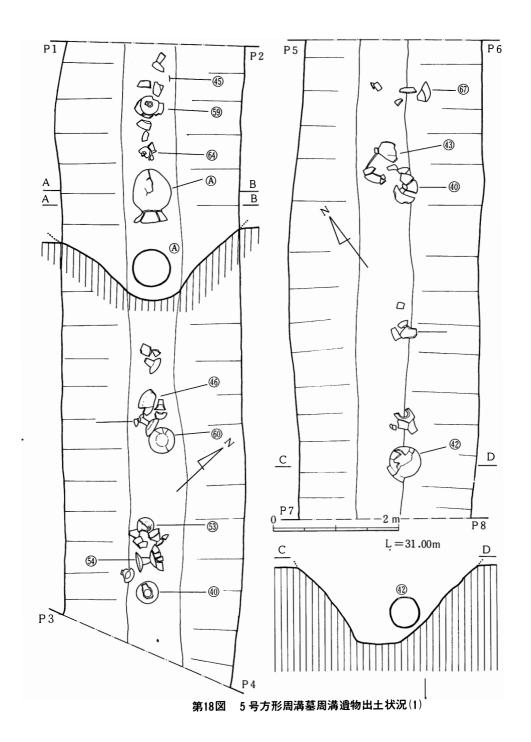
主体部及び陸橋部は、調査した範囲にはない。



遺物出土状況 (第18:19図)

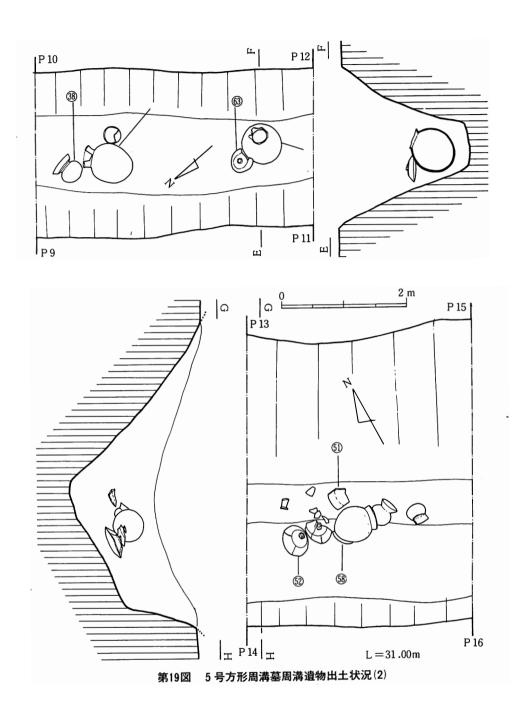
確認したまの周溝から、ほぼ全面にわたって遺物が出土している。周溝内の堆積土は遺存状態の良い南辺と東辺南半分では3層からなり、北辺および東辺北半では2層からなっていて、上部からの削平により I 層は失なわれていた。遺物の大半は II 層より出土している。

北辺では、R-P₂とP₃-P₄とにかこまれ範囲にあわせて11個体分の土師器が出土した。 ⑤・⑥・③・⑤・⑤・⑥・⑥は高坏で、⑩・⑥は壺形土器である。これらはすべて溝底より10 ~15cm上部のⅡ層黄褐色土層中より出土している。11個体の土器群は、さらに3ないし4個ず



つ3群の小グループからなっている。いずれも周溝内に配置されたのち埋没したものとみられる。

東辺の北半P₉-P₁₀とP₁₁-P₁₂にかこまれる範囲には、計5個体の土器が出土している。38・④ と他の2個体は壺形土器で、⑥は高坏である。いずれもⅡ層黄褐色土に位置し、④では一部Ⅲ 層に到していた。北辺の土師群同様、周溝掘削後まもなく配置されたものとみられる。



東辺南半B-BとB-Bにかこまれた範囲には、計7個体分の土器が出土した。

⑩・⑰と他の一点は高坏、⑫・⑱は壺形土器である。これらは周溝の中央部、Ⅱ 層黄褐色土中に出土し、⑫では周溝の外側よりに出土し、一部はⅢ層に接していた。

南辺では P_{14} と P_{15} ー P_{16} の間に6個体分の土器が出土し、壺3、高坏3からなる。これらの土師器はすべて溝底より30cm上部のII層黄褐色土より出土した。

形態と規模(第20・21図)

隅丸の長方形に区画されており、コーナーの角度はやや鋭い。北側約号は上部が削平されている。検出された方形周溝墓の中では最大規模の1つである。長軸線上での外径24m、内径19m、短軸線上での外径21.50m、内径17mを測るが、北方の削平によって多少数値に変動がある。周溝は2.3~3.0mの幅を有する。深さは2m前後を測り、断面の形はU字状を呈する。南側の一辺の中央からやや東に遍したところに陸橋部がある。陸橋部の幅は約2mを測る陸橋部を有する一辺と主体部の主軸は平行の関係にある。

主体部(第22図)

方形台上部のほぼ中央部に土壙が掘り込まれ、さらにその中に3基の木棺墓が検出された。 これらの3基の木棺は、長径 6.4m、短径 5.8mの同一土壙に並列に組み込まれている。中 央の第1主体部が最も大きく、その両側にひとまわり小型の第2・3主体部がある。

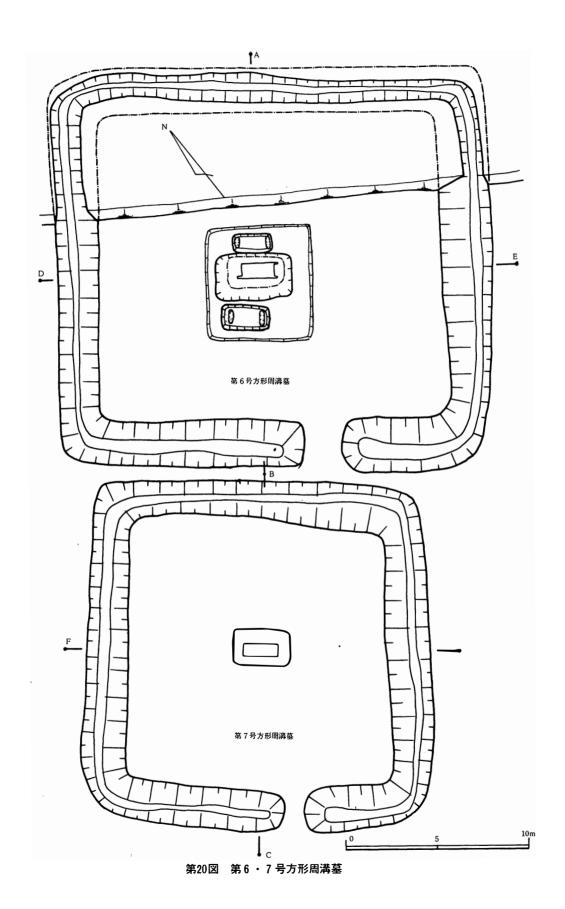
中央の第1主体部は、長径 4.4m、短径2.65mの土壙に組み込まれた組合せ式木棺である。 木質の残存はほとんど認められないが、それを被覆する粘土層の遺存がきわめて良好なため、 木棺部の形態及び規模を知ることができる。これによれば木棺の内法は、長径 1.7m、短径80 cm、深さは40~50cmであったと孝えられる。側板の配置は第22図に示すとおりである。

第2主体部は第1主体部の北に接して埋設された小型の組合せ式木棺である。長径2.25m、短径1mの土壙が掘り込まれ、その長軸両端には小口板を納める穴が掘り込まれている。土壙の深さは約15cmで、小口板を納める穴はこれからさらに約20cm掘り込まれている。この数値でも明らかなように、第2主体部はその上部の大半を削平され、下部のみを残しているにすぎない。

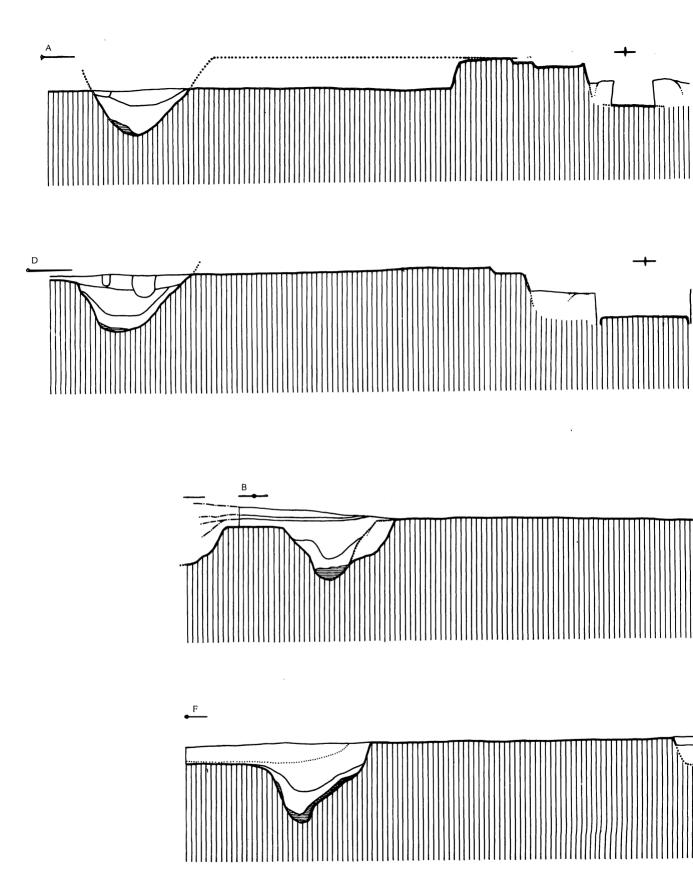
第3主体部は、第2主体部と対称して、第1号主体部の南に埋設されている。第2主体部よりやや大きめで、長径 2.7m、短径 1.3mの土壙の両端に小口部を納める穴が掘り込まれている。土壙の深さは約20cmで、小口部の穴はさらに約30cm掘り込まれている。

第2号主体部と第3号主体部は、その規模に多少の差異はあるが、中心的な第1主体部の両脇に位置し、第1主体部より小型で、その形態には共通点が多く指摘できる。さらに第3号主体部は第2号主体部と同様、その上半を削平されて下部のみを残しているにすぎない。このことは、第22図、C-D断面図でも明らかなように、中心に位置する第1主体部は規模も大きく、さらに深く埋設されているが、第2・3主体部は規模が小さく、埋設されている位置が浅いということに由来するものである。さらに後述するように、第1号主体部には、鉄剣・匂玉・管玉の副葬品を有するのに対して、第2・3主体部は無遺物である点などを総合して、第1主体体部と第2・3主体部の関係を暗示するものである。

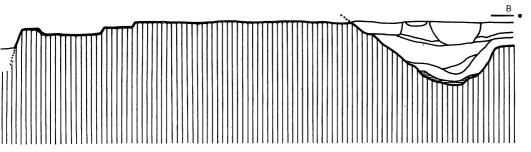
第2・3主体部は上半を削平され、さらに粘土の遺存状態も悪く、その詳細な構造を明らかにすることはできなかった。さらに、3基の主体部の時間的な関係については、第1主体部と



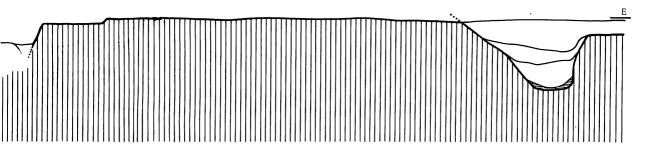
- 42 -



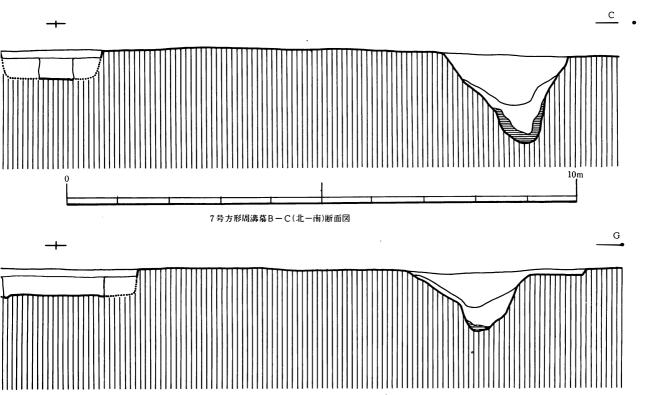
第21図 6·7号方形周溝基級



6号方形周溝蟇A-B(北一南)断面



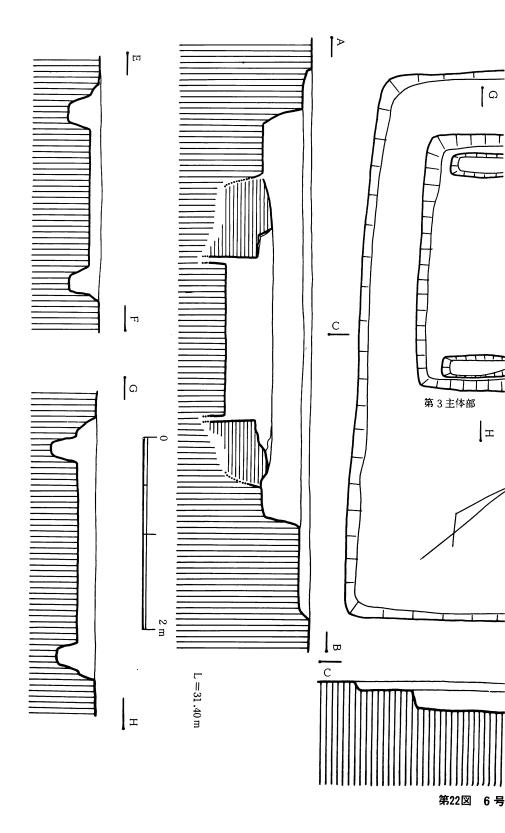
6号方形周溝幕D-E(西-東)断面図

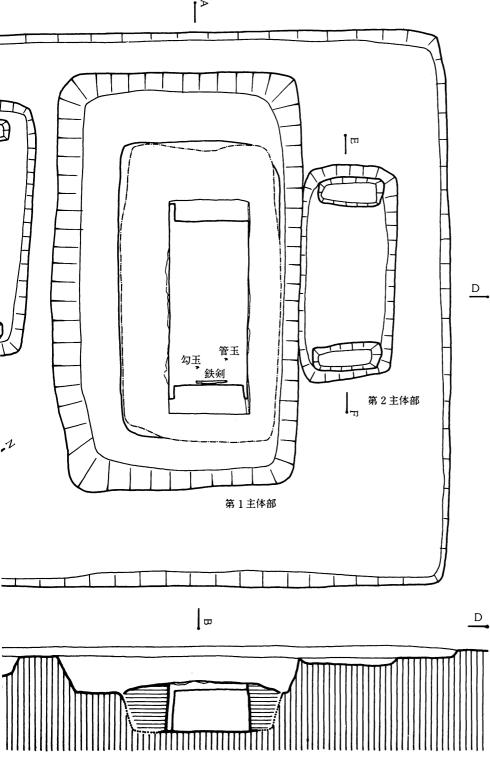


7号方形周溝幕F-G(西-東)断面図

所面図(記号は第20図と一致する)

L = 31.40 m





方形周溝墓主体部

第2主体部の土壙は相接して掘り込まれているが、その間に切り合い関係を認めることはできなかった。しかし、このことは、第2主体部の遺存の悪さにも起因するところがあり、同時性を否定するものではない。総合的にみて、共通の同一の土壙を有すること、主軸の方向がほぼ同一であること、また全体の位置関係から、まったく同時期か、あるいは時間差があってもごく短期間であると考えるに至った。

遺物の出土状況 (第22・23・24図)

第2・3主体部は無遺物であるが、第1主体部の床面から、鉄剣1、勾玉1、管玉1を出土 した。今回調査した方形周溝墓で、主体部から遺物を出土したのは17号方形周溝墓とこの6号 方形周溝墓の2基のみであり、群の中に占める位置などを考えるうえで重要な知見である。

6号方形周溝墓第1主体部の遺物は、第22図に示すとおり、木棺の東木口板に沿って鉄剣が、それより少し西方に管玉と勾玉が各1点出土した。いずれも床面に密着し、原位置を保っていると判定してよい状態であった。このことは、第1主体部の埋葬位置、とりわけ頭位が東にあったことを示していると考えてよかろう。

周溝内からは、計58個体分以上の土師器が出土した。

南辺ではR-Bより東側陸橋部との間に集中的に出土した。⑦・⑲・⑩・⑲・螂は壺、⑩・⑫・台付小型丸底壺、శの・⑲は小型丸底壺で他は高坏である。これらはすべて I 層中~下部に限って出土し、⑦・⑲では下方が I 層上面に接していた。

西辺では中央部を基点として南から北に9mの範囲にわたって、計12個体分の土器が出土した。⑧は小型丸底壺は、溝底より20cm上部、③・④の壺および鉄鍬1(図版、)15~25cm上部のⅡ層黄褐色土層より出土した。

先の②の南約 1.5m に 3 個体が出土した。⑨・⑩は壺形土器、⑭は小型丸底壺であり、いずれも Ⅱ 層黄褐色土中より出土している。さらに約 1.5m 間をおいて⑱の壺が出土し、溝底より約10cm上部の Ⅱ 層下部に位置し、一部はⅢ層に接している。⑱より南~約 3.5m には、壺が破壊された状態で出土した。

東辺ではP₁₁--P₁₂とP₁₃--P₁₄との間、すなわち中央部の2ケ所に土師器が出土した。⑩はⅢ層溝底に接し、土圧で押しつぶされた状態で出土した。⑩の壺形土器も同様の状態で出土した。

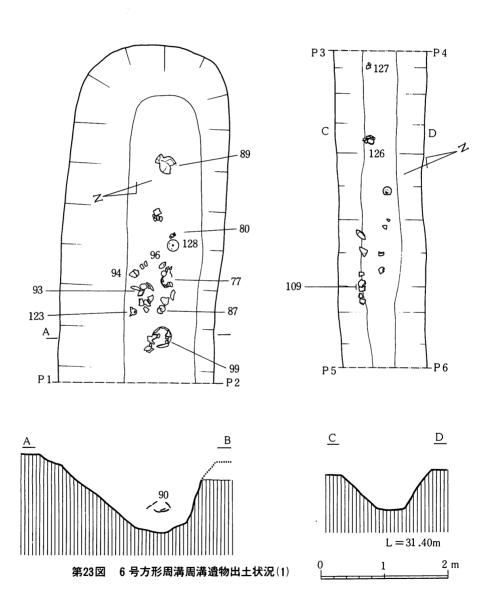
北辺では、中央部から東北部隅にわたっては周溝巾が広く深くなり、この部分に27個体分の土師器が出土した。②・⑤・⑥・⑩・⑩・⑩・⑪・⑪・⑪・⑮は壺、①・❸・⑥・⑥は小型丸底壺、⑨・⑨・⑲・⑩・⑩・⑩・⑩・⑩は高坏である。この他に壺1、小型丸底壺1、高坏5が出土した。27点のうち①・⑪の2点は、溝底よりそれぞれ15~18㎝ほど上部⑩に近接して、鉄鍬(図版の)が『層下面に出土、他はすべて『層の中・上面に位置し、これらは無数の土師器細片が混入しており、方形台状部側より流れ込んだものと見られる。なお、⑩と⑩は同一個体であっ

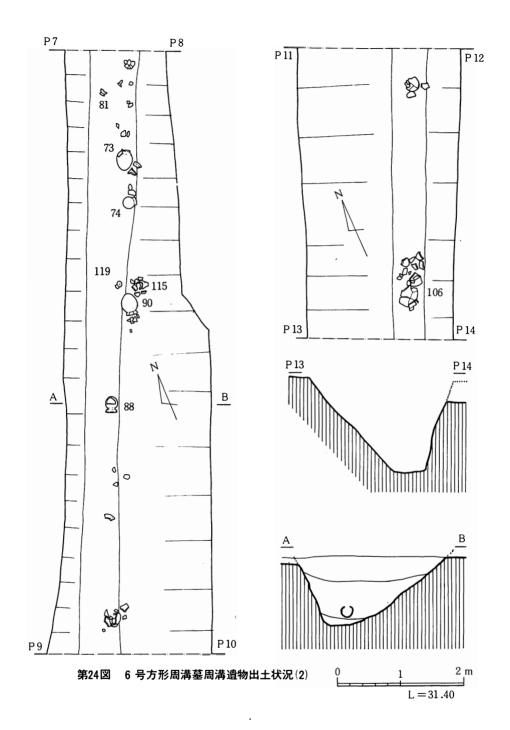
た。

R-PとP-P間の北辺の東隅に12、75・98・13の、13・20の小型丸底壺、14・20の小型丸底壺、14・20の高切と、15・30の変形土器の口縁部破片が出土している。

いずれもⅡ層黄褐色土層中の出土である。

陸橋部の東側周溝のⅡ層より20・33の甕形土器と600、の高坏が出土した。





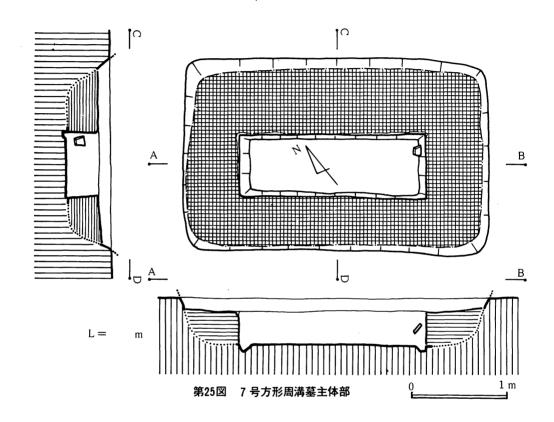
形態と規模 (第20・21図)

隅丸の方形に区画され、長軸線上での外径19m、内径 14.30m。 短軸線上での外径19m、14.90mを測り、正方形に近い。周溝の幅は 1.9~ 2.5mで、深さ 1.2~ 1.7mを測り、断面形はU字状又は底の幅のせまい逆梯形である。方形台状部すなわち、内側の傾斜はゆるやかで、外側の傾斜は急である。

南側の一辺の中央よりやや東に遍したところに陸橋部を有する。陸橋部の幅は1mである。 方形台状のほぼ中央に主体部があり、主体部の長軸と陸橋を有する一辺とは平行である。

主体部 (第25図)

方形台状部の中央に主体部土壙1基を検出できた。



土塘は東西3.25m、南北2.00mを計り、ほぼ整った長方形を呈する。土壙内は砂礫混りの黄白色粘土でみたされ、中央部南よりに深さ35cm、長さ1.96m、巾0.69mの主体部を検出した。主体部内は周溝内堆積土 II 層に相当する黒色土層が堆積し、床面には厚さ5~10cmの厚さに赤色顔料混りの黒色砂質土が堆積していた。東側部の床面から24cm上部より赤色顔料を塗布された安山岩片が出土した。主体部床面の周囲には、巾10~14cm、深さ10~15cmの溝がめぐっている。側壁と端壁とも遺存状態が好く、側壁は北壁・南壁とも上部で狭まり、端壁ではいずれもほぼ垂直に立ち上っている。

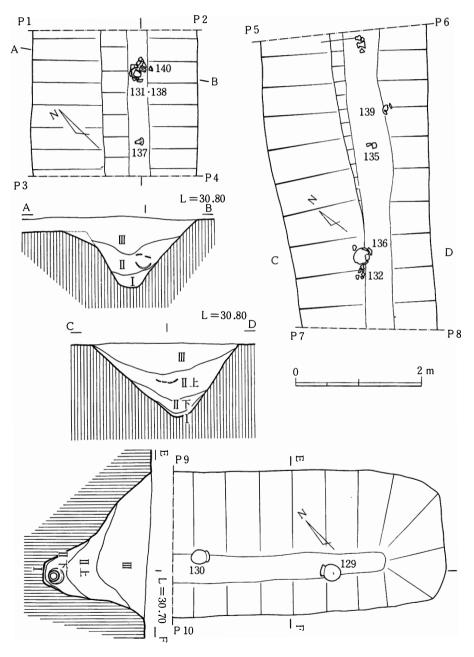
主体部の構造を知る積極的な手がかりは見い出せなかったが、主体部内の黒色土層の堆積土には攪乱された痕跡もみられないこと、また安山岩板石の混入していたことから、石蓋の箱形木棺と考えることも出来る。

なお副葬品等は皆無である。

遺物出土状況 (第26図)

周溝内からは計16個体分の土師器が出土した。°このうち図示したものは13個体である。

周溝内の土層堆積状態は、3層ないし4層からなり、下部からⅢ・Ⅱ下・Ⅱ上・Ⅱ層とした。Ⅲ層は、周溝掘削後まもなく堆積した黄褐色の砂質土層でロームブロックを含む。Ⅲ下・Ⅱ上は、基本的に類似した土層で、Ⅲ下は黄褐色のやや砂質混りの土層、Ⅲ上は、黒みを帯びた黄褐色土層である。Ⅱ層は黒色土層である。



第26図 7号方形周溝墓周溝遺物出土状況

R-RとR-Rで囲まれた北辺の中央部で4個体分の土師器が出土した。⑩は大型の壺で、 ⑱・⑲・⑽は高坏である。いずれも第2層中に位置し、⑲では I 層上面に接している。

Ps-Ps・Ps-Psでかこまれた東辺の中央部では、5個体分の土師器が出土している。図・園・園・園・園は高环、園は小型丸底壺である。図・園・園・園はⅡ上層、園はⅡ上層の出土とある。 Ps-Pioより東側陸橋部の間には図・園の甕形土器がおよそ 1.8m の距離をおいて出土した。いずれも鋭く掘り込まれたV字状構の底部近くのⅡ下層出土である。

なお、これらの土器を層位的に分類すると、Ⅱ下層は図・30・30、30、30・30、1 層ないし Ⅱ上層は、③0・30・30・30・30・30・30・40・40である。

8号方形周溝墓

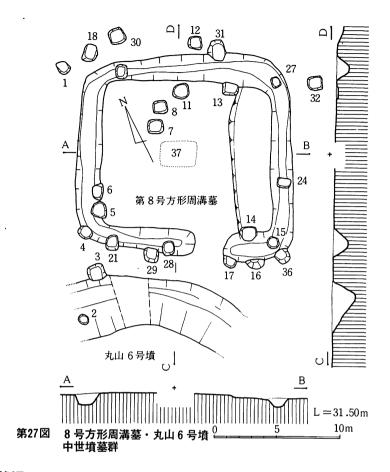
形態と規模 (第27図)

隅丸の長方形プランで区画されるが、全体に不整形である。後に詳述する中世墳墓群が周溝の部分を中心に、方形台状部、周溝の周辺に位置し、総数37基を数える。

長軸線上での外径 $17.1\,\mathrm{m}$ 、内径 $13.5\,\mathrm{m}$ 。短軸線上での外径 $15.7\,\mathrm{m}$ 、内径 $11.6\,\mathrm{m}$ を測る。周溝の幅は $1.2\sim2.1\,\mathrm{m}$ で、深さは $90\,\mathrm{cm}\sim1.1\,\mathrm{m}$ である。南側の一辺の中央からやや東に偏して、幅 $2.4\,\mathrm{m}$ を測る。主体部は方形台状部のほぼ中央に位置し、その長軸は陸橋を有する一辺とは平行関係にある。

主体部

主体部付近の攪乱があり、明瞭には確認できなかった。すぐ近くから45枚の中世の銭貨が出土し、さらに土壙内に骨粉らしきものが認められたことから、中世墳墓として再掘した時、方形周溝墓の主体部は破壊されたと考えられる。この中世墳墓は、後で詳述する中世墳墓群の項には記述していない。後で述べる中世墳墓は46基であるので、これを加えて総数は46基となる。このように、中世期における攪乱により主体部の詳細は不明であるが、長方形の土壙の底部がわずかに遺存していた。また、覆土の中より、安山岩の板石が数点検出された。安山岩は原位置をとどめているものではなく、攪乱された状態であったが、その形状からみて石棺材と考えてよかろう。そうすると、8号方形周溝墓の主体部は、長方形土壙に組み込まれた安山岩の箱式石棺と考えられる。他の方形周溝墓の主体部は、組合式木棺であるが、8号方形周溝墓のみが石棺と主体部としていることは注目すべきことである。さらに、長軸方向と陸橋を有する一辺とは平行関係にあり、他の方形周溝墓と共通の要素をもちながら、石棺という要素をもっことは、時間的な経違を示すものであろうか。



遺物出土状況 (第28図・29図)

周溝内の堆積土は3層からなっている。Ⅰは黒色土層で上面で表土層(耕土)と接している。 少量ではあるが土師須恵器等を含む。Ⅱは黄褐色土層。Ⅲは黄褐色粘質土で、周溝掘削後まも なく堆積したⅠ層である。

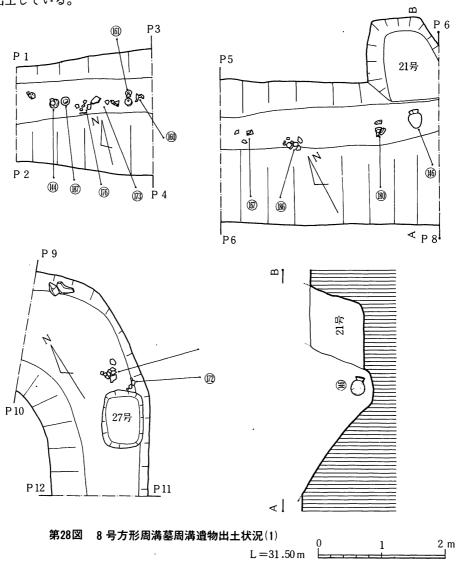
R-PeとR-Rに囲まれた北辺に西隅の周溝には、7個体分の土師器が出土した。⑩は壺形土器、⑱・⑲・⑲・⑲・⑲・螂は高坏である⑲は溝底より25cm、⑲は26cm、⑰・⑯は30m 鯽は28cm上部のⅡ層黄褐色土中より出土した。これらの遺物は溝のほぼ中央部に集中している。 は

R-PaとPaに囲まれた北辺の中央部周溝には6個体の土師器が出土した。⑩・⑭・⑭・⑭・ 壺形土器で溝底に近い 『層下面、一部は』層に接していた。⑱・⑱は高坏で』層上面、⑯の壺は溝より55cm上部の『層黒色土に出土した。なお周溝の一部は21号墓(中世墳墓)によって切断されている。

R₂-P₁₀とP₁₁-P₁₂に囲まれた東辺北隅の周溝には、⑩は高坏で溝底より30cm上部の II 層出土である。なお周溝の東寄りの部分は27号墓(中世墳墓)が位置し、墓壙の底は周溝底を20cm程掘り込んでいる。⑩の出土地点より南へ24mの地点に安山岩の石材を検出した。石材は長さ75cm、巾35cm、厚さ6cmで、最も低い部分で溝底より25cmの II 層黄褐色土層中で、他の土師器群と同

一層である。

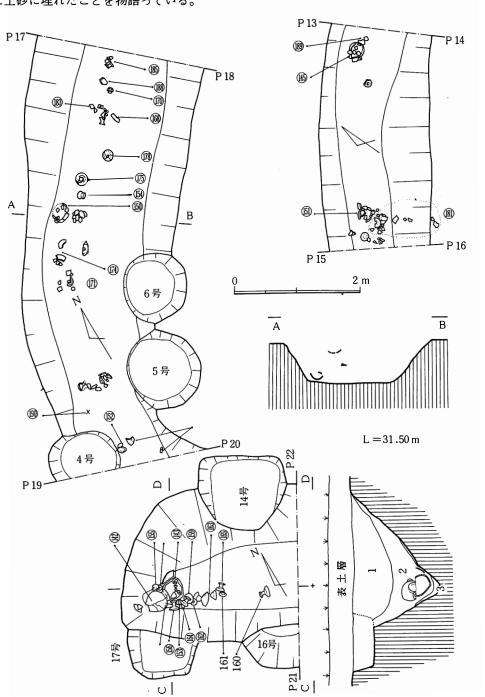
 $P_{13}-P_{14}$ と $P_{15}-P_{16}$ に囲まれた西辺北側の周溝には、ほぼ 2.5m 距離をおいて 2 群 6 個体の土師器が出土している。



働・⑱はいずれも壺形土器で溝底から30cmの I 層出土、⑮の壺形土器、⑱の高坏は溝底から55cm上部の I 層黒色土中の出土である。なお⑱は方形台状部から周溝内に流れ込んだとみられる。

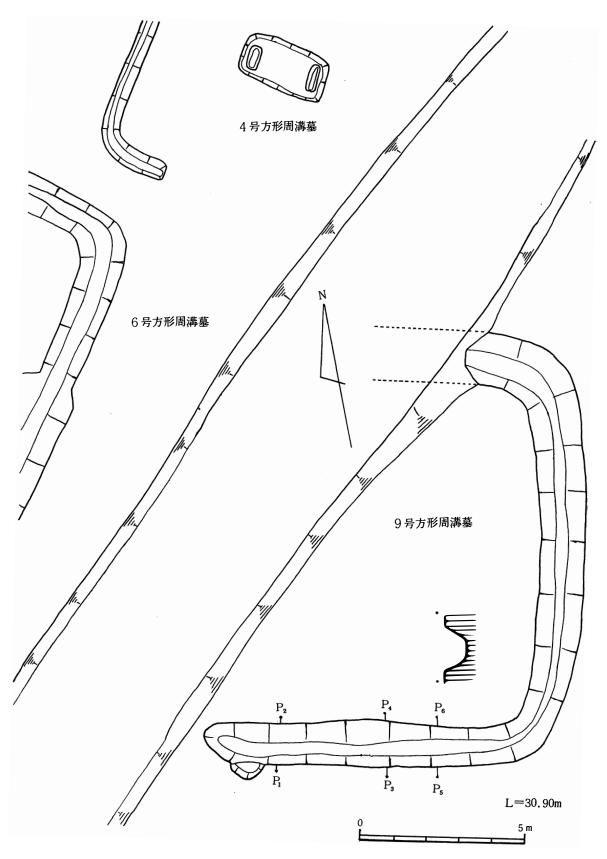
P₁-P₁₈とP₁₉-P₂₀に囲まれた西辺南側から南西部隅にかけては、計16個体以上の土師器が出土した。⑩・⑱は壺、⑲は甕、⑲は台付盌であり、⑪は溝底より30cm、⑲は10cmのⅡ層出土である。⑲は床上がり50cmのⅡ層黒色土中に出土した。⑲は小型丸底壺で他はすべて高坏で、⑱は I層、他はⅡ層である。方形台状部と周溝の境に5・6 号墓、さらに4 号墓(いずれも中世墳墓)によって3 基の墓壙はいずれも、周溝内 I 層黒色土上面からの切り込みが確認できた。

Bi-Biから陸橋部に大型壺2、小型丸底壺4、高坏7からなる土師器が出土した。⑩・⑭は壺、⑱・⑮・⑯・⑯と他1点が小型丸底壺、⑮・⑱・⑯・⑯・⑯・⑯・⑯・⑯・⑯は高坏である。これらはほとんど密着するように積み重ねられた状態で出土し、各土器の間にはわずかの空間もみられ、一気に土砂に埋れたことを物語っている。



第29図 8号方形周溝墓周溝遺物出土状況(2)

なお嬢の大型壺は胴の一部割れ、内部にこぶし大の砂岩が4個入っていた。



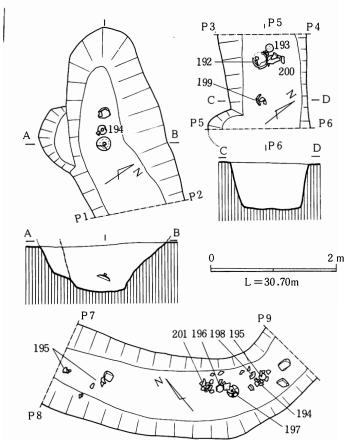
第30図 9号方形周溝墓

なお東辺北寄りの周溝のⅡ層より検出した安山岩板石を8号方形周溝墓の主体部の一部であると見るなら、中世墓墳によって壊される以前に主体部の破壊が行なわれたものと推定される。 その年代は供献されたほとんどの土師器群の出土層位と一致することからもうかがえる。

9号方形周溝墓

形態と規模(第30図)

農道により北側周溝は削平されている。北側に陸橋部の一部が残る。



第31図 9号方形周溝墓周溝遺物出土状況

主体部は削平されている。南溝10.6m、東溝は12.5mを測る。溝巾 1.1m ~ 1.4m、断面形は逆梯形をなし、深さは70cm。

10号方形周溝墓

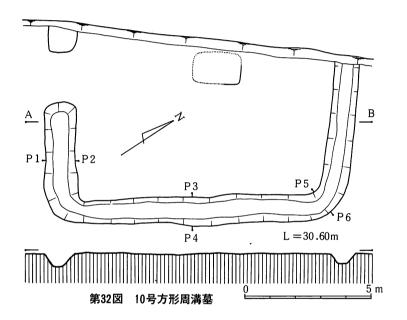
形態と規模 (第32図)

約号は調査区域外にあり、残り号を検出した。検出した部分での外径 12.35m、内径 10.10 m、周溝の幅は1m前後で平均している。深さは40~50cmを測り、断面形は逆梯形を呈する。

南側の一方に陸橋部を有する。陸橋部の幅は2mを測る。主体部は攪乱・削平されているが、 その主軸線と陸橋部を有する一辺とは直交する。

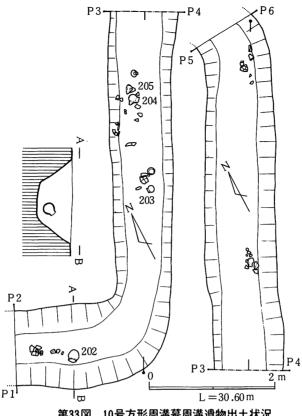
主体部 (第32図)

攪乱・削平がひどく、土壙の一部コーナーを検出したにとどまり、全体については不明である。



遺物出土状況 (第33図)

周溝の陸橋部の東から東辺にかけて、土師器を出土したが、その量は多くない。散発的で、 一定の規則性はなく、すべて溝底より10~20cm浮いた状態で検出された。



第33図 10号方形周溝墓周溝遺物出土状況

11号方形周溝墓

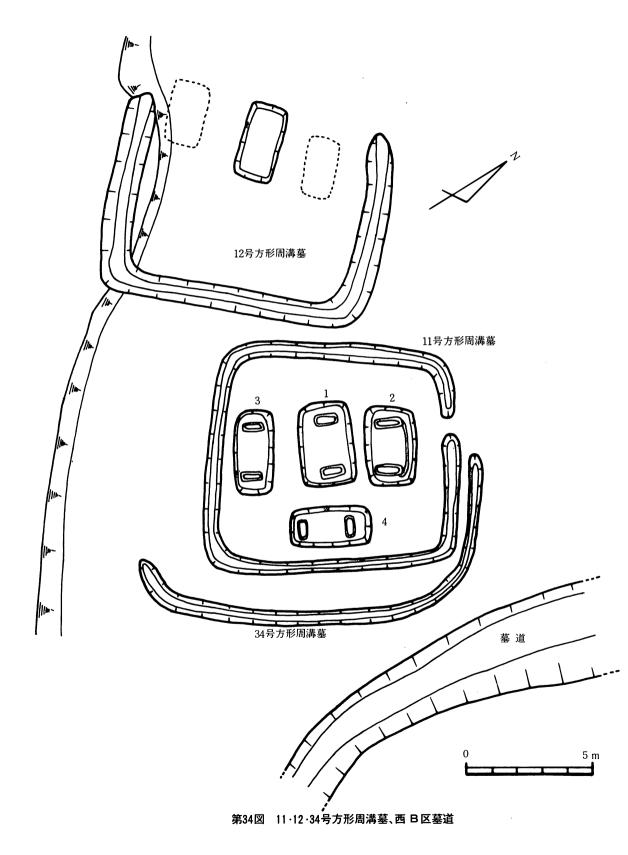
形態と規模(第34図)

不整形な隅丸の方形に区画された小型の方形周溝墓である。長軸線上での外径 8.9m 、内径 7.8m、短軸上での外径10m、内径 8.7m を測る。周溝の幅は50~80cmでせまく、深さも浅い。 北東の一辺の中央からやや偏した位置に、幅60cmの陸橋部を有する。4基のうち3基の主体部 の主軸と陸橋部を有する一辺とは併行関係にある。

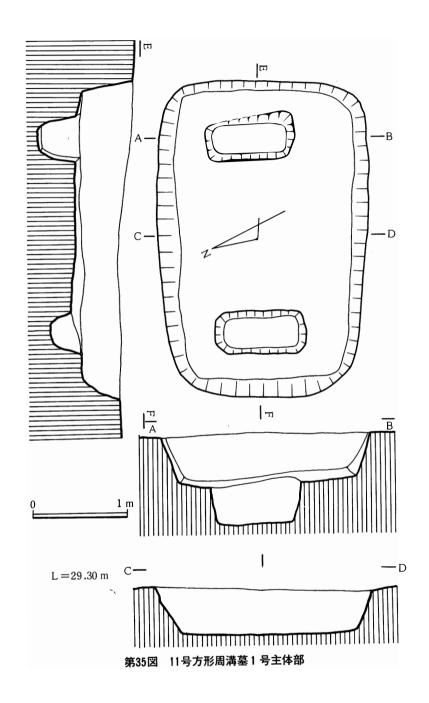
内部主体 (第34・35・36・37図)

11号方形周溝墓には4基の内部主体がある。いずれも組合せ式木棺で、第1・2・3主体部 はほぼ並行して埋設されるが、第4主体部はこれらの主軸と直交する位置にある。中央に位置 する第2主体部が4基の中では最も大きく、他の3基はこれよりひとまわり小さく作られてい る。このことは、6号方形周溝墓における主体部のあり方と共通性を有するものであり、各主 体部間の関係を暗示するものといえよう。

第1主体部(第35図)は、ほぼ中心に位置し、長径 3.3m、短径 2.24mの 土壙の両端に、木 口板を納める穴が掘り込まれている。この両端の穴の間隔は約 1.6m である。土壙は50~55cm 掘り込まれ、両端の穴はそれからさらに30~45cm掘り込まれている。粘土等の遺存が少なく、

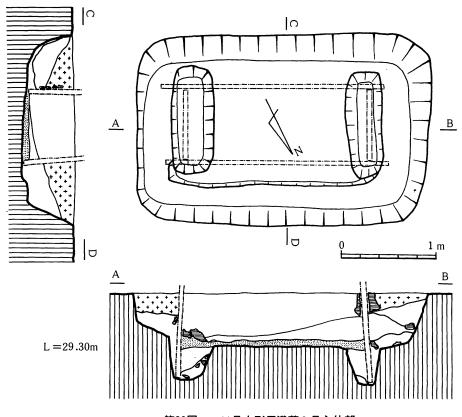


-56-



木棺の詳細な構造・規模については知ることができない。

第2主体部は(第36図)陸橋よりの位置に築かれ、規模は第1主体部に次ぐ大きさである。 長径 3.1m、短径 2.0mの隅丸長方形の土壙に、組合せ式木棺が組み込まれている。木質の遺存はないが、粘土、床面の赤色顔料を含む土質の状態から、第36図のような木棺が想定される。 これによれば、内法は長径約 1.9m、短径75cm、深さ50~70cmの規模であったと考えられる。

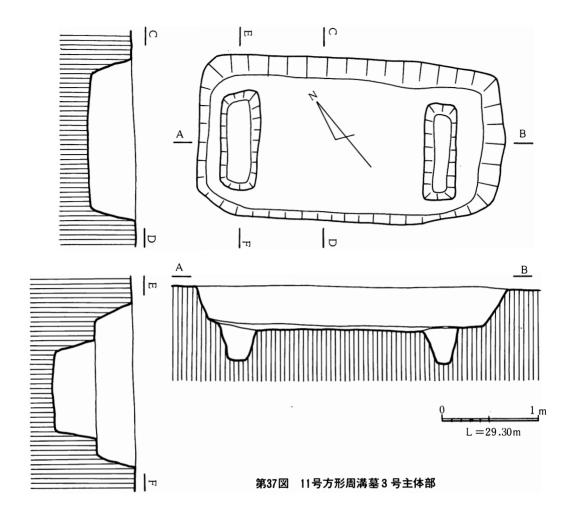


第36図 11号方形周溝墓2号主体部

第3主体部(第37図)は、第1主体部を中央に、第2主体部と対称の位置に築かれている。 長径3.25m、短径 1.7m の隅丸長方形の土壙が掘り込まれ、両端に木口板を納める穴がさらに掘り込まれている。土壙の深さは50㎝前後で、木口部はさらにそれから50㎝近く掘り込まれている。粘土等の遺存は少なく、また状態も悪いため、木棺の細部については知ることができない。

第4主体部は他の3基とは主軸方位が異っており、他の3基とは直交する位置にある。規模は第3主体部と同程度で、長径3.3m、短径1.6mの隅丸長方形の土壙の両端に、木口部を納める溝を掘り込んでいる。遺存状態は第3主体部と同様不良で、詳細について知ることはできない。

6号方形周溝墓における3基の主体部と同様、4基の主体部の時間的な関係を直接示す資料はない。主体部・周溝ともに1点の遺物もなく、その判定をさらに困難なものにしている。さきに述べたように、中央の第1主体部の大きさが他に比べて少し大きいこと、4基の配列が整然としていること、第1~3主体部は並行の関係にあり、第4主体部はこれらに直交することなどから考えれば、第1主体部が最初に埋設された可能性と第4主体部が最も遅く埋設された可能性を指摘することはできるが、さきにも述べたとおり確実な証明はできない。



遺物出土状況

主体部、周溝とも、遺物は皆無である。

12号方形周溝墓

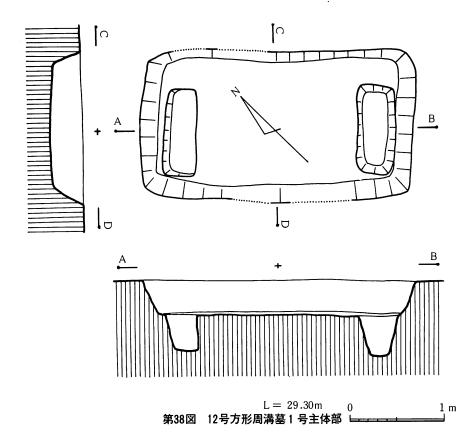
形態と規模 (第34図)

北西方の約½を削平されていて、検出できたのは全体の約½程度である。短軸線上での外径 11m、内径 9 m で、周溝の幅は 1 m 前後である。削平が進み、周溝の深さは浅くなっている。 残存部には陸橋部はない。主体部の位置からみて、検出したのは全体の½程度と考えられる。 これから全体を復原すると隅丸の長方形プランに区画されていたことになる。

内部主体 (第38図)

中央に1基、その両側に各1基の計3基が確認されたが、詳細な調査を実施したのは中央の 第1主体部のみである。他の2基については、その上面でその所在を確認した段階で保存して いる。ここでは調査の終了した第1主体部について記述する。

第1主体部 (第38図) は3基のうちで中央に位置し、長径 2.9m、短径 1.6mの隅丸長方形 土壙に組み込まれた組合せ式木棺である。



土壙は約35cmの深さに掘り込まれ、両端に木口板を納める穴を掘り込んでいる。この穴は土 壙底面よりさらに35~40cm掘り込まれている。粘土等の遺存はなく、木棺の構造・規模等につ いては不明である。

遺物出土状況

主体部・周溝ともに遺物は皆無である。

13号方形周溝墓

幅のせまい、浅い溝がコ字形に検出され、主体部らしき粘土塊の部分が認められたが、未調査であるため詳細は不明である。

14号方形周溝墓

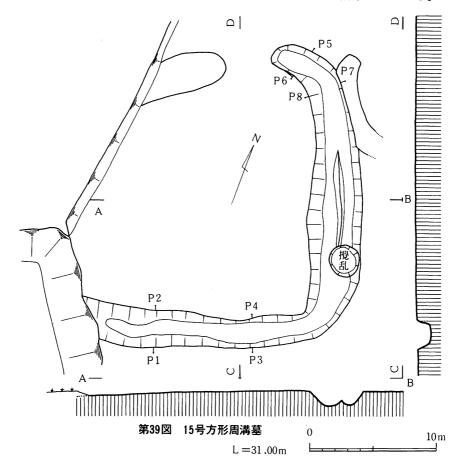
調査区内にL字形に周溝の一部が認められ、周溝内から土師器を出土した。削平がひどく、

全体像は不明であり、主体部を含めて遺構の半分以上は調査区域外にある。

15号方形周溝墓

形態と規模 (第39図)

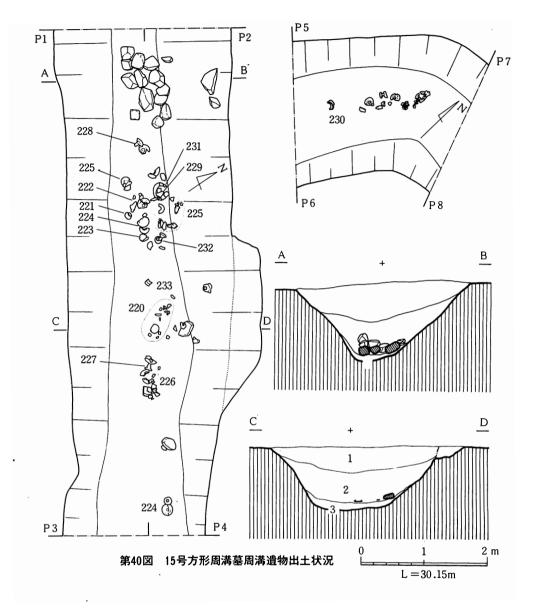
6号と並び群中最大の方形周溝墓の一つである。両側は農道により削平されている。



北側の東に遍した所に陸橋部をもつ東辺約20m、南辺推定21m以上を測る。主体部は削平されて存しない。東側溝は10mに渡り、中央に凸部をもち二重になっている。溝中は場所により一定せず、東コーナーが狭くなる。東溝の長さ約20mを測り南・西溝も恐らく同様なものであったであろう。溝断面形は、逆梯形をなす。溝の深さは場所により一定せず、1.13~ 0.9mを測る。また、溝幅も東側溝の最大径 4.5m、南溝3mと巨大である。

遺物出土状態 (第40図)

陸橋部の東側と、南側の溝より遺物が出土した。

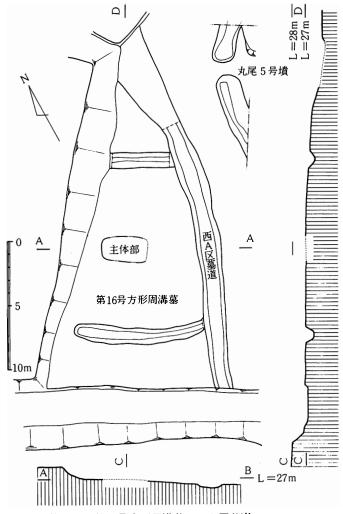


16号方形周溝墓

形態と規模(第41図)

西側の一部は調査区域外にかかり、東側は西側A区墓道によって切られているため、全体を 検出することはできなかった。主体部はほぼ中央に位置し、陸橋部は検出できなかった。

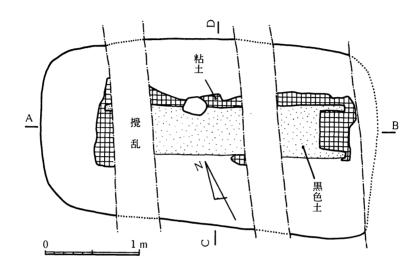
周溝は幅0.8~ 1.2m で、断面形は逆梯形を呈する。深さは50~60cm で、全体に幅・深さともに小さい。



第41図 第16号方形周溝墓・西A区墓道

内部主体 (第42図)

耕作溝により寸断されているが、他の部分の遺存は良好で、土壙に組み込まれた組合せ式木棺である。粘土の遺存状態から木棺の内法を復原すると、長径 2.1~ 2.2m、短径 50cm前後である。調査は、土壙の上面でそのプランを確認した段階でとどめているため、遺物の有無、内部の詳細な構造等は不明である。



第42図 16号方形周溝墓主体部

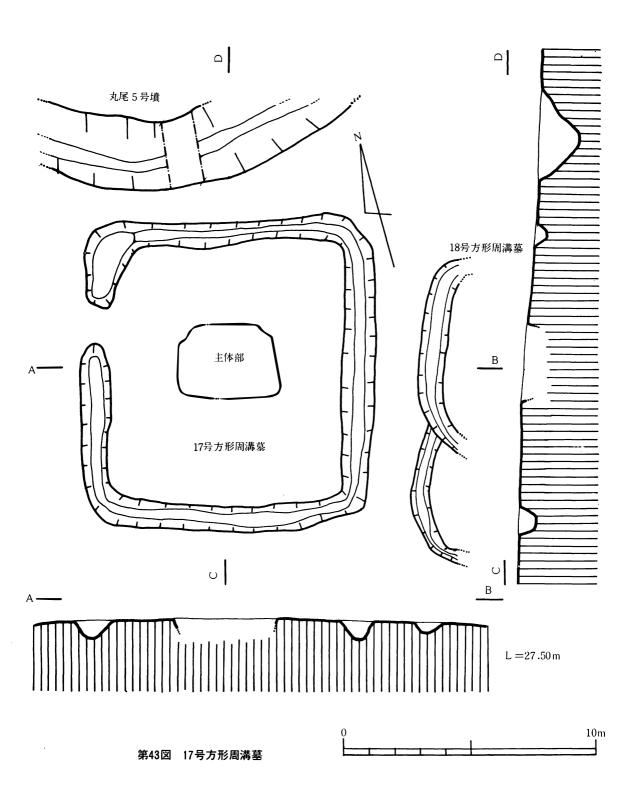
遺物出土状況

南側の周溝から土師器を出土したが量は多くない。周溝内に堆積する土層は上下2層に区分でき、出土した土師器はすべて上層の黒色土中より出土したものである。

17号方形周溝墓

形態と規模 (第43図)

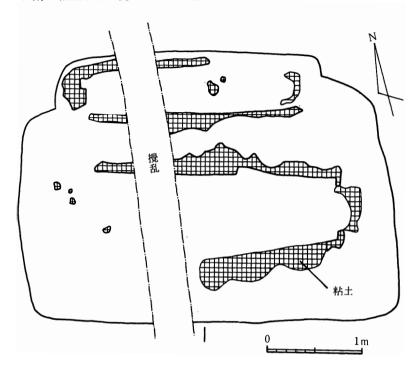
西溝の北側に遍して陸橋部をもつ方形周溝墓で、長軸中心線の外径 11.65m、内径9.10m、短軸中心線の外径12.0m、内径 10.10mを測る。溝は比較的端正で 0.6m~ 1.4mを測る。溝の断面は、逆梯形をなし、溝の外側傾斜が急である。

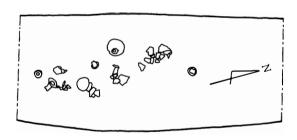


主体部 (第44図)

主体部は、府面まで削平されていて法景を明らかにしないが、東面 4.0m、南北2.85m の土

壙の中に、2ヶ所の粘土まきが認められ、2基の木棺主体部の存在をうかがわせる。





第44図 17号方形周溝墓主体部·周溝遺物出土状況

うち北側の1 基は比較的粘土の残存状態が良く、巾0.5m、長さ2.2mの木棺であったらしい。南側のものは、それよりやや大型。

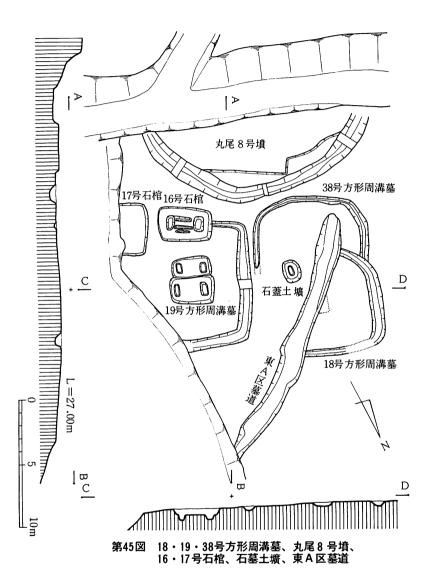
遺物の出土状況 (第44図)

18号方形周溝墓

形態と規模 (第45図)

全体の約号を検出した。南側で38号方形周溝墓と、東側は東側A区墓道と切りあっている。 この切りあい関係は、38号方形周溝墓と18号方形周溝墓が切り、18号方形周溝墓を東側A区墓 道が切っている。したがって、38号方形周溝墓→18号方形周溝墓→東側A 区墓道の順で築造されたものである。

周溝は幅60cm~ 1.1m、深さ30~40cmで、U字状に近い逆梯形を呈している。



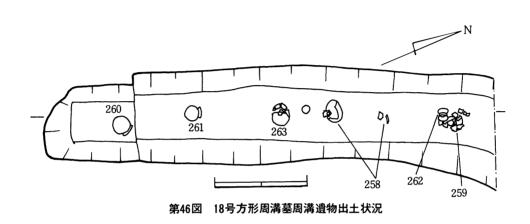
38号と切り合うあたりのコーナーは鈍角の隅丸で、全体として不整形である。検出した部分には陸橋部は認められなかった。

内部主体 (第45図)

内部主体のほとんどが東側A区墓道の掘削によって削平され、わずかに粘土の残存からその 位置を推定する程度であった。方形台状部のほぼ中心に位置し、粘土の状況から組合せ式木棺 であったと考えられる。

遺物出土状況 (第46図)

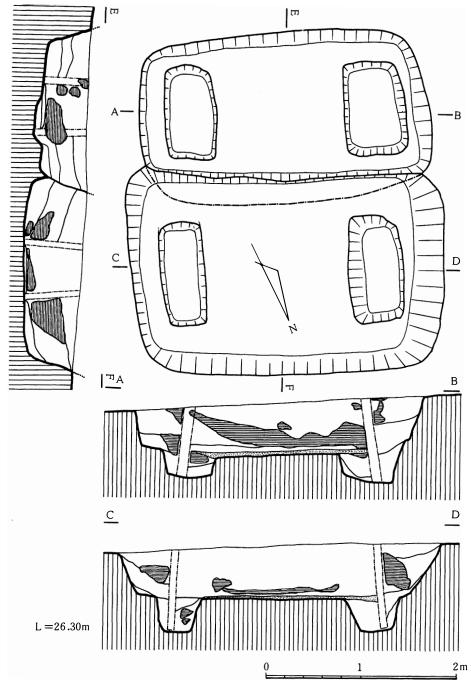
西側の周溝から土師器が出土した。底部穿孔を施した複合口縁の壺、甕、小型丸底壺、高坏が散発的に出土したが、量は多くない。周溝内に堆積する土層は上下2層に区分できる。上層は有機物を含む黒色土層で、下層は黄褐色土である。



出土した土師器は、上層の黒色土からの出土で、溝底から10~20cm浮いた状態で出土した。 完形あるいは完形品がその場で破砕されたような状態であり、供献された土器とみることがで きる。

19号方形周溝墓(第47図)

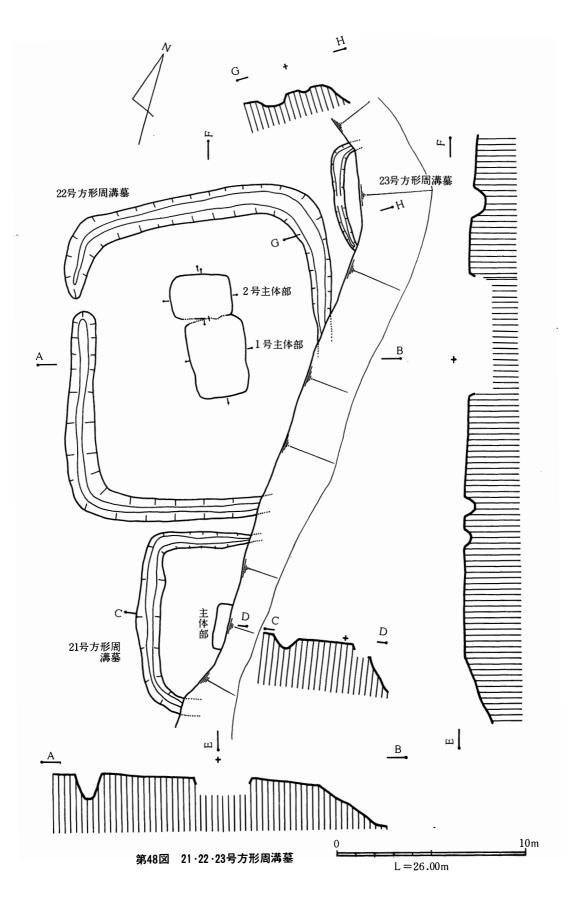
東側周溝は削平されて明らかでない。現石していないが、東側に陸橋部をもっと思われる。 完石する両側溝の長さは約9 m を測す。主体は接した状態で東西2基を有す。切り合い関係を みると、両側主体部を東側主体部が切っている。お面白いことに、どちらの主体部も、方形周 溝墓の中央には位置しない。両主体部の築造が短期間であったことを表わせる。両主体部とも 粘土まきの木棺で床面に、6 cm前後の赤色顔料をみる。南側木棺は、推定約85cm× 2.0 m、北 側は約90cm× 2.2 m と同様の大いさであるが、土壙の現坏は北側のものがやや大きい。



第47図 19号方形周溝墓主体部

20号方形周溝墓

東区墓道と西区墓道の交わる地点よりやや北側に、これらの墓道にはさまれて、幅、深さともに小さい溝が検出された。全体を検出することはできず、また溝中から遺物の出土もみなかったが、一応方形周溝墓の一部と考えてよいと思われる。主体部の位置すべきところには11~



14号石棺が相接して築造されているため、これらによって破壊されたと考えられる。あるいは、 これらのうちの1基が主体部の可能性もある。

21号方形周溝墓

形態と規模 (第48図)

畑の段差によつて東半分を削平されている。残りの部分から全体を復厚すると、一辺が10m 前後の隅丸の方形か長方形であると考えられる。周溝の幅は50cm~ 1.3m で、深さは20~40cm と浅い。周溝の断面形はV 字型に近い。検出した部分には陸橋部は認められない。

内部主体

畑の段差の崖によってすでに大半を削平されている。また、遺存している部分にも攪乱がおよび、わずかに土壙の輪郭を確認したにとどまる。長軸の長さは 2.4m で、隅丸の長方形土壙である。

遺物出土状況

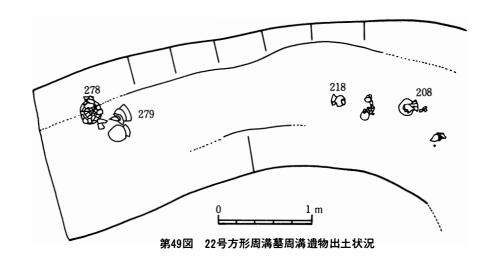
周溝内から壺・甕・小型丸底壺などの土師器を出土した。これらは周溝の西辺から出土し、 北辺からは出土をみなかった。

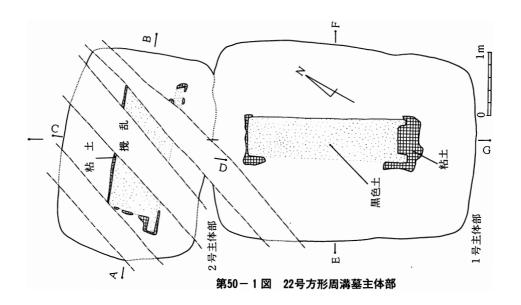
周溝内に堆積する土層は他と同様上下2層に区分され、上記の遭物は上層の黒色土から出土 したものである。

22号方形周溝墓

形態と規模(第49図)

西南角を削平されている。隅丸方形で南北外径が18.5m、東西が14.0mとやや長方形を呈する。溝巾は、ほぼ一定で 1.0m ~ 1.7m を測る。溝断面形は逆梯形で60cm~80cm。他の方形周溝墓に比し、陸橋部の巾が狭く、70cmを測る。

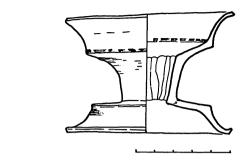




主体部 (第50図)

中央部に南北を長軸とする第1号主体部と、それに直交し、東北に長軸をもつ第2号主体部がある。ともに粘土まきの木棺墓である。

第1号主体部の土壙は南北4.20m、東西3.16mで、木棺は南北2.37m、東西0.65mを測る。 第2号主体部は、土壙東西3.26m、南北2.30m。木棺は、東西約2.0m、南北0.8mを測る。 ともに、土壙の府面迄削平されており、土壙深を測り得ない。



第50-2図 方形22号南周溝出土の土師器台

23号方形周溝墓(第48図)

東側は削平され、西側溝のみしか現存しない。1辺約5mを測る。溝断面形は逆梯形をなし、深さ約70cm。主体部等不明

24号方形周溝墓

第50

調査区のうちでは最も北側の傾斜面にあり、それに加えて耕作等により削平され、周溝の一部を検出できたにすぎない。約8 m にわたってL 字状に検出した周溝は幅40~60 cmで、浅い。主体部はすべて削平され消滅している。遺物は1点も出土しなかった

25·26号方形周溝墓(第 121図)

調査区の最北端の緩傾斜面に位置する。大型の円墳・丸尾7号墳の北側に直交する2条の周 溝と、2基の木棺を検出した。

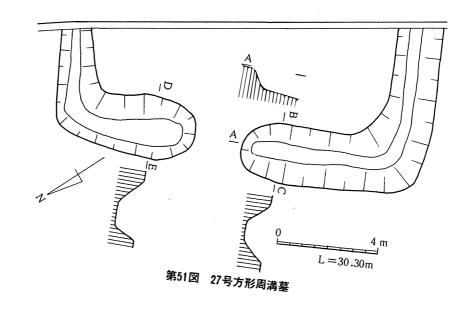
25号方形周溝墓の周溝は最大幅50cmで、浅いU字状を呈する。検出した部分は 4.2m で、ほぼ一直線状である。これからどの方向にのびるのかは不明である。

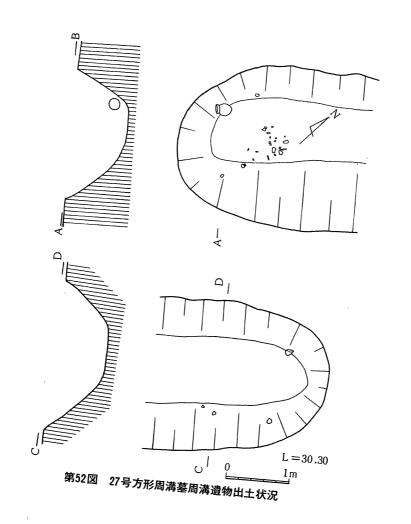
26号方形周溝墓の周溝も25号と同じく最大幅50cm程度で、検出した長さは 4.5m である。断面は浅いV 字形で、深さは20cmにも満たないものである。この周溝と主軸を平行して、その北側に木棺を検出した。これはその位置から26号方形周溝墓の主体部の可能性が強い。

25・26号とも遺物の出土はみられなかった。

27号方形周溝墓(第51·52図)

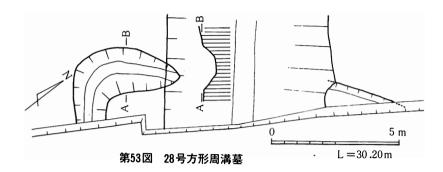
南側は、道路敷地外で未発掘。陸橋部と西をもつ。溝巾 1.2m ~ 2.5m。溝の断面形は、逆 梯形をなし、深さ約90cmを測る。陸橋部の北溝から遺物が出土した。





28号方形周溝墓(第53図)

北側の大部分は、道路敷地外で、わずかに西コーナーの一部を調査した。



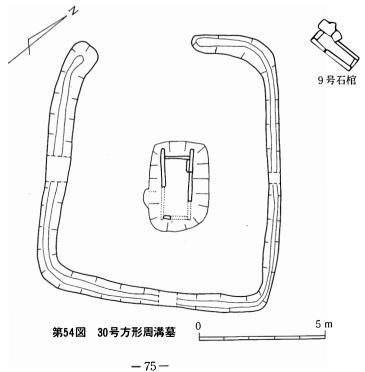
中央部を道路が切っている。溝巾は 1.3m ~ 1.8m。溝断面形は逆梯形で深さ約50cmを測る。

29・33号方形周溝墓

調査区の最北端の農道よりに位置する。農道等によってほとんど削平され、周溝の一部を検 出したにすぎない。

29号方形周溝墓の検出した周溝は長さ約8mにおよび、わずかにコーナーを有しL字状を呈 する。幅・深さともに小さく、断面形はU字状を呈する。この周溝から、壺・高坏・盆などの 土師器が出土したが、量はきわめて少ない。主体部はすでに消滅し、遺存しない。

33号方形周溝墓は、29号方形周溝墓の周溝を切って構築されている。検出した周溝の長さは 約9mで、L字状を呈する。周溝の形態は29号に類似するが、ひとまわり大きい。周溝内から の遺物の出土はみられなかった。主体部も削平され遺存なし。

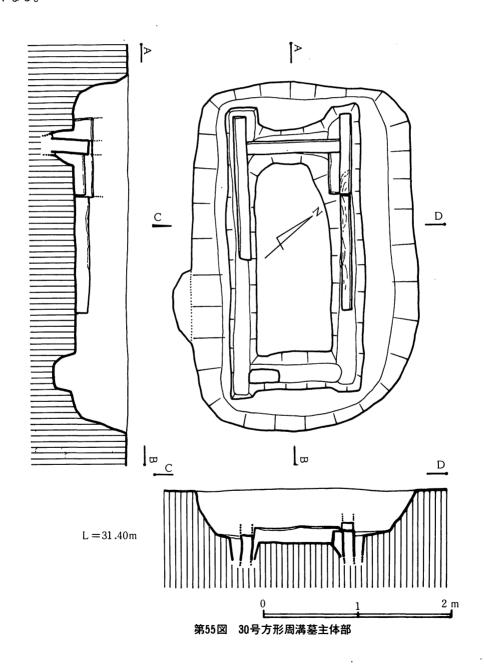


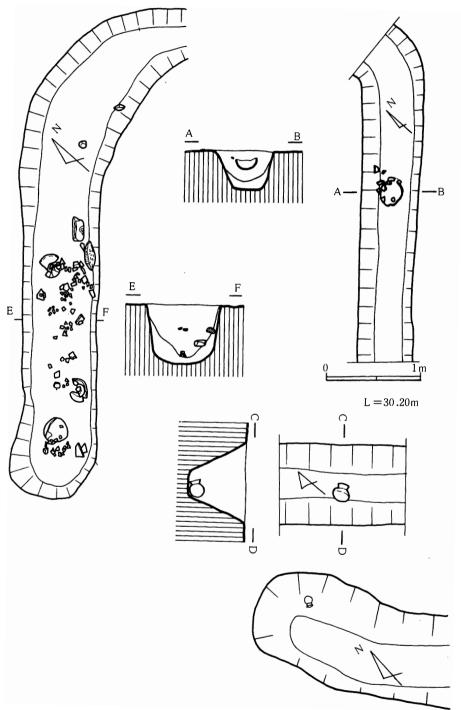
30号方形周溝墓

形態と規模 (第54図) (第55図・56図)

北両部に巾 4.0m の陸橋部をもつ。周溝は、長軸中心線の外径10.7m 、内径 9.3m 。短軸中心線の外径 9.4m 、内径 8.3m を測る。

各方面の溝は必ずしも並行関係にない。東南溝をはっきりはさみ、陸橋部にかけて、やや狭くなる。



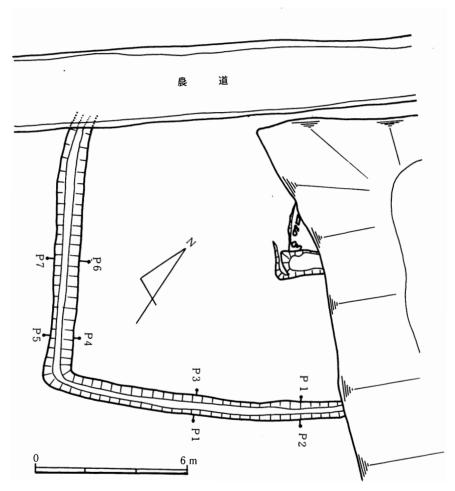


第56図 30号方形周溝墓周溝遺物出土状況

31号方形周溝墓

形態と規模 (第57図)

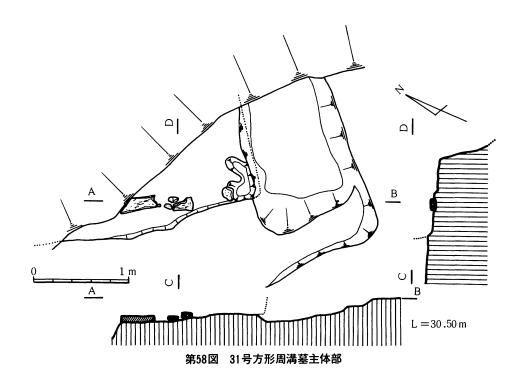
北方を農道によって、東方を土砂取りによって削平され、L字状の周溝と主体部の一部を残す すのみである。周溝は幅30~50cmで、深さも浅く、断面形は逆梯形を呈している。残存する西 辺は 4.7m、東辺は6 mを測る。



第57図 31号方形周溝墓

主体部 (第58図)

攪乱、削平がひどく、遺構の遺存は良くない。わずかに土拡のコーナーの一部と、石材片を 検出したにとどまる。石材は凝灰岩で赤色顔料を塗布したものもあり、石棺材であろう。凝灰 岩の石棺を内部主体とする方形周溝墓は、この31号の他30・35・36・39号の計5基をあげるこ とができる。



遺物出土状況 (第59図)

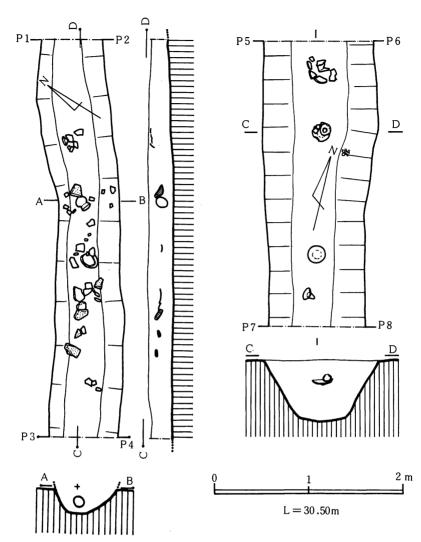
主体部の副葬品皆無であったが、東辺と南辺の周溝に遺物を検出した。

 P_1-P_2 と P_3-P_4 に囲まれた東辺北寄りの周溝には、8個体以上の土器が出土したが、このうち2 点図示した。99は壺、90は高坏である。

 $P_8 - P_6$ と $P_7 - P_8$ に囲まれた南辺東寄りの周溝に4個体分の土師器を検出し、このうち2点のみ図示した。Ω3は高 1 4、Ω3は 1 4で、他は高 1 4である。

特に北辺の周溝ないには、C-D縦断面図に示したとうり、土師器群に混じって多量の凝灰 岩が出土した。大小の凝灰岩片には面取りされた明らかに棺材の一部であろうと推定されるも のも検出した。本方形周溝墓の主体が凝灰岩を用いた石棺であることは先に述べたが、もし周 溝内の石棺材が主体部の一部であるとすれば、土器群が埋没する過程で主体部はすでに破壊さ れていたと考えねばならない。また主体部を構築する過程で生ずる、石材のチップ等とみるな ら、土器の供献は、すでに墳墓の構築過程で行なわれたとも考えられるのである。いずれにし ても、墳墓そのものの築造年代と推定する場合、先のいずれかの前提条件に立つかによって異 なってくる。

したがって、土師器そのものが示す相対年代と墳墓の築造時期との間には、かなりの時間的 巾を持たせる必要が生じてきた。



第59図 31号方形周溝墓周溝遺物出土状況

32号方形周溝墓

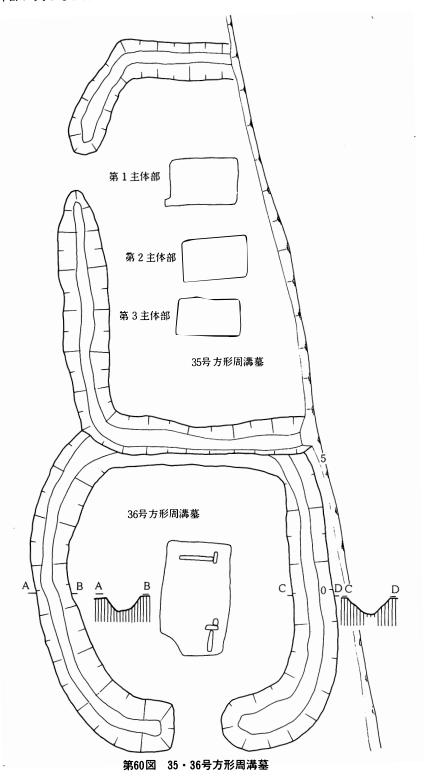
9 号方形周溝墓の方形台状部の中に、長さ 7.5m にわたって周溝の一部が検出された。幅も 40~50cmとせまく、浅いが、溝中より土師器が出土したことから周溝とみてよいと思われる。 全体の形態・規模、内部主体等については不明である。

34号方形周溝墓(第34図)

11号方形周溝墓をさらに二重にとりまくようにL字形に周溝が発見された。削平等のため、 全体の約者を橋出したにとどまる。

周溝の幅は60cm前後で、浅く、断面形はU字形に近い逆梯形を呈する。検出した部分の周溝延長は約19mで、主体部はない。周溝中からの遺物の出土もなかった。

11号方形周溝墓との位置関係から、二重の周溝を有するとの見解も成りたつ。また、11号方形 形周溝の主体部に大きな損傷がなく、34号方形周溝墓の主体部が検出できないところから、34



一号方形周溝墓が先に構築され、この主体部を破壊して11号方形周溝墓が構築されたとも考えられる。34号からの土器等、時期的な比較をする資料がないので断定できないが、二重の周溝を有する類例がないところから、後者の可能性が強いようである。

35号方形周溝墓

形態と規模(第60図)

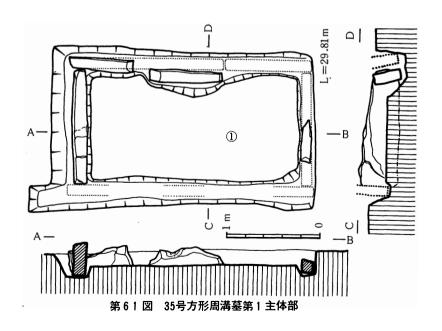
約号は調査区域外にあるが、周溝の約号・陸橋部・主体部3基を検出することができ、ほぼ 全体像を知ることができる。

南側を36号方形周溝墓の周溝で切られるため、全長が不明であるが、一辺が16.5m 前後と推定される。周溝の幅は 1.2~ 1.8m、深さ 1.2~ 1.5m、断面形は逆梯形を呈する。西側の中辺より北へ寄ったところに、幅 1.4m の陸橋部を有する。方形台状部のやや西に遍して、3 基の内部主体が並列している。主体部の長軸と陸橋部は直交する。

内部主体(第61図)

凝灰岩の組合せ式石棺が3基並列する。陸橋部から古墳に向って左から第1・2・3主体部と呼ぶ。第1主体部は詳細な調査を実施したが、第2・3主体部はその所在を確認したのみで未調査である。

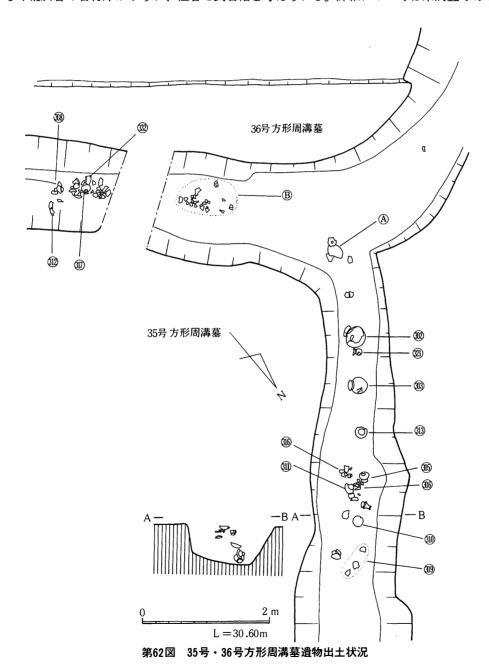
第1主体部は、凝灰岩の組合せ式石棺で、棺の大部分は削平あるいは抜き去られ、棺材の一部と、掘り方を残すのみである。遺存する棺材、掘り方から、石棺の内法は幅 1.2m、長さ2.25m前後と考えられる。床面に特別の施設はなく、石材の内面には赤色顔料の塗布がみられる。



土拡は遺存する面で床面までの深さ約15cmで、石材を組める周回の部分はそれからさらに7~20cm掘り込まれている。

第2主体部は、長径2.55m、短径1.55mのやや不整形の土拡が確認された。この覆土中に凝 灰岩の石材片があるところから、第1主体部と同様の組合せ式石棺であると考えられるが、詳 細については未調査である。

第3主体部は長径2.55m、短径 1.4mの不整形の長方形土拡が検出された。第2主体部と同じく凝灰岩の石材片がみられ、組合せ式石棺と考えられる。詳細については未調査である。

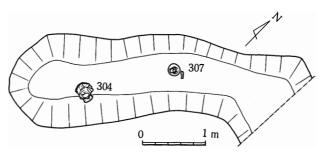


遺物出土状況 (第62・63図)

第2・3主体部は未調査であるが、第1主体部から遺物の出土はない。

周溝墓からは、陸橋の左側と、陸橋部と36号方形周溝墓と接する地点の間に土器を出土した。 土器は壺、高●・●等で、すべて土師器である。溝内の堆積土は上下2層に区分できる。上層 は黒色土で、下層は黄褐色土である。出土遺物(土器)は、下層の黄褐色土にも若干含まれる が、多くは上層の黒色土からの出土である。

63図



第63図 35号方形周溝墓周溝遺物出土状況

36号方形周溝墓

形態と規模 (第60図)

35号方形周溝墓と北側の一辺を共有するような形で検出された。35号との関係は、36号の周溝が35号を切っているところから、36号が後出のものである。

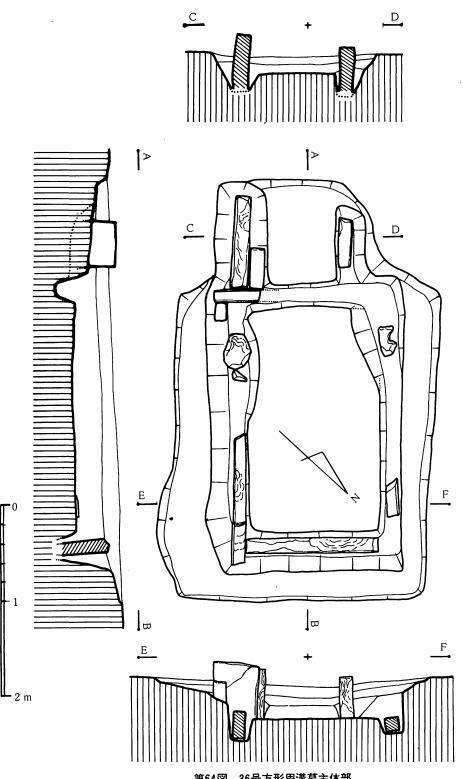
36号方形周溝墓の周溝の区画は不整形で、方形周溝墓とも、円墳ともみられるような形を呈している。北辺・東辺は比較的直線的であるが、南辺・西辺は曲線的なカーブを描いている。長軸線上の外径12.8m、内径9.3m、短軸線上の外径11.9m、内径8.7mと測る。周溝は幅1.3~2.2m、深さ50~50cmで、断面形は逆梯形を呈する。南辺のほぼ中央に、幅1.8mの陸橋部を有し、主体部の主軸線と陸橋部は直交する。

主体部 (第64図)

羽子板状の土拡に組み込まれた横口式石棺を主体部とする。

土拡の大きさは、長さ 4.4m、幅は横口のある入口部では 1.7m 前後、棺身の部分では 2.7 m 前後を計る。土拡の深さは床面まで40cm弱で石材を組み込む部分はさらに20~30cm掘り込まれている。棺材の大半は抜き去られ、遺存するものも上部を削平されている。遺存する棺材及

び掘り方からすると、石棺としては規模が大きい。南西の方向に横口部を設けているが、横口 部の石材は遺存せず、その形・大きさは不明である。横口部の外側の左右には切石を立てて、



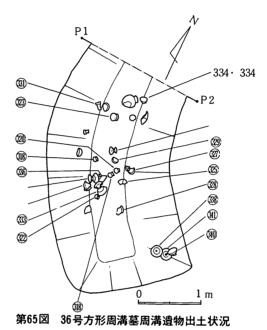
第64図 36号方形周溝墓主体部

通路(羨道)が形づくられている。

床面には特別の施設はなく、地山の黄褐色土である。床面から、遺存する棺材の最も高い部位の上端までは52cmを測る。棺蓋は破壊されつくし、その破片らしきものもみあたらない。通常、横口式石棺の棺蓋は家形を呈するものが多いので、本例の場合もその可能性が強い。横口部の延長上に陸橋部がくるように構築されている。

遺物出土状況 (第62・65図)

主体部からの遺物出土はなく、周溝内遺物は陸橋部西側のR-Rで囲まれた部分に集中的に出土した。



37号方形周溝墓 (第5図)

畑の段並の崖際にあり、また農道等によって大半を消失し、周溝の一部を残すにすぎない。 検出した長さは約 6.5m で、L 字状である。深さ・幅とも小さく、U 字形の断面形を呈する。 主体部は削平され遺存しない。周溝からの遺物の出土もなかった。

38号方形周溝墓(第45図)

大半は調査区域外にあり、周溝の一部を検出したにすぎない。

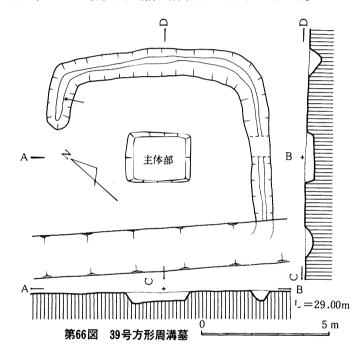
周溝は幅0.7~0.8mで、深さも0.5mに満たない。 検出した部分の長さは約6 m で、陸橋部・主体部等は調査区域外にあるため未確認である。北西側で18号方形周溝墓と切り合い、これによって38号が先行し、18号が後出することが知られる。

周溝からの遺物の出土はない。

39号方形周溝墓

形態と規模 (第66図)

攪乱・削平を受けていて約まを消失している。北西の一辺が途中で切れることから、ここが 陸橋部と考えられるが、これに対応する周溝は削平されてしまっている。



周溝の幅は $0.6\sim1.2$ m でコーナーの部分はいくぶん広くなっている。断面形はV字形に近い逆梯形で、深さは0.5m 前後を測る。

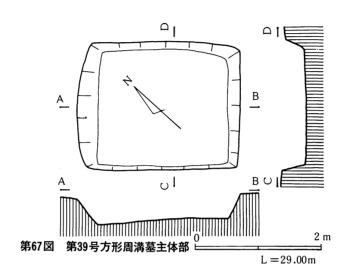
ほぼ中央に主体部を納める土壙が掘り込まれ、土壙(主体部)の長軸と陸橋部を有する周溝の一辺とは直交の関係にある。

内部主体(第67図)

方形台状部のほぼ中央に、長径 2.6m、短径 2 mの隅丸長方形の土壙が検出された。木口部を組み込む両端の穴がないこと、幅が広い土壙であること、覆土中から凝灰岩の風化した細片が出土したことなどから、凝灰岩の石棺を内部主体としていたと考えられる。方形周溝墓で、凝灰岩の石棺を内部主体とするものはさきにも述べたように、30・31・35・36・39号の5基をあげることができる。また、後述する円墳群の内部主体の多くは凝灰岩の石棺であり、その土

壙との共通性からも肯定できよう。

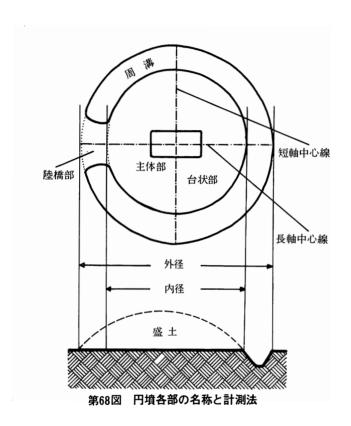
土壙の深さは40㎝前後であるが、棺材は抜き去られ、土壙の上部は削平されてしまっている。



遺物出土状況

主体部からの遺物の出土はない。周溝の陸橋部の左側から、馬歯が出土した。上下顎骨で、骨は遺存せず、歯のみである。下顎は遺存が良いが、上顎は細片化している。溝底から約20cm 浮いている。後世掘り込まれた土壙あるいは攪乱はなく、古墳期のものと考えてよい。丸山26号墳では、馬歯と馬具が同一地点から出土しているが、ここでは馬歯だけである。出土地点の周溝は幅90cm、深さ60cmを測り、必ずしも大きなものではない。上部の削平を考慮しても、馬一頭を納めるには小さすぎる。他の四肢骨が皆無であることとも考えあわせて、首から上だけの埋納が考えられる。馬歯の詳細については付論 3『塚原古墳群出土の馬歯』 を参照されたい。

第3節 円墳・前方後円墳の調査



円墳各部の名称と計測法

円墳の調査内容を記述するに際しては、方形周溝墓と同じく、第68図に示したとうり、各部の名称と計測部位の統一を行った。まず、周溝に区画された部分を**台状部**(円形台状部)、円溝の一部を掘り残した部分を**陸橋部**とした。計測部位。主体部の**長軸中心線**と、これに直行する**短軸中心線**とを、それぞれ内径・外径として表わした。

丸山3号墳

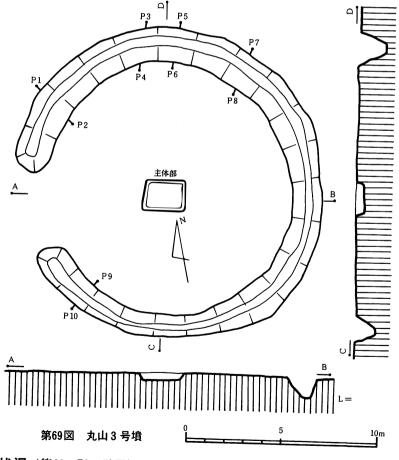
形態と規模 (第68図)

ほぼ正円形の周溝で区画され、西側に幅約4mの陸橋部を有する。主体部はほぼ中央に位置するが、削平・攪乱がはげしく、土壙の下部を残すのみにすぎない。

周溝は幅 $1.2 \sim 2$ m を測り、深さ $1.1 \sim 1.5$ m で断面形は逆梯形を呈する。墳丘の上部は削平され、本来の高さ・形は不明である。陸橋部と主体部の長軸は直交の関係にある。

内部主体

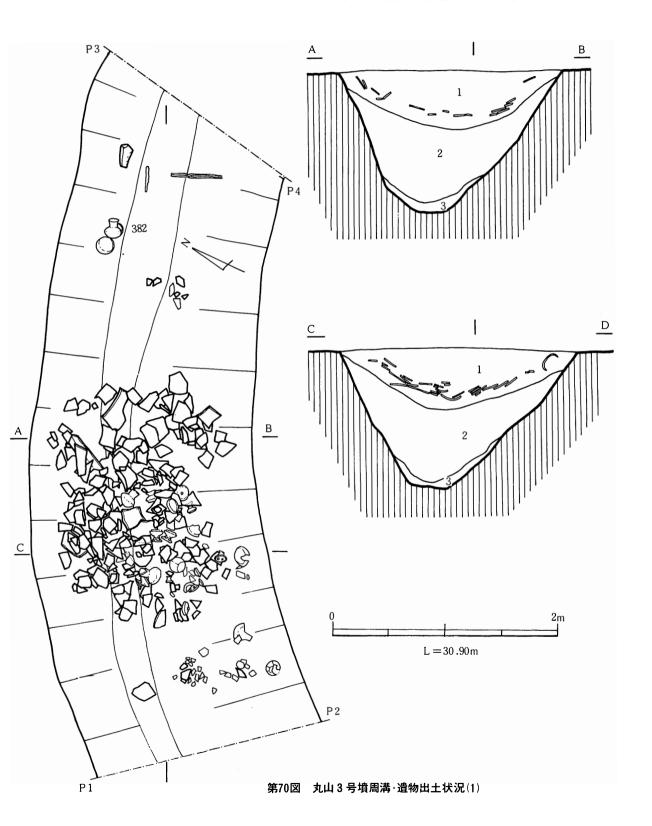
周溝で区画された部分のほぼ中央に位置する。上部のほとんどを削平され、土壙の下部を残しているにすぎない。土壙は長径 2.3m、短径 1.6mの長方形で、残存する深さは約35cmである。石材等の遺存はないが、他の円墳の例からみて、凝灰岩の組合せ式石棺の可能性が強い。

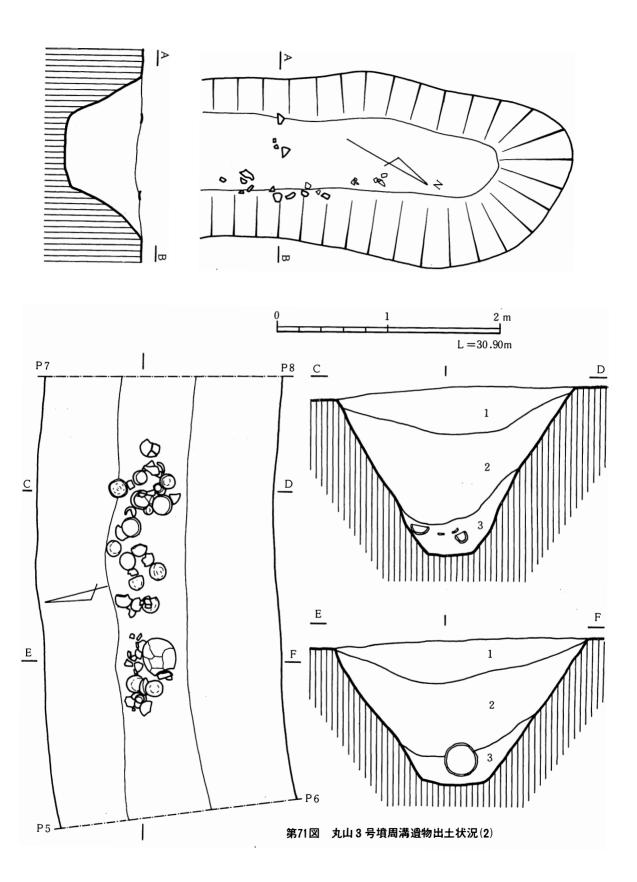


遺物出土状況 (第69·70·71図)

主体部は破壊されていたが、攪乱土中より碧玉製管玉1 (図版 220の1) 、 ガラス玉 (同

1)、金環1(図版 213・214の12)、鉄鏃2(同1~2)、刀子(同7~8)を検出した。





周溝内からは大量の遺物が出土した。 P_1-P_2 と P_3-P_4 に囲まれた陸橋部北側では、多量の須恵器がある。土器の出土状態を細かく観察すると、須恵器大甕の破片が全面に散乱し、これらの間に、高坏($410\sim413$ 、 $416\sim423$)、坏(414)、壺(425)、器台(426)などが混在している。これらは、完形品も少なくないが、半数以上は破砕されている。しかも土圧による破砕を示すような状態ではなく、約1 m はなれた地点から同一個体の破片が出土するという具合に、周溝内に納められる時点で、意識的に破砕され廃棄されたものと推定される。この一群から約1 m 離れて土師器・須恵器、さらに鉄鉗・刀子が出土している。この地点の周溝内堆積上は3 層からなっている。上層より1 は黒色土層、2 は黄褐色粘質土層で、一度掘削され再堆積したものである。遺物はすべて1の下部から出土した。

次に P_8-P_6 と P_7-P_8 に囲まれた北周溝でも多量の土器が出土した。土器は須恵坏蓋1点の他はすべて土師器である。土師器は359の襲形土器と40個体の盌($362\sim374$ 、 $377\sim379$ 、381、 $383\sim385$ 、 $387\sim388$ 、 $390\sim392$ 、 $394\sim396$ 、 $398\sim409$)からなり、これらは図版36に示したように、周溝の底部に密着した状態で出土した。このことは前記2地点と異なり、あたかも供献のために周溝に安置した状態であり、土器の組合せも異っている。ちなみにこの地点の堆積土は 3 層からなり、土層の特徴も先の2 点と同様である。しかし遺物はすべて3 の黄褐色粘質土層に限られている。

本例は、同一古墳の周溝で、土器の出土のしかたに大きな差異がある好例である。 $P_5-P_6\sim P_7-P_8$ の間の土器はその出土層位から、かなり早い時期一これが埋葬との関係は、主体部の遺物との対比ができないため不可能であるが一に意画的に周溝内に配置され、それから40cm以上の堆積を経たのち $P_1-P_2\sim P_3-P_4$ の間に土器が廃遺されている。しかし、その両地点の土器の対比をしてみると、ほぼ同一期に属する須恵器を出土しており、大きな時間差はない。

丸山 4 号墳

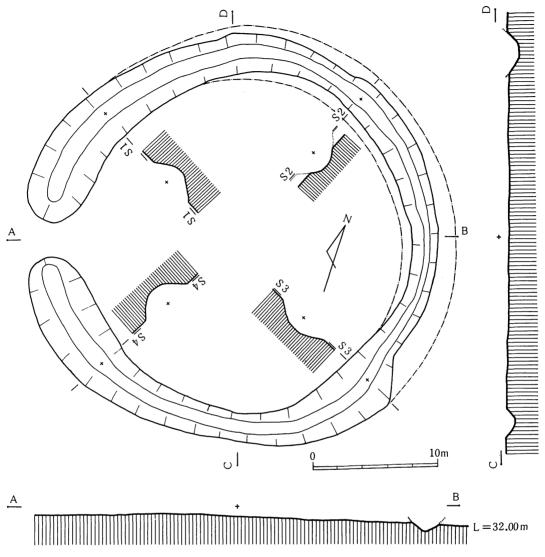
形態と規墓(第72図)

近年まで墳丘の一部が残り、丸山4号墳の名があったが、現在では正確な位置を知ることが 出来ない。記録に記された地点と符号した本古墳を改めて丸山4号墳と呼ぶことにした。

南側最大の円墳で、北西部は大きく削平されて周溝巾を減じているが、現況で東西34.5m南北31.9mで、やや楕円形の周溝がめぐる。西側に陸橋部を1ケ所設け、陸橋部の巾は最小で2.6mを計る。周溝の巾・深さは部位により異なるが、最も遺存状態のよい陸橋部付近で4.9~5mで、深さは1.15~1.4mで浅いU字状の断面形を呈する。

主体部

周溝で区画された墳丘部分は、表土層の下部は直接地山面で、主体部や主体部土壙等は検出できなかった。したがって主体部の大部分は封土中に位置していたものと推定され、このことは、後に記す丸山 6 号墳の場合と同様である。



第72図 丸山 4 号墳

遺物出土状況

遺物は陸橋部北側のP₁ーP₂に囲まれた部分に集中して出土した。周溝内堆積土層は3層からなり、上部から、1の黒色土層、2の暗褐色土層、3は黄褐色粘質土層である。遺物は1の下部から2に限って出土した。遺物は土師器では甕452、壺426、高坏427~437、439~443の16点を図示したが、他に復原が出来ないほどの細片が多数ある。坏438も同様である。須恵器は壺468~444~445、台付壺448、有蓋台付壺449、坏446、447、高坏453~455、464~467、坏蓋456~459、坏身460~463、横瓶469が出土しているが、土師器と同様図示できない細片等が多量に出土した。土器に混って鉄鏃(図版213・214の3)が出土した。これらの土器の中には、同一土器の破片が、1層下部と2層中に出土する例が数多くあり、土器の年代を層位的に区分

することはほとんど不可能である。このことは、おそらく、かなり長期間にわたって墳丘側より自然に流れ込み堆積したものと考えられる。出土遺物は陸橋部の北側部にのみ出土し、他の地点ではほとんど検出することは出来なかった。

丸山6号墳

形態と規模 (第73図)

丸山3・4号とともに、古くは墳丘が残っていたもので、推定地点とほぼ符合することから、 従来の名称を踏襲して丸山6号墳とした。

調査区の北側では、くぬぎ塚古墳とならぶ最大級の円墳である。古墳の西側は農道が通り、地山面より1 m前後掘削している。周溝はほぼ全体を確認し、全体の音にあたる部分を完堀した。これによると規模は、南北の外径33.0m、東西の外径34.5mを測る。北周溝A-B断面では、地山面での巾 4.2m、深さ 1.6m。西周溝C-Dでは巾 4.2m、深さ 1.5m。南周溝E-Fでは巾 4.2m、深さ 1.6mを計り、断面形はいずれも溝の外壁が一方に比べて急傾斜となる。また陸橋部に近いG-Hでは巾 3.2m、深さ2.15mと、先の3 地点に比べ、巾に対して深くV字状に掘削されている。なお、周溝と周溝の周辺には、計14個の方形および隅丸方形の墓壙が検出された。これについては第6章で述べる。

主体部

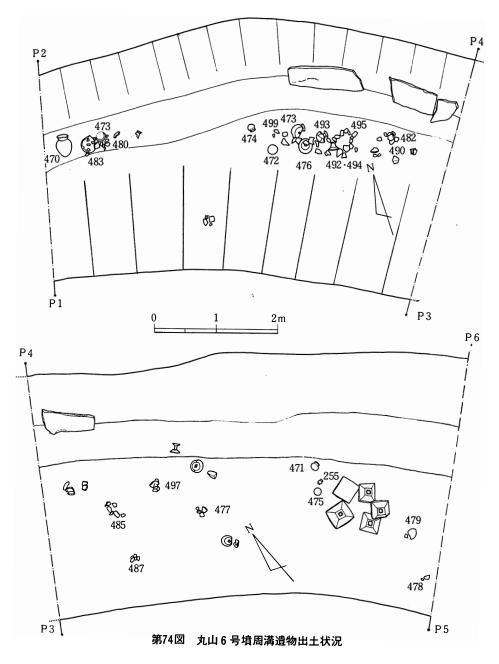
主体部は検出できず、大半は封土中に築造されたものと推定される。

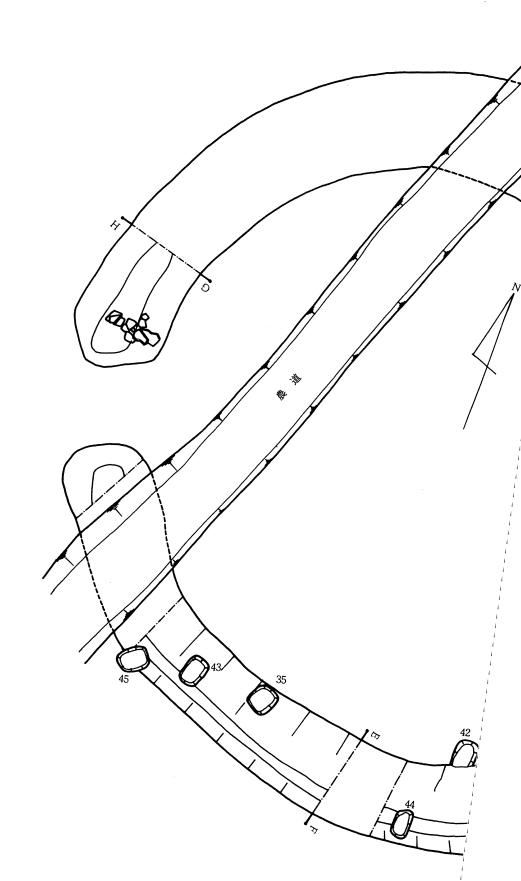
遺物出土状況 (第74図)

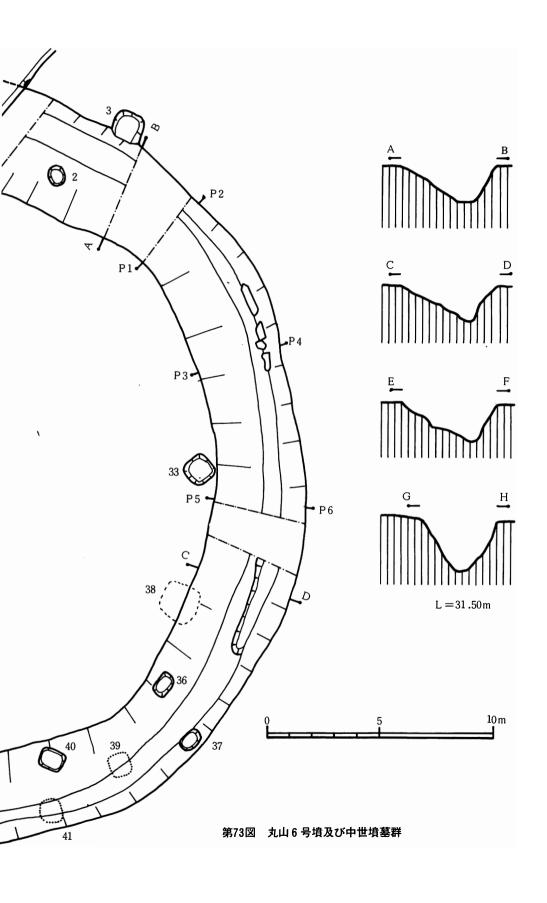
周溝内の出土遺物は、P₁-P₂とP₅-P₆の間の北東部周溝に集中的に出土した。周溝内の堆積 土は4層からなり、上部より1は黒色土、2は暗褐色土層、3は黄褐色砂質土層、4は黄褐色 あるいは赤味を帯びた粘質土層で、周溝掘削直後の再堆積土層である。

P₁-P₂とP₃-P₄に囲まれた北周溝では、16個以上の土器が出土した。壺 470は底より25cm上部、小型丸底壺473と甕483および高坏480は底部より25~30cm上部の3層黄褐色砂質土からの出土である。以上4個体は1グループを形成している。これらの土器より東へ約2m離れて1グループが出土した。472、474は小型丸底壺、482は壺、他の476、481、482、490、492、494~496、499は高坏で、やはり3層の下部に出土した、土師器群とともに、これらの北側に、安山岩の板石3枚を検出した。これらは土器群より下部の4層に位置し、周溝外壁に密着して出土したもので、周溝掘削直後に落ち込んだものか、あるいは意図的に投げ込まれたものであろう。なお陸橋部北側でも安山岩の大小板石が検出されたが、すべて2層下部より3層上面にみられ、両者の埋没時期に時間的隔たりがあることを示している。

先の地点に連続するR₃ーR₄とR₅ーR₆に囲まれた周溝には、計13個以上の土器が散乱した状態で出土した。すべて3層上部より下部にかけて出土した。471・475は小型丸底壺、471・475・







477~479・485・487・497は高坏で、いずれも墳丘側より流れこんだものと考えられる。1層の中ほどに五輪塔の火輪4、地輪1が出土したが、これらは1層下部より掘り込んだ墓壙(中世墳墓)の直上に置かれていたもので現位置をとどめている。

丸山7号墳

形態と規模(第75図)

台地北側では、くぬぎ塚古墳・丸山 6 号墳と並ぶ大形の円墳であり、今回の調査で新たに発見した古墳である。西側は道路敷地外で未調査である。しかもこの部分は農用道路によって大きく削り取られている。

現況における規模は南北の外径約27m、周溝の巾 $2.4m\sim3.7m$ で深さ $0.9\sim1.5m$ を測り、南へ移行するにつれ巾深さとも増す。調査部分には陸橋部を見い出せなかった。

主体部

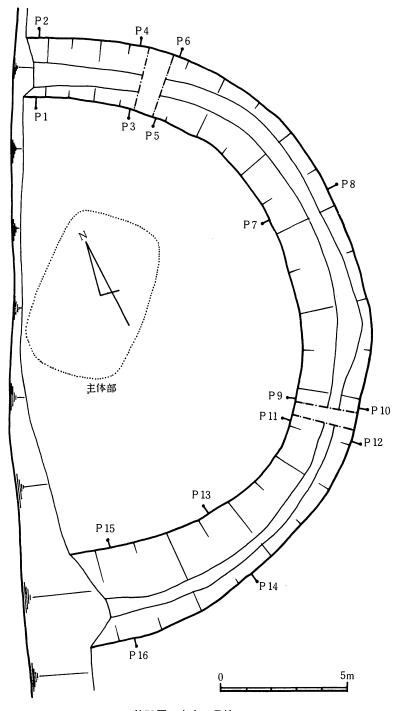
主体部は上層からの攪乱が激しく、わずかに土拡の範囲を推定するのみである。これによると長径約6.5m、短径10mを測り、長軸の中心線の方位はN−47⁻Wである。土拡内および周辺には凝灰岩の破片がちらばっていたが、主体部の構造は明らかにできなかった。

周溝の層序と遺物出土状況

北側の周溝ではA-B断面(第76図)で示したとうり3層に分けられる。上層より1は黒色土層、2は黄褐色土層、3は黄褐色粘質土で周溝掘削後の再堆積層である。P-PとP3Pに囲まれた部分では、計9個体以上の土師器が出土した。501・504・505は甕形土器、517は壺、507は小型丸底壺、他の512・529・552・560は高坏である。いずれも底面より10~30cm上部の2層黄褐色土層出土である。

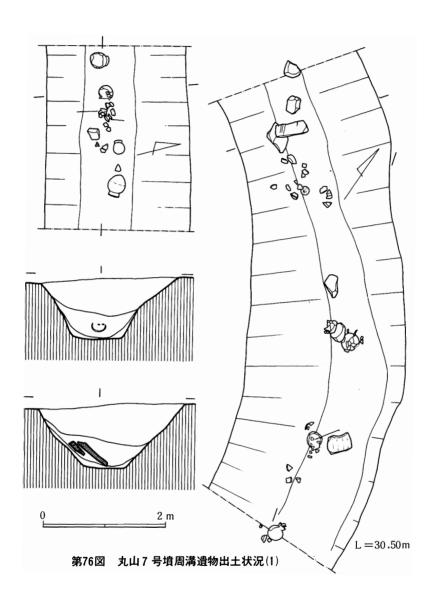
北東部の周溝ではC-D断面(第76図)で示したという3層からなる。各層の特色はA-Dと同様である。P₅-P₆とP₇-P₈に囲まれた部分では3グループの土師器が出土した。北側のグループでは538・539・546・549の高坏4個体からなる。いずれも細かく砕け散乱している。土器とともに安山岩の板石が出土した。土器板石とともに2層の黄褐色土の出土で墳丘側より流れこんだものである。中間のグループでは506の底部穿孔壺形土器と壺形壺器の胴部破片が出土した。506は最下層3の黄褐色粘土層に位置し、この上に安山岩が密着状態でのっていた。南側では4個分の土師器が出土した。522は壺、535は高坏で2層出土。522の直下の2層下部に526・527が出土した。526の小型壺は527盌にの納められていた。

東側の周溝 (第77図) でも同じく3層からなり、上部より1~3層とした。P₇-P₈とP₉-P₉。に囲まれた部分では南側に多量の土師器が出土した。P₇-P₈の直下に3個体の土器が出土した。520は甕、520は小型丸底壺、545は高坏で、すべて2層からの出土である。南側では17個体以上の土師器が出土した。502・503・516・518は壺形土器、513は小型丸底壺、他の523・525・531・533・535・

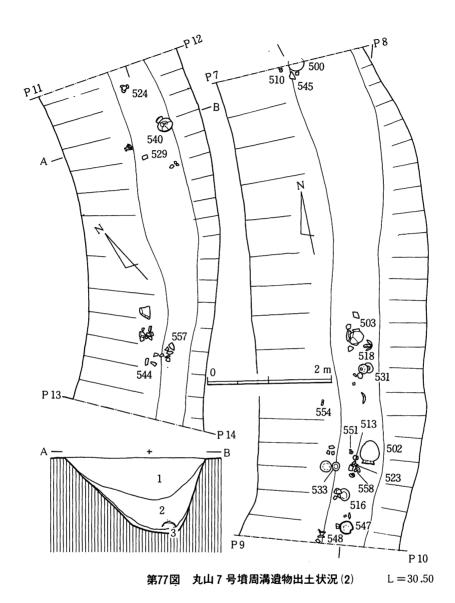


第75図 丸山7号墳

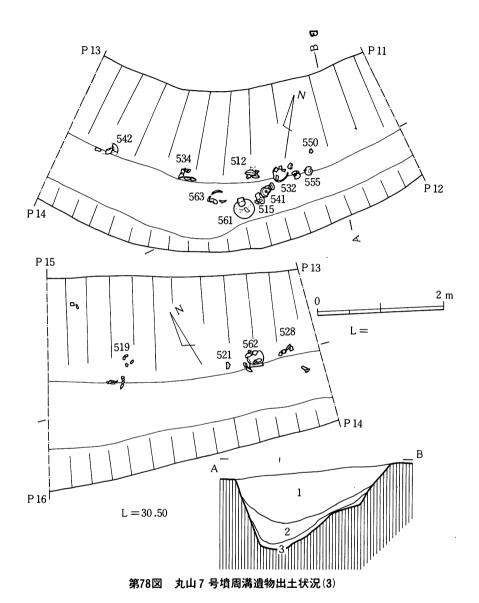
 $547 \cdot 548 \cdot 551 \cdot 558$ は高坏である。これらのうち548は溝底より60cm上部の1 層黒色土層出土で、他はすべて溝底より $10 \sim 15$ cmの2 層下部に集中して出土した。 $P_{11} = P_{12} \succeq P_{13} = P_{14}$ に囲まれた部分で



は少量ではあるが2グループの土師器が出土した。A-B断面(第77図)で示したとうり、3 層からなっている。上部より1の黒色土層は最大で65cmで最も厚く、2の黄褐色は45cm、3の再堆積層は5~10cmを測った。524・529・540はいずれも高坏で、524・540は溝底から46~50cmの2 層上部から出土し、529は溝底から10cm上部の2層下部からの出土である。544・557は高坏で、2 層下部の出土である。



南東から南側にかけての部分(第78図)にも多量の土師器が出土した。A-B断面に示したとうり、他の地点と同様 3 層からなっている。561の壺形土器は最下層出土で一部は溝底部に密着していた。534・541・550・555の高坏512の小型丸底壺は溝底から15~18cmの 2 層中の出土である。532の甕および563の盌は 1 層下部の出土である。P₁₃-P₁₄とP₁₅-P₁₆に囲まれた南側周溝では周溝の巾深とも増している。遺物は壺519・521・562と高坏528ほか計 5 個体分で、すべて 2 層下部の出土

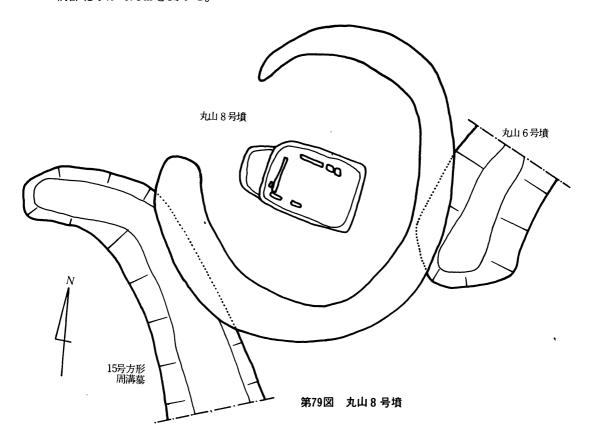


以上丸山7号墳周溝における遺物の出土状況をまとめると、周溝内の特定の地点に遺物が集中するという現象は見られない。また出土層も種々雑多である。しかしこれらのうち最下層出土の506・561・562の3点については、本古墳の年代決定に重要な手がかりを与えるものである。なお、出土した土師器の器形ごとの割合は、甕6=9.5%、大型壺8(うち底部穿孔土器4)=12.7%、壺6=9.5%、小型丸底壺8(うち底部穿孔土器2)=12.7%、高坏33=52.4%、盌2=3.2%。壺形土器の占める割合は、全体の34.9%であった。

丸山8号墳

形態と規模(第79図)

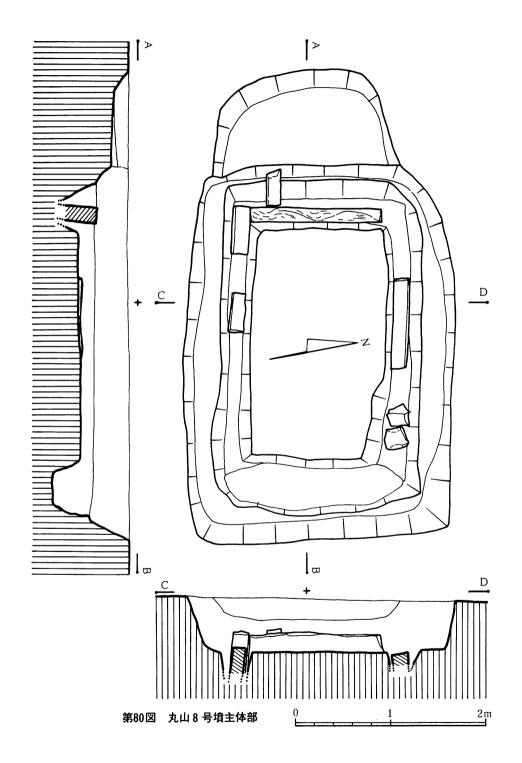
西側に陸橋を設けた小形の円墳である。周溝は完掘せず詳細は明らかではないが、推定外径は南北12.8m、東西11m測る。周溝巾は場所に一定しないが、南側では広く最大 1.9mで、陸橋部北では 0.5mを測った。



周溝は南西部で15号方形周溝墓を、東側では丸山6号墳をそれぞれ切断している。なお調査 した周溝部分での出土遺物は皆無であった。

主体部 (第80図)

主体部は上層からの攪乱されていたが、土壙と凝灰岩の棺材の一部は旧状を保っていた。土壌は確認できた地山上面での規模は、南北2.4m、東西3.9mの長方形で、西側陸橋部方向に1m、深さ0.17cmの張り出しをもつ。床面までの深さは 0.5mである。床面には棺材を立てるための掘り込みがめぐり、東辺を除く三辺に棺材が残っていた。これによると石棺の推定内法は長辺約 2.6m、短辺1.55cmの長方形プランを呈する。土壙の床面はほぼ水平面を保ち特別の置設はみられない。したがって、土壙床面を直接死床としたものと思われる。西側短側石と土壙外壁との間に棺材が残る。以上のような棺材の残存状態から、おそらく陸橋部に開口する横



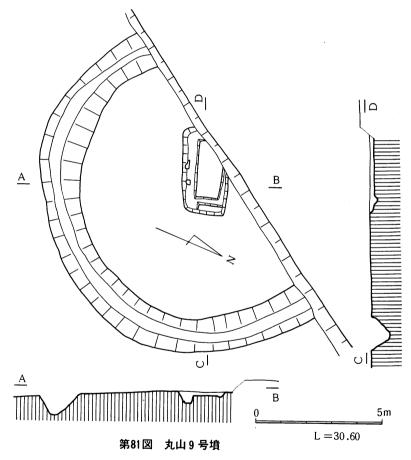
口式石棺であったものと思われる。本例と類似するものとして、丸山34号墳主体部等をあげる ことができる。

なお主体部からの出土遺物は皆無であった。

丸山9号墳

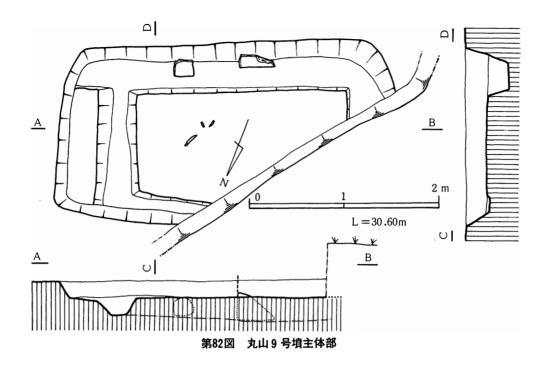
形態と規模(第81号)

北側の溝は、道路敷地外で末調査。陸橋部も末調査の部分にあるらしい。直径13.3m、溝巾はほぼ一定で 1.5mを測る。溝断面形はV字形をなし、外側部分の斜傾が急である。深さ90cmを測る。



主体部 (第82図)

西北隅は、道路敷地外で未調査。土壙は東西推定3.6 m、南北1.9 m、深さ18cm、現耕作面からの深さは55cmを測る。石棺の基礎を裾えるため床面を約15cm掘り下げ溝を回らす。凝灰岩の棺材が2個残っている。石棺の規模は推定で約長さ2.2 m、巾1.1 m位のものであったらしい。

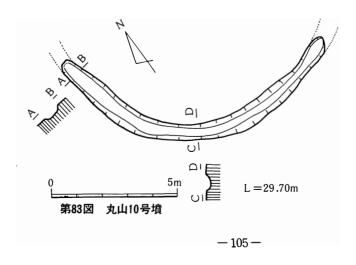


遺物出土状況(第82図)

床面面より、刀子1本・鉄錐2本が出土した。原位置を保っていないものを観察される。 なお周溝内からの出土遺物は皆無である。

丸山10号墳 (第83図)

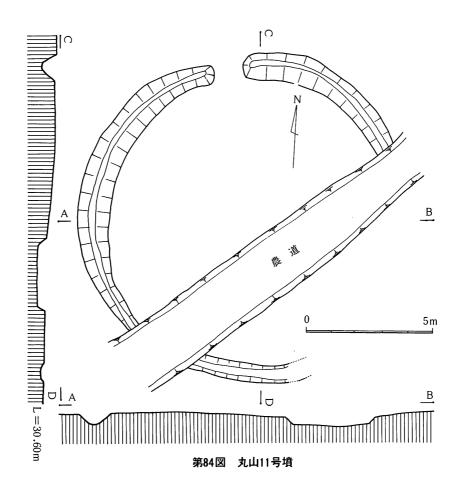
南側台地の谷部傾斜面に位置し、北側は大きく削平され、周溝の南側の約3分の1程度が残っている。主体部、陸橋部も失われている。溝の規模はA-B断面で巾70cm、深さ20cm、C-D断面では巾60cm、深さ16cmを測った。なお、外径は13m前後の規模を有していたものと思われる。遺物の出土はなかった。



丸山11号墳

形態と規模 (第84図)

陸橋部を北側にもつ小型の円墳である。中央部を農道で切断され、南西部の周溝は削平されているが、ほぼ円形にめぐるものと思われる。現況での外径は南北で約13mを測った。周溝は最も遺存状態のよい北側C-D断面上で、巾1.05m深さ50cmの断面形V字状を呈する。また西側のA-B断面上では巾1.30m、深さ42cmで、断面形はやや深いV字状を呈している。



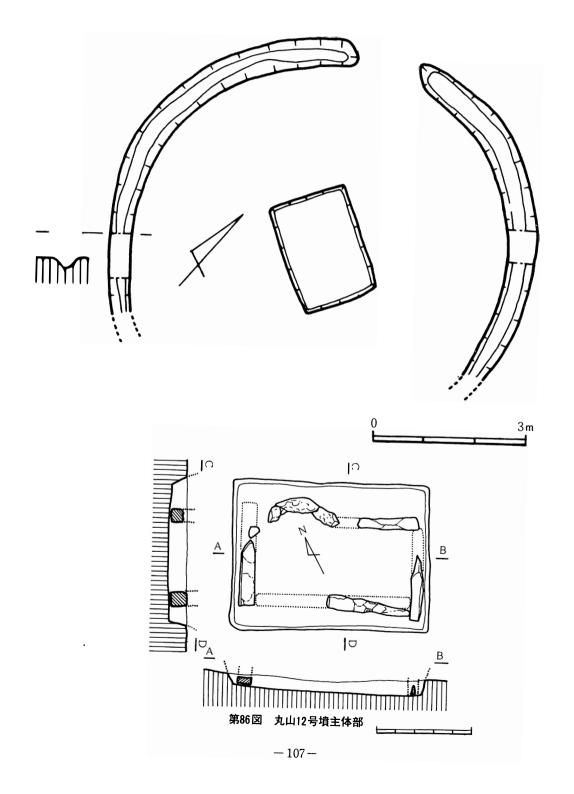
遺物出土状況

周溝内の堆積土は2層からなり、上部は暗褐色土層、下部は黄褐色粘質土層である。遺物は 西側周溝より4個体分の土師器が出土した。これらのうち、566・567・568は上部の暗褐色土層よ り、569の壺は溝底に近い暗褐色土層下部より出土した。

丸山12号墳

形態と規模 (第85図)

北側に陸橋部をもつ。北側の周溝は削平されて消滅。周溝巾は60cm~40cm、深さ20cm。東西経8.5 m を測る。



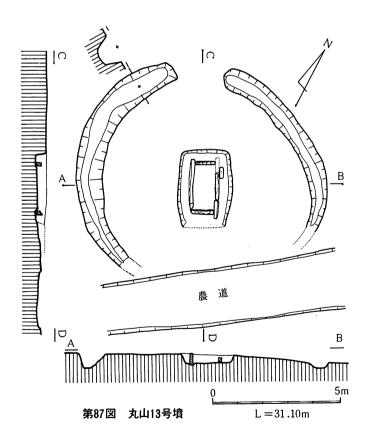
主体部 (第86図)

端正な正方形の土壙に、凝灰岩の石棺を主体とする。土壙は1.50m×2.10mで上端が削平されている。残っている凝灰岩の配列よりみると、内法 0.7m×1.65mの石棺が推定される。石棺の基礎部を個定させるための特別の造作はみられない。なお主体部の主軸方位と陸橋部の方向とは一致しない。

遺物出土状況 (第85図·図版185·186)

主体部からの出土遺物は皆無であった。

周溝内からは計5個体の土師器が出土した。569・570の高坏と571の坏は溝底より15~20cm上部の黒色土中に出土した。572の小型丸底壺は陸橋部の北側、573の壺形土器は北側周溝内に土圧で押しつぶされた状態である。



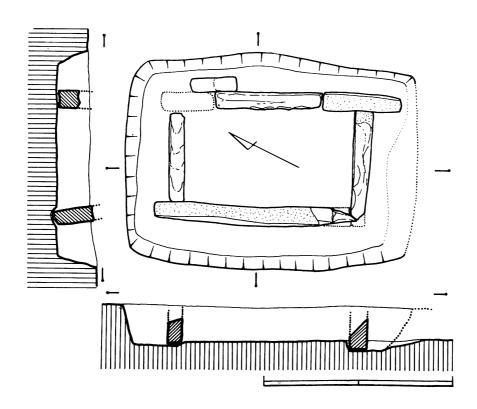
丸山13号墳

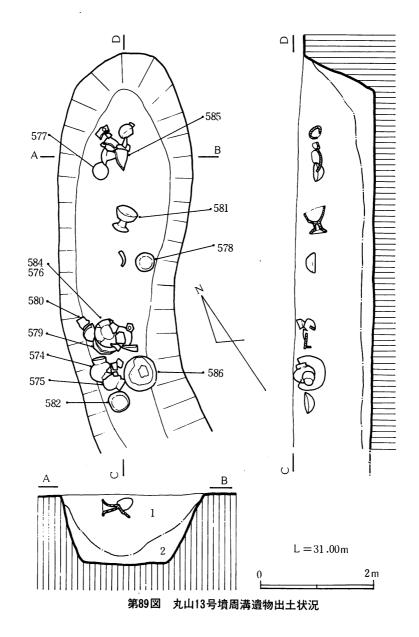
形態と規模(第87号)

北西側に陸橋部をもつ。南側は農道により削平されている。短軸中心経上で外径10.0mを測る。周溝は、西側で1.1m、東側で0.8m、断面形はU字形、逆梯形と場所により違いがあり、深さ20cm~60cmを測る。

主体部 (第88図)

四辺形の土壙に、凝灰岩の石棺を配置する。土壙の南辺は耕作により攪乱されている。長辺約3.0m、短辺2.0mで長辺がややふくらむ。中央に凝灰岩の加工板石を組み合せて石棺をつくる。石棺の上半を欠失しているが、基部の残材より配列の状態をうかがうことができる。西側壁は、一石を用い、束は北側の一石を欠失するが、三石を並べ、さらに側面に一石を配置している。石棺の内法、長径1.8m、短径1.0mを測る。





遺物出土状況(第89図)

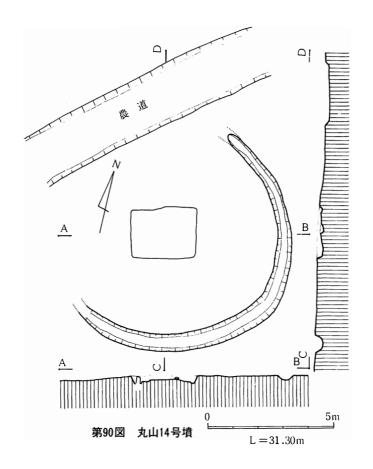
周溝内の堆積土は上下2層からなり、層の境は不明瞭である。上層から1は暗褐色、下部で黄褐色、2は黄褐色粘質層である。遺物はすべて1層暗褐色土より、いくつかのまとまりをもって出土した。遺物は土師器と少量の須恵器破片が出土した。586は甕、小型壺は574・575と他1点、高坏は580・581・583・584・585、坏は576・577・578・579・582の5点であった。さらに土師器群に混って須恵器の甕型土器の破片4点が出土した。

以上の土器の出土状況は、西群の584の高环576の环の一部が、約 1.7m離れた東群の中から出土するなど、無造作に廃棄された状態を示している。

丸山14号墳

形態と規模 (第90図)

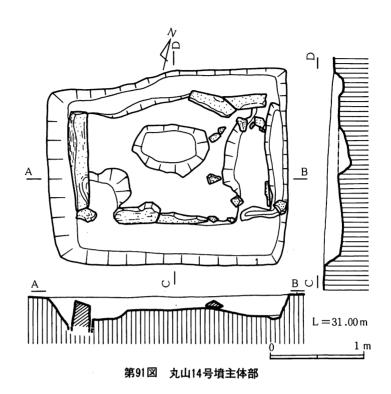
北および西側の周溝は削平されて欠失している。残存部の周溝も底部をわずかに残すだけで、狭く深くなっている。現況における推定外径は 9.4mで、周溝幅は最大で0.8m、深さ0.3mを測った。溝の断面は一般的にU字状を呈するが、各部の細部の形状は異なる。



主体部(第91図)

周溝で区画された中央部に主体部1基を検出した。主体部は基底部の一部を残して、上層より攪乱を受けていた。土壙の確認できた地山面での規模は東西2.6m、南北2.0m、深さ0.35mを測る。土壙に接して棺材を立てるための溝がめぐる。棺材は凝灰岩で、西側壁のみ原位置をとどめ、他の三方は床面とともに攪乱され、棺材が散乱していた。以上から石棺の推定内法は東西約 1.9m、南北約1 mを測ることができる。おそらく簡単な構造の箱式石棺であったと推定される。

なお、主体部、周溝とも出土遺物は皆無であった。



丸山15号墳(第92図)

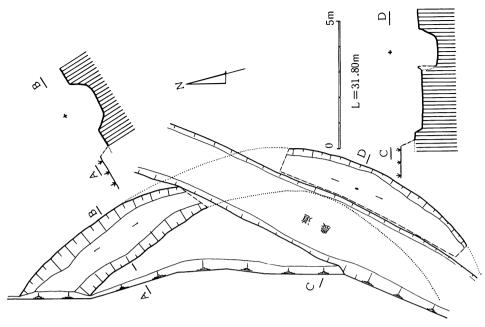
西側の周溝の一部を検出し、主体部を含む大半は道路敷地外にあり未調査。また周溝は南西部から北東部にかけて農道が通り、調査地点は、北側と南側の一部分に限られた。周溝から推定して、直径22m前後の大型円墳であろう。周溝の規模は、北側ではA-B断面で示したとうり、巾2.1m、深さ0.62mで、断面形は逆梯形をなし溝底は平担で巾広い。C-D断面では西側で農道路面と重なっているが、幅は推定で約1.6、深さ0.70mを計り、やはり逆梯形をなしている。

なお周溝内からの出土遺物は皆無である。

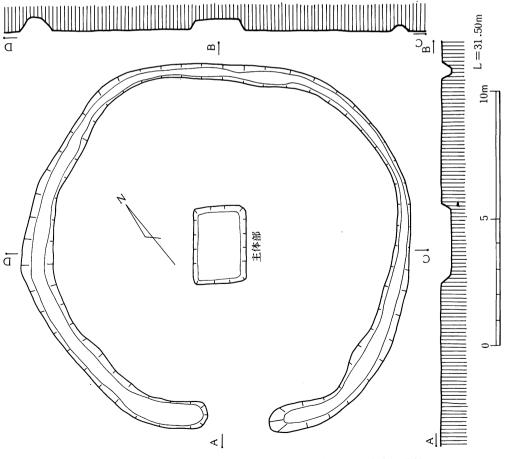
丸山16号墳

形態と規模(第93図)

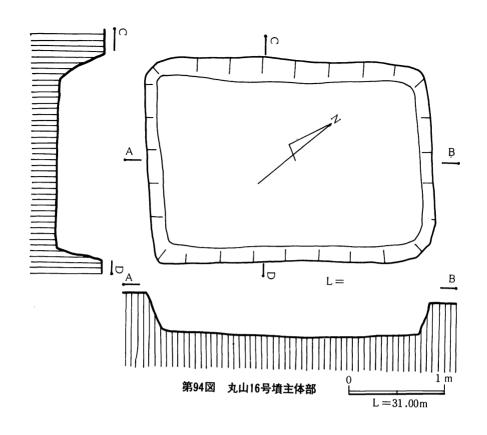
西南部に陸橋をもつ。周溝の東側一部分は直線となり、全体的に正円をなざない。長軸中心線の外径約14.5m、短軸中心線15.5mを測る。溝底の高低は一定しない。断面形は逆梯形をなす。

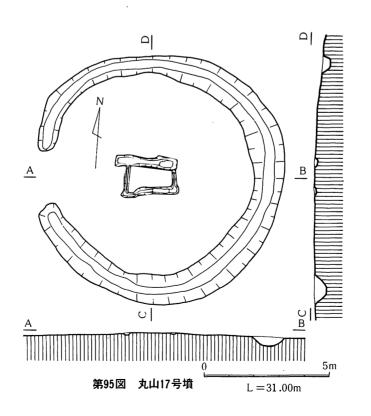


第92図 丸山15号墳



第93図 丸山16号墳





主体部 (第94図)

四辺形の土壙のみ残る。長辺7.5m、短辺4.7mを測る。壙内には大型の石材は残っていなかったが、主体部を検出中、その底面には凝灰岩の少破片が多量にみられ、主体部は石棺であったと思われる。

丸山17号墳

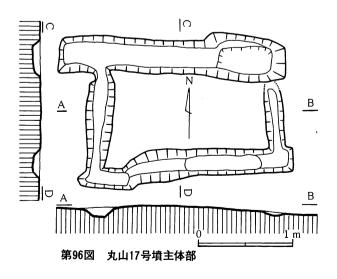
形態と規模(第95図)

周溝はほぼ円形にめぐり、周溝外形は東西10.0m、南北 9.8mで、陸橋部は西側に1ヶ所設け、陸橋部幅は 2.1mを測った。周溝は上層から削平されていて、溝幅は部位によって一定しない。現況における規模は、A-B断面の東側周溝で、幅1.15m、深さ0.35mで浅いU字状を呈する。C-D断面の南側周溝では、幅1.15m、深さ0.46m、北側で幅0.6m、深さ0.3mで、いずれも断面形は逆梯形をなしている。特に北側では周溝外壁が一方に比べて急に切り込まれている。

主体部 (第96図)

円形に区画された中央部に、主体部の基底部の棺材を納める溝のみが残っていた。溝の周囲 には多量の凝灰岩の粒状の細片が散乱していたことから、凝灰岩板石を用いた石棺であったら しい。

溝から復元すると、石棺の内法は東西約1.75m、東西約0.8~1.0mで、極小型のものである。 なお主体部・周溝とも出土遺物皆無であった。



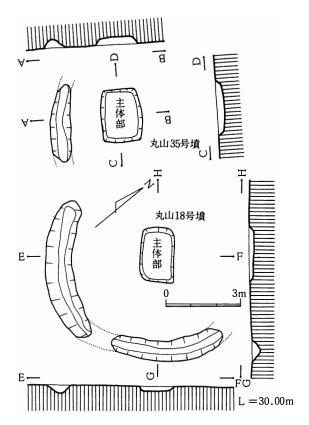
丸山18号墳

形態と規模 (第97図)

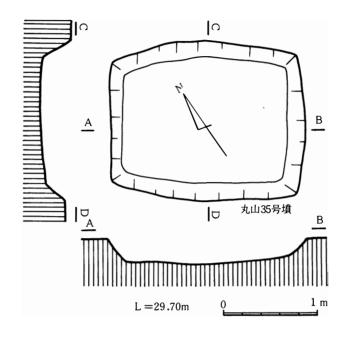
北半部は削平されている。復原すると直径 9.0m前後の円墳となる。西側に陸橋の一部が残る。0.7~1.1mを測る。溝の断面形は場所により違いがあり、三角形と逆梯形の部分がある。 遺物の出土はない。

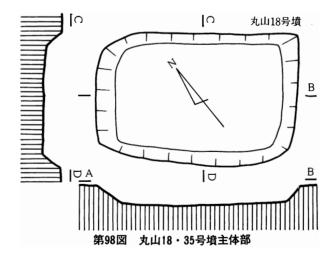
主体部 (第98図)

四辺形の土壙のみ残存する。長径2.15m、短径1.40mを測る。石材は残っていないが、石棺であったことが推定される。なお主体部・周溝とも出土遺物は皆無である。



第97図 丸山18号・丸山35号墳





丸山19号墳

形態と規模(第99図)

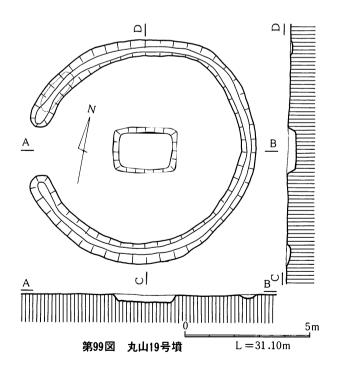
西側に陸橋部をもつ円墳で、上半は削平されている。陸橋部の幅は 1.9m を測った。北側周溝の一部に直線気味の部分がある。長軸中心線の外径約9.3m、短軸中心線8.8mを測る。溝幅は60~90cm、深さは10~18cmを測る。遺物の出土はない。

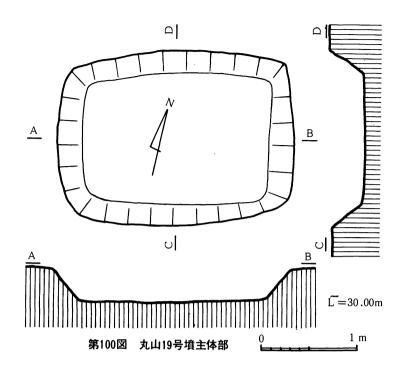
主体部 (第100図)

土壙は隅丸の長方形をなす。長軸2.5m、短軸1.7m、深さ30cmを測る。石材は残っていないが石棺であったことが推定される。

遺物出土状況

主体部の出土遺物は皆無であるが、周溝内には須恵器1個体分5%が出土した。出土地点は陸橋部の北側に、180×60cmの範囲に破片が散乱した状態で出土した。周溝は全面上層から削平されて基底部のみが残存するが、遺物出土地点周辺のみ、深く掘削されていることは注目される。





丸山20号墳

形態と規模

北側台地の東西墓道の間に位置し、南側の周溝のみ検出した。全体の%以上にあたる部分は 農道によって大きく削平されている。また周溝の東端は東B区墓道により切断されている。

周溝の幅は1.4m、深さ1.3mで、断面形はV字状を呈し、周溝外壁は内壁に比べて急に切り込まれている。なお本古墳の復原外径は約18mを測る。

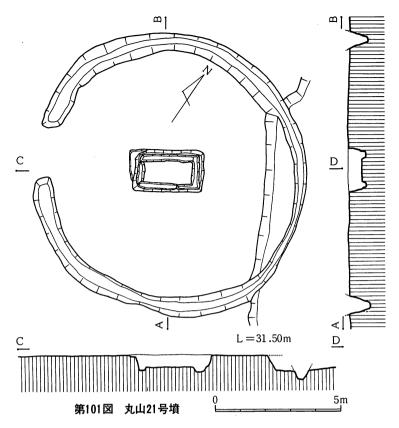
遺物出土状況 (図版193~196)

周溝内堆積土は4層からなり、上部より、1層黒色土、2層暗褐色土、3層黄褐色土、4層 黄褐色粘質土である。各層の厚さは、2層が最も厚く50cm、次いで3層の25cm、1層は20~25 cm、4層15~20cmであった。出土遺物では、597、598、599は須恵器高坏で、いずれも1層黒色土 上面に出土した。2層暗褐色からは596の坏のみ出土、他の596の壺、600・601の甕、603~610の高坏 をあわせて11個体分の土器は、3層黄褐色土層下部に一括して出土したものである。

丸山21号墳

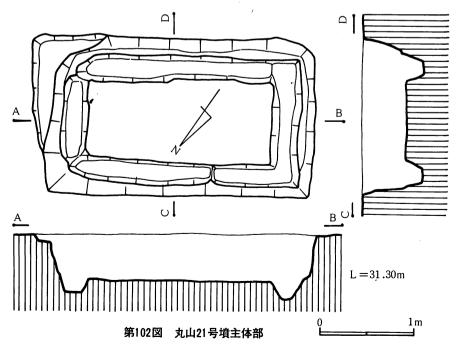
形態と規模 (第101図)

西側に陸橋部をもつ。長軸中心線の外径約11.0m、短軸中心線の外径の11.0mを測る。周溝 東側の一部は削平され、溝の断面形は、逆梯形をなし深い。遺物の出土はない。



主体部 (第102図)

四辺形の土壙に、石棺の基部を固定させるための溝をもつ。北側の堀り方の状態より2基あったことが推定される。石棺の推定法量長軸2.95m、短軸1.65mを測る。遺物の出土はない。



丸山22号墳

北東側の周溝のみ残る。周溝は西側で切れるが、先端は自然に消滅しているので、陸橋部と断定することは出来ない。現況における復原径は、約15mを測った。なお主体部は完全削平され、周溝内とも出土遺物は皆無であった。

丸山23号墳

形態と規模 (第103図)

西側に陸橋部をもつ。長軸中心線で外径約10.0m、短軸中心線で外径 8.3mを測り、平面形は楕円形をなす。溝の断面形は逆梯形をなし、幅は1.0~1.2mを測る。

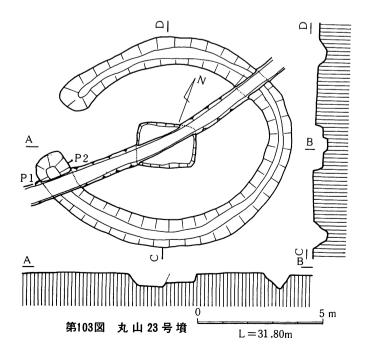
主体部 (第103図)

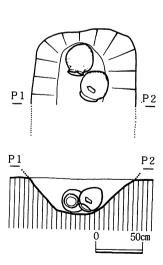
四辺形の土壙は、北東から南西にかけて、耕作溝により切られている。土壙は東西 2.3m、南北 1.8mを測る。土壙内攪乱土中より鉄鏃 2(図版213の 5 ・ 6)が出土した。

遺物出土状態(第105図)

陸橋の南側周溝、底面に密接して、土師器の大甕2個が出土した。甕は587および588で、いずれも溝底に密着しており、明らかに配置されたものである。

北側の周溝には、土師器环590・591と高环592・593、589の須恵器坏がまとまって出土した。いずれも周溝内に配置されたものと思われる。





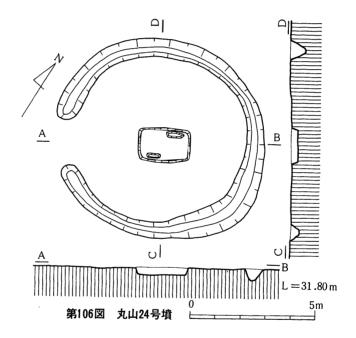
第105図 丸山23号墳周溝 遺物出土状況

丸山24号墳

形態と規模 (第106図)

丸山23号墳の南側に 1.5mの距離をおいて接し、ともに丸山4号墳陸橋部西側に対をなした 状態で並ぶ。

陸橋部は西側にもち、陸橋部の幅は1.75mを測る。墳丘は地山面まで削平されているが、現況での規模は東西外径 8.4m、南北 7.8mで、東西に長い楕円形の周溝がめぐる。周溝の規模は、A一D断面の東側で幅0.70m深さ44cm、C一D断面の北側で幅 0.7m深さ60cm、南側で幅0.54m深さ0.34mで、いずれも断面形はV字状を呈する。周溝幅は西側で最大1.15mに到するが、この部分は上層からの削平をまぬがれて、比較的良く残ったものと思われる。



主 体 部

主体部は破壊されていて、土壙のみ検出した。土壙は長軸2.10 m、短軸1.35 m、深さ24 cmを測る。床面の南側壁の西端と、北側壁の東端にそれぞれ棺材を納めるための溝を検出した。土壙の内の堆積土はほとんど攪乱で、凝灰岩の細片が多量に混っていた。おそらく土壙ぎりぎりに構築された凝灰岩の箱式石棺であったものと思われる。土壙内、および周溝内からの出土遺物は皆無であった。

丸山25号墳

丸山23号墳の西 7 mの地点に位置し、円形にめぐる溝 2 本を検出した。いずれも周溝の基底部のみが残り、北側周溝で 4.5 m、南側周溝で 3.0 mを測った。周溝幅は0.45~ 0.5 m、深さは5~15 cm、両溝の間の周溝は削平されている。主体部は欠失し、陸橋部の位置も明らかにできなかった。おそらく直径 7 m前後の小円墳であったものと思われる。

丸山26号墳

形態と規模 (第107図)

西側に陸橋部を有するやや大型の円墳である。周溝はほぼ円形にめぐり、陸橋部の幅は 2.0 mを測る。北側は上部から削平されていて幅を減じている。A — D断面東側では幅1.53m、深さ1.24cmを測り断面形 V 字状で、溝底は平担で外壁がやや急に切り込まれている。 C — D断面南側では幅 1.9m、深さ1.14mで断面形は丸味を帯びた V 字状。北側は幅 1.2m、深さ0.9mである。

R-P2断面の陸橋部南側では幅 1.6m に対して深さ35cmで、深く平担な断面形となる。なお陸橋部の北側では、深さ 1.4m を測った。

主 体 部

主体部は中央部より西側に位置している。上層の攪乱が激しく、土壙のみ検出した。土壙の 規模は長軸2.14m、短軸 1.4m、深さ24cmを測った。土壙床面は攪乱を受けていて主体部等の 内法等は不明である。なお土壙内堆積土中に多量の凝灰岩石材が混入していた。

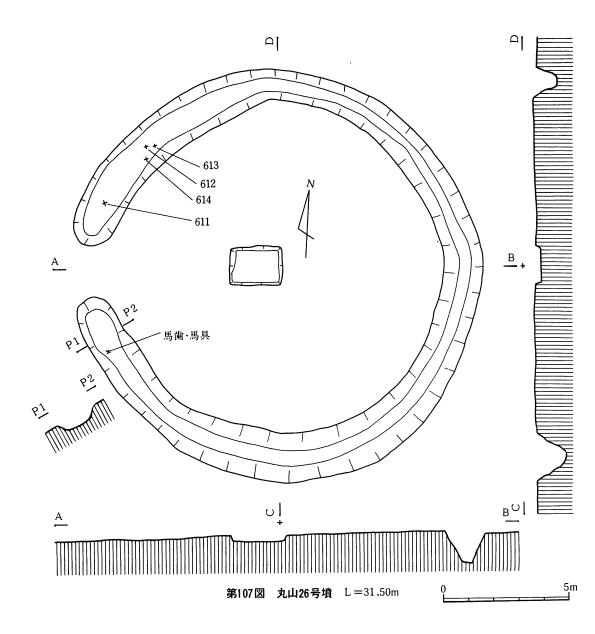
土壙内攪乱土中からは鉄鏃2本(図版213の10・11)と金環1(図版213の13)が出土した。

遺物出土状況

周溝内からは、土師器・須恵器・馬歯・馬具が出土した。周溝内堆積土は3層からなり、上部より1層は黒色土、2層は暗褐色砂質層、3層は黄褐色粘質土で周溝掘削直後の再堆積土である。

土師器、須恵器は、陸橋部端上より北へ 2.3mの地点を中心に出土した。611は溝底の1層上面に密着し、612、613、614は1層下部の出土である。須恵器破片(甕)はすべて1層黒色土中の出土である。

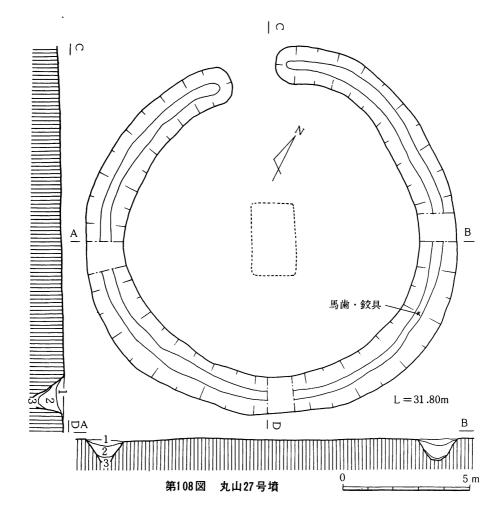
馬歯・馬具は陸橋部の南側(第107図)に出土した。出土層位は2層下部である。馬歯は頭部は北西に鼻部を南西に顎底を上に向けた状態で出土し、轡金具は北西に接して出土した。おそらく頭部のみを切断して周溝内へ入れられたもので、轡金具は腐食の進行過程で離脱したものと思われる。馬歯については付論 「塚原古墳群出土の馬歯」で詳しく述べられている。



丸山27号墳

形態と規模 (第108図)

丸山26号墳東側に接する円墳である。北西側に陸橋部をもち、幅 1.8mを測る。現況での規模は南北外径14.3m、東西外径14.7mで北側周溝がやや張り出している。周溝はC-D断面南側では幅14.6m、深さ11.8mで外壁は内壁に比べて急に掘り込まれている。A-B断面では、西側で幅14.4m、深さ0.86m、東側幅14.4m、深さ0.8mで、断面形はいずれも逆梯形を呈する。



主体部

中央部は上層からの攪乱が激しく主体部の位置さえ明らかに出来なかった。凝灰岩片の散乱状況、かろうじて残存した土壌の壁部から第108図に示したとうり位置および規模を復原した。

遺物出土状況

周溝内堆積土は3層からなる。上部より1層は黒色土、2層は黄褐色土、3層は黄褐色粘質 土の瓦層となる。

東側周溝2層上面より、馬歯および鉸具が出土した。陸橋部東側では1層上面から下部にかけて須恵器甕の破片が大量に出土した。

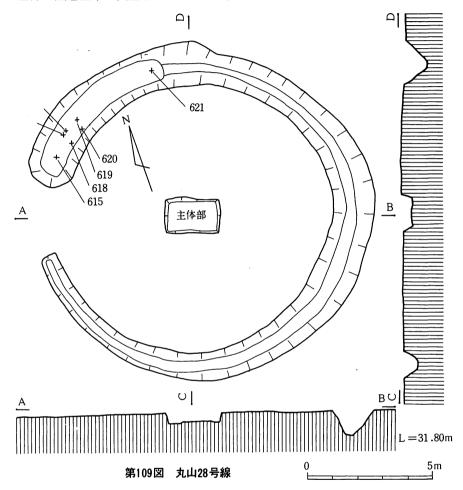
丸山28号墳

形態と規模 (第109図)

ほぼ正円形の周溝で区画され、西側に巾約 2.5mの陸橋部を有する。主体部は中央部に1基

検出したが、削平・攪乱が著しく、土壙のみを確認できた。

周溝幅は部位により一定せず、陸橋部北側では、最大で幅約 1.9mを測り、溝底はフラットな面を残し、断面形は逆梯形を呈する。他の部位では断面形はV字状を呈し、陸橋部の南側では幅・深さとも極端に減じている。遺物は陸橋部の北側に集中して出土したが、すべて溝底から80~ 110cm上部の黒色土中に出土したものである。



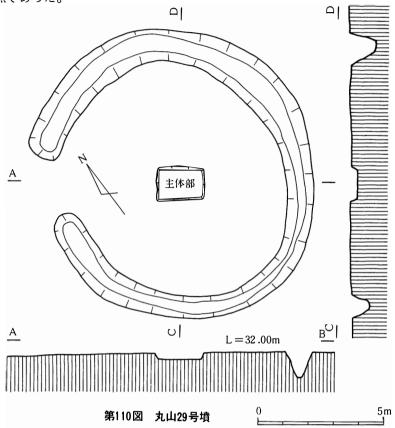
主体部

主体部は円形の周溝によって区画された部分のほぼ中央に位置し、墓壙の長径2.27m、短径1.35mの長方形で、残存する深さは、約0.3mである。石材等の遺存はないが、土壙内堆積土の中に多量の凝灰岩片が混入していたことから、墓壙ぎりぎりの規模に構築された組合せ式石棺の可能性が強い。

丸山29号墳(第110図)

丸山28号墳の西側に位置する。南北外径 9.8m、東西外径 9.8mを測る。周溝はほぼ円形にめぐり陸橋部は北東部にもち、幅は 1.4mである。中央部に主体部土壙を検出したが攪乱が著

しく詳細は明らかに出来なかった。土壙内の攪乱土中に凝灰岩の細片が多量に混入していたことから、主体部は凝灰岩板石を用いた箱式石棺であったと思われる。なお主体部・周溝とも出土遺物は皆無であった。



丸山31号墳

形態と規模 (図版47上)

調査区では最南端に位置する円墳である。南西部に陸橋部をもち、南側周溝は削平されているが、復原すると、直径8~9m前後になる。

主体部

主体部は中央部に1ヶ所設けられている。上層から攪乱され、土壙と棺材の一部を残すのみである。土壙の規模は、長軸 2.6m、短軸 1.6m、深さ45cmを測って、土壙内には南側短側石、西側側石の一部が原位置のまま残っている。おそらく凝灰岩を用いた箱式石棺であった可能性が強い。

また陸橋部北側周溝には多量の凝灰岩が出土した。これらのうちには明らかに面取りされた 板石もみられる。

丸山32号墳(図版46)

形態と規模

北東側に陸橋部をもつ。西〜南側は、道路敷地外で未調査。溝巾約 1.6 m。推定復原直径約18 mを測る。

遺物出土状況

周溝内からは須恵器が多量に出土した。出土地点は陸橋部北側に限られ、しかも溝底より50~80cm上部の黒色中に限られ、あたかも廃棄されたごとく散乱し、復元が出来ない破片が無数にある。これらのうち、23点について図示した。これらのうち、633・636・637・639は下層(2層)の黄褐色中より出土し、他はすべて上層の黒色土(1層)より出土した。また622の皮袋型土器も上層出土である。

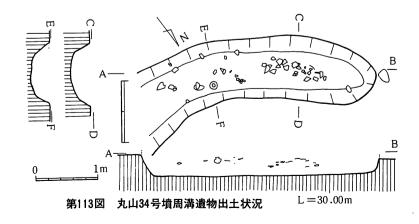
丸山33号墳(図版47下)

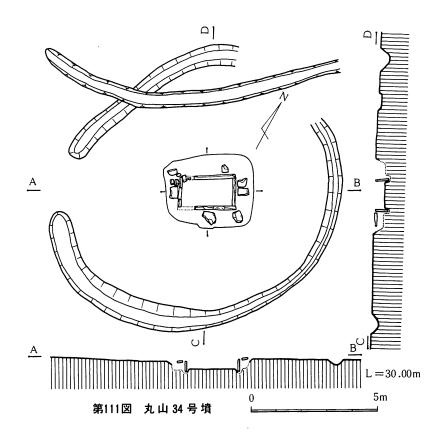
南西部の周溝のみ調査。北側は、道路敷地外で未調査。推定復原直径約11mを測る。周溝の 中は部位によって異なるが、北側で 1.4m、南で 1.2mを測った。断面形は逆梯形を呈し、底 面は平担である。出土遺物は皆無であった。

丸山34号墳

形態と規模 (第111図)

西南側に陸橋部をもつ。周溝平面形は、ややいびつな楕円形をなす。長軸中心線で外径11.50 m、短軸中心線で外径11.15 m、溝巾0.4 m~1.1 m、深さ30 cm を測る。北側に東西に溝があるが、溝深は浅く、まとまった形をとらない。しかも溝巾の堆積土が耕作土であるので、近世の攪乱溝と思われる。



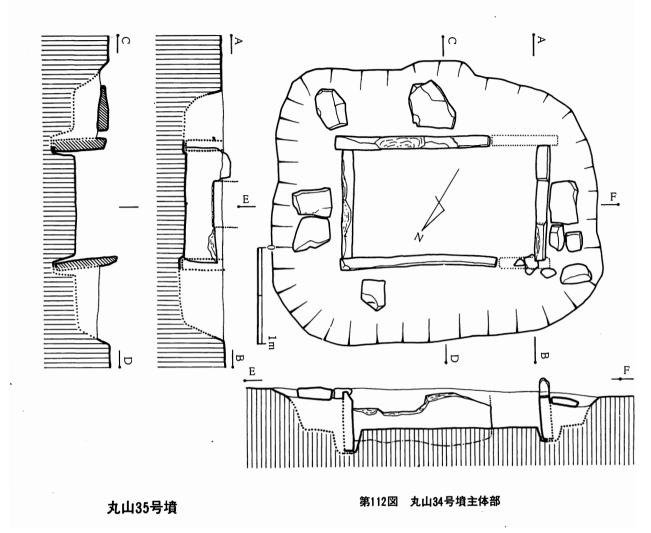


主体部 (第112図)

隅丸方形の土壙に、凝灰岩の石棺を配置する。土壙は長軸3.45m、短軸2.90mを測る。石棺は、凝灰岩を加工した板石で、側壁には長短2石を、小口壁には各1石を組み合わせる。小口壁および、側壁の東側の長い板石は、土壙の床面に深さ約20㎝の溝を掘り下げ、固定させている。ただし、西側の側壁の短い2石については、そのような配慮はみられない。さて、このように固定した石棺は、さらに安定させるため、石棺を土壙との間に厚さ30㎝~40㎝に黒色土を押しつめ、その上に凝灰岩の平石を配置した部分的に粘土が残っている。石棺の上半は欠失しているが、西側の小口壁には、小さな窓があけられており、その下端部のみが残っている。窓は四辺形をなすと思われる。下辺50㎝を測る。この小口壁の外側には、ちょうど窓と同じ高さに、長辺45㎝、短辺30㎝の平石があり、あたかも窓(横口部)に対する敷石の感がある。石棺の床面は、何の設施もない。各壁石の内面と窓(横口部)の下端面およびその外の敷石の上面には赤色顔料の付着がみられる。

遺物の出土状態 (第113図)

陸橋部の南周溝より、土師器・須恵器が出土した。いずれも床面より15cm~30cm上にあり、同じレベルに、石棺材とみられる凝灰岩の破片がみられるのは留意すべき事実である。



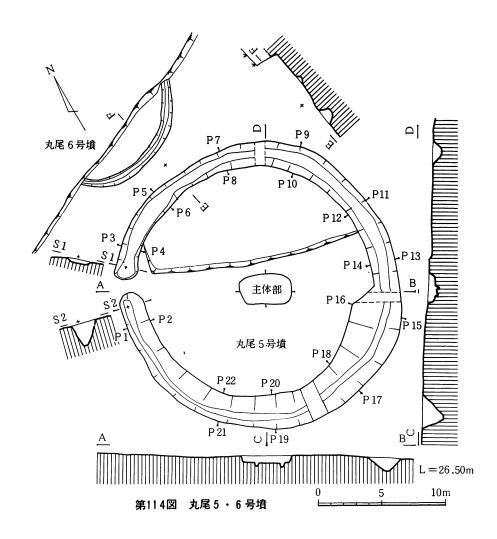
南北の周溝の一部が現存する。北側溝は長さ約3m、南側溝も長さ3m。推定復原直径約8.8 mのやや南側に通して四辺形の土壙をもつが、底部のみしか残っていない。

丸尾 5号墳

形態と規模 (第114図)

調査区北側の緩傾斜面に位置する。かなり大型の円墳で、長軸線上の外径22.5m、内径18.5m、短軸線上の外径22.5m、内径18mを測る。周溝の幅は 1.6~4mとかなりの差異がみられるが、削平・肩部の崩壊等がみられるので、本来的な数値を示しているものではない。周溝の断面形はV字形に近い逆梯形を呈し、南側は遺存がよく 1.5m前後を測るが、北側は削平がすすみ、0.8cm~1m、最も浅い陸橋の左側は40cmを測るにすぎない。

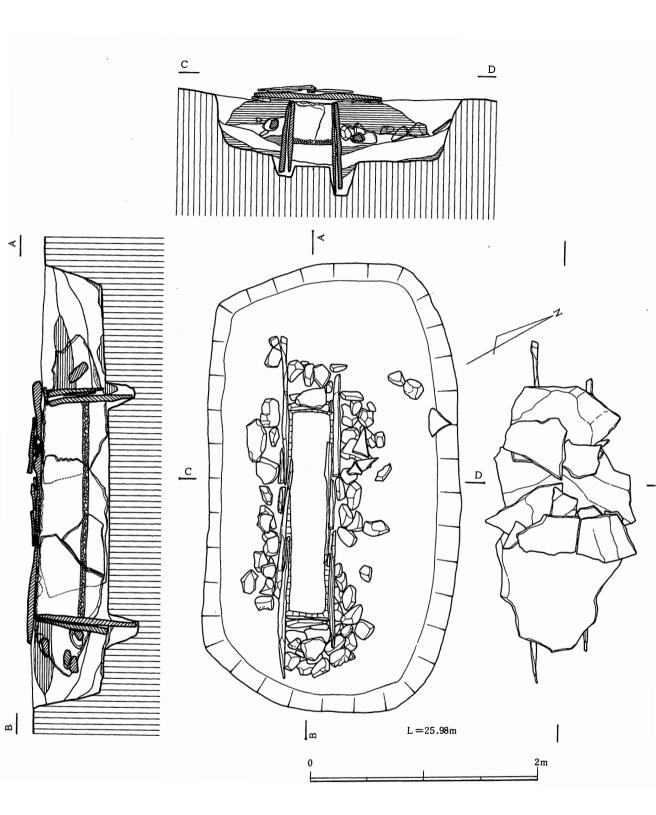
西北方に陸橋部を有するが、その幅はせまく、1 m強である。主体部はほぼ中央に位置し、 その主軸と陸橋部は直交する。



主体部 (第115図)

安山岩の組合せ式石棺で、棺材の組み方、礫床、粘土被覆等丁重なつくりである。

長径 3.9m、短径 2.2m前後の隅丸長方形の土壙を穿ち、その中に石材を組める掘り方が掘り込まれている。土壙は約60cm前後であるが、掘り方はそれからさらに浅いもので15cm、深いものは約40cm程掘り込まれている。この掘り方に石材を納め、土壙と石材の間隙に土および粘土を約15~20cm満たしている。側石・端石とも二重に組まれ、ひじょうに丁寧である。土壙と石材の間に土を満たし、一おそらくこの時、組み込んだ石材の内側、すなわち床面にも土を満たし、石材の安定を計ったと考えられる一石材を一応安定させたのち、棺の周辺に礫を置き並べている。さらにその上を白色粘土で被覆しながら棺の上端までおよんでいる。粘土の範囲は長径3m、短径 1.3mにおよび、厚さ15cmから25cmにもおよぶ。こうして、棺の上端と、その周囲の上面のレベルをほぼ同じに整えたうえで、約10枚の板石を天井として架している。この天井石の間にも白色粘土で目ばりを施している。以前土地所有者が棺の上面まで露出させ、たたりを恐れて埋めもどしたということから、本来天井の上にもかなりの粘土被覆があったものと考え



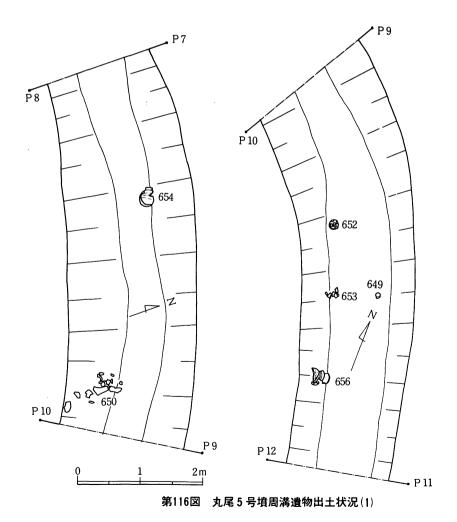
第115図 丸尾 5号墳主体部

られる。床面は、土壙の底面から17~18cm土を埋めたのち、砂利をもって一面に敷きつめ、礫床である。礫の厚さは4~5 cmである。この床面での石棺の内法は、長さ1.87m、幅35cm前後を測り、天井石下面面まで35~39cmを測る。礫床及び棺材の内面は全面に赤色顔料が塗布されていた。

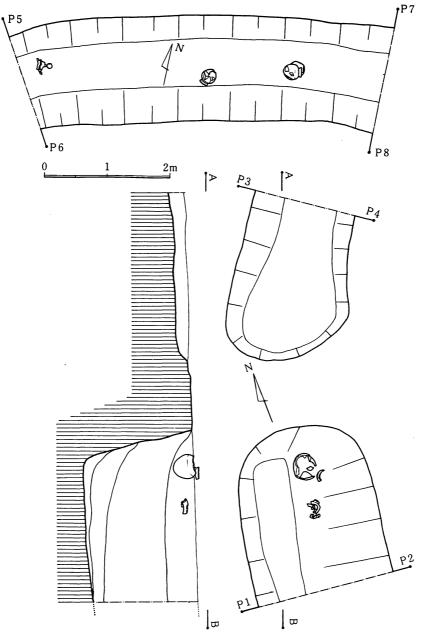
遺物出土状態(図版48·第116~119図)

石棺内から人骨2体、鉄剣1、縦櫛1を出土した。

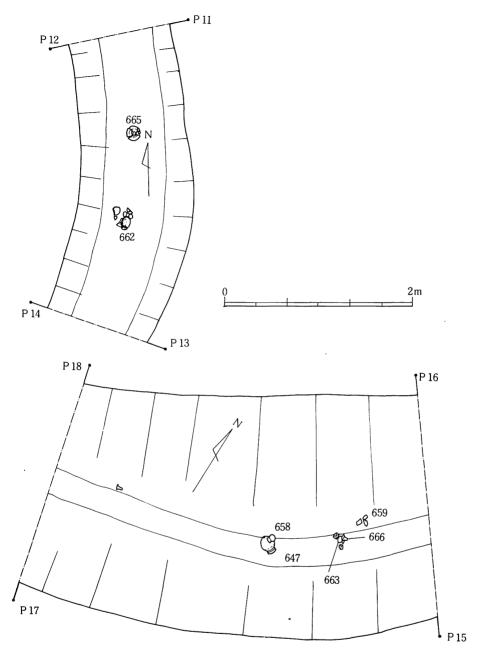
人骨は熟年男性が南頭位で、壮年女性が北頭位をとり、骨盤を相接して埋葬されていた。人骨の詳しい状態・所見は付論(丸尾5号墳出土の人骨の埋葬について)を参照されたい。男性骨の左肩から腕にかけて、鉄剣1、女性骨の頭位付近に漆塗の縦櫛1が副葬されていた。人骨は腐触が進んでいたが、骨の乱れはなく、両人骨の間には土砂の堆積もみられないところから、両人骨は同時埋葬の可能性が強いが、時間差があっても僅少であろう。



-133-



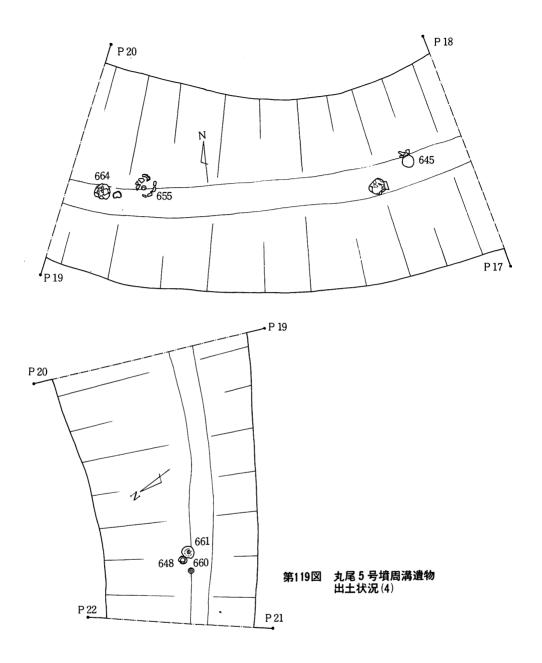
第117図 丸尾 5 号墳周溝遺物出土状況(2)



第118図 丸尾 5 号墳周溝遺物出土状況(3)

周溝内からはほぼ全域から土師器が出土した。周溝内に堆積する土層は3層に区分でき第1層は黒色土、第2層は黄褐色土、第3層は軟質黄褐色粘質土である。陸橋部のすぐ右側から出土した一詳の土師器は第1層からの出土で、溝底から約1.5m程浮いているが、他はすべて第2層からの出土である。これらの第2層中の土器も溝底からは50~80cm程浮いている。

以上の土師器を器形ごとの数量は、壺8、甕1、小型丸底壺7、高坏7である。これらの土器は、一様に $2\sim3$ 個体のまとまりをもって出土している。



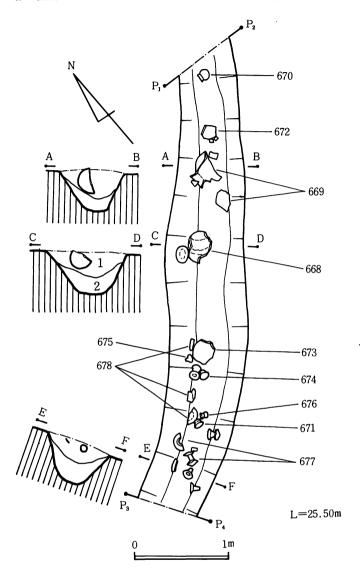
丸尾 6 号墳

丸尾 5 号墳の北側に位置し、大部分は調査区域外にまたがっており、検出したのは約 $\frac{1}{4}$ 程度で、陸橋部・主体部等は調査区域外にある。

検出した周溝は、幅80cm、深さ30cm前後で、断面形はU字形に近い逆梯形を呈する。全体の 規模は不明であるが、検出した部分から復原すると、直径13m前後の円墳となる。

周溝内から土器を出土したが、すべて土師器で、須恵器は含まれていない。周溝内に堆積す

る土層は上下2層に区分でき、土器はすべて上層から出土した。(第120図)



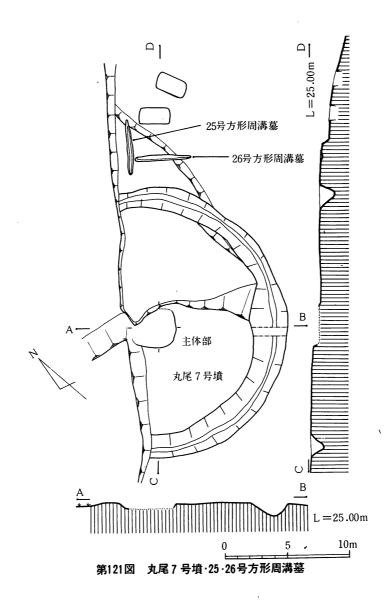
第120回 丸尾 6号 墳周溝遺物出土状況

丸尾7号墳

形態と規模(第121図)

調査区域と区域外にまたがり、約3を検出した。

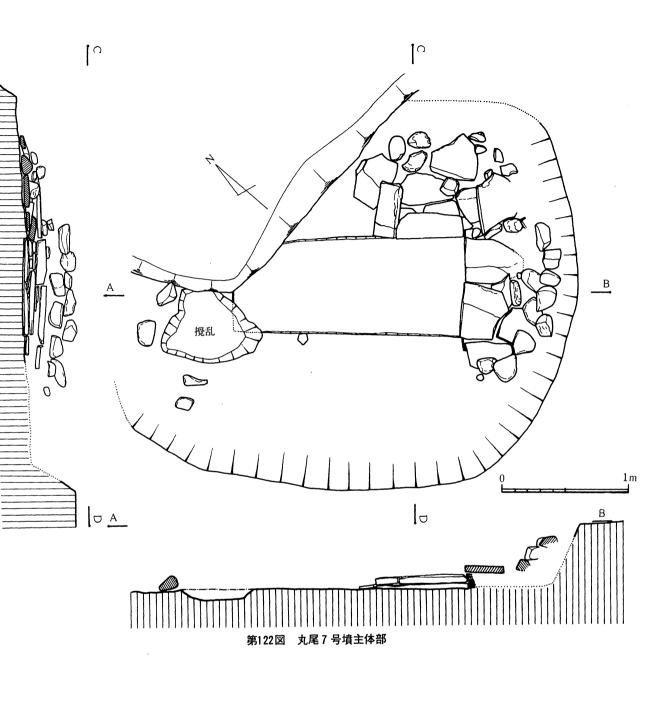
傾斜地にあり、北方では周溝の幅・深さとも小さくなっている。周溝の幅 $1.1\sim2.3\,\mathrm{m}$ 、深 さ $1\sim1.2\,\mathrm{m}$ を測る。断面形はV字形に近い逆梯形を呈する。短軸線上での外径 $21.4\,\mathrm{m}$ 、内径 $17.7\,\mathrm{m}$ を測る。検出した部分には陸橋部はない。長軸線を延長した調査区域外にあると考えられる。



主体部 (第122図・図版51)

攪乱・削平がすすみ、遺存状態は良くない。

削平により全体は不明であるが、残存部から想定して、長径 3.8m、短径2.95m前後の隅丸 長方形の土壙に組み込まれた小形竪穴式石室である。土壙の深さは50cm前後で、石室床面はさらに2~3cm掘り込まれている。石材は一部分しか遺存しないが、この掘り込みの大きさから 石室の平面形を知ることができる。これによると、長さ1.83m、幅は南東方向がやや広く78cm、 北西方向は65cm前後と考えられる。この掘り込み面に合わせて、安山岩の板石を小口積みにして堅穴式石室が築かれているが、石材のほとんどは抜き去られ、わずかに南西の短辺と北東の一部を残すにすぎない。残存部でも2~5段の壁を残すのみである。床面には特別な施設はなく、地山の黄褐色粘質土で形成されている。石材の石室内面に面する小口部には赤色顔料の塗布がみられる。



今回調査した 101基の古墳のうち、この種の石室を内部主体とするのはこの丸尾7号墳のみである。全体が遺存せず、鹿本郡鹿本町・朱塚古墳の例のように、小型の竪穴系横口式石室の例もあるので、竪穴式石室とは断定はできないが、その可能性が強いと考える。

遺物出土状況

周溝のほぼ全体から散発的に土器が出土した。すべて土師器で、須恵器は含まれない。 周溝内の堆積土は上下2層に区分できる。上層は黒色土で、下層は黄褐色土である。これら の土器は下層の黄褐色土中から出土したが、溝底に密着した状態ではない。

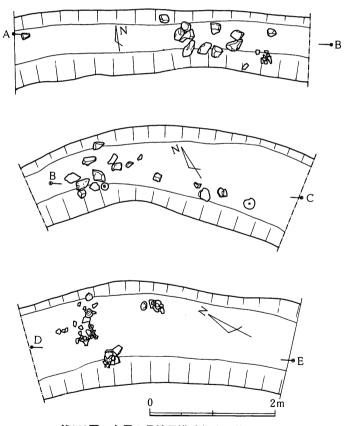
丸尾8号墳(第45図)

農道によって削平され、全体の約 $\frac{1}{3}$ を残すにすぎず、陸橋部・主体部が失なわれ、周溝の一部を検出したにとどまる。

周溝は幅90cm~ 1.5 m、深さ60~90cmを測る。断面形は逆梯形を呈する。遺存する周溝から直径を復原すると、約20 m 前後となる。

遺物出土状況(第123図)

周溝のほぼ全域から礫・土器を出土したが、散発的で、量は多くない。土器は土師器のみで、 須恵器を含まない。



第123回 丸尾 8 号墳周溝遺物出土状況

周溝内に堆積する土層は上下2層に区分できる。上層は黒色土で、下層は黄褐色土である。 礫・土器は下層の黄褐色土からの出土であるが、溝底に密着せず、いくぶん浮いている。礫は 砂岩質で、角の磨滅した所謂河原石である。他でみられる縄文期の集石遺構ではなく、周溝内 の土器と同じ状態で出土した。

丸尾9号墳(第5図)

調査区の最北端に周溝の一部のみが検出された。主体部等は遺存しない。

検出した周溝は約13mにおよび、孤状を呈する。幅は 1.4m前後である。

この周溝は、プランを確認したのみで、堆積土の発掘は行っていないので、遺物については 不明である。

くぬぎ塚古墳

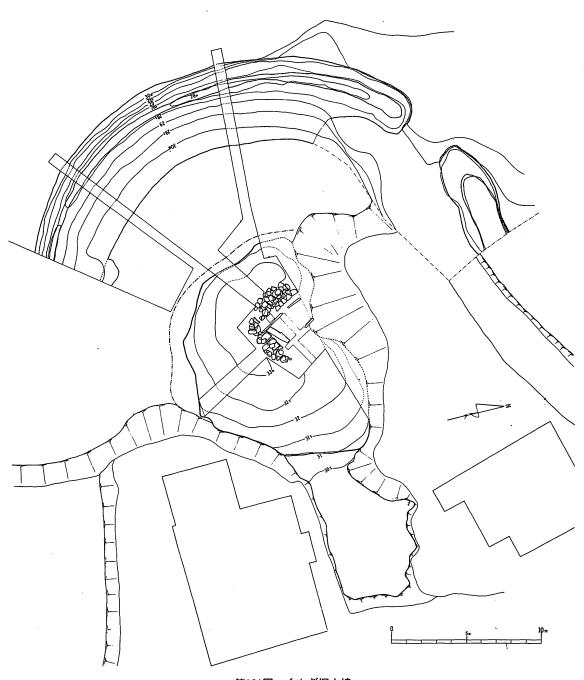
形態と規模(第124図)

調査前南北10m、東西15m、高さ3mの封土を残していたが、墳頂より方射状に設定したトレンチに、周溝・陸橋部を検出し、復原外径36mの大型の円墳であることが確かめられた。封土は主体部の周辺で大きく失われ、北東部は宅地となり削平されている。西半分は道路敷地外で未調査である。陸橋部は西北側に位置し、主体部のほぼ長軸主軸線の延長上ある。

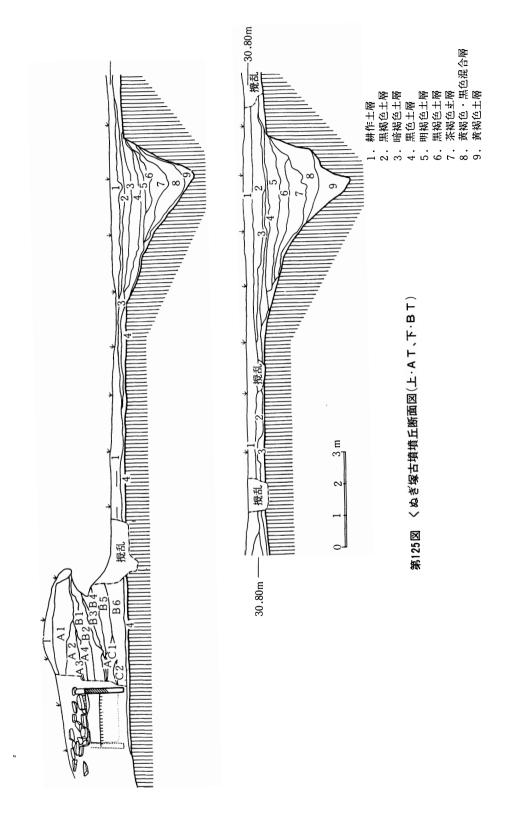
墳丘および周溝(第125図)

墳丘一周溝を接続するトレンチはA-B、C-D、E-Fを設定したが、このうちA-BとC-Dとを図示した。A-Bでは、主体部の短軸中心線を延長したもので、主体部の西側壁から南西へ17.18mの地点に周溝外壁を検出した。周溝巾は5.2m、現地表土からの深さは2.7mを測った。周溝は、溝外壁の傾斜が一方に比して急である。周溝内の土層堆積は9層からなり、それぞれ20~30mの瓦層をなす。上部より1~9層とした。1は表土(耕作土)で、遺物は7の暗褐色土層に出土し、人頭大程度の凝灰岩や無数の細片が混入する。8も遺物を含む。9は無遺物層である。C-D断面の周溝もA-B同様の堆積状況を示し、1~9層からなる。7・8層には土師器、凝灰岩片を含み、9は無遺物層である。溝外壁の段は、欠落したものと推定される。周溝と墳丘の間の削平部では、2~3層からなり、1は表土(耕作土)4は黒色土である。封土は10~15cmの互層をなし、1の表土以下は色調のちがいからA-Cの3分でき、それぞれ2~6に細分できる。封土最下層のB₆下面は4に接し、したがって4の黒色土層は古墳築造時の表土層である。

主体部は、封土下面より94cm、長側辺西側石材は、封土下面より18cm浮いている。 $B_{\rm s} \cdot B_{\rm e}$ の 暗褐色粘質土層と、 $C_{\rm s}$ の黄褐色粘土層はかたくしまっていて、上部の各層と明らかに異っている。 $B_{\rm s} \cdot B_{\rm s}$ は、やわらかい黒褐色土層で、凝灰岩のチップを多量に含んでいる。 $A_{\rm s} \sim A_{\rm s}$ には凝灰岩チップは皆無であった。したがって、主体部の構築は $B_{\rm e} \sim B_{\rm s}$ を盛り上げた前後から開始され $A_{\rm s} \sim A_{\rm s}$ を境に盛土の傾斜が異なっていることから $A_{\rm s}$ の段階では主体部の被覆は、ほぼ完成したものと思われる。



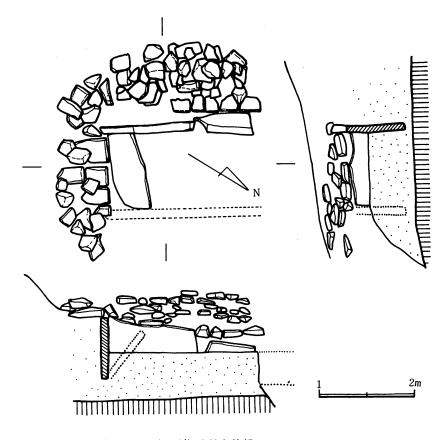
第124図 くぬぎ塚古墳



主体部 (第126)

主体部は円墳のほぼ中央部に位置し、北側短側辺と東側長側辺はすでに失なわれていた。

主体部は、凝灰岩の板石を長方形に組み合わせ、さらに上部を小口積みにしている。現位置をとどめる立石は長側辺の西側のみであるが、短側辺の南側の立石は現位置のまま内側へ倒れていたことから、おおまかなプランが推定できる。これによると内法は巾 1.6m、長さ3 m以上で、おそらく横穴式石室の玄室部分と思われる。床面は旧地表より94cmの地点で確認した。



第126図 くぬぎ塚古墳主体部

先に述べたように、主体部は封土中に築かれているため、封土を完全に失なった丸山 6 号墳 などもくぬぎ塚タイプの石室をもつものであった可能性が強い。

遺物出土状況

主体部からの遺物の出土は皆無であった。周溝内から土師器が出土し、第7・8層にのみ限られ、主に8層に集中している。いずれも墳丘側から転落した状態で出土した。

琵琶塚古墳

形態および規模 (第127図)

いわゆる「柄鏡式」の前方後円墳とされ、花見塚古墳とともに、古墳群の中心をなす古墳として位置づけられている。現存する墳丘は周囲から著しく削られて変形し、わずかに前方部にわずかな突出が残っていて琵琶の形に似ることからこの名がつけられた。墳丘の全長28m、後円部径17m、後円部高さ約 4.4m、前方部の巾2 mを残している。

調査は前方部・後円部の東側に限られ、この部分に後円部の周溝の一部を検出した。周溝は 巾8.20m~ 9.0m、深さは表土より 2.2~ 2.5mを計る。したがって本古墳を復原すると後円 部の径約47m、高さ約5mの規模を有していたものと思われるが、全長については不明。

主体部

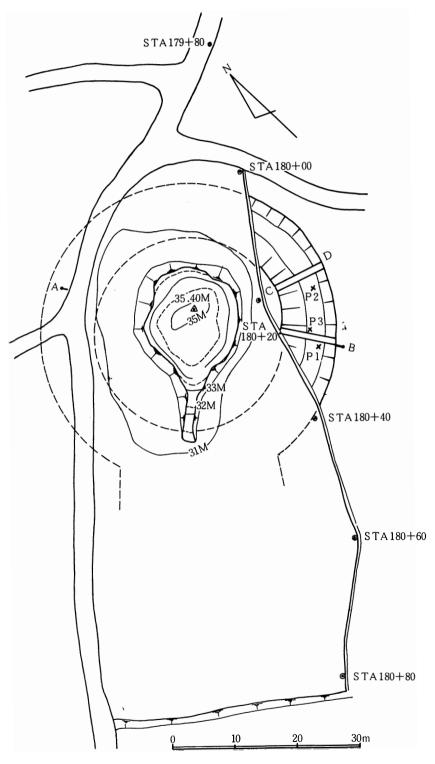
後円部は周囲が削られているが、封土の中央部分は比較的旧状を保っているので、主体部はおそらく完全に近い形で残存しているものと推定される。なお封土中に凝灰岩の大小破片が見られるので、主体部の石材には凝灰岩が使用されているのであろう。

周溝の形態と遺物出土状況(第128図)

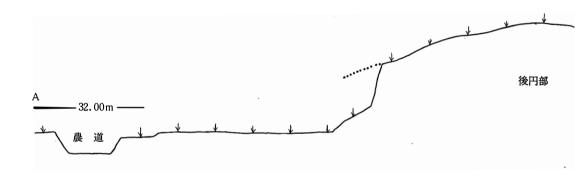
周溝は全長34.6 m 検出し、後円部のおよそ $\frac{1}{4}$ にあたる。溝巾はA-B断面で7.80 m、C-D断面で8.0 m、溝深さはA-Bで地表から1.9 m、C-D間で1.6 mを測った。周溝外壁は一方に対して鋭角に掘削されるが、全体的には深さに比べ溝巾が非常に広い。これは方形周溝墓、あるいはくぬぎ塚・丸山6 号墳などの大型円墳がV字状に掘削されるのと大きく異なる点で注目される。

周溝内の堆積土は15cm~75cmの互層となり、表土以下 6 層を確認できた。1 は表土 (耕作土) 2 は黒色土層で最も厚く須恵器、土師器の細片を含んでいる。3 は黄褐色土層で無遺物層である。4 は暗褐色土層で遺物は含まない。5 は4 に類似する暗褐色の砂質層で下部は粘質。6 は赤褐色の粘性のある砂質層で、周溝掘削後まもなくして堆積したものである。遺物は5 層に集中し、351は甕でP₁の5 層より出土し、口縁は上、底部は6 層上面に接していた。352は彩色のある朝顔形埴輪で、いずれも5 層中の出土。351は周溝内へ置かれたものか、墳丘より流れ込んだものであろう。

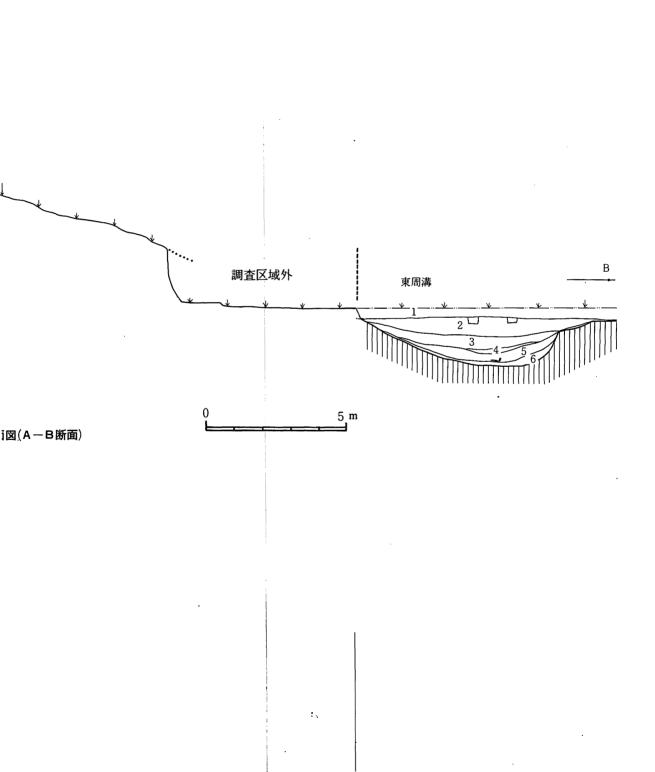
周溝は北側に移行するにつれ深くなり、逆に南のくびれ部へ移行するにつれしだいに深くなる。



第127図 琵琶塚古墳



第128回 琵琶塚古墳後円部墳丘陽



第4節 石棺・石蓋土壙及び堅穴の調査

方形周溝墓、小円墳群等の間を縫うようにして、大小18の石棺と石蓋土壙1基竪穴を検出 した。これらの石棺の多くは、耕作によって上部を削平され、あるいは盗掘によって破損し、 石材は抜き取られ築造時の姿を明らかにし得ないものも少なくなかった。

ここでいう石棺とは、一応周溝等外部施設を伴なわないものをとり扱かっている。各号の呼び方は調査区の南端に位置するものより1号.2号の順に数えた。

第1号石棺 (第129図)

琵琶塚古墳の南東部、丸山23・24・25・27号墳とに囲まれ、すなわち調査区南端に位置する石棺である。上部からかなり削平されてわずかの石材と、基底の一部を残していたにすぎない。

墓壙の規模は、掘り込みの現在部上端で長さ 203cm, 同巾 116cm, 下端部で長さ 183cm, 同巾 102cmで長方形を呈する。主軸方位は、N−88^LWで、ほぼ東西である。掘り込みの深さは、現在部で最大18cmであった。墓壙の南側長辺にそって、加工面を残す石棺材が残っていて、墓壙の壁面と床面に密着していた。こうしたことから、1号石棺は凝灰岩の切石を箱式に組合わせたもので、おそらく墓壙ぎりぎりに作られた小規模なものであったことが推察される。墓壙の掘り込みはかなり整然とし、床面も一応に水平な面を保っていた。副葬品はまったく検出できなかった。

第2号石棺 (第129図)

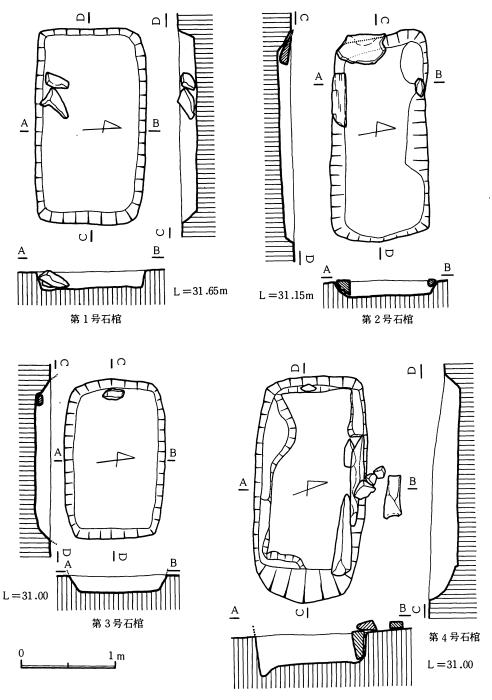
丸山2号墳の北5 m、35号方形周溝墓の陸橋部西側に位置し、第3・4号石棺とともに3基の小グループを形成している。

第1号石棺同様、かなり破損していたが、側壁部・木口部の石材の基底部がほぼ現位置のまま残存していた。墓壙の規模は、掘り込みの確認できる地山面の上端で長さ 210cm、同巾 103 cm、下端で長さ 195cm、同巾65cm、床面までの深さは14cmであった。長軸線方位は、N-83~Wで、ほぼ東西を示す。墓壙の南側側壁部と西側木口部の2ヵ所に、加工面を残す石材が残存していた。木口部の石材はほぼ現位置のまま外側へ倒れていたが、側壁部の石材の底面は墓壙の壁面に密着していた。側石を埋め込んだ掘りこみを確認した。石棺内面の規模は墓壙の床面プランとほぼ一致している。第1号石棺と同様、小規模な凝灰岩製の箱式石棺である。

墓壙は長軸にそって西に深く、短軸にそって南に浅いが、床面は整然として水平な面を保っている。墓壙の東側にガラス小玉 175個を検出し、多くは床よりかなり上部より出土したが、このうち5個のみ長軸にそった北西部床面に密着して出土した。

第3号石棺 (第129図)

第2号石棺の西4m、第36号方形周溝墓陸橋部の正面に位置する。西側木口部に凝灰岩の石



第129図 1・2・3・4号石棺

材残欠を残すのみであったが、墓壙はわずかにふくらみのある長方形を呈し、床面もほぼ水平な面を保っていた。現況での掘り込み上端部長さ 170cm、同巾 117cm、長軸中心線の方位は N −83 Wを示し、第2号石棺と同様ほぼ東西であった。床面の西側木口部付近に集中して勾玉1個とガラス玉68個を検出したが、すべて墓壙の埋土中より出土したものであるが、しかし出土地点が西側に限られていることから、埋葬頭位はほぼ推察できる。

第4号石棺 (第 129図)

第3号石棺の西 4.5 mに位置する。やはり凝灰岩製の箱式石棺である。第2・3号石棺同様整然とした長方形の墓壙を有する。墓壙自体の残りは良い。現況での掘り込み上端部長さ 235 cm、同巾 116cm、床面の長さ 190cm、同巾 105cm、床面の中心部での深さ30cmであった。北側側壁に石材を残し、外側にこれらの一部が散乱していた。側石も基底部を残すのみであるが、墓壙面に密着して、2 ないし3 枚の板石を組み合わせたことがうかがえる。南側側壁と東西木口部にかけて、石材を埋め込んだ明瞭な掘り込みが見られた。床面はほぼ水平面を保っている。なお、長軸線の方位は N-70~Wであった。

第5号石棺 (第 130図)

丸山17号墳と丸山19号墳とのわずかな間隙に位置し、第6号石棺と1グループを形成している。

墓壙は整然とした長方形を呈する。現況での掘り込み上端部長さ 193cm、床面の長さ170cm、同巾71cm、床面までの深さ15cmである。南東部の小口部には加工面を残す板石があり、のみが床面に密着していた。両側壁と北西部小口部には、掘り込みは検出できなかったが、埋土中には多量の凝灰岩の細片を含んでいて、細片には赤色顔料が塗布されたものを認めることができた。床面はわずかに南東部側に深いがほぼ水平面を保っている。なお石棺の長軸中心線の方位は N-33~Wであった。副葬品はまったく検出できなかった。

第6号石棺 (第130図)

第5号石棺の西3 mの地点に位置する。凝灰岩製の箱式石棺である。墓壙は、現況で掘り込みの上端部長さ 185cm、同巾 104cm、床面長さ 156cm、同巾72cm、床面までの深さ15cmであった。長軸中心線の方位はN-53~Wで、第5号石棺とほぼ一致する。北側側壁中央部に基底部をのみの加工面を残す石棺材の一部がある。床面は中央部がわずかに深くなり、石材を埋め込むための掘り込みは認められなかった。とくに墓壙壁面は北側に比べ南側はゆるやかに立ち上る。副葬品はまったく検出できなかった。

第7号石棺 (第 130図)

丸山11号墳の北 2.8mに位置し、第8号石棺とともに1グループを形成し、いずれも蓋を欠失しているが遺存状態は良好である。

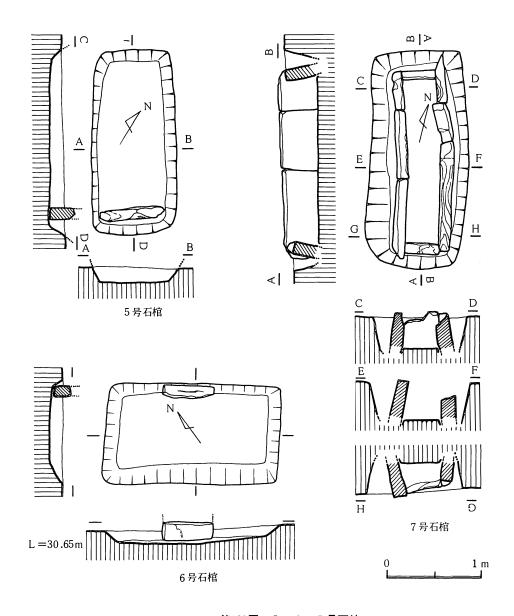
墓壙は現況で掘り込みの上端部長さ 226cm、同巾 105cm、床面での長さ 198cm、同巾71cmで、床面までの深さ32cmである。石棺内床面は長さ 176cm、同巾37~45cmで、床面は墓壙の床面と一致し、礫等の内部被覆は施されていない。床面までの深さは、最大43cmを測ったが、これは旧状を示すものとみてよい。構造は小口部に一枚、側壁に3枚づつ、あわせて大小6枚の凝灰岩の切石よりなり、いずれも内側に側けて組み合わせている。棺身は墓壙の北側に寄せて築いている。長軸中心線の方位はN−13℃Wであった。

棺内の南側側壁の東側寄りの床面に接して、鉄鉾1を出土した。

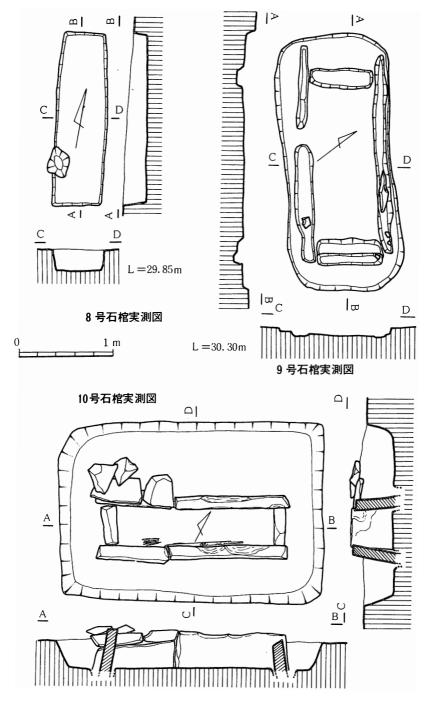
第8号石棺 (第131図)

第7号石棺の東約12.5m、丸山34号墳との間に位置する。

墓壙は現況で掘り込みの上端の長さ 180cm、同巾54cmで、床面での長さ 172cm、同巾49cm床面中央部での深さ20cmであった。墓壙埋土中に凝灰岩の細片が多量に混入していたが、石棺の平面形が推察しうる石材は認められず、石材を埋め込むための掘り込みも皆無であり、床面はほぼ水平面を呈していた。墓壙は巾に対して狭長であり、群中最も小規模である。長軸中心線の方位はN−11-Wである。副葬品は全く検出できなかった。



第130図 5・6・7号石棺



第131図 8・9・10号石棺

第9号石棺 (第131図)

第10号石棺とともに、台地中央の谷部に位置し、やはり小グループを成す。30号方形周溝墓の北側約8 mに位置する。

墓壙は不整形な隅丸長方形であり、現況で掘り込みの上端部長さ 270cm、同巾 110cm、床面での長さ 257cm、同巾 106cm、深さ最大で10cmであり、墓壙はかろうじて床の一部を残していた。床面には、石材を埋め込んだ掘り込みが明瞭に検出できた。掘り込みの底部には石材の残欠である凝灰岩片が点々と残っている。小口部・側壁部の掘り込みは同様に浅く、南東部の小口部の掘り込みは段を有する。副葬品は皆無であった。掘り込みから推定すると石棺の規模は長さ 180cm、巾70cm前後であったと思われる。なお長軸中心線の方位は N−55℃ Wであった。

第10号石棺 (第 131-1 図)

30号方形周溝墓の真北9 m、31号方形周溝墓とのほぼ中間に位置する。第7号石棺とともに 遺存状況が良好であった。

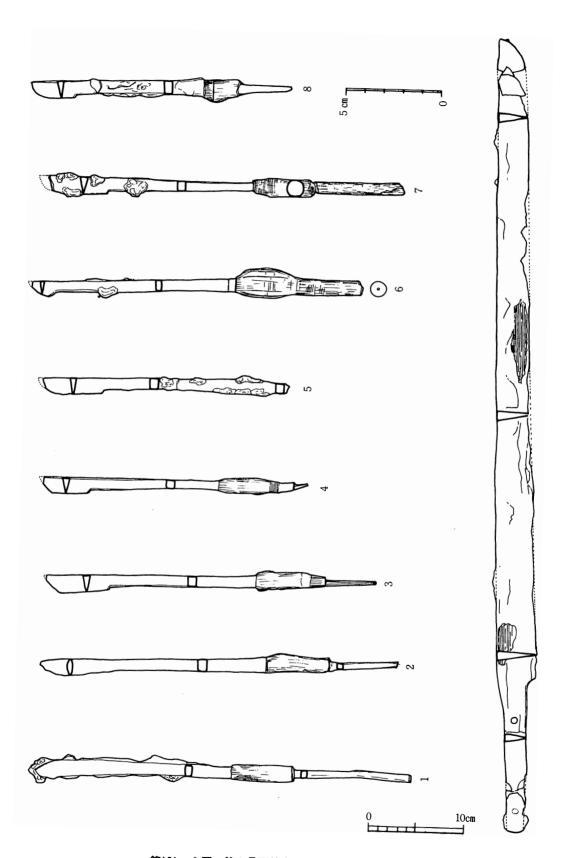
墓壙は現況で、掘り込みの上端部での長さ 277cm、同巾 187cm、床面の長さ 256cm、同巾 170cmであった。また棺身の内部は長さ 172cm、同巾46cmであり、床面までの深さは最大40cmを計り、墓壙の床面の位置と一致する。構造は小口部 1 枚、側壁 2 枚ずつ合わせて大小 4 枚の凝灰岩板石を用い、いずれも内側に傾けて組み合わせる。板石の厚さは12~15cmである。この場合、北側側石の西側立石は、板石を小口および横口に平積みして高さを調節している。

第10号石棺は、棺身に比較して墓壙が大きく、他の石棺との違いをなす。棺内埋土は自然な埋没状況を示し、床面直上には厚さ5~7㎝の赤色顔料粉を含む帯状堆積をみた。床面の南側側壁にそって鉄刀1、鉄鏃8(第131-2図)が出土した。なお長軸線の方位はN-62~Wである。

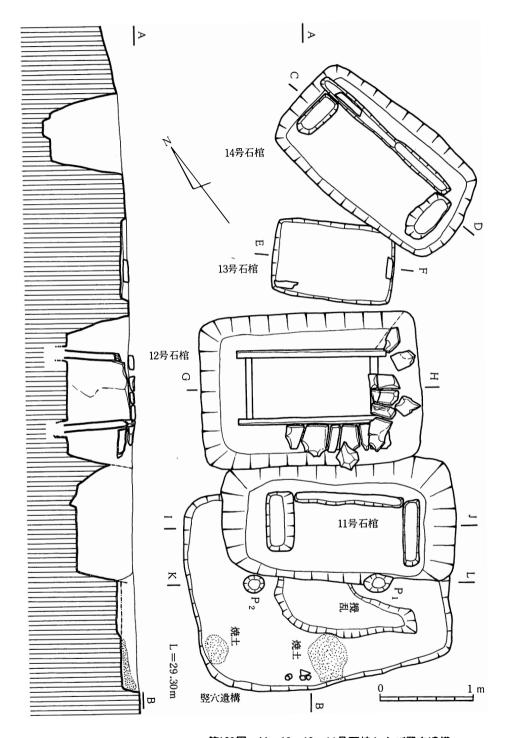
第11号石棺 (第 132・ 133図)

東西墓道にはさまれてある。第12・13・14号石棺および竪穴遺構とともにグループを形成している。このうち第11号石棺と第12号石棺および竪穴状遺構、また第13号石棺と第14号石棺との間には、、それぞれ切り合い重複が生じている。

第11号石棺は、石材はすべてぬきとられ墓壙のみ検出した。墓壙の規模は、掘り込みの確認できる地山面の上端で、長さ 248cm、同巾 130cm、下端で長さ 187cm、同巾82cm、深さ57cmである。全体形はほぼ長方形である。墓壙床面には南側壁部を除いて三方に掘り込みがみられた。掘り込みは北側側壁部で長さ 115cm、同巾11~15cm、深さは 7.5cmで断面形は内側が急に立ち上るL字形である。墓壙埋土はほとんど攪乱を受けていて、凝灰岩の細片が多量に混入していた。東側小口部の掘り込みは長さ70cm、同巾17~18cm、深さ20cmで、底面はほぼ水平面を保つ。西側小口部の掘り込みは長さ63cm、同巾20cm、深さ25cmで東側より深い。床面はほぼ水平である。これら墓壙の掘り込みから推定すると、石棺内面の平面的な規模は長さ 140cm、同巾が50cm前後の箱式石棺であったと思われる。なお、棺身の長軸中心線の推定方位は N-52~Wを示



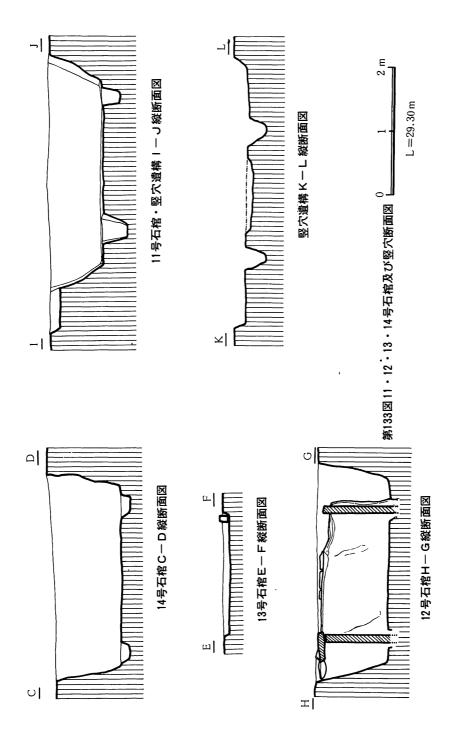
第131-2図 第9号石棺出土鉄鏃・直刀



第132図 11・12・13・14号石棺および竪穴遺構

す。

本石棺の墓壙は竪穴遺構の北側を切り込んで構築され、後述する第12号石棺によって墓壙北辺を切断されている。以上の関係は第 127図 A - B断面のとおりである。副葬品等出土遺物は皆無であった。この石棺は、20号方形周溝墓の主体部の可能性もある。



第12号石棺 (第132・133図)

第11号石棺と第13号石棺とのわずかな間隙に築かれていて、この小グループでは最も保存状態が良い。

墓壙の平面形は整然とした長方形をなし、現況で掘り込みの上端部長さ 232cm、同巾58cm、深さ72cmで、ほぼ旧状を保っている。床面長さ 191cm、同巾 126cmで水平面を保つ。

石棺は厚さ10cmの凝灰岩切石4枚で組み立て、床面内法は長軸 126cm、短軸で68cm、深さ72 cmである。棺身の北側壁と西側小口部は上部より攪乱されていたが、南側壁と東側小口部はほぼ旧状を保っていたので、ほぼその規模を知ることができた。すなわち小口部板石はほぼ垂直に、側壁は内側に傾けて立て、板石の上端より25~28cmのところから切石を2段にひかえ積みしている。小口部分では1段に板石の上端部に面をそろえて重ね、上端部の凹凸を調整している。

蓋石は床面から約5~8 cmの高さのところに落下していた。おそらく石棺をすっぽり覆う1枚石であったことが推察される。蓋石と床面との間隙には赤色顔料のまじる砂質土が堆積していたが、副葬品などは検出されなかった。なお棺身の長軸中心線の方位はN−52→Wで墓壙とほぼ一致する。

第13号石棺 (第132・133図)

第12号石棺の北側に接して築かれ、後述する第14号石棺によって、墓壙の北東隅を切断されている。

墓壙と凝灰岩の石棺残欠を残して、ほとんどぬきとられている。墓壙の掘り込みは現況で確認できる地山面で長さ 129cm、同巾82cm、深さは地形の高い南側壁で8 cm、北側で5 cmを計った。東側小口部と南側側壁部の2ヶ所に凝灰岩の残欠を検出し、いずれも床面に密着していた。棺床面の推定長さ 110cm、同巾50cmで、長軸中心線の方位はN−44℃Wを示す。副葬品等は全く検出できなかった。

第14号石棺 (第132・133図)

第13号石棺の北東部隅を切断して築造され、この小グループの最も北に位置する。

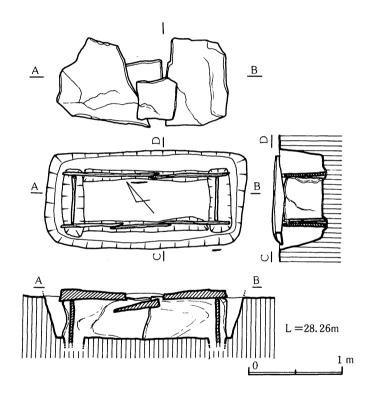
石棺身はほとんど抜き取られていて旧状を知る由もないが、整然とした墓壙を検出することができた。墓壙の規模は掘り込みの地山上面で長さ 217cm、同巾 122cm、深さ72cm、床面での長さ 118cm、同巾95cmであった。墓壙内には、凝灰岩の大小破片が混入した黒色の攪乱土が床面近くまで埋没していて、この攪乱された土層より後述する鉄製品が出土した。床面には、石棺材を埋めた掘り込みが、西側壁を除く三辺で確認され、東側壁部の掘り込みより、石材の一部が検出できた。以上から棺床内面の規模は推定で長さ 145cm、同巾50cmでなお、長軸中心線の方位は、 $N-10^-$ Wを示す。

第15号石棺 (第 134図)

38号方形周溝墓内に築造されていて、先の第11~14号石棺の北約25 mに位置する。17基の石棺のうちでは唯一の安山岩を用いた箱式石棺である。

棺蓋は板石大小4ないし5枚で覆っていたが中央北側よりの部分は持ち去られている。残った蓋石も棺内に落ち込んでいたが、全体的には遺存状態は良好であった。

墓壙の現況での規模は長さ 210cm、同巾 100cm、床面までの深さ47cmであった。棺身は北側壁2枚、南側壁3枚、両小口部に1枚づつの計7枚の板石を組み合わせて造っている。板石を埋めこむための掘り込みは、側壁部、小口部とも検出したが、側壁部に比べ小口部はかなり深く掘り込んでいる。棺床の規模は長さ 150cm、同巾44cmで長軸中心線の方位はN-49~Wを示す。床面は墓壙の床面と一致し、粘土、礫等の被覆は認められなかった。なお、副葬品は北側壁中央部に鉄剣1を検出した。



第134図 15号石棺

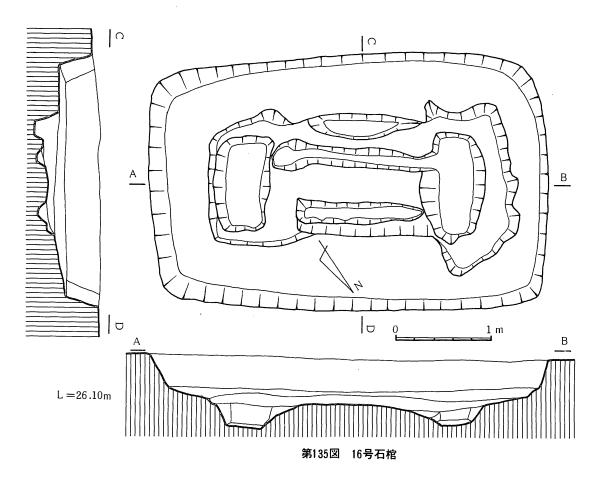
第16号石棺 (第 135図)

第17号石棺とともに、19号方形周溝墓を破壊して築造されていて、台地の北側傾斜面に位置する。

本石棺は、墓壙のみ残して石材はすべて抜き取られていたが、墓壙内埋土中に混入していた 大小おびただしい凝灰岩の破片と、加工面を残す厚さ10ないし15cmの板石などから、凝灰岩製 の箱式石棺であるとみてよい。 墓壙は2段に掘り込まれていて、1段目の墓壙は長さ 420cm、巾 225cmでほぼ整然とした長方形をなし、2段目は不整形である。石材を埋め込むための掘り込みは、側壁部、小口部とも検出できたが、南側壁部では掘り込みが並列して2本みられた。ここでも側壁部に比べて小口部が深く掘り込まれている。

掘り込みから推定した棺身の規模は長さ2 m、巾50cm程度のものであり、棺身に比べてかなり大きな墓壙を有している。

なお、長軸中心線の推定方位はN-56℃Wであり、副葬品等は皆無であった。

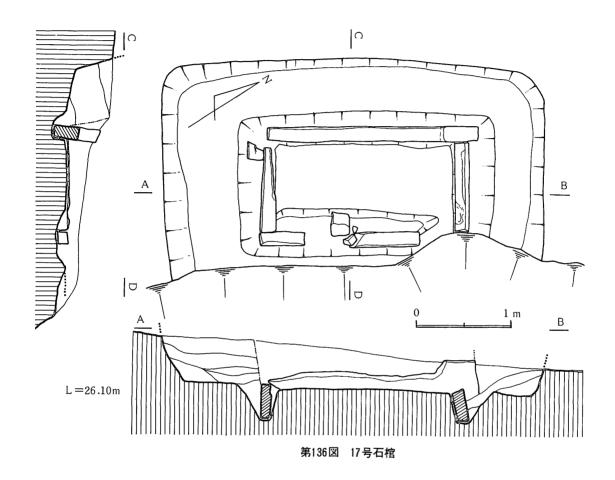


第17号石棺 (第 136図)

第16号石棺の西側に近接して築かれ、17基の石棺のうち、最も北端に位置している。

墓壙は現況で長さ 400cmで、巾については墓壙の西側が崖面に接し、くずれ落ちているために不明である。石材は凝灰岩切石で基底部のみ残っている。東側壁は厚さ15cmの一枚石、小口部にもそれぞれ一枚石を用いている。西側壁については、部分的に破損を受けてはいるものの、おそらく一枚石を用いたもので、合わせて4枚の板石を内側に傾けて組み合わせている。棺床内面の規模は長さ 190cm、同巾94cmで整然とした長方形を呈する。床面は北にむかうにつれて

やや低いが、相対的に水平面を保っている。なお、石棺長軸中心線の方位はN-33² Eを示し、 副葬品等は皆無であった。

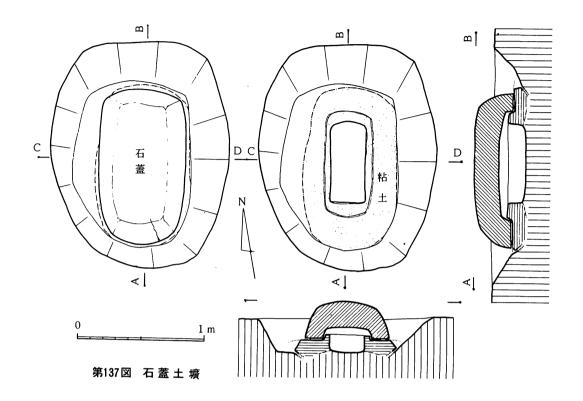


石蓋土壙 (図 137)

18号方形周溝墓の台状部南東に位置している。

土壙の平面形は楕円形で、確認できた地山面での規模は南北 1.75 m、東西 1.40 mを測る。 土壙の中央部には粘土により死床がつくられる。死床の内法は長さ62.5cm、巾21.5cm、深さ13 cmで北側でやや丸味をもち、中央部で狭い長方形を呈する。石蓋は凝灰岩一石から削り出したもので、表面は荒く整形され、工具の痕跡が残っている。長さ 120cm、巾69.5cm、厚さ30.5cmで長楕円形、断面形は丸味を帯びた台形である。石蓋内法は、85×38、深さ 8.5cmの隅丸の長方形にくり抜かれている。死床床面に粘土はみられず、わずかに覆土している。石蓋内面はすべて赤色顔料が塗布され、死床内粘土部分にも顔料の付着がみられた。

死床内からの遺物は皆無であり、築造時期の判定は困難である。



竪穴遺構 (第132・133図)

調査区唯一の竪穴である。東西27.5 m、南北 2.15 mの長方形プランで、北東部隅を含み全体の 含 程度が11号石棺によって切断され、遺構の中央部は攪乱をうけている。壁面はほとんど垂直に立ち上り、側溝等は認められなかった。床面は硬く踏み固められていて、西と南の壁面に沿って 2 カ所に焼土を検出し、南壁に沿って小型丸底壺および甕形土器の破片が出土した。床面中央部に柱穴 2 カ所を検出した。柱穴 P_1 は一部を P_2 は一部を P_3 は一部を P_4 により削られているが、現状で 10×15 cm、深さ18cm、 P_2 は 20×22 で深さ23cm、 $P_1 \cdot P_2$ それぞれの中心間の距離は130cmを測った。

竪穴遺構は11号石棺土壙によって、また11号石棺土壙は12号石棺によって切断されているので、築造時期の流れは、竪穴→11号→12号の順序になる。

竪穴遺構は調査区内では、他に類例を見いだせなかった。しかし遺構自体は長期間使用された痕跡はなく、極短期間か、あるいは断続的に使用されたものではないかと推定している。出土土器から方形周溝墓の営造過程で構築され使用されたものであろう。塚原台地では土師器を伴出する生活遺構の発見は皆無であり、したがってこの竪穴遺構は、墳墓の築造、あるいは種々儀礼行為に関連したものともみることができる。

第Ⅴ節 墓道の調査 一道路状遺構 — (第 138図)

北側台地の傾斜面に道路状の遺構を検出した。遺構の名称については、当初溝状遺構とし、 さらに道路状遺構と改め、最終的には墓道と呼ぶことにした。それは「生産地内の道」あるい は「墓地と集落とを結んだ道」等種々の解釈があるが、結論的には後者の立場にたって呼称し たものである。

墓道は東西2条を検出した。それぞれ東墓道。西墓道とし、いずれも中央部を農業用道路によって切断されているので、それぞれ北側をA区、南側をB区とした。東側墓道は北東部傾斜面から、西側墓道は北部傾斜面からそれぞれ台地頂部に向って走り、南端では合流するかに接近している。

東 A 区墓道 (第54図)

東側A区の北側は道路で切断され、南端は38号方形周溝墓台状部までの20.5mを確認した。 遺構の巾は 1.0m~ 2.1mで、深さ 0.3m~ 0.4mで一定せず、断面形は浅い逆台形を呈する、 遺構内の堆積土は2層からなり、上層は黒色土が20~30cmの厚さに堆積し、方形周溝墓・古墳の周溝上層の黒色土に類似する。下層は黄褐色粘質土である。遺構の底面一路面一は部分的凹凸がみられ、一様に硬く踏み固められ、土師質土器の細片、親指大の礫が混っている。土器片は器形の判明するものは皆無であった。

東B区墓道(第 138図・図版54上右・上左)

東B区はA区からの連続で、北端は道路で切断され、南端は4号方形周溝墓直前までの19.3 mを検出した。遺構は断面H-Iでは地山から逆台形状に2.15m掘削し、さらに中央部に巾65 cm、深さ約30cm前後の掘り込みがみられる。一段目の平担面と、二段目の穴の底部は硬く踏み固められていて、特に穴の底部には拳大から親指大の河原石、土師質土器の徴細な破片が混入している。

遺構の中央部には、この楕円形の穴が23個(表)が一列に並び、間隔は一定しないが、中心間の距離はおよそ $70\sim100$ cmである。断面H-Iにみられた楕円穴の礫の混入は、23個のうち20個にみられた。

なお、東B区の北側では、丸山20号墳南東部周溝が重なり、周溝底面より55cm上部に路面が位置している。したがって墓道は丸山20号墳周溝が50m前後埋没した段階で構築され、周溝の一部に道路の一部に利用したものと思われる。

西 A 区墓道 (第41図)

北端は道路予定地外にあり、大半ま16号方形周溝墓東辺と重なり、南端は道路で切断され西

B区へ続く。全長29.3mを測った。遺構の巾は最大で 3.3m、最少で 1.4m、深さは15~40cm の間で一定しない。底面は凹凸があり硬く踏み固められ、砂礫等が混入する。東B区にみられた溝中央の穴は、わずかに痕跡を残している。

	規模	中心間の距離
P 1	25×66 cm	9 0 cm
, 2	7 0 × 5 1 cm	
" 3	6 5 × 4 9 cm	8 0 cm
" 4	6 2 × 5 4 cm	8 0 cm
% 5	5 6 × 5 8 cm	9 8 cm
% 6	7 9 × 5 1 cm	1 1 3 cm
<i>"</i> 7	5 2 × 4 8 cm	9 2 cm
% 8	5 5 × 5 1 cm	8 8 cm
<i>"</i> 9	6 7 ×·5 0 cm	8 6 cm
% 10	5 7 × 5 3 cm	8 7 cm
* 11	6 6 × 5 6 cm	9 2 cm
% 12	5 8 × 5 2 cm	9 0 cm
* 13	6 0 × 4 5 cm	6 3 cm
% 14	5 9 × 5 0 cm	— 7 1 cm
<i>n</i> 15	5 5 × 4 4 cm	7 5 cm
<i>*</i> 16	5 5 × 4 4 cm	7 9 cm
* 17	6 8 × 4 4 cm	7 8 cm
<i>*</i> 18	5 7 × 4 5 cm	7 2 cm
* 19	5 6 × 4 9 cm	6 8 cm
* 20	5 9 × 5 1 cm	7 6 cm
* 20 * 21	6 3 × 5 0 cm	7 6 cm
* 21 * 22	5 9 × 4 9 cm	7 3 cm
" 23	5 5 × 3 3 cm	7 3 cm
" Z3	υυ∧υσcm	

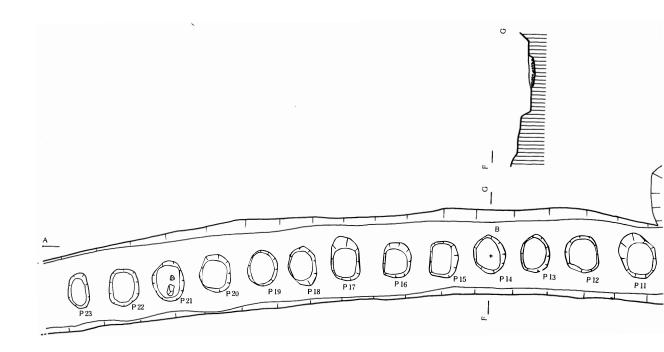
表 東 B 区墓道・楕円穴計測表

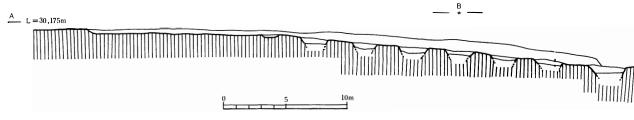
16号方形周溝墓の南東部周溝の深さは50cmで、墓道底面のレベルは、溝底から40cm上部に位置している。したがって16号方形周溝墓より後出し、周溝が40cm前後埋没する過程で構築されたことを物語っている。

西B区墓道 (第34図、図版54下)

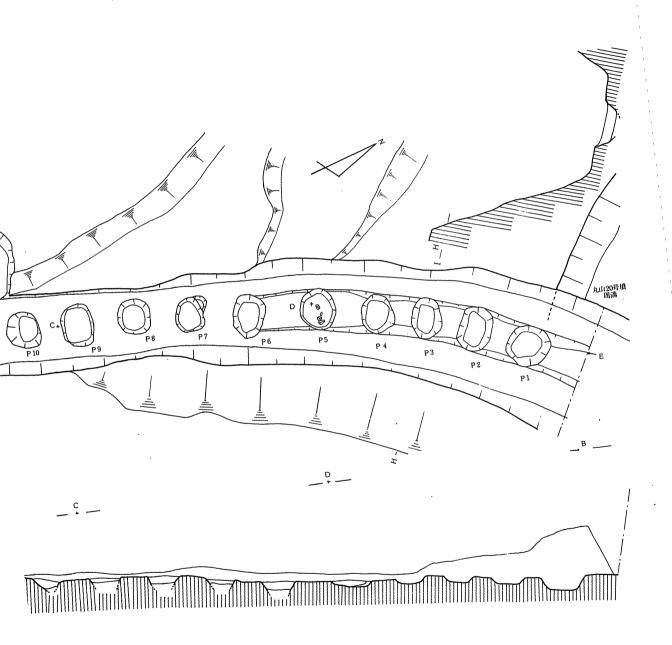
南端と西A区との間は、道路で切断され、北端は1号方形周溝墓東辺で消滅する。断面形は 浅い逆台形を呈し、底面の両端がやや深くなる。全面硬く踏み固められている。遺構内の堆積 は上層の黒色土、下層の黄褐色粘質土の2層からなる。下層の黄褐色粘質土中より須恵器破片 (高台环)が出さした。

以上4区にわけて記述したが、これらは東A区において、18・38号方形周溝墓と、西A区において16号方形周溝墓と、東B区においては丸山20号墳とそれぞれ複合関係にあり、以上のどの遺構よりも後出することが確かめられた。また遺構の年代の下限については明らかにし得なかったが、少なくとも須恵器坏を目安とすることが出来よう。





第138図 墓 道(東側B区)



1) はじめに

塚原中世墳墓群は第8号および第9号方形周溝墓付近から発見され、調査した墳墓は46基であった。墳墓は、いずれも土壙墓で、46基の土壙の中から40体の人骨が出土した。

40体の人骨は成人骨24体(男性12、女性11、不詳1)、幼小児1体、不詳(年令推定不能) 15体であった。40体のうち火葬人骨が2例あったが、他は土葬墓であった。

人骨は、円形、楕円形あるいは隅丸方形を呈した土壌の中に一人ずつ丁重に埋葬されており、 合葬された例はない。また、老若男女が入り混っている。したがって塚原中世墳墓群は、たと えば戦争のような事件によって一挙に大量の死者を出した人々の墳墓でななくて、遺跡付近に 生活を営んだ庶民の墓地ではなかったかと考えられる。

なお人骨の所見については、付論(2)塚原中世墳墓群出土の人骨を参照されたい。

2)調査の概要

塚原中世墳墓群(以下 墳墓(群)と呼び、古墳(群)と区別したい)は、道路予定地の中央線より南側の、くぬぎ塚と三段塚それに丸山6号墳にはさまれた第8号および第9号方形周溝墓一帯に広がっていた。

墳墓は方形周溝の封土や周溝それに丸山6号墳の周濠(溝)内から発見された。

遺跡付近はかって多数の古墳が築かれていたが、後世の開墾によって封土は削られ、周濠は埋め立てられて平担な畑地となっていた。そのため、土壌の大部が削られ辛じて床面付近を保っていた。中には封土とともに完全に削り取られてしまったものもあったことと思われる。また周濠(溝)内に掘り込まれた土壌は比較的よく残っていた。周濠(溝)がかなり埋まって、窪地になったような状況のときに土壌を掘ったものらしい。

いずれの土壙も、上部は大かれ少なかれ削平されていたので、土壙の上面を正確に確認できないばかりか、封土の状況がわからない尾窪中世墳墓群の場合は、土饅頭形の封土をもち、封土の下部に円形あるいは方形の土壙があった塚原の場合も尾窪と同じように土壙の上部に土饅頭形の封土をもっていたものと思われるが、確認できなかった(図版1)

墓域は、第8号および第9号方形周溝墓一帯に広がっており、群集墓を呈していた。土壙の中には切り合ったものもあった。

墳墓は、土拡の形や被葬者の性別あるいは年令によって埋葬地を異にしないばかりか、幾つかのブロックに分けることもできない。したがって、ある時期にこの地が墓地として選ばれ墓地が継続して営なまれていたが、何らかの原因によって墓地が営まれなくなって廃棄せられたものと思われる。墓地として利用された期間は墳墓の数から見てそれほど長期にわたったとは考えられない。また墳墓を築く場合、墓域内のあちこちに土壙を掘って埋めたらしく、規律性がない。

発見された46墓の墳墓のうち、45基(第1-21、23-46号墓)の調査を行なった。残り1基 (第47号墓)は考古学班によって調査が行なわれた。 第8表 塚原中世墳墓一覧

単位はcm

第 8			Ne .				単位はcm	
墳墓番号		土 場		14 1	<u> </u>	骨		備考
	形	縦×横×深	方 向	性別	年令	姿 勢	頭 位_	
1	円	100× 100×92		男性	壮年	腹臥屈葬	西南	
2	円	105× 105×90		女性	壮年	左側臥屈葬	西南	坏 1
3	楕 円	135× 120×87	N-3-E					人骨なし
4	円	110× 110×78		不 詳	熟年	右側臥屈葬	北	
5	楕 円	113× 105×68	N —16— E	男 性	熟年	仰臥屈葬	北	坏4
6	楕 円	90× 75×73	N — 150—W	女 性	熟年	座臥屈葬	南向き	坏1
7	隅丸方形	113× 100×35	N68W	女 性	熟年	座臥屈葬	西向き	找 了3
8	隅丸方形	115× 92×35	N-66-W	不 詳	不明	屈 葬 ?	西北?	ታ不1
9	楕 円	120× 75×55	N-17-E	男 性	熟年	仰臥屈葬	北	
10	楕 円	145× 90×63	N — 138—W	男 性	熟年	仰臥屈葬	南	
11	円	115× 115×18		不 詳	不 詳			火葬骨 f41
12	円	110× 110×60		不 詳	不 詳	不 詳	不 詳	坏1
13	楕 円	118× 95×85	N -57-W	不 詳	小児	不 詳	不 詳	ታ 不1
14	楕 円	130× 98×78	N -54-W	女 性	熟年	座臥屈葬?	西向き	<u></u> ታ⊼2
15	円	100× 100×70		男 性	熟年	座臥屈葬	西向き	坏1
16	楕 円	145× 115×60	N -52-W	不 詳	不詳	不 詳	不 詳	
17	楕 円	114× 78×40	N − 171−W	女 性	熟年	右側臥屈葬	南 西	(
18	円	115× 115×65		不 詳	不詳	座臥屈葬	東向き	
19	楕 円	150× 110× ?	N -25-E	男 性	熟年	不 詳	不 詳	<u> </u>
20	楕 円	110× 65×30	N -51-E	男性	不詳	屈 葬	北東	
21	楕 円	120× 85×62	N-40-E	女性	壮年	屈 葬	北東	
22					,		,	22号墓存在せず
23	円	125× 125×75		不詳	不詳	右側臥屈葬	北東	ታ ኛ 7
24	椿 円	105× 70×65	N -63-W	不 詳	不詳	屈 葬 ?	西	,
25	円	100× 100×80						人骨なし
26	円	75× 75×85		不 詳	不詳			火葬 坏1
27	椿 円	85× 55×85	N-9-E	男性	熟年	仰臥屈葬?	北	7(37-7).2
28	格 円	115× 87×64	N -26-E	不詳	不詳	右側臥屈葬	北東	ታ 1
29	格 円	98×80 ×55	N -23-E		' "'	TI MID (MAT)	10 10	人骨なし
30	椿 円	100× 63×35	N -16-E	女性	壮年	右側臥屈葬	北東	坏2
31	椿 円	120× 100×91	N -34-E	不詳	不詳	不 詳	不詳	报 1
32	椿 円	130× 110×89	N-2-W	不詳	不詳	座臥屈葬	北向き	λη· 1
33	円	125× 125×64	N 2 W	不詳	不詳	不 詳	不詳	
34	格 円	120× 104×74	N - 6 - E	-1- рт	11. 14.	т. рт	71' PT	人骨なし
35	格 円	120× 75×53	N -34-E	不詳	不詳	屈 葬	北東	NH30
36	格 円	125× 73×40	N -28-E	女性	不詳	右側臥屈葬	北東	
37	楕 円	97× 63×48	N -25 - E N -25 - E	男性				
38	椿 円	124× 82×47	N -27 - E	女性	壮年		北東	
39	不詳	121/ 02/11	14 21 - 15	男性	壮年	屈 葬 ? 不 詳	不詳	
40	作 円	88× 65×37	N-97-W	不詳	不詳	屈葬?	西?	ነ ⊼1
41	不詳	00/ 03/37	14 31 - 14		不詳		不詳	1-1-1-1 1-1-1-1
42		122× 72×43	N - 34 - F	女性	か辞り熟年			
42		1240 14043	N -34-E	女性		右側臥屈葬	北東北東	
	不 詳	120× 68×45	N_ 150 W	不詳	不詳	屈葬	北東南西	
44			N- 159-W	男性	熟年	右側臥屈葬		
45	精 円 核 円	130× 82×77	N-12-E	男 性	壮年	仰臥屈葬	北東	人品なり
46	楕 円	106× 80×35	N-8-W					人骨なし
47								人骨なし、古銭

45基の墳墓はすべて土壙墓であった。土壙の形は円形と楕円形土壙が最も多く29基あり、次いで円形土壙が11基そして隅丸方形土壙が2基あった。残り3基は、後世の攪乱によって形がわからなかった。

尾窪墳墓群の場合は、円形と方形土壙があった。そして円形土壙はコンパスで描いたごとく 正円に近く、方形土壙は定規で引いたように直線的であった。

ところが、塚原墳墓群の場合は円形といっても不整形なものが多い。楕円形の場合は長方形に近いものや円形に近いものなどまちまちで定まらない。しかも土壌の緑は不整形である。また隅丸方形の場合は、全体に方形を呈しているが定規で引いたごとく直線的にならず、やや丸味をもっている。

土壙の壁面は、やや直線的なものもあるが、一般に荒っぽく掘られたものが多くて凹凸がみられる。尾窪墳墓群のように定規で引いたように直線的になるものはなかった。

土壙の床面は、一般に平担になっていたが、第36号や第37号のように傾斜したものが5基あった。床面が平担になったものでも多少の凹凸がみられた。側壁は床面に近くなるとしだいに丸味をもって床面に移行する。このため、側壁と床面との境界は角をつくらない。

以上述べたように、塚原墳墓群の場合は、土壙の形が定形化していないばかりか、整美さがない。尾窪墳墓群の土壙と比較して対照的であった。

土壙の方向は、隅丸方形土壙 (2基) の場合、2基とも長軸を東西においていた。また楕円 形土壙 (29基) の場合は南北にとるものが23基で、東西にとるものが6基あった。

土壙はいずれもやや荒っぽく掘り下げただけで、壁面や床面に粘土を塗り付けたり、彩色するなど、特に手を加えたものはない。したがって、土壙の優劣はきめがたい。

3) 埋葬の方法

埋葬の方法としては、火葬と土葬があった。45基のうち、38基が土葬で、火葬は2基であった。残り5基は腐敗してしまっていたけれども、もし火葬骨であればおそらく残ったものと思われるので、土葬であった可能性が強い。

火葬と土葬の土壙の形や大きさには差はない。第11号墓(火葬)の土壙が浅いのは、元来浅 く掘られたものではなく、古墳の封土に掘り込んだため、後世の削平によって土壙が浅くなっ たものと考えられる。

尾窪墳墓群の場合は、埋葬にあたって、木棺(桶)を使用していたらしい。62基の墳墓のうち22基から鉄釘が発見された。鉄釘の出ない墳墓は、桶あるいは鉄釘を使用しない棺を利用したらしく、土壙の中央付近にポッンと入骨が発見された。このように尾窪の場合は埋葬にあたって棺あるいは桶が使用されていたのであるが、塚原では棺あるいは桶の使用に対する積極的な資料を発見することができなかった。

45基を調査したけれども、鉄釘は1例も発見できなかった。

土葬人骨は、土壙いっぱいに骨がひろがったものが多くて、土壙の中央付近にポッンと出土 するものは僅かであった。前者の場合は人骨と土壙壁面との空間が狭いばかりか、土壙が不整 形でしかも床面が整っていないので、埋葬にあたって棺あるいは桶の使用はなかったものと考えられる。後者の場合は、人骨と土壙壁面との間に空間があり、容器を使用できないことはないが、容器を使用したのであれば土壙をもっと大きく(尾窪程度)掘らなければならないし、土壙の平面形や床面をもっと容器を納めやすいように整備しなければならない。

以上のことから、塚原墳墓群の場合は、遺体を容器に納めず直接土葬したものと思われる。 このことは尾窪墳墓で行なわれたように容器に納めて埋葬する方法と大きく異なり塚原の場合 がより古い埋葬方法である。

最後に火葬人骨は、土拡の床面に散乱した状態で発見された。もちろん、鉄釘の発見もなく、容器に納骨されて埋められたとする積極的資料は得られなかった。しかし火葬骨を埋めた土壌」は、他の土葬人骨のそれと形や大きさがかわらないので、火葬骨を容器に入れて納めたとしても十分の広さがある。いずれであったかわからない。

4) 埋葬の姿勢

埋葬姿勢は一般に土壙の形と相関する。たとえば、尾窪墳墓群の場合は円形土壙から座臥屈葬がそして方形土壙は仰臥屈葬が主体であった。埋葬姿勢は容器の形に大きく左右され、さらに容器の形は土壙の形を決定する。ところが、塚原墳墓群の場合は、容器に納めて埋葬した可能性は薄く、直接土葬したものと考えられる。したがって塚原墳墓群の埋葬姿勢および方向は、尾窪のそれと同次元で解釈することはできないのではなかろうか。

塚原墳墓群では土葬人骨が38体発見された。この38体の人骨のうち、埋葬姿勢のわかったものは30体で、残り8体は保存不良のため姿勢を確認できなかった。

30体の埋葬姿勢は次のように分類できた。座臥屈葬(座臥屈葬とおもわれるものも含む、以下同じ)6体、仰臥屈葬6体、右側臥屈葬8体、左側臥屈葬1体、腹臥屈葬1体、それに屈葬ではあるが、仰臥か腹臥あるいは側臥のいずれかわからないもの8体であった。埋葬姿勢は上記5形態に分かれるが、性の違いによって姿勢に差異は認められなかった。

次いで埋葬姿勢と土壙の形との関係についてみてみたい。

土壙の形は前記したように円形と楕円形それに隅丸方形があった。円形土壙は11基発見され、そのうち8基から土葬人骨が出土した。8体のうち6体の埋葬姿勢がわかった。内訳は座臥屈葬2休、右側臥屈葬1体、腹臥屈葬1体であった。

楕円形土壙は29基発見され、そのうち25基から人骨が出土し、21体の姿勢がわかった。内訳は、座臥屈葬3体、仰臥屈葬6体、右側臥屈葬6、それに屈葬だけれども仰臥か側臥かわからないものが6体あった。

隅丸方形在拡は2基発見され、座臥屈葬が1体と、屈葬が1体であった。

以上の土壙の形態と埋葬姿勢をながめたけれども、両者の間に相関関係を認めることができなかった。

埋葬の方向は土壙の形に左右されやすい。特に側臥屈葬や仰臥屈葬それに腹臥屈葬の場合は 体軸と土壙の長軸がほぼ一致しないと土壙内に納めることが出来ない。ただ座臥屈葬の場合は、 土壙の形に左右されることなく方位を決定することができる。次に、埋葬姿勢別に方位をみて みたい。

座臥屈葬人骨は6体あったが、南向き1体、北向き1体、東向き1体そして西向きが3体であった。西向きは6体のうちの半数の3体あって注目される。尾窪の場合、座臥屈葬6体のうち5体(残り1体は方向不詳)が西向きであった。塚原の場合は尾窪と同じように座臥屈葬は西向きに埋める習慣があったらしい。

仰臥屈葬人骨は6体あった。内訳は南頭位1体、北頭位3体、それに北東頭位2体であった。 右側臥屈葬人骨は8体あった。内訳は北頭位1体 `南西頭位2体、それに東頭位5体であった。

左側臥屈葬人骨は南西頭位2体、それに北東頭位5体であった。

左側臥屈葬人骨は南西頭位1体、腹臥屈葬人骨も南西頭位1体。最後に屈葬だけれども側臥か仰臥かわからないもの8体は、北東頭位5体、北西頭位1体、それに西頭位1体であった。 以上、姿勢別に頭位をながめてみたが、先述したように座臥屈葬を除く他の人骨の方向は土壙の方向をみてみたい。

土壙は、円形 (11基)、楕円形 (29基)、隅丸方形 (2基) に分けることができる。円形土壙は主軸の方向を出すことはできないので、楕円形土壙と隅丸方形土壙について主軸の方向を出してみた。なお、主軸の方向を南北と東西の2大別した。N-45-EからN-45-Wの間に主軸がくるものを南北とし、他を東西に分類した。その結果、楕円形土壙の場合、長軸が南北にくるもの23基、東西にくるもの6基であった。隅丸方形土壙の場合は、2基とも東西であった。埋葬姿勢別の頭位と、土壙の方向について述べたが、ここでまとめてみたい。まず、座臥屈葬の場合は6体のうち3体が西向きであったので、西向きが一般的であったらしい。

右側臥、左側臥、腹臥、仰臥屈葬の人骨(24体)を土壙の要領により南北と東西に2大別すると、北頭位17体、南頭位5体、西頭位2体となる。このことから、座臥屈葬を除ぐ他の埋葬形式の場合頭を北に置くことが一般的であったらしい。しかし北頭位以外のものもあることを忘れてはならない。

5) 墳墓各説

第1号墓(図版63)

円形土壙、直径100cm、深さ92cm、やや方形に近い円形の土壙墓である。土壙の西側は大きく削られ、その部分は床面だけを残していた。土壙の壁面は直線的にならず、ゆるやかなカーブをして床面に移行する。人骨は床面いっぱいに広がっている感じで、壁面との間にそれほど空間が認められない。

人骨は壮年男性で頭を西南に向けた腹臥屈葬であった。腹臥屈葬はめずらしい埋葬姿勢である。頭蓋骨はすでに腐敗してしまって粉末状になっていたが、下半身の保存は比較的良好であった。両下肢ともそろえて屈してやや右に倒し、上肢を腹部にあてうつぶせになっていた。

第2号墓(図版63)

円形土壙、直径 105cm、深さ92cm、土壙の平面形はやや正円に近いけれども、側壁は直線的にならず、ゆるやかにカーブして床面に移行する。人骨は床面いっぱいに広がっている感じで壁面との間にそれほど空間が認められない。このことはすべての墳墓に共通している。

人骨は壮年女性で、頭を西南に向けた左側臥屈葬であった。左側臥屈葬例は塚原墳墓群の中でただ一例であった。左側を下にして横向きになり上下肢を強く屈していた。頭蓋は左側頭部を下にしているが、頭頂部がやや下がって下顎がやや高くなっていた。これは、床面の凹凸のため、頭頂部が凹みの中に落ち込んだためである。上肢は肘関節を強く屈して胸部にあてていた。下肢は股関節や膝関接を強く屈しており、縄文人にこのように屈した例が多い。

なお、顔面付近に坏が1個副葬されていた。

第 3 号墓 (図版63)

楕円形土壙、長径 135cm、短径 120cm、深さ87cm、土壙の主軸の方向 $N-3^{\circ}-E$ 、 やや大形の土拡であったが、人骨や副葬品はなかった。人骨は腐敗してしまったものと思われる。

第4号墓 (図版63)

円形土壙、直径 110cm、深さ78cm、人骨は床面いっぱいに広がった感じで、側壁と接していた。

人骨は熟年と推定されるが、性別はわからない。頭を北に向けた右側臥屈葬であった。下顎、 上顎の一部、乳様突起は取り上げることができたけれども、他の骨は粉末状になっていて埋葬 姿勢を確認するのがやっとだった。

第5号墓(第1図、図版2)

楕円形土壙、長径 113cm、短径105cm、深さ68cm、土壙の方向N-16℃E、土壙いっぱいに人骨が広がっており、特に頭蓋骨は側壁と接していた。

人骨は熟年男性で、頭を北に向けた仰臥屈葬が立った状態であった。上肢はいずれも肘関接で屈して手を下顎付近にあてていた。下肢は左右の大腿が並んで右側に倒れていた。おそらく両足をそろえて屈していたものと想像される。

なお、5号人骨には坏が4個副葬されていた。うち3個は右上腕と頭蓋の間から立った状態で発見され、残り1個は足の付近に上向に置かれていた。

第6号墓(図版63)

楕円形土壙、長径90cm、短径75cm、深さ73cm、土壙の主軸の方向N — 150²W、やや小形の土壙の中央部付近に人骨がかたまっていた。

人骨は熟年女性で、顔を南に向けた座臥屈葬であった。顔面部を床面につけ、後頭部が上に

なっていた。また、左右の大腿骨は頭蓋をはさむように扇状に広がっていた。このような出土 状況は座臥屈葬の特徴である。つまり、両膝を立て腰を床につけて背を伸ばした姿勢(座臥屈 葬)で埋葬した場合、普通、頭蓋は前方に落ちて両下肢の間にはさまれた格好になり、顔面部 が下になる。

なお、右側頭部付近から坏が1枚やや傾いた状態で発見された。

第7号墓 (図版64)

隅丸方形土壙、縦 113cm、横 100cm、深さ35cm、方形周溝墓の封土を利用して土壙が掘られたため、後世の開墾によって削平せられ、浅い土壙となってしまった。土壙の主軸はN-68 $^{-}$ W。

人骨は熟年女性で顔を西に向けた座臥屈葬であった。頭蓋骨は後頭部付近は取り上げることができたが、他の部分は粉末状になっていた。大腿は頭蓋骨をはさんで左右に大きく開いており、これは座臥屈葬の特徴である。

なお、頭蓋骨の西の壁面に接して3個の坏が副葬されていた。1個は裏返しになり、他の2個は上向きであった。

第8号墓 (図版64)

隅丸方形土壙、縦115cm、横92cm、深さ35cm、 土壙の主軸N-66°W、第7号墓と隣接した位置で発見された。7号墓と同じように方形周溝墓の封土を利用して土壙が掘られたものである。

人骨は西北頭の屈葬と思われるが、性別年令等詳しいことはわからない。頭蓋の一部と下顎の一部それに大腿(左)が発見された。なお、頭蓋骨付近から坏が1個裏返しの状態で発見された。

第9号墓(第2図、図3版)

楕円形土壙、長径 120cm、短径75cm、深さ55cm、土壙の主軸N-17°E。

人骨は熟年男性で、頭を北に向けた仰臥屈葬であった。頭蓋骨はやや左に傾むいていた。そして左下肢は膝関節を軽く屈し右に倒れていた。右下肢は腐敗してしまっていたけれども、おそらく左と並べて右に倒していたものと思われる。推骨は粉末状になっていたが推体の前面が上を向いていたので、仰臥であったことは明らかである。

第10号墓 (図版64)

楕円形土壙、長径 145cm、短径90cm、深さ63cm、土壙の主軸N- 138°W。

人骨は熟年男性で、頭を南に向けた仰臥屈葬であった。頭蓋骨はやや左に傾むいていたが、 ほぼ正常な位置にあった。下肢は両下肢とも股関節および膝関節を強く屈し、膝関節は腹部に 位置していた。

第11号墓 (図版64)

円形土壙、直径 115cm、深さ18cm、土壙の上面は開墾によって削り取られてしまい、底部付近を残すのみであった。土壙の床面には火葬骨が広がっていた。火葬骨は1個体分で、いずれも細片となっているため、性別や年令等の特徴をつかむことができなかった。

第12号墓 (図版64)

円形土壙、直径 110cm、深さ60cm、土壙の西側付近から大腿骨片が発見されたが、性別年令等はわからない。なお、大腿骨の付近から坏が1個上向きになって副葬されていた。

第13号墓 (図版65)

楕円形土壙、長径 118cm、短径95cm、深さ85cm、土壙の主軸N-57°W。

人骨は小児と思われる。粉末化した頭蓋骨のみであった。小児骨は本例が唯一であった。 なお、頭蓋に接して坏が1個立った状態で副葬されていた。

第14号墓 (図版65)

楕円形土壙、長径 130cm、短径98cm、深さ78cm、土壙の主軸N-54°W。

人骨は熟年女性で、顔を西に向けた座臥屈葬と思われる。頭蓋骨のみで下肢骨が発見されなかったのではっきりしたことは言えないけれども、顔面は床面につき、後頭部が上になっており座臥屈葬の特徴が現われている。

なお、坏が2個副葬されていた。

第15号墓 (第3図、図版4 図版65)

円形土壙、直径 100cm、深さ70cm。在拡は比較的小さい。

人骨は熟年男性で、顔を西に向けた座臥屈葬であった。頭蓋骨は細かく割れていた。そして 頭蓋骨の左右に大腿骨が扇状に開いていた。座臥屈葬の特徴である。

なお、右大腿骨付近に坏が1個割れて副葬されていた。

第16号墓 (第3図、図版4 図版65)

楕円形土壙、長径 145cm、短径 115cm、深さ60cm、土壙の主軸N-52℃W。土壙は比較的大きい。床面から人骨が発見されたけれども、粉末状になっており、性別年令等はわからなかった。

第17号人骨 (第3図、図版3 図版65)

楕円形土壙、長径 114cm、短径78cm、深さ40cm、土壙の主軸の方向N-171 $^{\circ}$ W 。土壙はかなり小さくて、人骨は窮屈そうに埋まっていた。

人骨は熟年女性で、頭を南西に向けた右側臥屈葬であった。頭蓋骨は右側頭部を下にしていた。両下肢はそろえて右に倒していた。ところが、上肢はいずれも肘関節を強く屈し手を胸部にあて、左右の上腕はあたかも仰臥のごとく身体の左右に位置していた。おそらく、軀幹部をやや上向きにそらした側臥のためにこのような姿勢になったものと思われる。

第18号人骨 (図版65)

円形土壙、直径 115cm、深さ65cm、人骨は、顔を東に向けた座臥屈葬であったが、性別年令はわからない。下肢骨は左右に開いており座臥屈葬の特徴が現われている。頭蓋骨は股間部に落ちてさらに少し回転したらしく、やや離れた位置から発見された。

第19号墓 (図版59)

楕円形土壙であったと思われるが、後世攪乱を受けて土壙が壊され、人骨の大部分は付近に 再埋葬されていた。土壙内には右下肢と副葬の坏が3個残っていた。人骨は熟年の男性であっ た。

第20号墓 (図版66)

楕円形土壙、長径 110cm、短径65cm、深さ30cm、土壙の主軸の方向はN-51°E。

人骨は年令不詳の男性で、頭を北東に向けた屈葬であった。側臥か仰臥のいずれかであるが、 軀幹部が腐敗してしまっていたのではっきりしない。頭蓋骨はほとんど残っていなかった。下 肢は左右の大腿と胫骨が膝関節で屈した状態であった。

第21号墓 (図版66)

楕円形土壙、長径 120cm、短径85cm、深さ62cm、土壙の主軸の方向N-40°E。

人骨は壮年女性で、頭を北東に向け屈葬であった。頭蓋骨はほとんど腐敗していた。下肢は大腿骨が1本、主軸と直角になるような格好で出土した。下肢を屈しなければこのような位置にはならないで、屈葬であったことは明らかであるが、本人骨が側臥であるのかあるいは仰臥であるのかわからない。

第23号墓 (図版66)

円形土壙、直径 125cm、深さ75cm、人骨は頭を北東に向け、右側臥屈葬であったと思われる。性別および年令はわからない。頭蓋骨はほとんど粉末状になっており、取り上げることができなかった。推骨もその位置は確認できたが、形状を露出するまでに到らなかった。下肢は左大腿骨の骨体部の一部が残っていた。そして、人骨をとりかこむかのように7個の坏が副葬されていた。坏は裏返しになっていたものや、立ったもの、上向きのものなど、様々な状態で出土した。

第24号墓 (図版66)

楕円形土壙、長径 105cm、短径70cm、深さ65cm、土壙の主軸の方向N-63°W。

人骨は西頭位で、屈葬とおもわれる。頭蓋骨の破片のみの出土のため、性別等はわからなかった。

第25号墓 (図版67)

円形土壙、直形 110cm、深さ80cm、人骨なし。

第26号墓 (第4図 図版67)

円形土壙、直径75cm、深さ85cm。比較的小さい土壙だが、直径に比べて深い。床面近くに 火葬骨が散乱していた。骨は小さく割れており、性別および年令はわからない。

第27号墓 (第5図 図版67)

楕円形土壙、長径85cm、短径55cm、深さ85cm、土壙の主軸の方向はN-9°-E。土壙は比較的小さくて、人骨はかなり窮屈な姿勢であったらしい。

人骨は熟年男性で、頭を北に向けた仰臥屈葬であった。頭蓋骨は顔面部を正面に向け正常な 位置にあった。仰臥でなければ頭蓋がこのような位置にはこない。

第28号墓 (第5図 図版67)

楕円形土壙、長径 115cm、短径87cm、深さ64cm、土壙の主軸の方向N-26°E。

人骨は頭を北東に向けた右側臥屈葬であったが、保存が悪く性別および年令はわからない。 頭蓋骨は右側頭部を下にしていた。側壁にそって推骨が並び、下肢は左右の大腿を右に倒して いた。

なお、腹部付近に坏が1個上向きに副葬されていた。

第29号墓 (図版67)

楕円形土壙、長径98cm、短径80cm、深さ55cm、土壙の主軸の方向N−23℃E。人骨なし。

第30号墓 (図版67)

楕円形土壙、長径 100cm、短径63cm、深さ35cm、土壙の主軸の方向N-16℃E。土壙は比較的小さく、しかも長方形に近い。

人骨は壮年女性で、頭を北東に向けた右側臥屈葬であった。頭蓋骨はかなり腐敗してしまっていたが、下肢は比較的保存が良かった。下肢は左右とも膝関節を軽く屈し、右に倒していた。なお、右上腕の外側付近に坏が2個副葬されていた。坏はいずれも上向きであった。

第31号墓 (第5 図、図版3 図版67)

楕円形土壙、長径 120cm、短径 100cm、深さ91cm、土壙の主軸の方向N-34°-E。

人骨は腐敗してしまっていて、ごく僅かに骨粉が残っている程度であったため、姿勢等はわからない。なお、側壁に接して坏が1個上向きに副葬されていた。

第32号墓 (図版68)

楕円形土壙、長径 130cm、短径 110cm、深さ89cm、土壙の主軸の方向N-2°-W。

人骨は顔を北に向けた座臥屈葬であったが、性別および年令はわからない。両下肢を左右に 広げて屈し、その間に頭蓋骨があった。

第33号墓 (図版68)

円形土壙、直径 125cm、深さ64cm、人骨は下顎骨の一部と後頭骨の一部を取り上げることができた。 他の骨は腐敗してしまっていた。 そのため、人骨の年令等はわからなかった。

第34号墓(第6図、図版3 図版68)

楕円形土壙、長径 120cm、短径 104cm、深さ74cm、土壙の主軸の方向N--6°--E。人骨なし。

第35号墓 (第6 図、図版5 図版68)

楕円形土壙、長径 120cm、短径75cm、土壙の主軸の方向N--34-E。土壙の平面形はやや整っているけれども、床面はかなり荒っぽい土拡である。

人骨は北東頭位で屈葬であるが、粉末状に腐敗してしまっているため取り上げることができなかった。

第36号墓(第7図、図版5 図版69)

楕円形土壙、長形 125cm、短径73cm、深さ40cm、土壙の主軸の方向N--28--E。土壙の平面 形は比較的整っているけれども、床面は傾斜しているうえに凹凸まであって、かなり荒っぽい 土壙である。

人骨は成人女性で、頭を北東に向けた右側臥屈葬であった。

第37号墓(第7図、図版5 図版69)

楕円形土 壙、長径97cm、短径63cm、深さ48cm、土壙の主軸の方向N--25-E。土壙の平面形は整っているけれども、床面は急傾斜で、しかも凹凸がはげしい。土壙は最も深いところで48 cmであった。しかし、土壙の上面が後世相当削られているので、もっと深かったものと思われる。

人骨は熟年男性で、頭を北東に向けた仰臥屈葬であった。頭蓋骨はやや左に傾いていた。

なお、下顎骨には抜歯が認められた。この抜歯が風習的なものかどうかわからないが、左右 対称に抜去するやり方は風習的なものではないかと思われる。

第38号墓 (第7図 図版69)

楕円形土壙、長径 124cm、短径82cm、深さ47cm、土壙の主軸の方向N-27-E。

人骨は壮年女性で、頭を北東に向けている。土壙の大きさからみて屈葬であったと思われる。 頭蓋骨と上腕骨が粉末状になって発見された。

なお、土壌の上部から五輪塔が出土した。この五輪塔は墳墓群のあちこちに散乱しているものと同じ形式のもので、おそらく供養塔であろう。そしてこの五輪塔の編年は塚原墳墓群の編年を決定することであろう。

第39号墓

土壙は後世攪乱されてしまって、人骨が散乱していた。人骨は壮年男性であった。

第40号墓 (図版68)

楕円形土壙、長径88cm、短径65cm、深さ37cm。土壙の主軸の方向N-97-W。

人骨は腐敗してしまっていたけれども、西頭位で屈葬であったらしい。しかし性別および年 令はわからない。

なお、土壙の中央付近に坏が1個上向きに副葬されていた。

第41号墓

後世攪乱されたため、土壙は壊され、人骨が散乱していた。人骨は成人女性であった。

第42号墓 (第6回、図版6)

楕円形土壙、長径 122cm、短径72cm、深さ43cm、土壙の主軸の方向N-34°-E。

人骨は熟年女性で、頭を北東に向けた右側臥屈葬であった。頭蓋骨は右側頭部を下にしていた。下肢は側壁に接して強く屈し、左右をくっつけていた。

なお、土壙の上部から五輪塔が出土した。おそらく本墳墓の供養塔であろう。

第43号墓

土壙は床面近くまで削られてしまっていた。このため、土壙の形が正確につかめないばかりか、人骨も取り上げることができなかった。

ただ、残された人骨から判断すれば、北東頭位が屈葬していたらしい。

第45号墓(図版70)

楕円形土壙、長径 130cm、短径82cm、深さ77cm、土壙の主軸の方向N-12°E。土壙の床面

は中央部が大きく窪んで側壁に近づくにつれしだいに上がっている。

人骨は壮年男性で、頭を北東に向けた仰臥屈葬であった。頭蓋は腹部付近に転げ落ちていた。 上肢は肘関節で強く屈し、手は下顎付近においていたものと思われる。下肢は膝関節を強く屈 している。

第46号墓(第8図、図版6図版70)

楕円形土拡、長径 106cm、短径80cm、深さ35cm、土拡の主軸の方向N-8°-W。人骨なし。

要 約

1) 塚原中世墳墓群の調査

塚原古墳群の発掘にともなって、中世に編年される墳墓が46墓発見された。

中世の墳墓群は第8、9号方形周溝墓それに丸山6号墳一帯に分布して、一つの墓域を形成していた。墳墓は古墳の封土や周溝の中に土壙を掘って埋葬していた。ところが、後世になって遺跡付近の開墾が行なわれ、封土は削りとられて畑地になった。このため、封土の中に築いた墳墓は完全に消滅したり、土壙の大部分が削り取られたりしてしまった。したがって、尾窪中世墳墓のように、土壙の上に饅頭形の盛り土があったかどうか確認できなかった。

墳墓群は46基発見されすべて調査した。墳墓群は一つの墓域を形成し、小ブロックに分けることができなかった。中には土壙を切り合ったものもみられた。

2) 土 拡

土壙の形は、円形と楕円形それに隅丸方形があった。楕円形土壙が最も多く(29例)、次いで円形土壙(11例)であった。隅丸方形土壙は僅か2例であった。土壙は平面形が不整形なものが多いし、側壁はゆるやかにカーブしながら床面に移る。床面は凹凸が多く、中にはかなり傾斜のついたものもあった。しかも、土壙は一般に小さく、かなり窮屈な格好で埋葬したものが多い。このように塚原墳墓群の土壙はかなり荒っぽく掘られたものが多いばかりか、全体にやや小形であった。

土壙はいずれも荒っぽく掘り下げただけで、二次的に装飾をほどこしたりしたものはない。 46基の土壙の形態にはそれほど大きな差異はみられないばかりか、土壙相互に優劣をきめる だけの積極的な資料は見い出し得なかった。土壙相互にそれほど大きな差異がみられないので、 墳墓群は一時期に営まれたものと考えられる。

人 骨

調査した46基の墳墓のうち40基から40体の人骨が発見された。人骨は1個の土壙に1人ずつ 埋葬されており、合葬されたものは1例もなかった。

埋葬にあたって火葬と土葬とがあった。40体のうち火葬は2体で、残り38体は土葬であった。

したがって、当時土葬が一般的であったことがわかる。

土葬された38体の人骨は成人24体(男12、女11、不詳1)幼小児1体、それに年令不詳13体であった。幼小児骨の出土が少ないけれども、幼小児の場合、成人に比べて一般に骨の保存がよくないので、年令不詳の13体や、人骨の発見されなかった土壙墓(6基)の多くが幼小児ではなかったと思われる。また、性別や年令によって埋葬地域や土壙のちがいは認められなかった。

埋葬姿勢

土葬人骨の埋葬姿勢は、すべて屈葬であった。土壙が小さいので当然屈葬でなければ納めることができない。屈葬は、さらに、座臥屈葬(6例)仰臥屈葬(6例)右側臥屈葬(8例)左側臥屈葬(1例)腹臥屈葬(1例)に分かれた。特にひいでた埋葬姿勢がみられない。

人骨の埋葬方向は土壌の方向によって決定される。しかし座臥屈葬の場合は土壌の方向とは関係なく決定することができる。6例の座臥屈葬のうち、3例が西向きに座らせていたので、座臥の場合は西向きが一般的であったように思われる。側臥や仰臥それに腹臥屈葬の場合は土壌の方向に左右される。頭位を東、西、南、北と大きく分けてみると、北頭位(17体)南頭位(5体)西頭位2体の順であった。つまり、座臥屈葬を除く他の埋葬姿勢の場合は北頭位が一般的であったことがわかる。

土壙の形別に埋葬姿勢を分けてみたけれども、両者に相関は認められなかった。つまり、埋葬姿勢と土壙と形とは無関係である。埋葬にあたって棺または桶を使用すれば、土壙は棺桶の形にあわせて掘られるのが普通である。けれども、塚原墳墓群のように直接土葬されるような場合は土壙はそれほど拘束されずに掘ればよい。

埋葬の方法

塚原墳墓群の場合、埋葬にあたって容器(棺桶)は使用しなかったのではないかと思われる。 おそらく、直接土葬したものと思われる。それは次の理由による。

- 1)人骨は窮屈そうに床面いっぱいに広がり、側壁と接したものが多い。
- 2) 棺あるいは桶を使用するためには土壙を整備しなければ納めることができない。土壙の 平面は一般に不整形で、側壁と床面は角をなさずゆるやかにカーブしてる。また床面は凹凸ば かりか傾斜したものが多い。もし容器を作らねばならず考えられないことである。
 - 3)土壙内から鉄釘等、容器を使用したと考える積極的な資料が得られなかった。

塚原中世墳墓群の編年

塚原中世墳墓群の編年については尾窪中世墳墓群と比較しながら編年を考えてみたい。

尾窪中世墳墓群はすでに報告されているように、鎌倉から室町時代にかけて営まれた墳墓群である。尾窪の場合は土壙は定形化し、埋葬にあたって棺あるいは桶が用いられていた。ところが、塚原の場合は埋葬にあたって棺あるいは桶を使用したとは考えられず、直接遺体を土壙

に納めたらしい。

尾窪は小さな谷をへだてた向いの丘にあり、両者の埋葬の違いを地域差と考えることはできない。地域差でなければあとは時代差でしかない。

塚原墳墓群が尾窪と同時期かあるいは新しい時期に墓地が形成されたものであれば、埋葬に あたって容器(棺・桶)を使用したものと思われる。

塚原の場合容器を使用せず、埋葬形式としてはより古い段階のものである。したがって塚原墳墓群は尾窪墳墓群が営まれる前の(古い)段階ではないかと考えられる。塚原墳墓群は、尾窪よりも古いけれども、どれくらい古いものかわからない。塚原墳墓群が廃止せられてのち引き続いて尾窪墳墓群が開始せられたかもしれないし、あるいは、塚原から尾窪へ移る間にやや時間があって、その間は別の地点に墓地が形成されていたのかもしれない。ただ、塚原墳墓群は古墳の封土や周濠の中に営まれていたので、古墳時代よりもさかのぼることはない。

埋葬形成からは上記の編年が考えられるが、さらに詳細な編年については考古学にゆずらね ばならない。

附 丸尾 5号墳出土の人骨の埋葬について

丸山5号墳の内部主体である箱式の組合せ石棺の中に、頭をたがいちがいにして合葬されていた。まず男性を南頭位で仰臥伸展させ、そのあと女性を北頭位で腹臥伸展によって追葬している。両者は骨盤が重なり合っていた。

石棺は密閉されていたけれども、あけてみると骨の存在は良くなかった。特に蓋石の接点付近の骨は漏れのためなくなっていた。骨はさわるとポロポロと崩れるほどもろかった。それでも、幸い棺内に土がは入っていなかったので、人骨をいじくることなく埋葬姿勢を検討することができた。両人骨の間には特に間層はなく、骨はお互いに接していた。両人骨は、同時に埋葬されたものであるか、ある程度時間を経て追葬されたものかどうかわからない。

発掘の段階では男性骨の方も壮年と考えていたので、両人骨の関係についていろいろと憶測 もあったが、よく調べてみると男性は熟年であったので、やや憶測も後退した感がする。

男性骨の頭蓋骨は腐敗してしまって粉末状であった。上下肢ともにまっすぐ伸ばし、手を大腿の外側につけていた。

女性骨は腹臥伸展葬のため、顔面を下にしていた。顔面は右側を少しあげ、左顔面と左側頭部を床面につけていた。つまり顔をちょっとそらした格好であった。上下肢はまっすぐ伸ばしていた。なお、棺内に剣等の副葬品があったけれども、小さい石棺に2体も埋葬されていたのでどちらの人骨の副葬かわからなかった。

第7節 ま と め

1 方形周溝墓

形態と規模 総数39基を調査した。最大規模のものは6号墳で、長軸線上で外径23.9mを測る。また15号墳は西側周溝が削平されているが、周溝の一辺は23.0m以上を測る。最小のものは、23号墳で、一辺 5.4mで大小の差は著しく大きい。

いま計測可能な24基について集計すると8 m以上、15m 未満のものが最も多く、16m 以上19m 未満にも数基が集中する。周溝の断面形はV字形・U字形および逆梯形をなし、一基の周溝の全部位が同形のもの、周溝の場所によって、それぞれ形が違うものなどがある。溝は、現状では幅 $1\sim2m$ 、深さ $0.15\sim2m$ を測るが、これは削平された結果であり、復原すれば幅 $1\sim2m$ 、深さ $1\sim2.5m$ になると推定される。溝の堀り込み斜傾は、溝の外側部分が急になるのが普通である。陸橋部の両側の溝は幅広くなる傾向がある。大形の周溝墓では、既して溝幅・深さとも大きい。

陸橋部 一辺の中央部より、やや一方に偏して一ケ所の陸橋部がある。その方向は、内からみて、東~南側以外の全方向にある。陸橋部の幅・平面形は一定ではなく、規模は平面形の大小と関係ない。

周溝墓相互の関係 切り合い関係がみられるものと、そうでないものがある。前者には数ケ所で、主体部や周溝の並び方から、明らかに切り合いや重複を生じている例を見た。これらの多くは、小規模な墳墓間で特に多くみられる。しかし前後関係や時間差が明らかにできたものは皆無である。また後者には、調査例の大半が該当する。こうしたことから、方形周溝墓の多くがごく単期間に連続して築造されたことを物語っている。

盛土の問題 調査によって確実な証査は得られなかった。しかし、周溝墓のなかには、主体部のみられないもの(20・38号方形周溝墓)があり、この状態を当初からのものでないとすれば、主体部は少くなくとも現地表より上にあったものとせねばなるまい。したがって程度はともかく、どれだけかの盛土があったことになる。一方、逆に主体部が発掘地表面でみられたもの(調査例の多くが含まれる。)などは、盛土は棺を被うばかりの低いものではなかったろうか。

主体部 形態と類型については後述するが主体部の数と方向についてふれておく。主体部の長軸方向は、22号墳の第2主体部と36号墳の2ケ所以外は、全て北〜西側を示す。主体部の長軸方向と陸橋部は、直交の関係を示すものが多く、この場合主体部は木棺と安山岩の石棺に限られる。凝灰岩を用いた主体部は、主体部長軸線の延長上に陸橋部が来る。主体部は大部分が一基に一棺であるが、二棺のもの(H19号・H22号)、三棺のもの(H6号)、4棺のもの(H11号)など複数の主体部を持つものがあり、いずれも木棺である。単棺のものは安山岩の組合せ石棺一基(H8号)、凝灰岩の石棺三基(H30・31・35号)、組合せ木棺が9基(H1・2・4・6・9・10・15・16・18号)となる。

2 円 墳

形態と規模 総数42基を調査した。最大のものは、くぬぎ塚古墳で、直径36mを測る。丸山4号墳、丸山6号墳も外径が34m以上あり、これらは断然他を抜きん出ている。一方、丸山24号墳は調査古墳のうち最小で外径8.5mを測る。計測可能なものについて、外径を集計すると7m以上、15m未満のものが半数を越える。

周溝は、現状では幅1~2m、深さ 0.2~ 2.5mを測り、大形になるほど、溝幅・深さは大きい。周溝断面形はV字形・U字形および逆梯形をなし、周溝の全部位の断面が同形のもの、場所により形が違なるものなどがある。周溝の平面形は、必らずしも同形とは限らない。平面形が馬蹄形をなすものも存する(丸山23号墳において著しい)。

陸橋部 1 ケ所の陸橋部があり、その方向は内部主体の長軸方向と一致し、南西~北西方向が多い。

円墳相互の関係 切り合い関係がみられるものは1組(丸山18号墳と丸山35号墳)で、その他には切り合い関係はない。切り合いを有する2基は、群中最小規模の円墳である点が留意される。

・盛土の問題 盛土の残っている古墳は、調査地区ではくぬぎ塚古墳のみであったが、かっては、数多くの古墳にあった旨が伝承されている。くぬぎ塚古墳の場合、主体部の横穴式石室の床面は、古墳築造時代の旧地表から約1m高く、現在する盛土は約3mを測る。したがって主体部のみられない、大型の円墳(丸尾5・7号・丸山4・6・7号墳)などには、かなり高い盛土があったことが推定される。一方、主体部を検出した、円墳についても、盛土の規模は不明であるが、盛土があったことは当然推測されるのである。

主体部 主体部には種類があり、凝灰岩の組合せ式石棺を普通とするが、1基は安山岩を材質として用いている(丸尾5号墳)。他に凝灰岩の横口式石棺2基(丸山8号墳・34号墳)、安山岩の割石を用いた小型の竪穴式石室もある(丸尾7号)。

最後に、円墳と方形周溝墓の関係についてふれておかなければなるまい。先に、円墳相互の関係については述べたが、円墳と方形周溝墓の切り合いは丸山18号墳と方形39号墳、丸山8号墳と方形15号墳および丸山6号墳との2組、5基の古墳についてみられる。前者の例は、小規模な円墳と方形周溝墓の切り合いで、後者は大型円墳と方形周溝墓の間に位置するものである。

3 前方後円墳 (琵琶塚古墳)

浜戸川流域に存する、5基の前方後円墳のうち最大規模古墳であるということは従来より知られていた。今回、東北側の周溝のみ路線内にかかったので調査したが、これにより後円部の直径を明らかにすることができた。後円部の直径は、周溝の外で推定47m、盛土裾部で推定30mを測る。熊本県内で現在まで48基の前方後円墳が知られているが、このうち後円径が類似するのは、次表の三基の古墳である。

第9表 前方後円墳対比表

古 墳 名	所 在 地	全 長	後円径	前方部巾	後円高	前方部高
高倉古墳	鹿本郡植木町古閑	57 (63)	25 (32)	8 (15)	4 (5.5)	2 3, 8
上鞍掛A古墳	阿蘇郡一宮町中通	65.5	33.5	26.5	5.56	3.8
迫の上古墳	宇土市栗崎	54 (56)	28 (32)	(15)	4	2

()は復原数値

(単位はメートル)

4 石 棺

周溝を持たない単独の石棺群(15基)で、石材は、安山岩の箱式石棺1基(第15号)を除いて、すべての凝灰岩の切石である。

最大の石棺は、第16号石棺で土壙長軸4.25m、短軸2.66mを測り、それよりやや小形のものは第17号石棺である。この2基を除いて、他は長軸2m、短軸1m位で、ほとんど同規模である。第12号は長側辺・短側辺とも凝灰岩の1枚石を用い、上端に扁平な切石を二段に控え積みをしている。扁平な石を控え積みにしている例は、第10号石棺にも認められるが、これは長側辺の一石の高さを調整するためのもので本来的なものではない。

石棺の長軸方向は北〜西が最も多い(第10号・第17号は他と異なる)。石棺の配置をみると、第1号、第15号、第18号を除いて、他は2~3基でグループをなす。調査区の南より、石棺群をグルーピングすると次のようになる。

- 1 第2・第3・第4号石棺
- 2 第5・第6号石棺
- 3 第7・第8号石棺
- 4 第9・第10号石棺
- 5 第11・第12・第13・第14号石棺
- 6 第16・第17号石棺

以上の6グループにわかれる。このうち、第5グループの4基は、第11号と第12号の土壌の間に切り合い関係が認められ、第12号が新しい。これ以外の石棺相互には、切り合い関係は認められない。

石棺と方形周溝墓の関係は、第16・第17号石棺が方形19号墳を破壊して築造されている。第 15号石棺は方形38号墳の墓域内に築造されている。また、第11号~第14号石棺は、方形20号周 溝墓の墓域内に築造されている。

第10表 塚原古墳群石棺・石蓋土壙一覧表

	10	材			主料卡拉	土	壙	棺の	内法(床	面)	遺物	備考
<u> </u>	No.	1/3		貝	主軸方位	長さ	幅	長さ	幅	高さ	退彻	川 方
1 =	石棺	凝	灰	岩	N-88-W	2.03	1.17	_	_	_		
2	"		"		N-83-W	2.20	1.00	_	_	_		
3	"		"		N - 83 - W	1.67	1.06	_	_	_		
4	"		"		N - 70 - W	2.37	1.18	_	_	_		
5	"		"		N-33-W	1.94	0.90	_	_	_		
6	"		"		N-53-W	1.85	1.05	_	_	_		
7	"		"		N-13-W	2.27	1.05	1.77	0.41	0.40		
8	"		"		N-11-W	1.80	0.55	_	_	_		
9	"		"		N-55-W	2.62	1.12	_	_	_		
10	"		"		N-62-E	2.78	1.88	1.72	0.45	_		
11	"		"		N-52-W	2.47	1.2+α	_		_		
12	*		"		N-52-W	2.33	1.60	1.27	0.69	0.68		
13	"		"		N-44-W	1.29	0.83	_	_	_		
14	"		"		N-10-W	2.15	1.22		_	_		
15	"	安	山	岩	N-49-W	2.10	1.01	1.51	0.52	0.41		
16	"	凝	灰	岩	N-56-W	4.25	2.66	_	–	_		
17	"		"		N-33-E	4.00	(2.5)	1.90	1.00	-		
18	"		"		_	_	-	_	_	_		
石蓋	土壙	蓋石	5凝原	K岩	N-11-E	1.76	1.41	0.60	0.27	0.14	なし	

備考 1. 単位はメートル

2. (

)は復原・推定

5 内部主体について

組合せ式木棺 調査した方形周溝墓のうち、主体部が遺存し、その形態を知ることができるものは19基で、そのうち、組合せ式木棺を主体部とするものは別項で述べるとおり(古墳の類型・Aーa類)12基を数え、割合としては最も多い。このうち、主体部が1基のものは6例、2基のものは3例、3基のものは2例、最も多いのが4基で1例をあげることができる。

複数の木棺を主体部として有している場合、各木棺相互の関係について若干記述する。各方 形周溝墓の記述の中でも適時述べたように、これらの複数の木棺で、共通の土壙を有し、主軸 方位をほぼ等しくし、整然と切り合うことなく埋置されているものは、築造時間は、ほぼ同時か、 あるいは時間差がきわめて少ないことを指摘することができる。さらに、17・19号方形周溝墓 においては、各2基の木棺を有するが、明らかに切り合い関係を有し、時間的な差異を示して いるが、周溝内から出土する土師器でみる限り差異はなく、その期間はそう長くはないものと 考えられる。この切り合いの場合、土壙が切り合うだけで、木棺そのものが破壊される程の切 り合いではなく、主体部の主軸方位は、並行していることが注目される。22号方形周溝墓は、 2基の主体部が直角に切り合っており、他の例とは異った様相を呈している。

これらの木棺の木質部はまったく遺存しないが、これを被覆する粘土等の遺存によって、その構造・規模を明らかにすることができる。まず、土壙を穿ち―さらにこの中に土壙を穿ち、

二重の土壙を有するものもある―木口板を組み込む穴を土壙の両端に掘り込む。木口板を組み込み、ある程度の土をつめ安定を計る。さらに長側辺の板を組み込み、木質と土壙の間や床面に粘土や土をつめ固定を計る。木質の上面まで粘土や土をつめレベルを一定にしたのち、木質の蓋をし、さらにその上を粘土で被覆し、埋めつくす。この木棺構築の過程で、遺体の埋葬は当然棺蓋をおおう前段階である。木口板は長側板の間に組み込まれ、床面には赤色顔料が塗布されている。木棺の内法は、長さの最も長いものは、2.13m、短いものは1.58m、幅の最大は0.82m、最小は0.55mである。深さは床面から50cm前後のものが多い。

横口式石棺 広義の横口式石棺には、石棺の平の部分の側石を省略又は窓を切り込み横口部 としたものも含まれるが、ここでは、組合せ式石棺の妻の部分に横口を設けたものについて記 述する。

九州の横口式石棺は、今回の塚原の3例を含めて10例が管見にふれた。

第11表 九州横口式石棺(妻入)地名表

No.		古	墳	2	;	所		在步	也	墳	形	墳丘の規模	外覆	施設	石	棺の) 形	態	出土遺物	備考
1	ĭ	Ħ	舟(ηż	ī 墳	熊本県	玉名 郡	8菊水町2	ſΉ	前方	後円墳	全長60m (周溝の内側)	\$	l	石	形	石丨	Ė	鏡6面、刀、剣、槍、 鉄鏃、玉類、冠、沓、 帯金具、須恵器他	羨道付設
2	石	之	室	古	墳	"	下益均	城郡城南 畔	叮塚原	ΡJ	墳	現 径 約20m	,				,		須恵器54片、銅環、鉄板、鉄鏃、鉄鉄、鉄鉄、鉄鉄、鉄鉄、鉄鉄、	棺身内側に線刻文様
3	塚原	į · 3	6号方	形周	溝墓	,		,	,	方形!	周溝墓		,		不明	(家	形石机	官)	土師器(小形丸底壺、 高坏、盌	羨道付設
4	,	٠,	tШ	8	异墳	,			,	円	墳		,		,	(,)	なし	
5	"	• 🕏	LШ	34	号墳	"			,	円	墳		,		"	(")	r l	
6	西	ß	Ę.	古	墳	佐賀県	 佐賀	市金立町	西限		,	_	横穴」	忧石棺	石	形	石	棺		円筒埴輪、棺身・棺蓋 に線刻文様
7	西	Ę	Ŕ	古	墳	"	,	久保泉												
8	石	櫃	Ш	古	墳	福岡県	久留》	米市高良内	柳町	前方	後円墳	-	な	ι	石	形	石	棺	管王、蕨手刀子、刀子	円筒・形象埴輪
9	石	Д	Ш	古	墳	,	八女	郡広川町- 人和	一条 珍町		,	110m	横穴。	石室			,		不明	武装石人、棺身・棺蓋 直孤文の浮彫
10	浦	L	1	古	墳	*	久留米	米市上津 町	丁二軒 茶星										伝、刀・剣・勾玉・金 現他	棺身に線刻文様

備考 本表の作成には次の文献を参照した。

- 1. 高倉洋彰「九州家形石棺地名表」『筑後古城山古墳』所収 1972
- 2. 小田富士夫「九州」『日本の考古学Ⅳ』所収 1966
- 3. 堀田啓一「西日本における横口式石棺の古墳について」先史学研究 5 1963
- 4. 堀田啓一「西日本における横口式石棺の古墳について」『論集 終末期古墳』所収 1973
- 5. 森貞次郎「北部九州の古代文化」 1976
- 6. 梅原末治「玉名郡江田村船山古墳調査報告」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告1』 所収 1922
- 7. 松本雅明「古墳時代」『城南町史』 1965

これらの系譜や意義については堀田啓一氏の業績があるが、畿内を中心とした資料操作で九州 に限定した場合、さらに追求さるべき問題も多い。今回、これに言及するには資料不足で、時 間的な制約もあるので、問題点を列記して、今後の指針としたい。

- 1 すでに、諸先学の指摘のとおり、佐賀県東部、福岡県南部、熊本県の中部以北を分布圏とすること。
- 2 これらの古墳は、各地において有力な古墳に数えられるものであること。
- 3 盛行の時期は5世紀に考えられること。
- 4 発生の要因は何であるか。
- 5 熊本県のものには外覆施設を有せず、その代わり、羨道状の施設が設けられること。
- 6 長側辺に横口を設ける石棺との関係。

第12表 塚原古墳群主体部一覧表

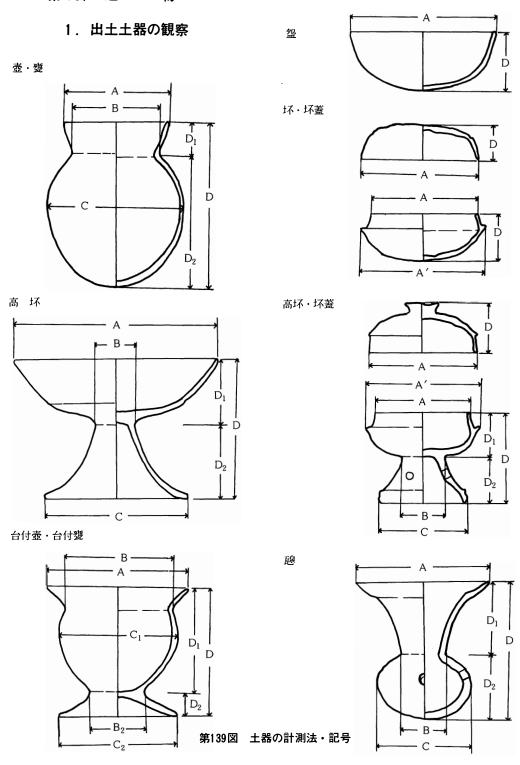
		主	 体	部	土壙の	り担棋	棺の	内法	+ /+ +#	<u> </u>
古	墳 名	形態	材質	主軸方位	長さ	幅	長さ	幅	主体部副葬品	備考
		10 128	10 月	工物刀匹	IX C	I III	IX C	I IPHH	m3 94 IIII	
1号	方形周溝墓	組合せ式	(木材)	N -52-W	3.28	1.85	1.9	0.75	_	粘土の遺存良好 床面に赤色顔料
2	// // // // // // // // // // // // //	木 棺	,	N-44-W	3.95	2.45	1.95	0.55		床面に 赤色 原件
3	,	_			0.55	2.45	1.50		_	区域外
4	,	組合せ式	 (木材)	N-46-W	2.8	1.5	不明	不明		床面に赤色顔料
	,	木 棺	(414)	N -40-W	2.0	1.5	71197	מפייף		削手
5		組合せ式	, , , , ,	①N-52-W	14.35	12.63	①1.58	10.82	 ①鉄剣、管	刊子 共通の土壙
6	"	木棺3基	(木材)	①N-52-W ②N-57-W ③N-56-W	②2,24 ③2.67	②1.0 ③1.3	2 — 3 —	② — ③ —	①鉄剣、管 玉、管玉 ②③一	5.6×6.8
7	,	組合せ式 木 棺	,	N -51-W	3.25	2.0	(1.75)	(0.55)	_	安山岩板石片出土
8	,	組合せ式	安山岩	_		_	_	_	_	中世墳墓により
9	,,	石 棺 一	_	_		_	_	_	_	挽乱 削平
10	,	_	_		_	_		_	_	,,
10		40 A 11 -11		②N −64−W	①2.97	①2.26	@1.05	@0.00		②粘土遺存良好
11	"	組合せ式 木棺4基	(木材)	① N -64-W ② N -64-W ③ N -50-W	②3.20 ③3.25	②2.0 ③1.70	21.95	20.69	_	②粘土遺存良好 床面に赤色顔
12	,	〃 3 基	,	(1)N −45−W	④ − ① 2.9	(4) − (1)1.58		_	_	料 ②3 未調査
13	,,	_	_	_	_	_			_	削平
14	,		_		_					,
15	,	_								,
16	,,	組合せ式	(木材)	N -61-W	(3.55)	1.83	_			主体部の一部攪
17	,	木 棺 2基	,,	③N-75-W ②N-75-W	_	_		_	鉄則	乱 共通土壙
18	,	_		②N -75-W		_			EVE.	4.0×2.85 削平
19	,	組合せ式	(木材)	①N -63-W ②N -63-W	13.3	1 (2.3)	①2.13 ②1.88	① — ② —		①②とも床面に 赤色顔料
20	"	木棺2基		- W	②3.1 —	② (1.8) —		<u> </u>	_	削平
21	"	_	_	-	_	_	_		_	,
22	,	組合せ式 木棺2基	(木材)	①N-29-W ②N-69-E	①4.18 ②3.3	①3.05 ②2.25	① (2.2) ② (2.0)	① — ② —		①②とも主体部 の一部攪乱
23	"	-	_			-		<u> </u>	-	削平
24	,	_	_	_	_	_		_		,
25	"	_		_	_	-	-	_	-	"
26	,	(組合せ 式木棺)	_	_	_	_	-	_	_	詳細未調査
27	"	_	_	_		_	_	_	_	削平
28	"	_	_		_	_	_	_	_	"
29	,	_		_	_	_	_	_	_	農道により削平
30	"	組合せ式 石 棺	凝灰岩	N -50-W	3.15	2.53	2.35	0.95		
31	"	/	"	_	_	_	-	_		攪乱
32	"	-	_	_	_	-	-	_	-	削平
33	,	_	_	_	_		-	_	_	"
34	"		_	_		_	_	_	_	,
35	"	組合せ式 石棺3基	凝灰岩	① -	1)2.8	11.6	1)2.23	①1.35		②③未調査
36	,	横口式棺	"	N -48-E	4.4	2.75	(2.6)	1.46		羨道(長さ×幅) (1.0)×0.8
37	,,		_		_		_	_	_	削平
38	,	_	_		_	_	_	_	_	,
<u> </u>				<u></u> _		L	L		L	

	主	体		土壙	り規模	棺の	内法	主体部	
古墳名	形態	材質	主軸方位	長さ	幅	長さ	幅	福葬品	備考
39 "	(石 棺)	_	N -41-W	2.6	2.0	_	_		土壙のみ遺存
丸山 3 号墳	(組合せ 式石棺)	(凝灰岩)	_	_	l — l	_	_	管玉1、ガ ラス玉2	土壙がわずかに 遺存
" 4 "	_	_	_	_	-	_	-		削平
6	_	- . 1	_	_	_	_	-		"
7		_	_	_		_	-		"
8	横口式	凝灰岩	N -80-W	4.70	棺身部2.82 羨道部1.96	(2.8)	1.5		"
9	組合せ式 石 棺	"	N-69-E	(3.6)	(1.9)	_	_		一部削平
10	_	. —	_	-	_	_	<u> </u>		削平
11		_	_	–	-	_	-		,
12	組合せ式 石 棺	凝灰岩	N-61-W	2.10	1.50	1.65	0.7		
13	"	"	N -25-W	3.0	2.0	1.8	1.0		
14	"	"	N-76-E	2.6	2.0	(2.0)	(1.6)		
15		_	_	-	-	_	-	_	未調査
16	組合せ式 石 棺	凝灰岩	N — 39— E	3.0	2.15	_	_	_	
17	"	(%)	N-1-E	_	_	(1.75)	(0.95)		土壙は削平
18	,	凝灰岩	N -51-W	2.14	1.38	_			
19	"	"	N-77-E	2.5	1.7	_	-		
20	-	_	_	–	_	_	_	_	農道により削平
21	組合せ式 石 棺	(凝灰岩)	N -55-E	2.95	1.65	_	_		
22		_	_	-	_	_	–	_	削平
23		_	_	–	-	_	-	_	"
24	組合せ式 石 棺	_	N -58-E	-	-	_	-	_	土壙のみ遺存
25		_	_	-	-	_	-	-	
26	(組合せ 式石棺)	_	_	-	-			-	土壙のみ遺存
27	"	_	_	_	-	_	_	_	,
28	"	_	_	_	-	_	-	_	,
28	"	_	_	-	-	. —		<u> </u>	,
30		_	_	_	-	_	_	_	土壙のみ遺存
·31	(組合せ 式石棺)	_	_	_	-	_	–	<u> </u>	土壙のみ遺存
32	_	_	_	_	-	_	-	_	
32		_	_	_	-	_	–	-	
34	横石 口 式棺 石 組合せ式棺 石	凝灰岩	N -33-W	3.45	2.90	2.0	1.13	なし	棺材に赤色顔料
35	租合せ式 石 棺	"	N -54-W	2.07	1.65	_	-	なし	
36	_	_	_	_	-	_	-	-	削平
丸尾 5 号墳	組合せ式 石 棺	安山岩	N - 60 - W	3.2	2.2	1.88	0.35	鉄剣・櫛	
6		_	_	_	-	_	_	_	区域外未調査
7	小型堅穴 式 石 室	安山岩	N - 40 - W	(3.7)	(3.0)	(3.8)	(2.95)	なし	攪乱
8	_	_	_	_	-	_	_	-	
9		_	_	_	-			_	
くぬぎ塚	横 穴 式石 室	凝灰岩	N -31-W	_	-	石室幅 3.0+2	石室幅 1.6	なし	破壊がひどい
琵 琶 塚	. —	_	_	_	-	-	_	_	区域外
					L		L		

備 考 1. 単位はメートル 2. ()は復原・推定を示す

第二章 遺構・遺物の考察

第1節 遺物



出土土器観察結果一覧表

※印は須恵器、他はすべて土師器。

					
図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備 考
71 72 1号方	壺	A11.6 D ₁ 3.5 B 9.3 D ₂ 13.2 C14.9 D16.7	口縁部はやや外反し、肥厚する。胴 部はほぼ球形で、最大径はほぼ中位 にある。	口縁・頸部はハケ目整形のあとヨコ ナデ、胴部は全面ハケ目整形 。	焼成後の底部穿孔。 黄褐色、焼成不良。
2 1 号方	"	A 15.0 D ₁ 3.2 B 10.2 D ₂ 23.8 C 23.5 D 27.0	口縁部はやや短かく、中部の接合部で稜を有する。胴部最大径は中位にあり、底部はやや尖りぎみ。	口縁部以下肩部外面はハケ目のあと ヨコナデ。胴部外面はタテ、ナナメ 方向のハケ目調整、内面は下→上方 向のヘラ削り。	焼成後の底部穿孔。 黄褐色、焼成良好。
3 1 号方	,	A 13.3 D ₁ 3.9 B 10.6 D ₂ 17.7 C 20.7 D 21.6	口縁部は外反し、中ほどでやや肥厚 し外面でわずかに稜を有する。胴部 最大径は中位より上にある。	口縁部以下肩部までハケ目調整のあ とヨコナデ、胴部は全面タテ方向の ハケ目。	焼成後の底部穿孔。
4 1 号方	"	A 10.2 D ₁ 3.8 B 6.8 D ₂ 7.8 C12.2 D11.6	口縁部は外反し、中ほどで袋状を呈する。胴部は扁平で最大径はやや上位にある。	口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部 上半分はタテ方向のハケ目、以下は ナデ、底部にヘラケズリの痕跡が残 る。	焼成良好、黄褐色。
5 1 号方	小型丸底壺	A 7.7 D ₁ 3.0 B 5.0 D ₂ 6.6 C 9.3 D 9.6	口縁部は外反し、端部にむかうにしたがいうすくなる。胴部は扁平で丸底、最大径は中位よりやや上にあり 稜を有する。	口縁部内外面ともヨコナデ、胴部は 上部はハケ目、頸部はユビによるヨ コナデ、胴中部より底部にかけては ヘラ削り。	焼成良好、赤褐色。
6 1 号方	高坏	A 22.7 D ₁ 6.3 B 4.6 D ₂ 9.0 C17.0 D15.3	坏部は外反し、上半でゆるく内弯する。脚部はラッパ状に広がる。	坏部はほぼ中ほどで接合し、クシ目のあとヨコナデ、脚部は外面でクシ目、上部でヘラミガキ、内面はヘラ削りで、端部はヨコナデ。	淡褐色、胎土中に白 い石粒を含む。
73— 7 1 号方	,	A21.5 D ₁ 6.1 B 4.8 D ₂ 8.2 C15.0 D14.3	坏部は外反し、上半でゆるく内弯する。脚部はラッパ状に広がる。端部に稜を有する。	坏部は内外面ともヨコナデ、中ほどで接合部が稜として残る。 脚部は上部でタテ方向のヘラ削り、下部はヨコナデ、内面はヘラ削りで端部はヨコナデ。	褐色、胎土中に白色 石粒を含む。焼成良 好。
8 1 号方	壺	A11.9 D ₁ 4.6 B 8.2 D ₂ 11.5 C19.8 D16.1	胴部以下欠失、口縁部は外反し、上 半で直行し、端部で外反、中ほどに 稜を有する。	口縁部より頸部まで右下りのクシ目 調整のあとヨコナデ、胴部外面はタ テ方向のクシ目調整、内面はヘラ削 り。	石粒を少量含む。焼
9 1 号方	小型丸底壺	A 9.2 D ₁ 4.0 B 5.9 D ₂ 6.0 C 8.2 D10.0	口縁部は外反し、端部にむかうにしたがってうすくなる。体部は扁平な球形で底部がやや尖りぎみ。	口縁部外面はヨコナデ、体部はヘラ 削りのあと頸部を指によるナデ、口 縁部内面は細いハケ目文を残す、体 部内面はユビによるナデつけ。	黄褐色。焼成良好。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
10 1 号方	小型丸底壺	A 10. 2 D ₁ 3. 7 B 6. 1 D ₂ 8. 6 C 12. 1 D 12. 3	胴部以下欠失、口縁部は内弯気味に 外反し、胴部は扁平、胴部最大径は 中ほどにある。	口縁部、胴部はハケ目調整のあとヨコナデ、胴部内面に輸積のあとが明りょうに残る。	淡褐色、焼成良好。
ll 1 号方	高坏	A19.3 D ₁ 6.0 B 3.4 D ₂ 6.5 C13.3 D12.5	坏部は内弯気味に外反し、脚部はラッパ状に広がり、端部は肥厚する。	が部外面中ほどで接合し、ハケ目の あとヨコナデ、下部ではハケ目が良 く残る。内面はヨコ方向のハケ目、 底部はナデ、脚部外面は上半部がへ ラミガキ、下半端部にかけてはクシ 目のあとヨコナデ。	黄褐色、焼成良好。
12 1 号方	,	A19.7 D ₁ 7.1 B 3.5 D ₂ 5.4 C12.2 D12.5	环部はほぼ直角に外反し、中ほどからゆるやかに内弯する。脚柱状部は肥厚し、端部はほぼ直角に広がり、部分的にハネ上る。	坏部は中ほどで接合、内外面ともクシ目のあどヨコナデ、内面底部ヘラ削り、脚柱状部は外面でタテ方向のヘラ削り、内面でヨコ方向のヘラ削り、端部内外面クシ目のあとヨコナデ。	褐色、小石粒多量に 含む焼成良好。 脚裾部は焼成前の乾 燥時におけるゆがみ。
13	,	A17.3 D ₁ B 4.4 D ₂ 5.3 C D	脚部欠失、坏部下半は外反し、上半 はゆるく内弯する。	坏部は中ほどで接合、接合部は外面 に稜として残る。外面はクシ目のあ とヨコナデ、内面はヘラ削りのあと ナデ。	黄褐色、小石粒多量 に含む。焼成良好。
74 	小型丸底壺	A 9.7 D ₁ 4.2 B 7.0 D ₂ 6.1 C 9.8 D10.3	口縁部は外反し、胴部はやや扁平な 球形でやや肥厚する。	外面はタテ方向のハケ目のあとヨコナデ、口縁部内面はタテ方向のハケ目のあとヨコナデ、胴部は指によるナデ上げ。	焼成良好。 15とセットをなす。
15 2 号方	器台	A 9.8 D ₁ 3.3 B 2.8 D ₂ 6.1 C13.2 D 9.4	受部はゆるやかに内弯し、肥厚する 脚部はラッパ状に広がり、受部から 脚部に直径1cmの焼成前の穿孔有り 脚部下中ほどには、三方から直径7 mmの穿孔がほどこされる。	外面は全面ヨコナデ、脚部内面はヨ コ方向のヘラ削り。	14とセットをなす。
16 2 号方	壺	A15.0 D ₁ 4.5 B 9.9 D ₂ 21.1 C23.0 D25.6	口縁部は短かく内弯気味に外反し、中ほどから外弯する。外面に稜を有する。胴部最大径は中ほどよりやや上にある。	口縁部から肩部にかけてはクシ目の あとヨコナデ、肩部以下はタテ方向 のクシ目で、底部近くでクシ目のあ とナデ。	褐色、焼成良好。 小石粒を含む、焼成 後の穿孔。
17	高坏	A19.4 D ₁ 5.5 B 3.7 D ₂ 7.5 C13.5 D13.0	好部はゆるやかに立ちあがる。坏上 半部と下半部の境にかすかに稜を有 する。脚柱状部は中ほどでふくらみ 端部は内弯する。	ヘラ削りのあとヨコ方向のヘラみが き、内面ヘラ削り、端部内外面とも	赤褐色、ごく少量の 小石粒を含む。 焼成良好。
2号方	壺	A 12. 0 D ₁ 4. 1 B 9. 9 D ₂ 16. 4 C 18. 2 D 20. 5	口縁部は直行し、端部はわずかに外 反する。胴部はほぼ球形で丸底。	クシ目。 口縁部下端外面に体部上面の先端を接合している。この部分の内面に角を有する。口縁部外面はヨコナデ、体部は細いハケ目で底部は磨滅している。内面はヘラ削り、底部で肥厚する。	淡褐色。 焼成不良。
19 2 号方	,	A 15. 2 D ₁ 3. 5 B 9. 6 D ₂ 23. 6 C 23. 0 D 27. 1	口縁部は短く強く外反したあと外弯 気味に立ち上る。体部はやや縦長の 球形で底部は尖りぎみの丸底、最大 径は胴中位にある。	□縁部内外とも右下りの細いハケ目 のあとヨコナデ、胴部外面は上半で タテ、下半で右下りのクシ目調整、 底部でナデ、内面は下半で下→上の へラ削り、上半でヨコ方向のヘラ削 り。	暗褐色。 胎土中に小石粒含む 焼成不良。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
76 77 3 号方	壺	A11.3 D ₁ 4.3 B 7.3 D ₂ 18.9 C18.2 D23.2	口縁部は外反し、唇部で肥厚し1cmを計る。胴部最大径は中ほどより上にある。底部は尖り気味の丸底となる。	口縁部内外面ともハケ目調整、体部はハケ目調整、 顕部はユビによるヨコナデのため口縁下部に稜を有する底部はハケ目が摩滅している。 内面はヘラ削り。	黄褐色。 焼成良好。
21 3 号方	大型壺	A 16.0 D ₁ 5.8 B 10.4 D ₂ 24.8 C 24.2 D 30.6	頸部は強くくびれ、口縁部は内弯気 味に外反し、端部で外反する。体部 はタテに長く、肩部は強く張る。	口縁部ヨコナデ、体部は頸部から肩 部にかけてタテ方向のクシ目のあと 横位のクシ目、さらに下半から底部 にかけてヨコのあとタテのクシ目調 整、内面は下半で下→上、上半で左 →右方向のヘラ削り。	焼成後底部穿孔。 褐色、胎土中に多量 の小石粒を含む。 焼成良好。
22 3 号方	,	A11.2 D ₁ 3.2 B 9.4 D ₂ 13.8 C15.0 D17.0	口縁部は外反し、上半部で肥厚する。 胴部はややタテ長い球形。	口縁部は内外面ともヨコナデ、頸部 外面は指によるナデがほどこされ外 面に稜を残す。体部外面はハケ目調 整、内面は下部でヨコ、中部で下→ 上、上部から頸部にかけてヨコ方向 のヘラ削り。	黄褐色、焼成良好。 胴部はスス付着。
23 3 号方	,	A 9.9 D ₁ 2.1 B 8.3 D ₂ 14.7 C15.2 D16.8	口縁部は短く外反し、下部に段を有す、胴部はほぼ球形で、ナデ肩。	口縁部はヨコナデ、体部は全面荒い クシ目調整、内面はヨコ方向のヘラ 削り、頸部は指によるナデ。	暗褐色、焼成良好。 胎土中に石粒を含む。
78 79 3 号方	"	A 16.4 D ₁ 3.8 B12.1 D ₂ 29.5 C 23.9 D 29.5	口縁部は短く外反し、端部は角ばり 稜を有す。体部はタテ長で底部は尖 り気味の丸底、器壁は下部に向うに したがい肥厚する。最大で 1.5cmを 計る。	口縁部はヨコナデ、頸部はクシ目調整のあと指によるナデでわずかに稜を有す。頸部以下はタテ方向のクシ目調整、体部内面はヘラ削り。	黄褐色、胎土中に小 石粒を含む。 焼成良好。 体部の下半にスス付 着。
25 3 号方	,	A10.3 D ₁ 3.5 B 8.1 D ₂ 14.8 C14.9 D18.3	形態はNo.22に類似する。器壁は下部 に向うにしたがい肥厚する。	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面はタテ・ヨコ方向のクシ目調整、内面はヘラ削り、上半に輸積痕残る。	黄褐色。
26 3 号方	*	A12.9 D ₁ 5.0 B 9.3 D ₂ C17.2 D10.5	胴部以下欠失、口縁部は外反し、中 ほどで肥厚する。肩部は強く張る。	口縁部内外面ともクシ目のあとヨコナデ、頸部は指によるナデつけ、内面へラ削り。	黄褐色、小石粒含む 焼成良好。 口縁部から頸部にか けてスス付着。
27 3 号方	小型丸底壺	A 10. 6 D ₁ 4. 0 B 7. 8 D ₂ 6. 3 C 10. 1 D 10. 3	口縁部は内弯気味に外反し、端部は 丸まる、胴部は強くはり最大径は上 位にある。底部は尖り気味の丸底で 口径、胴部径はほぼ一致する。	口縁部から端部にかけては細いハケ 目のあとヨコナデ、頸部は指による ナデ、胴部下半はハケ目調整、内面 は指によるナデ上げ。	褐色、小石粒含む。 焼成良好。
28	,	A 8.9 D ₁ 3.4 B 7.1 D ₂ 6.4 C 9.9 D 9.8	口縁部は外反し、端部で尖る。体部は扁平な球形で底部は尖り気味の丸 底、胴径は口縁径よりやや大。	口縁部体部上半までハケ目のあとヨコナデ、下半から底部まではハケ目 内面はユビナデ。	淡褐色、器面全体に 風化して白色石粒が 露出。
29	*	A 7.4 D ₁ 2.1 B 6.4 D ₂ 5.2 C 8.0 D 7.3	広口口縁でゆるく外反する。胴部最 大径は中位にあり、底部は尖る。	口縁部は内外面ともヨコナデ、頸部 はハケ目のあと指によるナデ。	淡褐色、小石粒含む 焼成良好。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
30 3 号方	台付鉢	A15.4 D14.0 B11.6 D ₁ 11.5 C12.9 D ₂ 2.5 底径12.8	口縁部は短く強く外反し肥厚する。 口唇部は角ばり稜を有する。胴部最 大径は上位にあり、脚部はラッパ状 に広がり肥厚する。	口縁部および脚部内外面ともヨコナデ、胴部はタテ方向のクシ目、頸部は指によるナデ。	褐色、大小の石粒を 含む。やや良好。
31 3号方	台付小型丸 器	A11.6 D11.6 B 8.4 D ₁ 9.3 C 9.1 D ₂ 2.3 底径不明	最大径は口縁部にある。口縁部はや や内弯気味に外反する。脚部はラッ パ状に強く広がる。	口縁部胴部外面は右下りの細いハケ 目、脚部はヨコナデ、口縁部内面は ヨコナデ、器壁は全体的に厚く胴部 と脚部の接合部では特に肥厚する。	淡褐色、白色石粒含 む。
32 3 号方	,	A 8.6 D12.5 B 5.4 D ₁ 2.6 C 8.5 D ₂ 9.9 底径10.1	口縁部は外反肥厚し、中ほどに明瞭 な稜を有す。胴部最大径は中ほどに 有る、器壁は頸部で厚く、胴部から 底部に向かうにつれ、しだいに肥厚 する。	口縁部は内外面ともヨコナデ、特に 外面は頸部の指によるナデによって 口縁部中ほどと頸部に2本の稜を有 し、内面では逆にくぼむ。体部内面 は指によるナデ、脚部の内外面とも ヨコナデ。	褐色。 胎土中に石粒含む。 焼成良好。
80-33 3号方	高坏	A 17. 8 D ₁ 14. 6 B 3. 6 D ₂ 9. 9 C 13. 2 D 14. 5	坏部中位の接合部外面に稜帯がめぐる。脚柱状部と裾部との境は明瞭。 柱状部はややふくらみ裾部は内弯気味に広がる。	坏部上半右下りのクシ目のあとヨコナデ、口唇部は肥厚する。柱状部外面はタテのヘラ削り、内面はヨコ方向のヘラ削り、裾部内外面ともヨコナデ。	外面・坏部内面丹塗 り。 褐色。 胎土中石粒を含む。 焼成良好。
34 3 号方	4	A 20. 0 D ₁ 5. 6 B 3. 3 D ₂ 9. 4 C 12. 6 D 15. 0	坏部は皿状を呈し、接合部外面に稜を有する。脚柱状部上端は強くしぼり、全体的にふくらむ。柱部と裾部の境は明瞭である。	坏部は細いハケ目のあとヨコナデ、 柱状部の上端内面にはしぼり目が残 る。以下はヘラ削り、外面はタテ方 向のヘラ削りのあとナデ、裾部内外 面ともハケ目のあとヨコナデ。	脚柱状部の 4 等分した 3 ケ所に未完の穿孔あり。
35 3 号方	,	A 21. 0 D ₁ 6. 0 B 3. 3 D ₂ 9. 3 C 13. 3 D 15. 3	No.34と同様、坏部は皿状を呈し、接合部にわずかに稜を残す。脚柱状部と裾部の境は明瞭、脚部は全体的に肥厚する。	坏口唇部はヨコナデ、口縁部は内外 面ともクシ目のあとヨコナデ、柱状 部は内外面ともヨコ方向のヘラ削り 裾部はクシ目のあとヨコナデ、端部 外面に稜を有す。	褐色。 小石粒を含む。 焼成良好。
36 3 号方	,	A D ₁ B 3.9 D ₂ 8.6 C 13.5 D	坏部欠失、脚柱状部はわずかにふく らみ裾部との境は明瞭。	柱状部外面はヘラ削りのあとヨコナデ、下部から裾部の内外面にかけて はクシ目のあとヨコナデ、裾端部に 稜を有する。	褐色。 小石粒を含む。 焼成良好。
37 4 号方	,	A D ₁ B 3.7 D ₂ 6.9 C 14.2 D	坏部上半欠失、脚柱状部はラッパ状に開き、裾部で更に広がる、器壁は うすい。柱状部と裾部との境は不明 瞭。	柱状部外面はタテ方向のクシ目、柱 状部の上部および裾部はヨコナデ、 端部で稜を有する。内面はヘラ削り 裾部はヨコナデ、柱状部と裾部との 境は明瞭。	淡褐色。 焼成良好。
81 82 -38 4 号方	壺	A18.8 D ₁ 6.0 B 9.1 D ₂ 12.7 C17.3 D18.7	口縁部は外反し更に内弯気味に外反 し、明瞭な段を有す。端部でやや肥 厚する。胴部は扁平な球形で肩部が 強く張り、最大径は中位にある。	口縁部より胴上半までクシ目のあと ヨコナデ、以下はクシ目調整、この 境に不明瞭な稜がめぐる。口縁部内 面はヨコナデ、胴部との接合部はユ ビによるなでつけ、以下はヘラ削り。	赤みをおびた褐色。 焼成良好。
39 5 号方	,	A 18.3 D ₁ 5.0 B 10.9 D ₂ 17.4 C 22.3 D 22.4	底部欠失、口縁部は外反し更に外反 し立上がる。胴部最大径は中位にあ り、なで肩、器壁はうすいが肩でや や肥厚する。	口縁部より頸部までクシ目のあとヨコナデ、特に頸部は指によるナデでクシ目が消える。体部はクシ目、内面はヘラ削り、頸部で指によるナデッケ。	褐色。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技 法 上 の 特 色	備考
40 5 号方	壺	A12.2 D ₁ 4.0 B 8.5 D ₂ 6.0 C14.9 D10.0	胴部以下欠失、口縁部は外反、中ほどで肥厚する。胴部は扁平で肩が張る。	口縁部より肩部にかけてヨコナデ、 特に肩部でクシ目を指によってナデ 消しているため、口縁部中ほどに稜 が残る。	赤褐色、小石粒含む。 焼成良好。
41 5 号方	大型壶	A 16. 6 D ₁ 4. 4 B 12. 0 D ₂ 30. 2 C 29. 2 D 34. 6	口縁部は外反し、端部で角ばり外面 中ほどでやや肥厚する。胴部最大径 は中位にあり、尖り気味の丸底を呈 し、底部で肥厚する。	口縁部から肩部までクシ目のあとヨコナデ、体部上半は細いクシ目、下半部は荒いクシ目、内面は口縁部でヨコナデ、肩部で横方向のクシ目、以下はヘラ削り。	内外面とも丹塗り。 焼成後の底部穿孔。 色調は褐色、小石粒 含む。 焼成良好。
42 5 号方	,	A14.9 D ₁ 4.6 B12.2 D ₂ 21.8 C23.0 D26.4	口縁部は直向気味にやや外反、体部 はタテ長で最大径は中位より上にあ る。	□縁部はクシ目のあとヨコナデ、胴部上半部は下→上方向のクシ目、下半部はクシ目のあとナデ、□縁部内面はクシ目のあとヨコナデ、頸部・胴部の接合部に指あとあり胴部へラ削り。	胴部に15×13cmのは んいにスス付着。 口縁部内面に丹塗り。 褐色、小石粒含む。 焼成良好。
83 84 5 号方	,	A14.5 D ₁ 4.1 B10.2 D ₂ 6.4 C D10.5	口縁部は外弯気味に外反し、端部で 肥厚し、ナデ肩、胴部以下欠失。	口縁部は内外面ともヨコナデ、体部 はタテ方向のクシ目、特に頸部はユ ビによるヨコナデ、体部内面に輸積 のあとが明瞭に残る。	黄褐色。 焼成良好。
44 5 号方	高坏	A 20.1 D ₁ 5.0 B 3.8 D ₂ 6.5 C13.4 D13.5	不部は皿状で器壁は肥厚する。中は どの接合部で稜がめぐる。脚柱状部 は中ほどでふくらみ、ラッパ状に広 がる。裾部との境は明瞭で、やや短 く内弯気味に広がり肥厚する。	坏部は内外面ともクシ目のあとヨコナデ、脚柱状部はヘラ削りのあとヨコナデ、柱状部と裾部の境外面は指によるヨコナデ、柱状部内面はヘラ削り、裾部内面はクシ目のあとヨコナデ。	薄い褐色。
45 5 号方	,	A 20. 0 D ₁ 4. 7 B 2.1 D ₂ 8. 4 C 13. 3 D 13. 1	坏部は浅い皿状を呈し上半部でやや 外反する。坏部・脚部の接合部は強 くしぼり、脚柱状部と裾部との境は 明瞭、裾部は更に広がり、端部は角 ばり肥厚する。	坏部は内外面ともクシ目のあとヨコナデ、上半・下半部との接合面は強くナデられ稜は不明瞭である。	黄褐色。 焼成良好。
46 5号方	,	A 19.5 D ₁ 5.7 B 3.5 D ₂ 8.7 C 14.1 D 14.4	口縁部は外反し、上半部と下半部の 接合部は角ばり、先端は下方にたれ 下がる。	坏内外面はヨコナデ、柱状部外面は タテ方向のヘラ削り、内面は右→左 方向のヘラ削り、裾部内外面ともヨ コナデ。	坏内面丹塗り。 褐色。 小石粒含む。 良好。
47 5 号方	,	A 20. 7 D ₁ 5. 3 B 3. 7 D ₂ 8. 3 C 12. 7 D 13. 6	めぐる。脚柱状部は直角的に広がり	「不部と脚部接合の際、「不部の粘土が ボタン状に残る。「不部内外面ともクシ目のあとヨコナデ、脚柱状部はへ ラ削り、内面はヨコ方向のヘラ削り。	焼成良好。 砂粒含む。
48 5 号方	,	A18.9 D ₁ 6.0 B 2.7 D ₂ 7.6 C13.4 D13.6	坏部は外反し、中位にわずかに稜を 有する。脚柱状部は直線的に広がり 更に裾部は内弯気味に広がる柱状部 裾部の境は明瞭。	「不部内外面ヨコナデ、柱状部上半部はヨコナデ、下半部は上→下方向のへラ削り、内面は右→左方向のへラ削り、裾部内外面はヨコナデ。	全面丹塗り。 褐色。 小石粒含む。 焼成やや良好。
49 5 号方	,	A19.3 D ₁ 5.5 B 3.1 D ₂ 8.0 C12.0 D13.5	全体不整形、脚柱状部は中央でふく らみ、裾部との境明瞭。	「「「「「「「「」」」」 「「「」」」 「「」」」 「「」」 「「」」 「「」	外面、坏内面丹塗り。 黄褐色。 少量の小石粒含む。 焼成良好。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
85 50 86 5 号方	高坏	A13.7 D ₁ 5.2 B 3.6 D ₂ 8.2 C12.3 D13.4	坏部はゆるやかに立ちあがり、上半 ・下半部の境にわずかに稜を有する。 脚柱状部は肥厚し、ややふくらみ裾 部との境は不明瞭。	坏部内外面ともヨコナデ、脚柱状部 外面はヨコ方向にヘラ磨き、内面は 右→左のヘラ削り、裾部外面はクシ 目、内面はヨコナデ。	黄褐色。 石粒を多量に含む。 焼成良好。
51 5 号方	,	A 17. 9 D ₁ 4. 6 B 3. 4 D ₂ 7. 7 C 13. 2 D 12. 3	坏部はわずかに外反し、上半・下半部の境に角がつく。脚はラッパ状に広がり、裾部との境は不明瞭。	坏外面上半部はクシ目のあとヨコナデ、下半部内面はヨコナデ、脚柱状部外面はヘラ削りのあとヨコナデ、内面はヘラ削り、裾部内外面はヨコナデ。	淡赤褐色。 砂粒含む。 焼成良好。
52 5 号方	"	A 18.6 D ₁ 5.4 B 4.0 D ₂ 7.9 C 13.5 D 13.3	坏部は丸身をおび口唇部は外反する。 上半・下半部の境に稜を有する。脚 はラッパ状に大きく広がる。	坏内面と外面上半部はクシ目のあと ヨコナデ、下半部はヨコナデ、脚柱 状部と坏部の接合部はヨコナデ、柱 状部外面はヘラ削りのあとナデ、内 面は右→左のヘラ削り、裾部外面は ナデ、内面はヨコナデ。	褐色。 砂粒を多く含む。 焼成良好。 坏、脚部彩欠失。
53 5 号方	7	A 18.5 D ₁ 5.3 B 3.3 D ₂ 7.6 C12.7 D12.9	坏部は皿状を呈し、上半・下半部の 境は角がつく、下半部は肥厚する。 脚はラッパ状に広がり、端部は棱を もつ。	坏内面と外面上半部はヨコナデ、下半部はクシ目、坏・脚の接合部はヨコナデ、脚外面上半部はヘラ削り、内面は右→左方向のヘラ削り、裾部外面はクシ目、内面はヘラ削りのあとヨコナデ。	黄褐色。 小石粒を含む。 焼成やや良好。
54 5 号方	*	A 27. 0 D ₁ 6. 3 B 3. 7 D ₂ 8. 0 C 14. 6 D 14. 3	坏部は丸身をおび、口唇部は外反する。上半・下半部の境は不明瞭。脚はラッパ状に広がる。脚上半部の器 壁はうすくなる。	坏外面上半部はクシ目のあとヨコナデ以下ヨコナデ、坏内面上半部はヨコナデ、下半部クシ目、脚外面上部は上→下のへラ削り、下半部はへラ削りのあとヨコナデ、内面は左→右方向のへラ削り、裾部はヨコナデ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 (No.60と類似)
55 5 号方	*	A 20. 4 D ₁ 6. 3 B 3. 7 D ₂ 7. 8 C 14. 4 D 14. 1	「小部は皿状を呈し、上半部はわずかに外反する。上半・下半部の境は段がつく、脚はラッパ状に大きく広がる。 □縁部が欠失。	「小本本学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学学	褐色。 焼成良好。 砂粒含む。 内外面全面に丹塗り。
56 5 号方	,	A17.7 D ₁ 4.6 B 3.7 D ₂ 7.6 C11.7 D12.2	口縁部はやや内反し、脚柱状部は中 央でいくぶんふくらみ、裾部との境 は明瞭。	坏部内外面ともヨコナデ、脚外面へ ラ削りのあとヨコナデ、脚柱状部上 部はヘラ削り、下半部から裾部にか けてヨコナデ。	黄褐色。 小石粒含む。 焼成不良。
57 5 号方	,	A 18.2 D ₁ 5.5 B 3.0 D ₂ 8.0 C13.3 D13.5	坏部は皿状を呈し、上半・下半部の 境は不明瞭。脚柱状部は直線的に広 がり、裾部との境は明瞭、更に裾部 は内弯気味に広がる。	面はヨコナデ、内面はヘラ削り、裾	褐色。 雲母粒・石粒含む。 焼成不良。
87-58	,	A 19.0 D ₁ 5.1 B 3.5 D ₂ 8.0 C 12.7 D 13.1	坏部は皿状を呈し、口縁部は外反する。脚柱状部は、ややふくらみ、裾部は広がる。柱状部と裾部の境は明瞭。	坏内外面はヨコナデ、柱状部と坏の 接合部はヨコナデ、柱状部はヘラ削 りのあとヨコナデ、内面は右→左方 向のヘラ削り、裾部は内外面ともヨ コナデ。	
59 5 号方	,	A 19.1 D ₁ 6.0 B 3.3 D ₂ 8.6 C 13.9 D 14.6	坏部は内弯気味に立上り、口昏部は 外弯する。脚はラッパ状に広がる。 端部は角ばっている。	坏内外面ともヨコナデ、内面底部は クシ目のあとナデ、脚外面上半部は タテ方向のヘラ削りのあとヨコナデ 下半部はクシ目のあとヨコナデ、脚 内面上半部はクシ目のあとナデ、下 半部はヨコナデ。	黄褐色。 小石粒含む。 焼成良好。

高 60 5号方 61 62 5号方 63 5号方 65 5号方 65 5号方 65 5号方 65 5号方	高				
5号方 61 5号方 62 5号方 63 5号 64 5号 65 5号 66 5号 67 5号 68		A 20. 0 D ₁ 6. 0 B 4.1 D ₂ C	脚部欠失、口縁部は外反し、坏部は 皿状を呈する。	坏外面上半部はクシ目のあとヨコナデ、下半部はクシ目のあと一部ナデ 坏内面ヨコナデ。	褐色。 少量の小石粒含む。 焼成良好。
5号方 62 5号方 63 5号方 64 5号方 65 5号方 66 5号方 67 5号方	坏	D 6.6			
62	,	A 18.0 D ₁ 5.4 B 3.8 D ₂ C D 6.4	脚部欠失、坏部はほぼ直線的に広が り、上半部と下半部の接合部外面が 角ばる。口唇端部は小さく外反する。	坏外面、内面上半部はヨコナデ、下 半部は右→左へラ削りのあとヨコナ デ、坏部・脚接合部はクシ目のあと ヨコナデ、脚内面はヘラ削り。	淡黄褐色。 ごく少量の小石粒含 む。 焼成良好。
5号方 64 《 5号方 65 《 5号方 66 《 5号方	,	A 18. 6 D ₁ B D ₂ C D	坏一部・脚部欠失、口縁部は外反す る。	坏内外面とも上半部の上位はクシ目 のあとヨコナデ、下位はヨコナデ、 外面下半部はクシ目のあとヨコナデ 内面下半部はクシ目。	淡褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
5号方 65 / 5号方 66 / 5号方 7 5号方 8	,	A 20. 0 D ₁ B 4. 2 D ₂ C D 6. 3	脚部欠失、口縁部は外反する。	・	淡褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 62に類似。
5号方 66 // 5号方 67 型 5号方	,	A D ₁ B 3.6 D ₂ C 11.4 D 10.2	坏上半部欠失、脚柱状部はややふく らみ、裾部との境は明瞭、端部は角 ばっている。	「小面下半部はクシ目のあとヨコナデ、内面下半部はクシ目、脚柱状部外面はヘラ削りのあとヨコナデ、内面は右→左方向のヘラ削り、裾部内外面ともヨコナデ。	小石粒含む。
5 号方 67 型 5 号方 高	"	A D ₁ B 2.9 D ₂ C 14.2 D 7.8	坏欠失、脚は大きく広がり、裾部は はねあがる。	脚外面はタテ方向のヘラ削りのあと クシ目をほどこし、そのあとヨコナ デ、脚内面上半部は右→左のヘラ削 り、下半部は右→左のヘラ削りのあ とヨコナデ。	褐色。 小石粒を含む。 焼成良好。
5号方 壺	"	A D ₁ B 3.8 D ₂ C D 5.0	坏上半部、脚下半部欠失、坏部は皿 状を呈し、脚部は直線的に広がる。	坏部外面ヨコナデ、坏内面ナデ、脚外面ヨコナデ、脚内面の坏部・脚部 の接合部はナデ、以下はヘラ削り。	
68	型	A 7.7 D ₁ 3.0 B 6.8 D ₂ 4.0 C 9.6 D 7.0	底部欠失、口縁部は内弯、体部は扁 平で、胴部最大径は中位よりやや上 にあり、口径より大である。	外面全面、口縁内面、肩部はヨコナデ、胴部は指によるナデ上げ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 外面丹塗り。
5号方	高坏	A D ₁ B 3.6 D ₂ C 13.0 D 9.1	「不部欠失、脚柱状部は直線的に広がり、裾部との境は明瞭、裾部は内弯気味に大きく広がる。端部に稜を有する。	脚柱状部外面はタテ方向のヘラ削り のあとヨコ方向のヘラ磨き、内面は 右→左のヘラ削り、裾部内外面とも クシ目のあとヨコナデ、端部ヨコナ デ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
69 /	"	A D ₁ B D ₂ C D 7.0	坏部、脚端部欠失、脚柱状部は肥厚 し直線的に開く、裾部は外弯気味に 広がる。	脚柱状部外面タテ方向のヘラ削りの あとヨコナデ、内面は右→左のヘラ 削り、裾部内外面ともヨコナデ。	黄褐色。 小石粒含む。 焼成良好。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
70	高	不 明	坏部・脚裾端部欠失。柱状部	脚柱状部はタテ方向のヘラケズリの あとヨコナデ。内面ヘラケズリ。	淡褐色、焼成良好。
5 号方	坏				
88 89 6 号方	小型丸底壺	A 10.2 D ₁ 2.4 B 5.3 D ₂ 7.0 C 9.4 D 9.4	口縁部は外反し、口唇に稜を有する。 体部はほぼ球形を呈する。胴部最大 径はほぼ中位にあり、口縁径より小 さい。	口縁部の外面から肩部にかけてはクシ目のあとヨコナデ、胴部にクシ目 胴部から底部まで、ナデ、口縁部内面はヨコナデ、肩部から胴部まではヘラ削り、底部内面は指によるなで上げ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
72 6 号方	壺	A 10.6 D ₁ 4.2 B 8.7 D ₂ 17.9 C 18.9 D 22.1	口縁は短かく、段を有し、外面する 頸部から肩部にかけてやや肥厚する。 胴部最大径は中位より上にあり、尖 り気味の丸底を呈する。	口縁部外面の段の上位までと内面の 口縁部から頸部まではヨコナデ、頸 部はクシ目のあとヨコナデ、肩部よ り底部までの外面は全面クシ目、胴 部内面は上半部では右→左のへラ削 り、下半部は下→上のヘラ削り。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
73 6 号方	,	A 17.7 D ₁ 18.3 B 8.7 D ₂ 3.9 C 19.0 D 22.2	口縁は段を有し、やや外反し、口唇 部に稜を有する。胴部最大径は中位 より上にあり、尖り気味の球形を呈 する。	口縁部から肩部まで内外面ともヨコナデ、肩部から胴部下位までクシ目以下、底部までクシ目のあとナデ、肩部内面は指によるナデ上げ、口縁と胴部の接合部は接合時の粘土の付着あり、以下底部までヘラ削り。	黄褐色。 小石粒を含む。 焼成不良。 焼成後の底部穿孔。
74 6 号方	"	A 12.1 D ₁ 5.5 B 9.2 D ₂ 14.4 C 17.7 D 19.9	口縁部は外反し、頸部でくびれている。胴部最大径は中位より上にあり 球形を呈する。	外面は口縁部から肩部までクシ目の あとヨコナデ、以下底部までクシ目 口縁部内面から頸部までヨコナデ、 胴部上半部は右→左のヘラ削り、以 下底部まで下→上のヘラ削り。	黄褐色。 小石粒を含む。 焼成不良。
75 6 号方	*	A 11.3 D ₁ 4.0 B 8.7 D ₂ 12.9 C 16.7 D 16.9	口縁部は外反し、頸部がくびれている。胴部最大径は中位より上にありやや肩の張る球形を呈する。口縁から肩部まで肥厚する。	口縁部から肩部まで、内外面ともヨコナデ、肩部外面はクシ目、以下底部までナデ、胴部内面から底部までヘラ削り。	黄褐色。 小石粒含む。 焼成やや良好。
76 6 号方	,	A11.5 D ₁ 4.1 B 9.0 D ₂ 11.6 C14.0 D15.7	口縁部は外反し、胴部は球形を呈し 最大径は中位にある。頸部、底部で 肥厚する。	口縁部外面はクシ目、内面はヨコナデ、肩部はクシ目のあとヨコナデ、 胴部は荒いクシ目、底部は磨減している。胴部内面全面へラ削り。	明褐色。 小石粒含む。 焼成不良。
77 6 号方	,	A 23.4 D ₁ 9.7 B11.3 D ₂ 16.8 C21.7 D26.5	口縁部は大きく、内弯気味に外反する。胴部最大径は中位よりやや上にあり、肩部で肥厚する。肩部より胴部上半部に輪積あとあり。	口縁部内外面ともクシ目のあとヨコナデ、肩部外面クシ目のあとヨコナデ、内面ヨコナデ、胴部外面上半部はクシ目、以下クシ目のあとナデ、胴部内面へラ削り。	
78 6 号方	,	A13.4 D ₁ 4.9 B 9.2 D ₂ 16.7 C19.8 D21.6	口縁部は内弯し、口唇部でうすく丸 みをおびている。胴部最大径は中位 よりやや上にあり、底部の尖った球 形を呈する。	口縁部外面はクシ目のあとヨコナデ 内面はヨコナデ、肩部外面ヨコナデ 以下底部までクシ目、胴部内面はへ ラ削り。	褐色。 小石粒含む。 良好。
79 6 号方	台付小型壺	A 8.7 C ₂ 10.0 B ₁ 4.9 D ₁ 9.7 B ₂ 3.3 D ₂ 5.0 C ₁ 11.4 D14.7	口縁部はわずかに外弯、半球状の胴部に3穴を有する脚が付く。	外面、口縁部、脚部ヨコナデ、胴部 に浅いハケメが残る。内面へラ削り。	外面黄褐色。 内面黑色。 焼成不良。

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
80	台付小型壺	A 10.0 D 12.2 B 6.6 D ₁ 4.2 C 8.8 D ₂ 8.0 底径11.4	口縁は外反、胴部は尖り気味の丸底を呈し、脚は大きく開き端部で稜を有する。口径は胴径より大きいにもかかわらず口高は胴高より小さい。	外面口縁部より胴部までクシ目のあ とヨコナデ、底部から脚部まではヨ コナデ、内面については口縁部クシ 目のあとヨコナデ、胴部から底部ま でナデ、脚部上半部は指によるナデ 以下クシ目のあとヨコナデ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 内外面丹塗り。
81	壺	A12.5 D ₁ 3.0 B 8.7 D ₂ 9.6 C16.1 D12.6	底部欠失、口縁部は内弯気味に外反 し、口唇部に稜を有する。胴部最大 径は中位にある。	口縁部内外面と胴部内面上半部はヨコナデ、胴部外面はクシ目、内面下半部はヘラ削り。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
92 93-82					
83					
84	小型丸底壺	A 8.7 D ₁ 3.2 B 6.1 D ₂ 5.5 C 8.8 D 8.7	口縁部はわずかに内弯し、胴部は扁 平な球形を呈する。口径と胴部最大 径はほば同じ。	口縁部内面外面ともヨコナデ、胴部 外面上半部はヘラ削り、下半部はク シ目、内面上半部はヨコナデ、下半 部は指によるナデ上げ。	小石粒含む。
85	,	A 8.2 D ₁ 3.2 B 5.4 D ₂ 6.8 C 8.9 D10.0	口縁部は段を有し、外反する。胴部 は尖り気味で丸底を呈する。頸部で 肥厚し、底部でうすくなる。	口縁部外面上半はクシ目のあとヨコナデ、以下頸部までと口縁部内面はヨコナデ、胴部外面上半はクシ目のあとヨコナデ、下半部はクシ目のあとコカナデ、下半部はクシ目のあとへラ削り、胴部内面はナデ、指によるナデ上げ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
86	,	A 8.6 D ₁ 3.1 B 6.7 D ₂ 7.6 C11.4 D10.7	・口縁部は外反し、内面に稜を有する。 胴部はやや肩の張った球形を呈する。		褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 外面丹塗り。 焼成後の穿孔あり。
87	*	A11.7 D ₁ 4.3 B 5.8 D ₂ 6.3 C 9.5 D10.6	「体よりも大きい、胴部は扁半な球形」	ナデ、以下底部までナデ、胴部内面	黄褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
88	壺	A17.6 D ₁ 6.8 B 9.2 D ₂ 20.3 C22.7 D27.1	口縁部は段を有し外反し、口唇部で 稜を有する。頸部はほそくしまる。 胴部は球形を呈する。		
89	大壶	A 19. 2 D ₁ 6. 8 B 12. 6 D ₂ 29. 2 C 32. 4	口縁は外反し、口唇部は段を有する。 胴部最大径は中位よりやや上に有る。 底部欠失。		赤褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
	52.	D 36. 0		上のヘラ削り。	

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
90 6 号方	大壺	A 13. 2 D ₁ 2. 6 B 13. 2 D ₂ 30. 1 C 28. 8 D 33. 0	口縁部上端欠失、胴部最大径は中位 にあり、タテ長を呈する。	口縁部内外面クシ目のあとヨコナデ 肩部外面クシ目のあとヨコナデ、頸 部内面ヨコナデ、胴部より底部まで 外面はクシ日、内面上半部は左→右 のヘラ削り、下半部は下→上のヘラ 削り。	褐色、小石粒含む。 焼成良好。 焼成後の底部穿孔。 肩部にヘラ記号あり。
91 6 号方	高坏	A 17.3 D ₁ 4.6 B 3.7 D ₂ 8.6 C 12.6 D 13.2	口縁部はわずかに外反し、坏部上半部と下半部の接合部は稜帯がはしる。 脚柱状部は太く直線的に広がり、裾部は外弯気味に広がる。両者の境は明瞭。	坏部外面上半部はクシ目のあとヨコナデ、下部はヨコナデ、坏部内面はクシ目、脚柱状部外面は器面が荒れているため整形不明、内面は右→左のヘラ削り、裾部内外面はヨコナデ。	褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。
92 6 号方	,	A18.1 D ₁ 4.2 B 3.3 D ₂ 9.6 C12.4 D13.8	「おは皿状を呈する。□縁部は外反し、底部は肥厚する。环上半・下半部の接合部で稜を有する。 脚柱状部は直線的に広がり、裾部はやや内弯気味に広がる。両者の境は明瞭。	「小部上半部内外面ともクシ目のあとヨコナデ、下半部は内外面ともヨコナデ、脚柱状部外面上半部はヘラ磨き、内面は右→左のヘラ削り、柱状部下半部と裾部内外面ともヨコナデ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
93 6 号方	"	A 21.9 D ₁ 6.0 B 3.4 D ₂ 8.8 C 15.1 D 14.8	坏部は大きく、上半部・下半部の接合部に稜を有する。口縁部はうすくなり外反する。脚柱状部は中央でややふくらみ、肥厚する。裾部との境は明瞭で、裾部は扁平に広がる。	坏外面ヨコナデ、内面口縁部はクシ 目のあとヨコナデ、以下底部までクシ目、坏・脚部接合部はクシ目のあとヨコナデ、柱状部外面はへラ削りのあとヨコナデ、内面は右→左のへラ削り、裾部内外面はヨコナデ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 焼・脚内面丹塗り。
96 —94 97 6 号方	*	A 20.2 D ₁ 5.9 B 4.1 D ₂ 8.3 C 13.5 D 14.2	坏部上半・下半部の接合部は稜を有し、口縁部は外反する。底部脚柱状部は肥厚する。脚柱状部は中央部でふくらみ、裾部は内弯ぎみに広がる。両者の境は明瞭。	坏上半部はクシ目のあとへラ磨き、 稜の部分はヨコナデ、下半部はヘラ 磨き、内面はクシ目のあとヨコナデ 脚柱状部外面はヘラ削りのあとヘラ 磨き、内面右→左のヘラ削り、裾部 外面ヘラ磨き、内面ヨコナデ。	褐色・砂粒含む。 焼成良好。 器体外面、坏内面、 裾部内面に丹塗り。
95 6 号方	*	A 20.5 D ₁ 7.5 B 3.7 D ₂ 4.7 C 14.0 D 12.2	坏部は皿状を呈し、口縁部は外反、 底部は肥厚する。上半・下半部の接 合部には稜を有する。脚柱状部は肥 厚し、直線的に広がる。裾部はやや 内弯気味に広がり、端部は角ばる。	坏上半部、内面はヨコナデ、下半部 はクシ目、稜の下部はその上をヨコ ナデ、坏・脚部の接合部はヨコナデ 脚柱状部はヘラ削り、内面はヘラ削 りのあとヨコナデ、裾部外面はヨコ ナデ、内面はクシ目。	褐色。 小石粒含む。 焼成不良。
96 6 号方	*	A21.8 D ₁ 5.3 B 4.5 D ₂ 10.2 C14.2 D15.6	口縁部は内弯気味に外反する。脚柱 状部は長く直線的に開く、裾部との 境は明瞭であり、裾部は大きく広が る。坏部と脚柱状部、柱状部と裾部 の各接合部で肥厚する。	坏部外面上半部と内面はクシ目のあとヨコナデ、坏内面下半部はヨコナデ、脚柱状部外面上半部はヘラ磨き下半部はクシ目のあとへラ磨き、内面右→左のヘラ削り、裾部内外面ともクシ目のあとヨコナデ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 坏内外面とも丹塗。
97 6 号方	,	A18.6 D ₁ 4.0 B 3.5 D ₂ 8.9 C12.4 D12.9	坏口縁部は外反し、底部は平坦である。上半部・下半部の接合部は角を有する。脚柱状部は太く、直線的に広がり、裾部との境は明瞭、裾部は内弯気味に広がる。端部内面に稜を有する。	坏外面上半部、内面はヨコナデ、外面下半部はクシ目のあとナデ、脚柱 状部外面タテ方向のヘラ削り、内面は右→左のヘラ削り、裾部内外面ともクシ目のあとヨコナデ、端部内面はヨコナデ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
98 6 号方	*	A17.9 D ₁ 4.3 B 3.7 D ₂ 9.4 C11.9 D13.7	口縁はうすく外反する。底部は平坦 で皿状を呈する。脚柱状部は長く直 線的に広がる。裾部は内弯気味に広 がる。端部は丸身をおびている。	坏部内外面ともヘラ磨き、脚柱状部 外面はタテ方向のヘラ削りのあとへ ラ磨き、内面は右→左のヘラ削り、 裾部外面はヘラ磨き、内面はヨコナ デ。	赤褐色。 石粒含む。 焼成良好。
99 6 号方	*	A18.5 D ₁ 4.8 B 3.5 D ₂ 7.7 C11.4 D12.5	口縁部は外反し、坏部上半・下半部 の接合部は角を有する。脚柱状部は 直線的に広がり、裾部との境は明瞭 裾部は内弯気味に広がる。	坏外面上半部はヨコナデ、下半部はクシ目のあとヨコナデ、内面上半部はクシ目のあとヨコナデ、下半部ナデ、脚柱状部外面はタテ方向のへラ削りのあとヨコナデ、内面右→左のヘラ削り、裾部外面ヨコナデ、内面クシ目のあとヨコナデ。	褐色。 大小石粒を含む。 焼成良好。

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
100	高坏	A 18.4 D ₁ 4.7 B 3.8 D ₂ 7.1 C 12.7 D 11.8	口縁部は、うすく外反する。脚は、 ラッパ状に広がり、肥厚する。端部 は角ばっている。	坏外面上半部は、クシナのあとヨコナデ、下半部と内面はヨコナデ、脚外面は、ヘラ削りのあとヨコナデ、上部・端部はヨコナデ、内面は右→左のヘラ削り、端部はクシメ。	赤褐色。 小石粒含む。 焼成やや良好。
101	"	A 17.7 D ₁ 8.0 B 3.5 D ₂ 5.7 C 12.2 D 13.7	口縁部は、内弯気味に外反する。坏 上半・下半部の接合部は稜を有する。 脚柱状部は中央でややふくらみ、裾 部との境は明瞭、裾部は、扁平に広が り、端部は丸身をおび、稜を有する。	坏部外面ヨコナデ、内面は荒れていて整形不明、脚柱状部外面は、タテ方向のナデ、内面は右→左のヘラ削り、裾部は内外面ともヨコナデ。	赤褐色。 小粒を含む。 焼成良好。
98-102	,	A 18.4 D ₁ 4.3 B 3.9 D ₂ 9.1 C D 13.4	坏部は、皿状を呈し、上半部・下半 部の接合部は、角を有する。脚柱状 部は、長く直線的に広がる。裾部欠 失。	坏・脚柱状部外面、ヘラ磨き、坏部 内面ヨコナデ、脚柱状部内面は右→ 左方向のヘラ削り。	褐色。 大小石粒含む。 焼成良好。
103	,	A 18.8 D ₁ 5.2 B 3.8 D ₂ 7.6 C 12.6 D 12.8	坏部は、肥厚し、口縁部は、外反する。上半・下半部の接合部は、稜を有する。脚部はうすく、ラッパ状を呈する。	坏外面上半部はクシメ、下半部はヨコナデ、内面はクシメのあとヨコナデ、脚外面上半部はヨコナデ、下半部はクシメのあとヨコナデ、内面右→左のヘラ削り、端部はクシメのあとヨコナデ、	黄褐色。 小石粒含む。 焼成やや良好。
104 6 号方	,	A 19.7 D ₁ 4.8 B 4.1 D ₂ 8.4 C 13.1 D 13.2	口縁部は外反し坏底部は平担である。 上半・下半部の接合部は角を有する。 脚柱状部は、中央部でややふくらみ、 肥厚する。裾部との境は明瞭であり、 裾部は内弯気味に広がる。	コナデ、下半部・坏内面はヨコナデ、 脚柱状部外面は、ヘラ削りのあとへ	褐色。 砂粒雲・母含む。 焼成良好
105	,	A18.1 D ₁ B 4.3 D ₂ C D 5.8	脚部欠失、口縁部は外弯気味に開く、 上半・下半部の接合部は角ばる。	坏外面上半部は、ヨコナデ、下半部 は、クシメのあとナデ、内面上半部 は、クシメのあとヨコナデ、下半部 はヘラ削りのあとナデ、。	黄褐色。 砂粒・雲母含む。 焼成良好。
106	,	A 18.0 D ₁ 5.0 B 3.1 D ₂ 10.0 C 14.0 D 15.0	口縁部はやや内弯し、坏上半・下半 部の接合部は、稜を有する。底部は 肥厚する。脚柱状部は、中央部でや やふくらみ、裾部との境は明瞭、端 部は角ばっている。	坏部内外面ともヨコナデ、脚柱状部 外面はヘラ磨き、内面は右→左のヘ ラ削り、裾部内外面ともヨコナデ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
107 6号方	"	A 17.0 D ₁ 5.1 B 3.2 D ₂ 9.0 C 12.3 D 14.1		「「「「「「「「」」」」 「「」」」 「「」」」 「「」」」 「「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」 「	焼成良好。
99-108	壺	A 19.9 D ₁ 6.5 B 13.2 D ₂ 15.0 C 30.3 D 21.5	口縁部は、わずかに外反し、中位で わずかに段を有し、端部で角ばる。 肩部で肥厚する。胴部中位以下は欠 失。	外面口縁部より肩部までヨコナデ、 内面口縁部上半部は、クシメのあと ヨコナデ、以下肩部までヨコナデ、 胴部外面クシメ、内面上半部は指に よるナデ上げ以 下はヘラ削り。、	褐色。 小石粒を含む。 焼成良好。
109	,	A 17.0 D ₁ 3.5 B 13.3 D ₂ 4.9 C D 8.4	口縁部は内弯気味に外反し、口唇部 内面に稜を有する。胴部以下欠失。	口縁部外面はヨコナデ、内面はクシ メのあとヨコナデ、肩部外面クシメ、 内面へラ削り。	暗褐色。 小石粒含む。 焼成良好。

図版番号	種類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備 考
110	童	A D ₁ B 11.6 D ₂ C 26.1 D 25.6	口縁部欠失、胴部最大径は中位より やや上にある。 肩部は張り、球形を 呈する。	肩部外面はクシメのあとヨコナデ、 胴部外面上半部は、細かいクシ目、 下半部は荒いクシ目、胴部内面は、 下→上方向のヘラ削り、底部は、指 によるナデ上げ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
111	,	A 12.6 D ₁ B 8.5 D ₂ C D 4.4	口縁部は内弯する。胴部は欠失。	口緑部外面へラ磨き、内面ヨコナデ。	暗褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
112	"	A 16.2 D ₁ B 10.8 D ₂ C D 5.4	胴部以下欠失、口縁部はわずかに外 反し、下半部でわずかに段を有する。 口唇部は角ばる。		褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
113	壺 or 器台	A 19.1 D ₁ B 4.0 D ₂ C D 3.5	口縁部は外反し、口唇部は更に水平 に広がり、角ばる。中位に稜を有す る。	外面は口唇部、口縁下半部でヨコナデ、口縁上半部はクシ目のあとヨコナデ、内面は口縁部でヨコナデ、頸部でヘラ削り。	褐色。 小石粒含む。 焼成やや良好。
114	壺	A 11.6 D ₁ 3.7 B 9.1 D ₂ 3.0 C D 6.7	口縁部は外反し、口唇部は丸みをも つ、肩部以下欠失。	外面口縁部より肩部までヨコナデ、 以下クシ目のあとナデ、口縁部・内 面はヨコナデ、肩部内面はヘラ削り。	
100—115	壺 ?	A D ₁ 2.6 B 9.3 D ₂ 9.0 C 19.8 D 11.6	口縁部上半部・胴部下半部欠失、口 縁部は内弯気味。	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面は クシ目、肩部内面はクシ目のあとナ デ、胴部内面上半部クシメ、以下下 →上のヘラ削り、肩部に輪積のあと がみられる。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
116	,	A 17.2 D ₁ B 13.9 D ₂ C D 4.2	胴部欠失、口縁部は外反し、口唇部 は沈線がある。	口縁部外面はヨコナデ、輪積のあとがみられる。内面はクシメのあとヨコナデ。	灰褐色。 砂粒含む。 焼成不良。
117	,	A 18.2 D ₁ B D ₂ C D 4.4	胴部以下欠失、口縁部は大きく外弯 し、中ほどに段を有する。	口縁部外面はヘラ磨き、内面はクシ メのあとヘラ磨き。	褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。 内外面丹塗り。
118	,	A 11.0 D ₁ 4.2 B 7.0 D ₂ 2.0 C D 6.2	胴部以下欠失、口縁部は内弯気味に 外反し、口唇部内外面に稜を有する。		赤褐色。 細粒子含む。 焼成良好。
119	小型丸底壺	A 9.4 D ₁ 3.3 B 6.1 D ₂ 5.3 C 10.3 D 8.6	底部欠失、口縁部はわずかに内弯し、 口唇で稜を有する。胴部は扁平。頸 部から肩部にかけて肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面は クシメのあとナデ、胴部内面上半部 はヨコナデ、以下は指によるナデ上 げ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技 法 上 の 特 色	備考
120 6 号方	小型丸底壺	A D ₁ B 4.7 D ₂ 8.6 C 10.6 D 9.2	口縁部上半部欠失、口縁部は内弯気 味、胴部最大径はほぼ中位にあり、 球形を呈する。底部で肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面上 半部はヘラ磨き、下半部はヘラ削り、 胴部内面上半部はナデ、下半部は指 によるナデ上げ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
121 6 号方	,	A 7.6 D ₁ 2.8 B 4.6 D ₂ C D 5.5	胴部以下欠失、口縁部は外反する。 頸部でくびれる。	口縁部外面クシメのあとヨコナデ、 頸部外面ヨコナデ、以下クシメのあ とヨコナデ、口縁部内面はヨコナデ、 胴部には指あとが残っている。	赤褐色。 細粒子を含む。 焼成良好。
122	,	A D ₁ B 3.5 D ₂ C	口縁部を欠失する。球形の胴部にや や内弯する口縁部がつくらしい。	外面、下半に細いハケメ、口縁部内 面横ナデ。	赤褐色。 焼成やや良好。
123	台付小型丸 壺	A D 7.8 B 6.4 D ₁ C 8.4 D ₂ 底径11.6	口縁部欠失、胴部は扁平、脚部は大きく広がり、胴部径よりも大である。	頸部外面はヨコナデ、胴部外面はクシメのあとヨコナデ、頸部より胴部 内面より半部までヨコナデ、以下底部までは指によるナデあげ、脚内外面はヨコナデ。	淡褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
124	高坏	A 19.0 D ₁ 6.3 B 3.3 D ₂ 8.7 C 13.8 D 15.0	口縁部はわずかに外反し、坏部上半 ・下半部の境は稜を有する。脚柱状 部は直線的に広がり、裾部との境は 明瞭、裾部は広がり、端部に稜を有 する。	坏外面上半部はヨコナデ、下半部は クシ目のあとナデ、内面はヨコナデ、 脚柱状部外面はヘラ削りのあとヘラ 磨き、内面ヘラ削り、裾部内外面ヨ コナデ。	淡黄褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
125 6 号方	,	A 19.1 D ₁ B 3.8 D ₂ C D 5.1	脚部欠失、口縁部はわずかに外反し、 坏部上半・下半部の境にわずかに稜 を有する。	坏部内外面ともヨコナデ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 内外面丹塗り。
126 6 号方	,,	A 19. 0 D ₁ B D ₂ C D 4. 3	脚部・坏底部欠失、口縁部は外反する。 坏部上半・下半部。	坏部外面はクシメのあとヨコナデ、 内面上半部はクシメのあとヨコナデ、 以下ヨコナデ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 外面丹塗り。
127 6 号方	,	A 20.3 D ₁ B 10.0 D ₂ C D 4.0	坏底部、脚部欠失、口縁部は外反し、 上半部・下半部の境に角を有する。	坏外面上半部クシメのあとへラ磨き、 以下クシメのあとヨコナデ、内面は へラ磨き。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 外面丹塗り。
128	"	A 19. 2 D ₁ B 3. 6 D ₂ C D 5. 0	脚部欠失、坏部は皿状を呈し、口縁 部は外反する。上半・下半部の境は わずかに稜を有する。	坏外面へラ磨き、内面ヨコナデ。	淡褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 内外面丹塗り。
101 102 — 129 7 号方	壺	A 18.1 D ₁ 4.2 B 12.9 D ₂ 24.0 C 24.5 D 28.2	口縁部は外反し、口唇部は角ばる。 胴部最大径は中位にあり、尖りぎみ の丸底を呈する。	口縁部内外面ともヨコナデ、肩部外面クシメのあとヨコナデ、胴部外面 クシメ、胴部内面へラ削り。	黄褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 内面丹塗り。 外面スス付着。

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
130 7 号方	獥	A 16 D 26 B 12 D ₁ 3.2 C 22.8 D ₂ 22.8	口縁部は外弯し、口唇部は角ばる。 胴部はタテ長であり、最大径は中位 にあり、肥厚する。	口縁部内外面・肩部外面はクシ目の あとヨコナデ。胴部外面上半部はク シメ、以下はナデ。胴部内面上半部 は左右のヘラ削り。下半部は下→上 方向のヘラ削り。	淡褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 胴部外面スス付着。 内面丹塗り。
131 7 号方	大壺	A 17.6 D 34.4 B 10.4 D ₁ 6.8 C 28.8 D ₂ 27.6	口縁部は長く、大きく外反する。胴 部は、最大径が中位にあり、ほぼ球 形を呈する。	□縁部内外面、肩部外面はクシメの あとヨコナデ、胴部外面上半部はク シメ、下半部はクシメのあとナデ、 肩部内面ヨコナデ、胴部内面上半部 は左→右のヘラ削り、下半部は下→ 上のヘラ削り。	黄褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 焼成後の底部穿孔。
132	高坏	A 17.4 D 13 B 3.6 D ₁ 5.2 C 13.7 D ₂ 7.8	口縁部は内弯気味に外反する、坏上 半・下半部の境は稜を有する。坏底 部肥厚する。脚、柱状部は中央部で ややふくらみ、裾部との境は明瞭、 裾部は肥厚し、稜を有する。	坏部内外面ともヨコナデ、脚柱状部 外面ヨコナデ、内面へラ削り、裾部 内外面ともヨコナデ。	黄褐色。 小粒子含む。 焼成良好。
7号方 133 7号方	,	A 19 D 16.4 B 4.8 D₁6.1 C 17.2 D₂10.3	口縁部は内弯し、坏部上半・下半部 の境にわずかに稜を有する。 脚はラッパ状に広がり、端部は角ば る。	坏部内外面ヨコナデ、脚外面、上部 端部はヨコナデ、中部は下→上のク シメ、内面は右→左のヘラ削り、端 部はヨコナデ。	黄褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
103-134	,	A 18.4 D 13 B 4 D 6.3 C D₂6.7	脚裾部欠失、口縁部は外反し、坏上 半・下半部の境に稜を有する。脚柱 状部は肥厚し、中央部がわずかにふ くらむ。	坏外面上半部はクシメのあとヨコナデ、下半部・坏内面はヨコナデ、脚柱状部外面はクシメのあとへラ削り、内面は右→左のヘラ削り。	黄褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
135 7 号方	*	A D17 B4.4 D₁16.3 C15.4 D₂10.7	口縁部欠失、坏部は外反し、上半・ 下半部の境に稜を有する。脚柱状部 は直線的に広がり、裾部との境は明 瞭、裾部は内弯気味に大きく広がる。 内外面にわずかに稜を有する。	坏部外面上半部クシメのあとヨコナデ、下半部ヨコナデ、内面上半部ヨコナデ、内面上半部ヨコナデ、脚柱状部外面はヘラ削り、内面は右→左のヘラ削り、裾部内外面ヨコナデ。	褐色。 砂粒含む。 焼成良好。 内外面丹塗り。
136 7 号方	蕹	A 17 D 13.2 B 13.3 D ₁ 9.3 C 24 D ₂ 3.9	胴部以下欠失。口縁部は内弯し、口 唇部は角ばる。肩部は肥厚する。	外面口縁部より肩部までヨコナデ、 胴部はクシメのあとナデ、内面では 口縁部クシメのあとヨコナデ、頸部 ヨコナデ、胴部ヘラ削り。	黄褐色。 小石粒含む。 焼成良好。
137 7 号方	小型丸底重	A 7.8 D 8.7 B 6 D₁2.5 C 9.9 D₂6.2	口縁部は内弯気味に立上り、口唇部 で外反する。胴部は扁平で、底部は 肥厚する。	口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面 ヨコナデ、内面は指によるナデ上げ。	黄褐色。 小石粒多く含む。 焼成良好。
138 7 号方	高坏	A D 7.9 B D ₁ C 13.6 D ₂	坏部欠失、脚柱状部はややふくらみ、 裾部との境は明瞭。裾部は大きく広 がり、内面は内弯する。端部はわず かにはね上がる。	脚柱状部外面へラ削りのあとナデ、 内面右→左のヘラ削り、裾部外面ク シメのあとナデ、内面はヨコナデ。	褐色。 小石粒含む。 焼成良好。 外面丹塗り。
139 7 号方	"	A 17.5 D 9.8 B 3.6 D ₁ 5.3 C D ₂ 4.5	脚下半部欠失。口縁部は外反し、坏部上半・下半部の境にはわずかに稜を有する。脚はラッパ状に広がる。	坏外面上半部はヨコナデ、下半部は クシメのあとナデ、内面はクシメの あとナデ、脚外面はヘラ削りのあと ナデ、内面右→左のヘラ削り。	褐色。 砂粒を多く含む。 焼成良好。 外面、坏内面丹塗り。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
140	高坏	A D ₁ B 3.3 D ₂ C D 9.3	坏上半部・脚端部欠失、脚部は直線 的に広がり、裾部との境は明瞭。	坏部外面はクシメのあとヨコナデ、 内面ナデ、脚柱状部は外面へラ削り のあとナデ、内面石→左のへラ削り、 裾部外面ナデ、内面ヨコナデ。	褐色。 砂粒含む。 焼成良好。 外面・坏内面丹塗り。
141	,	A D ₁ B D ₂ C 11.4 D 8.2	坏部欠失、脚柱状部はふくらみ、裾 部との境は明瞭。	脚柱状部外面上半部へラ削りのあと、 ヨコナデ、下半部はヘラ削りの上に クシメ、そのあとヨコナデ、内面は 右→左のヘラ削り、裾部内外面ヨコ ナデ。	褐色。 石粒を多く含む。 焼成良好。
104 	大型壶	A 18.8 D ₁ 6.6 B 14.6 D ₂ 27.2 C 30.6 D 33.8	口縁部は外反し、中ほどに段を有する。口唇部は角ばる。胴部最大径は 中位より上にあり、底部は尖りぎみ。	口縁部外面ヨコナデ、内面クシメの あとヨコナデ、頸部内面クシメ、肩 部外面はクシメのあとヨコナデ、胴 部外面上半部は細いクシメ、下半部 クシメ、胴部内面へラ削り。	褐 色。 小石粒含む。 焼成良好。 焼成後の底部穿孔。
143	,	A D ₁ 4.8 B14.0 D ₂ 35.0 C34.0 D39.8	口唇部欠失、口縁部は直線的に外反する。肩部は張っており、胴部の最大径は中位より上にあり、底部は尖り気味で肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面クシメ、底部外面はクシメのあとナデ、胴部内面はヘラ削り、肩部にはクシメのあとあり。	褐色。 小石粒含む。 焼成後の底部穿孔。 内外面丹塗り。
144	壺	A 11.0 D ₁ 3.7 B 8.7 D ₂ 12.1 C 14.3 D 15.7	口縁は外傾し、胴部は球形。	口縁部外面はヘラ削りのうえハケ目。 胴部外面は全面ハケ目。内面ヘラ削 り。	
145	,	A 13.2 D ₁ 5.0 B 11.0 D ₂ 21.8 C 10.9 D 26.8	口縁はわずかに外傾し、胴部は縦長 の球形。	口縁部内外面は横ナデ。胴部外面は 全面にハケ目。内面へラ削り。	褐色。 焼成良好。 小石粒を含む。 焼成後の底部穿孔。
146 8 号方	,	A 14.8 B 10.2 C 22.4 D ₁ 4.8	口縁は外傾し、胴部はやや縦長。最 大径は中位よりやや上にある。底部 欠失。	4	赤褐色。 焼成良。
106 107 107 8号方	,	A 16.6 D ₁ 3.8 B 7.9 D ₂ 13.7 C 16.1 D 17.5	i e	口縁部内外面はハケ目のうえをナデ、 胴部外面上半はハケ目のうえをナデ。 下半はヘラ削り。内面ヘラ削り。	
148 8 号方	,	A 18.0 D ₁ 6.4 B 8.4 D ₂ 15.4 C 17.6 D 21.8	,	口縁部内外面は横ナデ。胴部外面上 半はハケ目。	赤褐色。 焼成良。
149	,	A 16.4 D 23.4 B 10.2 C 25.7 D ₁ 7.6	複合口縁で、口縁端は外方にはり出す。胴部はやや縦長の球形。	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は ハケ目。内面ヘラ削り。	黄褐色。 焼成やや不良。 小石粒を含む。 内外面とも丹彩。

図版番号	種類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
150 8 号方	变	A 18. 1 B 13. 3 C 24. 5 D ₁ 4. 7	く字形の口縁はわずかに肥厚する。 胴部最大径は中位よりやや上にある。 底部欠失。	口縁部内外面はハケ目のうえをナデ。 胴部外面はハケ目。内面へラ削り。	黄褐色。 焼成良。 外面及び口縁部内面 に丹彩。
151 8 号方	壺	A 10.5 D ₁ 3.9 B 8.6 D ₂ 12.2 C 16.6 D 16.1	口縁部はわずかに内弯し、胴部は中 位ではり出す。	口緑部内外面及び胴部外面は横ナデ。 胴部内面へ ラ削り。 輪積みの痕跡あ り。	赤褐色。 焼成良。
152 8 号方	,	A 12.5 D ₁ 2.1 B 11.1 D ₂ 9.2 C 12.8 D 11.3	広口の口縁で、先端は外反する。胴部は球形で、尖り気味の丸底。	胴部外面はハケ目。内面ヘラ削り。	赤褐色。 焼成良。
108 109 8号方	小型丸底壺	A 9.0 D ₁ 3.2 B 4.7 D ₂ 6.4 C 8.4 D 9.6	複合口縁で、胴部はやや肩がはる球 形。	口縁から胴部中位にかけての内外面 は横ナデ。中位以外の外面はハケ目。 内面は指圧痕あり。	褐色。 焼成良。 小石粒を含む。 口縁部内面及び外面 全体に丹彩。
154 8 号方	,	A 9.0 D ₁ 2.7 B 7.2 D ₂ 3.4 C10.1 D 6.1	口縁部はわずかに内弯し、胴部はや や肩がはる。尖り気味の丸底。	口縁部外面はハケ目のうえをナデ。 内面は横ナデ。胴部外面はハケ目。 部分的にそのうえをナデ。内面へラ 削りと指圧。	淡褐色。 焼成良。 小石粒を含む。
155 8 号方	,	A 7.9 D ₁ 3.6 B 6.0 D ₂ 3.1 C10.0 D 6.7	口縁はわずかに外傾して直延する。 胴部は肩がはる。	口縁から肩部にかけての内外面は横 ナデ。胴部下半外面はナデ。内面は 指圧。	赤褐色。 焼成良。 小石粒を含む。
156 8 号方	高坏	A 25.2 D ₁ 7.4 B 4.7 D ₂ 9.6 C 16.6 D 17.2	径の大きな坏部に、大きめの脚がつ く。	坏部内面は横ナデ。脚柱部内面はへ ラ削り。	外面に丹彩。
157 8 号方	*	A 22.6 D ₁ 7.2 B 4.5 D ₂ 9.0 C 16.7 D 16.2	丸みのある坏部に、大きく開く脚が つく。	坏部外面はハケ目。他はナデが主体。	
158 8 号方	,	A18.3 D ₁ 5.2 B 3.8 D ₂ 8.2 C13.1 D13.4	丸みのある坏部。脚下端は横に開く。		坏部内面及び外面全体に丹彩。
159	,	A 17.1 D ₁ 5.6 B 3.5 D ₂ 7.0 C 10.8 D 12.6	小型で、ややつくりが雑。	外面及び坏部内面は横ナデ。脚柱部 内面はヘラ削り。	黄褐色。 焼成良。 内外面に丹彩。

図版番号	種 類	法 <u>量</u> (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
		A 17.9 D ₁ 6.4	全体に整った器形。安定感のある大	坏部内外面はハケ目のあとを横ナデ。	
110	高	B 3.9 D ₂ 7.2	きめの脚がつく。	脚部外面はヘラ削りのうえをナデ。 内面はヘラ削り。	焼成良。 内外面に丹彩。
110 -160		C12.3		対面は、フロッ。	トルル田 (二)1450
111	坏				
8 号方	- '	D13.6			
		A 18.9 D ₁ 5.4	坏部中位での屈曲は明瞭でなく、脚		褐色。
		B 3.3 D ₂ 9.5	下端は大きく開く。	脚柱部外面はヘラ削りのあとをナデ。 内面ヘラ削り。脚下端部内外面はハ	焼成良。 坏部内面を除いて丹
161	"	C 12. 4		「ケ目のあとを横ナデ。	彩。
		D14.9			
8 号方					14 N ±
		A 14.8 Di 4.4	坏部中位で屈曲し、先端は外傾する。 脚端下端は株に関え		焼成良。 坏部内面を除いて丹
İ		B 3.6 D ₂ 7.5	脚部下端は横に開く。	脚柱部内面はヘラ削り。	彩。
162	"	C12.4			, -
		D12.0			
8 号方					
		A 18.3 D ₁ 6.0	160と類似する。	坏部内外面はうすいハケ目のあとナ デ。脚柱部外面はヘラ削りのうえを	赤褐色。 全面丹彩。
		B 3.5 D ₂ 8.0		ア。脚性部外面はヘラ削りのりえを ナデ。内面ヘラ削り。	王山 万杉。
163	"	C12.8		, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	
		D14.0			
8号方					
		A 16.8 D ₁ 5.6	小型で、脚柱部と下端部との屈曲は	脚柱部内面へラ削り。	
		B 3.2 D ₂ 9.9	不明瞭。		
164	"	C10.9	·		
	ŀ	D15.5			
8 号方					
		A 16.7 D ₁ 4.5	小型で、坏中位での屈曲は不明瞭で、	163と類似する。	
	į	B 3.4 D ₂ 6.5	丸みをもつ。		
165	"	C12.5			
o 모=	,	D11.0			
8 号方					
		不明	│大型で、安定した器形。口径、脚柱 │部径とも大きく、脚下端部は横に開	坏部内面横ナデ。脚柱部内面横ナデ。	外面丹彩。
	An.		部性とも入さく、呼下端部は傾に用しく。		
166	盌				
o 모 ᆂ					
8 号方	<u> </u>			- 43 to 1 1 7 th 1	1.49.6
		A 10. 2	口縁部は外傾し、先端は外反する。 胴部欠失。	口縁部内外面横ナデ。	赤褐色。 焼成良。
1.07	<u>#</u>	B 6.5	(102八八)		が 砂粒を含む。
167	壺	D ₁ 6.4			
8 号方					
0 7/1			松人口(3 口(3)从地)上41 厂上。 一	AZINI (DOLLA III)	DD 48 A
		į.	複合口縁。口縁先端は外反する。口		明褐色。 焼成良。
		A 19.4	縁下半と胴部欠失。	! は横ナデ。	
112—160	,	A 19.4	縁下半と胴部欠失。	は横ナデ。	砂粒をわずかに含む。
112-168	,	A 19.4	縁下半と胴部欠失。	は横ナデ。	
112-168	,,	A 19.4	縁下半と胴部欠失。	は横ナデ。	
	,				砂粒をわずかに含む。
	,	A 20. 8	縁下半と胴部欠失。 口縁は外傾し、直線的に長くのびる。 胴部欠失。		砂粒をわずかに含む。 淡褐色。 焼成良。
	,	A 20.8 B 11.3	口縁は外傾し、直線的に長くのびる。		砂粒をわずかに含む。 淡褐色。
8号方		A 20. 8	口縁は外傾し、直線的に長くのびる。		砂粒をわずかに含む。 淡褐色。 焼成良。

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
170	壺	A 7.9 B 6.2 C11.1 D ₁ 3.4	直立気味の口縁部と、扁平な胴をも つ。	口縁部ヨコナデ。	褐色。 焼成良好。
171	高	A 19.2 D ₁ 5.8 B 3.9 D ₂ 8.8 C 14.2	坏部中位でわずかに屈曲し、口縁先 端は外傾する。脚下端は横に開く。	脚柱部内外面へラ削り。	坏部外面丹塗り。
8号方	۳۰	D14.6			
172 8 号方	,	.A 15.6 D ₁ 4.6 B 3.5 D ₂ 7.4 C 12.1 D 12.0	坏部は丸みをおび、口縁先端はわず かに内弯気味。脚下端は横に開く。	坏部外面横ナデ。脚柱部内面へラ削 り。	脚部内面丹塗り。
173	,	A 19.4 B 2.8	扁平な坏部をもち、脚端は欠失。	内外面にクシメを施し、後にヨコナ デ。脚部内面へラ削り。	淡褐色。 焼成良好。
174	,	A 19.9	やや内弯気味の坏部脚部を欠失する。	坏外面はクシメのあとヨコナデ。内 面ヨコナデ。	淡褐色。 烷成良好。
175	,	A 18. 9	やや内弯気味の坏部口唇部は、わず かに外反する。接合部は小さな稜を なす。	外面ヨコナデ。内面クシメのあとヨ コナデ。	黄褐色。 焼成良好。
176	,	A 18. 2 D ₁ 6. 0	全体に丸みをおびる接合部にわずか に稜をもつ。脚部欠失。	外面上半ヨコナデ。下半クシメ。内 面クシメ。	褐 色。 焼成やや良。 丹塗り。
177	,	A 18. 8 B 3. 4 D ₁ 6. 1	丸みをもつ坏部で、接合部は小さな 稜をもつ。先端はわずかに外反する。 脚部を欠失。	内外面ともヨコナデ。	黄褐色。 焼成不良。
178	,	A 15. 3	「坏部丸みをおびる。接合部はやや稜をなす。 脚部を欠失。	内外面クシメのあとヨコナデ。	褐色。 焼成良好。 丹塗り。
113—179	,	A 25. 4	深い坏部をもち、脚を欠失する。大型の高坏。	内外面ヨコナデ。坏内面の底にはヘ ラケズリがみられる。	褐 色。 焼成良好。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
180	高	A 25. 5	接合部に小さな稜と沈線をもつ。大型の高坏。脚部を欠失。	内外口唇部はヨコナデ。以下クシメ、 内面クシメのあとをヨコナデ。	淡褐色。 焼成良好。 丹塗り。
8 号方	坏				
0 7/1			 脚部のみ。円筒状の大型の脚部。	 外面へラケズリのあとヨコナデ。内	
181	"	B 5.2 C14.4 D 5.9		面へラケズリのあとをナデ。	焼成良好。
8号方		D ₂ 5.9			
		不 明	坏部欠失。脚部は中ほどでふくらみ 裾部は短く広がる。	脚部外面はヘラケズリのあとヨコナ デ。内面は右一左方向のヘラケズリ。	
182					
8 号方					
183	"	B 3.1 C11.5 D ₂ 6.6	「坏部上半を欠失する。裾ひろがりの 脚部は脚端で小さくそる。	坏下半はクシメのあとナデ。脚筒部 ヘラケズリのあとナデ、裾は横ナデ。 内面ヘラケズリ。	
8 号方					
184	,	B 3.2 C13.1 D 7.8 D ₂ 7.8	「坏部を欠失。ひろがり気味の脚部。 脚裾の先端は小さく内弯する。	外面ヘラケズりのあとヨコナデ。裾 部ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	褐 色。 焼成良好。
05/					
185	,	B 3.5 D ₂ 7.9 C11.1 D10.8	Print & N. No. () INGANO SEPRE CO. No.	ヘラケズりのあとヨコナデ。裾部ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	
8 号方		D ₁ 2.8			
186	"	B 3.3 C13.2 D10.1 D ₂ 8.9	坏上半を欠失。ひろがり気味の脚部 をもつ。	坏部クシメのあとをヨコナデ。裾部 ヨコナデ。内面ヘラケズ 。	褐色。 焼成良好。
0577			10017 \$5 (N	10C + ##/bl	
187	,	B 2.9 C12.7	186に類似。	186に類似。	丹塗り。
8 号方					
188	,	В 3.7	坏上半と、脚裾部を欠失。	坏部はクシメのあとヨコナデ。脚部 外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	褐 色。 焼成良好。 丹塗り。
8号方	<u></u>		縦長の口縁部と、扁平な胴部をもつ。	口縁部と胴部上半ヘラミガキ、胴下	6 方西北周と接合。
189	壺	A 9.5 B 6.0 D ₁ 4.9	底部を欠失。	半ヘラケズり。口縁部内面ヨコナデ。 胴部内面ヘラケズリ。	
1	1				

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
190 8 号方	台 付 盌	B ₂ 3.6	上半と、台の裾部を欠失。	外面ヘラミガキ。	赤褐色。 胎土はよく精製されている。 焼成良好。
191	台 付	不明。	台は小さく、大き外反して端部にい たる。他は詳細不明。	190に類似。	黄褐色。 胎土はよく精製され ている。
8 号方	盌				焼成良好。
114-192 9 号方	壺	A 13.7 D ₁ 13.1 B 9.3 D ₂ 20.7 C 20.7 D 23.8	胴部球形で全体にいく分歪みがある。 頸部は強く屈曲し、口縁部にかけて ラッパ状外反する。	外面は縦方向にハケ目と撫でによる 器面調整。内面はヘラ削り、口縁部 は横撫でにより整形している。	赤褐色。 小石粒を含む。 焼成やや良好。
193 9 号方	小型丸底壺	A12.2 D ₁ 2.5 B10.8 D ₂ 8.2 C13.5 D10.7	胴径の割に頸部の比較的大きい小形 の壺で、口縁部は少し外反し、立上が りは割と短い。	器面に横又は斜めにハケ目がかかり、 その上を撫でにより消されている。 内面は篦削り、削の方向は一定でない。口縁部は横撫でによる仕上げ。	褐色。 多量の小石を含む。 (表面に多く露出し ている)。 焼成良好。
194 9 号方	高坏	A 18.7 D ₁ 5.5 B 3.8 D ₂ 8.8 C 14.4 D 14.3	坏部は中位の接合部に稜があり、□ 縁部にむかってゆるく内弯する。脚 部はゆるく裾開きになる。	坏口縁部は斜めにハケ目のあと横撫 で、脚との接合部は縦方向に刷毛ならし。脚内面は胎上の削り出し、端 末は横なでによる器面調整。	褐色。 胎土に小粒子を多動 に含む。 焼成やや不良。
115-195 9 号方	小丸丸底壺	A 9.6 D ₁ 2.9 B 7.0 D ₂ 7.7 C11.0 D10.6	坏部の中位接合部は稜をなさず、口 縁部は端末がわずかに外にはねる。 脚は欠失。	器面はハケ目のあとを横撫でによる 整形している。	淡褐色。少量の小石 少量の小石粒を含む 焼成は良好。
196 9 号方	高坏	A 20.9 B 4.3 C D 7.0	坏部は全体にまるく、接合部は段を なす。口縁端末は僅かに外反する。	器面が荒れているが横撫でによる器 面調整が観察される。	淡褐色。 小石粒を含む。 焼成は良好。
197 9 号方	,	A 18.4 B 3.5 D 5.9	坏部は中位の接合部には稜、段がなく、口縁端が僅かに外反する。 脚部は欠失。	器面はハケ目、そして撫でにより仕 上でている。	淡褐色。 小石粒を含む。 焼成は良好。
198 9 号方	盌	A 19. 1 B D: 5. 0	底は欠失。胴部より口縁にむかって ゆるく外開きになる形で立上がる。	器面はヘラ磨きにより仕上げられ、 口縁端末には横なでのあとがのこる。	薄い赤褐色。 焼成むら(褐色黒) あり、胎土中小石料 を含む。 焼成良好。
199	,	A 17.2 D 4.0	底部は欠失。口縁端末はまるく、浅 く皿状をなす。	器面調整はハケ目、横なでによる。	淡褐色。 胎土中小石粒含む。 焼成良好。
9 号方					

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
200	占	C 14. 5 D 13. 5	坏部欠失、脚の接合部から大きく屈 曲、屈曲部から外にふくらみ気味で 端末に至る。	脚内部は削り出し、外面はヘラ削の あと横なでによる調整、脚端末部に かけて横なで。	褐色、脚底部に焼成 むら(黒)あり、胎 土中少量石粒含む。 焼成良好。
9 号方	坏				
201	高	A B C 15. 6	坏部欠失。脚部は端末にむかってゆ るくカーブし、安定した脚をなす。	脚内面はヘラで削り出し、その上横 なで、外面は同様ヘラ削りのあと横 なでによる整形。	褐色、胎土中小石粒 含む。焼成は良好。
9 号方	坏	D 7.0		103 bit 1 to the bit 1 to 1 to 1 to 1 to 1 to 1 to 1 to 1	**************************************
202 1 0号方	壺	A 13.1 D ₁ 4.8 B10.2 D ₂ 15.0 C17.3 D19.8	胴部はまるく、頸部は短かく弯曲しながら直上、口縁下に明瞭な稜線があり、口縁端末はゆるく外反する。	胴部より底部にかけタタキ目が顕著 肩より頸部にかけてタタキ目のあと 横撫で、口縁部および内面は横撫で による整形。	暗褐色、胎土に小石 粒を含み焼成は良好。 底部に焼成後の穿孔 あり。
203	小形丸底壺	A 8.2 D ₁ 3.1 B 5.6 D ₂ 7.5 C11.0 D10.6	胴部はまるく、頸部は強くしまる。 口縁下にわずかに稜がみられる、口 縁部は外反。	器面は非常に荒れているが、横撫のあとが観察される。内面は指による胎土の削り上げ。	黄褐色、小石粒を含む。焼成良好。
204	高	B 4.3 C14.6 D ₂ 7.7	坏部欠失、脚はゆるくカーブし、端 末は僅かにはねる。	脚内面はヘラ削り横撫で、外面はヘ ラ削のあとハケ目による整形。	褐色、焼成むら(黒) 一部にあり、焼成良 好。胎土中砂粒含む (黒雲母を含む)。
205	高坏	A 21. 3	脚部欠失、坏部は接合部より上残存 口縁部にむかいゆるく外傾し端末は 外にはねる。	ハケ目による器面調整のあと横撫で による整形。	褐色、焼きむら (黒) あり。焼成良、胎土 中石粒を含む。
116 117 14号方	壺	A 17. 2 D₁ 6. 2 B 11. 0 D₂26. 4 C 27. 0 D 32. 6	丸底、胴部はまるく、頸部はしまる。 頸部よりわずかに屈曲しながら口縁 に向かって外反する。	胴部にはハケ目が縦、斜めにかかる。 口縁部はハケ目、横撫でによる整形 内面はヘラ削り。	
207 14号方	变	A 16. 6 D ₁ 3. 2 B 13. 6 D ₂ 25. 0 C 26. 2 D 28. 2	丸底で、球形の胴部とく字形の口縁 部をもつ。	口縁部はヨコナデ、胴部はクシメ内 面へラケズリ。	赤褐色焼成不良。
208	小形丸底壺	A 7.1 D, 5.4 B 5.5 D, 2.7 C 8.1 D 8.0	胴部はまるく丸底、頸部は締り、口 縁にむかって外にふくらみながら立 上がる。	胴部はハケ目のあと横撫で、口縁部は横撫でによる仕上げ、内面は指による削り上げ。	褐色、ごく少量の小 砂粒を含む。焼成は 良好。
209 1 4 号方	小形丸底壺	A B 4.8 C 9.9 D 7.5	口縁欠失。胴部はまるく、頸部はしまる。	器面はハケ目のあと横撫でによる仕上げ、内側に輪積みのあとあり。	淡褐色、小石粒含む、 焼成は良好底部穿孔。

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
210 14号方	小形丸底壺	A10.2 D ₁ 3.3 B 6.2 D ₂ 8.0 C11.1 D11.3	胴部および底はまるい。頸はしまり 口縁にむかって大きく外友する。 口縁下の稜線不明瞭。	器面が荒れているが、外面はハケ目 調整のあと横撫で、内面はヘラ削り により整形。	褐色、小石粒含む 焼成不良
211 `14号方	小形丸底壺	A 7.7 D ₁ 5.3 B 5.5 D ₂ 2.7 C 8.2 D 8.0	胴部はまるく、頸部はゆるくしまり、 口縁にむかいラッパ状に開く。	胴部以下へラ削り、胴部より口縁にかけ横撫でか内部はへラ削り、上にむかって指で削り上げ。 底は厚くふくらむ。	黄褐色、小石粒含む、 焼成良好。
212 14号方	高坏	A 18.6 D ₁ 4.7 B 3.6 D ₂ 9.0 C 12.7 D 13.7	环部は中位の接合部より口縁に向って外反、脚部も接合部より大きく外反し、脚端末にいたる。	坏部は一部にハケ目をのこしながら ヨコナデによる仕上げ。 脚柱状部は内面へラ削り、外面へラ 磨き。脚端末にいたりハケ目ヨコナ デ仕上げ。	褐色、小石粒を含む 焼成はやや良好。
213 14号方	,	A18.7 D ₁ 5.1 B 3.5 D ₂ 7.5 C12.4 D12.6	坏接合部は僅かに段をなす。脚は柱 状部との接合部より大きく屈曲し、 脚端へむかってふくらみ気味に延び る。	坏部内面はヘラによる磨研。外面には磨研の下にハケ目をのこす。脚は柱状部内面削り出し。外はヘラ磨き。脚端末部は横撫でによる仕上げ。	黄褐色、少量の小石 粒を含む、 焼成やや良好。
214 14号方	,	A 18.1 D ₁ 5.8 B 3.2 D ₂ 7.7 C 15.0 D 13.5	坏 部は比較的深めで接合部に段がある。また口縁端末ははねる。脚は未広かりに開き、ゆるやかな安定した脚をなす。	坏の器面はハケ目の上を横撫でで調整。脚は内面へラ削り。また脚内面に丹の痕跡あり。坏、脚は別造り接合。	褐色、砂粒を多量に 含む。 焼成良好。
215 14号方	,	A17.9 D ₁ 5.7 B 4.3 D ₂ 7.5 C12.2 D13.2	坏部の接合部は僅かに段をなす。 □縁端末は少し外にはねる。脚はゆ るくカーブをして、端末は外開きに 安定する。	环部外面はハケ目調整のあと横撫でによる整形。内面は横撫で。 脚は内面削り出し。外面へラ削り、 横撫でにて整形。环、脚別造り。	黄褐色、小石粒を含 む。 焼成良好。
118-216	,	A 19.4 D ₁ 7.4 B 3.8 D ₂ 8.9 C14.9 D16.3	坏接合部は少し凹む程度で全体にまるい。 坏端末は上に突出する。 脚はゆるやかなカーブをもち安定している。	坏部は外面のシ目のあと横撫で、内面は横撫でによる仕上げ。 脚は内面へラ削り、外面および端末はヨコナデによる仕上げ。	淡褐色、小石粒を含 む。 焼成良好。
217 1 4号方	,	A18.8 D ₁ 8.0 B 3.5 D ₂ 8.0 C13.6 D16.0	坏は比較的深く、接合部は段をなす。 坏端末は外にはねる。脚は安定して いる。	坏部外面は僅かにクシ目をのこし、 内面横撫でによる整形。脚は内面削 り出し、外面へラ削りの上横撫でに より調整。	観色、小石粒を含む。 焼成良好。
218 1 4号方	壺	A14.2 D ₁ 4.2 B 9.3 D ₂ 15.5 C22.2 D19.5	底は欠失、口縁部は外反し、ゆるや かな段を有する。 頻部はしまり強く外弯する。	口縁部は横撫で、肩から胴にかけて 器面はハケ日調整。内面は斜め上に 胎土を削り上げる。	淡褐色、小石粒を含 む。 焼成良好。
219 1 4号方	盌	A12.3 B 7.1	底はまるく、口縁部がいく分しまり、 上端はまるく僅かに外反する。	器面はヘラ削り、口縁部は横揺で、 内面も横揺で仕上げ。	赤褐色、ごく細い石 粒を含む。 焼成良好。

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
119-220	高坏(有蓋)	A10.8 D 8.5 A ₁ 12.8 D ₁ 3.4 B 8.3 D ₂ 5.1 C10.7	ほぼ完全に復元できた。坏部は、全体的に浅く、受部の断面は三角形状に尖出し、さらに口縁部は内側に短く立ち上がる。円筒形の脚部には方形の大きなスカシが一段四方にあり、裾部でやや広がる。	全体にヨコナデが施され、坏脚に接合ののちスカシは鋭利は工具で切りとられている。 器面は全体にぶり沢汲を有し部分的に薄らくしている。	色調 灰黒色 焼成良好。
120 121 15号方	小形丸底壺	B 9.0 C13.5 D 8.5	口縁部は欠失、胴部は強く外に張り、 頸部は締る、頸の内側には稜線がの こる。	器面には僅かにハケ目がみられ、頸 部より上は横撫で、内面は指にて撫 で胎土を削り上げる。	褐色、小石粒含む。 焼成は良好。 底部は穿孔か。
222 ※ 15号方	高坏	A 19. 6 D ₁ 4. 7 B 4. 5 D ₂ 8. 4 C 18. 1 D 13. 1	坏部は接合部より屈曲し、口縁端末 にむかって内弯気味に立上がる。 脚はゆるくカーブし、端末は外開き になる。	环部外面にわづかにハケ目がのこる。 内面は横撫でにより調整。脚内面は ヘラ削り、外面上半はヘラ磨き、下 半はハケ目調整。脚端末はヨコナデ。	黄褐色、小石粒を含 む。
223 15号方	"	A 19. 2 B 4. 1 C 13. 1 D 12. 9	脚端未は欠失、坏接合部はまるく、 口縁にかけて内弯しながら外反する。 脚はゆるく立上がり、接合部より端 末にかけて強く外反する。	坏部は横撫でにより調整。脚内面は ヘラにて削り出し、開脚部以下横撫 で、立上がりの部分はヘラ削りのあ と横撫で。坏、脚は別造り接合。	褐色、小石粒を含む。 焼成はやや良好。 器面は風化により荒 れている。
224 15号方		A 20. 0 D ₁ 6. 0 B 3. 4 D ₂ 9. 2 C 12. 0 D 15. 2	「坏部は接合部より屈曲し、稜をなす、 立上がりは口縁部にむかって外反。 脚はゆるくカーブして末広がりにな る。	好部は内面にヘラあと、ハケ目をのこし、横撫でによる調整。脚は内面 ヘラ削り、外面ヘラ磨き、端末は横 撫でによる整形。	褐色、小石粒を含む。 焼成良好。
225 1 5 号方	"	A16.1 D ₁ 3.9 B36.0 D ₂ 7.5 C13.4 D11.4	「坏部はゆるくカーブし、立上がりもゆるく内弯しながら外反する。 脚はゆるく傾斜し、端末は大きく開く。先端はわづかに上にはねる。	坏部内外面にハケ目調整、外面は更にこの上を横撫で。脚は内面へラ削り、外面は縦方向にヘラ削りのあと横撫で。脚端末は横撫でにより整形。	全面丹塗り。 褐色、小石粒を含む。 焼成は良好。
226-226	"	A 20. 1 D ₁ 7. 0 B 3. 8 D ₂ 8. 0 C 16. 0 D 15. 0	「不部はゆるく傾斜し立上がる。接合部には僅かに稜がある。口縁上端は平坦。 脚はゆるく傾斜し、直線状に端末へ延びる。脚の中程に4個の飾り穴がある。	「「坏内外面に繊細なハケ目がみられ、 上を横撫で仕上げ。 脚は内面へラにて削り出し、外面は 縦にクシ目、その上を横撫で、飾り 穴の穿孔は外からあけている。	褐色 (丹塗り) 小石粒を含む。 焼成は不良。
227	"	A 19. 1 D ₁ 5. 1 B 4. 7 D ₂ 7. 6 C 13. 3 D 12. 7	「坏部は底が平坦、接合部に僅かに稜をのこし、外反しながら立上がる。 脚部は柱状部が末広がり、接合部より強く屈曲する。	环部はクシ目にて均したあと、横撫でにて調整。 脚内面はヘラ削り、外面はヘラ削り のあと横撫で。端末は横撫でにて調 整。	内面丹塗り、黄褐色 小石粒を含む。 焼成不良。
228 1 5 号方	"	A17.6 D ₁ 5.3 B 4.2 D ₂ 8.9 C12.1 D14.2	「坏部はゆるくカーブし、接合部で段をなす。立上がりは外反し口縁部ふくらみ気味。脚の柱状部は比較的立上がりは急。接合部より端未まで外弯しながら端末に至る。端末は少し上にはねる。	「环部はクミ目にて整形したあと、ヨコナデにて調整。 脚外面はタテ方向のヘラケズリ。内面は右一左の回転ヘラケズリ。	褐色、少量の小石粒 含む。 焼成良好。
122-229	壺	A 15. 7 D ₁ 4. 7 B 12. 5 D ₂ 10. 5 C 27. 0 D 15. 2	口縁部はわずかに弯曲をまし口唇端 は平端。胴部下半を欠失する。	外面は荒いクシメ。口縁部はそのの ちョコナデ、口唇端はヨコナデ内面 は口縁部ヨコナデ、内面はヘラケズ リ。	現存部、全面丹塗り。

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
230 15号方	壺	A14.5 D ₁ 1.2 B12.7 D ₂ 4.7 C D 5.9	口縁部はわずかにコ字形をなす胴部 を欠失する。	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ、 胴部内面にヘラケズリあり	暗褐色、小石粒を含む。 焼成は良好。
231 15号方	愛	A15.1 D ₂ 1.1 B12.1 D 4.8 D ₁ 3.9	にぶい口唇をもつ。口縁はクシメの あとヨコナデ、胴部以下を欠失する。		黄褐色 焼成良好。
232 1 5 号方	小形壺	A11.6 D ₂ 8.0 B 7.0 D12.0 D ₁ 4.0	わずかに内弯する口縁部をもち先端 はとがり気味に外反する。 胴下半を欠失する。	口縁部には細かいタテの櫛目、胴は ハケ。口縁部内面はヨコナデ、胴部 もヨコナデ。	赤褐色 (丹塗りをほどこしているが剝落 きめ細い粒土粘りは あまりない。 焼成良好。
233 1 5号方	壺	不 明	口縁部のみで胴部を欠失する。強く 外反し、明瞭な複合口縁をなす。	内外面ともヨコナデ。	赤褐色焼成良好。
234 15号方	高坏	A17.7 B 3.5 D ₁ 5.7	先端は純く丸るまる、坏上半はわず かに内弯する。脚部を欠失。	坏部内、外面ともヨコナデ、坏下半 にはクシメが残る。	褐色、焼成良好。
235 15号方	"	A 18. 4	坏部に稜をもつ扁平な高坏、脚部を 欠失。	内外面にハケメを施し、その上を横 ナデ。	褐色、焼成良好。
236 1 5 号方	*	A 18. 7	坏部先端は突起し、下半との境に段をもつ。脚部を欠失。 ・	坏外面ヨコナデ、下半はクシメのあとヨコナデ、内面はクシメのあとヨコナデ。	暗褐色、焼成良好。
237 1 5号方	,	A 18. 5 B 3. 9 D ₁ 5. 8	坏部先端はわずかに反外し、下半と の境に段をもつ。 脚部を欠失する。	外面ヨコナデ、クシメが一部にみられる。内面クシメのあとヨコナデ。	褐色、焼成良好。 外面に黒色有
123-238	,	A 20. 5 B 3. 7 D, 5. 8	残い扁平な坏部をもちわずかに稜を のこす。脚部を欠失する。	外面クシメのあとヨコナデ、内面ヨコナデ。	淡褐色、焼成不良。
239	,	A 18. 7 B 3. 4 D ₁ 5. 6	坏部に稜があり裾の広い脚部をもつ が、先端を欠失。	坏下半、脚外面にはクシメ。脚内面 はヘラケズリ。	褐色、焼成良好。

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技 法 上 の 特 色	備考
240	高	A 17. 6	坏部の上半のみ、下半を欠失する。	外面ハケメのあとを横ナデ、内面へ ラケズリのあと横ナデ。	淡赤褐色 焼成良好。
240	坏				
15号方	- 1.			W.T 1	W44 14.7.4
		B 3.8 C11.1	上半を欠失する。脚は八字状にひら き、脚端はわずかに外反する。	外面へラケズリ、ハケメのあとヨコ ナデ、一部にクシメがみられる。	淡褐色、焼成不良。
241	"	01111			
15号方					
		B 3.7 C12.2	坏部上半を失する八字形をひらく脚 部。	坏部はヨコナデ、脚部ヘラケズリ、 クシメのあとヨコナデ、脚端部はヨ コナデ。	黄褐色、焼成良好。
242	"	D ₁ 7.0		「 坏部内面はヘラケズリのあとナデ、 脚部はヘラケズリ。	
15号方					
		B 3.1 C12.8	坏部を欠失する。脚端で扁平にひらくが、中央部に丸みあり。	外面ヘラケズリのあとヨコナデ、 脚端ヨコナデ、内面ヘラケズリ。 	黄褐色 焼成良好 内外面丹塗り。
243	"	D ₂ 8. 0			1371247422 70
15号方	ļ				
		C12.1	脚部下半のみ、脚端は丸みをもちひろがる。	外面ヨコナデ、脚部はクシメのあと ヨコナデ、内面へラケズリ、および ヨコナデ。	褐色、焼成良好。
244	"				
15号方					
		B 3.7 C13.4	坏部を欠失する、脚部の裾は扁平に ひろがる。	ヘラケズリのあとヨコナデ、内面へ ラケズリ。 	赤褐色 焼成良好
255	"	D ₂ 7. 7			
15号方	ļ				
246	,	B 42 C13.3 D ₂ 6.3	「坏部を欠失する、脚部の裾は扁平に ひろがる。	外面へラケズリのあと、クシメを施 しョコナデ、クシメのあとヨコナデ。 	
15号方					
247	,	B 3.6 C13.2 D ₂ 6.0	坏部を欠失する、太い脚部をもつ。 	外面へラケズリのあと、クシメを施 しヨコナデ。	淡褐色、焼成良好。
15号方					
124 125 16号方	壺	A14.3 D ₁ 4.8 B 10.0 D ₂ 22.8 C22.2 D22.6	コ字形口縁をもち、胴巾位に最大経がくる。底部は焼成後に穿孔する。	口縁部ヨコナデ、胸部にクシメを施すが、下半ははっきりしない。 口縁部内面はクシメのあとヨコナデ、 胴部内面はヘラケズリ。	褐色、焼成良好。
249 1 6号方	小形丸底壺	A 7.8 D ₁ 3.4 B 4.9 D ₂ 6.4 C 9.4 D 9.8	口縁部は途中から内弯する。やや扁 平な胴部をもつ。	外面に縁部はヨコナデ、胴部はクシメ、下半はクシメを施したあとヘラケズリ、口縁部内面はヨコナデ、胴部は指頭によるナデ痕明瞭に残る。	黄褐色、焼成良好。

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技 法 上 の 特 色	備考
250 17号方	壺	A11.2 D ₁ 3.2 B 8.5 D ₂ 9.8 C14.0 D13.0	く字形の口縁をもち、胴部の上方に 最大経をもつ焼成後の底部穿孔をも つ。	口縁部クシメのあとヨコナデ、胸部 は雑なクシメ、口縁部内面はヨコナデ、胴部はヘラケズリ。	褐色、焼成良好。
251 1 7号方	壺	A 7.8 D ₁ 2.3 B 5.5 D ₂ 5.7 C 8.2 D 8.0	く字形の口縁部と、やや扁平な胴部 をもつ。	口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部 は外面細いハケメ。内面はヘラケズ リ。	
252 17号方	小形丸底壺	B 5.1 C 8.8 D ₂ 5.8	口唇部を欠失する。胎部中央に最大 径をもち。やや扁平、底部はとがり 気味。	口縁部はヨコナデ、胴部上半はクシメ、以下ヘラケズリ、内面ヨコナデ 胴部下方はヘラケズリ。	黄褐色 焼成良好。
253 17号方	高坏	B 5.5 C 8.4 D ₂ 5.6	口唇部を欠失する。立ち気味の口縁 をもつ。	口縁部はヨコナデ、胴部は上方以下 ヘラケズリ、内面はヨコナデ、胴部 下方は指によるナデ。	
254 17号方	壺	A 19.2 D ₁ 6.7 B 4.3 D ₂ 9.2 C 13.4 D 15.9	深めの坏部をもつ、上・下の境に稜をもつ、脚部は裾がひろがる。	坏部外面はヨコナデ、脚部との境付 近にクシメがある。脚部はヘラケズ リのあとヨコナデ、一部にクシメが ある。 坏部内面はヨコナデ、脚部はヘラケ ズリ、裾部はヨコナデ。	褐色、焼成良好
255 17号方	壺	C17.4	口縁部を欠失する、薄手の球状の胴 部をもつ、焼成後の底部穿孔をもつ	外面にクシメ、部分的にナデがみられる。内面ヘラケズリ。	褐色、焼成普通
256 17号方	高坏	A 15. 4 B 8. 0 D ₁ 4. 6	外にひらくコ字形口縁、口唇端は平端でやや肥厚する。胴以下は欠失する。	口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコ に荒いクシメ、欠失している胴部は ヘラケズリであったらしい。	褐色、焼成良好
257 17号方	高坏	A 17.8 B 3.1 D ₁ 4.4	浅い坏部をもち、脚端は欠失する。 坏部先端はわずかに肥厚する。	坏外面はヨコナデ、脚部はヘラケズ リのあとヨコナデ。脚端近くにクシ メあとがわずかに認められるが、上 にヨコナデを施す、内面、坏ヨコナ デ、脚部ヘラケズリ、脚裾部はクシ メのあとヨコナデ。	褐色、焼成良好
126 258 127 18号方	壺	A17. 2 D ₁ 5. 6 B 9. 4 D ₂ 32. 8 C27. 2 D38. 4	外にひらくコ字形の口縁をもち、胴 *部は球状をなす。焼成後の底部穿孔 をもつ。	口縁部はヨコナデ、胴部はクシメ、 内面、口縁部ヨコナデ、胴部はヘラ ケズリ。	褐色 小石粒を多く含む 焼成良好 頸部、底部付近にス スの付着がある。
259 18号方	壺	A 20.4 D ₁ 6.5 B 9.9 D ₂ 22.7 C 23.7 D 29.2(+α)	外にひらくコ字形の口縁をもち胴部 は、やや長球状をなす、底部穿孔を もつ。	口縁部はクシメのあとヨコナデ、頸部はヨコナデ、胴部はナデ、一部にクシメがみられる。口縁部内面はヨコナデ、胴部はヘラケズリ。	黄褐色 焼成良好。

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
260 18号方	壺	A14.5 D ₁ 4.5 B 9.8 D ₂ 2.5 C18.8 D21.5	わずかに内弯する口縁部と、球状の 胴部をもつ。	一緑部はクシメにヨコナデ、胴部は クシメ、ただし底部付近はナデによ りクシメが消失する。口縁部内面ヨ コナデ、胴部はヘラケズリ。	赤褐色焼成良好。
261 18号方	,	A14.3 D ₁ 3.2 B10.9 D ₂ 17.1 C16.2 D20.3	わずかに内弯する短かめの口縁と球 状の胴部をもつ。 口唇端は平。	口縁部ヨコナデ、胴部クシメ、口縁 部内面クシメの上をヨコナデ、胴部 ヘラケズリ。	
262 1 8号方	小形丸底壺	A 10.3 D ₁ 4.0 B 6.4 D ₂ 6.4 C 9.9 D 10.4	薄い口縁部をもち、口唇端は丸みをもつ。胴部はやや扁平。	口縁部ハケメのあとをナデ消す。 胴部上半ハケメ、下半はヘラケズリ、 口縁部内面、ナデ、胴部ヨコナデ、 底近くには指圧のこる。	淡褐色 焼成やや良好。
263 1 9号方	高坏	A 20.5 D ₁ 5.9 B 4.0 D ₂ 8.5 C 13.2 D 14.4	浅い坏部の口唇端は平たん。	「杯部はヨコナデ、脚部はヘラケズリ、 裾部はヨコナデ、坏内面は部分的に クシメがあるが、他はナデ、脚部は ヘラケズリ、裾部はヨコナデ。	褐色 焼成良好。
264 18号方	"	A 19.5 D ₁ 6.0 B 3.4 D ₂ 6.8 C12.9 D14.4	坏部に対し、短目の脚部をもつ。脚 部が左右対称をなさず、ゆがむ。		褐色、焼成不良。 口縁の一部に黒色部 分がある。
265 1 9号方	,	A 17. 6	浅い坏部をもち、脚部は欠失、コ字 形。	外面ヨコナデ、内面ナデ、一部にハ ケメある。	褐色、焼成良好。
128 129 21号方	壺	A13.7 D ₁ 4.6 B 9.6 D ₂ 20.6 C21.1 D25.2	外にひらくコ字形口縁部と球形の胴部をもつ、口唇部は平。 .	口縁部はクシメのあとヨコナデ、胴部はクシメのあとヨコナデ、口縁部内面ヨコナデ、胴部にヘラケズリ。	褐色、焼成良好。
267 21号方	,	A 10.6 D ₁ 3.3 B 8.2 D ₂ 11.4 C 15.1 D 14.7	口縁部は、わずかに肥厚して複合口 縁の名ごりをのこす。胴部はやや扁 平。	口縁部にわずかにクシメ、胴部はクシメのあとヨコナデ、大所、内面、口縁部はヨコナデ、胴部はヘラケズリ。	褐色、焼成良好。
268 21号方	,	A11.8 D ₁ 3.6 B 8.6 D ₂ 9.9 C14.7 D13.5	やや内弯気味の口縁部と、扁平な胴部、底部は平底気味。	外面の口縁部、胴部上半はクシメ、 下半はクシメのあとナデ。内面、口 縁部ヨコナデ、一部にクシメあり、 胴部ヘラケズリ。	淡色、焼成良好。
269 21号方	,	A12.3 D ₁ 3.0 B 9.5 D ₂ 13.3 C15.2 D16.3	やや外弯気味の口縁部と球状の胴部 をもつ。	外面口縁部、胴部はクシメ、内面口 縁部はヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	黄褐色 焼成良好。

21号方 271 21号方 272 21号方 273 21号方 273 130-274	壶 小型丸底壺 小型丸底壺 小	A 11.4 D ₁ 4.3 B 7.2 D ₂ 7.0 C 11.3 D 11.3 A 10.7 D ₁ 3.3 B 8.3 D ₂ 10.2 C 13.1 D 13.5 A 8.0 D ₁ 2.4 B 6.2 D ₂ 6.1 C 9.1 D 10.0	内弯気味の口縁部と、扁平な胴部、 平底。 口縁はしやくれ気味にわずかに肥厚する。頸部の屈曲は明瞭で、胴の中位以上に胴部最大径を有する。底部は尖り気味の丸底。 口縁はやや肥厚し、先端が尖り気味に直延する。胴部の張りが強く、わずかに稜をもつ。底部は尖り気味の丸底。	外面はナデと思われるが、荒れているため整形は不明。内面は口縁部ヨコナデ、内面へラケズリか指によるナデか不明。 口縁及び底部付近は、ハケ目の上をナデ。胴部内面は下⇔上方向に斜めのヘラ削り。 器面が荒れていて明確でないが、胴部外面はうすいハケ目、内面はナデ	
271	型丸底壺 小型丸底壺 小	B 8.3 D₂10.2 C13.1 D13.5 A 8.0 D₁ 2.4 B 6.2 D₂ 6.1 C 9.1	する。頸部の屈曲は明瞭で、胴の中位以上に胴部最大径を有する。底部は尖り気味の丸底。 口縁はやや肥厚し、先端が尖り気味に直延する。胴部の張りが強く、わずかに稜をもつ。底部は尖り気味の	ナデ。胴部は斜め方向のハケ目調整。 胴部内面は下⇔上方向に斜めのへラ 削り。 器面が荒れていて明確でないが、胴	
272	型丸底壺	B 6.2 D ₂ 6.1 C 9.1	に直延する。胴部の張りが強く、わずかに稜をもつ。底部は尖り気味の		四组名 冲出点
273				と思われる。	明褐色、焼成良。 底部に二次的なスス 付着。
130—274	型丸底壺	A 10.0 D ₁ 3.7 B 6.8 D ₂ 6.3 C 9.9 D 8.5	口縁は内弯気味に長くのび、胴部は 球状をなす。口縁径と胴部径が同一 である。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面はハケ目。部分的に指によるナデがみられる。 内面は指による整形。	褐色、焼成良。
	高坏	A 22. 8 D ₁ 6. 7 B 4. 5 D ₂ 10. 3 C 15. 5 D 17. 0	坏部は大きく外反する。坏底部との 屈曲はやや不明瞭。脚部下端も大き く外反する。	坏部内面にはわずかにハケ目が残るが、概してヨコナデ。 坏底部外面及び脚部下端の内外面にハケ目。脚柱状部内外面へラ削り。	黄褐色
275	高坏	A 19. 3 D ₁ 5. 5 B 3. 2 D ₂ 8. 9 C 13. 8 D 14. 4	坏部は大きく外反し、脚部下端も大きく外反する。口縁端部は丸くおさまる。	坏部内面上半はハケ目のあと横ナデ 下半は器面の荒れのため不明。外面 は全面にハケ目。脚柱部は内外面と もヘラ削り。	褐色、 焼成むらあり。
276	高坏	A 19. 9 D ₁ 5. 9 B 3. 3 D ₂ 7. 3 C 14. 6 D 13. 2	坏部は大きく外反し、特異な脚部も 大きく外反する。脚部中位に円形の 4 孔を有する。	坏部内面底部は放射状のハケ目が残り、それより上位はヨコナデ。外面はハケとナデの併用。脚部内面はへラ削り、外面はその上とナデ調整。	淡褐色、小砂粒を含 む。焼成良好。
型 277 支 原	小型丸底壺	A D ₁ 1.0 B 8.7 D ₂ 9.2 C 13.0 D 10.2	口縁部欠失。胴部は球状を呈する。 胴部最大径は中位よりやや上にある。	胴部外面の中位以上は横ナデ。中位 以下はハケ日の上をナデ調整。内面 は不明瞭であるが、指による調整。	淡黄褐色、焼成良好
131-278	壺	A 13.1 D ₁ 5.4 B 10.1 D ₂ 20.6 C 21.2 D 26.0	口縁部の外反は少なく、胴部は球形 に近い。底部穿孔。	口縁内外面はナデ調整、胴部外面は ハケ日。内面上部と下部はハケ目、 中位はヘラ削り。	黄褐色、焼成良 焼成後、底部穿孔
高 279	高	A 19. 8 D ₁ 4.9 B 3.9 D ₂ 7.5 C 14.5 D 12. 4	大きく外反する坏部。脚部は、脚柱 部を有せず、接合部より直ちに外反 する。	器面の荒れがひどく、観察困難、脚部内面にわずかにヘラ削りがみられる。	褐色(内面少しうすい) 胎土中多量に砂粒を含む。焼成良好。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備 考
280 22号方	小型丸底壺	A 12.1 D ₁ 4.0 B 7.9 D ₂ 12.5 C 15.6 D 16.5	口縁は直延し、胴部は球形を呈する。	外面はハケ目のうえをナデ調整。 胴部内面はヘラ削り。 内面上位は指による調整。	黄褐色。 焼成やや不良。 多量の小石粒を含む
281 22号方	台付小型壺	A 9.7 B 6.1 C 9.4 D11.0	比較的長く直延する口縁。 胴部は球形で台がつく。 台の下部は欠失している。	外面はハケ目調整で、頸部はその上 を横ナデ。 口縁内面はうすいハケ目。 胴部内面はヘラ削り。	赤褐色。 焼成不良(もろい) 胎土良。
132-282 35号方	壺	B 6.8 C15.8 D10.0?	扁平な胴部の中央に最大径をもつ。 口縁部は欠失。	外面横ナデのあと横ナデ。 内面へラ削り。	褐色。 焼成良好。 焼成後の底部穿孔ま り。
283 2 7号方	小型丸底壺	A 6.2 D ₁ 2.4 B 4.6 D ₂ 5.6 C 7.7 D 8.0	口縁は、わずかに内反気味に直延する。 胴部は下ぶくらみになる。	口縁内外面は横ナデ。 胴部外面はハケ目。 内面の調整は雑で凹凸がはげしい。	赤褐色。 焼成やや不良。 ごく細かい砂粒を含む。
284 2 7号方	盌	A 15. 3 D 6. 0	口縁はわずかに外反する。	外面の中位から底部にかけてヘラ削り。 内面はナデ調整。 底部にヘラ状工具の痕跡あり。	褐色。 概成良。 小石粒を含む。
285 29 号方	,	A 13. 5 D 5. 2	口縁は内反気味にたちあがり、全体 に球状を呈する。	外面の中位から底部にかけてヘラ削り。 内面はナデ調整。	淡褐色。 焼成良。 内面にヘラ記号あり
286 29号方	高	A 19.8 D ₁ 6.6 B 3.9 D ₂ 7.8 C12.2 D14.4	坏部は大きく外反する。 脚柱部は丸みを帯びてふくらみ、下 端部は大きく外反する。	坏部は内外面ともナデが主体であるが、接合面付近の外面には一部ハケ目がある。 脚柱部内面は荒いヘラ削り。 外面はナデ。	褐色。 焼成不良。 小石粒を含む。
133 134 ^{—287} 30号方	壺	A 15. 4 D ₁ 3. 6 B 13. 4 D ₂ 23. 8 C 27. 0 D 27. 4	短い口縁は、わずかに外反気味にた ちあがる。 胴部は球形を呈し、最大径はほぼ、 中位にある。 底部穿孔。	口縁外面はハケ目のうえをナデ。 胴部外面はハケ目。 下半はハケ目のうえをナデで消している。 胴部内面は下から上へのヘラ削り。	褐色。 焼成良。 小石粒を含む。 焼成後の底部穿孔。
288 30 号方	小型丸底壺	A 11. 5 D ₁ 4. 1 B 8. 5 D ₂ 11. 5 C 16. 1 D 15. 6	口縁は内反気味にたちあがり、胴部 は肩が張る。	口縁は内外面とも横ナデ。 胴部外面はハケ目。 内面は指整形の痕跡がわずかに残る が、風化により不明瞭。	赤褐色。 焼成良。 風化がひどい。
289	,	A 8.4 D ₁ 3.0 B 6.4 D ₂ 6.9 C10.0	口縁は直延し、先端は尖り気味にまとまる。 胴部はわずかに肩が張り、底部は尖り気味の丸底。	口縁は内外面とも横ナデ。 胴部外面はうすいハケ目。 内面はヘラ削り。	明褐色。 焼成良。 多量の小石粒を含む 内外面に丹彩。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
290 30号方	高坏	A 21.5 D ₁ 7.1 B 4.6 D ₂ 9.1 C 15.8 D 16.2	环底部は横にのび、口縁は大きく開く。その接合部の屈曲は段がつき明瞭。脚は脚柱部がなく大きくラッパ 状に開く。	坏部内外面はハケ目のうえをナデ。 脚部内面はヘラ削り、外面はハケ目。 坏底部から脚部上半にかけてはナデ。	
291 30号方	*	A 20. 7 D ₁ 7. 5 B 4. 5 D ₂ 8. 2 C 15. 0 D 15. 7	丸味をおびた深い坏部で、口縁先端 はわずかに外反する。脚柱部のない 脚部はラッパ状に大きく外反。	坏部外面はハケ目のうえをナデ。内面はナデ調整。底部には指圧痕がある。脚部内面はヘラ削り、外面は上から順にヘラ削り、ハケ目、ナデによる整形、調整。	褐色。 焼成良。 わずかに小石粒を含 む。
292 30号方	,	A 20. 6 D ₁ 7. 0 B 3. 9 D ₂ 9. 7 C 15. 4 D 16. 7	坏部は比較的深く、□縁は外反する。 接合部の屈曲は明瞭で段がつく。脚 部は大きく外反する。	坏部外面はハケ目のうえをヨコナデ。 内面はヨコナデ。脚部内面はヘラ削 り。外面の上部はハケ目調整で下半 はヘラ削りのうえをナデ。	赤褐色。 焼成不良。
135-293	壺	A 14.8 D ₁ 4.7 B 12.3 D ₂ C D	口縁は肥厚しながら外反する。胴部 欠失。	口縁内外面はハケ目のうえをナデ調整。胴部内面はヘラ削り。	褐色。 焼成良。 小石粒を含む。
294 30号方	盌	A14.4 D 6.1?	底部欠失。球形を呈する。LI縁端は 丸味をおびる。	外面下半はヘラ削り。上半はナデ。 内面はナデ調整。	表面赤褐色。 内面褐色。
295 30号方	"	不 明	[1]縁先端は丸味をおび、底部は平底 気味の丸底。	外面下半はヘラ削り、上半はヨコナデ。内面はヨコナデ。底部に指圧痕あり。	褐色。 焼成良。 小石粒を含む。
296 30号方	,	A 14.8 D 5.6	球形を呈し、口縁先端はわずかに肥厚し外反する。	外面上部はヨコナデ、下半は荒いハケ目がある。内面はヨコナデ。	赤褐色。 焼成不良。 わずかに砂粒を含む 外面に径 6 cmの焼け あとあり。
297 30号方	,	A 13. 7 D 6. 4	CI縁は内反し、先端は尖る。全体に丸味をもつ。	外面上端はヨコナデ。それ以下は斜めのヘラ削り。内面はヨコナデ。	茶褐色。 焼成良。 小石粒を含む。
298 31号方	小型丸底壺	A 11.5 D ₁ 4.3 B 8.0 D ₂ 10.1 C 14.3 D 14.4	口縁はわずかに内弯する。胴部は肩 が張る。	11縁の内外面はヨコナデ。胴部外面 の上半はナデ。中位はうすいハケ目。 下半はナデ調整。内面はヘラ削りと 指調整の併用。	褐色。 焼成良。 砂粒を含む。
299 31号方	,	A13.1 D ₁ 2.5 B 5.3 C 8.9 D 7.2?	口縁は外傾しながら直延し、先端は 有段をなす。胴部の屈曲がつよく稜 をなす。	口縁内外面はヨコナデ。胴部外面の 上半はヘラ研磨、下半はナデ。内面 はナデ。	赤褐色。 焼成良。 小石粒を含む。 底部穿孔か?

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
300	高坏	A D ₁ B D ₂ C D	坏底部は横方向にのび、口縁は外傾 しながら、先端はわずかに外反する。 脚部は下端で大きく外反する。	坏内外面はナデ調整。 脚部内面はヘラ削り。 外面は軽いヘラ磨き。	赤褐色。焼成良。 小石、砂粒等を多量 に含む。
		A	深みのある器形で、口縁先端は尖り	外面上半は横ナデ。	褐色。焼成良。
301	盌	D	気味。 底部は平底気味。	下半はヘラ削り。 内面はナデ調整。	小石、小粒子を多量 に含む。
30号方					
136 137 35号方	壺	A16.4 D ₁ 5.0 B12.2 D ₂ 24.8 C 27.0 D 29.8	口縁は内反したのち、外反し、先端 は丸みを帯びる。 胴部は球形を呈し、器壁はうすい。	口縁内外面はハケ目のうえナデ調整。 胴部外面は全面ハケ目。 内面はヘラ削り。	淡褐色。焼成良。 小石粒を含む。
303 35号方	,	A 15.4 D ₁ 4.7 B 12.1 D ₂ 21.4 C 27.5 D 26.1	口縁部は外傾したのち、内反し、さらに先端は外反する。 胴部は球形。 胴部最大径は中位よりやや上位にある。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部外面はハケ目のうえを軽くナデ。 内面はヘラ削り。	淡褐色。焼成良。 小石粒を含む。
304 35号方	"	A 14.9 D ₁ 4.0 B 12.3 D ₂ 21.3 C 24.2 D 25.3	口縁はぶ厚く、内反気味にたちあがる。 胴部は球形を呈し、底部は尖り気味 の丸底。	口縁外面はハケ目のうえをナデ。 内面は横ナデ。 胴部外面はハケ目。 下半はその上をナデで消している。 内面はヘラ削り。	黄褐色。焼成良。 小石粒を含む。
305 35号方	小型丸底壺:	A 8.3 D ₁ 3.3 B 5.0 D ₂ 7.8 C10.8 D11.0	口縁は外傾しながら直延し、先端は わずかに肥厚して外反する。 胴部は肩が張り、底部を欠失する。	口縁内外面はハケ目のうえを横ナデ。 胴部外面は不規則なハケ目。 内面下半はヘラ削り。 上半に指圧整形あり。	褐色(焼きむらがあ る) 小粒子を含む。 焼成不良。
306 35号方	高坏	A 20. 6 D ₁ 6. 4 B 3. 6 D ₂ 10. 2 C 13. 1 D 16. 8	坏部はやや深く、上半と下半の接合 部はわずかに稜を有する。 脚部は柱状部と裾部との境が明瞭。 裾部は内弯気味に広がり、端部は丸 くまとまる。	おおは内外面ともハケ目成形のあとヨコナデ。 脚柱状部はヘラ状工具のタテ方向のケズリのあとナデ、内面はヘラケズリ。裾部は内外面ともヨコナデ。 整形は全体的に雑。	黄褐色。 焼成不良。
307 35号方	"	A 16.6 D ₁ 5.0 B 3.7 D ₂ 9.7 C 13.1 D 14.7	「小部の接合部以上は、わずかに外反 気味にのびる。 脚柱部は裾が広がり、脚下端は大き く外反する。	坏部内外面はハケ目のうえをナデ調整。 脚柱部内面はヘラ削り。 外面はヘラ削りと指調整の併用。	褐色。焼成良。 胎土中、小石粒を含 む。
308 35号方	,,	A 20.0 D ₁ 8.1 B 3.3 D ₂ 8.0 C15.1 D16.1	深みのある坏部は球形状に内反する。 口縁端は丸くまとまる。 脚柱部を有しない脚部は接合部から 大きくラッパ状に開く。	坏部内外面はハケ目のうえを横ナデ。 脚部内面はヘラ削り。 外面はヘラ削りのうえをナデ。 一部ヘラ磨き。	褐色。焼成良。 小石粒を含む。
₁₃₈ —309 35号方	盌	A 14. 6 D 5. 0	口縁外面によわい沈線を一条めぐらし、先端はやや外反気味に丸くまと まる。 底部欠失。	外面下半はヘラ削り。 上半は横ナデ。 内面は横ナデ。 整形良好である。	赤褐色。焼成不良。 ごく細かい粒子を含 む。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
310 35号方	盌	A 16. 7 D 4. 4	口縁はわずかに外反し、浅い器形で ある。 底は平底にちかい丸底。	外面上半は横ナデ。下半はヘラ削り。 内面は全体にナデ調整。 底部からたちあがる部分にヘラ状の ものによる刺突痕が多量あり。	明褐色。焼成やや不 良。 砂他を含む。
311 35号方	,	A 16. 1 D 5. 6	球状を呈し、口縁先端は尖る。	外面上半は横ナデ。 輪積みの痕跡あり。 下半はヘラ削り。 内面は横ナデ。 器形は端正である。	褐色。焼成良。 小粒子を含む。
312 35号方	高坏	A 17. 7 D ₁ 6. 2 B 3. 8 C D 10. 4	坏底部は横方向にのび、それから強い屈曲をもって口縁が外反気味にたちあがる。 脚部下半は欠失。	坏 部はハケ目を施し、そのうえを外面はヘラ磨き。 内面は横ナデ。 脚部内面はヘラ削り。	赤褐色。焼成良。 少量の小石粒を含む
313 35 号方	,	A17.8 B 4.2 D 7.3	好部下半は外反気味に横にのび、それから内反気味に口縁は、たちあがる。 先端は丸くまとまる。 脚部欠失。	器面のあれがひどく、整形、調整が 不明瞭であるが、横ナデが主体。	淡褐色。色むらあり 焼成良。 胎土中、砂粒を含む
314 35 号方	壺	A 18. 0 B 8. 7 D ₁ 8. 0	胴部を欠失し、口縁部のみ。 口縁は大きく外反したのち、有段を なして、内反しながらたちあがり、 先端は、わずかに外反する。	口縁の中位以上はハケ目のうえを横 ナデ。 下半と口縁内面は横ナデ。 胴部は輪積みのあとが明瞭で、指に よる整形がみられる。	淡褐色。焼成やや不 良。 ごく少量の砂粒を含 む。
315 35号方	盌	A 14. 4 D 6. 1	半球形を呈し、器壁はうすい。	外面はハケ目。内面はヘラ削りのうえをナデ。	赤褐色。 焼成やや不良。 砂粒を含む。
316 35号方	壺	A 10. 2 B 6. 9 D 8. 4	口縁は直延し、先端はわずかに外反 する。胴部は肩部以下を欠失。	外面の口縁から胴部にかけてはヘラ 磨き。口縁内面は横ナデ。 胴部内面はヘラ削り。	明褐色。焼成良。 小石粒を含む。
317 35 号方	,	A13.0 D ₁ 4.6 B 6.2 D ₂ 11.6 C14.6 D16.2	口縁部は大きく外反したのち、有段 をなし、内反気味に外傾する。 胴部は球形で、底部中心よりやや扁 した所に穿孔。	口縁外面の有段以上はヘラ磨き。 内面は横ナデ。 胴部外面は細かいハケ目。	赤褐色。焼成良。 胎土良。 焼成後の穿孔
139 _{—318} 140 36号方	小型丸底壺	A 3.8 D ₁ 3.0 B 4.5 D ₂ 7.0 C 9.3 D10.0	口縁は内反したのち、外反する。 胴部は球形を呈し、胴部の大きさの 割には口縁が長い。	口縁内外面は横ナデ。 胴部外面は指整形で、底部はハケ目。 胴部内面は指整形で凹凸あり。	淡褐色。焼成良。 少量の小石粒を含む
319 36号方	,	A 7.0 D ₁ 2.5 B 5.2 D ₂ 6.8 C 9.3 D 9.3	口縁はしゃくれ気味に外傾し、胴部 は球形。 底部はやや尖り気味。	口縁内外面は横ナデ。 胴部外面はハケ目。 内面は指ナデ。	褐色。焼成良。 砂粒を含む。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
320 36号方	小型丸底壺	A 6.5 D ₁ 2.4 B 4.2 D ₂ 6.4 C 8.4 D 8.8	口縁は先が肥厚して外傾、先端は尖 る。 胴部はやや肩が張り球形、底部の中 心よりやや扁した所に穿孔。	口縁内外面は横ナデ。 胴部の肩より上はハケ目のうえをナ デ。 以下は細かいハケ目。 胴部内面はヘラ削り。	褐色。焼成良。 ごく少量の小砂粒を 含む。
321 35号方	,	A 6.8 D ₁ 3.1 B 5.2 D ₂ 6.9 C 9.8 D10.0	口縁は外反したのち外傾し、先端は 外反する。 胴部は肩が張る。 球形を呈す。	口縁外面はハケ目のうえを横ナデ。 内面は横ナデ。 胴部外面は細かいハケ目。 部分的にその上をナデ。 胴部内面は指による下から上へのナ デ。	赤褐色。焼成不良。
322 35号方	*	A 6.5 D ₁ 1.9 B 4.7 D ₂ 5.8 C 8.6 D 7.7	口縁は内反気味に外傾したのち先端 は外反する。 胴部中央が張り、尖り気味の丸底を 呈する。 底部中央よりやや扁した所に穿孔。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部外面の上位はハケ目のうえをナ デ。中位はヘラ削りのうえをナデ。 下半はナデ。内面はヘラ削りで、口 縁との接合部付近はナデ調整。	褐色。焼成良。 微粒子を含む。 焼成後の底部穿孔。
323 35号方	,	A 9.7 D ₁ 2.3 B 8.5 D ₂ 6.0 C11.7 D 8.3	口縁は外傾しながら直延し、先端は 丸くまとまる。 胴部は横に張り、扁平である	口縁内外面は横ナデ。 胴部外面はハケ目のうえをナデ。 内面は指による調整。	褐色(焼成むらあり 焼成良。小石粒を含む。 焼成後。底部穿孔。
324 36号方	,	A 11.3 D ₁ 4.7 B 7.6 D ₂ 10.5 C 14.4 D 15.2	口縁はわずかに外反したのち直延する。 胴部は肩が張り、尖り気味の丸底。	口縁から胴部にかけての外面はハケ目。 口縁内面は横ナデ。 胴部内面は指調整。	明褐色。焼成不良。ごく細かい粒子を含む。
325 36号方	*	A 12. 2 D ₁ 5. 0 B 8. 6 D ₂ 8. 5 C 16. 5 D 13. 5	口縁は直延し、先端はわずかに外反 する。 胴部は球形を呈し、底部を欠失する。	口縁内外面は横ナデ。 胴部外面も一面にうすい横方向のハケ目。 胴部内面の調整は不明。	赤褐色。焼成良。
326 36号方	盌	A 12. 7 D 4. 9	口縁部はわずかにくびれるようにして、先端は外反する。 それ以下は球形を呈する。	外面はヘラ削りを主体とし、口縁付 近は横ナデ。 内面の上部にわずかにヘラ削りがみ られるが、下半は指ナデ。	赤褐色。焼成不良。 小粒子を含む。
327 36号方	,	A 14. 0 D 6. 4	球状を呈し、口縁下でわずかにくび れ気味。	外面上半は横ナデ。下半は荒いヘラ 削り。 内面上半は横ナデ。 下半はヘラ削りのうえをナデ。	淡赤褐色。 焼成良。 石粒を含む。 内底面に布圧痕らし きもの。
328 36号方	"	A 12. 6 D 6. 2	口縁下でわずかに内反し、くびれたのち、先端は外反する。 先端は尖る。	外面上半は横ナデ。 下半はヘラ削り。 内面はナデ調整。	褐色。焼成良。 石粒を含む。
329	,	A 14. 0 D 4. 9	扁平な器形で、底部は不安定。	外面上半は横ナデ。 下半はヘラ削り。 内面は横ナデ。	淡赤褐色。 焼成色。 石粒を含む。
36号方					

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
141 142 — 330	盌	A14.0 D 5.2	扁平な器形で、口縁先端はわずかに 外反する。	外面底部はヘラ削り。 他は横ナデ。 内面は全面横ナデ。	赤褐色。焼成むらあり。 焼成良。 石粒を含む。
36号方 ————					
331	"	A14.5 D 4.7	球形を呈し、先端は尖る。	外面上半はハケ目のうえを横ナデ。 下半はハケ目。 内面は横ナデ。	淡赤褐色。焼成不良。 多くの砂粒を含む。
36号方					
332 36号方	高坏	A 20. 0 D ₁ 6. 4 B 4. 0 D ₂ 7. 0 C 16. 0 D 13. 4	坏部は接合部付近でわずかに屈曲し 外反しながらまとまる。 脚部は脚裾部を有せず、大きく開く。	坏部内外面は横ナデ。 脚部外面上半は横ナデ。 下半はハケ目のうえをナデ。 内面はヘラ削り。	褐色。焼成良。 石粒、黒雲母を含む。
333	,	A 19.5 D ₁ 5.3 B 4.9 D ₂ 9.3 C 16.1 D 14.6	丸みを帯びた坏部の口縁はわずかに 外反する。 脚裾部を有しない脚部は大きく開き 先端はわずかに上方に反る。	坏部の外面と内面下半はハケ目のうえをナデ。 内面上半はハケ目。 脚部外面はヘラ削りのうえをナデ。 内面はヘラ削り。 一部その上をナデ。	淡赤褐色。焼成むら あり。 焼成良。 石粒を含む。
334 36号方	,	A 19.2 D ₁ 6.4 B 4.0 D ₂ 7.7 C 16.0 D 14.1	坏部は横に開き、接合部より屈曲を もってたちあがる、口縁先端は外反 する。 脚部は大きく開き、先端はさらに横 に開く。	「小部外面はハケ目のうえをナデ。 内面は横ナデ。 脚部外面はヘラ削り、ハケ目のうえをナデ。 内面はヘラ削り。	淡褐色。焼成むらあり。 焼成良。 たずかに石粒を含む。
335 36号方	,	A 20. 2 D ₁ 5. 5 B 3. 9 D ₂ 8. 8 C 14. 0 D 14. 3	坏部は横に開き、接合面よりたちあがる。 口縁先端はわずかに外反する。 脚柱部はわずかに裾が開き、先端は 大きく外反する。	坏内外面は横ナデ。 脚部上半はヘラ削り。 下半は横ナデ。 内面はヘラ削り。	褐色。焼成良。 多量の小石粒を含む。
336 36号方	"	A 19.3 D ₁ 6.9 B 4.1 D ₂ 7.7 C 14.0 D 13.6	坏部はまず横に開き、接合部よりたちあがる。 先端はわずかに外反する。 脚部は大きくラッパ状に開く。	环内外面は横ナデ。 脚部外面はハケ目のうえをナデ。 内面はヘラ削り。	淡赤褐色。焼成良。 焼成むらあり。 砂粒を含む。
337 36号方	,	A 19.5 D ₁ 6.4 B 3.4 D ₂ 7.5 C 15.7 D 13.9	334と類似する。		黄褐色。焼成やや不 良。 小石粒を含む。
143-338	"	A 15. 4 D ₁ 5. 0 B 4. 0 D ₂ 5. 8 C 12. 9 D 10. 8	球状の坏部で口縁端はわずかに肥厚する。 脚部は開き、下端部は大きく開き、 やや上方に反る。	坏内外面は横ナデ。 脚部外面はヘラ削りのあと横ナデ。 内面はヘラ削り。	淡赤褐色。焼成良。 わずかに石粒を含む。
339 36号方	,	A 15.5 D ₁ 5.3 B 4.2 D ₂ 5.4 C 13.1 D 10.7	坏部中位でわずかに有段となり、口縁先端はわずかに外反。 脚部は大きくラッパ状に開く。	び部内外は横ナデ。 脚部外面上半はヘラ削りのあとナデ。 上半は横ナデ。 内面はヘラ削りで、下端部は横ナデ	淡赤褐色。焼成良。 少量の砂粒を含む。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
340 36号方	高	A 16.0 D ₁ 4.9 B 3.8 D ₂ 5.8 C 12.9 D 10.7	盤 状の坏部に、大きく開く脚部がつく。 以部は脚柱部を有せず、坏部との接合面から大きく開く。	お部内外面は横ナデ。 脚部外面上半はヘラ削りのあと横ナデ。 下半は横ナデ。 内面はヘラ削りが主で、接地面は横ナデ。	褐色。焼成良好。 わずかに小石粒を含 む。
341 36号方	,	A 16.1 D ₁ 6.4 B 5.1 D ₂ 6.6 C 14.0 D 13.0	盤 状の坏部は口縁端が外反する。 脚柱部の径が大きく下端部は大きく 外反する。	坏部内外面は横ナデ。 脚柱部外面はヘラ削りのうえをナデ。 内面はヘラ削り。 坏部中位での接合はなく、一体となっている。	褐色。焼成むらあり。 焼成良。 砂粒を含む。
144-342	壺	A 17. 7 D ₁ 6. 0 B 13. 5 D ₂ 21. 0 C 23. 9 D 27. 0	やや曲る口縁部と、球状の胸部をも つ。	口縁部、胴部上半にはハケ目がある。 口縁部のハケ目の上にはヨコナデ。 内面、口縁部横ナデ。 一部ハケ目あり。 内面へラ削り。	焼成良好。 上半は黄褐色。 下半は赤褐色。
343	鉢	A 16. 5 D 6. 2	外反する小さな口縁と、平底気味の 浅い底部をもつ。 破片による復元。	口縁部は横ナデ。 胴部の上半はクシ目のあと横ナデ。 下半はヘラ削り。 内面横ナデ。	淡褐色。 焼成やや良。
344	壺	A11.8 B 5.9 D ₁ 5.0	小形壺の口縁部。 胴部以下を欠失する。	外面横ナデ。 内面ナデ。	褐色。 焼成良好。
345 くぬぎ塚	高坏	A 28. 8	直線状にのび外反し、平な底をもつ 坏部。 脚部を欠失する。	坏部中位の有段部より上の内・外面 ヨコナデ。以下クシ目のあとヨコナ デ。	褐色。 焼成良好。 丹塗りの痕跡あり。
346	,	B 3.8 C15.5 D ₂ 6.5	·高坏の胴部のみ、短めの筒部と、有 段の裾部をもつ。	筒部はヘラ削りのあと横ナデ。 裾部はヨコナデ。 内面ヘラ削り。 裾部は横ナデ。	明褐色。 焼成良好。
347					欠 番
くぬぎ塚 348 くぬぎ塚					欠 番
145 -349 146 くぬぎ塚	壺	A 16. 0 D ₁ 7. 3 B 10. 9 D ₂ 23. 4 C 25. 5 D 37. 0	わずかに、外反ぎみの口縁部と球状の胴部をもつ。 底部を少しかく。	口縁部はクシメのあとヨコナデ。 胴部上半は細かいクシメ。 下半は荒いクシメ 口縁部内面クシメ、胴部ヘラケズリ。	明褐色。 焼成良好。

350	高	A 19.6 D ₁ 7.0	埦状の坏部と、開きぎみの脚部をも		
	坏	B 3.5 D ₂ 8.5 C15.4 D15.5	つ。 脚部裾先端はわずかに凹む。	「坏部はクシ目のあと横ナデ。 脚部はヘラ削りのあと横ナデ。 「水部内面ヨコナデ。 脚部内面ヘラ削り。 裾部はヨコナデ。	黄褐色。 焼成良好。
351			口縁部は直立気味に外反し、端部で短く外弯する。胴部はほぼ球形を呈する。	口縁部はタテ方向のクシ目のあとヨコナデ。内面はヨコナデ。 肩部から底部にいたるまで荒いクシ目。内面はヘラケズリ。	黄褐色。 やや焼成むらがある が良好。
147—352	埴		朝顔形埴輪の一部分で口縁部と胴部 以下は欠失。外面全体に指先による 丹による彩色が施される。	胴部は輪積み痕が明瞭。 外面は全面荒いクシ目により整形したあと彩色される。 全体として端正なつくり。	黄褐色。 焼成良好。
くぬぎ塚	輪				
353 (1~6) くぬぎ塚	*	:	すべて同一個体と思われる。 円形、方形の透しがほどこされる。		黄褐色。 焼成良好
148 149 九山 3 号	壺	A 8.8 D ₁ 5.1 B 5.6 D ₂ 10.5 C 14.5 D 15.6	口縁が直立し、口唇部はわずかに外 反する。 扁平な胴をもつ。	口縁部はヨコナデ。 胴部はヘラ削りののちヘラ研磨。	淡赤褐色。 焼成良好。
355	,	A 10. 0 D ₁ 5. 3 B 6. 3 D ₂ 10. 7 C 15. 1 D 16. 0	口縁部はわずかに肥厚し、扁平な胴部をもつ。	へう削りののちへうミガキ。	赤褐色。 焼成良好。
356	"	A 9.7 D ₁ 5.9 B 6.5 D ₂ 11.1 C 16.0 D 17.0	直立気味の口縁部、先端はわずかに 外反する。 扁平な胴部をもつ。	口縁部は縦のクシ目。 胴部上半のみクシ目。以下へラ削り 内面はクシののちナデ。	赤褐色。 焼成良好。
357	变	A 14. 0 D ₁ 3. 4 B 11. 4 D ₂ 20. 0 C 20. 4 D 23. 4	わずかに肥厚する。 口縁部、口唇端は平・球形の胴部を もつ。	口縁部、胴部上半はヨコナデ。 以下クシ目。 内面へラ削り。	黄褐色。 焼成良好。 表面の胴上半、内面 の胴部にはススの付 着がみられる。
358	,		口縁部は、直線的に立ち上り、口縁 の中ほどで厚みをます。 胴部は球形で底部は尖り気味の丸底。	口縁部はタテ方向のハケ目のあと、 ョコナデ。 胴部外面は全面ハケ目が施され、頸 部はユビによるナデにより強くくび れる。 内面にヘラ削り。	黄褐色。 焼成良好。
150-359	*	A20.0 D ₁ 5.0 B16.7 D ₂ 27.2 C27.2 D32.2	直立気味の口縁部。 口唇端はわずかに外反し、端正。 やや長形の胴部をもつ。	口唇部は横ナデ。 口縁部クシ目ののち横ナデ。 胴部はクシ目、内面口縁部は横ナデ。 胴部内面はヘラ削りののちナデ消す。	

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特.色	技法上の特色	備考
360	盌	A 7.3 D 6.4	小型の盌で、胴部は球形を呈し、口 縁は、わずかに直立する。	外面上端は横ナデ。 中位はヘラ削り。 底部もヘラ削り。 内面には指圧痕。	褐色。 焼成良。 小石粒を含む。
361	*	A 8.4 D 6.9	小型の盌で、胴部は球形を呈する。 口縁はわずかに内弯する。	外面上端は横ナデ。 中位はハケ目。 底部はヘラ削り。 内面ヘラ削り。	暗褐色。 焼成良。 小石粒を含む。
丸山3号			口名がおしずんでもをより	ロ独加は株上学 以て続いのへこめ	中央になる
151 152 丸山 3 号	*	A 14. 5 D ₁ B D ₂ C D 6. 2	口縁部が、わずかに内弯する。	口縁部は横ナデ。以下傾めのヘラ削り。 とくに底部の削りは著しい。 わずかにクシ目あり。 内面はクシ目。以下弱いヘラ削り。	暗灰色。 砂粒。 焼成はやや良好。
363	,	A 14. 5 D ₁ B D ₂ C D 5. 9	半球状をなす。	口縁部は横ナデ。以下は荒いヘラ削り。 内面横ナデ。 底に指痕あり。	暗褐色。小砂粒を含む。 焼成やや良好
364	*	A 15. 3 D ₁ B D ₂ C D 5. 5	口縁部がわずかに肥厚する。	口縁部は横ナデ。以下はヘラ削り。 内面は横ナデ。 底部に指痕あり。	暗褐色。少量の小砂 粒あり。 焼成不良。
365	,	A 13. 8 D 5. 6	口縁部は直立。	口縁部横ナデ。荒いクシ目あり。 以下へラ削り。 内面上半は横ナデ。以下へラ削り。	暗褐色。 焼成良好。
丸山3号					
366	*	A 12. 7 D 5. 2	口縁部は直立、口唇部は丸まる。	口縁部は横ナデ。 わずかにクシ目あり。 内面は横ナデ。 底部はナデ。	暗褐色。 焼成やや良好。
367	,	A 13. 0 D 5. 7	半球状をなす。	外面の大半は横ナデ。 底はヘラ削り。 内面ナデ。 底はヘラ削り。	暗褐色。焼成良好。
368	*	A13.6 D 6.3	口縁部、わずかに内弯。	口縁上端に3本の沈線あり、以下、 横ナデ、ヘラ削り。 内面横ナデ。	茶褐色。 焼成良好。
369	"	A14.1 D 5.0	浅い盌、全体に厚ぼったい。	口縁部横ナデ。以下へラ削り。内面ナデ。	赤褐色。 焼成良好。
丸山3号					

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
370	盌	A 12. 0 D 6. 1	口縁部は内弯する。	口縁部は横ナデ。以下へラ削り。 内面、指痕あり。	暗褐色。焼成良好。
丸山3号					
371	"	A 14. 0 D 6. 4	口縁部は内弯、全体にぶ厚い。	口縁部は横ナデ。以下クシ目。 底へラ削り。 内面横ナデ。	淡褐色。小石粒。 器体外面に粒子が多い。
лщзэ			W #41147 W	口縁部は横ナデ。以下へラ削り。	暗褐色。
372	,	A 15. 2 D 7. 1	半球状をなす。	内面横ナデ。以下へラ削り。	「暗陶巴。 小石粒を含む。 焼成やや良好。
丸山3号					
373	,,	A 11. 2 D 6. 6	半球状をなす。 口縁部は内弯。 口唇は平。	口縁部は横ナデ。 荒いクシ目あり。以下へラ削り。 内面横ナデ。 以下へラ削り。	暗褐色。 焼成やや良好。
丸山3号					
153 154	,	A 15. 0 D 7. 0	口縁部はやや内弯。	口縁部はクシ目。以下ヘラ削り。 内面横ナデ。	明褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。
丸山 3 号					
375	"	A 13. 6 D 7. 3	半球状をなす。	口縁部は横ナデ。以下へラ削り。 内面横ナデ。器面は荒れている。	褐色。焼成良好。
丸山3号					
376	,	A 14. 1 D 6. 0	口縁部は直立する。	口縁部は横ナデ。以下へラ削り。 内面ナデ。	明褐色。 焼成良好。
丸山3号					
377	,	A14.7 D 5.6	口縁部は内弯。	口縁部は、横ナデ。以下へラ削り。 内面横ナデ。	褐色。 焼成良好。
丸山3号					
378	"	A 14.2 D 5.3	残い盌。 口縁部はやや内弯。 口唇端は平。	口縁部横ナデ。以下へラ削り。 内面はヘラ削り。あと横ナデ。	暗灰褐色。 焼成不良。
丸山3号					
		A 13. 7 D 5. 4	浅い盌。	口縁部は横ナデ。以下へラ削り。 内面へラ削り。	黄褐色。 焼成不良。
379	"	D 3.4			
丸山3号					

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
380	盌	A 12. 3 D 5. 6	口縁部は内弯する。	口縁部横ナデ。以下横位のヘラ削り。内面ナデ。	褐色。 焼成良好。
381	ų.	A12.7 D 6.0	半球状をなす。 全体に厚ぼったい。	口縁部横ナデ。以下へラ削り。 内面へラ削りのあと横ナデ。	暗褐色。 焼成良好。
382	"	A14. 2 D 7. 1	口縁部は直線状で内弯。	口縁部横ナデ。以下へラ削り。 内面横ナデ。	赤褐色。 焼成良好。
383	,	A 14. 1 D 6. 4	口唇部は、ちょっと外反。	口縁部横ナデ。以下へラ削り。 内面わずかにクシ目あり、横ナデ。	暗灰色。 焼成不良。
384	,	A 13. 5 D 6. 6	半球状をなす。 全体に厚ぼったい。	口縁部横ナデ。以下へラ削り。 内面横ナデ。	暗褐色。焼成やや良好。
385	,	A14.4 D 7.5	形はいびつ。	口縁部横ナデ。以下へラ削り。 内面横ナデ。 底部はヘラ削り。	暗褐色。焼成やや良好。
155 -386 156 丸山 3 号	,	A16.6 D 7.2	口唇部は、わずかに外反する。	口縁部は横ナデ。以下へラ削り。 内面横ナデ。 底はナデ。	褐 色。 焼成良好。
387	,	A 17. 4 D 6. 5	大型の盌で、全体に浅い。 半球状をなす。	口縁部横ナデ。 わずかにクシ目、みられる。以下へ ラ削り。 内面横ナデ。 底部はヘラ削り。	赤褐色。 焼成良好。
388	,	A 15. 3 D 6. 3	肩部は平丸状をなす。 口縁部は内弯。	口縁部は横ナデ。以下はヘラ削り。 内面横ナデ。	明褐色。焼成良好。
389	,	A15.3 D 7.0	深い盌。 底部は平状。	口縁部は横ナデ。以下へラ削り。 内面横ナデ。	赤褐色。 焼成良好。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
390	盌	A 15. 5 D 7. 0	半球状の盌。	口縁部は横ナデ。以下きれいなへラ 削り。 内面へラ磨き。	赤褐色。 焼成良好。
75110 7		A 15 C	底部を欠失する。	口縁部縦位のクシ目のあと横ナデ。	褐色。
391	"	A 15. 6		以下へラ削り。 内面横ナデ。	焼成良好。
丸山 3 号					
392	,	A14.8 D 6.8	半球状の盌。	口縁部横ナデ。以下へラ削り。 内面上半は横ナデ。以下ナデ。	赤褐色。 焼成良好。
丸山3号					
393	"	A 13. 2 D 6. 7	ややいびつな形。	口縁部は横ナデ。以下へラ削り。 内面横ナデ。 底はナデ。	赤褐色。 焼成良好。
丸山3号					
394	"	A 15. 2 D 6. 4	ややいびつな形。	口縁部は横ナデ。以下へラ削り。 内面横ナデ。 底に指痕あり。	淡褐色。 焼成良好。
丸山 3 号					
395	,	A14.2 D 7.0	やや口縁部は内弯する。	口縁部は横ナデ。以下へラ削り。 内面横ナデ。 底部は凹状になる。	褐色。 焼成良好。
丸山 3 号					
396	,	A14.2 D 7.4	半球状をなす。 口縁は端部で内反気味に立ち上る。 口唇部に一条の沈線。	口縁部横ナデ。以下へラ削り。 内面上方は横ナデ。以下へラ先によ る磨研。	褐色。 焼成良好。
丸山 3 号					
397	,	A 15. 5 D 6. 9	ややいびつ。	口縁部横ナデ。以下へラ削り。 内面上半横ナデ。以下ナデ。 一部にクシ目あり。	褐色。 焼成良好。
丸山 3 号					
157 158 —398	"	A 14. 0 D 5. 9	全体的にいびつで、器壁厚さ一定せ ず。	口縁部横ナデ。以下へラ削り。 内面横ナデ。以下へラ削り。 底はナデ。	暗黄褐色。 焼成不良。
丸山 3 号					
399	"	A 12. 8	底部を欠失する。 (器全体外面にススの付着をみる)	作りは荒い。 口縁部にわずかに横ナデあり。 以下へラ削り。 内面ナデ器壁厚さは一定しない。	暗褐色。 焼成良好。
丸山 3 号					

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備 考
400	盌	A 12.5 D 6.1	全体にいびつ。	調整をしていない、作りは雑、荒い ヘラケズリがみられる。	暗灰色。 焼成良好。
丸山3号					
		A12.3	全体にいびつ。	調整をしていない、外面は荒いヘラ ケズリ、内面ヘラケズリの後ナデ。	暗褐色。 焼成良好。
401	"	D 5.8			
丸山 3 号					
402	"	A 12.9 D 6.7	深いつくりで、口唇先端が凸状をな す。	口縁部はヨコナデ、以下ヘラケズリ、 内面ヨコナデ、底は指痕。	淡褐色。 焼成良好。
丸山 3 号					
403	"	A13.1 D 7.1	深いつくり、底は平。	口縁部はヨコナデ、以下荒いタテの ヘラケズリ、内面ヨコナデ、以下へ ラケズリ。	
丸山3号					
404	"	A 14. 2 D 4. 7	浅いつくり、口唇部は平。	口縁部ヨコナデ、以下荒いヘラケズ リ、内面上半クシメ以下ヘラケズリ。	
丸山3号					
		A 13. 0 D 6. 2	全体にあつぼったい作り。	□緑部はヘラケズリのあとヨコナデ、 以下はケズリのまま、内面ヨコナデ 底にヘラケズリ。	
405	"	D 0.2		I BLENDY A Ye	
丸山 3 号					
		A 14. 8	底部を欠失。 (外面の一部にススの付着をみる)	口縁部ヨコナデ、以下荒いクシメ、 内面ヨコナデ以下へラケズリ。	暗褐色。 焼成良好。
406 丸山 3 号					
<u></u>		A14.0	口縁部は直立。	口縁部ヨコナデ、以下荒いクシメ、	淡褐色。
407	,,	D 5.6		内面ヨコナデ底に指痕あり。	焼成良好。
丸山 3 号					
		A 15. 3	浅い盌、底部を欠失、口唇部にかけ 器壁がうすくなる。	口縁部ヨコナデ、以下クシメのあと にケズリ、内面ヨコナデ。	暗褐色。 焼成良好。
498	"				
丸山3号		A13.1	ややいびつ、口唇端は平。	口縁部にヨコナデ、以下はクシメと	
409	,	D 6.0		ケズリ、内面上半はクシメ、以下は ヨコナデ。	焼成艮好。
丸山3号					

図版番号	種類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備 考
丸山3号 159 160 160	*	A11.7 D 5.2	扁平なつまみを有し、口唇部は直立 する。	天井部外面はヘラ削り。	濃灰色。 焼成良好。 411とセット
160 ⁻⁴¹⁰	蓋				
丸山3号	髙	A10.3 D 8.6	脚部は径が大きく、三方に長方形透 しを有する。脚部にひずみ有。	坏部底部外面はヘラ削り。脚部には 横方向に条痕がはしる。	濃灰色。 焼成良好。
411	坏	A'12.3 D ₁ 4.2 B 5.1 D ₂ 4.4 C 8.8			410とセット
※ 丸山 3 号		A11.5	410に同じ。	410に同じ。	濃灰色。 焼成良好。
412	蓋	D 5.3			413とセット
※ 丸山 3 号	高	A10.2 D 9.7	脚部は径が大きく、三方に長方形透	坏部底部外面はヘラ削り。	坏内底面に朱の痕跡。
413	坏	A'12.3 D ₁ 4.7 B 4.6 D ₂ 5.0	しを有する。		濃灰色。 焼成良好。 412とセット
※ 丸山3号	*11	C 6.3	小型の坏で体部は角ばらず底部に至		淡灰色。 焼成良好。
414	坏		る。口縁部は蓋受と立ち上りとの間 に沈線が一条めぐる。	はヘラケズリ。	· 就以及好。
*					
丸山 3 号		A 12. 8 D 5. 8	扁平なつまみを有し、全体に丸みを もつ。	天井部外面はヘラ削り。他の外面は 横ナデ。	淡灰色。 焼成良。 成形良好。
415 **	蓋				
丸山3号	高	A 9.9 D 9.8 A'12.1 D ₁ 4.2	丸みをもつ坏部に径の大きな、脚が つく。脚部には三方に長方形透しを 有する。	413と類似。	濃灰色。 焼成良好。
416 **	坏	D 4.9 D ₂ 5.6 C 9.6	77.00		
丸山3号		A11.3 D10.0	全体に整っている。脚は径が大きく、 三方に長方形透しを有する。	「坏部底部外面はヘラ削り。他の外面 は横ナデ。	淡灰色。 焼成良。 胎土やや不良。
417 *	"	A'13.2 D ₁ 4.8 B 4.9 D ₂ 5.2 C 9.6			
丸山3号		A10.0 D 9.1	全体に雑でひずみがある。脚部の径 は大きく、三方に大きな長方形透し	外面は横ナデ。	灰褐色。 焼成不良。 坏内底面に朱を入れ
418	"	A'12.4 D ₁ 4.4 B 4.1 D ₂ 4.7 C 9.4	を有する。		た痕跡あり。
※ 丸山 3 号		A 10. 5 D 10. 1	「坏下部は扁平で、たちあがりはわず かに内傾し長い。脚部は径が大きく、		淡灰色。 焼成やや 不良。 成形不良。
419	"	A'12.7 D ₁ 4.6 B 4.3 D ₂ 5.5	三方に長方形透しを有する。ひずみ	(SA) / 0	, AO MIN'I RO
*		C 9.5			

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備 考
丸山3号	高	A 10. 6 D 10. 3 A'13. 1 D ₁ 5. 1	深みのある坏部で、たちあがりはわ ずかに内傾する。脚部の径は大きく、 三方に円形の透しを有する。	外面の坏底部はヘラ削り。他は横ナ デ。	黒灰色。焼成良。
420	坏	B 4.2 D ₂ 5.2 C 8.5			·
※ 丸山 3 号		A11 5 D10 1	420に類似。	420に類似。	淡灰色。焼成良。
421	"	A11.5 D10.1 A'13.6 D ₁ 5.3			石粒を含む。
*		B 4.5 D ₂ 4.8 C 10.0			
丸山3号		A11.1 D 10.2	深みのある坏部で、たちあがり先端 は外方へはりだす。脚部は径が大き	外面の坏底部はヘラ削り。他は横ナ デ。	赤みをおびた黒灰色。 焼成良。
422	"	A'13.5 D ₁ 5.4 B 4.5 D ₂ 4.8	く、三方に円形の透しを有する。		石粒をわずかに含む。
*		C10.0			
丸山3号		A11.3 D 9.7	422に類似。	坏底部から脚上半にかけて条痕があ る。三方に円形透しを有する。	灰褐色。焼成良。 石粒を含む。
423	"	A'13.3 D ₁ 4.8 B 4.0 D ₂ 4.9			
*		C 9.0			
丸山3号	器台	A 15.4 A 27.3 B 10.3 B 10.2 C 21.4 C 23.0 D 19.3 D 27.7	器台坏部は丸みをもち、脚は径が大きい。壷の胴は扁平で、口縁は外反する。重ね焼きされているため融着している。	器台・壷ともクシ横波状文を特色と する。	黒灰色。 焼成良好。
*	壷	D ₁ 5.8 D ₁ 11.8 D ₂ 13.5 D ₂ 15.9	C (1.9°		
丸山3号		A 20. 2 D ₁ 47. 0	口縁は外反し、胴は肩がはる。	外面には斜めのタタキ、その上をナ デ。	黒灰色。 焼成良好。
161 162 —425	壷	B14.6 D ₂ 25.8 C31.7 D30.5			
*			直立気味の口縁部と、長球形の胴部	│ │ □縁部ハケ目の上横ナデ、内面指ナ	焼成後の底部穿孔が
163—426	,,	A 10.2 D ₁ 6.1 B 7.8 D ₂ 9.9 C12.3	をもつ。底部は焼成後の穿孔がある。	<i>〒</i> 。	ある。 色調褐色。 焼成良。
丸山4号		D16.0?			
427	台付	A 10.7 D ₁ 4.9 B 3.9 D ₂ 8.7 C 9.4	わずかに外反する口縁部と高い脚部 をもつ。	坑部の口縁部横ナデ、それ以下クシメ。脚部はヘラケズリ、脚裾部はナデ、脚内面ヘラケズリ。	
丸山 4 号	境	D 13. 6			
428	"	A 10.1 D ₁ 5.2 B 3.6 D ₂ 8.0	427とほとんど同形態。	坑部横ナデ、脚部ヘラケズリの後ナデ。内面ヘラケズリ、脚裾部の内面は横ナデ。	口縁部を欠失する。 色調淡褐色。 焼成良好。
丸山4号		C 9.0 D 13. 2			
	高	A 10. 2 D ₁ 4. 2	半球形の坏と、直立気味の脚をもつ。	のあと磨く。脚部ナデ、坏部内面ナ	成形がよくない。- 色調赤褐色。
429		B 3.2 D ₂ 7.0 C 8.1		デ、脚部ヘラケズリ。 	│ 焼成良好。 │ │
丸山4号	坏	D11.2			

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
430 丸山 4 号	高坏脚部	C12.7 D 8.0	たち気味の脚部。	外面脚筒部はヘラケズリ。裾部はナデ。内面ヘラケズリ。裾部はナデ。	焼成良好。 淡赤褐色。
431	"	C11.6 D 8.8?	器壁の厚さが一定でない。	外面ヘラケズリの後横ナデ。裾部は 横ナデ。内面ヘラケズリ。	焼成良好。 淡赤褐色。
丸山4号					
432	"	B 4.4? C12.2 D 9.3	428の脚部、430に類似。	外面へラケズリのあとナデ。脚裾部 は横ナデ。内面へラケズリ。	淡赤褐色。 焼成良好。
433	"	B C 9.0 D 8.5?	脚裾は短く、たち気味。	外面ヘラケズリ、脚裾部はナデ。内 面ヘラケズリ。	褐色。 焼成良好。
434	"	B 3.5? C11.4 D 8.7	431に類似。	外面ヘラケズリ、脚裾横ナデ。内面 ヘラケズリ。	焼成良好。
164-435	器台	A11.1 D ₁ 3.0 B 4.3 D ₂ 7.0 C10.8 D10.7	坏部は浅く、皿状をなす。	环部は内・外面とも横ナデ、脚部の 外面ヘラケズリ、脚裾部横ナデ。脚 内面ヘラケズリ。	赤味をおびた褐色。 焼成良好。
436	高坏	A D ₁ B 4.4 D ₂ 10.5 C 11.8 D 18.0 ?	「坏部は中位に凸部をもち深い。脚柱 状部は円筒状をなす。	「坏部外面ヨコナデ、内面へラケズリのあとヨコナデ。脚部外面へラケズリ。裾部ヨコナデ、内面へラケズリ。	
437	"	B 4.2 C11.0 D ₂ 8.5	坏部は途中よりくっせつ。	「不部外面へラミガキ。脚内部へラケ ズリ。	坏部上端を欠失する
438	盌	A17. 0 D 6. 5	球形を呈し、整っている。	外面中位以下はハケ目のうえをナデ。 内面はナデ。	淡赤褐色。焼成良。 砂粒・黒雲母を含む
439	高坏	B 5.9 C11.4 D 8.9	环部欠失。脚部はやや径が大きく、 ラッパ状に開く。	外面はヘラ削りのうえナデ。内面は ヘラ削り。下端部に布の圧痕がある。	褐色。焼成良。 砂粒を含む。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
	高	A 18.8 D ₁ 6.3 B 4.5 D ₂ 8.0	坏部は中位の接合部で屈曲し、口縁 先端は外反する。脚部下端は大きく 外に開く。	坏部内外面は指ナデのあと簡単な、 ヘラ磨き。脚部外面はナデのあとへ ラ磨き。内面はヘラ削り。	赤褐色。焼成良。 微砂粒を含む。
440 丸山 4 号	坏	C11.5 D14.3			
ДЩ4 5			「	器壁はあつい。脚部内外面ともヘラ	淡褐色。焼成良。
441	"	B 4.9? D 8.7?	- Francisco	削り。	石粒を含む、風化が はげしい。
丸山4号					
		D 6.9?	坏部欠失。脚柱部の径が大きい。	内外面ともヘラ削り。	褐色。焼成良。 石粒を含む、内外面 に丹彩の痕跡。
442	"				1273 4707 100 11070
丸山4号					
443	"	B 4.6 D 9.0?	坏部・脚部下端を欠失。	442に類似。	淡褐色。焼成良。 砂粒を多く含む。
丸山4号					
丸山4号		C 10.5	口縁部は内傾し、胴部は横にはる。	外面上半と内面は横ナデ。外面中位 以下はヘラ削り。部分的にその上を	黄褐色。焼成良。 小石粒を含む。
165—444	壺	D 6.4		ナデ。	
*					
丸山4号		A 6.7 D 9.3	口縁は短かく直立する。胴部は肩が はり、平底気味の丸底。	胴部外面中位以下はヘラ削り。肩に 櫛描文。	
445	壷				
※ 丸山 4 号		A 15. 9 D ₁ 8. 2	口縁部は長くのび、大きく開く。胴切は見がより召り、大きく開く。肩		黒灰色。焼成良。 緑色の自然釉付着。
446	碌	B 4.5 D ₂ 6.0 C 9.2	1 DP14 /F1 // 14 / 14 1.4CHV/1 176 /C /F1 /	ラ削り。	林也の日然何的名。
*		D14.2			
丸山4号		A 14. 4 D ₁ 7. 9 B 4. 8 D ₂ 6. 8	口縁部は長くのび、大きく開く。胴 部は球形。円孔の径 1.5cm。	胴部下半はヘラ削り。他は横ナデが 主体。	淡灰色。焼成良。 石粒・黒雲母を含む
447	"	C10.1 D14.7			
※ 丸山 4 号	 	410.5	口縁部はやや長くのび、先端はわず	外面上半は横ナデ。肩部以下はヘラ	黒灰色。焼成良。
448	台	A 10. 7 B 8. 8	かに内弯する。胴部はやや肩がはる。 脚部を欠失するが、三方に透しあり。	削り。	大きな石粒を含む。
 *	壷	D ₁ 5.5			
丸山4号		B 8.8	口縁部はわずかに外傾し、蓋受けを 有する。胴部は球形で、脚部欠失。	外面は横ナデ。胴部内面へラ削り。	暗灰色。 胎土良。
449	"	C17.3			
*					

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
丸山4号	高	D12.6?	坏部・脚部下端欠失。脚柱部は細い。	外面はハケ目のうえをナデ。内面横 ナデ。	黄褐色。 生焼けで土師質を呈 する。
*	坏				石粒を含む。
丸山4号		D 7.1	脚柱部のみの破片。 2条の凹線をめぐらす。	内面下半はヘラ削り。	淡褐色。焼成良。 砂粒を含む。
451	"				
*					
166—452	壷	A 15. 6 D ₁ 10. 5 B 12. 7 D ₂ 3. 5 C 11. 5 D 14. 0 ?	頸部のくびれはつよく、口縁は短く 外反する。胴最大径は中位にあり球 形を呈する。	口縁部外面はハケ目のうえをナデ。 内面は横ナデ。胴部外面はハケ目。 内面はヘラ削り。	黄褐色。焼成良。 小石粒を含む。 肩部から胴部にかけ てスス付着。
丸山4号			7 11 hp)	4 	沙丘克 战争与为于
丸山4号	坏	A 15. 1 D 5. 2	天井部と口唇部の境は凹む。 扁平なつまみを有し、口唇先端はか るく有段となる。	外面天井部はヘラ削り。 口唇部は横ナデ。	淡灰色。焼成やや不 良。 石粒を多く含む。
*	蓋				
丸山4号	"	A 15. 1 D 5. 2	天井部と口唇部の境界は不明瞭で、 口唇部先端は内側で有段をなす。 扁平な凝宝珠形のつまみを有する。	453に類似。	同 上
*					
丸山4号	高	A14.5 D18.6 A'16.5 D ₁ 4.8	「好部に比して脚部大。好部のたちあがりはわずかに内傾する。 脚部は大きく開き、上下2段に各三	坏部外面底部はヘラ削り。	黒灰色。赤灰色。 焼成やや不良。 胎土良。
455 **	坏	B 4.9 D₂13.8 C15.6	方に長方形透しを有する。		
丸山 4 号	坏	A14.3 D 4.5	天井部と口唇部とのさかいに一条の 凹線をめぐらす。 口唇部先端は内側でかるい有段をな	天井部外面はヘラ削り。 内面は横ナデ。	淡灰色。 焼成良好。
456 **	蓋		す 。		
丸山4号		A 13. 7	全体に丸みをもち、つまみはない。	天井部外面はヘラ削り。	淡灰色。
457	"	D 4.3	天井部と口唇部の境は凹線がめぐり、 口唇部先端は丸くまとまる。		焼成良好。
*					
丸山4号		A 13. 5	丸みをもった器形。 天井部と口唇部との屈曲は不明瞭。	天井部外面へラ削り。内面横ナデ。	黒灰色。 焼成やや不良。
458	"	D 4.2			
*			1 = 1 = - 1 = - 1 = -		冰压力 抽事中
丸山 4 号	"	A11.2 D 3.0	小型品で丸みをもつ。 尖った小さなつまみを有する。 	天井部外面へラ削り。以下は横ナデ。 内面はナデ。 	淡灰色。焼成艮。 石粒を含む。
*					

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
丸山 4 号 460 ※	坏	A 13. 1 A' 15. 6 D 4. 2	たちあがりはぶあつく、内傾する。	底部外面はヘラ削り。他は横ナデ。	
丸山 4 号 461 ※	"	A 12. 7 A'14. 8 D 4. 0	浅めの器形で左右不対称。 たちあがりはみじかく、わずかに内 傾する。	外面底部はヘラ削り。他は横ナデ。 内面は横ナデ。	淡灰色。焼成良。 自然釉付着。 小石粒を含む。
丸山 4 号 462 ※	"	A'14.6 D 3.8+α	丸みをもつ、たちあがりは先端が欠 失しているか内傾する。	外面底部はヘラ削り。それ以上は横 ナデ。	白灰色。焼成良。 自然釉付着。 石粒を含む。
丸山 4 号 463	"	A 12. 2 A'14. 2 D 4. 1	たちあがりは内傾する。 全体に整った器形。	底部外面はヘラ削り。他は横ナデ。	淡灰色。焼成不良。 胎土良。
丸山 4 号 167-464 ※	高坏	A 15. 2 D ₂ 12. 6 B 5. 2 D 16. 6 ? D ₁ 4. 0	浅めの坏部で、坏部に比して脚部大。 脚部は大きく開き、下端部は欠失。 上下2段にわたり各三方に長方形透 し。	坏部内面は横ナデ。外面底部には横 方向のハケ目。脚部外面は横ナデ。	淡灰色。 焼成やや不良。
丸山 4 号 465	"	A 13.1 D ₁ 3.8 B 4.1 D ₂ 13.3 C13.6? D17.1?	浅めの坏部で、坏部に比して脚部大。 脚部の中位よりやや上に 2条の凹線 をめぐらし、その下に三方に長方形 透し。		黑灰色。 焼成良好。
丸山 4 号 466	"	A 10.5 D ₁ 4.0 B 2.5 D ₂ 10.0 C 9.1 D 14.0	丸みをおびた坏底部から屈曲して口 縁にいたる。特異なカーブをもつ。 脚は長い。	坏部外面上半は横ナデ。下半はヘラ 削り。	黒灰色。焼成良。 胎土良。
丸山 4 号 467 ※	"	B 5.5 C 9.8 D ₂ 5.5	丸みをもつ坏部と径の大きい脚がつ く。 脚には三方に円形の透しがある。	坏部内外面ヘラ削り。脚部は横ナデ。	淡灰色。焼成良。 胎土良。
丸山 4 号 168-468 ※	壷	A 15. 2 D ₁ 5. 4 B 9. 9 D₂23. 6 C23. 5 D29. 0	口縁部は外反したのち屈曲し直立する。 胴部は肩がはり、縦長の丸底。	口縁部中位に4条の凹線がめぐり、 その上下にクシ目波状文。 器壁はうすい。	濃灰色。 焼成良好。
丸山 4 号 469 ※	"	A 13. 7 D ₁ 5. 4 B 9. 9 D ₂ 25. 5 C 32. 4 D 30. 9	口縁部は外反したのち、先端は肥厚 する。 胴部は横に張り、丸底。	口縁部内面は横ナデ。胴部外面は全 面に格子目タタキのうえをナデ。 内面は鮮明な青海波が残る。	淡灰色。焼成良。

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
169 170 丸山 6 号	壷	A16.9 D ₁ 5.2 B12.1 D ₂ 27.4 C25.4 D32.6	口縁は外傾し、先端は肥厚する。胴 は縦長。	口縁部外面はハケ目のうえナデ。 内面は横ナデ。 胴部外面はハケ目。内面はヘラ削り。 輪積みのあとを残す。	赤褐色。焼成良。 小石粒を含む。 焼成後の底部穿孔。
471	小型丸底壷	A12.7 D ₁ 4.3 B 9.1 D ₂ 10.8 C15.1 D15.1	口縁部はわずかに内湾したのち外反する。 胴部はやや肩がはり球形。	外面はハケ目のうえをナデ。 口縁部内面は横ナデ。 胴部内面下半はヘラ削り。	淡褐色。焼成良。 小石粒を含む。
472	"	A 12. 6 D ₁ 5. 3 B 8. 6 D ₂ 9. 0 C 14. 4 D 14. 3	口縁部は外傾しながら直延し、先端 はわずかに外反気味。 胴部は肩がはり丸底。	外面全体及び口縁部内面はハケ目のうえを横ナデ。 うえを横ナデ。 胴部内面は上半は指ナデ。下半はヘ ラ削り。	黄褐色。焼成良。 小石粒を含む。
473	"	A10.5 D ₁ 3.9 B 8.1 D ₂ 4.1 C14.1 D 8.0?	口縁部は内湾したのち先端は外反する。 胴部はやや肩がはると思われるが、 下半を欠失するため詳細不明。	口縁部外面はハケ目のうえを横ナデ。 胴部外面はハケ目。 口縁部内面は横ナデ。胴部内面はヘラ削り。	暗褐色。焼成良。 小石粒を含む。 ・
474	"	A 7.4 D ₁ 3.0 B 5.3 D ₂ 7.4 C10.1 D10.4	口縁部は内弯し、先端は尖り気味。 底部は尖り気味。	外面は器面荒れのため調整不明。 口縁部から胴部上半にかけての内面 は横ナデ。内面底部は指整形。	明褐色。焼成良。 小石粒を含む。
475 丸山 6 号	"	A10.1 D ₁ 2.7 B 8.2 D ₂ 6.7 C11.3 D 9.4	口縁部は外傾しながら直延。 胴部はやや肩がはり扁平。 底はわずかに尖り気味の丸底。	口縁部外面はハケ目のうえを横ナデ。 胴部外面はハケ目。口縁から胴部上 半にかけての内面は横ナデ。 底部内面には指圧痕。	黄褐色。焼成良。 小石粒を含む。
476 丸山 6 号	高坏	A 21. 8 D ₁ 6.0? B 4.0? C 15. 1 D ₂ 9.5 D 15. 5	口縁部先端はわずかに外反し、丸くまとまる。 接合面はないが同一器形と思われる。 脚部は大きく開く。	坏部内外面は横ナデ。脚部外面は荒れているが横ナデであろう。 内面は器面荒れのため整形不明。	淡褐色。焼成良。 小石粒を含む。 器面荒れがひどい。
477	"	A 21. 3 D ₁ 6. 4 B 4. 1 D ₂ 9. 4 C 16. 1 D 15. 8	丸みをおびた坏部に大きく開く脚が つく。	坏部は内外面とも横ナデ。脚部外面 上半はヘラ削りのあと横ナデ。下半 は部分的にハケ目があり、横ナデが 主体。内面はヘラ削り。	淡褐色。焼成不良。 小石粒を含む。
171-478	"	A18.0 D ₁ 5.6 B 4.3 D ₂ 7.7 C12.9 D13.3	坏部は丸みをおび、脚下部は大きく 開く。	「小部外面上半と内面は横ナデ。 脚柱部内面はヘラ削りのあと横ナデ。 脚柱部内面はヘラ削り。下端部は内 外面とも横ナデ。器壁はあつい。	褐色。焼成良。 砂粒を含む。
479	,,	A 18. 9 D ₁ 5. 3 B 3. 3 D ₂ 7. 6 C 15. 0 ? D 12. 9	坏部は丸みをおび、脚は大きく開く。 さらに下端部は横に開く。	「小部調整は横ナデ中心。 脚柱部外面はハケ目のうえを横ナデ。 内面はヘラ削り。	褐色。焼成良。 小石粒を多く含む。

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技 法 上 の 特 色	備考
480	高坏	A 18.8 D ₁ 5.6 B 4.1 D ₂ 7.0 C 12.9 D 12.6	坏部は丸みをおび、脚は大きく開く。 さらに下端部は横に開く。	坏部内外面は横ナデ。脚柱部外面は ヘラ削り。あと横ナデ。 内面はヘラ削り。下端部は内外面と も横ナデ。	淡褐色。焼成良。 砂粒・黒雲母を含む。 脚の内面に丹彩の痕 跡あり。
481 丸山 6 号	"	A 16.5 D ₁ 4.8 B 3.1 D ₂ 7.5 C 11.8 D 12.3	丸みをおびた坏部に大きく開く脚がつく。小型である。	坏部外面はハケ目のうえをナデ。 内面は横ナデ。脚部外面はヘラ削り のうえをナデ。内面はヘラ削り。	褐色。焼成良。 小石粒を含む。
172-482	畫	A 15.0 D ₁ 5.5 B 10.8 C 23.2 D 12.7	口縁部は内弯したのち外傾する。 胴部の肩部以下を欠失。	口縁部内外はハケ目のうえを横ナデ。 胴部外面はハケ目。内面はヘラ削り。 胴部内面には輪積みのあとが明瞭。	
483	変	A 19. 6 D₁ 5. 0 B 14. 2 D₂21. 6 C 22. 8 D 26. 6	口縁部先端はうすくなり、わずかに 外反する。 胴部はやや縦長の球形。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部外面はハケ目のうえをナデ。内 面はヘラ削り。	黄褐色。 焼成やや不良。 小石粒を含む。
484	高坏	A 19. 5 B 4. 5 D 5. 0	丸みをおびた坏部で、脚部欠失。	内外面ともハケ目のうえを横ナデ。	黄褐色。焼成良。 小石粒を含む。
485	"	A18.6 D 5.0	环部の中位の接合面でわずかに屈曲 し、外傾する。脚部欠失。	坏部内外面ともハケ目のうえを横ナ デ。	淡褐色。焼成良。 砂粒を多く含む。 器面あれがひどい。 内面に丹彩の痕跡。
486	"	A 21.8 D ₁ 6.1 B 3.9 D ₂ 9.8 C 15.3 D 15.7	「坏部は丸みをおび、脚部は大きく開く。	脚部内面はヘラ削りのあとナデ。 他は整形不明。	褐色。焼成良。 小石粒を含む。 器面あれがひどい。
487	"	A18.1 D ₁ 5.5 B 3.5 D ₂ 7.9 C13.9 D13.6	「不部は丸みをおび、先端は外反する。 脚部は大きく開き器壁はうすい。	「不部内外面はハケ目のうえを横ナデ。 又は単なる横ナデ。 脚部外面の上半はヘラ削りのうえを ナデ。下半はヘラ削りのうえをハケ 目、あとナデ。	褐色。焼成良。 小石粒を含む。
488	"	A 20. 1 B 3. 2 D 12. 1 D ₁ 7. 0	深みのある坏部で、接合部で屈曲する。 脚部は大きく開くと考えられるが下部を欠失。	环部調整は横ナデが主体。 脚部外面はヘラ削りのうえをナデ。 内面はヘラ削り。	黄褐色。焼成良。 小石粒を含む。
489	"	A 18. 2 B 3. 5 D 7. 6 D ₁ 6. 0	环部中位の接合部でわずかに屈曲し、 外方は稜をなす。脚部欠失。	外面はハケ目のうえをナデ。 内面は横ナデ。	褐色。焼成やや不良。 小石粒を含む。 外面に丹彩の痕跡。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
	高	A 17. 1	小型で丸みをもつ坏部、脚部欠失。	坏部外面は横ナデ主体。内面はハケ 目のうえを横ナデ。脚部外面はハケ	淡褐色。 焼成良。
172-400		В 3.3		目のうえをヘラみがき。内面はヘラ	小石粒を含む。
173-490		D 9.0		削り。	
丸山6号	坏	D ₁ 5.3			
		B 4.1	坏部欠失。脚柱部は径が大きく、下	脚柱部外面はヘラ削りのうえを横ナ	淡褐色。
		C 13. 6	端部は横にひらく。 	一デ。内面はヘラ削り。	小石粒を含む。 焼成不良。
491	"	D 9.0			NUX1120
丸山 6 号		D ₂ 7.4			
		.	同上	同上	
		B 3.8	–		小石粒を含む。
492	"	C15.4			焼成良。
		D 9.1			
丸山6号		D ₂ 8.0			
		B 4.1	同上	同上	淡褐色。
		C 13. 0			小石粒を含む。 内外面に丹彩の痕跡。
493	"	D 9.0			焼成やや不良。
# JL C B		D ₂ 8.3			
丸山 6 号		-			48.7
		В 3.4	同上	同上	褐色。 小石粒を含む。
404	,	C11.6			焼成良。
494	, "	D 9.0			
丸山 6 号					
		B 4.0	「「おお欠失。脚部は大きく開く。	脚部外面は横ナデ。内面はヘラ削り。	淡褐色。
		C 15. 7			小石粒を含む。
495	"	D10.3			脚部内面に丹彩の痕 跡。
		D ₂ 8.9			焼成良。
丸山 6 号		D ₂ 0. 3			
		В 3.6	同 上	脚部外面はヘラ削りのうえを横ナデ。 内面はヘラ削り。	褐色。 小石粒を含む。
		C 13. 2			小石程を含む。 内外面に丹彩の痕跡。
496	"	D 7.7			焼成やや不良。
丸山 6 号					-
		В 3.9	坏部欠失 脚部は大きく開く。	外面は横ナデ。内面はヘラ削りのう	
		C 13. 6		えをナデ。	小石粒を含む。
497	"	D 8.2			内外面に丹彩。 焼成やや不良。
丸山 6 号		U. L			
				 	 黄褐色。
		В 3.6	一人人,唯一即八天。	抑部が固はハケ日。神部が固はハケ 削りのうえをナデ。内面はヘラ削り。	小石粒を含む。
	,,	D 8.0			焼成良。
498					
498	İ			į .	i
498 丸山 6 号					
		В 4.0	坏部欠失。脚部は大きく開く。	外面上半はヘラ削りのうえ横ナデ。	黄褐色。
丸山 6 号		B 4.0 C16.9	坏部欠失。脚部は大きく開く。	外面上半はヘラ削りのうえ横ナデ。 下半はハケ目の上をナデ。内面ヘラ 削り。	黄褐色。 小石粒を含む。 焼成やや不良。
	v		「坏部欠失。脚部は大きく開く。	下半はハケ目の上をナデ。内面ヘラ	小石粒を含む。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
174 —500 175 丸山 7 号	壺	A 15.4 D ₁ 5.0 B 12.2 D ₂ 27.4 C 26.8 D 32.4	口縁部は内弯、頸部でくびれる。胴部は卵形を呈し、最大径は中位よりやや上、底は丸底。	口縁内はヨコナデ、外はハケ目のあ とヨコナデ、胴部はハケ目、内面は ヘラ削り。	外面、口縁部内部丹 塗り、赤かっ色、小 石粒を含む、焼成は 良好。
501	变	A15.9 D ₁ 4.5 B12.0 D ₂ 26.0 C26.5 D30.5	口縁部は下半部に稜を有し、さらに 内弯気味に立ち上る。胴部最大径は 中位いにあり、ほぼ球形。頸部はユ ビによるナデにより強くくびれる。	口縁は内面はヨコナデ、外面はハケ 目のあとヨコナデ。胴部は底部にか けてはハケ目、内面はヘラケズリ。	黄褐色。、 焼成良好。
502	壺	A 19.0 D ₁ 6.6 B 14.2 D ₂ 29.4 C 28.0 D 36.0	口縁部は外反し、端部は角ばる。胴部は卵形を呈し、最大径は肩部、底部は尖り気味の丸底。	外面の調整不明、胴部に一部ハケ目 痕。口縁内部はヨコナデ、胴内面は タテ方向のヘラ削り。	淡褐色、多量の小石 粒を含む、焼成良好。
503		A14.9 D ₁ 5.1 B11.4 D ₂ 23.7 C23.2 D28.8	口縁部は外反し、端部は尖る。胴部 は球形で、底部は丸底。	口縁部内面はヨコ、外面はタテのハケ目。胴部は全面ハケ目、内面は斜めのヘラ削り。	外面は胴中部以上、 口縁部内面丹塗り。 褐色、小石粒を含む。 焼成良好。
504	变	A16.2 D ₁ 4.0 B12.0 D ₂ 26.0 C26.4 D30.0	口縁部は内弯気味に外反し、端部で ややはねる。頸部のくびれ大、胴部 は球形で丸底。	口縁部内外ヨコナデ、胴部は外面、 ハケ目、内面はヘラ削り。	黄褐色、小石粒を含む。 焼成良好。
505	,	A12.1 B 9.3 C 20.1 D 23.4	口縁部は短く外反、胴部最大径は中 位で、球形を呈し丸底。	口縁部は内外ともハケ目のあと、指によるヨコナデ、胴部外面はハケ目 内面はヘラ削り。	黄褐色、小石粒を含む。 焼成良好。
176 177 丸山 7 号		A22.8 D ₁ 7.5 B16.2 D ₂ 35.7 C35.1 D43.2	口縁部は下位で尖帯状の稜がめぐり さらに直線的に立ちあがり、端部で 小さく外反する。頸部は強くくびれ る。肩がやや張り、胴部最大径は上 半にある。	口縁部は内外面ともヨコナデ、頸部 以下外面は全面ハケ目。内面下半で タテ方向のケズリ上げ。上半でヨコ 方向のヘラ削り。	黄褐色。 焼成良好。 焼成後の底部穿孔。
507	小型丸底壺	A11.7 D ₁ 3:0 B 9.4 C13.6 D 8.8	口縁部は外反し、端部で角ばる。 肩部が最大径、底部欠く。	口縁内外ともヨコナデ、肩部外面ヨ コナデ、内面はヘラ削り、胴部以下 の外面はハケ目。	黄褐色、大小石粒を 含む。 焼成良好。
508	壺	A15.1 D ₁ 5.0 B 8.5 D ₂ 13.3 C16.2 D18.3	広口口縁でゆるく外反、口縁下部で 有段。頸は短く立上る。胴部は球形 で、最大径は肩部、丸底。	口縁内外ともヨコナデ、胴部は外面 ヨコナデ、内面はヘラ削り。	赤褐色。 焼成良好。
509	底壺	A 8.4 D ₁ 3.7 B 6.1 D ₂ 5.8 C 9.0 D 9.5	広口口縁でやや内弯気味、口唇はや やはねる。胴部は球形で、厚い丸底。	口緑内外ともヨコナデ、胴部外面は ヘラ削りの後、指でナデ、内部は指 ナデ痕明瞭。	

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
510	小型丸底壺	A 8.6 D ₁ 2.7 B 7.2 D ₂ 4.9 C 8.3 D 7.6	口縁部はわずかに内弯する。 口径と胴径はほぼ同じ。	口縁部外面はハケ目のうえをナデ、 内面はハケ目。 胴部外面はハケ目。 内面底部はヘラ削り。	淡褐色。 焼成良。 石粒を多く含む。 内外面とも丹彩。
511	"	A 8.9 D ₁ 3.2 B 6.7 D ₂ 5.7 C 8.8 D 8.9	広口口縁で外反、最大径は口縁と胴部。胴部は横長の球形。 底部は丸底。	口縁内外ともヨコナデ。 胴部はヘラ削りののち指で調整。 内面は指によるナデ。	褐色、焼成ムラがある。 胎土中、小石粒含む。 焼成良好。
512	"	A 9.5 D ₁ 2.7 B 6.9 D ₂ 7.0 C 10.0 D 9.7	広口口縁で外反、胴部最大径は中位 底部は丸底。	胴部の外面はヘラ状の尖端で調整、 内面の上部はヘラのヨコ削り、下部 は下→上のヘラ削り。	黄褐色。 焼成やや良。
513	,	A 7.3 D ₁ 2.5 B 5.9 D ₂ 8.6 C10.8 D11.1	口縁はやや内弯、端部は丸味。 胴部は球形で丸底。	口縁部はハケ目のちョコナデ、頸に 指によるョコナデ、胴部は上半ハケ 目、下部ヘラ削り、内面はヘラ削り。	胎土は良。
514	*	A 8.2 D ₁ 2.6 B 6.1 D ₂ 7.6 C10.7 D10.2	口縁はやや内弯、端部は丸味。 胴部は球形、底部欠。	口縁部は外面ハケ目のあとヨコナデ 内面ヨコナデ、胴部上半はハケ目、 下半はヘラ削り、内面は指ナデ。	赤褐色、少量の小石 粒を含む。 焼成良好。
515	壺	A17.2 B11.5 D 8.4	口縁は外反。 肩部より上半のみ。	口縁部外面はハケ目ののちヨコナデ 内面はヨコナデ、肩部外面ヨコナデ。	
178-516	,,	A12.1 D ₁ 5.3 B 8.2 D ₂ 11.6 C15.0 D16.9	口縁部は外反し、端部は丸味。 最大往は肩部で、胴部は球形。 底部を欠く(穿孔かどうか不明)	口縁上半はヨコナデ、下半はタテの ハケ目、内面はヨコナデ。 胴部はヨコのハケ目、内面はヘラ削 り。	黄褐色、小石粒を含 む。 焼成良好。
517	,	A10.6 D ₁ 4.1 B 9.7 D ₂ 12.7 C15.4 D16.8	小型の壺で、口縁は直立にちかくた ちあがり、先端はわずかに外反する 胴部は肩が張る球形。	口縁内外面は横ナデ。胴部内外面はヘラ削り。	黄褐色。焼成良。 小石粒を含む。 外面に丹彩の痕跡あ り。
518	"	A19. 2 D 9. 0	壺の口縁部のみの破片。 先端はわずかに外反する。	内外面ともハケ目のうえをナデ。	淡褐色、焼成良。 砂粒を含む。
519	*	A 19. 7 D 9. 6	壺の口縁部のみの破片。 頸部からわずかに内弯気味にたちあ がり、先端は外反する。	内外面ともハケ目のうえをナデ。	暗褐色、焼成良。 小石粒を含む。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
520	壺	A14.6 D ₁ 5.4 B10.2 D ₂ 22.4 C25.0 D27.8	口縁部は内弯したのち反転して先端 は外反する。胴部はやや肩が張り球 形。胴部最大径は中位より上にある。 底部穿孔。	口縁部内外面は横ナデ。胴部外面は 全面にハケ目。内面はヘラ削り。	淡褐色。焼成良。 小石粒を含む。 焼成後の底部穿孔。
521	*	A15.4 D ₁ 3.4 B12.1 C22.7 D14.0	口縁部は径が小さく、中位でつよく 屈曲する。胴部下半を欠失。	口縁部内外面はハケ目のあとをナデ 胴部外面は全面に荒いハケ目。内面 はヘラ削り。	褐色。焼成良。 小石粒を含む。 内外面に丹彩の痕跡。
522	*	B 8.8 C24.5 D18.8	口縁部上半と底部を欠失。 胴部は球形を呈する。	胴部外面はハケ目。内面はヘラ削り。	赤褐色。焼成良。 大小の石粒を含む。
179 180 丸山 7 号	高坏	A16.9 D ₁ 5.5 B 4.0 D ₂ 6.5 C11.5 D13.0	坏部は中位の接合面で屈曲する。脚柱部は比較的細く、下端部は大きく開く。	脚柱部内面がヘラ削りの他はすべて ナデ。	外面に丹彩の痕跡あ り。
524	,	A19.0 D ₁ 5.2 B 3.1 D ₂ 8.8 C13.3 D14.0	「不部は中位でも屈曲せず、丸みをもつ。脚部は脚柱部を有せず、除々に開いて、下端部はわずかに上方に反る。	I不部内外面は横ナデ。脚部内外面は ヘラ削り。	淡赤褐色。
525	,	A18.7 D ₁ 5.8 B 3.8 D ₂ 8.1 C13.1 D13.9	「坏部は中位でわずかに屈曲し、軽く 有段をなす。脚柱部を有し、下端部 は内弯気味に大きく開く。	が部内外面は横ナデ。脚柱部外面は ヘラ削りのあとナデ。内面はヘラ削 り。下端部外面はヘラ磨き。内面は 横ナデ。	
526	小型丸底壺	A 6.4 D ₁ 2.2 B 4.4 D ₂ 4.1 C 6.4 D 6.3	わずかに外及する、胴部はやや肩かり	胴部外面中位以下ヘラ削り。胴部内 面指ナデ。	
527	盌	A 12. 6 D 4. 4	浅めの器形で、口縁端は外反する。 全体に整った器形である。	外面は部分的にハケ目。	×印のヘラ記号あり
528	高坏	A 19.6 D ₁ 4.9 B 4.1 D ₂ 7.2 C 12.8 D 12.1	(、尤็場はタト仅りる。桝仕部はなく	「大部外面は横ナデ。内面はハケ目の うえを横ナデ。脚部外面上位はヘラ 削りのうえをナデ。中位はハケ目の うえをナデ。下位はナデ。脚部内面 上半はヘラ削り。	褐色。焼成良。 石粒を含む。 ほぼ全面にスス付着。
529	,,	A19.9 D ₁ 6.7 B 4.0 D ₂ 6.7 C14.1 D13.4	丸みのある5不部で、口縁部先端は尖 り気味。脚部下端は大きく横に開く。	「好部の外面、接合部以下はハケ目の うえをナデ。それ以上に内面は横ナ デ。脚部外面はハケ目のうえをナデ 内面はヘラ削りのうえをナデ。	褐色。焼成良。 石粒を含む。

図版番号	種 類	法 显(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備 考
530	高	A 20.7 D ₁ 5.7 B 4.0 D ₂ 7.1 C 14.4	丸みのある坏部。脚部は大きく開く。	外面はナデ。脚部内面上半はヘラ削 り。下半はナデ。	赤褐色。 焼成やや不良。 器面荒れがひどい。
丸山 7 号	坏	D 12. 8			
531	"	A 20.1 D ₁ 5.7 B 4.0 D ₂ 7.3 C 15.0 D 13.0	丸みのあるやや浅い坏部で、脚は大 きく開く。	坏部内面と外面上半は横ナデ。外面 下半はハケ目のうえをナデ。 脚部外 面はヘラ削りのうえをナデ、内面上 半はヘラ削りのうえをナデ、下半は ナデ。	褐色(一部赤褐色) 焼成良。 わずかに砂粒を含む。
181-532	壺	A17.3 B14.5 D ₁ 4.6	口縁部は外傾しながら直延する。 胴部欠失。	口縁部内外面はハケ目のうえをナデ。	褐色。 焼成良。 砂粒を多く含む。
丸山7号			24 1 0 17 40 1 4 44 0 44 A 40 - 1 15 1	打机机工工的八人口,人口之处!	48.42 体心点
533	高	A 18. 6 D ₁ 4. 6 B 3. 6 D ₂ 8. 0 C 13. 7	浅めの坏部は中位の接合部でわずかに屈曲し、先端はわずかに外反する。 脚柱部は比較的細く、下端部は大き く開く。	目のうえをナデ。上半は横ナデ。脚 柱部外面はヘラ削りのうえをナデ。	褐色、焼成良。 小石粒を含む。
丸山 7 号	^{‡不} 	D 12. 6		内面はヘラ削り。	
534	,	A18.6 D ₁ 6.0 B 3.5 D ₂ 9.4 C13.7 D15.4	丸みをおびた坏部の先端は尖り気味にまとまる。 脚部は坏部との接合面から除々に開く。	坏部内面は横ナデ。外面上半は横ナデ。接合部付近はハケ目のうえをナデ。脚部外面はナデ。内面上半はヘラ削り。下半はナデ。	淡赤褐色。 焼成やや不良。
535	,	A18.5 D ₁ 6.4 B 4.1 D ₂ 10.1 C15.9 D16.5	丸みをおびた坏部は、中位の接合面でわずかに屈曲する。脚柱部を有せず、坏部との接合面が除々に開く。	坏部外面は横ナデ。内面も横ナデが 主体であるが、上縁近くはハケ目の うらをナデ、脚部外面上半はナデ。 下半はハケ目のうえをナデ。内面は ヘラ削り。	黄褐色、焼成良。 小石粒を含む。 坏部内面と脚部内外 面に丹彩の痕跡。
536	壺	A14.7 B10.9 D 5.0	口縁部のみの破片で、内弯したのち 反転して先端は外反する。	内外面とも横ナデ。	黄褐色、焼成やや不 良。 小石粒を含む。 内外面に丹彩の痕跡。
537	高、坏	A 23. 2 D ₁ 6. 5 B 4. 4 D ₂ 8. 0 C 15. 0 D 14. 5	口縁部と脚下端部は外反する。 「大部径は大である。	环部内外面と脚部外面は横ナデ。脚部内面上半はヘラ削り。下半は横ナデ。	赤褐色。
丸山 7 号	,	A20.0 D ₁ 6.0 B 3.8 D ₂ 7.0 C15.0	が部は大きく開き、やや浅い。脚柱 部はなく、大きく開く脚部。	「坏部外面上半はハケ目のうえを横ナ デ。下半は指調整のあとナデ。内面 は横ナデ。底部に指圧痕あり。脚部 外面は横ナデ。内面上半はヘラ削り。	淡褐色、焼成良。 小石粒を含む。 脚部内面に丹彩の痕 跡。
丸山 7 号		D13.0			
539	"	A 20. 5 D ₁ 6. 8 B 4. 6 D ₂ 8. 6 C 13. 8 D 15. 4	「坏部は横にのびたのち、屈曲して外傾し、口縁端はわずかに外反する。 脚柱部を有せず、直線的に開く脚部。	J不部は横ナデが主体であるが、外面 下半は横方向のハケ目のあと横ナデ。 脚部外面上半はヘラ削り。下半はハ ケ目のうえを横ナデ。内面はヘラ削 りのあとナデ。	黒褐色、焼成良。 石粒を含む。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
182-540	高	A22.1 D ₁ 6.6 B 3.9 D ₂ 7.7	坏部は横にのびたのち強く屈曲して 外傾し、口縁端は外反する。脚部は 中位で屈曲し、先端は尖る。	坏部と脚部の外面はハケ目のうえを 横ナデ。坏部内面は横ナデ。脚部内 面はヘラ削り。	淡黄褐色。 焼成やや不良。 胎土良。
丸山7号	坏	C 12. 8 D 14. 3			
541	*	A 18. 2 D 6. 0	「不部のみの破片で、丸みをもつ。 □縁端部は外反する。	内外面とも横ナデ。器壁はうすい。	赤褐色。焼成良。 小石粒を含む。
542	*	A18.7 D 6.6	同上	外面上半は部分的にハケ目を施し。 そのあとで横ナデ。内面は横ナデ。 底部にヘラ削りあり。	褐色。焼成良。 小石粒を含む。
543	,	A18.0 B 2.7? D 5.6	坏部のみの破片。中位の接合部でわずかに屈曲する。	内外面はハケ目のうえをナデが主体 であるが、内面底部にはヘラ削りが みられる。	褐色。焼成良。 砂粒を含む。 内外面に丹彩の痕跡 あり。
544	,	A18.5 D 4.0?	坏部上半の破片。中位以下は丸みを 有し、口縁端は外反する。	外面は横ナデ。内面はヘラ削りのあ と横ナデ。器壁はきわめてうすい。	赤褐色。焼成良。小石粒を含む。
545	"	A 18. 5 D 5. 4	中位の接合部以下は、丸みをもち、 先端はわずかに外反する。	外面上半はハケ目のうえを横ナデ。 下半は横ナデ。内面は部分的にハケ 目を施し、そのうえを横ナデ。	淡褐色。焼成やや不 良。 小石粒を含む。
546	"	A 13. 3 B 3. 2 D 9. 0 D ₁ 4. 1	小型の高坏で、脚下部を欠失。坏部 は浅く、口縁端は外反する。	坏部内外面は横ナデ。脚柱部外面は ヘラ削りのあと横ナデ。内面はヘラ 削り。	淡赤褐色。焼成良。 砂粒を多く含む。
547	,	A 20. 4 B 4. 4 D 7. 0	脚部欠失。坏部中位の接合部でわず かに屈曲し、口縁端は外反し尖る。	外面上半はハケ目のあと横ナデ。下 半はハケ目。部分的にナデ。内面は ヘラ削りのあとナデ。	
548	,	A18.2 B 3.5 D 6.4	脚部欠失。丸みをもつ ¹ 不部で先端は 丸みをもつ。	内外面とも横ナデが主体、底部内面 はヘラ削りのうえ横ナデ。	黄褐色。焼成不良。 小石粒を含む。 内外面に丹彩の痕跡。
549	,	B 4.3 D 7.0	坏部、脚下部欠失。脚柱部はわずか にふくらみ、大きく屈曲して外へ開 く。	脚柱部外面はヘラ削りのあとナデ。 内面はヘラ削り。	褐色。焼成良。 砂粒を多く含む。
丸山 7 号					

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
550	高	C14.4 D 8.5	环部欠失。脚柱部はわずかに含らみ 下端部は大きく開く。	外面はヘラ削りのうらを横ナデ。内面はヘラ削り。上下二段にわたる。 下端部内外面は横ナデ。	黄褐色。焼成良。 砂粒、黒雲母を含む。
丸山 7 号	坏				
183-551	,	B 3.5 C12.2 D 8.2	J不部欠失。脚柱部は細く、下端部は 大きく聞く。	脚柱部外面は、ヘラ削りのうえをナデ。内面上半は未調整のため器壁は あつい。内面下半はへラ削り。下端 部内外面はハケ目のうらをナデ。	暗褐色。焼成良。 砂粒を多く含む。 器面荒れがひどい。
丸山7号					
552	"	B 3.6 C13.0 D 8.3	が部欠失。脚柱部は下方が開き、大きく屈曲して下端部にいたる。	脚柱部外面はヘラ削りのうえをナデ。 内面はヘラ削りであるが上半は未調 整。下端部内外面は横ナデ。	淡赤褐色。焼成良。 砂粒、黒雲母を含む。
丸山 7 号	"	C11.6 D 8.0	が部欠失。脚柱部は除々に開き、大きく屈曲して下端部にいたる。	脚柱部外面はヘラ削りの上に部分的 にハケ目を施し、そのあとで横ナデ。 下端部は内外面とも横ナデ。脚柱部 内面はヘラ削り。	
丸山7号					
554	,	B 3.5 D 8.5	I 不部上半と脚下部を欠失。	坏部内外面はハケ日のうえをナデ。 脚部は内外面ともヘラ削り。	淡赤褐色。焼成不良。 小石粒を含む。 器面荒れがひどい。
丸山7号					
555	*	B 3.7 C15.5 D10.3 D ₂ 9.0	坏部欠失。脚部は大きく開く。	脚部外面上半はヘラ削りのうえをナデ。下半はヘラ削りのうえをハケ日。 あとナデ。内面はヘラ削り。下端は 横ナデ。	褐色。焼成良。 石粒を多く含む。
					欠 番
556					
丸山 7 号					
557	"	B 4.2 C13.0 D 9.5	坏部の接合面以上を欠失。 脚部は大きく開く。	「不部はナデ。脚部外面上半はヘラ削 りのあとハケ目。そのうえをナデ。 内面上半はヘラ削り。下半は横ナデ。	淡褐色。焼成良好。 石粒、黒雲母を含む。
丸山7号					
558	"	B 3.4 C14.4 D 8.6	坏部欠失。脚部は大きく開き、先端 は外反する。	脚部外面はヘラ削りのうえをナデ。 下端は横ナデ。内面はヘラ削り。下 端は横ナデ。	淡褐色。焼成良。 多量に石粒を含む。 内外面に丹彩の痕跡。
丸山7号			+7点(たん 明日が)ユニモノ BB ノ	RHI AU III AG 1, MA LA A SAUDA A A A A SAUDA A A A A SAUDA A A A A A A A A A A A A A A A A A A	48.42 Mar. 15.45
559	,	B 3.7 C12.8 D 9.5	坏部欠失。脚部は大きく開く。	脚部外面上半はヘラ削りのあとヘラ みがき。下半はヘラ削りのあと横ナ デ。内面上半はヘラ削り。下端はハ ケ目のあと、ヘラみがき。	褐色。焼成良。 石粒を含む。 内外に丹彩の痕跡。
丸山7号		:			

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
560	高	B 3.9 C14.0	坏部欠失。脚部は大きく開く。	脚部外面上半はヘラ削りのうえをハケ目。下端は横ナデ。内面はヘラ削りのうえをナデ。下半には部分的に	淡赤褐色。焼成良。 石粒を含む。
丸山 7 号	坏	D 8.6		ハケ目。	
		A10.0	口縁下で一度くびれ、先端は外反す る。底部欠失。	外面はハケ目のうえをナデ。内面は ナデ。	灰褐色。 焼战不良。
184-561	盌				小石粒を含む。
丸山7号					
562	壺	A13.4 D ₁ 4.0 B11.9 D ₂ 23.3 C24.4 D27.3	口縁は内弯したのち、直っすぐ立ち あがり、先端はわずかに外反気味。 胴部はやや肩がはり、球形。	口縁内外面はハケ目のうえをナデ。 胴部外面は全面ハケ目。内面はヘラ 削り。器壁はうすい。	褐色。焼成良。 小石粒を含む。 焼成後の底部穿孔。 線刻画(家屋)あり。
563	*	A14.9 D ₁ 4.1 B10.7 D ₂ 22.7 C22.4 D26.8	□縁はわずかに内弯したのち外反する。胴部は球形。底部穿孔。	口縁内外面はハケ目のうえをナデ。 胴部外面は全面にハケ目。内面はヘ ラ削り。	褐色。焼成良。 小石粒を含む。 焼成後の底部穿孔。 胴部中位にヘラ文様 (記号)
185—564	台付金	A15.0 D ₁ 7.9 B 4.2 D ₂ 2.6 C 9.6	口縁部がわずかに外反する。盌に、 短い脚台がついたもの。	口縁部は横ナデ、脚台は全面へラみがき。接合部分は接合後へラ削りのあとヘラみがき、内面はヘラ磨き。	褐色。焼成良好。
丸山18号		D10.5			10 A 14 15 A 17
565	盌	A14.4 D 6.5	口縁部がわずかに内弯し、先端はとがる。	口縁部は横ナデ。以下へラ削り。 内面はヘラ削りの後、横ナデ。	褐色。焼成良好。
丸山11号					
566	"	A15. 6	口唇端は平、下部は平になるらしい 破片。	同上	赤褐色。焼成良好。
丸山11号					
***		A 13. 7	口唇端は平、破片。	口縁部はナデ。以下へラ削り。	赤褐色。焼成良好。
567	,				
丸山11号					
568	壺	A19. 9 B14. 8	く字形をなす口縁部は、やや肥厚い、 複合口縁の痕跡をのこす。口唇部は 端整、胴部下半を欠失。	口唇部は横ナデ。口縁部は荒いクシ 目、そののち横ナデ、胴部もクシ目。 頸部の接合部は横ナデ、内面は、口 縁部横ナデ。体部はヘラ削り。 表面 に丹塗りの痕跡がみられる。	淡黄褐色。 焼成良好。
569	壺	A19.2 B 3.9 C16.1	口唇部を欠する。複合口縁の端正な 壺、球形の胴部をもつ。	全面にクシ目がみられるが、頸部は 横ナデより消す。内面はクシ目のの ち横ナデ。ヘラ削り。口縁の接合面 には、ヘラによる刻目がみられる。	褐色。 焼成良好。
丸山12号		D19.1			

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
570	高	A22.2 D ₁ 6.9 B 4.2 D ₂ 8.4 C16.5 D15.3	坏部は脚部に対して大きく深い。 坏下半は水平でさらに上半部は強く 屈曲して口縁にいたる。	569と類似。	淡褐色 焼成やや不良
丸山12号	坏	D15.3			
186-571	盤	A15.9 D 4.5	深く底部がやや尖り気味。	口縁部と内面はヨコナデ。 他はハケ目のあとヨコナデ。	淡褐色 焼成良好。
丸山12号					
186-572	壺	A 8.7 D ₁ B 6.6 D ₂ C 9.6 D 9.7	胴部径に対し口縁径が大。	口縁部内外面はヨコナデ。体部外面 はハケ目のあとヨコナデ。 内面はユビによるナデツケ。	黄褐色。 焼成良好。
573 丸山13号	,	A ? D ₁ ? B11.7 D ₂ 30.0 C30.3 D ?	口縁部に段を有し、端部は見失。 胴部球形。	口縁部から顕部にかけてはハケ目の あとヨコナデ以下は全面ハケ目。 内面はヘラケズリ。	黄褐色 焼成やや不良
187 -574 丸山13号	"	A14.4 D ₁ 5.4 B 8.9 D ₂ 12.3 C18.0 D17.7	口縁部は内弯気味に立ちあがる。 肩部がやや張り、尖り気味の丸底	体部外面は全面ハケ目のあとヨコナ デ。内面はヘラケズリ。	赤褐色焼成良好。
575 丸山13号	4.	A 9.3 D ₁ 4.8 B 6.5 D ₂ 10.5 C14.7 D15.3	口縁部直立し、端部で短く外弯する。 体部は扁平な球形。	同 上 肩部にハケ目が残る。	赤褐色。
576	盌	A12.2 D 4.7	半球状をなす盌、底部はわずかに平 な部分がある。	表面の一部にクシメがあるが、他は ナデ、内面は横ナデ。 器体内面は荒れている。	褐色。 焼成不良。
577	,	A13.1 D 5.4	Ⅱ縁部がわずかに外反する。	口縁部は横ナデ、以下へラ削り。内 面横ナデ。底には指痕。わずかに丹 塗りのあとがみとめられる。	明褐色。 焼成良好。
丸山13号					
578	"	A14. 8 D 5. 7	口端部は平になる。	口縁部はクシメのあと横ナデ。以下 ヘラ削り、内面横ナデ、わずかに丹 塗りのあとがみられる。	淡褐色。 焼成良好。
丸山13号					
579	,	不明	口唇端は尖り気味にまとまる。	口縁部は横ナデ、体部外面にはヘラ 削り。	淡褐色。 焼成良好。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備 考
580	高坏	A19.9 D ₁ 6.5 B 3.5 D ₂ 7.0 C14.7 D13.5	わずかに外反する坏部と川びろの脚 部をもつ。脚部先端は小さく突起す る。	坏部は内外面クシメ、脚部は上半は ヘラ削り、以下クシメ。 脚部先端は横ナデ。坏と脚部の接合 部は横ナデ。	赤褐色。 焼成良好。
581 丸山1 3 号	"	A 20. 0 D ₁ 14. 7 B 4.8 D ₂ 7. 4 C 14. 9 D 22. 3	坏上半部はわずかに外反する巾びろ の脚部で、脚裾部先端はややそる。	脚部はクシメのあと横ナデ。脚部は 横ナデ、指痕あり、4不内面は横ナデ。 脚内面はヘラ削り。	赤褐色。 焼成良好。
189-582	盌	A14.2 D 5.0	半球状をなす盌。口唇部は突起する。	口縁部は横ナデ。以下へラ削り、器 面は荒れている。内面は横ナデ。	褐 色。 焼成良好。
583	,	A 19.5 D ₁ 5.5 B 4.5 D ₂ 7.8 C 14.5 D 13.3	坏上半はやや外反する。坏下半は平で巾びろの脚部につづく、坏部は水平ではない。	坏部には弱いクシメがある。14下半はヨコナデ。脚下半もヨコナデ、内面は坏部は弱いクシメ、脚内面へラ削り。	赤褐色。 焼成良好。
584	高	A19.6 D ₁ 7.6 B 3.6 D ₂ 6.6 C13.3 D14.2	坏上半は、不自然に外反する。 脚部は大きく開く。	坏上半はヨコナデ、下半はクシメの あとヨコナデ、脚部はクシメ、坏内 面はヨコナデ、脚部はヘラ削り。	赤褐色。 焼成は良好である。 が風化がはげしくも ろい。
585	*	A19.7 D ₁ 6.2 B 3.9 D ₂ 7.6 C14.7 D13.8	坏上半はまっすぐのびる下半は平。 脚部は大きく開く。	水上半はヨコナデ、下半はヨコナデ 脚上半はヘラミガキ、裾はクシメ内 面なクシメ、脚はヘラ削り、裾部は クシメ。	淡赤褐色。 焼成良好。
190 191 丸山13号	魙	A D ₁ B D ₂ C D	口縁部は短く反弯し、肩部は強く 援 る。胴部最大径は中位より上にある。		暗褐色。 焼成良好。 胴部にススの付者。
587 丸山 23 号	,	A 8.1 D ₁ 1.7 B 6.5 D ₂ 12.0 C12.7 D13.7	く字形の小さな口縁部をもつ。胴部 が張る。口縁部はわずかに肥厚する。	口縁部はヨコナデ。以下クシメ。 内面、口縁部はヨコナデ、以下ヘラ 削り。	黄褐色。焼成良好。 口縁部に1部ススの 付着。内部にススの 付着あり。
588	"	A 19. 5 D ₁ 3. 7 B 16. 1 D ₂ 27. 0 C 29. 3 D 30. 7	く字形の口縁部と球形の胴をもつ、 口軽部はわずかに突出、全体に厚つ ぽっぽったい。	口縁部ヨコナデ、以下荒いクシメ、 内面は口縁部ヨコナデ、内面へラ削 り。	黄褐色。胴上半と内 値の下半にススの付 着をみる。
丸山23号 589 ※	坏身	A 10.1 A'12.9 D 6.0	小型の4不。たち上りはやや強く、口唇端部はくぼむ。	底部外面はヘラケズリ。 他はヨコナデにより仕上げる。	明灰色。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
590	盌	A13.3 D 5.9	直立する口縁部をもつ盌。	直立部は外面ヨコナデ、内面へラミガキ、外面下半はヘラ削り。内面は横ナデ、ナデ。	淡褐色。 精製された粘土を使 用。 焼成良好。
591	,	A 13. 1 D 6. 1	直立し、わずかに外反するII縁部を もつ盌。	口縁部ヨコナデ、以下へラ削り。内 面ヨコナデ、一部に弱いクシ目あり。	淡褐色。 焼成不良。
丸山13号			1.43 by 181 18 1 1.4 1 = 1.4 7 7 by	Harris and the control of the contro	10 A
592	台付盌	A 11. 2 D ₁ 5. 9 B 4. 4 D ₂ 4. 1 C 9. 0 D 10. 0	11縁部がわずかに外反する。深い盌と、巾びろの脚部をもつ。	外面はヘラみがき、盌内面はヘラミガキ。脚内面は指痕。	褐色。 焼成良好。
593	高	A21.0 D ₁ 9.8 B 9.7 D ₂ 6.5 C14.3 D16.3	師装性の豊かな高坏で、坏上半、下 半の接合部は突起しする。脚部は坏 部に比して小さい。	外面へラ研磨。内面はヘラ研磨、脚 内部はヘラ削り。裾はヨコナデ。	赤褐色。焼成良好。 脚部内面にのみ丹塗 りの痕があるが器体 全面丹塗りであった らしい。
丸山18号 192-594 ※	台付長頸壺	A25.0 D ₁ 18.0 B12.0 D ₂ 26.0 C18.8 D44.0	脚部を欠失する。肩部にツバ状の突帯をもつ、この部分に動物、人物などの飾装をもっていたらしく 7~8ヶ所の剝離痕がある。	全体に端正なつくり、口縁部に2条 一組の沈線が3本めぐり、この間は 備がき文が施される。 肩部に一条尖帯がめぐり、以下タタ キによる整形のあと、ナデ、内面に は青海波文良く残る。	暗灰色。 肩部から胴部の一部 に自然釉付着。 焼成良好。
193-595	壺	A13.2 D ₁ 4.4 B11.5 D ₂ 21.3 C22.3 D25.7	直立気味のわずかに肥厚する口縁部 と球形の胴をもつ。焼成後の穿孔を もつ。	口縁部はクシメのあとヨコナデ。以下クシメ、口縁部内面はクシメのあとヨコナデ、内面はヘラケズリ。	黄褐色。 焼成やや良好。
596	盌	A14.1 D 6.9	境形の体部で、口縁端部で肥厚し短 くつまみあげられる。	体部外面はハケ目のあとヨコナデ。 内面ヘラケズリ。	暗褐色。 焼成良好。
丸山20号 597 ※	高坏蓋	A12.1 D 5.2	大きなつまみをもつ。全体に端正な つくり。口軽端はにぶい沈線をもつ。	天井部外面はヘラケズリ。 他は全面ヨコナデ。	淡灰色。 598とセットをなす。
丸山20号 598 ※	高坏	A10.0 D 9.7 A'12.6 D ₁ 5.0 B 5.7 D ₂ 4.7 C 9.8	短い脚部に三方の三角透しをもつ。 蓋受け部の口唇端にはにぶい沈線を もつ。 597とセットになる。	坏部底部外面はヘラケズリ。脚部には三方から透しが施される。全体にやや粗いつくりである。	淡灰色。 焼成不良。
丸山20号 599 ※	*	A10.6 D 9.5 A'13.0 D ₁ 5.2 B 5.6 D ₂ 4.3 C 9.3	短い脚部に三方の三角透しをもつ。 全体につくりはにぶい。	同上	淡灰色。 焼成不良。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
600	養 (壺)	A 17.5 B 12.6	く字形の口縁部。胴部欠失。	外面及び口縁部内面はハケ目の上を ナデ。胴部内面へラ削り。	褐色。 焼成良。 小石粒を含む。
лщ20 Э			物人口结束 化物的压制压力 四	口结如中从不止。一下,明如中不	相点
601	壺	A 18. 5 B 14. 2	複合口縁で、先端部は外反する。胴部欠失。 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	口縁部内外面はヨコナデ。胴部内面 はヘラ削り。	褐色。 焼成やや不良。 小石粒を含む。
丸山20号			·		_
194 195 丸山20号	"	A 16.5 D ₁ 4.5 B 12.4 D ₂ 21.5 C 23.2 D 26.0	く字形のわずかに肥厚する口縁部と 球形の胴をもつ。底部は欠失。	口縁部はヨコナデ。わずかにクシ目 が残る。胴部はクシ目。口縁部内面 はヨコナデ。胴部はヘラ削り。	黄褐色。 焼成良好。
603 丸山20号	,	A18.3 D ₁ 5.4 B 3.9 D ₂ 7.8 C12.6 D13.2	坏部は上下半との境が明瞭で、この接合は下方へ尖出している。脚部は柱状部と裾部の境が不明瞭でラッパ状に広がり、裾部でさらに拡がる。	坏部は内外面ともハケ目のあとヨコナデ。脚部外面と裾部内面はヨコナデ。柱状部はヘラ削り。	赤褐色。 焼成良好。
604	高	A 20. 4 D ₁ 5. 4 B 4.1 D ₂ 9. 0 C 15. 6 D 14. 4	坏上半は外反し下半は平。脚部は幅 広い。	脚内面はヘラ削り。その他はナデ。 环・脚の接合部に顕著に指痕が残る。	黄褐色。 焼成良好。
605	,	A ₁ 7.4 D ₁ 5.7 B 3.5 D ₂ 6.8 C ₁ 5.1 D ₁ 2.5	坏部は中ほどで境合、境は明瞭。脚はラッパ状に広がり、裾部にいたってさらに拡がる。	坏部の内外面ともハケ目のあとヨコナデ。脚部は外面はハケ目、部分的にヨコナデの痕跡をみる。裾部は内外面ともヨコナデ、以上はヘラ削り。	赤褐色。 焼成良好
606	高	A 17. 2 D ₁ 4. 3 B 3. 9 D ₂ 9. 2 C 13. 8 D 13. 5	坏上端は外反し、幅広い脚部をもつ。 脚裾は上起する。	坏部はヨコナデ。脚部は表面ハケ目 内面へラ削り。	赤褐色。 焼成良好。
607 丸山20号	"	A 20.1 D ₁ 7.2 B 4.2 D ₂ 8.8 C 13.9 D 16.0	半球状の坏部に大型の脚部がつく。	坏上半はクシ目、下半はナデ。脚部はナデ。坏内面はヨコナデ、クシ目がわずかに残る。脚内面はヘラ削り。 裾はヨコナデ。	焼成良好。
196-608	"	A 21.0 D ₁ 8.3 B 3.9 D ₂ 9.0 C 16.6 D 17.3	深い坏部と開いた脚をもつ。坏上半はクシ目のあとヨコナデ。それ以下はクシ目。脚部はヘラ削りのあとナデ。口縁部ま、脚部を欠失。	坏上半はクシ目のあとヨコナデ。それ以下はクシ目。脚部はヘラ削りのあとナデ。坏内面はヨコナデ。脚はヘラ削り。	淡褐色。 焼成にむらある。
609 丸山20 号	,	A 22.4 D ₁ 7.1 B 4.5 D ₂ 9.4 C 15.0 D 16.5	坏の下半は平で、脚筒部と裾部には 区分なし。	坏はクシ目ののちョコナデ。脚部はヘラ削り。坏内面クシ目ののちョコナデ。接合部には指痕あり。	赤褐色。 焼成良好。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態状の特色	技法上の特色	備考
610 丸山2 0号	高坏	A 20. 6 D ₁ 7. 8 B 4. 5 D ₂ 9. 0 C 15. 0 D 16. 8	坏上半は途中でゆるやかに外反する。 幅ひろの脚部をもつ。	坏はハケ目のあとヨコナデ。脚部は タテ方向のクシ目。坏内面はヨコ方 向のクシメ。 脚内面はヘラケズリ。	淡赤褐色。 焼成良好。
197-611 丸山25号	变	A 8.4 D ₁ 2.0 B 7.5 D ₂ 12.7 C 13.1 D 14.7	直立して外反する。口縁部と球形の 胴をもつ。	口縁部はヨコナデ。胴部はクシ目の あとナデ。口縁部内面はヨコナデ。 胴部は接合部はヘラ削り、以下はヘ ラ削りののちナデて平滑にする。	焼成良好。
612	壶	A 9.5 D ₁ 4.4 B 7.2 C 13.8 D 13.0?	直立気味の口縁と扁平な胴部をもつ 壺。	口縁部はクシ目のあとヨコナデ。胴部はナデ。口縁部内面はヨコナデ。 胴部には粘土の凸凹が強く残っている。	暗赤褐色。 焼成やや良好。
613	盌	A16.2 D 5.0?	底部を欠失する。	上半はヨコナデ、以下へラ削り。内面上はヨコナデ、以下ナデ。	赤褐色。 焼成良好。
614	高坏	A 27.8 B 7.8 D 9.2?	脚部を欠失する。大型の高坏。半球 状の坏部をもつ。	上半はクシ目ののちへラ磨き、以下 はヘラ削りののちへラ磨き。内面は ヘラ磨き。	
198-615	变	A 16.8 B 12.6 C 26.3 D 17.0?	口縁部から頸部方向よりにゆるい段を有し、さらに短く拡がる。端部で角ばる。胴部下半は欠失しているが球形の胴部の最大径は中位にある。口縁と胴部には炭化物が厚く付着する。	口縁は内外面ともヨコナデ。肩部より下はクシ目。頸は強くナデッケされている。	黄褐色。 焼成良好。
616	鉢	A 15.4 D ₁ 2.3 B 14.0? C 15.5 D ₂ 9.2? D 11.5	器形の変形がはげしい。わずかに外 反する短い口縁部をもつ。底部を欠 失する。	口縁部ヨコナデ。胴部クシ目、一部をナデ消している。内面口縁部ヨコナデ、以下へラ削り。	黄褐色。 焼成やや良好。
617 丸山 28 号	盌	A 12. 7 D 5. 5	半球状をなす。破片による復原。	上半クシ目のあとナデ、以下へラ削り。内面上半ヨコナデ、下はナデ。	淡褐色。 焼成良好。
618 丸山 28 号	"	A14.6	丸味をもつ。底部欠失。	外面上端はヨコナデ。以下へラ削り。 内面ヨコナデ。	赤褐色。 焼成良。 砂粒を含む。
619 丸山28号	,	A 14.8 D 5.7	口縁部で急に内湾する。	口縁部ヨコナデ。以下へラ磨き。内面ヨコナデ、以下ナデ。	淡褐色。 焼成良好。

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
. 620	盌	A 15. 5 D 6. 0	半球状をなす。底部はやや平状。	外面ヨコナデ。内面上半ヨコナデ、 以下ナデ。	赤褐色。 焼成良好。
丸山28号					<u> </u>
丸山28号	高	C 13. 2 D 12. 3	中央部に2本の沈線をもつ高坏。坏部を欠失。脚先端部は鈍い。	外面ヨコナデ。脚端部はナデ。内面 ヨコナデ。	白灰色。 焼成不良。
621 **	坏				
 丸山28号			口縁部と底部のみから復元。	口縁部外面はクシがき文が施され他	暗灰色。
199-622	皮袋型土器	口縁径10.5 頸部径 6.6 胴巾11.0+α	肩部に一条、胴部の片面に十字に交 叉する凸帯が粘り付けられる。 胴部に○型の竹管文が施される。	はヨコナデ。胴部は粘土を円管形に輪づみ整形後、一方を閉じて底部とし、他方をしぼって、これに口縁部	焼成良好。
*	靐	胴厚23.4		と接合している。	
丸山32무	坏	A 12. 8	全体に端正な作り。頂部は平。	天井部はヘラケズリ。以下はヨコナ デ。	淡灰色 焼成やや良好。
200-623		D 4.9			
*	蓋				
丸山32号		A 12. 1 D 4. 8	上部と下縁部には沈線があり、下唇 部には沈線をもつ。	同上	淡灰色。 焼成やや良好。
624	"	<i>D</i> 4.0			
*			 稜部に沈線をもつ。口唇端は鈍い。	同 上	白灰色。
丸山32号 625	"	A 12.9 D 3.7	夜日 に (ル赤で ひ ノ。 口 台・加は がじょ。	H T	院成不良。 焼成不良。
*					
丸山32号		A 12. 6 D 4. 0	稜部に2本の沈線をもつ。口唇端は 鈍い。	上半へ ラ削り。下半ミズビキ。内面 ヨコナデ。	灰色。 焼成良好。
626	"	D 4.0			
*			ひずみがあり、全体に丸味をもつ。	天井部外面へラ削り。	正 各
丸山32号 627	,,	A 13. 5 D 4. 0	ひすみかあり、至体に丸味をもつ。	大井部外面へフ削り。	灰色。 焼成良。
*					
※ 丸山32号		414.0	 平端気味の蓋。下端はややひらく。	頂点へラ削り。	赤褐色。
628	,	A14.3 D 4.1			
*					
丸山32号		A14.5	検部に1本の沈線をもつ。頂部はや や凹。	同上	灰色。 焼成良好。
629	*	D 4.0			
*					

図版番号	種 類	法 量(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
丸山32号 630	坏	A 11. 2 D 4. 6	たちあがりは高く直立する。底は平。	たちあがりはヨコナデ、底部外面は ヘラケズリ。	淡灰色 焼成良好。
*	身				
丸山32号		A 12. 2	たちあがりは高く直立し、端部に沈 線をもつ。	同上	淡灰色。 焼成良好。
631	"	A'14.5 D 5.5			
*					
丸山32号		A 11.0	たちあがりは高いが、先端は丸い。 受部は小さい。	同 上	濃灰色。 焼成良好。
632	"	D 4.8			
*					
丸山32号 633	,,	A 11.5 A'13.5 D 4.8	たちあがりは内傾するが、先端は鋭い。受部は小さく鈍いが身は深い。	同 .上 ·	濃灰色。 焼成良好。
*					
丸山32号		A 10 0	たちあがりは低く、受部も鈍く、浅	 坏部下半はヘラ削り。他はヨコナデ。	
634	,	A 12. 2 A'14. 2 D 4. 0	l, ι _ο		焼成やや良好。
*					
丸山32号		A11.0	たちあがりは高く直立するが、受部 は小さい。	同 上	淡灰色。 焼成良好。
635	"	D 4.5			
*					
丸山32号		A 9.8	たちあがりは高く、端部は鋭い。小 型の坏 。	同 上	淡灰色。 焼成良好。
636	"	A'11. 8 D 4. 2	٠.		
*			,		
丸山32号		A10. 2	全体に鈍い。たちあがりは直立する が厚味をもつ。	同 上	淡灰色。 焼成良好。
637	"	A'11.9 D 4.2			
*					
丸山32号		A 14. 6	たちあがりは内傾する。受部は小さ い。大型の坏。	同 上	濃灰色。 焼成良好。
638	,	A'16.5 D 5.3			
*					
丸山32号		A 12. 3	深味のある器形で、たちあがりはわ ずかに内傾する。	底部外面へラ削り。	淡灰色。 焼成良。
639	"	A'14. 1 D 5. 6			
*					

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
丸山32号 640	坏	A 12. 0 D 5. 4	たちあがりは内傾する。受部もやや たちあがる。深い体部をもつ。	同上	淡赤灰色。 焼成良好。
*	身				
丸山32号 641	高坏	A 14.8 D 5.2	径の大きい扁平なつまみを有し、天 井部と口唇部との境に1条の沈線を もつ。口縁端は丸くまとまる。	天井部はヘラケズリ、他はヨコナデ 仕上げ。	淡灰色。 焼成やや良好。
*	蓋				
丸山32号		A 15. 0	扁平なボタン状つまみをもつ大型の	同上	淡灰色。
642	"	D 5.5	壺。天井部と下縁部との境に1条の 沈線をもつ。		焼成やや良好。
※ 丸山32号		4.10.0	ボタン状のつまみをもつ大型の蓋。	同上。	淡灰色。
643	"	A 16. 3 D 5. 6	天井部から下縁部へそのまま続く下 縁部の接に1条の沈線をもつ。また 口唇部内面にごく浅い沈線をもつ。	なお天井部のヘラケズリは荒く、クシ	
*					
丸山32号	高	A 14.6 D 18.6 A'15.9 D ₁ 4.8	小さめの坏に長く大きな脚がつく。 脚部には2段に3方に長方形透しを 有する。	坏部、底部外面ヘラ削り。他はヨコ ナデ。	淡灰色。 胎土良。 焼成やや不良。
*	坏	B 3.8 D₁13.8 C 14.8			
201 202 -645	壺	A 18.8 D ₁ 8.0 B 9.0 D ₂ 16.2 C 19.1 D 24.2	く字形の長い口縁部をもち、先端は 肥厚し外反する。胴部は球状をなす。 焼成後の穿孔をもつ。	口縁部から胴部中位までの外面は荒いいクシ目、頸部は指によるナデつけ。 脚部内面は下一上方向のヘラケズリ。	焼成良好。
丸尾 5 号		D 24. 2	古 之 与 叶 の 梅 公 口 緑 と ま よ と 一 妹 公 切	口径がフュトン 言がは如いいた口	梅代白47
646	"	A 14.6 D ₁ 5.0 B11.0 D ₂ 21.1 C 22.0 D 26.1	直立気味の複合口縁をもち、接合部 は稜をなす。球形の胴部をもつ。焼 成後の穿孔がある。	口縁部ヨコナデ。肩部は細いハケ目。 下半にはハケ目残らない。口縁部内 縁はヨコナデ。体部はヘラ削り。	次tn以 尺 好
丸尾 5 号		2 20.1	複合口縁をもつ。やや長目の胴をも	口縁部と胴部上半はヨコナデ、以下	淡褐色。
647	,,	A 15. 2 D ₁ 5. 0 B 11. 1 D ₂ 22. 5 C 22. 3		クシ目。口縁部内面はヨコナデ、以下へラ削り。	
丸尾5号		D 27.5			
648 丸尾 5 号	小型丸底壺	A 9.0 D ₁ 3.8 B 5.5 D ₂ 6.7 C 9.9 D 10.5	わずかに肥厚する口縁をもち、やや 扁平な胴をもつ。口唇端は丸味をお びる。	口縁部はクシ目のあとヨコナデ。胴 部上半はヨコナデ、以下はクシ目の あとをナデる。口縁部内面はヨコナ デ。体部は指により圧する。底部は 未調整のまま残る。	明褐色。 内外全面に丹塗りの あとあり。
		A 6.5 D ₁ 2.2 B 5.0 D ₂ 5.9	やや内弯気味の口縁部と球形の胴を もつ。焼成後の穿孔をもつ。	口縁部はクシ目の上をヨコナデ、以 下クシ目。内面ヨコナデ。胴部内面 ヘラ削り。	明褐色。 焼成不明。 外面朱塗り。
649	"	C 7.8		1	1

図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技 法 上 の 特 色	備考
203 204 九尾 5 号	壺	A 15. 8 D ₁ 5. 3 B 11. 2 D ₂ 22. 4 C 23. 8 D 27. 7	口縁は外反したのち、外傾気味に直延し、先端はわずかに肥厚する。胴部は球形。胴部最大径はほぼ中位にある。	口縁部内外面はハケ目のうえをナデ。 胴部外面の上半は密なハケ目があり 中位以下はまばらである。内面は全 面へラ削り。	
651	,	A 14.2 D ₁ 5.3 B 11.3 D ₂ 23.2 C 22.6 D 28.5	口縁は外反したのち軽く有段をなし 外傾気味に直延する。胴部は卵形を 呈し、最大径は中位より上にある。 尖り気味の丸底。	口縁の内外面及び頸部外面はナデ調整。胴部外面上半は荒いハケ目。内面はヘラ削り。	焼成良。
652	小型丸底壺	A 11.1 D ₁ 3.2 B 8.1 D ₂ 10.9 C 14.4 D 14.1	口縁は内弯しながらたちあがり、先端はわずかに外反する。胴部は押しつぶしたような球形で肩が張る。	日縁内外面はヨコナデ。胴部外面の 上半はハケ目のあとヨコナデ。中位 はハケ目。底部は器面荒れのため不 明。内面は全面へラ削り。	黄褐色。 焼成良。 小石粒を含む。
653	*	A 9.1 D ₁ 3.3 B 7.0 D ₂ 6.0 C10.0 D 9.3	口縁は外傾しながら直延する。胴部 は肩が張り、平底気味の丸底。	外面はヨコナデが主体であるが、底 部にはヘラ削りの痕跡がある。内面 はナデ調整。底部には指圧痕がある。	赤褐色。 焼成良。
205-654	変	A 17. 6 B 13. 6 C 25. 0 D ₁ 4. 4	口縁は外傾しながら直延し、先端は 丸くまとまる。胴部は長卵形を呈す る。底部欠失。	口縁内外面はヨコナデ。頸部から胴部にかけての外面はハケ目のうえを ナデ。胴部は縦方向のハケ目。内面 は斜め方向へのヘラ削り。	暗褐色。 焼成良。 小石粒を含む。 胴部中位以下に黒色 灰化物付着。
655	壺	A 16. 5 B 10. 1 D ₁ 4. 9	口縁はわずかに外反し頸部は細くく びれる。肩部以下欠失。	口縁内外面はヨコナデ。胴部外面は ハケ目。内面はヘラ削り。	褐色。 焼成良。 小石粒を含む。
656	,	A 14.8 B 10.2 C 23.5 D ₁ 5.8	口縁は外反したのち軽く存段をなし 外傾気味に直延する。 先端は外側で 肥厚する。 胴部は球形と思われるが 中位以下を欠失。	口縁内外面はハケ目のうえをナデ。 胴部外面はハケ目。部分的にナデを 併用。内面はヘラ削りで一部ハケ目 がみられる。	褐色。 焼成良。 多量の小石粒を含む。
657	小型丸底壺	A 11. 7 B 8. 9 C 14. 2 D ₁ 3. 3		日縁内外面はハケ日のうえをヨコナデ。頸部から胴部上半にかけてはヨコナデ。中位以下はハケ日。胴部はヘラ削りのため器壁はきわめて薄くなっている。	黄褐色。 焼成やや不良。 小石粒を含む。
658	,	A 10. 4 B 7. 9 C 13. 2 D ₁ 4. 6	口縁は外傾しながら直延する。胴部 は球形を呈する。底部欠失。	口縁内外面はハケ目のうえをヨコナデ。胴部上半はヨコナデ。下半はハケ目のあとヨコナデ。胴部内面はヘラ削りが主体で凹凸が多い。	淡褐色。 焼成良。 わずかに小石粒を含 む。
659	壺	A 14. 4 B 10. 5 D ₁ 4. 9	口縁は外傾しながら直延する。頸部 の屈曲はつよく、胴部の肩部以下は 欠失。	日縁外面はヨコナデ。内面はハケ目 のうえをヨコナデ。胴部外面はハケ 目。内面は横方向のヘラ削り。	黄褐色。 焼成やや不良 小石粒を含む。 内外面とも器面荒れ。

図版番号	種 類	法 <u>量</u> (cm)	形態上の特色	技 法 上 の 特 色	備 考
660	小型丸底壺	B 6.1 C 9.0 D ₂ 6.2	口縁はわずかに内 弯 する。口縁先端 を欠失。胴部は球形。	口縁内外面はヨコナデ。胴部の外面 上半はハケ目、下半は強いハケ目で 調整。胴部内面はナデ。	黄褐色。 焼成良。 小石粒を含む。 外面全体に丹塗りの 痕跡。
206-661	高	A 19. 8 B 3. 9 D ₁ 6. 7	均整のとれた器型で、胴部下半を欠 失。	坏部外面はハケ目のあとナデ。内面は上半にヨコナデがみられるが、底部は器面荒れのため不明。脚部外面はヨコナデ。内面はヘラ削り。	褐色。 焼成良。 小石粒を含む。
丸尾5号	11			_	
662	,	A 19. 3 B 3. 2 D ₁ 6. 0	同 上	坏部はヨコナデが主体であるが、底 部内面には放射状にハケ目を施して いる。脚柱部外面はヘラ削りのあと ヨコナデ。内面はヘラ削り。	黄褐色。 焼成良。 小石粒を含む。
丸尾 5 号				,,-	
663	,	A 18. 5	坏部上半のみの破片。	内外面ともハケ目のあとヨコナデ。	褐色。 焼成良。 小石粒を含む。
丸尾5号					
664	"	B 3.8	坏部は接合面でわずかに屈曲するが 全体に丸味をもつ。坏部上半と脚部 を欠失。	坏部内外面はヨコナデ。	淡褐色。 焼成良。 砂粒を多量に含む。
丸尾5号					
665	,	A 19. 0	丸味のある浅い坏部で、口縁先端は わずかに外反する。脚部は接合部か ら大きく開く。脚部欠失。	坏部内外面ともヨコナデ。	黄褐色。 焼成やや不良。 小石粒を含む。
丸尾5号					
666	"	不 明	坏部を欠失。 脚下端部も欠失。	脚柱部外面はヘラ削りのあとうすく ハケ目。そのうえをナデ調整。内面 はヘラ削り。	淡褐色。 焼成やや不良。 砂粒、黒雲母を含む。 器面荒れがひどい。
667	"	B 3.6 C12.2 D ₁ 7.2	坏部接合面以上を欠失。脚柱部は下 部がやや太く、そこで強い屈曲をも って横に開く。	脚柱部外面はヘラ削りのあとハケ目。 そのうえを軽くナデ。内面はヘラ削 り。下端部は内外面はヨコナデ。	褐色。 焼成良。 砂粒、黒雲母を含む。
丸尾5号				Likeli Til - Lee to Til Lee	10.7
207 —668 208 丸尾 6 号	変 (壺)	A 16.0 C 22.8 B 11.9 D ₁ 3.6 D 25.3+α D ₂ 21.7+α	11縁は外傾しながら直延し、胴部は 長卵形。最大径は中位よりやや上部 にあり、底部は尖り気味の丸底。底 部穿孔。	口縁外面はヨコナデ。内面はハケ目のうえをナデ。胴部外面は細かいハケ目。内面は下から上へのヘラ削り。 器壁はきわめてうすい。	褐色。 焼成良。 多量の石粒を含む。 焼成後の底部穿孔。
669	壺	A 19. 6 D ₁ 7. 2 B 13. 0 D ₂ 30. 2 C 30. 0	口縁は直延したのち、先端部は外反 し、外側にはり出す。胴部は長卵形。 最大径は中位より上部にある。大型。		
丸尾 6 号		D 39. 2			

570 亜 D 15. 2+a D₂11. 6+a のため不明。 焼成後の底部穿孔 4 九尾 6号 A 11. 5 B 7. 3 C 8. 5 D₁ 4. 4 口縁はわずかに内弯気味にたちあが。 器面荒れがひどく調整方法が不明瞭であるが、ヨコナデが主体。 明褐色。焼成良。小石粒を多量に含焼成後の底部穿孔 4 九尾 6号 A 13. 4 B 10. 0 C 18. 8 D₁ 3. 9 口縁は外反したのち直延し、さらに先端は外反する。胴部は球形で底部を欠失。 口縁は外反する。胴部は球形で底部を欠失。 口縁が外のする。胴部は球形で底部を欠失。 内部外面はハケ目。内面は小石粒を多量に含物に含化。 焼成良好。小石粒を多量に含物に含物に含物に含物に含物に含物に含物に含物に含物に含物に含物に含物に含物に	図版番号	種 類	法 量 (cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
1		壺	B 8.5 D ₁ 3.6 D 15.2+α		半から胴部にかけてはヘラ磨き。胴部の下半はハケ目。内面は器面荒れ	焼成むらあり。
		小型丸底壺	B 7.3 C 8.5	る。胴部はおしつぶしたような球形。		
### 15.8 を		壺	B 10. 0 C 18. 8	先端は外反する。胴部は球形で底部	コナデ。胴部外面はハケ目。内面は	
A			C 24. 1	最大径は中位よりやや上にある。尖	それ以下はハケ目。内面上半はヨコ	焼成良。
A 9.1 D, 3.7 B 6.9 D, 6.6 C 9.6 D 10.3		型丸	B 7.0 D ₂ 5.1 C 8.6		ともヨコナデ。胴部外面下半はヘラ 削りのあとナデ。内面は指によるナ	焼成良。
# 1.8 J. 3.0 B 5.0 D 4.9 C 7.2 D 7.9 屈曲し外反する。胴部は球形。		1	B 6.9 D ₂ 6.6 C 9.6	同上	胴部外面はハケ目。胴部上端には指 による圧痕が明瞭で、下半はナデ調	焼成良。
677 高 A17.0 D ₁ 6.0 B 3.8 D ₂ 10.0 C 12.9 大きく外へ開く。 端はわずかに外反する。脚下端部は 大きく別へ開きる。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削り。下端部は内外面ともヨコナデ。 成良。小石粒を含む。小石粒を含む。 4 A18.5 D ₁ 5.2 B 3.2 D ₂ 9.3 C 12.2 D 14.5 本部は接合面でわずかに屈曲し、先較的細く、下端部は大きく開く。 坏部外面は一部ハケ目が残り、ヘラ磨きが施されている。内面はナデ。脚柱部外面はヘラ削りのうえを磨き、内面はヘラ削りのうえを磨き、内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き、内面はヘラ削りのあと一部磨き、内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き、内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き、内面はヘラ削りのあと一部磨き。内面はヘラ削りのあと一部磨き、内面はヘラ削りのあと一部を表し、小石粒を含む。 418.5 D ₁ 5.2 B 3.2 D ₂ 5.2 D		,	B 5.0 D ₂ 4.9 C 7.2		半はナデで、中位はヘラ削りのあと ナデ。底部はうすいまばらなハケ目。 胴部内面上半はナデ。底部に指圧痕	焼成良。
678 * A18.5 Di 5.2 B 3.2 Di 9.3 C12.2 bi(x) 端はわずかに屈曲する。脚柱部は比 較的細く、下端部は大きく開く。 内面はヘラ削りのうえを磨き。 焼成良好。 内面はヘラ削り。下端部はナデ。 内面はヘラ削り。下端部はナデ。 内面はヘラ削り。下端部はナデ。 内面はヘラ削り。下端部はナデ。 内面はヘラ削り。下端部はナデ。 内面はヘラ削り。下端部はケートで、 内面はヘラ削り。 下端部はケートで、 内面はヘラ削り。 下端部はケートで、 内面はヘラ削りで、 輪積みの 内面はヘラ削りで、 輪積みの 内で、 をしてのいる対象を含め、 カとが残る。 岩壁はきわめてうすい。 を見ての小石粒を含め、 カとが残る。 岩壁はきわめてうすい。 を見ての小石粒を含め、 カとが残る。 岩壁はきわめてうすい。 を見ての小石粒を含め、 カとが残る。 岩壁はきわめてうすい。 と見の小石粒を含め、 カとが残る。 岩壁はきわめてうすい。 と見の小石粒を含め、 カとが残る。 岩壁はきわめてきるい。 と見の小石粒を含め、 カとが残る。 岩壁はきりのからできない。 たんかの小石粒を含め、 カとが残る。 岩壁はきりがより。 と見ないのかられたが残る。 岩壁はきりがより。 たんかのかられたが残る。 岩壁はきりがより、 ちんかのかられたが、 カとが残る。 岩壁はきりが、 カとりが残る。 岩壁はきりが、 カとりが、 カとが残る。 岩壁はきりが、 カとりが、 カート・カート・カート・カート・カート・カート・カート・カート・カート・カート・			B 3.8 D₂10.0 C 12.9	端はわずかに外反する。脚下端部は	面はヘラ削りのあと一部磨き。内面 はヘラ削り。下端部は内外面ともヨ	焼成良。
		"	B 3.2 D ₂ 9.3 C12.2	端はわずかに屈曲する。脚柱部は比	磨きが施されている。内面はナデ。 脚柱部外面はヘラ削りのうえを磨き。	焼成むらあり。 焼成良好。
丸尾 7 号 D ₁ 4.2			B 10. 7 C 22. 2	をもって直延し、先端はわずかに外 反する。胴部は球形を呈する。底部	ケ目。内面はヘラ削りで、輪積みの	焼成不良。

図版番号	種 類	法 螱(cm)	形態上の特色	技法上の特色	備考
680 丸尾 7 号	壺 (変)	A 16.0 D ₁ 4.2 B 10.6 C 24.9 D 26.6+α	口縁はほぼ直延するが、中位以上は そいだようにうすい。胴部は長卵形 を呈する。底部欠失。	口縁内外面はナデ。胴部外面はハケ 目。内面はヘラ削り。	赤褐色。 焼成不良。 小石粒を含む。
681	4	A 13.4 D ₁ 3.8 B 9.4 D ₂ 16.4 C 17.9 D 20.2	口縁部は中位がわずかにふくらみ、 先端は外反気味。胴部は尖り底気味 の丸底。	口縁外面は上半にハケ目。下半から 頸部にかけてはナデ。胴部外面はハ ケ目。内面はヘラ削り。	赤褐色。 焼成良。
682	小型丸底壺	A 10.0 D ₁ 3.2 B 6.7 C`10.8 D 8.6+α	口縁部は内湾気味にたちあがり、胴部は肩が張り、おしつぶしたような球形。底部穿孔。	口縁外面はハケ目のうえをナデ。胴部下半外面と胴部内面はヘラ削り。	黄褐色。 焼成良。 小石粒を含む。 焼成後の底部穿孔。
683	,	A 9.5 D ₁ 2.5 B 6.8 D ₂ 4.9 C 8.4 D 7.4	口縁は外傾して直延する。胴部は肩 が張り尖り気味の底。	口縁内外面はヨコナデ。胴部外面上 半はヨコナデ、下半はナデ。胴部内 面は指によるナデ。	黄褐色。 焼成やや不良。 多量の小石粒を含む。
684	高坏	A 20.3 D ₁ 4.5 B 4.0 D ₂ 12.1 C12.3 D 12.6	比較的扁平な坏部。脚柱部から下端 部はほぼ直角に屈曲する。	坏部内面はハケ目のうえをヨコナデ。 外面はヨコナデ。脚部外面はヘラ削 りのうえをナデ。内面はヘラ削り。	
			-		

2 土師器の類別

今回の調査では、厖大な量にのぼる土師器・須恵器の出土をみた。個々の土器の形態・技法 上の特色については、別表「出土土器観察結果一覧表」にそれぞれまとめた。したがって、これらの観察結果を参考として、各器種別に類別を試みたいと思う。なおここでいう類を表わす記号は任意に与えたものであり、時間的な変化や形態変化の方向を示すものではない。(第13表参照)

(1) 甕形土器

甕形土器は、口縁部の形態変化によって分類すると、 次の 3 類に分けることができる。

甕 Ⅰ 類=□縁部が内弯気味に立ちあがるもの。

甕 Ⅱ 類 = 口縁部が直線的に外反するもの。

甕Ⅲ類=□縁部が外弯するもの。

以上のうち、まず I 類では、やや縦長の体部に尖り気味の底部を有し、胴部の最大径は中位ないしわずかに上位にある。頸部は強くくびれて、さらに口縁部は内弯気味に立ちあがる。体部外面は全面に刷毛目が施されたあと、頸部接合部分を中心にヨコナデにより仕上げる。その際、頸部は指先等で強くナデつけられる。体部内面は、底部より中位まで削り上げられ、さらに中位以上をヨコ方向に削られるのが常である。

また、Ⅱ類の形態・製作技法については、ほぼⅠ類と共通している。なお、Ⅱ類に位置づけたものの中に、焼成後に底部を穿孔した 2例(602・668)がある。

Ⅲ類は、 I・ II 類に比べて、やや大型のものが多い。体部は縦長ないし球形に近く、底部は丸底か尖り気味の丸底である。頸部は強くくびれ、口縁部は外弯気味に短く立ち上がる。体部外面は荒い刷毛目が中位あるいは底部まで施される。頸部から口縁部内外面は、刷毛目のあとョコナデが施されるが、特に頸部の接合部は強くナデッケられる。 II 類と同様、焼成後に底部穿孔された 1 例 (287) がある。

(2) 壷形土器

壺形土器は高坏に次いで多く、器形の変化は多様である。いわゆる「小型丸底壺」については項を改めて類別する。壺形土器は、まず口縁部の形態から大きく2つに分けられる。

壺 [類 = 単純口縁のもの

壺Ⅱ類=複合口縁のもの

I類の単純口縁のものは、さらにA~Dに分類し、このうちA・C・D類でa・bの2つに、 B類でa・b・cの3つにそれぞれ細分してみた。

Ⅰ A 類は、垂直に立ち上がる口縁を有するもので、これには、大型のもの= LAー a 類と、

小型のもの= I A − b 類がある。 I A − a 類は、縦長の胴部に底部は尖り気味の丸底を呈し、胴部最大径は中位ないし中位以上にある。体部外面は全面刷毛によって整えるが、口縁部から頸部にかけては刷毛のあとヨコナデが施される。刷毛目の方向は口縁部でタテ方向、体部ではタテ方向が主で部分的にヨコ方向も観察できる。体部内面は、底部より胴部中位までを下→上のタテ方向、以上頸部までをヨコおよびナナメ方向の削りが施される。 I A − b 類は、球形の胴部で丸底ないし尖り気味の底部の小型品である。整形技法上の特色は、前述の I A − a 類と同様である。 I A − a ・ I A − b 類いずれも入念に仕上げられている。

IB類は、口縁部が直線的に外反するものである。これには、大型のもの=IB−a類と、小型のもの=IB−b類がある。まず、IB−a類は、頸部が強くくびれ、IA−a類と同じく縦長の胴部に底部は尖り気味の丸底を呈する。体部外面は、全面刷毛によって整え、口縁部から頸部にかけてヨコナデによって仕上げる。体部内面は、底部から胴部中位までを下→上のタテ方向で以上をヨコおよびナナメ方向のヘラ削りが施される。口縁部は内外面ともヨコナデによって仕上げる。IB−b類は、胴部が球形を成す小型品で、整形技法はIB−a類の場合と同様である。IB−c類もやはり大型のものである。口縁部は直行気味に外反し、頸部のくびれはあまり強くなく、胴部は縦長で丸底を呈する。整形・焼成とも粗雑なものが多い。IB−c類に類似する土器として、玉名郡岱明町院塚古墳出土例をあげることができる。

IC類は、口縁部がラッパ状に大きく広がるいわゆる広口壺で、体部は球形ないし肩部の張った球形を呈し、丸底である。また、口縁部の径と胴部の最大径とは、ほぼ一致している。さらに口縁部が直線的に外反するもの=IC−a類と、内弯気味に外反するもの=IC−b類とに分けることができる。

ID類は、いわゆる長頸壺である。これには偏平な球形胴部に対して、細い筒状の口縁部を有するもの=ID−a類と、球形の胴部に筒状の口縁を有するもの=ID−b類とに分けることができる。ID−a類は、ヘラミガキ、ヨコナデによって入念に仕上げられ、胎土も密で焼成も極めて良好である。これに対してID−b類は1点を数えるのみであるが、ヘラ状の工具で荒く仕上げられていて、焼成は不良である。

壺 Ⅱ類は、いわゆる複合口縁を有する壺形土器で、口縁の屈折の強弱および体部の形態によってA~Cに分類できる。まず、 Ⅱ A 類は複合口縁の最も典型的なもので、口縁部の上半部と下半部との接合部に明瞭な段を有し、頸部は強くくびれる。いわゆる兵庫県茶臼山古墳出土の壺形土器に類似する。なお Ⅲ A 類は、体部が小型で球形ないし偏平な球形を呈するもの= Ⅲ A ー a 類と、大型で縦長の体部に尖り気味の底部を有するもの= Ⅲ A ー b 類とがある。特に完形土器に限ってみた場合、底部に穿孔された土器はすべて焼成後のものであり、 Ⅲ A ー a 類では6点のうち1点、 Ⅲ A ー b 類では6点のうち5点を数えることができ、後者が圧倒的な比率を占めている。

Ⅱ B類は、口縁部の上半部と下半部の中位接合部外面に、断面三角形状の稜の突出がみられ、あるいは稜の直上が強くナデッケられるために一条の沈線がめぐるものである。

IC類は、同じく口縁部の上半部と下半部の接合部外面に稜を有するが、IA類に比して屈

折は不明瞭である。なお口縁部の細部の変化によって、強くくびれた頸部から稜を境として、 上半部が外反するもの $= \Pi C - a$ 類と、上半部が直行するもの $= \Pi C - b$ 類とに分れる。

(3) 小型丸底土器

小型丸底土器は、前述した壺形土器と同様に、口縁部の変化によって、次の3つに分類した。

Ⅰ類=単純口縁を有するもの

Ⅲ類=複合口縁で、口縁部の段は明瞭であり、壺 II A 類における口縁部と共通する。

また、台付の小型壺では、小型丸底土器に準拠して、Ⅰ・Ⅱ類を設けたが、Ⅲ類に相当する例を見い出せなかったために、特殊例としてⅢ類を設けた。

Ⅰ類=小型丸底土器Ⅰ類に脚台がつけられたもの

∏類=小型丸底土器 ∏類に脚台がつけられたもの

■類=口縁部中位にわずかに稜を有し、体部は偏平で上半部と円盤状の底部が接合されていて、さらに3孔を穿った脚台を接合している。すなわち、全体が4つの部分からなっているものである。

(4) 高坏形土器

高坏は最も多く出土し、完形及び全体形が復元できたものが多い。従って、主に完形土器を中心に分類を行なう。なお類別にあたっては、まず技法及び製作工程の差異によって分類し、これに形態変化をつけ加えるかたちで行なう。

高坏を製作技法からみると、坏部と脚部を別個につくり、その後に接合するという方法が一般的な在り方である。しかし細部では、次のような変化もみられる。坏部では上半部と下半部を接合したものと、坏部全体が一度に作られたものとがある。前者では、上・下半部の接合部外面に稜及び角を有することが多く、後者では内外面とも変化がみられない。脚部の場合にも、上半部と下半部とを接合したものと、一度に作られたものとがある。すなわち、前者では柱状部と裾部との境が明瞭であり、後者では柱状部と裾部との境が不明瞭なものと、脚部全体がラッパ状に大きく広がる形態が特徴的である。すなわち製作工程における差異によって I ~ II 類に分けることができる。

Ⅰ類=坏部・脚部とも上半部・下半部が接合されたもので、全体が4つの部分からなるもの。

Ⅲ類=坏部・脚部とも、一度につくられるもので、全体が2つの部分からなるもの。

次に、整形および仕上げにおける特色をみたい。坏部は、Ⅰ・Ⅱ類とも上半部と下半部を接合したあと、接合部外面に粘土ひもが粘りつけられ、さらにハケ状工具による調整のあとヨコ

方向のナデが施されている。この際上半部と下半部の接合する場合の角度によっておおむね全体形が規整されてくる。Ⅲ類では、ハケおよびヘラ状工具によって、タテ及びヨコ方向のケズリが施されたあと、ヨコ方向のナデによって仕上げる。すなわち坏部では、ハケおよびヘラ状工具によって全体を整えたあと、ヨコナデによって仕上げるといった方法が共通してみられ、Ⅲ類のうちの一部ではヘラケズリのみで仕上げられるものもみられる。

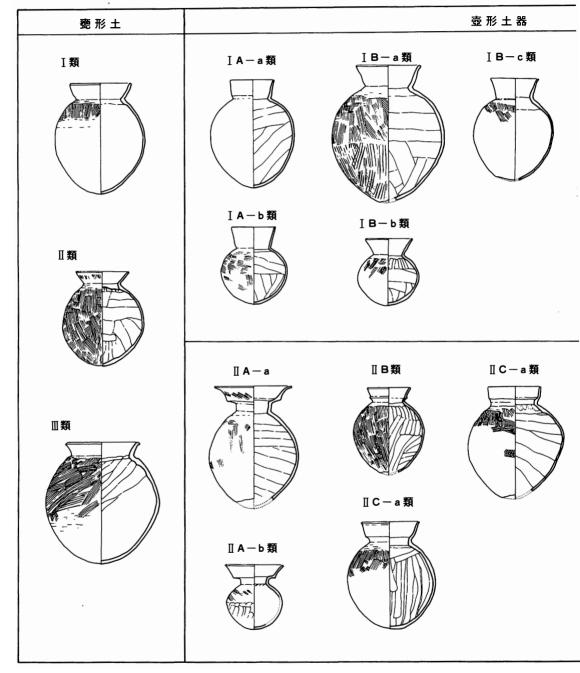
脚部では、 I 類の柱状部と裾部との境が明瞭なものでは、柱状部外面はタテ方向のヘラケズリのあとヨコナデ、内面では回転ヘラケズリが施される。裾部との接合部内外面ではハケ状工具による調整が行なわれたあとヨコナデが施される。また II 類に顕著にみられるラッパ状に広がる脚部では、外面はハケ、ヘラ状工具による調整と裾端部でヨコナデ、内面はていねいなヘラケズリのあと、端部はヨコナデによって仕上げられている。

坏部と脚部の接合方法では2つのタイプが推定される。(1)坏部下面中央に、あらかじめ粘土の突起をつけたうえで筒形の脚部に接合したもので、これには接合したあと、突起をそのままにしたものと、内面に押しつけたものとがある。(2)坏部と脚部を接合する際、坏部の内側からおしつけて接着し、この部分に生じる凹部にさらに粘土で補強するものである。(1)(2)のいずれの場合でも接合部外面には粘土が補強されていて、外側からの観察では詳細を知ることは困難である。したがって接合方法が判明しない大部分のもののなかに、(1)(2)以外の接合方法を行っている可能性も考えられる。

以上のような観察結果から、次のように分類した。

- Ⅰ類=坏部で上半部と下半部を接合し、脚部でも上半部(柱状部)と下半部(裾部)を接している。すなわち、成形が4段階からなっているものである。第13表で示したとおり、坏部・脚部とも接合部が明瞭である。図示した以外に、坏部・脚部ともわずかに形態の変化が認められるが、これらを一括してⅠ類とした。
- - Ⅱ A 類 「坏部は」類と共通するが、脚部はラッパ状に大きく広がる。
 - ■B類 全体形は ■A類に共通するが、ラッパ状に大きく広がる脚部は、ふくらみを持っているもの。
 - ■C類 脚柱状部が下方で広がり、さらに裾部に至って、強く外傾するもの。脚柱状部と裾部との境は不明瞭である。
 - ⅡD類 坏部は深く、接合部外面に段を有するもので、脚部はⅡC類と共通する。
 - Ⅱ E類 坏部は深く、接合部外面に稜がめぐる。脚部は高く筒状を呈し、裾部に至って 外傾する。整形は粗雑で、焼成不良のものが多い。
- Ⅲ類=坏部・脚部とも、それぞれ一気に作り上げたもので、成形が2段階からなるものである。これはさらに4類に分けることができる。
 - ■A類 坏部が半球形ないし中位に不明瞭な稜がめぐるものである。後者の場合、下半部がヘラ削りされ、その際生じた稜である。脚部は IC類に類似している。

塚原古墳群出土土師器分類表



		高境形	盌 形 土 器	
I C — a 類	I D—a類	I 類		I類
		II A類	ⅡB類	[類
I C — b類				
	I D− ь (類)			Ⅲ類
		II C類	Ⅱ D類	
		7-1		IV類
小型丸底土器	台付小型壺	I E類		
I 類	I類			V類
Ⅱ類	Ⅱ類	ⅢA類	ⅢB類	VI類
Ⅲ類	Ⅲ類	ⅢC類 	ⅢD類	 ¼
3				

- ■B類 坏部は後述する盌形土器(I類)に類似し、これに低く小さな脚部が付くもので、本項では高坏として類別した。整形・仕上げとも入念で、焼成は良好である。
- ■C類 坏部は小さく境状を呈し、高い脚部を持つもの。須恵器高坏への模倣がうかがわれる。坏部外面中位以下は回転へラ削り、脚部外面タテ方向のヘラ削りのあとヨコナデが施されている。
- ■D類 坏部は半球形で、わずかに外傾した筒状の脚部を持つもの。脚部外面はタテ方向のヘラ削り、口縁部より内面にかけてはヨコナデ、脚部内外面ともヘラ削りが施されたあと外面はヨコナデにより仕上げる。

(5) 盌形土器

ここで盌形土器としたものは、従来、坏・皿と呼ばれていたものを含んでおり、これらを総称して盌形土器と呼んでいる。盌形土器は形態・技法上の差異によって、次の7つに分けることができる。

- Ⅰ類=体部はやや深く、底部は丸底かわずかに尖底である。□縁端部で短く外弯する。外面は刷毛のあとヨコナデ、内面はヘラ削りのあとヨコナデにより仕上げられている。
- Ⅲ類=体部から口縁部にかけて、ややふくらみをもって内傾し、底部は丸味をもった平底 ないし尖底である。内外面ともヘラ削りのあとヨコナデが施される。
- Ⅳ類=体部は皿状を呈し、底部は平底に近い。底部外面付近のみへラ削りが残り、他はヨコナデによって仕上げている。
- Ⅴ類=体部中位を境として、下半より底にかけては、粗いクシ状の工具によって削り、上半では口縁部はほぼ垂直に立ち上り、ヨコナデにより仕上げている。
- VI類=体部は深く、整形は V類と共通している。
- Ⅲ類=小型で手捏ね様のもので、全体をヘラ削りにより整えたあと、ヨコナデによって仕上げている。

3 土師器の年代的位置

中部九州における土師器の編年的研究については、その骨子の確立にさえ立ち至っているとはいえない状況である。このことは、各遺跡における土器の年代的位置づけが、遺跡ごとの層位的・型式学的な編年的研究の中から導き出されたものではなく、隣接地域において設定された土器型式を引用することによって処理され、ましてや数千キロの彼方の土器型式との形態的対応関係などから年代的な位置づけが行なわれることなどは、本地域の編年作業の立ち遅れを如実に示しているものといわなければならない。このような中にあって、前期古墳の出現時期を土師器の編年的位置づけのなかから導き出そうとした先学の論考は、地域に根ざした土師器

の編年的研究として評価しなければならない。一方、近年土師器とくに古式土師器を出土する 方形周溝基第の発見が相次ぎ、一連の発生期古墳の研究にとって、弥生後期から古式土師器に 至る編年体系の確立が急務となっているのである。また、塚原古墳郡出土の厖大な量にのぼる 土師器、特に古式土師器の年代的位置づけは、遺跡そのものの実体を解明する上での主要な課 題でもあろう。

しかしながら、本遺跡出土の各遺構は、切り合いや重複によって、出土土器の時間差を肥握できたものは少ない。大半の土器が祭祀供献のためのものであって、生活・生産遺跡の場合とは、各器種のセット関係が必然的に異なり、また、そのセット関係の同時性の認定についても、疑問を持たざるをえないのである。

したがって、本項では、1回の祭祀供献に使用された土器のセット、すなわち同時性を認め うる主要土器群を抽出し、また型式学的方法を併用して、年代的序列を試みたい。その際、前 述した本遺跡の実情と型式学的方法にたよらざるを得ないことを考慮した場合、細部にわたっ て操作することは、かえって混乱を招く原因ともなりかねない。したがって、当面の課題であ る編年の骨子、すなわち大まかな序列を把握するにとどめ、修正および追加等の作業は今後の 課題としておくこととする。

出土した土師器の多くは、須恵器出現以前のいわゆる「古式土師器」である。特に調査区北側の頂部および北側斜面に分布する方形周溝基群(I・II・IV群)と円墳群(II・V・VI群)に集中して出土している。まず、土師器を須恵器出以前と、それ以後のものとに大きく二分して整整理してみる。

前述したとおり出土量が多く、出土土器の型式的な比較をした場合、墳基の切り合い、重複が少ないことからも、相互に大きな時間的隔りはなかったものと思われる。こうした中にあっても、型式的により先行するものと、後出するものとが認められるが、これらをあえて細分せず、年代的巾についても、柔軟性を持たせておきたい。

6号・8号・18号方形周溝基出土土器の中に、この群の土器の先行形態が認められる。甕・壺・高坏・小型丸底土器など、供献土器としてのセットはそろっている。

1) **甕形土器** 6号方形周溝基の甕(82・83・109)は、すべて甕 I 類に属している。口縁部は内弯気味に短く立ち上がり、倒卵形の体部で底部は丸底、胴部最大径は体部の中位ないしわずかに上位にある。また、口縁部内外面と体部外面は刷毛によって調整し、さらに口縁部から頸部にかけてはヨコナデにより仕上げている。体部内面の頸部以下では底部から上方向に、さらに体部中位以上を右→左のヨコおよび左上りのヘラ削りが施されるなど、3点はすて共通した特徴が認められる。

18号方形周溝基には 2点(260・261)あり、いずれも甕 I 類である。前述した 6号方形周溝基の 3点に比較すると、いずれも小型品である。口縁部は内弯気味に開くが、体部は球形(261)ないしやや肩部の張った球形(260)である。口縁部・体部における整形技法上の特色は、 6号方形周溝幕例と共通する(261)。

以上5点の甕形土器については、重富遺跡出土例、また沈目遺跡出土例に類以したものを認(#2)

めることができる。

2) 壺形土器 複合口縁ないしこの系統に属する壺形土器は、6号・8号・18号方形周溝基にそれぞれ出土している。

6号方形周溝基では、壺 [A - a 類 (88)、壺 [B 類 (72・73・108)の 4点が認められ、このうち72・73は一括出土のものである。体部の形態および整形手法は、前記甕土器 (82・83)とほぼ一致している。しかし口縁部の形態は屈折部が明瞭なもの (88)と、不明瞭なもの (72・73)があり、これらが混在した状態で出土している。

8号方形周溝基では、壺 II A ー a 類(149)、甕 II A ー b 類(147・148)、甕 II B 類(142)の 4 点が出土し、この群における複合口縁の壺形土器の組み合わせをよく示している。また壺 II A ー a 類にみる顕著な複合口縁は、142と一括して出土した小型丸底土器 III 類(153)にもみとめられる。

18号方形周溝基では、 II A - a 類 2 点(258・259)のみ出土している。複合口縁の形態は、 領部は内傾し段から上半部が外反して立ち上るもの(258)と、頸部は直立して、上半部が強く 外反するもの(259)とがあり、また胴部最大径は前者で体部中位以上に、後者で体部中位とい うように差異を認めることができる。

以上の複合口縁の壺形土器は、焼成・胎土とも良好で、器壁も薄く入念に仕上げられている。特に II A − b 類の小型品(147・148)と壺 II A − a 類 (149)において顕著である。さらに、これら壺 II A 類と、壺 II B 類が共伴する 6号・8号において見られたことは、両類がそれぞれ異なる系譜上に位置していることを裏づけており、こうした系譜は、さらに次の段階にまで及んでいる。

- 3) 高坏形土器 最も多く出土していて、各方形周溝基とも高坏 I 類と高坏 II A 類が中心となる。全体的に坏部が浅く、つくりは精巧で、胎土・焼成とも良好である。
- 4) 小型丸底土器 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類ともみられる。Ⅰ類では、胴部径に対して口縁部径が大きく、先行形態と考えられるものが6号方形周溝基(87)と丸尾6号墳(671)に2点認められるが、大半は口径部径と胴部径がほぼ同じか、やや胴部径が大きいものであり、これらはいづれも一括して出土する。

また、小型丸底土器と小型器台がセットとして出土したのは、2号方形周溝基(14・15)のみである。この小型器台は西寺遺跡出土例に類似し、また狐塚出土例より後出するものと思われる。

5) 鼓形器台 22号方形周溝基 (第50-2図) 南側周溝に出土しているが、他の器種との組み合せは明らかではない。

なお、前述のものに比較して、わずかに後出する土器群が認められる。 7号・9号・10号・15号方形周溝基出土のものなどがそれである。特に、15号方形周溝基出土の土師器と共伴した 須恵器高坏 (220) は、従来最古式の須恵器と考えられてきたものより、さらに遡るものであり 第 I 群の土師器の年代的位置づけの上で重要な手がかりとなるものであろう。

以上のように、第I群としてまとめた土師器は、甕・壺の整形手法が先行型式にみられる体

部外面のタタキ目、沈線等の交様がまったく見られなくなり、一方で体部内面のへラ削り手法が定着する。さらに胎土・焼成とも一定して良好であり、器壁は薄く精巧に仕上げられている。すなわち、弥生後期的な土器作りの手法を完全に脱却し、土師器として安定した時期に達した段階での所産であろう。ちなみにこの第 I 群と弥生後期の最終末との空隙に 2 ないし 3 型式を設定することが適当と考えている。現在、本地域において最古式の土師器として、古閑南遺跡出土土器や山下遺跡出土土器を位置づけることができるだろう。さらに、前記 2 遺跡の土器と (注音) 場所の第 I 群との間に、前田遺跡 B 地点出土土器、広木水源町遺跡出土土器、重富遺跡出土土器、沈目遺跡出土土器などを組み入れることによって、古式土師器の大まかな変遷過程が把握できるものと考えられる。

4 須恵器について

塚原古墳群において、須恵器を出土した古墳及び器形・個体数等は別表のとおりである。出 土状態をみると、主体部副葬品として出土したものは1点もなく、すべて周溝内から出土した ものである。

第14表塚原古墳群出土須恵器一覧表

古 墳 名	坏	高坏	蓋	踉	壺	甕	器台	坩	皮袋形	計
8号方形周溝基	2									2
15号 🥠		1]				1
丸山 3 号墳	1	9	3	ŀ	1	1	1		l	1 6
" 4 "	4	7	6	2	2	2		2		2 5
" 19 "		i			1					1
<i>"</i> 20 <i>"</i>		2	1	ļ						3
" 23 "	1									1
<i>"</i> 32 <i>"</i>	1 1	1	10			,			1	2 3

備考 図示し得ない細片は除外した。

周溝内の土器出土状況については、各墳墓の項で解説を加えているが、概括的には次のようなことが集約できる。周溝内の土層堆積は概ね上下2層に区分され、須恵器は主に上層の黒色土から出土する。場所的には、陸橋部の左右近くに多いことが指摘される。さらに、周溝内への供献を第一義とするような状態ではなく、使用後に廃棄されたと考えられるような状態が多い。

方形周溝基では、8号方形周溝基の周溝上部から須恵器坏2点を、15号方形周溝基の周溝から、後述の異質な高坏を出土したにすぎない。一方、円墳では、丸山3・4・19・20・23・32号の6基から出土したにすぎず、相対的に出土率が低いことが指摘できる。以下、各古墳ごとに述べる。

8号方形周溝基の南側周溝の上層黒色土から、2点の須恵器坏身を出土した。深みがあり、立ちあがりは長く、わずかに内傾し、先端の内側は有段となる。整形・調整とも整良である。第 [期~第 [期初期に位置づけられよう。

15号方形周溝基の周溝から、多数の土師器とともに、須恵器の高坏 (図版119)が 1 点検出さ

れた。ひじょうに硬く焼きあがり、自然釉が付着し表面は凹凸が多い。立ちあがりは高くなく 内傾し、脚部の径は大きく、四方に大きな透しを有する。本来有蓋であろうが、蓋は出土しな かった。器形・焼成が通常の須恵器とは著しく異っているのが特色である。強いて類例を求め るならば、伽耶式土器に類似するが、相異点もある。その他の類例に乏しく、比較検討の法も ないので、生産地については結論を保留し、今後の検討にまちたい。ただ、年代的には第 I 期、 あるいはこれに先行するものと考えてよかろう。

次に、丸山 3号墳の須恵器の一群がある。周溝底に密着して出土した坏蓋 1点を除いて、上部黒色上から一括して出土したもので、陸橋の左側に一括して廃棄されたような状態で出土した(図版35)。高坏はすべて有蓋高坏で、最も数が多い。短脚の一段透しで、透しは円形と長方形の 2種がある。坏部の立ちあがりはわずかに内傾するが、高くのび、先端の内側は有段となる。脚部に円形透しを有するものの体部は丸みをもち、底部から体部へかけて外へ張り出すような感じで、深めの器形となっている。これに対して、長方形透しを有するものは、坏部がやや扁平である。蓋にはつまみのつくものとつかないものとがあるが、いずれも天井部と口縁部の屈曲が明瞭で、口縁部先端の内側は有段となる。坏身は口径が小さく、立ちあがりは短かく、内傾する。揺籃期のものとみてよかろう。これらの一群は、陶邑古窯址群のTK 208型式に類似し、古式の須恵器である。第 I 期に比定できよう。他に、器台・壺・甕があるが、いずれも高坏の時期に比定されよう。

丸山 4号墳の坏身は小型化がめだち、立ちあがりは短かく、内傾する。蓋も全体に丸みをおび、天井部と口縁部の屈曲は不明瞭で、沈線で画されるなど型式化がめだち、全体につくりが粗雑となっている。第Ⅲ型式前半に比定できよう。ただ蓋の1点(図版166—459)は年代が下降し、第 V期に比定される。高坏で、短脚の無蓋高坏(図版167—467)が1点出土している。丸山3号墳の一群と比べるとやや年代が下降し、第 Ⅲ期に比定できよう。他の高坏は長脚のもので、第Ⅲ期前半の特徴をよく示している。坏は口縁部が大きく開き、頸部は長く、胴部の小型化がみられる。これも第Ⅲ期前半に比定できよう。丸山4号墳の須恵器は、第 Ⅲ期に属するものが1点含まれ、大半は第Ⅲ期前半に比定され、さらに1点は第 V期に比定され、年代に幅をもっていることが注意される。

丸山19号墳の周溝中出土の須恵器(図版192))は、台付長頸壺である。肩部の上に凸帯をめぐらし、その上に5個所、装飾の欠落した痕跡が認められる。装飾・口縁部の形態から、第Ⅲ期に比定できよう。

丸山20号墳からは、高坏2、蓋1が出土している。いずれも丸山3号墳における短脚1段透しの一群と同様の特色を有し、第1期に比定できよう。

丸山23号墳からは坏身が1点出土している。口径が小さく、立ちあがりは短く、やや内傾する。深いつくりで、体部から底部にかけての外面はヘラ削りである。整形・調整等シャープさに欠けるが、揺籃期の須恵器とみなし、第 I 期に比定されよう。

丸山32号墳からは、多くの須恵器を出土し、図示し得たのは23個体を数える。高坏1、皮袋形土器1の他は坏身と蓋である。坏のうち、図版200-623・631・639の3個は古式のもので、

第 Ⅰ 期~第 Ⅱ 期初期に、他の坏身・蓋は第 Ⅲ 期に位置づけられる。高坏もこの時期の長脚二段 透しのものである。皮袋形土器は、これのみで時期決定は困難であるが、第 Ⅲ 期の坏・高坏と 同時期と考えられる。

各古墳出土の須恵器を概括したが、これを整理すると次表のとおりである。 第15図 塚原古墳群出土須恵器時期別一覧表

古墳名 第Ⅰ期 第Ⅱ期 第Ⅲ期 第Ⅳ期 第V期 8号方形周溝基 15号 -----丸山 3号墳 19 " 20 " 23 32

この表でも明らかなように、塚原古墳群出土の須恵器は、第 I 期に属するものが多く、第 Ⅲ 期がこれに次いでいる。

須恵器編年のあゆみをたどってみると、古墳出土の遺物を資料とした段階から、生産址、つまり窯跡の調査資料を基準にした編年作業へと移行し、後者の有効性が説かれている。しかしながら、肥後においては、古墳時代に属する窯跡の調査がたちおくれ、必然的に須恵器の編年は確立されていない。これまでに、古墳出土の須恵器による編年作業が、三島格・原口長之氏によって進められたが、全体的な編年は確立されていない。近接した地域では、小田富士夫氏によって、筑後における編年が提示され、後期古墳の時期決定にしばしば引用されているが、第Ⅲ・V・Ⅵ期についてであり、第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳの各期は空白となっている。

このような現状にあって、塚原古墳群出土の須恵器の年代決定については、古式のものについては畿内の編年を、Ⅲ期以降については筑後の編年を基準としている。基準の不統一によって、大きな誤診を犯している恐れも強い。とくに、第Ⅰ期として位置づけたものが、肥後においては第Ⅰ期に下降するかもしれないということが念頭にあることを記しておきたい。

今回の調査によって出土した古式須恵器の一群は、肥後において、従来空白であった部分に 充当される資料として注目される。今後これらの資料分析を進めることによって、肥後におけ る須恵器編年が確立されよう。

- 1)田辺昭三「陶邑古窯址群 I 」平安学園考古学クラブ 1966
- 2) 三島格「肥後の須恵器資料(--)」熊本史学号。同「肥後の須恵器資料(二)」熊本史学 25 号。
- 3) 原口長之「肥後における須恵器編年試案」西日本史学号
- 4) 小田富士夫「筑後における須恵器の編年」『塚ノ谷窯跡群』所収、八女市教育委員会 1969

5) 玉 類 (図版220)

塚原古墳群において出土した玉数は下表のとおりである。

第16表 塚原古墳群出土玉類墳墓別一覧表

古墳名	出土地点	種類及び個数	総数	備考
6号方形周溝基	第1主体部	勾玉1、管玉1	2	調査後紛失
丸山 3 号墳	主体部	管玉1、ガラス玉2	3	攪乱された主体部から出土
2 号 石 棺		ガラス玉 181	181	
3 号 石 棺		勾玉1、ガラス玉68	6 9	

各個体別の材質、大きさ等は下表のとおりである。

第17表 塚原古墳群出土玉類一覧表

単位はmm

10. E1	ili I lab te	15 85	大き	5 8	1.1 EFF		<u> </u>		番号	de t bb de	種類	大き	5 8	·材質	_	6 ii	\Box
番号	出土地点	種 類	幅	厚さ	材質	ŧ	E A	•)	金万	出土地点	性规	幅	厚さ	加貝	E	<u> </u>	1
1	丸山 3 号墳主体部	管 玉	(長) 20.5	(径) 9.1	碧玉	淡	緑	色	31	塚原 2 号石棺	ガラス玉	(長) 5.4	(径) 6.0	ガラス	緑	青	色
2	*	ガラス玉	10.0	7.2	ガラス		紨		32	*	*	7.1	4.8	"		紺	
3	,	"	8.6	6.7	,	濃		紺	33	"	"	7.9	6.5	"		"	
4	塚原 2 号石棺	"	12.5	8.9	"		紺		34	,	"	7.3	4.5	"		"	
5	*	,	7.8	7. 2	,		"		35	"	"	7.0	4.7	"		"	
6	,	"	8.0	6.0	"		"		36	,	,	7.0	4.5	"	緑	青	色
7	,	"	8.0	6.4	"		,		37	"	,	6.5	4.5	"		紺	l
8	,	"	8.8	6.7	"	混		紨	38	. "	,	6.1	4.5	"		青	
9	,	"	7.5	5.0	"		紺		39	"	"	5.5	5.1	"		紺	
10	,	,	8.0	6.4	"	瀫		紺	40	,	*	6.5	3.2	"		"	
11	,	"	8.5	5.9	"		紺		41	"	"	7.0	5.1	"	緑	青	色
12	,	,	9.2	6.0	,	濃		紺	42	,	,	7.2	4.5	"		"	İ
13	,	"	7.4	5.0	"		"		43	,	,	5.6	5.4	"		"	
14	"	"	8.0	6.0	"		紺		44	,	"	5.5	3.1	"	水		色
15	,	"	7.5	5.4	,	濃		紺	45	"	"	4.6	4.0	"	濃		紺
16	,	"	8.5	5.7	,		糾		46	"	,	5.5	4.7	"		"	
17	*	"	7.6	7.3	"	濃		紺	47	,	"	5.5	3.0	"		"	١
18	*	"	8.2	5.0	,		紺		48	"	*	5.0	4.1	"		紺	
19	,	,	8.0	5.6	"		"		49	"	"	5.4	3.6	"	濃		紺
20	,	,	7.5	6.9	"	濃		紺	50	,	"	6.0	3.2	"		紺	
21	"	"	8.0	6.1	"		紨		51	"	"	5.4	4.5	"		"	
22	*	"	7.6	7.4	,		"		52	,	*	5.3	4.2	"	水		色
23	,	"	8.1	6.3	,		"		53	,	,	5.2	3.9	,	濃		紺
24	*	"	8.2	5.5	"		"		54	,	,	5.0	4.0	"		"	١
25	*	*	7.5	5.5	"		"		55	,	"	5.1	3.5	"		"	
26	,	,	7.8	5.3	"		"		56	,	"	5.4	3.5	"		"	
27	"	"	6.7	5.0	"		"		57	,	"	4.8	3.5	"		紺	
28	,	,	7.6	6.8	?		"		58	,	"	5.1	3.6	"		"	
29	,	"	7.9	4.1	"		"		59	,	"	4.2	4.3	"	緑色	色に近	į,
30	*	"	6.6	4.4	"	緑	青	色	60	"	"	4.4	3.5	"		紺	

番号	出土地点	種類	_	5 5	材質	. (z. 3m	8.0	10 1 12 15	40.	*	きさ		
		12 73	幅		171 角	色調	番号	出土地点	種類	幅	厚さ	材質	色制
61	 塚原 2 号 石 棺	│ ┃ガラス∃	(長		ガラス	, 611	105	10 F - 0 F H		(長)	(径)		_
62	,	, ,	4.			"	105	" " - " - " - " - " - " - " - " - " -	1	3.1	3.0	ガラス	水
63	,	,	4.	1	1	淡彩		, ,	"	4.0	2.2	"	紺
64	,	,	5.			, a ,	107	,	"	4.1	3.8	,	,
65	,	,	4.0		,	漫組		,	,	3.6	3.0	*	"
66	,	,	5.4		,			,	/ /	4.0	2.5	,	淡
67	,	,	4.4		,	紺	110	,	,	4.0	2.5	"	縁に近
68	,	,	4.5		,		111	,	,	3.0	1.6	"	紺
69	,	,	4.6	1 1	,	緑に近い紺			/	3.9	2.2	"	,
70	,	,	4.0	1 1	,	#II //	113	,	,	3.6	2.9	"	淡
71	,	,	4.0	1 1	,	,	114	,	,	4.2	3.4	"	紺
72	,	,	4.1	1 1	,	,	115	,	*	4.3	2.5	"	,
73	,	,	4.2	1 1	,	l	116		,	4.0	2.2	"	,
74	,	,	3.9	1 1	,	緑 "	117	,		3.5	3.0	"	緑に近
75	,	,	4.5	1 1	,	411	118	,	. "	4.0	2.8	"	紺
76	,	,	4.6	4.0	,	紺	119	,	,	3.9	3.2	"	淡
77	,	,	4.5	2.6	,	,	120	,	,	3.6	2.9	"	紺
78	,	,	4.5	2.5	,	,	121		"	3.9	2.4	"	,
79	,	,	4.6	4.4	,		122	,	"	3.5	3.6	"	緑
80	,	,	4.5	3.6	,	緑细	123		"	3.0	2.2	"	"
81	,	,	4.5	3.3	,	紺	124	,		3. 2	1.7	"	水 €
82	,	,	4.6	3.6	,	,	125	,		3.6	2.6	"	"
83	,	,	3.4	3.5	,	緑に近い	126	,		3.6	2.2	"	紺
84	,	,	9.4	3.4	" ·	おに近い	127	,	,	3.1	2.2	- 1	淡料
85	,	,	3.4	2.8	,	#H	129	,	.	3.0	2.2		緑に近い
86	,	,	3. 2	2.6	,	,	130	,	.		1.9	"	紺
87	. ,,	,	3.6	2.7	,	,	131	,	"		2.6	"	,,
88	,	,	3.0	2.5	,	緑	132	,			3.0		緑がかり
89	,	,	3.4	2.7	,	紺	133	,	,		2.5	"	青
90	,	,	3.1	2. 8	,	#H	134	,	,		2.4	"	紺
91	,	,	3.4	2.7	,	,	135	,	,	1	2.6	- 1	緑に近い
92	,	,	3.6	3.0	,	淡紺	136	,	,	[3.5	"	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
93	,	,	3.4	2.6		决 ₩ ₩	137	,	,		2.4	.	紺
94	,	,	2.9	2.2		青色	138	,	,	1	2.5	- 1	緑がかり
)5	,	,	3.5	3.5	- 1	., 緑に近い	139	,	,	- 1	2.3	"	紺
6	,	,	3.6	3.4	,	紺	140	,	,	- 1	2.7	"	* ML
7	,	,	4.3	3.0	,	,	142	,			3. 0 2. 0	- 1	炎紺
8	,	,	4.2	3.5	,	緑に近い	143	,	- 1	- 1	2.0	- 1	录 色
9	,	,	3.5	2.0	,	紺	144	,			2.1	,	录色(水色)
0	,	,	4.0	3.2	,	,	145	,			.4	,	紺
1	,	,	4.2	3.0	, į	炎 紺	145	,		- 1	2.7	,	
2	,	,	4.0	3.3	,	紺	147	,				,	,
3	,	"	4.3	2.7	,	,	148	,					/ (好な)
1	,	,	3.9	2.0	,	,	149	,		2	. 4	.	(緑色)

番号	出土地点	種類	大台幅	き さ 厚さ	材質	色調	番号	出土地点	種 類	大台幅	厚さ	材質	色 調
150	塚原2号石棺	¥=7∓	(長)	(径) 2.4	ガラス	紺	104	塚原 3 号 石 棺	ガラス小玉	(長)	(径) 4.1	ガラス	緑がかり
151	塚 塚 2 万 10 16	ガラス玉	3.0	3.0	"	#II //	194	塚	// / / / / / L	6.1	3.8	1177	** //· //· //
152	,	,	2.7	2.0	,	,	196	,	,	6.1	3.8	,	,
153	,	,	2.6	2.1	,	. "	197	,	*	5.8	4.2	,	,
154	,	,	2.5	1.5	,	青	198	,	,	6.1	4.5	,	紺
155	,	,	3.0	2.0	,	*	199	*	,	5.8	3.3	,,	緑
156	*	,	3.0	2.0	,	水 色	200	,	,	5.4	2.8	,	紺
157	,	,	3.4	1.5	,	緑がかり	201	*	,	5.3	3.6	,	緑がかり
158	,	,	2.7	1.9	,	紺	202	,	,	4.8	4.0	,	紺
159	,	,	3.4	2.6	,	,	203	,	,	4.2	4.6	,	,
160	*	,	3.5	2.1	*	,	204	"	*	4.9	2.9	,	,
161	*	*	3.4	2.3	"	(緑色)	205	,	,	3.4	4.3	,	緑
162	,	,	3.0	2.7	"	紺	206	,	"	3.5	3.2	,	紺
163	*	,	3.5	2.3	,	(緑色)	207	,	,	4.3	2.5	"	,
164	*	"	3.2	2.4	,	紺	208	"	,	3.5	3.0	"	水 色
165	*	,	3.5	3.0	*	青	209	,	"	4.5	2.7	"	紺
166	*	"	2.7	1.6	"	水 色	210	*	"	3.9	2.9	"	青
167	*	"	2.1	2.1	"	緑色(水色)	211	*	"	4.2	3.1	"	紺
168	*	"	3.5	1.6	"	紺	212	"	"	3.7	2.9	"	紺
169	"	"	3.5	2.0	"	(緑色)	213	"	"	3.7	3.1	"	水 色
170	,	,	3.5	2.0	"	紺	214	"	"	4.0	3.4	"	紺
171	*	"	3.0	1.2	,	(緑色)	215	*	,	3.5	3.1	"	*
172	"	"	3.0	2.0	*	紺	216	,	,	4.4	3.0	"	,
173	,	"	3.0	1.8	"	*	217	,	*	3.7	2.5	"	,
174	*	"	3.1	3.0	"	,	218	,	*	4.0	2.6	,	"
175	,	,	3.5	2.5	,	(緑色)	219	,	,	3.9	2.6	"	, "
176	,	,	3.4	2.4	,	青	220	,	,	3.5	2.4	,	*
177	,		3.4	1.9	,	<i>*</i>	221	,	,	3.5	2.6	,	青
178	,	,	3.2	2.6	,	紺	222	,		3.4	2.7	,	,
179 180	,	,	3.2	1.7	,	水色	223	,	,	3.6	2.4	,	<i>*</i>
181	,	,	3.5	2.1	"	組 (43・ない	224	,	,	3.4	2.4	,	耕
182	,	,	2.6	2.0	,	(緑·色) 紺	225	,	,	3. 4	2.4	,	青紺
183	,	,	2.9	1.5	,	青	227	,	,	3.5	2.4	,	机
184	,	,	2.9	1.5	,	水 色	228	,	,	3.4	2.1	,	青
185	,	,	2.6	1.5	,	小青	229	,	,	3.5	2.1	,	. 紺
186	塚原3号石棺	勾 玉	13.4	4.0	,	Ħ	230	,	,	3.4	3.0	,	青
187	**************************************	ガラス小玉	8.4	6.0	,	緋	231	*	,	2.9	1.5	,,	紺
188	,	,	8.2	5.9	,	濃 紺	232	*	,	3.0	1.6	,	***
189	*	,	6.6	4.4	,	紺	233	,	,	3.4	2.3	,	青
190	,	,	6.2	4.7	,	緑がかり	234	,	,	3.0	2.0	,	,
191	,	,	7.0	5.5	,	紺	235	,	,	3.1	1.9	,	紺
192	,	,	6.3	3.7	,	緑がかり	236	,	,	3.4	2.0	,	,
193	*	,	6.1	5.1	,	,	237	*	,	3.0	1.8	,	,,
			L									L	

番号	出土地点	種 類	大き	\$ 8	材質	色調	番号	出土地点	種 類	大き	5 i	材質	色	調
田 万	山土地总	1生 規	幅	厚さ	竹具	巴酮	份万	山土地总	1里規	幅	厚さ	10月	е.	ř(*)
			(長)	(径)						(長)	(径)			
238	塚 原 3 号 石 棺	ガラス小玉	3.0	1.8	ガラス	紺	247	塚原 3 号石棺	ガラス小玉	2.7	1.6	ガラス	紺	
239	*	,	3.1	2.4	"	*	248	*	ガラス玉	2.6	1.3	*	赤茶	色
240	*	*	2.8	2.5	"	青	249	*	*	2.5	1.9	"	青	
241	*	,	3.0	1.5	*	水 色	250	*	,	2.5	1.5	"	水	色
242	,	,	2.7	2.0	,	緑	251	,	,	2.5	1.4	,	紺	
243	,	,	2.6	2.0	"	青	252	*	,	2.5	1.3	"	"	
244	,	,	3.0	1.5	,	,	253	,	,	2.3	1.8	"	赤茶	色
245	,	,	3.1	1.8	*	黒	254	,	,	2.4	1.5	*	緑	
246	*	,	2.6	1.8	*	紺								

6)縄文時代、その他の遺物

縄文時代

(I)

今回の調査で縄文時代の遺物も出土した。各遺物の出土地は第18表に示すとおりである。この表に示すように遺物は小規模ながら調査地のほぼ全域に散在しており、主に古墳の封土や周溝などから出土した。土器片は主に早期と晩期のものがみられたが、古墳群の築造や長年の開墾・耕作等による地形破壊および攪乱のため、住居址や土壙など、遺物に直接結びつく遺構を検出することはできなかった。出土した主な遺物の出土地、種類、特徴等については別表に示すとおりである。また、各土器については可能なかぎり形態及び時期的分類を行い第142図~第146図に示した。以下、これらの遺物をもとに縄文時代各時期の特徴を報告したい。

 (Π)

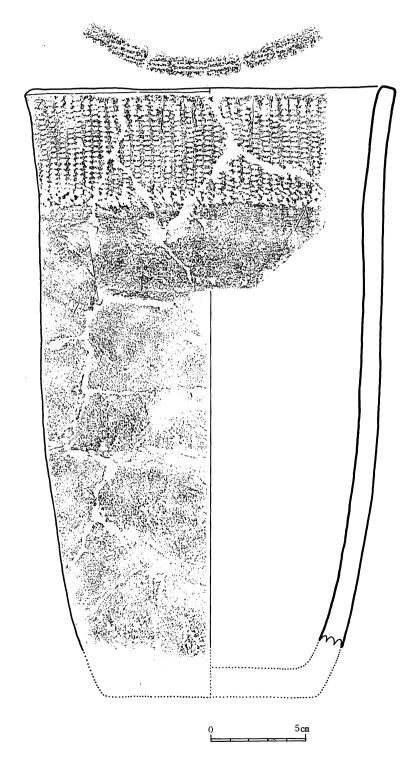
早 期(第142図~第144図)

従来「沈目式土器」と称されている押型文土器が出土した。器形はほとんどが鉢で大型のものが多い。口縁に外反し、胴部がややふくらみ底部は平底もしくは丸底になるものと思われる。口唇部は平たく整形したものと丸みをもつものとがあり、なかには口縁が口唇部に近づくにつれ、器壁が薄くなり口唇部が細くなるのもみられる。逆に胴部から底部にかけて、特に底部との接合付近では器壁が厚くなっている。器壁の厚さは器形の大小に比例するが胴部付近の器壁の厚さは10mm内外を計るものが多い。

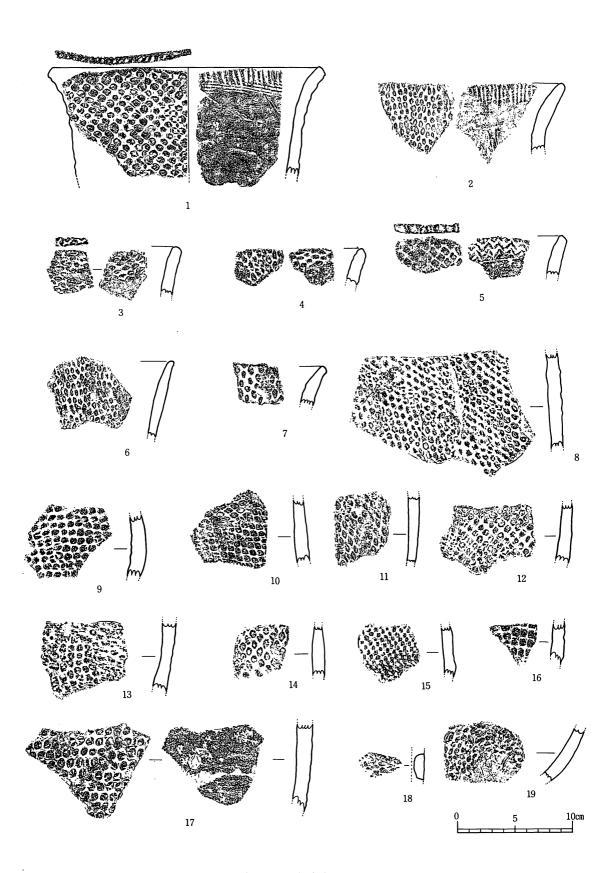
色調は黒褐色・淡黄褐色・淡褐色・赤褐色を呈する。黒褐色・淡褐色を呈するものが数量的に多く出土し、焼成充分で堅緻である。これに比べて赤褐色を呈するものは焼成が不充分なものが多く、表面がざらざらに風化したものが多い。

胎土は砂粒混じりで小石(3~4mm)を含むものもみられる。

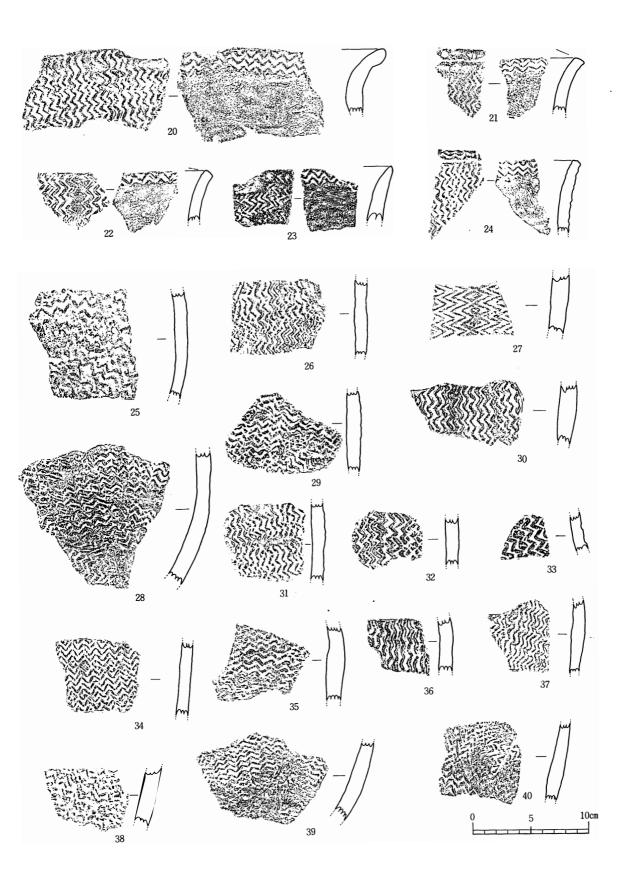
文様は表面のほぼ全面と裏面の一部にあり中には口唇部に施されているものもある。山形・



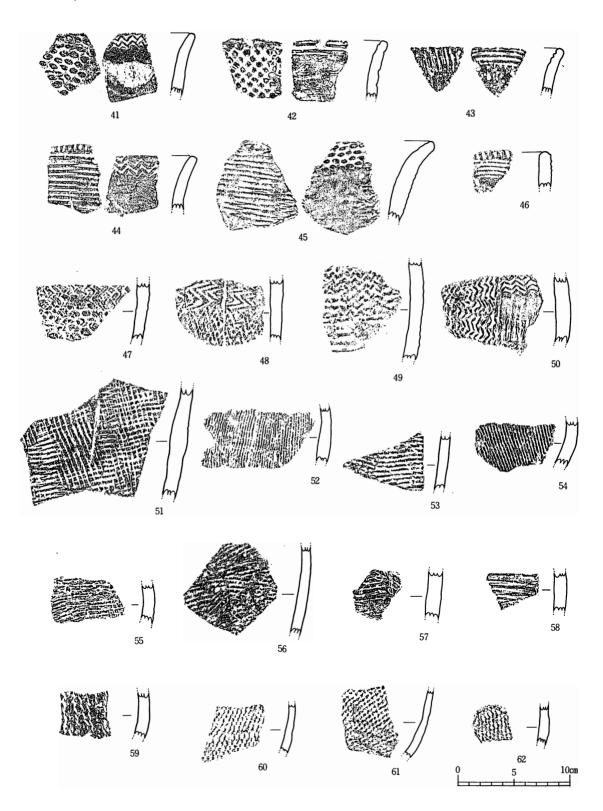
第140図 くぬぎ塚古墳墳丘下出土土器



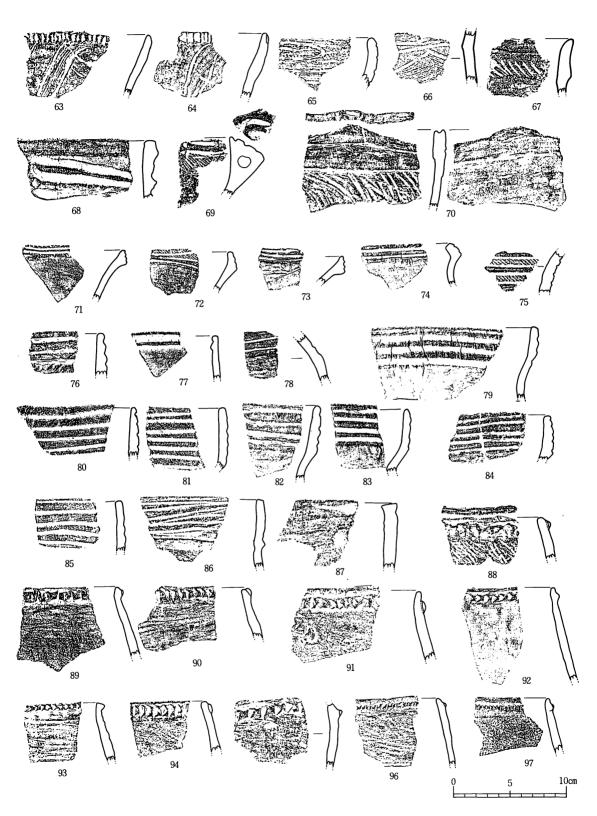
第141図 縄文式土器 (1)



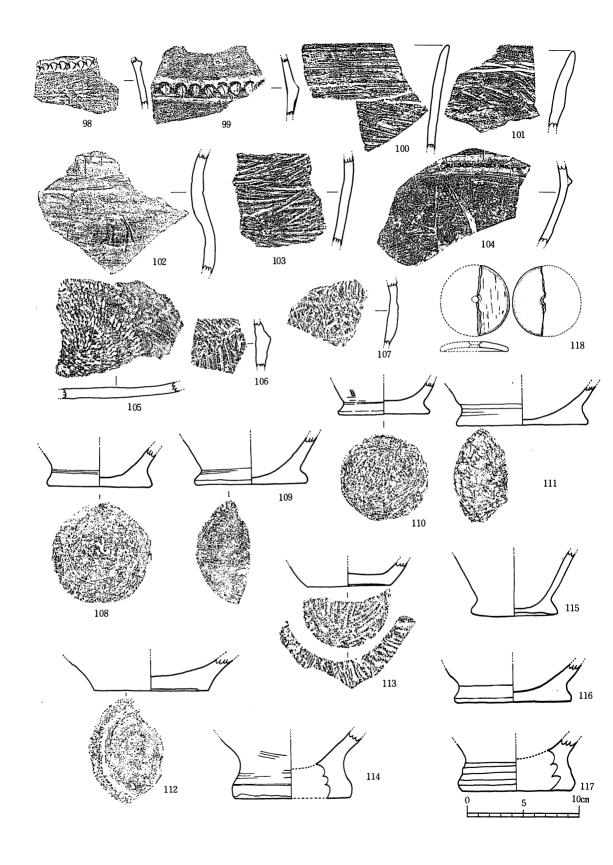
第142図 縄文式土器(2)



第143図 縄文式土器 (3)



第144図 縄文式土器 (4)



第145図 縄文式土器 (5)

楕円・条痕・格子目・撚糸・縄文が認められ、山形・楕円が多い。表面と裏面の施文が異なる 場合もありその組合せは楕円と山形・条痕と楕円・条痕と山形がみられる。

以上の土器の明確な出土層位や共伴関係遺物が不明なことから時期的位置を決するには至らなかったが、先に述べた「くぬぎ塚」封土下から出土した円筒土器は、施文・形態こそ違え、胎土・焼成・器壁の厚さなど押型文土器と非常に類似している。また、土器周辺に押型文土器に普遍的に伴う集石が同様に認められるので両者の関係は非常に密接なものと思われる。もし、両者が時期的に分離できる状態にあったとしても、両者の時期的差異は非常に小さかったものと思われる。

県内の押型文土器と他の遺物との共伴関係も次第に明らかにされつつある。今後、「轟」や「曽畑」「手向山」「塞ノ神」と前述の「円筒土器」らとの共伴関係が明らかにされれば、押型文土器はより明確に時期的な位置づけができるであろう。

 (Π)

前期~中期(第145図63~64)

この時期の出土遺物は少なく、塞ノ神式土器が2点認められただけであった。いずれも丸山 26号墳西側周溝部から出土したもので、いくぶん内弯ぎみに外反する口縁部である。口唇部は 丸みをもつ。文様は特徴的に2本の沈線を施し、その中に貝殻による施文を行っている。加え て口縁部にも刻目が施されている。

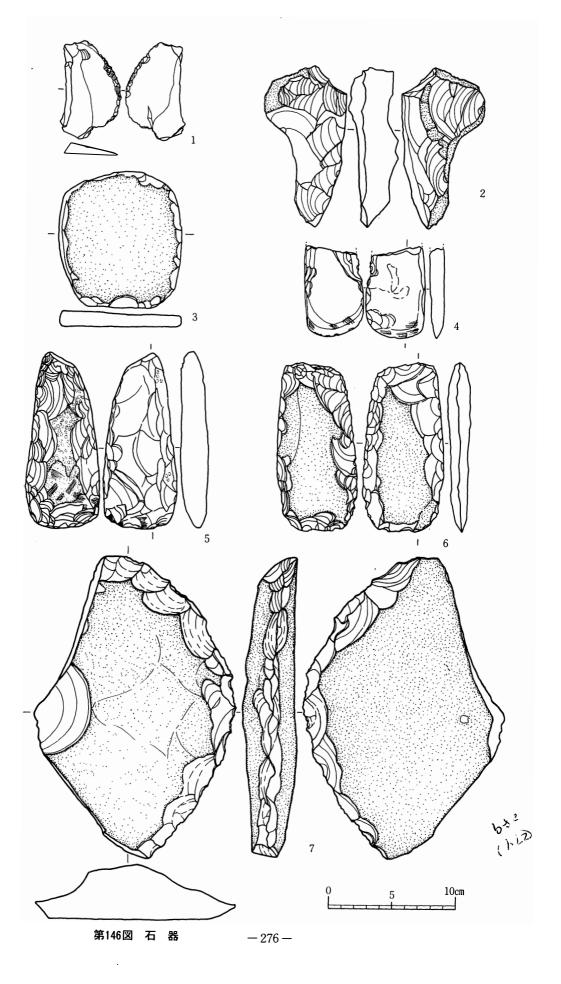
 (\mathbb{N})

後期~晚期(第145図~第146図)

後期土器は(65~78)で深鉢(67~70、76~78)、鉢形土器(66)、浅鉢(65、71~75)である。(65~67、69)は北久根山式土器に位置づけできよう。(65)は内弯する口縁で口唇部は丸味を持ち、特徴的に沈線と貝殻を用いた擬似縄文が施され、磨研がみられる。(66)(67)には、平行と斜行する沈線の施文がある。(69)は橋状把手で沈線および貝殻擬似縄文が施されている。(68)(70)はいずれも直口する口縁部で(68)は太型凹線文(70)には条痕の施文があり2点とも北久根山式と同じ時期のものと思われる。

 $(71\sim78)$ は三万田式土器の時期に位置づけできよう。浅鉢と深鉢とがある。 $2\sim4$ 条の沈線があり、(71)(72)(75) には磨消縄文がみとれ、(73) は磨研である。色調は主に黒褐色、赤褐色、茶褐色を呈し焼成良好で堅緻である。

晩期土器は $(79) \sim (107)$ で、 $(79) \sim (87)$ は深鉢 $(88) \sim (104)$ は甕形土器である。 $(79) \sim (87)$ は口縁に沈線の施された粗製土器で器面の荒れたものが多い。胎土は砂粒混じりで、小石 $(3 \sim 4 \,\mathrm{mm})$ を含み、焼成も不良のものが目だつ。時期は晩期の大石式や黒川式に相当しよう。 $(88) \sim (99)(104)$ は刻目突帯を有する甕形土器である。刻目突帯は口唇部から $1 \,\mathrm{cm}$ 下がった部位にあるものと口唇部に接しているものとがある。刻目幅も $1 \,\mathrm{cm}$ 以上を計る大きめのものと、 $2 \sim 3 \,\mathrm{mm}$ 程度の小さなものがあり、刻目と刻目の間隔は刻目の大きさにほぼ比例す



る。器面には条痕による調整痕が施されている。焼成は一般的に不充分で器面の荒れたものが多い。焼成の良好なものは非常に堅緻で磨研土器を思わせる。(100~103)は刻目突帯を有しない粗製の甕形土器で荒い貝殻条痕による調整を行っている。(105)は鉢形土器の底部でスタンプが認められる。同じく(106~107)にも器面に布と思われるものの圧痕が見れる。(108~117)はいずれも底部で円盤貼り付けであり、(112、113、115)は上げ底を呈する。(112)が有段上にあり後期の可能性があるだけで他はすべて晩期とみてよい。

以上の後期〜晩期の土器はその特徴から形式的にみておよそ3期に分かつことができよう。 すなわち(71~78)は後期で北久根山、三万田式を主とする時期(79~87)は晩期で深鉢を主 とし大石〜黒川式に比定でき、(88~107)は刻目突帯をもつ甕形土器を特徴とする時期で山の 寺、夜臼式に比定できよう。

ただし、いずれも出土層および伴なう遺構が明確でないので、それぞれの時間的な存在形態 は不明であった。

(V)

紡錘車 (118)は丸山 7号から出土したもので、直径64mm穿孔径5.5mm、厚さ 5 mmを計る。土器片を再利用してつくっている。

 (\mathbf{M})

石器 (1、2) は押型文土器に伴うものと思われる。(1) は薄茶褐色を呈するチャートを素材とする。主要剝離面が観察しにくいが、横剝ぎとみてよかろう。横剝ぎの剝片の縁辺にリタッチを加えた刃部を持つスクレーパーである。(2) はサヌカイトの石核である。不規則な剝離で剝片が剝取されている。石核自身も利器とされたものであろう。

(3~7)は後晩期の石器である。(3)は円盤形石器で凝灰岩を思わせるようなもろく偏平な安山岩を素材とする。(4)は局部磨製石斧である。緑色に白の班点文様がはいるジャモン岩を素材とし、磨製を施し刃部を形成する。上半部を欠損。(5、6)は打製石斧である。(5)は剥離を行ったあと敲打を加えこれらに一部磨製をした石斧である。石材は安山岩で良質とはいい難い。刃部には多くの使用痕がある。(6)はいわゆる扁平打製石斧と称されるものである。泥岩を思わせる質の悪い偏平な石材を用いている。剝離を施し形成された刃部は石質の悪さもあり鈍い。色調は部分的に茶褐色・薄茶褐色を呈する。(7)は大型の石器で用途は不明確である。くぬぎ塚付近の表採資料である。石質はわりと固い安山岩で重さ1.68kgを計る。刃部は交互剝離により形成する。裏面に凹部がある。自然のものであるが何らかの形で利用したのかもしれない。

第18表 縄文土器出土地点一覧表

出	土地		出土遺物	備考	Н	<u> </u>			出土遺物	備考
丸山	13	号	早期 2 晩期 7	No. 4区 9	丸	山	34	号		
,	14	,				,	35	"		
"	15	,	早期 1 晩期 3			"	36	,	早期1	周溝内
"	16	,				,	37	,		
,	17	,	<u></u>			"	38	,		
"	18	,	晚期 1			,	39	,		
"	19	"	晚期 4			"	40	,		
"	20	,	早期 2 晩期 2	陸橋部 1 A地区 2	丸	尾	1	号		
,	21	"				"	2	"	早期 2 晩期 1	A-5区2 C-1区1
"	22	"				,	3	"	早期 2 晩期 8	南東周溝第 4 層 2 南東周溝第 4 層 7
"	23	,				,	4	"		
,	24	,				,	5	,		
,	25	,				,	6	"	晚期 1	北周溝 1
"	: 26	,	早期3後期2晚期3	西周溝 3		,	7	"		
"	27	"	晚期 6	南側2 北側1		"	8	"	晚期 6	
"	28	,	晚期15	北周溝 1	11	尾尾	E 北	区区		東側
,	29	,	早期 5 晚期 4		<	ぬ	* 	塚	早期19 晩期11	提乱層 3 盛土 4 — Eトレ 1
,	30	,			表	_		採	早期17 晚期 5	
,	31	,			将		軍	塚	早期 3 晚期 1	
,	32	,	晚期13	陸橋北7 下層6	±		取	塚	晚期 2	南トレンチ1
(注)	33	,	晚期1	山土地占がけっきりして	琵		琶	塚	早期11 晩期 2	東側周溝4

⁽注) この表にまとめた遺物は、出土地点がはっきりしているものだけにとどめた。この表にまとめた遺物以外にも 調査中に表面採集された資料があり、実際の遺物数はこの表の総数よりも多い。

<u> </u>	土 地 ————	出土遺物	備考	出	±	地	出出	上 遺 物	備	考
第1号2	步形周溝墓	晚期11	北周溝 1 北東 1	第24号	方形	周溝墓	į			
第2号	,	早期 2	石棺内 1	第25号		,				
第3号	,	早期4 . 晚期8		第26号		*				
第4号	"			第27号		,	早期2			
第 5 号	"	早期8 晚期2	北周溝 4 北東部 3 南周溝 3 東周溝 2	第28号	,	,				
第6号	"	早期 9 晩期 5	北西周溝 2 南周溝 1 西周溝 2 東周溝 3 北周溝 2 南西周溝 1	第29号		,	晚期3			
第7号	*	早期 7 晚期46	南西周溝10 北東周溝17 北西周溝22 東周溝2	第30号	,	, ,	早期1			
第8号	*	早期8 晚期18	北東部周溝 2 南西部周溝 1 北西部周溝 8	第31号	,	,	早期 3			
第9号	" .			第32号	,	,	晚期 1			
第10号	"			第33号	,		晚期 2			
第11号	,			丸山	1	号				
第12号	,	早期 1	南Aグループ 1	,	2	,		-		
第14号	"	早期 3 晚期 2	周溝内 1	"	3	,	平期 8 後期 1	晚期31	東周溝 3	東周溝11 4 層 1
第15号	,			,,	4	,	早期10 晩期16		北周溝1	
第16号	,	-		,	5	,	晩期 1		∏ B 1	
第17号	,	 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・		,	6	"	早期 2 晩期 6		TK1 [][北1	ヹ 2
第18号	,	晚期 1		"	7	//	早期 9 後期 7		北側表土 3 北周溝 1	東周溝 1 東部 2
第19号	,			"	8	"	早期 7 晩期 7		南周溝10 北周溝 3	北周溝 1
第20号	,	晚期 9	·	,	9	"				
第21号	"	早期 4 晚期 4		,	10	"				
第22号	,	晚期 7	第Ⅲ北トレンチ	, .	11	,	晚期 6			
第23号	,			,	12	,				7

第19表 縄文土器観察結果一覧表

図版番号	器形	形態上の特色	技法上の特色	文 様	備考
1	鉢	口縁部はやや外反する。 口唇部は丸みをもつ。 口径24.5cm 厚さ8mm	裏面は横ナデによる整形がみられる。 内外面および口唇部に施文。 楕円は大粒(直径10mmをはかるものもある)。	楕円押型文(外面) 条痕文(内面)	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 琵琶塚古墳周溝
2	*	口縁部はやや外反する。 口唇部は丸みをもつ。 厚さ12mm	内外面に旋文。 楕円押型は縦回転による施文。	楕円押型文(外面) 条痕文(内面)	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳周溝
3	"	口縁部はやや外反する。 口唇部は丸みをもつ。 厚さ11mm	内外面および口唇部に施文。	楕円押型文(内外・ 口唇部)	砂粒を含む。 褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳周溝
4	,	口縁部はやや外反する。 口唇部は丸みをもち、ややとがっ ている。 厚さ11mm	内外面に施文。	楕円押型文(内外面)	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳周溝
5	,	口縁部はやや外反する。 口唇部は丸みをもち、ややとがっ ている。 厚さ11mm	内外面および口唇部に施文。	楕円押型文(外面) 楕円よりむしろ方形 に近い。 山形押型文(内面)	砂粒を含む。 赤褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳周溝
6	*	口縁部はやや外反する。 薄手で口縁から口唇部にかけて細 くなる。 口縁部は丸みをもつ。 厚さ 9 mm	外面に施文。 楕円文は小粒(5mm)である。 内面はヘラ様のもので調整。	楕円押型文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳周溝
7	"	口縁部は外弯気味にやや外反する。 口縁から口唇部にかけて細くなる。 口唇部はかすかに稜を形成する。 厚さ11mm		楕円押型文(外面) 山形押型文(内面・ 口唇部)	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 琵琶塚古墳周溝
8	,	胴部片。 器壁の厚さはほぼ同じ。 厚さ12mm	外面に施文。 内面中央に接合部分がある。	楕円押型文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 琵琶塚古墳周溝
9	,	胴部片。 いく分カーブする。 器壁の厚さはほぼ同じ。 厚さ13mm	外面に施文。 内面は手なでによる調整痕がある。	楕円押型文。	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 琵琶塚古墳周溝
10	,	胴部片。 ほぼ直線。 厚さ12mm	外面に施文。 内面は手なでによる調整痕がある。 施文に乱れがある。	楕円押型文。	砂粒を含む。 赤褐色、焼成良好。 丸尾2号墳周溝
11	,	胴部片。 いく分カーブする。 厚さ 9 mm	外面に施文。 内面は手なでによる調整痕がある 文様の継ぎめが不鮮明である。	楕円押型文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好 。 くぬぎ塚古墳周溝

図版番号	器形	形態上の特色	技法上の特色	文 様	備考
12	鉢	胴部片。 いく分カーブする。 厚さ10mm	外面に施文。 文様は不鮮明。	楕円押型文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳
13	,	胴部片。 いく分カーブが見られ、中央部が やや細くなる。 厚さ10mm	外面に施文。 文様は不鮮明で乱れている。	楕円押型文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳
14	"	胴部片。 厚さ11mm	外面に大粒の楕円押型文を施文。	楕円押型文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成不良。 6号方形周溝墓
15	*	胴部片。 厚さ9mm	外面に小粒の楕円押型文を施文。	楕円押型文。	砂粒を含む。 赤褐色 (外面) 黒褐色 (内面) 焼成良好。 丸山26号墳
16	"	胴部片。 厚さ11mm	外面に大粒の楕円押型文を施文。	楕円押型文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 琵琶塚古墳
17	*	胴部片。 厚さ13mm	外面に大粒の楕円押型文を施文。	楕円押型文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 琵琶塚古墳
18	,	胴部片。	外面に施文。	楕円押型文。	砂粒を含む。 赤褐色、焼成良好。 丸山20号墳
19	*	胴部片。 カーブがあり、底部に接する部分 で、底部平底もしくは丸底と思われる。 厚さ11mm	外面に施文。 底部近くで文様が乱れ、一部文様 が切れる。	楕円押型文。	砂粒を含む。 赤褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳
20	,	口縁は外弯しながら外反する。 口唇部は丸みをもつ。 胴部へかけていくぶん薄くなる。 厚さ14mm	内外面および口唇部に施文。 外面は縦回転、内面は横回転によ る施文である。	山形押型文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 丸山 4 号墳周溝
21	,	口縁はいく分外反する。 口唇部は平たく整形。 胴部へかけて厚くなる。 厚さ10mm	内外面に施文。 口悸部は不鮮明であるが施文されていた可能性が強い。 外面は縦回転内面は横回転にする。	山形押型文。	砂粒を含む。 明褐色、焼成良好。 5号方形周溝墓
22	"	口縁はいく分外反する。 口唇部は平たく整形。 厚さ 9 mm	内外面および口唇部に施文。 外面は縦回転、内面は横回転によ る施文で、口唇部も施文の跡がか すかに残る。	山形押型文。	砂粒を含む。 褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳
23	,	口縁はいく分外反する。 口縁から口唇部へかけて器壁が薄 くなっている。 厚さ12mm	内外面に施文。 外面は縦回転、内面は横回転によ る施文である。	山形押型文。	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 表採

図版番号	器形	形態上の特色	技法上の特色	文 様	備考
24	鉢	口縁はいく分外反する。 口唇部は少し丸みがある。 厚さ10mm	内外面および口唇部に施文。 外面は縦回転、内面は横回転によ る施文である。 口唇部の施文も明瞭に残る。	山形押型文。	砂粒を含む淡褐色、 焼成良好で堅緻であ る。 表採
25	"	胴部片。 少しカープする。 厚さ10mm	外面に施文。 横回転を主調とする施文であるが、 やや不鮮明で乱れがある。	山形押型文。	砂粒を含む。 赤褐色、焼成良好。 丸山26号墳周溝
26	"	胴部片。 厚さはほぼ同一。 厚さ11mm	外面に施文。縦回転で文様の複合 がある。	山形押型文。	砂粒および小石を含 む。 淡褐色、焼成良好。 丸山8号墳南周溝
27	"	胴部片。 厚 さ 15mm	外面に施文。形のよく整った文様 で、文様の継目は菱形を示す。	山形押型文。	砂粒を含む。 褐色、焼成良好。 第Ⅲ調査区
28	"	胴部片。 底部近くの破片でカーブする。 底部に近づくにつれ器壁も厚くな る。 厚さ13mm	外面に施文。横回転を主調とし底 部近くは縦回転である。施文の乱 れがめだつ。	山形押型文。	砂粒を含む。 茶褐色、焼成良好。 12号方形周溝墓
29	*	胴部片。 器壁の厚さに変化なし。 厚さ13mm	外面に施文。文様の乱れがめだつ。	山形押型文。	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 丸山8号墳南周溝
30	,	胴部片。 厚さ15mm	外面に施文。縦回転による施文。	山形押型文。	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 丸山 8 号墳南周溝
31	,	胴部片。 器壁の厚さに変化なし。 厚さ11mm	外面に施文。縦回転による施文。	山形押型文。	砂粒を含む。 黒褐色(外面) 淡褐色(内面) 焼成良好。 表採
32	,	胴部片。 厚さ11mm	外面に施文。縦回転による施文で 施目の継目がみられる。	山形押型文。	砂粒を含む。 褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳
33	,	胴部片。 口縁から胴部にかかる部分の破片 である。 厚さ9mm	外面に施文。縦回転で太めの文様 である。	山形押型文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 6号方形周溝茲
34	"	胴部片。 厚さ9mm	外面に施文。	山形押型文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳
35	,	胴部片。 胴部から底部へとかかる部分の破 片である。 厚さ16mm	外面に施文。横回転による施文。 内面は雑な調整で胎土の接合部分 が認められる。	山形押型文。	砂粒を含む。 明褐色、焼成良好。 丸山8号墳南周溝

図版番号	器形	形態上の特色	技法上の特色	文 様	備考
36	鉢	胴部片。 厚さ12mm	外面に施文。鈍角な山形文様で縦 回転による施文である。	山形押型文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 琵琶塚古墳
37	,	胴部片。 厚さ12mm	外面に施文。	山形押型文。	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳
38	,	胴部片。 厚さ11mm	外面に施文。文様は不鮮明。	山形押型文。	 砂粒及び小石を含む 淡褐色、焼成良好。 表採
39	,	胴部片。 底部に近い破片。 厚さ13mm	外面に施文。途中で文様が切れる。 施文の方向性に乱れがある。	山形抑型文。	砂粒を含む。 褐色、焼成良好。 表採
40	,	胴部片。 底部に近い破片。 厚さ13mm	外面に施文。底部近くであり乱雑 な施文である。縦横回転し、文様 は不鮮明である。	山形押型文。	砂粒を含む。 明褐色、焼成良好。 表採
41	*	口緑部はやや外反する。 器壁は口縁から口唇部にかけて薄くなる。口唇部は丸みをもつ。 厚さ10mm	内外面に施文。	格円押型文(外面) 山形押型文(内面)	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 琵琶塚古墳周溝
42	*	口縁部はやや外反する。 口軽部は施文のため平たい。 厚さ9mm	内外面及び口唇部に施文。 内面は沈線状の条痕が3条走り、 口唇部は条痕が1条認められる。	格円押型文(外面) 山形押型文(内面)	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳
43	*	口縁部はやや外反する。 口軽部は丸みをもつ。 厚さ 9 mm	内外面に施文。文様は条痕文で外面は縦内面は横方向である。	条痕文。	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 表採
44	,	口縁部はやや外反する。 口唇部は丸みをもつ。 厚さ10mm	内外面及び口唇部に施文。 外面は条痕で内面は山形、口唇も 条痕である。内面に櫛状のもので の調整痕がある。	条痕文(外面、口唇部) 山形押型文(内面)	砂粒を含む。 黒褐色 (外面) 淡黄褐色 (内面) 焼成良好。 18万号方形周溝幕
45	,	口縁部はやや外反する。 口唇部の近くは細くなり丸味をも つ。 厚さ14mm	内外面に施文。 外面が条痕で内面は楕円の施文で ある。	条痕文(外面) 楕円押型文(内面)	砂粒を含む。 赤褐色 (外面) 黒褐色 (内面) 焼成良好。 21号方形周溝幕
46	,	口縁は直口する。 口唇部は丸みをもつ。 厚さllmm	外文の施文は不明瞭。 内面に条痕の施文がある。	条痕文(内面)	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 表採
47	,	胴部片。 厚さ10mm	外面に山形と楕円の施文。 文様は不鮮明である。	山形押型文。 楕円押型文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成不良。 くぬぎ塚

図版番号	器形	形態上の特色	技法上の特色	文 様	備考
48	鉢	胴部片。 厚さ10mm	外面に山形と条痕の施文。 文様は乱れ不鮮明である。 山形のあと条痕を施文。	山形押型文。 条痕文。	砂粒を含む。 褐色、焼成不良。 14号方形周溝墓
49	,	胴部片。 厚さ11mm	外面に山形と条痕の施文。 いく分カーブが見られ底部に近い 部分の破片である。	山形押型文。 条痕文。	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 表採
50	,	胴部片。 厚さ13mm	外面に山形と条痕の施文。 いく分カーブが見られ底部に近い 部分の破片である。	山形押型文。 条痕文。	砂粒を含む。 黒褐色 (外面) 淡褐色 (内面) 焼成良好。 丸山8号墳南周溝
51	"	胴部片。 厚さ15mm	外面は撚糸による施文で縦と横が 重なり格子目を呈する。	燃糸文。 格子目文。	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 表採
52	"	胴部片。 下方の断面が厚く底部に近い。	外面に施文。 細い撚糸である。	燃糸文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 丸山20号墳
53	,	胴部片。	外面に施文。文様は条痕文で原体 を擦鐹している。	条痕文。	砂粒を含む。 淡黄褐色、焼成良好。 丸山 8 号墳
54	,	胴部片。	外面に施文。 文様は撚糸文。	燃糸文。	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 表採
55	,	胴部片。	外面に施文。 文様は撚糸文で一部格子目文をつ くる。	燃糸文。	砂粒を含む。 褐色、焼成良好。 8 号方形周溝墓
56	,	胴部片。	外面に施文。 文様は条痕文。	条痕文。	砂粒を含む。 淡黄褐色、焼成良好。 くぬぎ塚古墳
57	"	胴部片。	外面に施文。文様は燃糸文でかな り乱れている。	燃糸文。	砂粒と小石を含む。 褐色、焼成不良。 18号方形周溝薬
58	,	胴部片。	外面に施文。文様は条痕文で原体 を擦鐹したもの。	条痕文。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 表採
59	*	胴部片。 (薄手)	外面に施文。	燃糸文。	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 丸山 7 号墳周溝

図版番号	器形	形態上の特色	技法上の特色	文 様	備考
60 ·	鉢	胴部片。 (薄手)	外面に施文。	縄 文	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 丸尾 3 号墳
61	,	胴部片。 (薄手)	外面に施文。	縄 文	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 丸山3号境東周溝
62	,	胴部片。 (薄手)	外面に施文。	縄 文	砂粒を含む。 褐色、焼成良好。 21号方形周溝幕
63	深鉢	口縁部。 塞ノ神式。 (薄手)	貝殻による施文あり。 口辺部に刻目を施す。	貝殼条痕文。 刻 目。	砂粒を多く含む。 黒褐色、焼成良好。 丸山26号墳西側
64	"	,	63		63と同-一個体
65	浅鉢	口縁部は内弯する。 口唇部は丸みをもつ。 (北久根山)	沈線文と貝殻による擬似縄文を施す。 磨研を行っている。	沈線文。 擬似縄文。	砂粒と小石を含む。 暗褐色。、焼成良好。 表採
66	鉢	鉢形土器の屈曲部片である。 (北久根山)	沈線文と貝殻による擬似縄文を施す。 沈線に規則的な区画は認められない。	沈線文。 擬似縄文。	砂粒を含む。 明褐色、焼成不良。 表採
67	深鉢	口縁部はほぼ直口する。先端が細く口縁部は鋭っている。	斜行沈線文がある。	斜行沈線。	破粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 表採
68	"	口縁部はほぼ直立し口辺部は肥厚する。口唇部は平たく整形。	太形凹線文を施す。	沈線。	砂粒を含む。 赤褐色、焼成良好。 表採
69	"	把 手。 穴の直径13mm	磨研と貝殻による擬似施文を施す。	沈 線。 擬似縄文。	赤褐色、焼成良好。
70	"	波状口縁でほぼ直口する。口辺部 が肥厚する。	2 本の沈線と条痕がある。 条痕は乱雑に施している。	沈線。条痕。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 丸尾1号墳
71	,	ロ 縁。 口唇部は丸みをもつ。	沈線の施文ははっきりしている。	磨消縄文。 2条の沈線。	砂粒を含む。 褐色、焼成良好。 8 号方形周溝藻 北周 溝

図版番号	器形	形態上の特色	技法上の特色	文様	備考
72	深鉢	口 縁。 口唇部は丸みをもつ。	沈線と磨消縄文の施文ははっきり している。	磨消縄文。 3条の沈線文。 刺突文2ケ所。	砂粒を含む。 赤褐色、焼成良好。 8号方形周溝墓周溝
73	"	口 縁。 口唇部は丸みをもつ。	磨研を施している。	3条の沈線文。	砂粒を含む。 茶褐色、焼成良好。 丸山27号墳
74	,	ロ 縁。 口唇部は平たく整形。	2条の沈線だけで磨消縄文の施文 はない。	2条の沈線文。	砂粒を含む。 赤褐色、焼成良好。 第1調査区
75	,	口緑。口唇部を欠失。	4条の沈線と磨消縄文の施文。	4条の沈線文。 磨消縄文。	砂粒を含む。 淡黄褐色(外面) 黒褐色(内面) 焼成良好。 第Ⅱ調査区
76	,	口 縁。 口唇部は丸みをもつ。		3条の沈線。	砂粒を含む。 赤褐色、焼成良好。 22号方形周溝薬
77	,	口 縁、		2条の沈線(内側)	砂粒を含む。 褐色 (外面) 黒褐色 (内面) 焼成良好。 第 I 調査区
78	,	口緑。		2条の沈線。	砂粒を含む。 赤褐色、焼成良好。 表採
79	,	口 縁。 口唇部は丸みをもつ。	磨研。	3条の沈線。	砂粒を含む。 褐色、焼成良好。 丸尾 3 号墳
80	,	口辺部から口唇部にかけて細くなり、口唇部は平らに整形。	沈線はほぼ同じ大きさで、ほぼ平 行した状態に施文。	4条の沈線。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 丸尾 3 号墳東周溝
81	,	口督部は丸みをもつ。		7条の沈線。	砂粒を含む(少ない) 褐色、焼成良好。 丸山 6 号墳周溝
82	*	口軽部は丸みをもつ。	磨 研。	4条の沈線。	砂粒を含む。 茶褐色、焼成良好。 丸尾1号墳北周溝
83	,	口縁部は内弯する。 口唇部は丸みをもつ。		4条の沈線。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 丸尾 3 号墳周溝

図版番号	器形	形態上の特色	技法上の特色	文 様	備考
84	深鉢	口縁部。	·	5条の沈線。	砂粒を含む。 赤褐色、焼成良好。 丸尾 1 号墳
85	,	口 縁 部。		5条の沈線。	砂粒を含む。 褐色、焼成良好。 表採
86	,	口縁部。	条痕は乱れている。内面の口縁部 と胴部の境には一条の沈線が走る。		砂粒を含む。 褐色、焼成良好。 表採
87	,	口縁はほぼ直口する。 口辺部が肥厚する。 粗製土器である。 口唇部は平たく整形。	外面はヘラで調整じ、内面は条痕 で調整。		砂粒を含む(少ない) 明褐色、焼成良好。 丸尾 6 号墳周溝
88	꽻(口縁部はやや内傾し口唇部すぐ下 に刻目突帯をもつ、口唇部は丸み をもつ。 .	刻目は大きく、乱雑に施す。 刻目突帯下は荒い条痕がある。	刻目突帯。 条 痕	砂粒及び小石を含む。 黒褐色、焼成良好。 7号方形周溝幕
89	"	口縁部は内傾するが口辺部及び口 唇部はやや外反する。	胎土、焼成とも充分で堅緻である。	刻月突帯 条 痕	砂粒を含む。 黒褐色 (外面) 赤褐色 (内面) 焼成良好。 丸山 3 号墳北周溝
90	"	口縁部は内傾する。刻目突帯は口 唇部についている。 ・	内面は磨研、器面は条痕による調整。	刻目突带 条 痕	細砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 丸山3号墳周墳
91	"	口縁部は内傾する。突帯は口唇部下 7 mmにある。 口辺部は外反する。	内面は磨研、刻目突帯は贴付であ る。	刻目突帯。	砂粒を含む。 淡褐色、焼成良好。 煤付着。 丸山3号墳周溝
92	,	突帯は口唇部下5mmにある。 口唇部は丸みをもつ。	器面はハケで調整。 胎土、焼成とも良好で堅緻である。	刻目突带。	砂粒を含む。 褐色、焼成良好。 丸山25号墳
93	"	口縁部は内傾し、口辺部は外反する。口唇部に刻目突帯がつき、口唇部は平たい。	器面は条痕で調整。	刻目突带。	砂粒、小石を含む。 淡黄褐色、焼成良好 1号方形周溝幕
94	,	口唇部下4mmに刻目突帯、刻目は 大きい。	胎土、焼成充分で堅緻である。	刻日突带。	砂粒を含む。 黒褐色 (外面) 赤褐色 (内面) 焼成良好。 丸山28号墳
95 .	,	口唇部の一部を欠失。 大きめの刻目。	器面は粗い調整痕がめだつ。	刻日突带。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 6号方形間溝幕

図版番号	器形	形態上の特色	技法上の特色	文 様	備考
96	甕	口唇部下 6 mmに刻目突帯がつく。 細かい刻目である。	器面は条痕で調整。	刻目突帯。 条 痕。	砂粒を含む。 黒褐色。焼成良好。 丸山3号墳周溝
97	,	口唇部下 6 mmに刻目突帯がつく。 細かい刻目である。	器面は条痕で調整。	刻目突帯。 条 痕。	砂粒を含む。 明褐色、焼成良好。 丸山3号墳周溝
98	,	口唇部下 4 mmに刻目突帯をもつ。 口唇部を欠失。	器面には条痕が横行する。	刻目突帯。	砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 丸山 3 号墳周溝
99	*	胴部(屈曲部) 屈曲部に貼付の刻目突帯をもつ。	刻目は大きく11mmを計る。	刻目突帯。	砂粒を含む。 淡黄褐色、焼成良好。 丸山28号墳周溝
100	深鉢	口縁部、薄手の土器で口縁は外反 し、口唇部は細く丸みをもつ。	横および斜に条痕が走る。	条 痕。	砂粒を含む。 褐色、焼成良好。 表採
101	"	口縁部、薄手の土器で口縁は外反 し、口唇部は細く丸みをもつ。	器面は荒く削り、条痕による調整 である。	条 痕。	砂粒を含む。 黒褐色 (外面) 淡褐色 (内面) 焼成良好。 丸山 4 号墳周溝
102	,	胴部 (屈曲部)	内外面とも荒い調整。		砂粒を含む。 黒褐色、焼成良好。 丸山3号墳周溝
103	,	胴部片。	荒い条痕で調整。	条 痕。	砂粒を含む。煤付着。 黒褐色、焼成良好。 表採
104	甕	胴部片(屈曲部) 刻目突帯をもつ。	貼付刻目突帯で、刻目は不鮮明で ある。	刻目突帯。	砂粒、小石を含む。 赤褐色、焼成良好。 表採
105	不明	吃 部。	スタンプがみられる。	無	砂粒を含む(少ない) 赤褐色 (外面) 黒褐色 (内面) 焼成良好。 丸尾1号墳
106	浅鉢	胴部片。		組織圧痕。	砂粒を含む。 淡黄褐色。 焼成良好。 丸山3号墳
107	"	刷部片。		組織圧痕。	砂粒を含む。 明褐色。 焼成良好、煤付着。 丸山3号墳周溝

図版番号	器形	形態上の特色	技法上の特色 文 様	備考
108	鐢	底 部。 径94mm	粗製。	砂粒を含む (少ない) 淡茶褐色。 焼成不良。 第Ⅲ調査区
109	"	底 部。 径 102mm	粗製。	砂粒を含む。 明褐色。 焼成不良。 21号方形周溝藻
110	"	底 部。 径80mm	粗 製。	砂粒を含む。 赤褐色。 焼成不良。 表採
111	"	底 部。 径 118mm	粗 製。	砂粒を含む。 黒褐色。 焼成不良。 丸山27号墳
112	深鉢	底 部。 段がある。 径 102mm	粗製。	砂粒を含む。 明褐色。 焼成不良。 丸尾3号墳南東周溝
113	"	底 部。 径74mm	条痕による荒い調整。	砂粒を含む。 明褐色。 焼成良好。 丸山3号墳
114	甕	底 部。 径 103mm	粗製。	砂粒を含む。 黒褐色。 焼成不良。 丸尾1号墳
115	"	底 部。 径 103mm	粗製。	砂粒を含む。 黒褐色。 焼成良好。 丸山28号墳北周溝
116	"	底 部。 径 116mm	粗製。	砂粒を含む。 赤褐色。 焼成良好。 21号方形周溝幕
117	"	底 部。 径98mm	粗 製。	砂粒を含む。 黒褐色。 焼成良好。 丸尾1号墳
118	紡錘車	直 径64mm 穿孔径55mm 厚 さ 5mm	土器片を利用したもの。	砂粒を含む。 灰褐色。 焼成良好。 丸山 3 号墳

図版番号	器種	石 質	最大幅・最大長さ・重さ	備考
. 1	スクレーパー	チャート	4.3 ⋅ 7.6 ⋅ 30 g	薄茶褐色。 丸山 3 号墳東側
2	石 核	サヌカイ	6.5 · 12.6 · 252	黒褐色(剝雕面) 淡黄褐色(自然面) 丸尾1号墳北東部
3	円盤形石器	安山岩	9.7 · 10.6 · 260	淡褐色。 表採
4	小型磨製石斧	蛇紋岩	4.6 · 7.5 · 58	緑色に白の班点模様 表採
5	局部磨製石斧	安山岩	5.8 · 13.8 · 245	黒褐色。 表採
6	打製石斧	,	6.3 · 13.3 · 176	茶褐色。 薄茶褐色。 6号方形周溝蟇
7	打 製 石 器	,	15.8 · 23.7 · 1680	くぬぎ塚付近

第2節 遺 構

1 墳墓の類別

A方形周溝墓

39基の方形周溝墓は、全体を明らかにし得たものの内、主体部の構造・材質等の差異によって、次の4種類に分けることができる。

A-a類=組合式木棺

1号・2号・4号・6号・9号・11号・12号・13号・14号・16号・17号・18号・19号・21号・22号・25号・26号

A-b 類=安山岩製箱式石棺

7号・8号

A-c類=凝灰岩製箱式石棺

15号・31号・35号・39号

A-d類=凝灰岩製横口式石棺

30号・36号

B前方後円墳

今回の調査で、琵琶塚古墳後円部周溝を検出した。後円部・前方部とも周囲から著しく削りとられ、平面形は琵琶状を呈することからこの名の起りがある。従って、古くより柄鏡式の古式古墳と考えられてきた。 調査範囲が限られていた為に、全体の形状規模を明らかにするほどの成果をあげることができなかった。しかし検出した周溝から推定復原すると、全長約80mとなり、前方部に似た尖出は、ほぼ後円部の一部となるために、必ずしも柄鏡式の根拠となるものではない。

一方、調査区の中央部に土取りによる大きな凹地があり、この附近に土取塚という前方後円 墳が存在したという記録が残っているが、調査では、その存在を裏付ける遺構等を発見できな かった。

C円 墳

円墳は42基を数えた。方形周溝墓と同様、全体を明らかにし得たものの内、主体部の構造、 材質等によって次の5類に分けることができる。

- C-a類=竪穴式石室(安山岩)、丸尾7号
- C-b 類=箱式石棺(安山岩)、丸尾5号
- C-c類=横穴式石室(凝灰岩)、くぬぎ塚
- C-d類=横口式石棺(凝灰岩)、丸山8号・12号・34号
- C-e 類=箱式石棺(凝灰岩)、丸山7号・9号・10号・11号・13号・14号・16号・17号 ・18号・19号・21号・22号・23号・24号・25号・26号・27号・28号・29号・33号・ 35号
- 尚、円墳のうちくぬぎ塚古墳の北西部調査区内に存在したといわれる将軍塚古墳につい

ては、その所在を裏付ける遺構等は検出することができなかった。記録に示されたとおり割石 小口積横穴式石室であるとすれば、調査区内にはそうした類例を見い出せない。従って、将軍 塚古墳については、今後更に所在を追求する必要があるが、ここでは、記録に従って一応円墳 C-h類としておきたい。

D石棺は、材質及び構造により次の3類に分けることができる。

D-a類=箱式石棺(安山岩板石) 15号

D-b類=箱式石棺(凝灰岩切石) 12号

D-c 類=箱式石棺(凝灰岩切石) 11号・14号・16号・17号

D-d類=箱式石棺(凝灰岩切石) 7号・8号・9号・10号

D-e 類=箱式石棺(凝灰岩切石) 1号·2号·3号·4号·5号·6号

E石蓋土壙は、1基確認できた。凝灰岩1石から削り出した蓋石で、土壙を覆ったものである。

2 遺構の新旧関係

各遺構は、周溝あるいは墳墓そのものが重複した例が、9カ所にみられ、これによって新旧の関係の明らかな遺構は18基ある。

① 人 丸山 6 号墳 → 丸山 8 号墳 15号方形周溝墓 → 丸山 8 号墳

丸山8号墳は、丸山6号墳および15号方形周溝墓の周溝を切断して築かれている。

② { 1 号方形周溝墓──→丸山35号墳 丸山36号墳──→丸山35号墳

丸山35号墳は、丸山36号墳を破壊して築造され、また1号方形周溝墓を切断して築かれている。しかし、1号方形周溝墓と丸山36号墳の前後関係は明らかではない。

- ③ 19号方形周溝墓──→16号石棺 16号石棺墓壙は、19号方形周溝墓の南側周溝の一部を切断して築かれている。
- ④ 36号方形周濹墓 → 35号方形周濹墓

西A区墓道は16号方形周溝墓東辺周溝全体と重複している。また東A区墓道と東B区墓道とは、同一遺構であり、18号方形周溝墓の中央部を切断し、さらに丸山20号墳の周溝を切断している。

⑥ 竪穴遺構——————→11号石棺————→12号石棺 (D b 類)

3 古墳群の形成過程

総数 101基に及ぶ各種の墳墓と同時代の遺構は、全体として1つの墓域を形成している。それはある期間に、順次切れ間なく築造された結果による古墳群としてのトータルな姿でもある。従って、当然それに至る形成過程が存在しなければならないが、何よりも各種の墳墓が数多く群集すること自体、その背後に古墳群の形成過程を物語る実体が反映されているはずである。その実体を解明するためには、各種墳墓の構造・形態・規模やこれらの配列・占地の状況など、諸要素を総合的に分析することが必要であろう。

方形周溝墓・円墳・前方後円墳・石棺などは、相互に大きな空白を残すことなく築造されていて、しかも隣接した墳墓は、一部で切り合うことはあっても、全体としては、重複をさけるように築造されている。このようなことから、古墳群の形成過程について、次のような性格を指適できるだろう。

- ①各種の墳墓は、短期間に順次築造された。
- ②墳墓の築造・土地の選定は、無造作にでなく、一定の法則に従って行なわれた。

以上2点は、古墳群の形成過程を分析し、その実体を解明する上での、基本的な前提となる ものと思われる。

群の設定

各墳墓の占地の状態、これらの配列などを観察すると、調査区域外における未知数の墳墓を考慮した場合においても、いくつかの共通点と法則性などから、以下の8つの群としてとらえることができる。

I群 北側台地の最も高い部分を中心に分布する方形周溝墓11基からなるグループである。 (1号・2号・3号・4号・5号・6号・7号・8号・9号・10号・38号)

これらの方形周溝墓は、Aa類(1号・2号・4号・6号・9号)と、Ab類(7号?8号)からなり、他の4基は、主体部が調査区域外にあったり、消滅したと考えられるものである。 主体部の数は、6号の3基を除くと、すべて1基である。

I 群における、細部の構成を観察すると、①3号−2号−1号・4号の東西に並ぶ系列。②6号−7号。③5号−10号のそれぞれ南北に並ぶ2系列がある。さらにこれらの東側に8号および、先述の9基とは方向の異なる9号があり、9号は39号と重複を生じている。①系列の4基は規模もほぼ一定で、東西に規則的に配列されている。陸橋部の位置は、確認できた1・2号で、北辺の中央部より東寄りに1カ所設けられている。また大半が調査区域外にあって確認できなかった3号の場合も、1号・2号と同様であった可能性が強いものと思われる。②・③系列では、各々の規模は異なるが、陸橋部の位置は、②系列と③系列の10号で、周溝南辺の中央部より東寄りに1カ所設けられている。調査区域外にあって確認できなかった5号の場合も同様であろう。したがって②・③系列は、陸橋部の方向・位置において共通し、①系列と大き

く異る。

全体的には、9号・38号の2基を除くと、方形台状部の方向および主体部の主軸方位もほぼ一致する。また陸橋部に関しては、先述のように①系列では北辺の中央部より東寄りに、②・ ③系列で南辺の中央部より東寄りというように差異を生じているが、陸橋部は中央部より東隅に寄せて設け、さらに主体部と陸橋部の位置関係では、陸橋部は主体部長軸中心線に対して直行する一辺に設けられる点で共通している。

なお、I 群では、6号の3体合葬例を除くと、一墳一葬方式が一般的であり、個人墓的色彩の強い方形周溝墓群とみることができる。また9号・38号を除くと相互にきわめて近接し、規則的に配列されていることから、これらがかなり限られた期間内に築造されたことを示している。

6基のうち、11号と12号は、東西に整然と並び、13号・14号では重複を生じていた。主体部の数は、11号で4基、12号で3基、13号で1基を検出した。しかし11号では、4基のうちいずれかの主体部の構築に伴って拡張されたか、あるいは重複した別個の方形周溝墓の周溝と思われる遺構(38号)を検出したものの、前後関係は明らかにすることができなかった。また13号では検出した主体部が、方形台状部の中心より東寄りに位置することから、複数の主体部が設けられた可能性も考えられる。

陸橋部の位置は、11号・12号で北辺中央部より西寄りに1カ所設けられ、24号で南辺のほぼ中央部に1カ所確認した。

以上のように、Ⅱ 群の方形周溝墓群は、いずれも小規模で複数の主体部を有するものがあり、一部で重複が見られる点などは、先述の I 群に比較し、種々の差異を見い出し、群設定の主要な根拠ともなっている。しかし11号・12号の整然とした配列および陸橋部の方向などの共通点から、I 群①系列との関連をうかがわせる。

Ⅲ群 大型の円墳など8基(くぬぎ塚・丸山6号墳・丸山7号墳・丸山20号墳・丸尾8号墳・三段塚古墳・丸山2号墳)より成るグループでⅠ群の東側から南側にかけて分布している。 くぬぎ塚古墳は凝灰岩切石を用いた横穴式石室でCc類である。三段塚古墳・丸山2号墳は調査区域外にあり未調査であるが、主体部の棺材の一部が現在も露出しているので、Cc類かこd類であったと思われる。丸山6号墳・丸山20号墳はすでに主体部が消滅し、丸山7号墳・丸尾8号墳では、上部から攪乱が著しいものの、調査の所見を総合すると、凝灰岩切石を用いた石棺であり、Cc類あるいはCd類に属するものであろう。

これらのうち、くぬぎ塚・丸山6号墳・三段塚古墳の三基は、近接して築造され、規模もほぼ同一である。くぬぎ塚・三段塚古墳は3~4mの封土を有している。主体部の位置はくぬぎ

塚古墳の調査所見で明らかなように、封土中に構築されている。Ⅲ群の中でも、こうしたことから以上3基には1つのまとまりを設定でき、この3基をかなめに北東部と北西部へ並ぶ大小の円墳はⅠ群の2辺を囲むように配置している。また丸山35号・36号墳では、方形周溝墓との重複を生じていて、本例に関する限り、Ⅰ群→Ⅲ群への移行を裏付けている。

Ⅳ群 台地の北側斜面の円墳4基からなるグループである。主体部が確認できたものでは、、 円墳Ca類(丸尾5号墳)と同Cb類(丸尾7号墳)の2基である。これらのうち丸尾5号墳 を除く3基は、全体の西側半分ないし大半が調査区域外にある。さらに調査区域外には、りゅ うがん塚古墳があって、全体的には西側・北側への広がりが考えられる。

V群 A a 類方形周溝墓14基からなるグループである。東西にやや並列する16号・17号・18号・19号の4基の方形周溝墓、南から北へ並ぶ20号・21号・22号・23号の4基の方形周溝墓を中心に、主体部と周溝の一辺ないし一部分を確認した25号・26号・29号・33号の方形周溝墓からなる。全体的には I 群にみられた整然とした配列はみられない。

主体部を1基有するもの(16号)、2基有するもの(17号・19号・22号)が混在した状態であり、規模の大小の差と主体部の数とも、必ずしも法則性は見い出せない。

陸橋部が明らかになったものは3基で、16号は南西部のコーナー近くに設けられ、18号・22号は西辺の中央部北側寄りに1カ所設けられている。陸橋部の方向が明らかなものは3基で、いずれもⅠ・Ⅱ群と異なり周溝の西辺の中央部より北寄りにし1カ所設けられる場合(17号・22号)と南辺の西寄りに設けられる場合(16号)とがある。以上のうち17号・22号の2基の方形周溝墓の陸橋部方向は、18号と22号に挟まれた丸尾5号墳とほぼ一致している点は注意される。

すなわち♥群では、大小方形周溝墓がⅣ群(円墳群)の東側から南側を囲むように配置している。両群の間では、一部に重複を生じているものの、全体的には重複をさけて築造されている。したがって、両群の築造時期に大きな時間差は見い出せない。

VI群 台地中央部の谷部を中心に分布する大小8基の方形周溝墓(15号・27号・28号・30号・31号・35号・36号・39号)からなるグループである。15号・31号については、主体部が攪乱されて詳細を明らかにしえないが、AcないしAd類であろう。30号・36号はAd類、35号・39号はAc類である。陸橋部の方向は27号・35号が一致するだけで他は一定しない。しかし主体部の構造は石棺あるいは横口式石棺と差異はあるものの、石材はすべて凝灰岩切石が使用され、I・Ⅱ・V群の方形周溝墓の場合とは明らかに異っている。また、30号・31号方形周溝墓の中間に2基(Dd類=9号・10号)の石棺が分布する。

Ⅲ群 Ⅵ群の南側に隣接する小円墳を中心としたグループで12基(丸山 9 号・10号・11号・12号・13号・14号・15号・17号・18号・19号・34号・38号墳)からなり、C e 類(8 基)、C

d類(2基)が認められる。陸橋部の方向は丸山11号墳の北方向を除いて、すべて南西方向に 1ケ所設けられ、陸橋部の位置は、ほぼ主体部長軸延長線上にある。これら小円墳群の間隙に 7基の石棺が分布している。石棺はDd類(7号・8号)、De類(2号・3号・4号・5号・6号)である。

WI群 前方後円墳(琵琶塚古墳)と大小16基(丸山3号・4号・16号・21号・22号・23号・24号・25

南側台地最大の円墳である丸山4号墳の主体部は消滅し、他の15基

乱を受けているために明らかにしえないが、丸山4号墳を除いては、Ce類を中心とするものであった可能性が強い。丸山25号墳

なお**Ⅲ**群と前述の、**Ⅶ**群の西側調査区域外には、花見塚古墳(前方後円墳)・日焼塚古墳・石之室古墳やすでに封土を失ったとされる北側1・2号墳のほか、未知数の古墳の存在が想定される。従って、琵琶塚古墳・花見塚古墳の2基の前方後円墳を中心に、**Ⅷ**Ⅷ群および調査区域外の古墳等を加えた大きな群の設定も充分可能である。

4) 古墳群の動態

前項で設定した小支群は、各墳墓における構造上の共通点や、これらの配列の状況等から1 つのまとまりとして把握したものであった。いまこれら各群の成立過程等を中心とした群相互 の関連について、出土遺物や遺構の重複、切合いによる新旧関係を加えて、整理し、また問題 点を抽出したい。

1) I・Ⅱ・V・VIの各方形周溝墓群のうち、VI群を除く3つの群では、須恵器出現前のいわゆる古式土師器の時期に営造されたものであり、方形周溝墓において、最初に須恵器が共伴するのは、VI群の15号

群がA−a 類ないしA−b 類であり、一方Ⅵ群がA−c 類とA−d 類であることなどを考慮すれば、 少なくとも須恵器の出現期に、方形周溝墓の構造に大きな変化があったことを示している。

また、I・Ⅱ・Ⅴ群に伴出する土師器において、I・Ⅴ群に先行型式を見い出せるものの、 各群および各墳墓は極めて隣接して築造され、しかも重複・切り合いも少ないことから、これ らの営造年代に大きな隔たりはなかったものと思われる。

しかしながら、 I 群では、一墳一葬方式が引きつづき行なわれ、ある特定の被葬者の死を契機として築造されたものであり、極めて個人墓的な色彩が濃いのに対して、 II 群では、小規模な墳墓に複数の被葬者が同時にないしは相前後して埋葬され、さらには V 群では、追葬例を多く見い出すのである。このような差異は、被葬者間のいったい何に起因したものであろうか。

2) Ⅲ 群における墳墓の重複については、時間差は明らかにしえなかったが、 Ⅰ・ Ⅴ 群の出土土器に比較して、 Ⅲ 群内の墳墓にやや後出する型式が認められることや、占地の状況等を考え合わせれば、 Ⅰ・ Ⅴ 群におけるそれぞれの膨張拡大運動の結果として生じた重複部分であっ

たとも推定されるのではなかろうか。

3) 一方、方形周溝墓と円墳との関連についてはどうであろうか。

まず北側台地の頂部を中心とした I 群とⅢ群では、両者間において一部に切り合いを生じているものの、全体としては重複をさけるように築造されている。Ⅲ群にも明らかに須恵器の出土例を見ていない。切り合いを生じている点を考慮したとしても、 I 群とⅢ群の間の営造年代に隔りはなかったと思われる。しかし、 I 群を中心にⅢ群がとり囲むような占地の状況を考え合わせれば、大部分は併行して営造されたものの、 I 群にやや遅れて、Ⅲ群の一部の円墳の築造が開始されていたものとみなければならないだろう。

北側台地の北側斜面を中心とした N 群と V 群では分布状況・出土土器の比較からも、両群の営造年代に時間差は認められない。 V 群には I 群にみられた規則的な配列はみられず、むしろ両者が混在した状況でありながら、やや規模の面で優る N 群を中心として、 V 群の方形周溝墓がとり囲むような配置状況を呈している。これは I・Ⅲ群の場合とは相反する現象を示している。

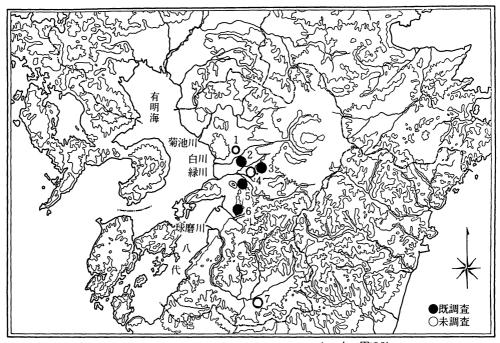
以上のように、北側台地では、方形周溝墓・円墳が連綿と併行して営まれ、木棺や箱式石棺 (安山岩)を主体部とした方形周溝墓は、横口式石棺・箱式石棺(凝灰岩)へ、箱式石棺・堅 穴式石室(安山岩)をもつ円墳は、同じく横口式石棺・箱式石棺(凝灰岩)へそれぞれ変遷を たどるのである。いずれも共存併行関係を保ち、一方で小規模化への道をたどるのである。こ の契機こそ、決して前方後円墳の出現とは無関係ではないだろう。

- 5)前方後円墳すなわち琵琶塚古墳の成立時期については、直接的な手がかりを持っていない。後円部周溝から少量の土師器と円筒埴輪片を検出したのみである。土師器の形態的特色からみれば、くぬぎ塚古墳出土のものに最も類似していることから、ある程度の位置づけは可能である。仮にくぬぎ塚古墳と相前後して出現したとすれば、Ⅲ群さらに方形周溝墓の築造過程において、すでに南側台地に前方後円墳が出現していたことになる。
- 6) WI・WIの大小円墳群では、遺物の面では、須恵器第Ⅰ型式から第Ⅲ型式のものまで出土していて、築造年代にかなりの隔りがあったことを示している。しかし、これらはほとんど重複・切り合いを生じていないにもかかわらず、築造時期や配置状況から、まとまりとして把握することは困難である。仮に配置状況からいくつかの小支群を設定した場合でもWII群南端の11基では、第Ⅰ型式(丸山3号墳)から第Ⅲ型式(丸山4・丸山28・丸山32号墳)に比定しうる須恵器まで認められるといった具合である。

(6) 熊本県の方形周溝墓

熊本県において、方形(円形)周溝墓として確認、またはその可能性がある遺跡は第 図に 示す7遺跡である。

全体的にみると、県南の球磨郡錦町・亀塚遺跡(第 図の6)を除けば、すべて県の中央部 に位置する。方形周溝墓の存在が認識され、調査にあたって注意を払われるようになってから 10年余しかたっていない。



第147図 県内方形周溝墓分布図

- 上の園遺跡
- 2. 広木・水源町遺跡 6. 高塚遺跡
- 5. 塚原古墳群
- 3. 塔木遺跡
- 4. 秋永遺跡
- 7. 亀塚遺跡

これ以前に調査された遺跡に方形周溝墓がなかったということは断言できず、また、今後発 見される可能性も強いが一つの興味ある分布を示している。

秋永遺跡、広木・水源地方形周溝墓については付論に調査者の報文を収録したので、上の園 遺跡、高塚遺跡、亀塚遺跡についてその概要を記す。

上の園遺跡 (熊本市竜田町上の園)

白川の右岸の、舌状に発達した丘陵上に位置する。縄文~古代にわたる複合遺跡であるが、 古墳時代前期の方形周溝墓が確認された。宅地造成に伴ない、熊本市教育委員会で調査中、防 災工事という大義名分のもとに業者が遺跡にブルドーザーを入れ、検出されていた遺構・遺物 は詳しい調査もされぬまま消滅してしまった。この遺跡においては、一辺が15m前後の方形周 溝墓が少なくとも4基確認され、さらに調査を進めればその数も増えたと思われるが、充分な

調査も行なわれず消滅してしまった。

高塚遺跡 (八代郡竜北町高塚)

昭和31年、耕地の天地返しによって土器が発見され、花岡興輝氏によって調査された。以下 花岡氏の報文をもとに概要を記す。

標高約45 m、面積約1 町歩に亘る平垣な台地の北西端に立地する。L字形の溝が検出され、溝中より土師器を出土している。溝は東西20 m、南北18 m位で、幅は90cm~1 m、深さ70~90 cmで、ほぼ水平に堀り込まれている。溝中から出土した土器はすべて土師器の壺で、 $1 \sim 3$ m の間隔で埋置されていた。耕作・土圧等により、破砕されたり、部分的に取り上げられたりで、破片になっているものも多いが、総数は約20個程である。大・小の二種があるが、複合12線をなすものが多く、すべて底部穿孔である。

以上が花岡氏の報文をもとにした遺跡の概要である。当時、方形周溝墓の存在は確認されておらず、周溝の全体象・主体部等については不明であるが、近年にいたり、方形周溝墓として再評価されるにいたった。

亀塚遺跡 (球磨郡錦町西)

亀塚古墳群の一角から箱式石棺が出土し、その棺を中心に、ほぼ等距離の2地点から土師器 を出土したと伝えるが、詳細については不明である。

この遺跡については資料も乏しく、判断の材料を欠くが、参考書としてあげておく。

- 注1) 大場磐雄「東京都八王子発見の方形周溝特殊遺溝」日本古考学協会発表要旨 1964 同 「方形周溝幕」『日本の考古学』Ⅲ、月報3 1965
- 注2) 花岡興輝「八代郡竜北村における土師器埋没遺跡について」熊本史学第11号、1957

塚原古墳群

~~~~あとがきにかえて~~~~

塚原古墳群の調査における遺構・遺物については、以上に記した通りである。これらの内容を総括した所見と問題点を整理して結語としたい。

- (1)塚原古墳群は、熊本平野の南端に位置し、緑川の支流である浜戸川および小支流によって 形成された舌状台地上に立地している。調査の結果、古墳時代前期末に比定しうる方形周溝墓 から、古墳時代後期末の小円墳に至るまで、墳墓の形態・構造を変容しながら連続して築 造されていることが明らかとなった。その数は、方形周溝墓39基、円墳40基、前方後円墳2基、 外部施設を持たない石棺18基、石蓋土壙墓1基、竪穴遺構1、墓道状遺構2、さらに、歴史時 代の土壙墓46基を検出するなどの成果をあげることができた。
- (2) 方形周溝墓は、主体部に木棺(Aa類)、安山岩製箱式石棺(Ab類)、凝灰岩製箱式石棺(Ac類)、凝灰岩製構口式石棺(Ad類)、の4種類があって、出土土器の観察から、Aa·Ad類からAc·Ad類へ時間的に移行することが確かめられた。

これら方形周溝墓の主体部からは、人骨は全く検出できず、したがって被葬者の年令・性別などは明らかにすることができなかった。副葬品についても、6号第1主体部に鉄剣・玉類、17号第1主体部に鉄剣1を検出したのみで、全体的に貧弱である。

周溝は、ほぼ方形にめぐり、一辺の一ヵ所に陸橋部が設けられる。その際、一辺の中央部より一方のコーナーに寄せて設けることが一般的であり、陸橋部がどの一辺に設けられるかについては墳墓ごとに異なっている。これらを整理すると以下のようになる。

(1比辺の東寄り= [群①系列(1・2号)

(2 北辺の西寄り = Ⅱ群 (11号) Ⅵ群 (15号)

(3)南辺の東寄り= | 群②系列(6・7号)

③系列(10号)

(4)西辺の北寄り = V 群 (17・22号) Ⅳ群 (35号)

(5)西辺の南寄り=Ⅳ群(30号)

(6)南辺の中央 =Ⅳ群(36号)Ⅱ群(32号)

以上のとおり、陸橋部の位置は、小単位ごとにある程度規制されていたことがうかがわれる。しかしながら、 I 群では①系列で北辺の東寄りに、②・③系列は南辺の東寄りというように、小単位の中においても東西の一線を境に相反した位置に設けられている。こうした関係は、築造過程において陸橋部が機能していたことによる意識的なものであるのか、あるいは微地形の変化を考慮したものであるかは詳らかではない。いずれにしても、ごく短期間に相次いで築造されたことを示している。

規模は、一辺25.5mから、一辺10m内外のものまであり一定しない。これは群の設定の項で記したとおり、特にⅠ・Ⅳ群では、1基ないし2基の大型の方形周溝墓を核として、周辺に複

数の小規模なものが囲むように配列されることから、小単位内においても、被葬者間にある程 度の優劣の差があったことを示している。

主体部の数は、以下のとおりである。

- (1)1 基を有するもの=11基(1号・2号・4号・7号・8号・9号・16号・30号・31号・36号・39号)
- (2)2基を有するもの=3基(17号・19号・22号)
- (3)3 基を有するもの=2 基 (6 号・35号)
- (4)4基を有するもの=1基(11号)

以上のうち、2基を有するものは、すべて切り合いを生じていて、追葬されたものであろう。 したがって、数例のものを除くと、一墳一葬方式が行なわれていて、ある特定の個人の死を契 機として墳墓が築造され、さらに追葬されたことを示している。3基および4基を有するもの はそれぞれ重複はみられず、方形台状部に整然と配列されて築造されていることから、短期間 に相次いで築造されたものか、あるいは同時に分葬されたことを示している。

塚原古墳群発見の方形周溝墓は、すべて古墳時代のものであり、上限は古墳時代前期末を遡らないだろう。また下限は、横口式石棺を主体部に持つものがあり、古墳時代後期前半に位置づけられる。

なお、本遺跡出土例を含め、九州地方出土の方形周溝墓は、すべて古墳時代のものであり、 現在のところ弥生時代に属する明確な例はない。このような現象について古墳時代における方 形周溝墓に対して、このような名称を用いるについて疑問視するむきがある。主体部に木棺や 箱式石棺をもつものについては、本地域においても弥生的な伝統を強く残している。塚原古墳 群では、前述のとおり横口式石棺を主体部とするものがあり、これは、明らかに従来知られて いる「方形周溝墓」の主体部とは、趣を異にしているが、塚原では少例を除いて、従来どおり の、弥生時代の伝統的な墓制である、「石棺」や「木棺」が引き続がれている。一方、塚原の 調査では、円墳と呼んできたものの中には、いわゆる「円形周溝墓」があるかもしれないが、 この報告書では、円墳と記載している。

(3)円墳は、主体部に竪穴式石室(Ca類)、安山岩製箱式石棺(Cb類)、横穴式石室(Cc類)、横口式石棺(Cd類)、凝灰岩製箱式石棺(Ce類)、があり、方形周溝墓に盛行した木棺は全く認められない。

人骨は、丸尾 5 号墳(Cb 類)から、男女 2 体の合葬例が認められ、男性人骨の左体側に沿って鉄剣 1、女性人骨の頭部付近に竪櫛 1 を検出した。他の古墳は攪乱が著しく、人骨を検出することはできなかった。

副葬品は丸尾5号墳の他は、丸山3号墳からガラス玉2・滑石製管玉1を検出した。

周溝は、ほぼ正円にめぐり、わずかに楕円形にめぐるもの(丸山8・23・24・34号)が認められる。周溝の一部には陸橋部が1ケ所設けられる。その方向は西部ないし南西部方向に限ら

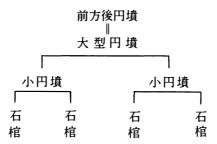
れ、その位置は主体部の長軸延長線上にあることが通例である。なお、横口式石棺を主体部と する丸山10・34号墳では、開口方向と陸橋部の位置がほぼ一致している。

規模は、周溝の外径が38mから8m以下のものまであり一定しない。南側台地の丸山4号墳を除くと、すべて北側台地の頂部中心に集中している。単位群ごとの特色はⅣ群Ca・Cb類、Ⅲ群でCc類、Ⅷ群でCd・Ce類、Ⅷ群でCe類から成っている。すなわちこれらの変遷過程を図式すると以下のようになるだろう。なお、方形周溝墓(Ad類)はCd類以降消滅するものと思われる。

主体部は一墳一葬方式であり、複数の主体部を持つものは皆無であった。

以上のように円墳の一部は、方形周溝墓の出現時期とほぼ一致しながらも、一部併行し、古墳時代後期末にまで営造される。この間、全体的には小規模化の傾向をたどり、主体部では竪穴式石室・箱式石棺から、横穴式石室・横口式石棺へと移行し、石材も安山岩から凝灰岩を使用したものへと変化していることが明らかとなった。

また、W群・W世間では、前方後円墳・大型円墳を中心として、周囲を小円墳群がとりまき、 さらに円墳群の間隙をぬうようにして石棺が分布している。このことは、前方後円墳の成立を 契機として、被葬者間に明確な区分が生じていたことを示している。これらの関係を図式化す ると以下のようになる。



(4) 塚原古墳群の調査は、中部九州における古墳時代前期後半より古墳時代終末期にいたる墓制の一端を明らかにし、しかも本地域がすでに前期古墳文化の圏内にあったにもかかわらず、塚原では弥生的墓制としての方形周溝墓が引き続き踏襲され、質的変化を示しながらも古墳時代後期末にまで至っている事実を明らかにしたのである。

しかも、同一墓域内で方形周溝墓と高塚古墳が共存することなど、これらを支えた地域社会 そのものの構造を示すものであろう。こうした塚原古墳群の発展過程の解明のためには、墓域 の形成に深くかかわっていた集落地の発見につとめ、両者を統一的にとらえる作業のなかで明 らかになるものと思う。

付 論

目 次

1	塚原古墳群周辺の地形・地質 籾	倉	克	幹
2	塚原中世墳墓・丸尾5号墳出土の人骨について内	藤	芳	篤
3	塚原古墳群出土の馬歯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	倉		真
4	木棺木質部の鑑定大	迫	靖	雄
5	塚原古墳群の位置決定について杉	元	安	弘
6	秋永遺跡発見の方形周溝墓 緒	方		勉
7	広木・水源町遺跡発見の方形周溝墓	田	紘 健-	<u>—</u> 一郎
8	火君と塚原古墳群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	本	雅	明

塚 原

熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査熊本県文化財調査報告第16集熊本県教育委員会発行 1975年3月

付論1 塚原周辺の地形地質

九州農政局 籾 倉 克 幹

まえがき

昭和47年夏筆者は、九州縦貫自動車道予定線上の塚原台地の土層断面を地質学的側面から観察する機会をもった。

その後、休日を利用して熊本市およびその周辺の遺跡の土層観察と記載をぼつぼつ続けている。構成土層の観察は肉眼による定性的判定の段階を出ていない。

しかしその土層層序は、重鉱物や粘土鉱物の分析がなされている遺跡 (大峯)、C ¹⁴ 分析により年代測定のなされている遺跡 (大峯・櫛島) の土層との対比が可能であり、塚原台地とその周辺域における自然環境の生い立ちを読みとることができる。

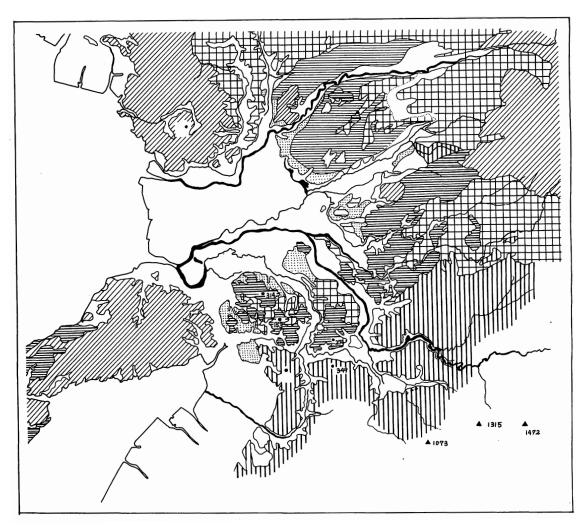
本稿は塚原台地および周辺域の遺跡立地を地形・地質的側面からまとめたものである。挿図1に熊本市周辺の地質図、挿図4に塚原周辺地質断面模式図、表1、2挿図3に構成地質、挿図2に土層対比、挿図5に地史をそれぞれ示している。以下、第4紀地質に焦点をあてながら説明を加える。

この報告をまとめるにあたり、現地および室内でいろいろと教示と討論をしていただいた高野啓一(熊本県立熊本第二高校教諭)、緒方勉(熊本県教育庁文化課参事)ほか熊本第四紀研究グループの方々に厚く感謝する。

遺跡の立地

塚原古墳群は、北緯32度41分、東経130度44分30秒を中心とした区域に群をなして存在し、 火山灰におおわれた洪積台地が沖積低地にのぞむ部分に位置している。国土地理院発行の2万 5千分の1宇土図幅(昭和45年発行)の南東部、東阿高と塚原という地名表示のほぼ中央で、 30m等高線にかこまれる区域に相当している。

挿図1は、熊本平野およびその周辺の地質概要と遺跡分布を示したものである。塚原遺跡もそうであるが、これらの遺跡に共通するのは、異った地形区の境界もしくはその周辺に立地ししている。すなわち、洪積台地が、沖積低地に接する段丘崖にほどちかいところに分布密度が高い。沖積低地にあるものは、標高5m以上の微高地に立地している。この傾向は、縄文期か



凡例 この図は赤熊本県地質図をもとに 一部改変して作成した。



図1 熊本市周辺地質概要図

ら古墳時代を共通した特徴となっている。また、背後に丘陵性山地をひかえていることも共通 している。

地形区の境界付近は屢々、湧水を見ることができ、現在でも植物相が豊富である。豊富な植物相は、動物相も豊富にさせ、連続干天や連続降水の影響を受けにくい湧水と云う安定有能水源の存在とともに古代人にとっても魅力ある土地であったと想像される。

・地質時代を通してみると地形分布ことに海水域と淡水域、低湿地と乾燥した台地、山と川の 分布には大きな変化があるのが普通である。

熊本平野およびその周辺域もその例外ではない。しかし、過去1万年前にしぼってみるとその変化はそれほど大きくなく、基本的には、現在と殆んど変っていない。もちろん過去1万年間には、かなり大きい気侯変動と海水準(一40m→+ 4m→- 3m→ 0m)があり、その地形への影響も無視できない。この間の地形変化は、内陸部への埋積作用の進行による低位段丘の埋没(一部)と弥生小海退によるミオと微高地形成とがあげられる。しかし、山地・丘陵・台地・低地の基本的分布の変化にまではいたっていない。熊本平野およびその周辺域において、これまでに発見されている最古の人類遺跡はその立地が今から1万数千年~2万年前とされているが、その分布は限られている(古川博恭ほか1966:大峯遺跡)。豊富に分布するのは縄文早期以降のものである。すなわち、大峯時代は現在の地形環境がつくられつつあるときであり、縄文時代には地形環境の骨格が完成し、現在のそれと基本においてはほぼ同様なものであったと考えられる。

構成地質の記載は表1に示すとおりである。本稿では地形要素ごとに説明する。

背後の山地と丘陵

遺跡の西方背後は、山頂標高 314mの雁回山、南方背後は山頂標高 153mの高岳山およびこれらの小起状山地に連なった、標高60~ 100mの丘陵からなっている。小起状山地では土層の発達が概して悪く、中生層の砂岩・頁層が露出することが少なくない。これらの山地は数百万年前にはすでに山地を形成しており、その後の水成堆積物はすでにこれらの山地にアバットする形で堆積している。火山灰などの降下物は浸食、運搬作用をまぬがれたところ以外は残っていない。現植生は針葉樹・広葉樹の混交林である。丘陵の構成地質は小起状山地と同様であるが、背面標高が80~ 120mとほぼそろっているのと、背面付近での風化が深部におよんでいるのが特徴となっている。これらの特徴は、広範な広がりで共通にみとめられ、第4紀初頭以前に長年月におよぶ浸食基準面の停滞期の存在を暗示させる。高位段丘堆積層は本地域では分布が詳らかでないが、この堆積層の基底面を示す可能性も大きい。丘陵背面の一部には浸食作用をまぬがれた阿蘇火砕流堆積物が分布する。

中生層からなる背後山地・丘陵のさらに南は松橋一甲佐をむすぶ断層を距てて、花崗岩・片 状ホルフェルス、片麻岩および大理石からなる丘陵性山地がある。また、塚原東北方12 kmの船 ※ 野山と西方10 km宇土半島には両輝石安山岩ないし角閃石・両輝石安山岩の溶岩もしくは火砕流 からなる山地がある。

熊本周辺沖積火山灰土壌対比図

第2図

— 308 —

表 1 塚原台地周辺構成地質一覧表

	ŧ 1	- 塚原	台地周辺構	成地質一覧表		
地質	時代	地	層 名	構成地質	主要分布(塚原台地周辺における)	記載・遺跡との関係
	沖	34. 54 EP	Shink of U. Mindle	未固結粘土・シルト・砂礫	有明海沿岸低地、緑川などの河川沿 岸低地	標高4m以下の低地は海成沖積層からなる。
	積世	沖 積 層沖積世風成 層	沖積低地堆積物 沖積段丘 ク クロクボ	, ,,	城南町市街地などの低位段丘下位面	沖積世前期の堆積物・一部に低位段 丘との混同もある。
		(集種層を含む)	アカホヤ等	黒色腐植質土壌 未固結火山灰	低位段丘中位面およびこれより古い 段丘表面 グ	台地上では2~3枚の黒色バンドを 形成し、上位より弥生、中位より縄文、 下位より無土器の文化遺跡が産出。
	洪積世	洪積	阿蘇新期ローム	黄褐色ローム	低位段丘高位面およびこれより古い 段丘表層	角閃石が多く、紫蘇輝石、普通輝石 を少量含むローム層で一次と二次層 とがある。縄文土器の材料となって いる。
新	Œ	層および洪	低位段丘堆積層	半固結砂礫 (表層半ぐされ) (二次シラス相)	舞原台地、託麻台地、保田窪段丘 (Ta面) (Ho2面)	加勢川・木山川の北岸と南岸で段丘 面の対比が完成していない。少なく とも2段以上に細分できる。いずれ も段丘面上に遺構多し。
		積世火	中位段丘堆積層	As o4 の洗出し(表層クサレ) (二次シラス)	託麻台地(小峰面) 菊池台地	軽石流堆積物A so 4 の堆積直後 の 洗い出しによって形成されたもので、 広い分布は託麻台地にある。
生		八山放出物	A s o 4 (軽石流堆積物)	トスローム・八女粘土相 非溶結軽石流(シラス相) 中 〃 (灰石相)	塚原台地、乙女台地、御船原 塚原台地谷部、井芹川右岸壁	阿蘇カルデラ形成と密接な関連をもつ最後の火山塊(放)出物で、角閃石を含む軽石流堆積物である。拠出は一回限りでなく、多数のFlowunit(トスローム、八女粘土、灰石)からなる。分布は中北部九州。
,			A so%間堆積層 (花房層相当層)	固結ローム~砂礫	ク 同上の一部	下記Aso 3 抛出後、上記Aso 4 拋出 前の侵食谷をうめる堆積物で、菊池 台地では湖盆を形成している。
代			A so 3	非溶結~弱溶結 岩滓流堆積物	北甘木台地の一部	阿蘇カルデラ形成と密接な関連をもつ火山増出物は、四大別できるが、その3番目のもので、本質岩塊は、黒褐色岩滓からなる。(北甘木台地では長石斑晶の多いAso 3c)
			Aso外間堆積層	降下火山灰・岩滓 溶岩流・砂礫シルト	北甘木台地北斜面、砥川	本層の分布は広いが近傍で障認できるものとしては左記2区域である。主として砂礫・シルトの互層からなる 砥川付近では溶岩流と降下火山灰を夾在している。
			A so 1	中~強溶結火砕岩 (溶結凝灰岩)	低川南東 500m 岩戸川左岸	阿蘇カルデラ形成の初期の火砕流堆 積物で軽石流・岩滓流などからなる が当該地域ではすべて溶結している
	洪積~		先A so 1砂礫層	凝灰岩・半固結砂礫	,	阿蘇火砕流塊出前の水成堆積物で、 ここでは高位段丘堆積層とさらに古 い砂礫層を一括している。
	鮮新世	基	船野山安山岩類	溶岩~凝灰角礫岩	船野山	三角火山岩類・金峰山火山岩類とほぼ同時代の安山岩類で、両郷石安山岩 ・角閃石・輝石安山岩の熔岩・砕屑岩からなる。
中生	#	盤岩	御船屠群	砂岩・頁岩・礫岩	雁回山、高岳山など台地背後丘陵	中生代白亜紀の泥・砂礫の固結した 岩石
先中七		類	肥後変成岩類	花崗岩・片麻岩・片状ホルン フェルス・大理石	松橋-甲佐線以南の山地および丘陵	古生代の海成層が、地下深所の高温 高圧 (一部低圧) 条件下におかれ、 変成作用をうけてできた岩石・硬質 岩が多い。

これらの火山岩類は、金峯山などとともに第4紀初頭における熊本地方の火山活動を示す証拠であるがその詳細はあきらかでない。

※ 火砕流;火山砕屑岩の略;火山岩片・火山砂・火山灰などが集合・団結してできた岩石。

※※ 両輝石; 普通輝石と紫蘇石をふくむ安山岩。

中位段丘 - A T 面 (塚原台地)

中位段丘は阿蘇火砕流堆積物 A s o 4 の堆積原面に相当し、山地および丘陵背面(高位段丘か?)をのぞいて最も高い地形面を形成している。塚原古墳群のある塚原台地は、この段丘面に属し、前述した丘陵背面から連続し、ゆるやかにうねりながら南から北へ高度を減じる(標高30~60m)段丘面と、これをとりまく段丘崖とからなっている。段丘崖には阿蘇火砕流堆積物 A s o 4 (一部で溶結しているが大半は非溶結の軽石流堆積物からなる)の露頭が所々に存在している。段丘面上は表土・耕作土のほかに黒色腐植土、暗褐色火山灰、硬質黒褐色粗粒火山灰、阿蘇新期ロームなど主として降下火山灰が2~3 mの厚さで堆積している。これらの火山灰層下の A s o 4 は、数 m もしくはそれ以上の厚さにわたって風化変質している。ことに主要構成要素である軽石は、風化による粘土化に伴なって扁平につぶれて軟質淡色粘土レンズになっていることが多い。塚原近傍におけるこの種の段丘は、乙女台地(標高50~80m)、御船原(標高50~60m)、北甘木台地(標高40m ±)などがあり、住居址(縄文期)、墓址(古墳期)となっている場合が多い。この種の台地は、阿蘇カルデラ火山の周辺には広く発達している。

阿蘇火砕流堆積物は松本唯一(1943)によって〝阿蘇溶岩〟と呼ばれたもので、阿蘇カルデラ形成と密接な関連をもつ火山活動の産物であり、溶岩相も一部にはあるが主として火砕流からなっている。火砕流は軽石もしくは岩滓が大量の火山ガス(高温水蒸気)、火山灰、火山砂、異質岩片と混然一体となって火口から排出され、一部は空中にふき上げられるが、大半は、いわゆる熱雲となって山体を流下し、野を越え、山を越えて運搬・堆積したものである。溶岩流が粘性流であるのに対して、火砕流はまさに粉体流であり、流動の性格は雪崩や土石流に似ているといわれている。火砕流の流下速度は溶岩流の10数倍におよんでおり、堆積物の厚さの割には到達距離が大きいのが特徴である。排出時の本質物質の温度・量によっても差があるが、谷埋積の部分では概して溶結し、流動過程で次第に体積を減じる(単位体積重量は増加)ことに伴なって、荷重をまし、これによって軽石がつぶれることによって生じた岩石である。したがって大半は、火砕流の流動停止に際してできるものである。しかし、ときには粘性流動をつづけ、普通の溶岩と全く見かけのかわらないものができることもある。阿蘇溶岩には、まさに、溶岩、の名にふさわしいものもあるが、礫まじりローム、または亜円礫まじり軽石層とも呼べるものが大半である。一括名称としては、長らく呼びならわされている〝阿蘇溶岩〟が適切かもしれないが、誤解をまねかないために本稿では〝阿蘇火砕流堆積物〞で統一している。

阿蘇火砕流堆積物は、宮本ら(1962)によって新旧2大別されているが、小野・曽屋(1968) 渡辺・小野(1969)、籾倉・中山(1974)により、Aso-1,-2,-3,-4の4大別が提唱・確 認されている。(表 1 参照) 宮本らの新期阿蘇火山噴出物層、郷原ら(1964)の八女粘土層は、阿蘇火砕流堆積物 A so 4 Aに相当している。鳥栖ローム層は郷原らが記戴したものであるが、これに相当するものが本地域でも A so 4 (八女粘土層タイプ) とセットになって分布している。阿蘇を中心とした中北部九州に広くほぼ同状態での分布が確められており、 A so 4 と一連の阿蘇火砕流堆積物と考えられる。火砕流堆積物中の炭化本片の C ¹⁴ 年代の分析結果は、八女粘土層が 33000 ± 3000 年 B.P (G a k - 282) 鳥栖ローム層が30800 ± 800年 B.Pとなっており、 A so 4 A に引続く阿蘇カルデラ形成に関与する最後の噴出物であろう。

以上のべたとおり、中位段丘面は阿蘇カルデラ形成に関与する最終期の排出物(火砕流堆積物)の堆積原面である。したがって水成堆積物の堆積面と異なって、埋積旧地形を反映したうねりをもっているわけである。これが熊本周辺における中位段丘AT面(古川・籾倉 1971, 1974 籾倉)の特徴である。AT面の表面は浸食に対して強くないため、うねりの低まりは集水域が広くなり、ガリーから樹枝状開析へと進行し(排水条件は良好)ている。AT面の発達のよい菊池台地や託麻台地では、阿蘇火砕流堆積直後の流水浸食によりAT面よりやや低い、うねりの少ない地形面が形成されている。この地形面上には、数 mの洗い出し砂礫がのこっている。これをAT2面もしくは K面と呼ぶ。この段丘面は、乙女台地(標高50~80 m)、御船原(標高50~60 m)、北甘木台地(標高40 m±)など広範に発達している。この段丘面上に発達する表層地質~土壌は、AT面のそれとかわらない。なお、これらの段丘面上には、縄文期および古墳期の遺跡が数多く分布している。

低位段丘群一Mh面·Tk面·Ho面

阿蘇火砕流堆積物 A so 4 (鳥栖ロームを含む)の堆積原面を大幅な不整合で切って、数段の河岸段丘が緑川・御船川・浜戸川沿いおよびその周辺に発達している。ここではこれを低位段丘群と総称する。これらの段丘面は、A T面がゆるやかなうねりをもつのとは対照的に、平

表 2 構成地質土壌成分表

	±	壌	成	分	Bio	gHb	ьнь	Ну	Au	Mg	重鉱物	Q 2	ブサ	ハロイサ	モンハロト	1	アフ エ ロン	水サ ハイ	
I	攪乱土																		
I	表層黒土	(弥生~古	(墳)									0					0		
	沖積火山	灭(縄文晩	期)																
IV	大峯 [黒	土(縄文早	期・押型	文土器)															
V	明褐口一	ム(阿蘇新	前ローム)		0	0	0	\triangle	0	0	0	_	0	0	0		_	
VI	大峯Ⅱ黒	土(旧石器	;)																
VI	褐色ロー.	ム (阿蘇新 土質)	ガローム)		_	0	0		0	2~5	0	0	0	0	0			0
VII	鳥栖ロー	4			Δ		0	© 33~45		© 34~47	9~10		0				0		
IX	Aso 4 ((八女粘土)				_	0	50	Δ	© 50	5~12							0	

滑であり、かつ例外なく有明海に向って高度を減じ、段丘面間は、まず例外なく段丘崖を介して接する特徴をもっている。これらの段丘群は塚原台地およびその周辺では上・中・下の三面に区分できる。

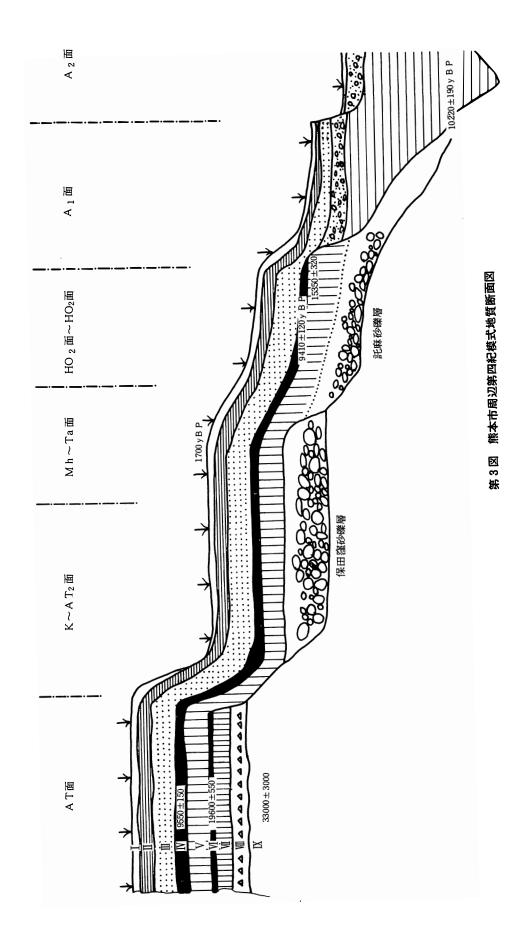
上位面は、塚原台地から浜戸川を距てた対岸の舞原台地の段丘面がその標式地となっている。標式地では段丘面は標高33~35 mと平坦で沖積面との比高は20 mにおよんでおり現土地利用は畑である。この段丘の骨格は主に阿蘇火砕流堆積物 Aso 4 からなり、これを不整合に切って厚さ15 mもしくはそれ以上の砂礫層が堆積している。この砂礫層は、基盤岩類の中粒亜角礫と細礫からなる相、Aso 4 Aのあらい出しの軽石と中細砂からなる相、偽層のよく発達する礫まじり砂層からなる相などからなっている。前者はこの段丘砂礫層の上流もしくは下部,後者は、下流もしくは上部によく見られる。この上位面(舞原台地では Mh面)を形成する砂礫層をおおって黄褐色ローム層(阿蘇新期ローム層)が、堆積している。黄褐色ローム層は厚さ1~1.5 mで下半部は段丘礫をまじえており、降灰がこの砂礫層の堆積中からはじまっていることを示している。このローム層の重鉱物の含量比は2~5%と低いが不透明鉱物のほかは紫蘇輝石が多く、角閃石を6~10%含んでいるのが特徴である。このローム層は、低位段丘上位面を整合的におおっていること、および鉱物組成からして、熊本市東方の託麻台地に分布する阿蘇新期(中部)ロームに対比される。

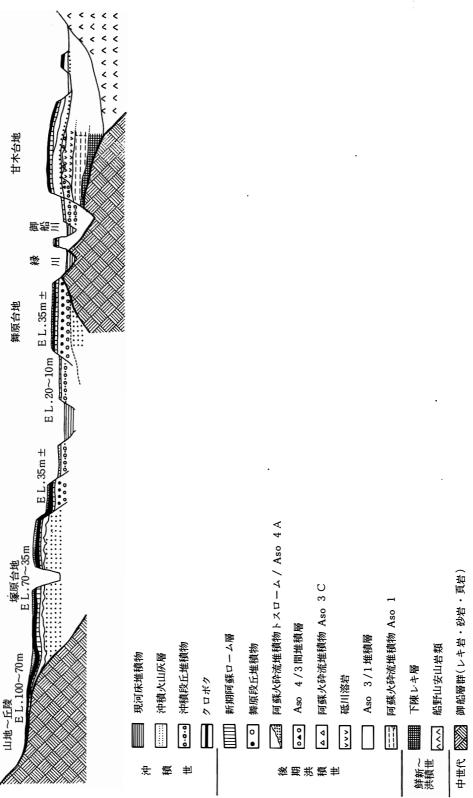
中位面は、浜戸川中流右岸鰐瀬にその分布があり、遺跡近傍では、塚原部落の載る面がこれに相当している。構成砂礫、表層堆積物について、充分調査がゆきとどいていない。おそらく、上位面形成後、下位面形成までの間の一時的な基準面上昇期の産物であろう (Ho2面)

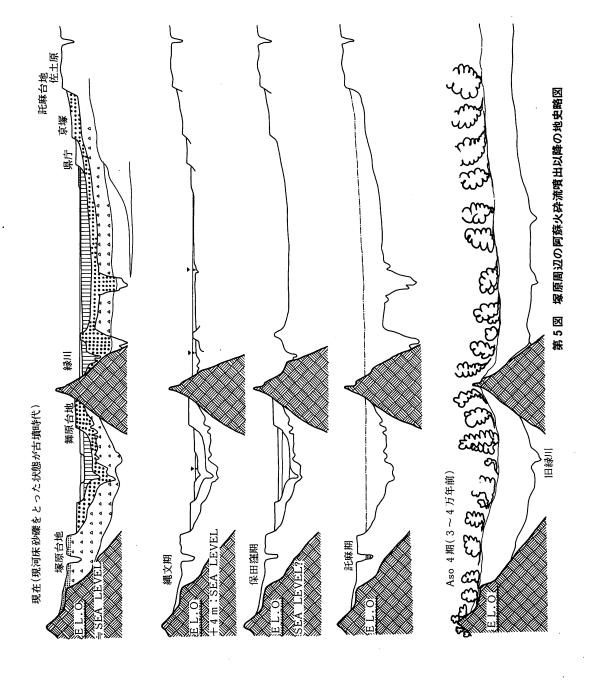
下位面は、浜戸川沿岸に広く分布する沖積低地と3~5 mの比高をもった段丘面である。上流部では、現河床との比高が10mにも達しており下流部では沖積面下に埋没している。段丘を構成する地質はルーズな細~中粒礫と砂、一部にややしまった青粘土からなっている。段丘上には明褐色ローム層はのらず、沖積腐植の集積がみられる。この地形面と、沖積低地上位面とは、格的にもよく似ており図1でも区別を明瞭にしていない。土地利用は水田と居住地が多い。

沖積低地

標高 6~15mの低平地で有明海にのぞむ沖積低地は浜戸川氾濫原に発達する未固結砂礫および粘土からなり、沖積平野に連続している。主たる土地利用は水田で、湛水田が多い。構成地質は未固結砂礫および粘土からなり、標高 5 m 以浅は海成層が多く、その基部のものは、C¹⁴分折の結果約 10000 Y B Pのデーターがでており、櫛島遺跡の 3 層に対比される。すなわち、櫛島遺跡で数m 堆積する間に、有明海底では数10m の粘土が堆積したことを意味している。







塚原

一 熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査ー 熊本県文化財調査報告第16集 熊本県教育委員会発行 1975年3月

付論 2 塚原中世墳墓・丸尾 5 号墳出土の人骨 について

長崎大学医学部

内藤 芳篤

Ι まえがき

塚原遺跡の発掘調査において、歴史時代の墳墓46基が見いだされ、これらの墳墓から火葬骨2体および小児骨1体を含む合計39体の人骨が発掘された。しかしながらその保存状態は不良で、大部分は骨格のごく一部を残すのみであった。辛うじて性別を推定し得たものは男性12体、女性11体で、その他の13体は性別不明であった。

人骨の年代に関しては別項で述べられているように、考古学的所見より墳墓の大部分が中世 初期に営まれたものであり、近接する尾窪中世墳墓群より多少古いものと考えられている。こ うした理解のもとに本人骨をここでは中世塚原人とよぶことにする。

中世尾窪人 に関しては、すでに報告したように強い時代性が見られ、その形質は現代中部九州人よりも中世鎌倉人に類似したものであった。

著者は本資料から九州における中世人の詳細な検討をさらに進めたいと考えていたが、上記のとおりその保存状態から無理であった。したがってここでは断片的になるが、観察あるいは計測のできた例について所見を述べることにする。

表1. 人骨資料

Ⅱ所見

人骨の資料数については表1に示すとおりである。

(1) 頭蓋骨

1) 脳頭蓋

 成人骨
 火葬骨
 小児骨

 男性
 1 2

 女性
 1 1

 不明
 1 3
 2
 1

 計
 3 6
 2
 1

脳頭蓋は骨片を残すのみで、頭型等を知ることはできなかった。ただ頭蓋冠をある程度接合できた女性3例(6号、7号、42号)のうち、42号人骨では残っていた右側頭蓋冠の状態から見て頭骨最大長が著しく長く、長頭をうかがわせるものがあった。

2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋では全例共に上半部を欠いているので顔型を知ることはできなかったが、上顎骨については男性(1号、5号)女性(2号、6号)それぞれ2例ずつについて観察可能であった。 男女共に上顎骨体の発達が悪く、前面の陥凹がひどく、とくに女性の6号人骨では拇指頭大の 著明なくぼみが見られた。次いで歯槽側面角では計測はできないが、観察上は女性の2号、6号両人骨共に明らかに小さく、歯槽性突顎が著明であった。ちなみに下顎骨と咬合させてみると、いわゆる反っ歯のひどいものであった。男性の場合は2例共にはっきりした歯槽性突顎を認めることはできなかった。

下顎骨 男性 3 例 (1 号、5 号、3 7 号) および女性 5 例(2 号、6 号、7 号、1 7 号、4 2 号)が見られ、ある程度残っていた。

男性では37号人骨を除いて、他の2例では比較的大きく、頑丈であった。オトガイ高は36mm(1号)、33mm(5号)で、前者は2の下に、後者は2とMとの間にそれぞれオトガイ孔が見られた。また両例共に咬筋粗面がよく発達し、下顎枝も聳立し、長径に比して幅径が広いが、下顎切痕はかなり深い。37号人骨は歯槽の部分に骨吸収が見られ、下顎枝も後傾がひどい例であった。

女性では全体として諸径が小さいのは当然であるが、その割りには骨体が厚く頑丈な感じであった。また2号人骨のオトガイ孔は両例共にP,の下にあるが、孔が著しく大きかった。

3) 歯牙

歯は丁植したものの他に死後脱落したもの、あるいは歯槽部破損により歯のみが残っている もの等が見られた。

観察した範囲では、いずれも鉄状咬合で、鉗子状咬合を思わせる例は認められない。咬耗度は一般にひどく、またムシ歯の例がかなり多い。なお男性の37号人骨では下顎骨歯槽部に、 抜歯を思わせるような所見を認めたが、これらについては後述する。

(2) 上肢骨

上腕骨においては、男性の19号人骨は左側下半部を残していたが、比較的太く、円柱状で、 扁平性の傾向は見られなかつた。また女性でも17号人骨が右側下半部を残していたが、これ は細く、扁平性は勿論認められなかった。

女性の7号、17号人骨では前腕骨の一部を残していたが、上腕骨に相応して細いものであっていた。

(3) 下肢骨

1) 大腿骨

大腿骨も完全なものはないが、残っていた部分を観察すると、一般に大きいもののようであるが、後面の粗線は隆起が弱く、男性では円形に近く、女性ではむしろ横径が大きいのが目立った。

男性の1号、20号、45号人骨について、ほぼ中央と推定される部位で、周径はそれぞれ80mm、90mm、85mmであり、同部位での矢状径はそれぞれ25.5mm、27mm、27mmで、また横径は25mm、28mm、27.5mmとなり、これから断面示数を求めるとそれぞれ102.00、96.43、98.18であった。

女性の7号、17号人骨では周径がそれぞれ70mm、76mmで、同部位の矢状径は19mm、24mm、横径は24mm、25mmとなり、断面示数はそれぞれ79.17,96.00であったが、

30号人骨のみは周径が79mm、矢状径が26mm、横径が23mmで、断面示数は113.04となり、観察上も粗線がよく発達し隆起した例であった。

また男女共に上骨体部においても扁平性を思わせる例は見いだし得なかった。

次いで、女性の37号人骨においては完全ではないが左側大腿骨の最大長を推測的に計測できたが、少なくとも395mmを下らないものであり、本例からPEARSONの公式によって身長値を推定すると、149.67cm以上となり、比較的長身ということができる。

2) 胫骨

男性の1号人骨ではほぼ中央と推定できる部位で周径75mm、矢状径25mm、横径20mmで、 断面示数は80.00であった。

女性の2号人骨では周径65mm、矢状径22.5mm、横径17.5mmで、断面示数は77.78であった。

一般に胫骨は細く、断面示数値に見られるように扁平性は著明でない。

なお女性の7号人骨で腓骨の一部が残っていたが、細くて稜形成も著明ではない。

(4) 下顎歯の脱落例(図1、2参照)

37号人骨は男性、熟年骨と推定されたものであるが、本例の下顎骨歯槽部に一見すると抜 歯を思わせるような所見が見られたので以下このことについて述べてみたい。

下顎骨歯槽部において、①右側 M_1 より遠心側では歯槽が閉鎖し、かつ著しく陥凹していて明らかに骨吸収の像が見られる。② P_2 は現存しているが、歯根の大部分が歯槽上縁より上方に露出し、一部分のみが歯槽内にとどまっている。すなわち P_2 は浮いた状態になっている。③ P_2 より近心側の P_1 、C、 I_2 、 I_1 および左側の I_1 、 I_2 の歯槽は閉鎖し、表面は粗糙で、厚さは薄くなり弱い稜線のようになっている。この部分の歯槽は見掛上僅かに陥凹している程度で、歯槽上縁の高さは大臼歯の部分より明らかに高く、両者の間にはっきりした段落がついている。④Cより遠心側の歯槽部は破損していて観察できない。

以上のことがらのうち、右側大臼歯の部分に関しては骨周疾患による骨組織の萎縮ないし崩壊の結果、脱落したものであろうが、右側 P_1 より左側 I_2 にいたるまでの歯槽部については、大臼歯の部分と異なり、少なくとも見掛上は外傷あるいは抜去された痕ではないかと思わせるものがあった。著者も本例についてはそういう疑いをもっていた。しかし乍ら検討を重ねるうち、①現存している P_2 が著明に浮いており脱落前の状態にあること。②右側オトガイ孔の高さが骨体中央より多少低いこと。③歯の脱落部が隣接する歯槽の広範にわたっていること等より、一見すると健康な歯槽から歯を抜去したように見えるが、実際は大臼歯部の歯槽が余りにも著しく陥凹しているために、この部分の歯槽にはほとんど陥凹が見られないような感じを与えているものである。すなわち右側 P_1 より左側 I_2 にいたる歯槽骨にも骨周疾患があり、その結果脱落したものと解釈すべきであろう。

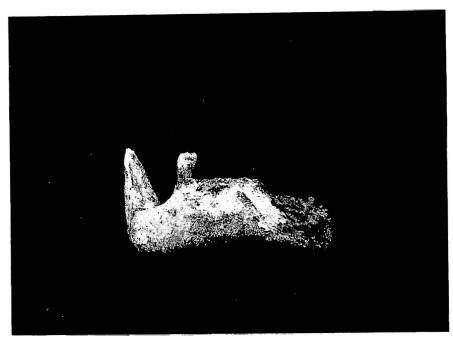


図1 下顎骨前面(37号人骨)

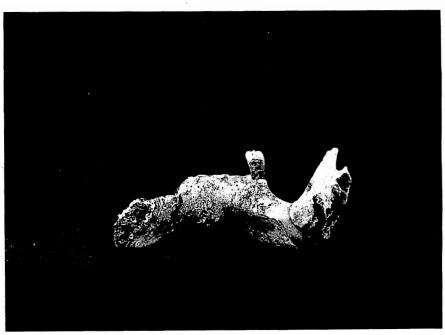


図2 下顎骨後面(37号人骨)

なお遊離して残っていた上顎歯は右側の I_2 、C、左側の I_1 、 I_2 、C、 M_1 であったが、このうち M_1 のみはひどく咬耕し、咬耗度はBrocaの3度で、その他は咬耗度が弱く、Brocaの1度であった。下顎の右側 P_1 より左側 I_3 にいたる歯は若い時期に脱落したものであろう。

Ⅲ要約

塚原遺跡の中世墳墓46基より39体の人骨が得られたが、性別を推定できたのは男性12 体、女性11体で、性別不明13体があり、その他に火葬骨2体および小児骨1体が含まれていた。

保存状態が不良で、その詳細を知ることはできなかったが、観察および計測のできた一部の 資料についての所見はすでに述べたとおりである。

著者はすでに中世尾窪人に関して、長頭、低顔、低鼻で、強い歯槽性突顎が見られることを報告した。断片的な資料から得られた結果ではあるが、今ここで中世塚原人に見られた所見を中世尾窪人の特徴に照らしてみると、両者はきわめて類似した傾向をもっものと推測することができる。次いで四肢骨については扁平性や柱状形成はなく、また女性の1例ではあるが、身長は比較的高いものであった。

なお男性熟年骨の下顎骨歯槽部の所見から一見抜歯を思わせるような例が見られた。結局は 骨周疾患の結果脱落したものと推定したのであるが、局所所見から抜歯と断定する場合には余 程慎重でなければならぬとの反省をこめ、本例に見られた所見を記載し、いささかの考察を加 えた。

参考文献

- 1) 内藤芳篤、1973: 人骨. 尾窪(熊本県文化財調査報告 第12集): P.62-76.
- 2) 鈴木 尚、1939: 人工的歯牙の変形. 人類学・先史学講座, 12 雄山閣, 東京. P.8-31.
- 3) 石川梧郎・秋吉正豊, 1974:口腔病理学(¶歯周組織の病変), 1.永吉書店、京都. P.319—534.
- 4) 松江一郎訳, 1975: オルバンの最新歯周治療学 (Orban's PRIODONTICS). 技報堂,東京. P.1-712.

Ⅳ 丸尾5号墳の人骨

丸尾5号墳の内部主体(石棺)から古墳時代人骨2体が発掘された。保存状態が悪く、形質 の詳細を知ることはできないが、推定された性別、年令などについて述べる。

その1 女性、壮年骨

頭蓋冠の小片、右尺骨上端、右側の大腿骨、胫骨の骨体部および歯が残っていた。

骨には朱が付着していた。

残っていた尺骨、大腿骨、胫骨等を観察すると、全般に細くて小さい。扁平性等をうかがう ことはできない。 歯は遊離した状態で、上顎歯は右側では I_1 , C、 P_1 、 P_2 、 M_2 M_3 左側では I_1 I_2 C P_1 P_2 , M_2 , M_3 ,また下顎歯は右側では I_1 , M_1 M_2 M_3 左側ではC P_1 P_2 M_1 M_2 M_3 が残っていた。歯は比較的に小さく、咬耗度は弱いもので、B roca のO度~I 度であった。

その2 男性、熟年骨

頭蓋骨片、左上腕骨体、寛骨の一部、推体片、大腿骨および**経**骨の体部、右膝蓋骨片等が残っていたが、前者と同様に朱が付着していた。

四肢骨は上、下肢骨共に骨体部がかなり大きく、太いが、扁平性や柱状形成を認めることは できなかった。

歯は遊離した状態で、上顎歯の右側ではC、 P_1 、 M_1 、 M_2 、左側ではC、 P_1 、 M_1 、 M_2 、下顎歯は両側共に M_1 、 M_2 が残っていた。歯は大きく、咬耗度はかなりひどく、B roca の 2 度であった。

塚原

熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査熊本県文化財調査報告第16集熊本県教育委員会発行 1975年3月

付論3 塚原古墳群出土の馬歯

熊本大学理学部 吉倉 真

塚原古墳群は熊本県下益城郡城南の塚原台地にあり、ここに、方形周溝墓、円墳、前方後円墳などが多数共存していて、考古学上極めて貴重な遺跡である。この遺跡の丸山26号・27号墳および39号方形周溝墓の周溝から馬歯が発掘された。いずれも1頭分の馬歯である。セメント質および歯質の大部分は分解されていて、歯そのものははなはだ脆弱であった。発掘に充分な注意を払ったにもかかわらず、多くは破損し、調査したのは丸山26号墳および39号方形周溝墓から出た頬歯だけであった。丸山26号および27号墳からは、馬歯に接して馬具(くつわ、止金具など)発堀された。しかしこれらはいずれも馬に装着されていたものではなかった。(図版1)

熊本県における古墳時代の馬具の報告は数多いが、馬歯についてはこれが最初であるので、 ここに詳細に記載し、なお若干の考察を試みたい。

1 馬歯一特に下顎頬歯について

古代馬の歯について記載する前に、馬歯一般について記しておく必要があろう。馬の歯式は一般に I または J (門歯) $\frac{1}{3}$, C (犬歯) $\frac{1}{3}$, P (前臼歯) $\frac{1}{3}$, M (後臼歯) $\frac{1}{3}$ とされる。したがって歯は全部で40あることになる。しかしまた牡 $\frac{3\cdot 1\cdot 3(4)\cdot 3}{3\cdot 1\cdot 3\cdot 3}$ 、 $\frac{3\cdot 0\cdot 3(4)\cdot 3}{3\cdot 3\cdot 0\cdot 3\cdot 3}$ ともされる。それは牡には犬歯がよく発達しているが、牝には発達していないからである。それからまた、上顎には前臼歯が 3 個あるのが普通だが、時としてそれらの前に、狼歯というものが生えて 4 個になることがある。それで 3 (4)と記したのである。もともと馬の祖先は前臼歯を 4 もっていた。しかし第 1 前臼歯はのち退化し%となった。それで最前のものは第 2 前臼歯である。上顎の第 2-4 前臼歯を 2 下顎のそれらを 2 一4 にいた。 4 門歯の場合もこれにならって 4 一4 にいるということがある。

馬の歯の発生と換歯の時期は表1のようになっていて、これで割合正確に馬の年令を知ることができる。しかし馬によっては、7才ぐらいになってやっと永久歯が生え揃うものもあるから、年令鑑定には注意を要する。永久歯が全部生えれば、馬はもはや成馬で、青春期を迎えた

表1 馬の歯の発生と換歯の時期

歯の種類	発生	換歯
門歯		
鉗 歯	出産前後	2.5才
中間歯	生後1-2月	3.5才
隅 歯	∞ 6-9月	4.5才
犬 歯(牡)	4- 4.5才	
臼 歯		
1	出産前後	3才
2	"	"
3	,	2-4才
4	,	
5	2才	
6	3.5-4才	

ことになる。成馬の年令は普通、門歯の咬合面の形や咬耗の状態、また歯の生えている方向などによって判定している。

次に各歯について記すべきであるが、発掘されたものは頬歯だけであったので、他のものについては省略する。頬歯はいずれもみな長歯で、歯高高く、咀嚼力のすぐれていることを示している。またこれらはみな横堤歯に属し、歯冠にはエナメル稜が特徴あるひだをつくり、複雑な模様を描いている(図の1~15)

頼歯は列をなし、歯槽にしっかりはまっている。上顎の頬歯列は少しく弓なりに、頬側に張りだしているが、下顎の頬歯列はほとんど直線をなしている。頬歯の咬合面(咀嚼面)は、水平面に対してある角度をなしている。上顎では頬側高く、舌側低く、下顎では反対に、頬側低く、舌側高く、いずれも22度前後傾斜している。

上顎の頬歯は破損著しく調査不能であったので、ここには下顎の頬歯だけについて、記載に必要な程度に、歯冠各部の名称を記しておく。いま見を例にとって説明すれば、(図の3)歯 冠頬側の前方には protoconid (原丘)、後方にはhypoconid (下丘) がある。protoconidの前方にあって舌側に脹らみ出ている部分をparastylid という。歯冠舌側の前方には、metaconid (後丘)、それに続いてmetastylid 、後方にはentoconid (内丘) がある。 entoconid から後方に 脹らみ出ている部分をentostylid という。これらの部分はみな歯質によって満たされ、エナメル 稜によって囲まれている。

エナメル稜はひだ状に屈曲していて、 P_2-M_3 、それぞれに特徴ある模様を描き出している。エナメル稜の外側はセメント質である。エナメルひだには時に著しい個体変異をみることがある。 例えば 図の 1 の馬(I) (牡、15才前後) の P_2 と、 図の 7 の馬(V) (牡、15才前後) のそれとを比較してみると、後者ではparastylid がよく発達していて、protoconid との間に強い

現わしているものとは思えない。埋没中に位置がずれたものと思われる。

類歯の大きさを表4に示した。歯冠のエナメルひだに囲まれた部分の長さと幅を測ってそれ ぞれ歯冠の長さ(L)幅(B)とした。高さ(H)については満足な測定値はえられなかった。

現代馬では歯冠の長さは一般に P_2 あるいは M_3 が最大で M_1 が最小、幅は一般に P_3 または P_4 が最大で、 P_2 または M_3 が最小となっている。古代馬でもこの傾向は変らない。しかし、歯が一体に幅狭く、長めになっているのが特徴である (図の、 $10\sim12$)。 歯冠のエナメルひだの模様も、現代馬のそれとあまり変らない。ただ頬側のエナメル稜の中央ひだが広く外方に開いていて、そこの hypoconid側に小さなひだおれがあるのが目立つ。

3 39号方形周溝墓の馬歯

出土したのは下顎頬歯だけであった。大部分が破損していて、ほぼ完全なものは左側の P_4 M_2 だけであった (左右頬歯列間の距離は表 2 に示した通りで、丸山26号墳出土のものと同様)。現代馬に比し著しく短かい。これもおそらく埋没中、位置がずれた結果であろうと思われる。

頼歯の大きさは表 4 に示してある。M_{1、}M2の歯冠長は現代馬皿程度であるが、歯冠幅が著しく小さい。従って一見極めて狭長である。エナメルひだに種々特異な点が認められた(図13~15)。

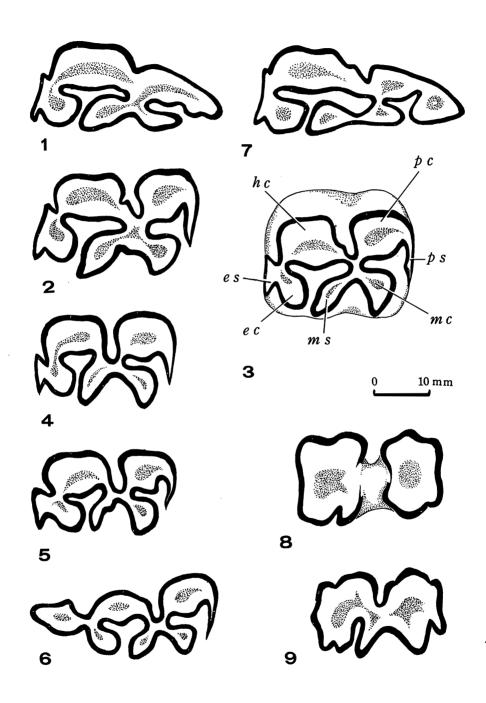
 P_4 : 歯冠の前部は欠損しているが、protoconid は幅狭い。hypoconid も幅狭く、舌側のエナメル稜に著しい屈曲が認められる。しかもここから metastylid に向って、捍状のエナメル突起が長、短 2 本出ている。metaconid はあまり大きくない。entoconid は細長い嚢状をなし、前方に向っている。特異なのはentostylid が後方に長く伸び出していることである。

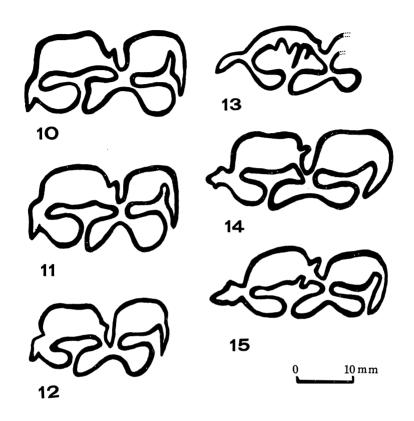
 M_1 : protoconid もhypoconidも、前記 P_4 のそれらよりずっと幅広くなっている。parastylid もかなり広くなっていて、先端は舌側へ突出している。hypoconid 頬側のエナメル稜の前方部、中央ひだの所には、前方に向って突出するひだおれがある。entostylid は、後方に脹らみ出ていて裏状をなしている。

M₂:protoconidも hypoconid もかなり広いが、parastylid は狭い。hypoconid 前方部の頬側また舌側のエナメル稜には、それぞれ頬側また舌側に向って突出するひだおれがある。

entostylid はよく発達していて後方に伸び、嚢状に脹らんでいる。

類歯列長は測定不能だが、200mm近くはあろうかと思われる。この場合類歯列が長いのは、前後両葉が展開していることにもよるが、またentostylid が後方に展出していることにもよる。このような頬歯は珍らしい。 大阪府北河内郡四条畷町古墳出土の馬歯L・ P_4 — M_2 は、ここに記したものによく似ている。すなわちentostylidの後方展出が目立っている点、またhypoconidの類側のエナメル稜前方部にひだのある点などよく似ている。 四条畷町古墳出土の馬歯は、すべて左側下顎歯だけで、歯冠長(歯冠幅)は、 P_2 : 35.0 (14.9)、 P_3 : 29.4 (15.4)、 P_4 : 29.4 (15.0)、 M_1 : 26.8 (14.3)、 M_2 : 29.3 (13.8)、 M_3 : 28.8 (11.4)、(P_2 - M_3 列長は 178mm前後)。直良は「 P_2 が全体に大形である。自余の歯では、前葉に比して後葉が一体に長めになっているのが特徴である。しかし歯相および大きさとも、日本古代の小形馬のものにはなはだ類似して





1-9 現代馬の左側下顎頬歯の歯冠、エメラルひだの損様を示す。 1-6 現代馬(I)(牡、15才前後)1.P₂、2.P₃、3.P₄、4.M₁、5.M₂、6.M₃、7.現代馬(V)(牡、15才前後)8-9.現代馬(II)(牝、25才前後).P₃、.P₄(説明本文)

ec entoconid,

es entostylid,

he hypoconid,

mc metaconid,

ms metastglid,

pc pratoconid,

ps parastglid,

10~12 丸山26号墳出土の馬の左側下顎頬歯の歯冠エメナルひだの損様を示す。

10. P_3 , 11. P_4 , 12. M_{10}

13~15 丸山33号墳出土の馬の左側下顎頬歯の歯冠エメラルひだの損様を示す。

13. P_4 , 14. M_1 , 15. M_2 °

くびれをもっている。また metastylid が metaconid からくびり出されたような恰好になっている。エナメルひだは歯の疾患、年令などによって変化する。 図の $8\cdot 9$ の馬(\mathbb{I}) (牡、25才前前後) の P_3 、 P_4 は、老令のため歯冠の咬耗著しく、 P_3 のごときは前後両葉に分かれてしまっている。

類歯そのものの大きさ、形も年令により変化する。林田によれば、同一個体でも 4 才時には 類歯列長最大で、年令を重ねるにつれ短かくなっていく傾向があるとのことである。

2 丸山26号墳の馬歯

出土した馬歯は上、下顎とも頬歯だけであった。発掘時、上方に下顎右側(R)の P_2-M_1 、その下に同左側(L)の P_2-M_3 さらにその下に上顎左側の P^2-M^3 があった(図版 2)。破損著しく、歯列中比較的保存良好のものは、 $L\cdot P_2-M_2$ だけであった。

表 2 下顎両頬歯間の最短距離 (mm)

		古(弋 馬			現代	馬	
		丸山2	26号墳·	39号方形周溝墓	I·牡		Ⅱ・牝	Ⅲ・牡
-					(15才前後)	(25	5才前後)	(8才前後)
L	$\cdot P_2 - R \cdot P_2$		21.0	_	38.0		39.0	47.0
L	$\cdot P_3 - R - P_3$		18.0	_	38.0		41.0	49.0
L	$\cdot P_4 - R \cdot P_4$		19.0	23. 0	45.0		41.0	55.0
L	\cdot M ₁ -R \cdot M ₁		23.0	23.0	53.0		47.0	63.0
L	$\cdot M_2 - R \cdot M_2$		_	28±	58.0		55.0	69.0
L	• M ₃ —R • M ₃			33±	67.0		64.0	75.0

表3 上顎両頬歯間の最短距離 (mm)

		現	代	馬	
	I	П		Ш	Ⅳ·牝
					(10才前後)
$L \cdot P^2 - R \cdot P^2$	55. 0	63.0			_
$L \cdot P^3 - R \cdot P^3$	61.0	68.0			
$L \cdot P^4 - R \cdot P^4$	67.0	71.0			
$L \cdot M^{1}-R \cdot M^{1}$	71. 0	75. 0			_
$L \cdot M^2 - R \cdot M^2$	72. 0 .	77.0		_	_
L · M ³ —R · M ³	73.0	81.0		<u> </u>	_
頭骨最大長	560.0	562.0		_	_
下顎骨全長	440.0	442. 0		530.0	447.0

下顎両頬歯間の距離を表2に示す(比較のため現代馬3個体の測定値を併記した。距離はいずれも歯冠エナメル稜から測った)。

なお参考のため、現代馬の上顎両頬歯間の距離を表3に示す。

表2で明らかなように、古代馬の下顎両頬歯列間の距離は、現代馬のそれに比し著しく短かい。次に上、下両顎頬歯の咬み合わせであるが、現代馬では表2・3にみる如く、上顎両頬歯列間の距離は下顎のそれに比し大きい。しかし、上、下顎頬歯列において、各側とも 6.5— 9.5mmの咬み合う重なりがある。下顎両頬歯列間の距離が短かければ、それに応じて上顎両頬歯列間の距離も当然短かくなる。いま古代馬の下顎両頬歯列間の距離をみると、それはあまりにも短かい。つまり下顎骨両枝のなす角度が非常に小さいことになる。これはどうも自然状態とは思えない。おそらく埋没中に、徐々に位置がずれたものと考えられる。

次に発掘された時の状態をみると、下顎左側の頬歯列と上顎左側の頬歯列とは、 $6 \sim 7$ mm離れていた。つまり下顎が右の方へ少しずれているわけで、これも埋葬した時の状態をそのまま

表 4 **頬歯の大きさ** (mm)

		古	代	馬		現	代	馬
		丸山26+	号墳	39号方形周溝	·基 I	П	Ш	IV.
		L	R	L	L	L	L	L
	L	28+			33.0		39.0	30.0
P_2	В	13.0	,		16.6		19.0	15.0
	Н	_			50.0		-	
	L	28.0	30.0		28.0	25.0	35. 0	28. 0
P_3	В	17.0	10+		17.5	14.5	21.5	18.0
	Н	_	35+			_	_	_
	L	27.0	27.0		26.0	22.5	33.0	30.0
P_4	В	15.0	8+	12.5	18.0	15.0	21.0	17.0
	Н	_	52+	44+		_		_
	L	24.0	23+	30.0	24. 0	_	29.0	24.0
M ₁	В	14.5	8+	13.0	16.5		18.0	16.0
	Н	52+	47+	74.0		52.0	_	
	L	24. 0		30.5	24.5	22.0	32.0	27.0
M ₂	В	12.0		12.0	16.0	13.0	17.5	15.0
	Н	57.0		69+		_	_	
	L	28+			31.5	32.0	35.0	33.0
M_3	В	10+			13.5	12.0	18. 0	15.0
	Н	45 +					_	_
 頬歯	列長	159+			167. 0	R . 154.0	201.0	165.0

いることが認められる」と述べている。.

丸山26号墳出土の馬の頬歯には、entostylid の著しい後方展出はなかった。しかし歯冠が一体に幅狭く、長めになっている点は、39号方形周溝墓出土のものと共通していて、これが古墳時代、熊本地方に飼育されていた馬の一つの特徴をあらわしているもののように思われる。

4 論 議

日本の地質時代の野生馬についてはさておき、縄文、弥生、古墳時代の古代馬について、従来の知見を若干述べておきたい。直良によると当時飼用されていた馬は、すべてプルジェヴァリスキー馬(przewalski's horse)の家畜化された蒙古馬か、それと関係のある馬で、これらは大陸から日本へ、朝鮮半島を経て、縄文時代に渡来したものであるという。しかし日本の古代馬が、すべて北方系の蒙古馬系統のものであったかどうかについては問題がある。

林田によれば、日本在来馬の起源は縄文時代の後期頃に始まる。当時の馬は上記の蒙古馬系統のものとは異なり、南方から渡来したトカラ馬程度の小形馬であった。このものは中国の四川、雲南から省南一帯にかけ生息していて、四川馬の基礎になったものだが、これが縄文後期から弥生時代にかけ、揚子江以南の南支沿岸から九州へ、また同じ頃、朝鮮半島南部へもたらされた。しかし弥生時代になってからは、木曽馬、御崎馬(都井の岬馬)程度の中形馬が、大陸から朝鮮半島を経て日本に移入された。 この馬は蒙古馬そのものではなく、 タルパン(Tarpan) 系統の高原馬の血をうけたもののようであるという。このようなわけで、古墳時代には日本各地に、蒙古馬で代表される中形馬と、四川馬で代表される小形馬と、2種類飼用されていたということになるようだ。

縄文時代に馬が日本に飼用されていたことを最初に明らかにした人は長谷部である。長谷部らは大正9年(1920)、熊本県宇土市宮の荘貝塚(轟貝塚)から臼歯3個を、同年、鹿児島県出水市出水貝塚から門歯6個、臼歯2個、右橈骨1個を発掘し、橈骨の大きさから推定して「石器時代九州地方に矮小なる馬の飼用されたことを信ずるに足る」と述べられた。その後、林田、(7) 山内らも、昭和28、29年の2回にわたって出水貝塚を発掘し、門歯2個、臼歯4個、距骨片1個をえて、この馬はトカラ馬にほとんど等しい体高の110cm前後の矮小馬であると発表された。

加茂の大著「家畜文化史」によると、縄文時代の馬の遺体の発掘された場所は、北は北海道から南は沖縄に至るまで、全国で47ケ所ある。それらの分布をみると、神奈川以北、宮城を含め、関東地方に多い。弥生時代のはやや少なく25ケ所。古墳時代になると多くなり、31ケ所の遺跡から馬歯、馬骨が発掘されていて、本州中部、関東地方に多い。古墳時代には大陸との文化交流が盛んに行われていたから、優秀な馬も数多く移入されたことと思われる。そしてこれらの馬に在来の馬との交雑も行われ、小形馬は次第に淘汰され、中形馬、あるいは大形馬が多くなっていったものと思われる。

ところで塚原古墳群出土の馬であるが、頬歯が全部生え揃っている点からみて成馬であることは間違いない。歯冠の咬耗状態からみると老馬ではない。まだ若いものと思われる。特徴として頬歯の歯冠が一体に幅が狭い。始新世の化石馬Hyracotherium (*Eohippus) から現

生の馬Equus に至るまでの馬の進化において、いま頬歯の変化をみると、 ず前臼歯が後臼歯のような形に変わる。頬歯の高さが増してくる。咬合面(咀嚼面)が広がり、エナメルひだが複雑になってくる、などの現象を認めることができる。化石馬 Hipparion mediterraneum (鮮新世)の頬歯をWEBER のDie Säugetiere, Bd. II, Fig. 4 6 6 でみると、下顎頬歯

表5 古代馬のM₁の歯冠の大きさ(mm)

長 さ(幅)	幅 率 (%)	発 掘 地 (時代)
1 . L · 30.0 (13.0)	43. 3	熊本県塚原古墳群39号方形周溝墓(古墳)
2 . L · 26.8 (14.3)	53. 4	大阪府北河内郡四条畷町(〃) (4)
$L \cdot P_2 - M_3$	$178\mathrm{mm}\pm$	
3 . L · 27.0 (15.0)	55.6	山梨市小原日下部町(土師文化期) (4)
4 . L · 24.7 (13.9)	56.3	群馬県新田郡笠懸村(〃) (4)
$L \cdot P_2 - M_3$	$171_{ extsf{mm}}\pm$	
5 . L · 26.3 (15.4)	58.6	北海道大沼湖畔(縄文) (14)
6 . L · 19.6 (11.8)	60.2	岡崎市井ノ口町(弥生) (14)
7 . L · 24.0 (14.5)	60.4	熊本県塚原古墳群丸山26号墳(古墳)
$L \cdot P_2 - M_3$	$159\mathrm{mm} +$	
8 . L · 25.2 (16.4)	65.1	埼玉県朝霞市根岸(土師文化期) (15)
$L \cdot P_2 - M_3$	169.8mm	
9 . R · 23.8 (15.6)	65.5	千葉県館山市東長田(弥生) (4)
10 . R · 22.5 (16.0)	71.1	千葉県諸久蔵貝塚(土師文化期) (14)
11 . R · 23.6 (17.0)	72.0	館山市東長田(弥生) (14)
12 . L · 22.7 (16.7)	73.6	五島列島宇久島(弥生?) (14)
$L \cdot P_2 - M_3$	156.9 mm	
13 . L · 24.0 (18.0)	75. 0	東京都江戸川区市川橋西岸(古墳) (14)
14 . L · 23.4 (18.0)	76. 9	千葉県(出土地不明)(古墳?) (14)
15 . ? 23.0 (18.0)	78.3	埼玉県川越市(土師文化期) (15)
$? \cdot P_2 - M_3$	152.0 mm	
16 .L · 19.7 (15.9)	80. 7	千葉県銚子市余山貝塚(弥生後期) (14)
$L \cdot P_2 - M_3$	140.0 _{mm}	
17 . L · 22.0 (17.9)	81.4	千葉県(出土地不明)(古墳) (4)
$L \cdot P_2 - M_3$	148.0_{mm}	
18 . L · 23.3 (19.5)	83.7	東京都葛飾区水元飯塚町(古墳)
$L \cdot P_2 - M_3$	156.8mm	

の歯冠がみな狭長である。エナメルひだの後葉が長めになっていて、entostylid の 後方展出が著しい。この点、39号方形周溝墓出土の馬の頬歯によく似ている。一方、プルジェヴァリスキー馬のM₁をTraite de Zoologie ,T. XV II. Mammiferes の Fig. 1000 でみると、歯冠エナメルひだの entostylid はあまり発達していない。しかし歯冠の幅が狭い点はよく似ている。頬歯歯冠の狭長なのは、原的な一つの表徴と考えられる。

そこでいま便宜上、下顎頬歯中 M_1 をとりあげ、その歯冠の広狭を古代馬について調べてみた。 M_1 は出産前後に生える永久歯で、歯冠長は全頬歯中一般に最小。歯冠幅は P_3 または P_4 が最大の場合もあるが、 M_1 が最大の場合もあるなど、特徴のある歯である。歯冠の長さと幅から幅率 $(B/L \times 100)$ を出してみると表5のようになった。

表に示すごとく、39号方形周溝墓出土の馬の M_1 が、歯冠幅率最小を示すことは注目に値する。歯冠の長さや幅は年令により多少変化する。例えばトカラ馬では、 $L\cdot M_1$ の長さ(幅)および幅率は、5 才牝で24.0(17.0)、70.8%、8 才牝で20.5(14.0)、68.3%、15 才牝で20.5(15.0)、73.2%、15 才牡で20.0(16.0)、80.0%で、咬合面は年令とともに広がる。しかし年令を考慮しても、39 号方形周溝墓出土の馬は成馬であり、歯冠長30 mm、幅率43.3%というのは、他のものに比し著しい差であると言わねばならね。これは主として10 に来る10 が後方に著しく展出していることによるもので、一つの品種的相違ではないかと思われる。

前記化石馬 Hipparion mediterraneum の M_1 の幅率は、図によって測定、算出してみると 45.2% となり、またプルジェヴァリスキー馬の M_1 の幅率は 47.9% となった。この場合注意しなければならないのは、 M_1 だけの幅率が小さいのではない。39号方形周溝墓の馬の M_2 の如きは 39.3% を示す。丸山26号墳の馬の M_1 の幅率は 60.4%だが、 P_3-M_2 についてみれば、50.0-60.7% を示す。このように頬歯全部がどれも幅が狭いのである。下顎の頬歯の幅が狭いと、上顎の頬歯の幅も狭い。この点、前記化石馬やプルジェヴァリスキー馬の場合も同じことで、頬歯列長が大きく、個々の頬歯の歯冠幅率が小さく、従って咬合面の狭いことは原的な一つの表徴と見なしうる。

塚原古代馬はこのように原的な表徴をもっているが、それでは轟貝塚から発掘された縄文時代の馬はどうか。しかしこれについては下顎頬歯では $L\cdot M_3$ しかないので資料としては不充分である。出水貝塚のものにはさいわい $R\cdot P_4$ および $L\cdot M_2$ があるので、これについて調べてみる。 $R\cdot P_4$ の歯冠長は22.8mm、歯冠幅は16mm、 $L\cdot M_2$ の歯冠長は18.4mm、歯冠率は13.9mmとなっている。しかしこの数値は歯冠のエナメルひだによるものでなく、頬歯の歯冠全体の長さ、幅を測ってえたものである。それで今これを写真によって測定し直すと、長さはそのままで幅はそれぞれ12.8mm、10.6mmとなり、従って幅率は56.2%、57.6%となる。この馬は老令で、歯冠の 咬耗著しく、entostylid の発達はみられない。 M_1 は発掘されてないが、幅率はこれらに近いものと思われる。

なお表5には P_2 - M_3 列長の測定されたもの若干が記してある。これをみると一般に、幅率小のものは列長大、幅率大のものは列長小となっている。この傾向は個体発生においても認められる。例えばトカラ馬で、5才牝では P_2 - M_3 列長 157mmもあるのに、8才牝では 138mm、

15才牝では 139 mm、15才牡では 143 mmとなり、年令が進むにつれ、短くなる。このことは馬の 類馬の系統発生における定向進化と相まって興味深い。とにかく頬歯列が短かくなるのは、各 頬歯の長さが短かくなることで、そのとき歯冠エナメルひだの前葉と後葉とは中央に寄ってき て咬合面がひろがる。entostylid は後方に長く展出しない。それとともにエナメル稜は太くな り、ひだの構造は強固となり、咀嚼力が強くなってくるのである。

概括すれば古墳時代には、関東古代馬のように、頬歯咬合面の幅広いものと、塚原古代馬のように、それの幅狭いものと2種類の馬が飼用されていた。またそれらの中間的なものもあった。関東古代馬の多くは大形あるいは中形の蒙古馬系統のもので、これらは大陸から朝鮮半島を経て日本に移入されたものである。そしてそれらは当時馬の需要の多かった関東地方に送られ、そこで飼用されていたものと思われる。当時としてはかなり品種改良の進んだ、言わば進化したタイプのものである。これに対して九州の古代馬は、北部では蒙古馬系統の中形馬の血をうけたものも多少はいたであろうが、大多数は縄文時代の小形馬の後裔で、あまり淘汰改良されず、言わば進化からとり残された、原的な形質をなお保持しているものであったと推断できるようである。

5 県内出土の馬歯・馬骨・馬具について

県内で馬歯、馬骨を出した遺跡を表6に示す。

表 6 熊本県における馬歯・馬骨の出土地

	遺	跡 名	称	所	在	地	(時	代)	出	-	±.	品
1		宮の荘貝塚	(轟貝塚)	宇土市	市宇土岡] (旧劃	锸村)	(縄文後期)		馬	歯	(2, 20)
2		高塚西平貝	塚	八代和	郎竜北村	寸高塚西	哲平 (/)		不	詳	
3		馬出古墳		玉名i	市元玉名	呂・馬出	出(古	賁)		馬	骨	(13)
4		塚原古墳群	丸山26号墳	下益均	成郡城區	軻町塚 原	古)原	賁)		馬	歯	
5		"	丸山27号墳			"				4	,	
6		"	39号方形周溝墓			"				4	,	

次に馬具出土地を表7に示す。

表 7 熊本県における古墳時代の馬具出土地

古墳名称	所 在 地	出土品
1 . 塚坊主古墳	玉名郡菊水町江田、清原	馬 具 (18)
2. 船山 🗸	, , ,	くつわ・鐙など ⁽²³⁾
3 . 大坊 🥠	玉名市玉名、大坊	杏葉・木心鉄 ⁽¹³⁾
4 . 四ツ山〃	荒尾市大島区笹原	板張輪鐙雲珠
5 . 野原古墳群7号	野原、野原八幡境内	馬 具 (9)

6.	/ 9号	荒尾市野原、野原八幡境内	馬 具 (9)
7.	横山古墳	鹿本郡植木町植木、横山	馬 具 (13)
8.	石川山古墳 第4号墳	鹿本郡植木町石川	くつわ・四方手(13,21)
9.	臼塚 〃	山鹿市石、臼塚	飾金具・鐙 雲珠・杏葉 ⁽¹³⁾
10.	弁慶ケ穴 〃	〃 熊入町	鉄地金銅·張雲珠(9,13)
11.	馬塚 〃	〃 城、鬼天神	金銅製尾錠 (9,13)
12.	袈裟尾高塚 /	菊池市袈裟尾高塚	くつわ (13)
13.	亘横穴 /	菊池市隈府、亘	くつわ (9)
14.	久米若宮 〃	〃 郡泗水町若宮	くつわ ゜゜(9)
15.	平井 〃	阿蘇郡一の宮町古城手野	くつわ・馬具 (9,17)
16.	沖鶴の石棺	ø 西原村小森、下小森	くつわ (9)
17.	稲荷山古墳	熊本市清水町打越	馬具・杏葉 雲珠・くつわ
18.	宇留毛横穴古墳群	無髮町宇留毛	馬具 (9)
19.	釜尾古墳	飽託郡北部町釜尾、同免	鞍金具 (13)
20 .	国越 〃	宇土郡不知火町長崎	馬具 (13)
21.	狐塚 〃	下益城郡城南町陣内	馬具 (9)
22.	塚原古墳群 丸山26号墳	/ 塚原	くつわ
23.	同 // 27 //	" " " .	"
24.	行西第1号墳	八代市岡町岡中行西	馬具 (9)
25.	才園遺跡	球磨郡免田町才園、畑中	くつわ (9)
26.	赤坂古墳	〃 多良木町赤坂	くつわ・馬具 (9)
27.	亀塚 〃	〃 錦町西、亀塚	馬具 (16)
28.	石坂横穴古墳群	〃 須恵村石坂	:馬具 (9)
29.	千人塚 /	水上村湯山元野一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	馬具 (9)

これによってみると、古墳時代には県下にひろく馬が飼用されていたことが分かる。しかし 天草からは馬具出土の記録はない。天草には当時馬が飼用されていなかったのかも知れない。

おわりに

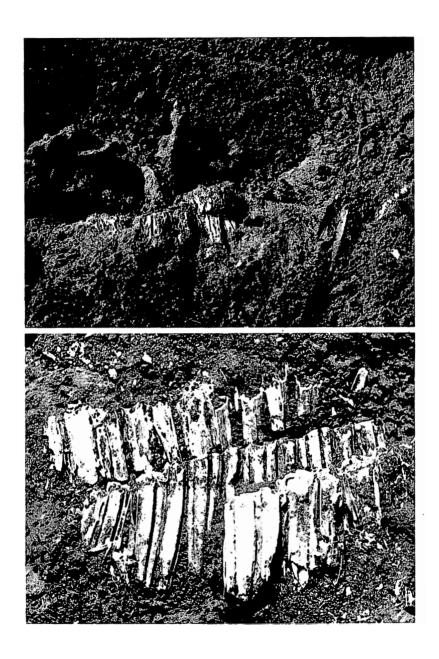
古代馬に関する論著別刷を恵与された林田重幸教授(東京農工大学農学部),馬骨の標本を恵与あるいは貸与された西岡鉄夫氏(熊本市博物館)、入江照雄氏 (済々黌高等学校)、馬具出土地について教示された原口長之氏 (熊本県文化財専門委員)、調査資料を提供された熊本県教育庁文化課にあつくお礼を申しあげる。

引用文献

1) Bourdelle, E´. et R. Lavacat . 1955 .Ordre des Pénissodactyles

Traité de Zoologie T. XVI . Mammifères. Paris.

- 2) 長谷部言人 1925 石器時代の馬に関して。人類学雑誌 40(4): 131-135。
- 3) 林田重幸 1956 日本古代馬の研究。人類学雑誌 64(4): 197-211。
- 4) 1958 日本在来馬の系統。日畜会報 28(6): 329- 334。
- 5) 1972 中世馬一多々良遺跡出土の馬歯を中心に。福岡市埋蔵文化財調査報告書 20集。
- 6) 1974 日本在来馬の源流。日本古代文化の探究-馬: 215- 262。 社会思想社。
- 7) 林田重幸・山内忠平 1955 出水貝塚の馬について。 鹿大農学部学術報告 4:70-77.
- 8) 加茂儀一 1973 家畜文化史。家馬: 181— 458。 法政大学出版局。
- 9) 熊本県教育委員会 1962 熊本県埋蔵文化財遺跡地名表。
- 10) 熊本県教育委員会 1973 塚原古墳群調査 中間報告 第一次所見。
- 11) 熊本県教育委員会 1973 同上 第二次所見。
- 12) 熊本県教育委員会 1974 同上 第三次所見。
- 13) 熊本県教育委員会 1974 熊本県の装飾古墳白書。
- 14) 直良信夫 1970 日本および東アジア発見の馬歯・馬骨・日本中央競馬会。
- 15) 直良信夫 1973 古代遺跡発掘の家畜遺体。 日本中央競馬会弘済会。
- 16) 錦町文化財保護委員会 1968 亀塚古墳群。 町の文化遺産。
- 17) 乙益重隆 1962 阿蘇谷の古墳群。 熊本県文化財調査報告。 第3集。
- 18) 乙益重隆 1969 楢崎山古墳群の調査。昭和42年度 熊本市西山地区文化財調査報告書。
- 19) 坂本経堯・経昌 1971 天草の古代。 著者ら自刊。
- 20) 芝田清吾 1969 日本古代家畜史の研究。 学術書出版会。
- 21) 田辺哲夫・原口長之・隈 昭志・平岡勝昭・緒方 勉・桑原憲彰 1968 石川山古墳群 調査報告。 熊本県文化財調査報告第9集。
- 22) Weber, M. 1928. Die Saugetiere. Bd. II. Systematischer Teil. Jena.
- 23) 山田良三 1974 古墳出土の馬具。 日本古代の探究-馬:11-41。 社会思想社。

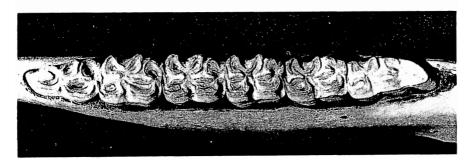


図版1 馬歯出土状態

- 上. 丸山26号墳の馬歯出土状態。 馬歯の上方にくつわが見える。
- 下. 丸山26号墳の馬歯。 写真の上方に左側上顎の頬歯列、中央に左側下顎の頬歯列、下方に右側下顎の頬歯列がある、多く は破損している。







図版2

上. 丸山26号墳の馬歯。

写真の上方に右側下顎の頬歯列(P_2-M_1)、次に左側下顎の頬歯列(P_2-M_3)、下方に破損著しき左側上顎の頬歯列がある。

- 中. 39号方形周溝墓
 - 写真の上方に右側下顎の頬歯列が見えるが破損している。下方に左側下顎の頬歯列 (P₄-M₃)がある。
- 下. 現代馬(I)(牡、15才前後)の左側下顎の頬歯列。

塚原

一 熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査 一 熊 本県文化財調査報告第16集 熊本県教育委員会発行 1975年3月

付論4 木棺木質部の鑑定

- 6号方形周溝墓第1主体部-

熊本大学教育学部 大迫 靖雄

鑑定を依頼された事項は、塚原古墳群第6号方形周溝墓第一主体部(第22図)東側端側部分の木棺位置と思われる地点に存在する数mmの線状の異色部(茶色)について①木質材料であることの確認、②もし、①の件が可能だとすれば樹種の鑑定、の二点であった。

ところで本主体部は組合式の木棺墓であることが確認されており、木材がつかわれた跡は約10cmの板厚の存在を示していた。しかし、木材そのものは出土しなかったが、東側木口部の木材が存在したと思われる木棺外側に塗り込められた粘土と木棺内に落ちこんだ土砂の間にわずかに他の部分と異なる線状の異色部が存在した。本鑑定では、まずこの異色部が木材の特徴を示すかいなかを調査することとした。

そこでこの異色部についてどのようなものが存在するかを見ることが第一となってくる。そのためには、この異色部を拡大して観察する必要がある。このような部分の観察の最も簡単な方法はルーペによる観察であるが、ルーペの観察では、周囲の土砂部分と何ら変化はなかった。そこで実体顕微鏡の下で観察をおこなったが、この結果もルーペの結果と同じく周囲の土砂と何ら変化は見出せなかった。しかし、木材が分解し、繊維状物質が単独で少しでも残っているとすれば、それはせいぜい数ミクロンから数十ミクロンの幅しかもたないし、長さは分断されていると考えられる。そこで、これらの残骸をみつけるためには、目的部分をかなり高倍率まで拡大しなければならない。しかし、測定のために目的部分に物理的な力を加えるような何らかの処理をおこなった場合、このような状態では木材片が残っていたとしても分解してしまうことは充分予想できるので、このままの状態で観察することが必要である。そのための最終的な測定法として走査電子顕微鏡測定をおこなうこととした。

本測定は図1に示すように(1)異色部を含む塊りをとり出す。(2)試片を断面約10×10mmの塊りとし上面に異色部が出るようにステージに接着剤(ドーダイト)で接着する。この場合測定面は自然に剝離したままの状態をもつよう充分注意した。(3)真空蒸着装置用回転傾斜試料台中でで試料にカーボンと金(直径0.5mm、長さ15mm)をくまなく蒸着する。(4)表面に金層をつくった試料を走査電子顕微鏡中の試料室に入れ、電子ビームをあて、反射電子をブラウン管でとらえ表面の状態を測定する。測定の場合ステージの角度、回転可能である。

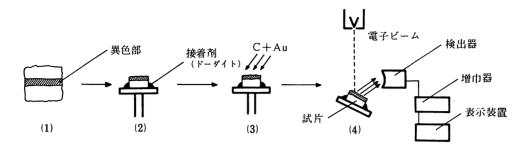


図1 木質部鑑定用試料の走査電子顕微鏡測定

このような測定をおこなえば、100~数万倍の拡大率で表面撮影が可能である。そこで、試料を移動させながら丹念に表面を観察したが、土砂のかたまりが観察されたのみで、木片の形跡は得られなかった。しかし、この中で土砂と異なり、木材の繊維状物質に類似した物質が一点だけ観察されたので、その対称物の写真撮影をおこなった。この結果を写真に示す。拡大率は寸法を示したのであきらかであるが、この物質は幅約2 u ほどのものである。その形体は全く不確かであるが、分解して残った木片状ともみえる。ただ、このような面積の中でこのような物質は一点しか存在しなかったことは、この物質から何らかの結論を述べることは無理であることを物語っている。

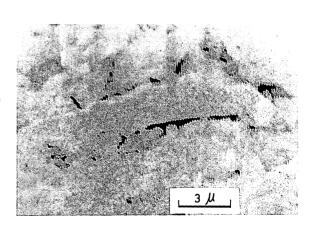
以上の結果から、上記異色部分に木質組織の残骸は期待できない。そこで異色部層についての原因等について、地学的な問い合せをしたところ、FeOの変色と思われるとのことで、これが有機物の分解過程で存在するという確認は全くないという答えを得た。

木材の存在の確認には形体測定の他、種々の化学的測定法もあるが、これはあくまでも木材成分が残っている場合にのみ可能で、木材が完全に分解した状態では何ら役に立たぬし、木材形体が残っていないかぎり化学分析が可能でも他の有機物と区別できない。

以上の理由から本試科からは木棺用材の存在は証明できない。

図2 鑑定対称部の電子顕微鏡写真

- ・フイルム Fuji Safety neopan SS.60×60
- フイルム倍率 3000
- 測定器 走査型電子顕微鏡 (JSM-U3)
- 測定場所 京都大学農学部
- 測定者 大迫靖郎



塚原

熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査熊本県文化財調査報告第16集熊本県教育委員会発行 1975年3月

付論5. 塚原古墳群の位置決定について

一 埋没古墳に関する電気探査利用の考察—

Mar.1st,1975 杉 元 安 弘

Abstract

昭和49年12月26~27日の両日、塚原台地の電気探査を施行し、概ね次の各項を得た。尚電気探査には横河製 L —10型 Galva を用いた。

- (1) すでに発掘されている円墳あるいは方形周溝墓の周溝は砂で埋め戻され、各墳墓ともに中央部を含み、殆んどフラットな地表面をなしている。
 - (3) 洪積層の電気比抵抗は、地表部で(5±)×10²[ωm]、地下数mで(2.5±)×10²[ωm] 程度である。
 - ⑤ 周溝に埋め戻された砂層の地表部は $(1.5\pm) \times 10^2 [\,
 m Q\, m\,]$ 、地下部 $(\,\,
 m S\, m\,)$ で $(\,\, 1.0\pm) \times 10^2 [\,
 m Q\, m\,]$ である。
- (2) 未発掘の埋没古墳について
 - © 道路敷において、表土は洪積層で、その比抵抗は $(7.0\pm) \times 10^2$ [ϱ m] 、 古墳周溝と推定されるところでは $(1.5\pm) \times 10^2$ [ϱ m] の比抵抗を有し、 湿った阿蘇ロームで埋っている。
 - ⑥ 阿蘇ロームに覆われた耕作地の表土は $(5.0\pm) \times 10^2$ [ϱ m] 、地下部で $(1.5\pm) \times 10^2$ [ϱ m] 、 更にその下の洪積層の比抵抗は $(2.5\pm) \times 10^2$ [ϱ m] である。
- (3) 上記1)、(2)を考察し、埋没古墳の中央部と周溝とは、その比抵抗に大小の違いがあり、 ρ -d Curve に顕著な差異がある。依って現在耕地の下に伏在する古墳の位置は適切なる電気探査により確認することも可能である。

1 Preface

熊本県教育庁文化課の依頼により、昭和49年12月26~27日城南町塚原台地に点在する〝塚

故に $\rho_a=f(a,R)$ とおき、それぞれのanに対するRn を測定することにより固有比抵抗 ρ_a を得ることができる。但し、現地の測定においてはearth E を基点とし、 $Ep_1=Ep_2=a$ を用い、a=2 dとする法が便利である。即ち前式から $\rho_d=4\pi dR$ を得、それぞれのd に対する ρ_d から ρ_d 一d Curveを描く。 ρ_d を表わすCurveは ρ_1 から出発してd が増すと ρ_2 に漸近する。その漸近のし方は層の厚さh が小さい程早い。このことはh が小さい間は、事柄はL 層中のみで完結しているが、d が増大するに従って下層も事柄に興ってき、終りにはL 層の受け持っ役割は全体に比し省略し得る程になることを示すものである。即ち ρ_d の変化の有様から大体の地質が推量出来るものである。尚、地層が2 層、3 層……n 層の場合等その解析法は2 種名様である。

(ii) Correction

大地の抵抗Rを測定する場合、Rの大小により測定器 GalvaのOrder Range で、その読みが異なるものである。これはGalva の精度に関するものである。そこで一般にはその精度を確かめるに標準抵抗を用いるが、今回は各 Order による実測値を用い、Least Square で補正すべき値を決定した。即ちOrder Range $\times 10$ 、 $\times 1.0$ の読みをそれぞれQ、R とすれば、R=1.44Q-8.33を得、この式を用いて各測定値を補正した。

3 Analysis

各 Data により、それぞれの $ho_{
m d}-{
m d}$ Curveを描き、古墳中央部と周溝の比抵抗的相違について検討する。

(1) 丸山13号墳付近について

No.13—1 と No.13—4 のCurve がほとんどL 型を示すに比べ、No.13—2 , No.13—3 が、 d=1.5m付近で凸を成すは、周溝の影響である。又 No.13—5 においては d=0.8で 凸を成すは、周溝底に不透水層があるものと推定する。

(2) 丸山 4 号墳付近について

No.4-1 がL 型の R_1 -d Curve を成すに比べ、No.4-2, No.4-3 と周溝に接近するに 従いL 型Curveの中に凸部が顕著になる。これは周溝を埋め戻した砂・砂利の影響である。 尚No.4-3, No.4-4 において表土の比抵抗が特に大きいのは乾いた砂土に基因するもの である。

(3) 丸山32号墳付近について

この円墳は、その三割位が発掘されており、残りの部分は今尚耕作地の下に埋没している。依って、未発掘部分の三地点を選定し、電気探査を試みた。丸山32号墳のほぼ中央部と推定したNo.32—2のCurveはL型であるにもかかわらず、他の2地点No.32—1と 32—3には顕著な凹凸がある。これは多分、古墳周溝の影響に外ならないものと推定する。

原古墳群、の電気探査を実施した。広大な塚原台地は洪積層(託麻層)から成り、その表土は 黒い阿蘇ロームで、そのほとんどが耕作畑地に利用されている。これ等30ヘクタールに及ぶ耕 地の下には、おそらく数百もの円墳、方形周溝墓などが埋没しているものと推定されている。 すでに発掘されている100基以上の墳墓はその一部に過ぎない。然し、未だ地下に伏在する 埋没古墳群の位置や個々の形状については確認されていない。

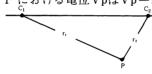
そこで、今回の電気探査の目的は、未確認古墳の全貌を知る一つの方法としてのTest Reserchである。即ち、すでに発掘済みの古墳あるいは埋没古墳の存在が確実なる地点についての電気探査を施行し、その Data を解析することにより、埋没古墳に関する電気探査の精度や利用法を検討する目的とするものである。

2 Method and data

既に発掘されている古墳の周溝はV 形の溝を成すも、発掘後、再び砂で埋め戻され、その中央部同様フラットな地形である。各墳墓は面積($5\pm$) \times 10^2 m^2 の円形や方形を成している。周溝はその幅、深さ共に $1\sim2$ m程度である。依って、付図の通り代表的な地形・地質からなる数か所を選定し、電気抵抗法による電気探査を実施した。

(i) Method

抵抗法とは大地の見掛の固有比抵抗を測定して、基盤・地下水・鉱床等の深さや厚さを推定する方法である。電極 C_1 、 C_2 より電流を流すとき、均一なる地中の任意の一点 P における電位VpはVp=i/ $2\pi\sigma$ $(1/r_1-1/r_2)$ である。



第1図

where i :電流

σ :導電率

r₁,r₂:Pのc₁,c₂からの距離

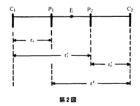
特に右図のような4極法の場合は

Pı における電位 Vpıは

$$Vp_1 = \frac{i}{2\pi \sigma} (1/r_1 - 1/r_2)$$

P2 においても同様に

$$Vp = \frac{i}{2\pi\sigma} (1/r_1 - 1/r_2)$$



を得るからP₁、P₂点間の電位差V=Vp1-Vp2とし、r1、r2、rí、ráを測定す

れば大地の固有比抵抗 $P=1/\sigma$ を求めることが出来る。

即ち
$$V = Vp_1 - Vp_2 = \frac{i}{2\pi\sigma} \left(\frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2} - \frac{1}{r_1} + \frac{1}{r_2} \right)$$

$$\therefore \rho = \frac{1}{\sigma} = \frac{2\pi v}{i} \frac{1}{\left(\frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2} - \frac{1}{r_1} + \frac{1}{r_2} \right)}{\left(\frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2} - \frac{1}{r_1} + \frac{1}{r_2} \right)}$$

$$= 2\pi R / \left(\frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2} - \frac{1}{r_1} + \frac{1}{r_2} \right)$$

今
$$r_1 = a$$
、 $r_2 = 2$ a 、 $r_1' = 2$ a 、 $r_2' = a$ とすれば $\rho = 2 \pi R / (\frac{1}{a} - \frac{1}{2a} - \frac{1}{2a} + \frac{1}{a})$ $= 2 \pi R / (\frac{2}{a} - \frac{2}{2a}) = 2\pi a R$

Γ							Γ -						Γ		
	dm	RΩ	ρΩm		dm	R Q	$\rho \Omega_{\rm m}$		dm	RΩ	ρΩm		dm	R Q	ρΩm
No.13— 1	0.25	158	496	No.13— 5	0.10	570	716	No. 4 — 3	0.20	333	836	No.32— 2	0.20	220	553
	0.50	45	282		0.25	173	543		0.40	116	582		0.40	84	422
	0.75	27.0	254		0.40	76	382		0.60	45	339		0.60	44	332
	1.00	19.4	244		0.50	51	320		0.80	27.1	272		0.80	31.5	317
	1.50	10.4	196		0.60	40	301		1.00	20.6	253		1.00	25.2	317
	2.00	7.4	191		0.75	36	339		1.25	16.7	262		1.25	18.6	292
	3.00	5.0	188		0.85	28.9	309		1.50	14.5	273		1.50	14.8	278
	4.00	3.5	176		1.00	19.3	242		1.75	11.8	258		1.75	12.6	277
	5.00	25	157		1.50	11.5	217		2.00	10.0	251		2.00	11.1	279
					2.00	8.0	201	-	2.50	6.5	204		2.50	8.9	280
	dm	RΩ	ρΩm		3.00	5.0	188		3.00	4.7	177		3.00	7.0	264
							-		4.00	3.2	158		4.00	5.2	261
No.13— 2	0.25	137	430		dm	RΩ	ρΩm		5.00	2.7	166		5.00	4.1	258
	0.50	35	220										7.50	2.7	254
	0.75	18.9	178	No.4 — 1	0.20	307	771		dm	RΩ	ρΩm		ļ		
	1.00	15.4	193		0.40	86	432						dm	RΩ	ρΩm
	1.50	11.3	213		0.60	56	422	No. 4 — 4	0.20	440	1105	 			
	2.00	7.4	186		0.80	28	281		0.40	118	512	No.32— 3	0.20	170	427
	3.00	4.3	162		1.00	19.8	249		0.60	53	399		0.40	82	412
}	4.00	3.1	156		1.25	14.4	226		0.80	28.1	282		0.60	48	362
}	5.00	2.5	157		1.50	11.6	. 219		1.00	21.1	265	ŀ	0.50	29.4	295
	.		_		1.75	9.3	203		1.25	16.8	263		1.00	22.5	283
	dm	RΩ	ρΩm		2.00	6.9	173		1.50	13.9	262		1.25	18.7	294
No.13— 3	0.25	108	339		2.50	4.5	140		1.75	11.7	256		1.50	17.4	328
140.13— 3	0.40	61	306		3.00	3.8	141		2.00	7.7	193		1.75	15.3	336
Ì	0.50	31	195		4.00	2.6	131		2.50	5.1	160		2.00	13.7	343
	0.60	22.7	171		5.00	2.1	133		3.00	3.5	132	ŀ	2.50	11.1	349
	0.75	20.2	190				- 0		4.00	2.7	136		3.00	8.4	317
l	0.75	17.2	182		dm	RΩ	ρΩm		5.00	2.4	150		4.00	5.2	259
	1.00	15.0	188	No.4 — 2	0.20	222	558						5.00	4.2	264
1	1.50	11.3	213	140.4 — 2	0.40	60	301		dm	RΩ	ρΩm				
	2.00	8.0	201		0.60	34	256	No.32—1	0.20	200	502		dm	RΩ	ρΩm
	3.00	5.0	188		0.50	23.3	234	10.32—1	0.40	93	467	No.4 — 0	1.06	19.3	242
	4.00	3.7	Į.		1.00	18.8	234		0.60	35	264	140.4 — 0	2.00	7.7	193
	5.00	3.1	195		1.25	14.5	230		0.80	22.8	204		3.00	4.2	158
	3.00	3.1	130		1.50	11.2	211		1.00	19.2	241		4.00	1	l l
	dm	RΩ	ρΩm		1.75	9.5	209		1.25	17.7	278		5.00	3.2	161 138
					2.00		196		1.50	15:3	1		7.5		1 1
No.13— 4	0.25	343	1077		2.50	7.8 5.1	160		1.75	14.5	288 319		10.5	1.60	151 182
	0.50	44	276		3.00	3.8	143		2.00	11.5	287		12.5	1.43	223
	0.75	22	207		4.00	3.0	151		2.55	8.1	254		15.0	1.42	250
	1.00	16.8	211		5.00	2.2	138		3.00	6.6	249		20.0	1.11	278
	1.50	10.2	192		J.00	۷.۷	130		4.00	4.5	226		25.0	1.05	330
	2.00	7.9	198						5.00	3.5	220		ω.υ	1.03	330
	3.00	5.2	196						5.00	3.3	220			L	·
	4.00	3.6	181												
	5.00	3.0	188												
1	1		l												

(4) 各層の固有比抵抗について

- ① 洪積層(託麻層)の電気比抵抗は、地表部で、 $(5.0\pm) \times 10^2 \, \Omega \, m$ 、地下数m において $(2.5\pm) \times 10^2 \, \Omega \, m$ 、更に深部では $(2.0\pm) \times 10^2 \, \Omega \, m$ である。
- ② 阿蘇ロームの比抵抗は耕作地表土で $(5.0\pm) \times 10^2 \ \Omega \, \mathrm{m}$ 、周溝の中の湿ったもので $(1.5\pm) \times 10^2 \ \Omega \, \mathrm{m}$ である。
- ③ 周溝を埋めた砂層の比抵抗は地表部のやや乾いたもので($1.5\pm$) $\times 10^3~\Omega$ m、地下部の含水層で($1.0\pm$) $\times 10^2~\Omega$ m である。

尚、基盤(御船層群)の比抵抗は(1.0±)×10³Ωm。

4 Conclusion

塚原古墳群の一部について比抵抗法による電気探査を行い、次の如き各結果を得た。

(1) 既に発掘されている古墳について

円墳、方形周溝墓共にその周溝は砂や砂利で埋め戻され、外見上は中央部を含み フラット な地形を成している。中央部の地質は洪積層で、その比抵抗は地表部で $5 \times 10^2 \Omega$ m、は含地下部で $2 \times 10^2 \Omega$ m。又外部溝の砂土の比抵抗は地表部で $1.5 \times 10^3 \Omega$ m、溝底部 水率が大きく、その比抵抗は $1 \times 10^2 \Omega$ m である。

(2) 未発掘の古墳について

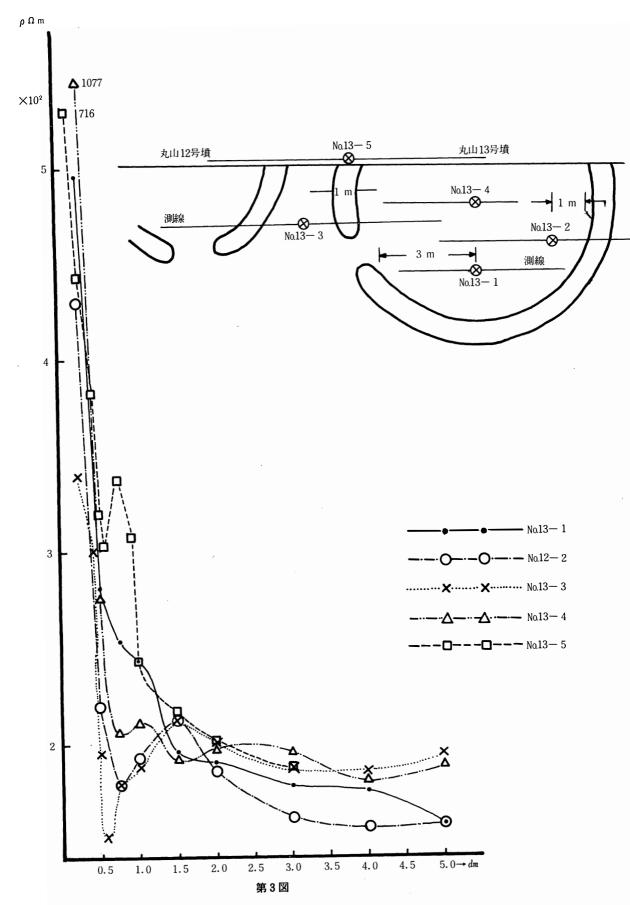
すでに発掘されている古墳の中には、その一部あるいは大部分が、未だ地下に埋没しているものがいくつかある。即ち円墳の周溝が道路や耕作地の下に残存する地点が数か 所ある。そこで、これらの地点の一、二を選び電気探査を実施した。

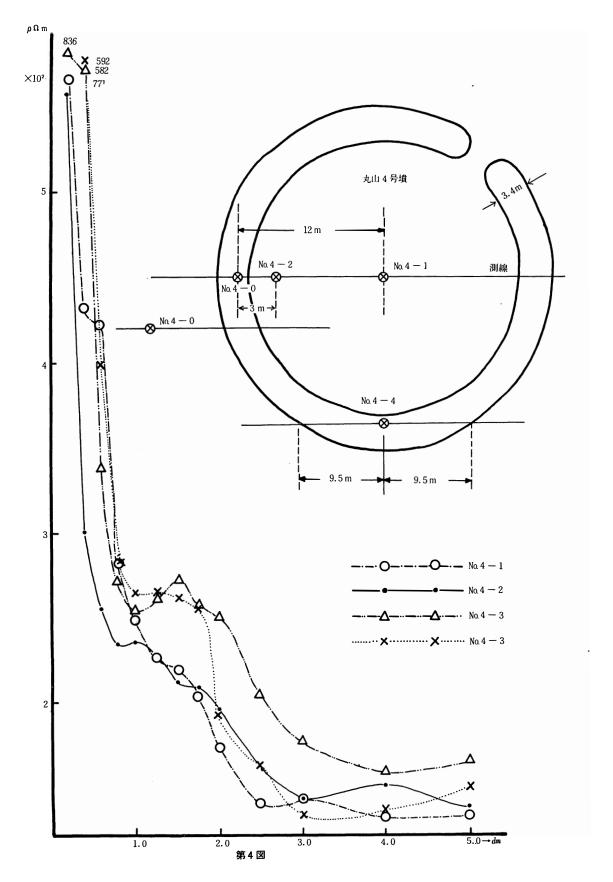
その一点に古墳群の中央部を通る道路上を選定した。その地表部の比抵抗が 7×10^2 Ω m に比べその下部は 1.5×10^2 Ω m である。この現象から推して、自然な状態での周溝は、やや湿潤な阿蘇ロームであろうことが推定出来る。

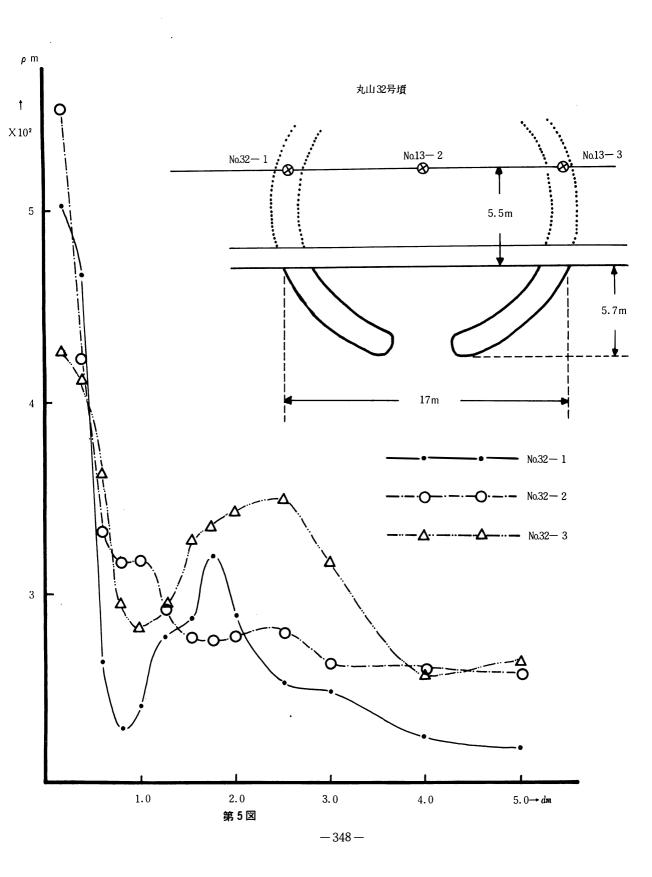
一方、現在耕地に利用されている畑の場合、阿蘇ロームで覆われた地表部の比抵抗は $5 \times 10^2~\Omega$ m 、下部の洪積層のそれは $2.5 \times 10^2~\Omega$ m 程度である。然し周溝を埋めている阿蘇ロームの比抵抗は小さく $1.5 \times 10^2~\Omega$ m であり、溝底は、やや比抵抗の大きい不透水層(洪積層)を成している。

(3) 以上の事柄から推して、埋没古墳の位置を決定する場合、電気探査法もその一つの方法だと云えそうである。唯30haにも及ぶ広大な地域の電気探査利用を案ずるとき、その作業は容易ならざることは明白である。台地一帯には相当な面積にわたり、桑畑、茶畑、その他電気探査作業を防げるブッシュ等が点在することを忘れてはならない。

尚、本調査を実施するに際し、多分の御指導を仰いだ熊本県文化財専門委員藤芳義男 先生、又現地調査に色々と御配慮願った県文化課長外文化課の方々に深甚の謝意を表す るものである。







塚原

熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査熊本県文化財調査報告第16集熊本県教育委員会発行 1975年3月

付論6 秋永遺跡発見の方形周溝墓

熊本県文化課 緒方 勉

1 秋永遺跡の調査

秋永遺跡は熊本県上益城郡益城町大字小池、秋永、麻生原、八大、枯木町、年ノ神、下原の各字にまたがるところの大遺跡である。この一帯から多量の土師器などが出土発見されている。この地点を国土地理院発行の5万分の1「御船」の図幅に求めれば、北より16cm、西より10cmのあたりに相当する。

昭和42年に至り秋永遺跡の中でも遺物の濃密に出土する「年ノ神」、「八大」、「麻生原」にかけて工場が誘致されることになった。このままで放置出来ない。そこで調査体制の整わないままに緊急に発掘調査を実施した。

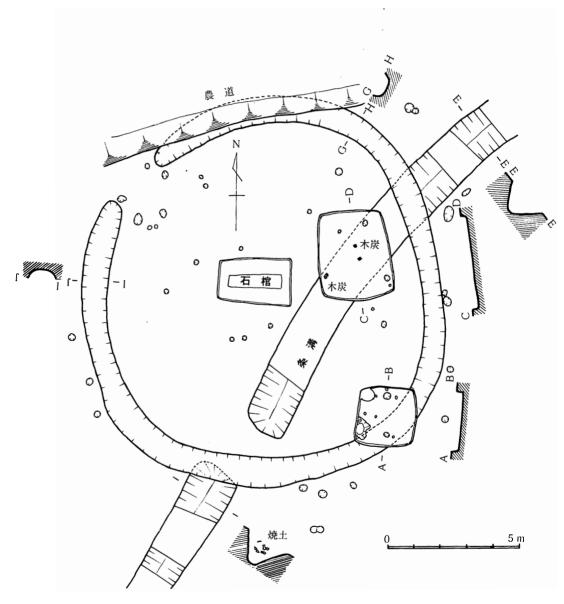
調査は昭和42年4月中旬~5月中旬にわたる長期のもので、当時の状況としては異例のものであった。調査対象地は予定される工場敷地全域におよび、文化財に関心のある学生、教師をとわず都合をやりくりしながら調査に参加した。調査も不充分で、時には瓦斯燈をともしながらの発掘であった。

塚原古墳群が発掘調査され多数の方形周溝墓が発見された。その報告書が上梓されるに及び、 熊本で初めて発見された秋永遺跡の方形周溝墓を併せて報告したい。この他秋永遺跡からは多 量の遺構、遺物が発見されている。それについては改めて本報告に付託することになろう。

2 秋永遺跡調査の概要

この調査により縄文~歴史時代にかけての遺物が発見された。遺構として発見されたものに 甕棺墓、箱式石棺、住居址及び条溝などがある。甕棺墓は弥生中期の須玖式である。甕棺破片 とみられるものには、金海式とみられるもの及び城ノ越式の土器片が採集された。 箱式石棺は総数 9 基で、うち1基は方形周溝墓であった。石棺の構造に違いがみられ、6 号石棺は上縁部にそっ て3段の小口積みをしていたが、他はすべて安山岩割石の箱式石棺であった。副葬品は殆んど なく5 号石棺から長剣1振。5 号石棺横から鉄鏃1、方形周溝墓の主体をなす破壊された8 号 石棺から鉄片が発見された。

次に住居址がある。住居址には弥生終末期とみられるもの2、古墳期4、平安期(後述)2 が発見された。V形断面をもつ条溝は方形周溝墓、石棺と重なりながら走っている。溝は断続



第1図 秋永遺跡遺構分布図

して3つにわかれ、延長70mにわたって調査した。溝中発見の遺物 (土器) をもとにして推定 すれば弥生後期初頭の遺構と考えられる。また溝には中世のものとみられる溝1条がある。溝 は大きく、断面は逆梯形をなし一側に犬走りがある。溝中の遺物からも中世遺構とみられる。

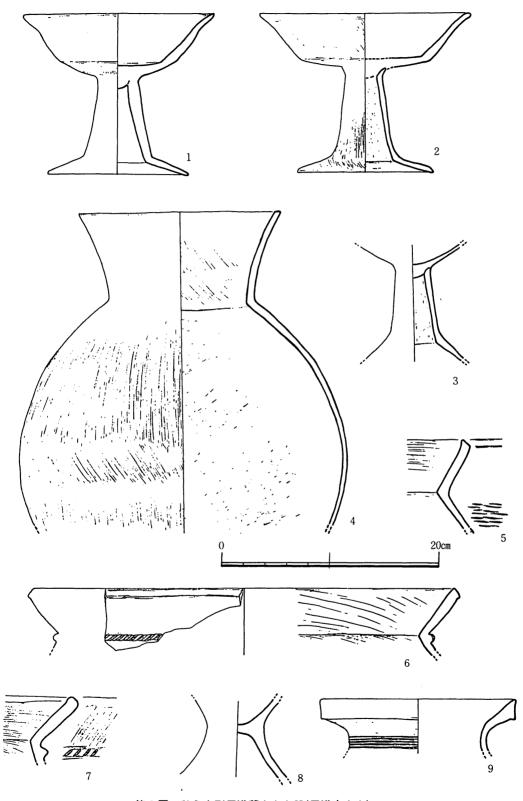
3 方形周溝墓の調査

調査も終りに近づいた段階である。ブルドーザにより表土はぎを行なったあとを、作業員により残土を削り出し遺構の確認に努めた。当時現地調査に当っていた田辺哲夫氏が「何だろうと疑問を連発。国学院大学の大場磐雄教授により方形周溝墓について提言されたのがその少し以前で、漸く方形周溝墓が話題になりかけた頃でもあった。肥後における初めての方形周溝墓の発見の状態である。

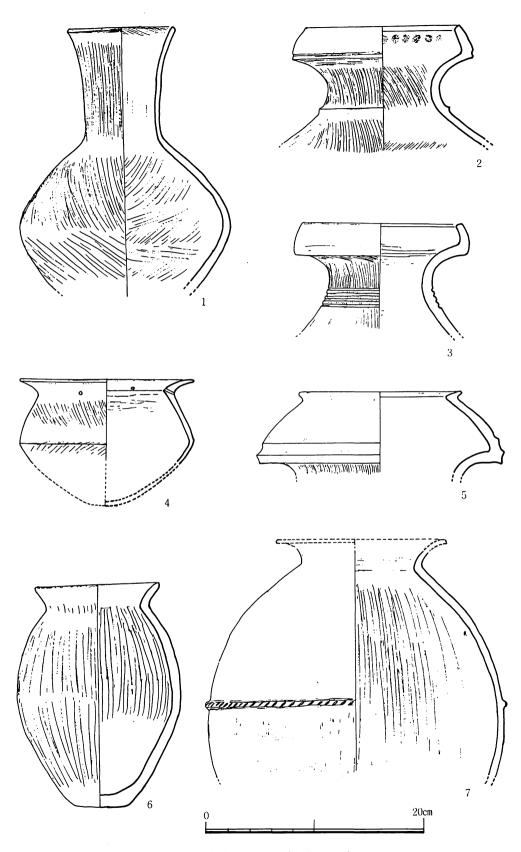
方形周溝墓の周溝の形は隅丸方形で、西北の一隅に幅2mの陸橋部がある。周溝は周溝内側で、南北12.5m、東西12mである。溝断面はU字形をなし、現況では溝上縁幅約1m、深さ35cmを測る。方形周溝墓の主体部は石棺で、石棺の大部分は一帯が熟耕地であることもあって大部分抜き去られていた。わずかな石棺残欠からして、それが安山岩を石材とした割石組合せの箱式石棺であることが確認された。主体部石棺は2m80×1m70の土壙が掘られ、その中央部に2m×50cm(石棺内法はこれより狭い)の石棺が埋設されていた。この石棺を埋めた、土壙(石棺抜取りにより攪乱)中より鉄鏃片1個が発見された。この鉄片は元々石棺に副葬されていたものとみられる。周溝中の遺物(第2図)1~9に図示したものが周溝中より発見された土器である。土器は何れも破片で完好なものはない。これらの土器を第2図でみれば大きく二つの様式に大別出来る。即ち1~4が土師式土器であるのに対し、5以下9までが弥生式土器である。当初この方形周溝墓が発見された際「弥生期」の方形周溝墓ではないか、として注目を浴びたことがある。この時点において細かい検討の余裕もなく、類例が多数あらわれるにおよび1~4の土器に方形周溝墓の時代的関連性が求められよう。5以下の土器は周辺にこの時期の遺構(住居址)が発見されていることもあって、方形周溝墓以前の遺物の周溝内への流れ込みとみられる。

土師式土器の1~3は高坏で、ほぼ同形のものである。坏部は急に立上がり外面に稜線をのこす。坏上端部はゆるく外反りとなる。脚部は急角度に立上がり裾にいたり大きく外開きとなり安定している。坏と脚の接合部の剝離状態から、これが別造りであることが知られる。器面は平滑で、脚内面に胎土の削り、2の脚外面にわずかに刷毛目が観察される。以上いずれも古式土師器に属する。

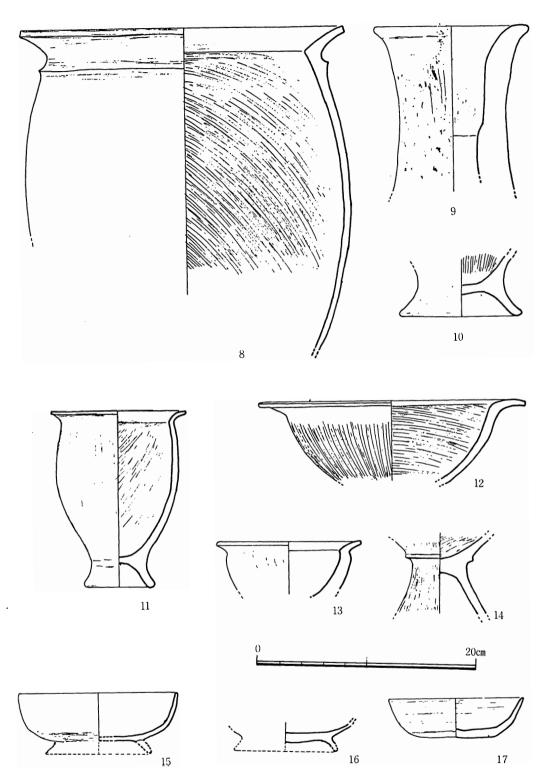
弥生式土器とみられるものは5以下の土器で、5~8は何れも甕形土器であり、5~7は口縁部、8は脚部である。5の口縁は末端が内側に「しゃくれ」ている。これはよくこの時期の土器の特徴を示している。胴部の外面は横への叩打痕があり、底部は丸底が一般的で、時には高台を付すことがある。6、7は頸部に縄目状の凸帯がある。凸帯は斜めに刻み目が付され、刻み目にも特徴がある。7の口縁は「しゃくれ」ている。この種の土器の胴部は比較的薄くつくられ、器壁の叩き目の上を刷毛目で調整されている。底部は高台を付すことが他の遺跡で確



第2図 秋永方形周溝墓出土土器(周溝内出土)



第3図 秋永遺跡出土土器(条溝内出土)



第 4 図 秋永遺跡出土遺物 (8~14 条 溝) 15~17 住居跡)

認されていることから、8がこの種の土器の脚部とみられる。8の脚末端は欠失しているが、この種の脚は一般に高く、高さ14~15 cmに及ぶ。脚末端にはよく特徴がみられ、多くの場合斜めに叩打痕をみることが多い。また末端は口縁部と相関性がみられ、5の口縁部の如く内面へ「しゃくれ」るのも特徴である。9は壺形土器の口縁部である。この土器は胴部が倒卵形丸底の壺で、口縁部にもよく特徴があらわれている。胎土精良、頸部はまるく段がなくカーブしながら口縁にむかって開き、口縁部にいたり漸次肥厚し末端は尖る。断面三角形に近いのもこの土器の特徴である。頸部には浅く波状文のつくことが多く、9の頸部にわずかに横への平行線文がみられる。文様は通常上側に横への平行線文、その下に大きく波状文がつく。文様も甚だ浅く、弥生後期の櫛目文にみるような鮮明さはない。

4 条 溝

調査の概要に記した如く秋永遺跡より条溝が発見されている。条溝は延長70mに及ぶものであるが、一部方形周溝墓と遺構が重複しておりその関連する部分について報告したい。条溝は第1図の如く北東より南西へ走り、方形周溝墓の南側周溝の中央付近で断続する。埋没土器や溝の形状から同時期の条溝とみられる。北側の溝は周溝の一部と住居址により切断され、相対的時間関係は確認された。南へ断続する条溝も周溝により切断され遺構の時間的関係が明らかであった。条溝は溝幅1m80前後で、深さ約90cmであった。断面V字形をなし、溝底20cm位が平らになっている。溝中より遺物が多量に発見され、溝底より50cm位より上、即ち溝の中程の部位から土器が多量に発見された。また溝の上縁近くから焼土も発見された。

第3図及び第4図9~14は条溝中発見の土器の一部で、遺物の上に混乱がみられないところ から、これらの土器は同時期のセットをなすものとみられる。壺形土器には数種あり、第3図 1~7はその一部で、この他に重弧文長頸壺もある。1は長頸壺で一見重弧文土器を思わせる が、胴部はまるく稜線がない。また器面には粗い箆あとをのこしている。底は丸底に近いあい まいな平底とみられる。2、3は同一類型に属する壺で、4は口縁が誇張された変化形態であ ろう。口縁は袋状に内弯し、口縁の屈曲には顕著さはない。末端は引伸して、2の如く内面に 指頭圧痕のみえるものがある。頸に段(つまみ出し)をもつものと沈線をめぐらすもの3があ る。器面には粗く箆あとがみえる。2、3の胴部は1に近いものとみられる。4の口縁には強 調と誇張がみられる。口縁ふくらみの部分に凹線(つまみ出し)が3条、口縁末端にも変化が みられる。5の器形は他に数例を数える。壺は比較的浅く、胴部の最大幅には稜線を形成する。 この種の土器の最大の特徴は口縁部に相対して二孔一対の穿孔のあることで、それはこの土器 の機能の一端を示すものであろう。北九州ではこのような穿孔のある土器が出土する。そのこ とから推測すれば蓋形土器と組をなすことも考えられる。6は無文厚手の壺である。内外面に は器面調整のため箆均しのあとが粗くのこる。7は比較的よくみかけられる壺で、類品として 宇土郡不知火町出町遺跡や上益城郡御船町大字滝川字大塚から出土している。 7 の胴部は倒卵 形で、最大幅のあたりに凸帯一条がめぐる。凸帯は縄目状で、凸帯上を斜めに刻み目が付され ている。口縁部は「く」の字状に急傾し、頸内側はシャープな稜線をなす。内側には強く箆均

しのあとがのこる。8、14は甕形土器で、10はその脚部である。11は高さ15.8cmの小形の甕で、完好でよくこの時期の特徴を示している。胴張りが少なく、胴最大幅は中央部より上に位置する。口縁部は「く」の字にまがり、この際内側にまるみをもって曲る。底部には安定した高台がつくのも一つの特徴である。器面は箆ならしで、外面は縦方向に、内側に粗く斜めの箆痕がみられる。8の甕は比較的大形で口縁径29.5cmを測る。外面は磨研され煤の付着がみられる。頸部に低いつまみ出しの凸帯があり、古い様相を残している。内面には斜方向の箆痕が胴部より上に顕著である。9は器台形土器である。この他数個の器台が条溝中より出土しているが、何れも粗雑なつくりである。9は厚味3cm前後で、器面には箆痕もなく、焼きも余りよくない。12~14は高坏形土器で、12、13は坏部である。坏部にはふくらみがあり、屈曲部より口縁末端まで比較的短い。12の器面には箆痕が顕著であるが、13の器面は平滑である。14は坏と脚の接合部で、その部位に凸帯一条をもっている。

以上は条溝中より発見された土器で、その形態からして同時期のセットをなしていたものと みられる。時間的にみて弥生後期初頭とみられる土器であるが、条溝の時期もほぼその頃のも のと考えられる。切合関係にある方形周溝墓や住居址は、条溝が埋没した後つくられている。 この間、時間的に相当距離をもっていることはいうまでもない。

5 住 居 址 (第1図)

方形周溝墓の中から二基の住居址があらわれた。北側の住居址は条溝上にのっており、南側 の住居址は同溝上にのっていて明らかな時代的前後関係を示している。

北側の住居址は27.5m×22.5mで、南北にいく分長いプランの竪穴である。住居内から滑石製石鍋破片、木炭、第4図15~17の須恵器及び条溝中と同類の土器片が出土した。17は径12.3 cmの¹不で、15、16は高台付の¹不である。土器の形態から平安期のもので、住居に伴った土器とみられる。

南側の住居址は1辺2m20の正方形プランの竪穴で、中から木炭や土器細片が出土した。時期的に北側の住居と同じく、平安期のものとみられる。

(註)

- 註1 大場磐雄「方形周溝墓」『日本の考古学Ⅲ』 月報3 河出書房 昭和40年刊
- 註2 古田正英「熊本県不知火町出町の弥生遺跡」熊本史学26号 昭和38年
- 註3 「弥生式土器集成」中九州地方(3)34 小林行雄・杉原荘介編 昭和43年刊

塚原

一熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査 ―熊本県文化財調査報告第16集熊本県教育委員会発行 1975年3月

付論7広木・水源地遺跡発見の方形周溝墓

(1) 熊本市健軍町広木遺跡

富田 紘一西 健一郎

1 遺跡の発見と調査

熊本市東部、江津湖を中心とした一帯は原始、古代の遺跡が濃密に分布しているところとして知られている。その中でも下江津湖東北の熊本市水道局健軍水源地から泉ケ丘小学校にかけては縄文・弥生・古墳各時代の遺跡があり「熊本市文化財の栞」にも 208番江津湖東岸遺跡群として記入されている。

昭和47年4月14日、熊本市健軍町広木6698番地にて地主木村専氏が住宅建設予定地内にあった楓の大木を移植する為に穴を掘ったところ箱式石棺に掘り当った。木村氏はその石棺の中に人骨を認め、熊本大学と熊本博物館に電話で連絡を行った。大学・博物館ではその事を熊本市社会教育課文化係に連絡した。そこで社会教育課では応急に調査員に手配して箱式石棺1基を調査する事とした。

調査は箱式石棺1基の予定で簡単に行なえるとの見通しで調査団の編成も行なわず、社会教育課の手配で集まったものが調査員となり開始した。しかし後に述べる通り調査が大規模になるに従って次第に陣容を備えていったが、当初より予算と人手の無い、実に頼りない調査であった。

調 査 員 熊本博物館員 富田紘一・坂本経昌・東光彦・山本誠、 九州大学大学院生 西 健一郎、 熊本大学助手 佐藤伸二、 熊本県文化課嘱託 野田拓治

調査事務 社会教育課文化係長 鈴木喬

調査応援 熊本商科大学、熊本短期大学、熊本女子大学、熊本大学、信愛女学院高校、済々 黌高校、第二高校、各考古学関係サークル。

調査参加者は上記の通りであり、各自の都合をやりくりして調査に当った。

箱式石棺1基の予定で始めた調査は、その全体を露出する過程で、その西側に併置された箱式石棺の用材を抜いた痕跡を発見し、その周辺に石棺構築時の掘り込みを検出するに至った。また、その途中で石棺と石棺痕跡との間から朝鮮式磨製石鏃1点が出土した。この事により箱式石棺の時期推定について調査員間で討論が行なわれた。討論の中で方形周構墓ではないかという疑いが提示され、箱式石棺を中心に発掘余地を残している東・北・西に試掘溝を入れる事

とした。その結果は予想通り、各試掘溝で「V」字状の周溝が発見された。この周溝も住宅敷地にかかる為に調査を拡大することとなり4月末から5月上旬にかけての連休に応援を募り、一気に掘り進める事とした。連休には延200人を越す各学校考古学関係サークルからの応援があり、周溝を相当に掘り進める事が出来た。しかし、連休を過ぎると調査応援もなく、もとの調査員2~3人の発掘となり遅々として進まなくなった。そこで5月18日、一応調査を打ち切り、熊本市教育委員会社会教育課で臨時予算の処置をして、再度調査に臨む事となった。以上4月17日から5月18日までの調査が第1次の調査といえる。

第2次の調査は財政処置がついた6月21日より開始し、肥後考古学会が市の委託を受け、西・鈴木・富田の3人が調査にあたり岩田商会が作業を行なった。この調査は方形周溝墓の発掘可能な部分を総捲りするもので、 折からの梅雨時期で仲々調査は進まず、7月17日に一応調査を終え、7月21日に埋戻しを終了した。

この発掘調査にあたっては延べ 200人を越す汗を流しての各学校の調査応援があって周溝を掘り進めたもので、特に調査員一同感謝している。これは熊本市の文化財行政の財政的・人的な面の立ち遅れを如実に物語るものである。また、地主木村専氏は三ヵ月を越える調査に対して住宅建設を延期して協力された事も調査経過の中に記しておかねばならない事である。

2 遺跡の立地

遺跡は熊本市健軍町広木6698番地にある。この地は熊本市東部の健軍台地の南西部にあたり、下江津湖に面した台地の端である。台地の縁は湖岸と平行し西北から東南の方向にのびており、ほぼ一直線をなしている。従って遺跡からみると東一北方向に微高地がつづき、西側は台地の端となり崖状をなしている。遺跡の北約 150mにて泉ケ丘小学校があり、かって縄文後、晩期の遺物が発見されている。この遺跡は学校の西隣熊本市水道局健軍水源地にものびており、水源地からはこのほかに箱式石棺が発見されている。水源地と広木遺跡との間に小さな侵蝕谷がある。明治15年8月に箱式石棺4基が土取り工事の際に発見され、その内1基より仿製方格規矩鏡が出土した健軍村陣内6556番地はこの浸蝕谷の北側と考えられている。

また、遺跡一帯から付近の人の話によれば点々と箱式石棺らしきものの発見がある。

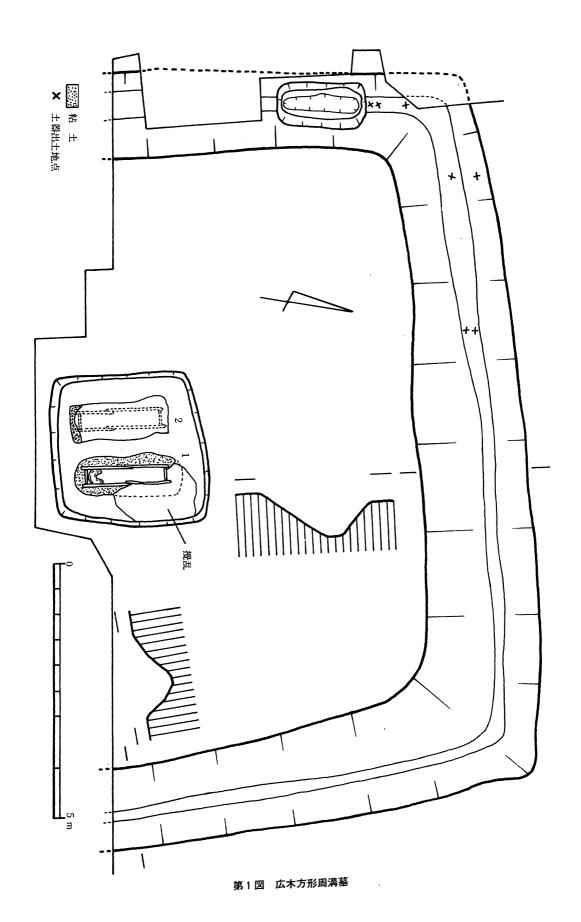
下江津湖東岸のこの一帯には相当濃密な箱式石棺群の存在が考えられる。恐らくこの中のいくつかは当6698番地のものと同じ方形周溝墓であろう。

3 遺構と遺物

当遺跡からは古墳時代前期と考えられる箱式石棺を主体部とする方形周溝墓の他に縄文時代 ・弥生時代・歴史時代の遺物が出土している。そこで、まず本遺跡の中心である方形周溝墓の 遺構・遺物について述べ、次に他時期のものを紹介していきたい。

A. 方形周溝墓(第1図.2図)

本遺跡の方形周溝墓はその四辺の溝のうち北溝の全てと東西溝の約半分を発掘した。しかし、



南側の溝は住宅があり、地主の承諾が得られなかったので溝の位置も確認出来なかった。

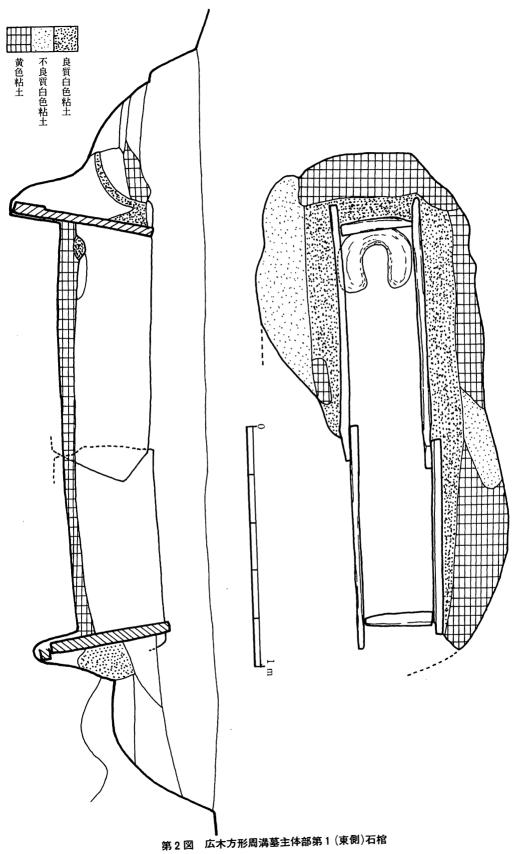
(1) 主体部について (第1.2図)

主体部は併置する2基の箱式石棺である。このうち東側の石棺(以下東石棺という)は発見時に北側の蓋石2枚が取り外されたのみでほとんど完全に残っていたが、西側の石棺(以下西石棺という)は完全に用材が抜き去られており欠け落ちた用材の破片が2・3残っていたにすぎなかった。しかし、西石棺は実に見事に石を抜いており、その痕跡は明瞭であった。

東石棺は長軸方向N-14°-Wであり、長辺 160cm、幅30cm、深さ30cmを計る。用材は板状節理に沿って剝り取った安山岩を用いている。蓋石は棺身の上に3枚の石を並べ、その上のつなぎ目に幅狭な石を1枚ずつ計2枚置いたものである。尚、発見時に北側の2枚の蓋石ははずされていた。蓋石の上は1~5 cmの厚さに黄色粘土で全面を覆ってあった。棺身を構成する石材は南北の小口に各1枚、東西の側壁に各2枚を配している。東側ではその接合部に若干の間隙があり、それに小板石1個を外側に当てている。造作は他の箱式石棺と同様に小口の石は埋め込みが深く、側壁のものは浅い。床面は中央部が端に比べて5 cm程度凹んでいる。床面の構築はその表面にベニガラを含む1 cm程度の層があり、清掃した時のその色は実に鮮かであった。その下は5~8 cmほど黄色土が突き堅められており、この層はほとんど異質の土を含まず、これも実に鮮明な色をしていた。黄色土層の下は10cm程黒色土層があり新期ローム最上層の硬質黒色土層となる。床面南端には北側を向く馬蹄形の粘土枕が作り付けられ、その造作は黄色土層の上に良質の白色粘土をもって馬蹄形に形を作り、その上にベニガラをまいたもので、その作りも丁寧なものである。石棺内には枕に頭を載せた女性人骨1体が残っていたが保存状態はあまり良くなかった。九州大学人類学教室北條暉幸氏の取り上げ時の所見では熟年の女性との事である。尚、石棺内にはこの人骨1体分以外には全く遺物は存在しなかった。

西石棺は東石棺と中央部で60cm余り間隔を置いて並置しており、用材の痕跡から見るとN-20°-Wであり若干東石棺と方向を異にしている。前に述べた通りほとんど完全に用材は抜かれていたが、2・3の剝げ落ちた石材は東石棺と同じく板状節理に沿って剝ぎ取った安山岩であった。用材の痕跡から見ると長辺 160cm程度、幅30cm内外とみられ、ほぼ東石棺と同じである。東側壁では石の組合せが痕跡として残っており、これも東石棺と同様である。この石棺では床面は崩されており、その構築・枕の有無は不明である。石棺を抜いた時の攪乱土の中に若干の骨粉を認めたほかには遺物は全く残っていなかった。

両石棺の構築の為に正方形に近い坑を掘っており、これは南北 315cm、東西 290cmを計る。この坑を40~50cmの深さに掘り、その上に石棺を組合せている。ここで不可解な事は西石棺の下に大きな掘り込みのある事である。これは石棺の断面を計る時に見出したもので石棺用材の下端より更に50cm程度も深く掘っている。その平面形は詳らかにし得なかったが円形になるものと考えられる。この掘り込みが石棺とどの様な関係にあるのか不明であるが、東石棺の西側壁用材の下端付近から掘り込みがはじまっており、西端では土坑の掘り込みと無理なくつながっている点等から見て無関係ではないかもしれない。石棺の周囲は西石棺では攪乱が多くわか



りにくかったが、東石棺では用材近く10~20cmを良質の白色粘土でくるみ、そのまわりにやや質の落ちる白色粘土があり、その外を黄色粘土で10~20cmほどとりまいている。他の部分は外側で2~3層に亘って土色を変えて築き、両石棺間では下から黄色土の混った黒色土層・黒褐色土層・ベニガラを含む粘土混土層・黄色土の順に築いている。そのいずれの層も突き堅められている。

両石棺の構築は全体の坑内に於ける位置や土層の重り合いからみて、同時に作られたのではないかと考えられる。

発掘中両石棺の間の攪乱土中より石棺に並行し、先を北に向けた朝鮮式磨製石鏃が出土した。この石鏃は方形周溝墓の主体部である石棺に副葬されていたものが、破壊によって攪乱されたものとしては時期的に若干異なる。従って、石棺には無関係に混入したものと考える方が妥当である。尚、石鏃については別に西健一郎の報告があるので参照されたい。

(2) 周溝について (第1図)

二基の石棺をもつ主体部をほぼ中央に抱くように方形の周溝が廻っている。今回の調査では北側の溝と東西の溝の約半分を露出した。周溝は溝の外側で東西 15.25mを計り、南北は南側が未掘である為に不明であるが、主体部と周溝との間隔を北側と同じ程度とすれば15.5m内外と推察される。北溝と西溝がほぼ直線的で、東溝は若干弧をえがいているがさほど顕著ではない。溝の幅は北側で1.75~2 mであり東西の溝が 1.5~1.75m程度であるのに対して若干広い。深さは北・東側がより深く、西側が浅めになっており、その差の最も大きい所で40m近くもある。溝の隅は北東と北西の二カ所が現われているが、ともに切れる事なく各辺の溝がつながっている。

溝の断面は「V」字状を呈しており、深い所では新期ロームの面まで達しており、溝の掘り込みを基準にして見ると浅い所で60cm、深い所で90cmを越す深さである。その傾斜は一般的に外側に急で内側に緩である。溝を埋めている土は表上まで5層を数える(客土している部分はこれより多い)そのうち下2層は溝中のみで他に広がらず、中1層は溝の大部分を埋め内外に若干広がり、上2層は溝に関係なく全体を覆っている。第1層は表土層で黒褐色の攪乱で、ローム粒が混入したり、砂礫が混入したりする。第2層は淡黒色土層で当方形周溝墓が埋没した後に全体を覆った土である。第3層は溝内の大部分を埋める暗黒色の土層で、その厚さは50cm内外もある。この土層は溝内のものが特に黒味が強く、周辺にゆくに従って強い黒味がなくなり第2層との区別が明確でなくなる。第4層は第3層より若干褐色がかった暗黒褐色土層で溝の掘り込みより外に広がらない。第5層は溝の底の部分のみに見られ、第4層の暗黒褐色土に大小の粘土塊の混入したもので、だいたい15~20cmの厚さがある。

第5層は周溝を掘った時の一番底の土で、一応掘り起された粘土が排土される事なく溝底に 取り残されたものであろうと考えられる。

第4層は周溝墓が営なまれた直後に付近の土壌と腐蝕物が雨水によって流入したものであろう。それを考えさせる理由としては、この土層が溝内だけに見られ、当周溝墓に伴なうと考え

られる土器類がこの層の上、第3層の下部に多い事である。これは急激な速度でこの層が埋没した事を意味するものであろう。今回の発掘調査にて余録ながら次の様な経験をした。それは第1次調査から第2次調査まで、つまり5月18日から6月21日まで約1ヵ月間に亘り発掘現場を放置していたが、その間に溝底に約15cm程度の土が堆積していた。この期間は梅雨初期にあたり相当の雨量があったのであるが、それでも毎日大雨が降ったわけではない。その時の土の堆積は溝中に溜った水のへりから堆積がはじまり「U」字状を呈している。この堆積の経験は溝中第4層の堆積と類以しており、堆積の要因・過程ともに同様であろうと推察される。

第3層は暗黒色土層で溝内の大部分を埋め、周辺にも広ろがっている。25~50cmの厚さがあり周辺やその層の上部・下部では黒味が次第に弱くなっている。この層は次第に周溝が埋没する過程で土とともに多量の腐蝕物等が流入した時に堆積したものと考えられる。その為、周溝を埋めつくし周辺部にも広がっているのであろう。

第1層・第2層は周溝がほぼ完全に埋没した後に、堆積したものである。第2層下部と第3層の上部とは漸次変化しておりその間に明確な区別はつけ難い。従って或る意味では第2層の土壌により多くの腐蝕物が流入したものが、ここで言う黒味の強い第3層となったとも云える。

(3) 周溝内の土壙墓について(第1図)

西溝の北隅から80cm程の所に溝中に深く掘り込んだ土壙墓がある。長軸方向N -13-Wで西で西溝とほぼ同じである。掘り込みは二重になっており、長辺 180cm、幅90cm、その下底で165 cm・73cmを計る外堀りの中に長辺 145 cm、幅40~28cmの内堀りがある。外堀りは掘り込み面から80cm内外の深さがあり、内堀りは10~15cm深さがある。内堀りは断面「U」字状をなし、中の土には、薄くベニガラが含まれている。外堀りの大部分は黒色土の混った黄色粘土塊で満たされている。この黄色粘土塊は径2~10cm程度のものが中心でそれ以下の粒状のものもあった。その上には10cm内外の厚さで周溝を埋めている第4層の暗黒褐色土があり、その上は他部分と同じ暗黒色土である。土壙の上では暗黒褐色土下部に土器がばらばらになった状態で出土した。

内堀りの内部はベニガラを含む事と、その「U」字状の断面により木棺の使用を推察させるが、その南半は幅30cm程度であるのに対し北半は幅が広くなり40cm程度である。この事がどういう意味をもつのか若干疑問である。

外郭の大部分を埋めていた黒色土混りの黄色粘土塊は、土壙が掘られた後にすぐ埋め戻された事を意味するものであろう。

周溝の土壙の作られた時間的前後関係は次の様に考えられる。それは故意に埋め戻されたと みられる黒色土混りの黄色土が、周溝を埋めている暗黒褐色土層に切り込んで堆積していると ころからみて、方形周溝墓が営なまれて若干の時間が経過した後の所産であろうと考えられる。 従ってこの土壙の上の暗黒色土下部において出土した土器類は本土壙よりもより新しいもの となり(方形周溝→土壙→土壙上の土器)順に前後関係を整理し得る。

(4) 遺物の出土状態について(第1図)

当方形周溝墓の主体部である箱式石棺からは女性人骨1体以外には何等遺物は発見されなかった。

周溝内からは縄文中期土器細片が点々と出土したほかには数個体分の土師器壺形土器が出土した。土師器は第3層暗黒色土層下部に集中して見られる。この土師器は西半分にのみ見られ、特に西北隅に顕著であった。また(第3図の3)の土器が北溝北壁の途中に乗っていた以外は全て溝底に位置している。これらの土器は(第3図の4)の土器が全体の70%ほどを残していた以外はほとんど破砕しており、同一個体が或る程度まとまりを示す傾向にはあるが、置き並べた状態ではない。前に述べた土壙上では(第3図の1)等の土器がバラバラの状態で出土した。その状態は故意に破損した感がある。

(5) 出土遺物について (第3図)

方形周溝墓にともなうと考えられれる。出土遺物はすべて土器に限定される。その数は細かく破砕しており、また現在整理を完了していないので明確にし難いが10個体内外であろうと推定する。この内で西溝の土壙北半上から北隅にかけて出土した(第3図の1)が大型の壺形土器である以外は全て小形の壺である。(第3図の1)の土器は色調黄褐色を呈し器高39.5cm、口径20.8cm、復原胴径30.8cmを計る。底部には焼成後に穿孔があり、その大きさは6×8cm程で打ち欠いた後に破損部を整えている。土器製作時の痕は口縁部に接合部での剝落があり明らかに接ぎ足しが確認される以外は明確でないが、胴部においても或る幅をもって横に割れている。表面の整形は次のとおりである。

口縁部 横なで仕上

頸部 縦方向に刷毛目整形の後に横なで仕上、刷毛目文がかすかに残っている。

胴部 叩目整形の後に刷毛目仕上げ、叩目は胴部中ほどに顕著に残っている。

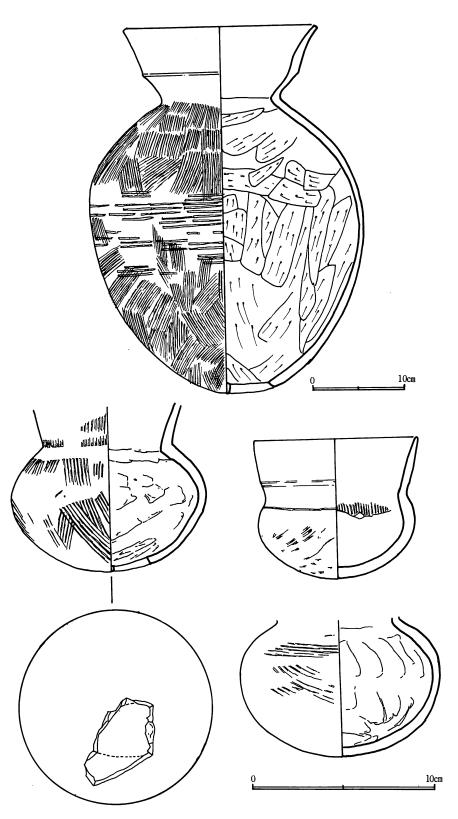
裏面の整形、仕上は次の通りである。

口縁部 刷毛目施文具による横方向の整形。その後特に上半では手なでが弱くみられる。

胴部 胴内部では全面に削り仕上げがみられ、その方向は下から上に向けて削っている。

(第3図の3)の土器は口径9 cm、器高7.5cmを計り色調暗黄褐色を呈している。口縁下3 cm にて頸部がくびれる。口縁から頸部にかけては若干のふくらみを持ち、二重口縁手法の残存がみられる。胴下部から底にかけて穿孔がある。(第3図の2)の土器は口縁部を欠き、頸部径36 cm、胴径部11cm、現高7.5cmであり、色調明橙褐色を呈する。(第3図の4)の土器は口縁部を欠き、胴径部10.6cm、現高8.8cmを計り、底部に穿孔がある。

遺物は上記の外は現在整理中であるが、上記のものと時期的に相違するものはない。これかから見ると当方形周溝墓の構築は古墳時代の前半、5世紀初頭に位置づけ得るものではないかと考えられる。また前述した通りこの構築には(石棺を主体とする方形周溝→周溝内土壙墓→土器)という時間的な差が認められるが、それは大きな差ではなく全体的に見る場合1時期の



第3図 広木方形周溝墓溝中出土遺物

所産としてさしつかえないものと考える。当方形周溝墓の発生と江津湖周辺の古代文化の展開 に関しても大きな問題が存在するが、本報告で触れない事とする。

B、縄文時代の遺物

方形周溝墓発掘中に溝中等より点々と縄文土器の出土を見た。これらの土器は全て細片であり、周溝の埋没とともに流入したものと考えられる。この縄文土器は時期的に大別して中期のものと晩期後半のものとがあり、量的には前者が多い。

中期の土器

中期の土器は色調灰褐色を呈し、器壁全体に粗い縄文を施している。これは瀬戸内地方に分 布する船元式土器に類以し九州では竹崎式と呼ばれているものである。

器形的には直行口縁のもの、口縁下でややくびれるものがあり、深鉢形を呈するものが多い様である。底部は瘤状の突出が数個ありベタ平底ではない。また波状口縁をなすものと平口縁をなすものがある。口縁下に突帯を持ち刻目を施したものアナダラ属の貝殻の肋尾を押圧したものもある。口縁部裏面は若干肥厚し、縄文帯を廻らすものもある。

現在のところ、この一群の土器の九州に於ける研究はほとんどない。ところが、各遺跡で点々と発見されており今後追及の必要がある。その点、当遺跡では九州的中期土器を全く混ぜずに出土した事は注目すべきであろう。

晩期の土器

ほんの少量出土しており、土器型式決定の土器がなく、ここでは晩期後半の土器が出土したことを記すに留めたい。

C、弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺物としては磨製石鏃 1 点のみである。遺構としては明確に弥生時代の所産と云い得るものはない。しかし、主体部西側に主体部と切り合っている土壙が弥生時代の土壙墓である可能性が強い。これは主軸方向N —76—E であり、現存長径 155 cm、幅65cm深さ30cmである。これには何も遺物等は存在しなかったが、この前期の磨製石鏃は当土壙墓の東側に副葬されていたものが箱式石棺の構築により攪乱された可能性が強い。

D、歴史時代の遺物

歴史時代に属する遺構は無い。遺物としては須恵破片が若干あり、中には蔵骨器の破片では はないかと見られるものがある。

おわりに

以上、方形周溝墓とその前後の遺物・遺構について述べたが、これに関する考察は全く略した。今後、江津湖を含む熊本市東部の文化の展開について考える必要がある。 (富田)

広木方形周溝墓出土の磨製石鏃

ここで述べる磨製石鏃の出土状態は、本遺跡発掘報告の項に記されている。この石鏃は出土 状態からみて方形周溝墓に伴う遺物ではなく、なんらかの理由で混入したものと考えられる。 付近に夜臼式土器の壺棺が出土し、また石庖丁を出土したという貝塚があったらしいので、後 述するような石鏃の特殊な性格をも考慮して、これらに関係する埋葬遺構があったことが考え られよう。方形周溝墓主体部の西側に、墓壙で切断された土壙が発見されたが、これが土壙墓 という証拠もなく、また石鏃との関係もわからなかった。

図に示したように、この石鏃は尖頭部を少し欠損している。残存長は8.8cmで復原すれば全長9.5cmぐらいであろう。 刃部の最大幅は関部にあり1.5cmである。厚さは関近くで最大0.62cmである。この種の石鏃に通例見られるように、関部で最大幅となり尖頭値に一直線に細くなり、非常に鋭利な感じを呈している。中茎は端の部分が尖っている。厚さも幅に比して厚く断面に方形に近い菱形となるのが通例であるが、本例はやや平たい感じである。一面の稜線は中央部より尖頭部にかけてやや不鮮明であり、関の幅は斜めに磨いてあり、この石鏃は再加工された疑いが濃い。石質は、肉眼観察のみなのでははっきりしたことはいえないがシルト岩らしい、という御教示を熊本博物館学芸員永井剛氏よりいただいた。

この磨製石鏃は源流が朝鮮半島に求められる特殊な遺物で、朝鮮式磨製石鏃と通称されている。熊本県内では初めての出土であり、類例は福岡県9遺跡21本、佐賀県1遺跡1本、長崎県(対馬)1遺跡3本で、ほとんど出土例は福岡県に集中している。この中で本遺跡例に共通する形態は18例ある。また最も近似するのは、志登支石墓群第8号支石墓出土例であろう。出土状態から埋葬遺構の副葬品と考えられるのは、11遺跡中5遺跡で凡そ半分になり、朝鮮半島でのこの種石鏃のあり方と共通している。遺跡の分布も玄海灘に面した所に集中していて、半島との強い関係を示している。このことからすれば、本遺跡例は福岡平野との密接な関係を物語っているといえよう。この種石鏃と磨製石剣が共伴している例が2例あり、熊本県でも磨製石剣が出土しているので、この種石鏃が出土することは考えられていたようである。

この種石鏃の所属時期は、板付遺跡環状溝内出土例が夜臼・板付 I 式土器と共伴しており、同遺跡水田址出土例は弥生中期の土器と共伴しており、金隈遺跡出土例は金海式甕棺に副葬されていたことから、弥生時代前期~中期に属することが考えられよう。本遺例は板付遺跡環状構内出土例に形態的に共通し、後二者出土石鏃が若干形態的に原型よりの変化を感じさせるので本遺跡例のような石鏃は弥生前期に属するとも考えられよう。資料が少ないので断定はさけたい。 (西)

(2)熊本市水源町 水源地遺跡周溝墓群の概略

熊本市の東南部に位置する江津湖を中心とする地域には上代の遺跡が多く、特にその東岸部

は遺跡密集地帯として広く知られている。その生活の跡も縄文・弥生・古墳・奈良・平安・鎌 食の各時代で原始・古代・中世と実に多様である。このような群集は熊本県下においても他に 例を見ない注目さるべきものである。また、江津湖東岸遺跡群の周辺にも多くの遺跡が託麻原 台地東南周縁に存在する。縄文時代のものとしては沼山津貝塚・上ノ原遺跡・健軍神社遺跡等 がある。弥牛時代のものとしては神水・陣山・協和発酵敷地等の中期の大甕棺群が台地縁辺に ある。また、水源地遺跡の立地する台地の下、江津湖々底からも縄文終末期土器とともに弥生 前期の土器が出土し、その内の苗代津遺跡は発掘調査が行なわれている。水源町の東、秋津町 付近では台地縁辺に弥生後期の土器片が多く散布しているが、その様子は不明である。古墳時 代にも江津湖々底には引き続き遺物がみられる。昭和50年の下江津湖浚渫工事により採集され た遺物中には古墳時代中頃と考えられる牙鏃や加工痕ある鹿角が多くみられる。庄口川を挟ん だ水源地遺跡の対岸にあたる湖東町では古墳時代の住居の存在が考えられる。上江津湖周縁に も点々と古墳期の遺物がみられ、中でも土製の鏡や勾玉が採集されている上江津湖祭祀遺跡は 注目される。また、水源地遺跡からはやや離れるが、その西南沖積平野内微高地に存在する重 富遺跡からは水源地周溝墓群と並行する土師器が出土しており、注意すべきであろう。奈良時 代から平安時代初期にかけては東北側にあたる熊本市出水町一帯に肥後の国府をはじめ国分寺 ・国分尼寺が置かれている。また、この付近の託麻原台地南方に開らけた沖積平野には条里制 遺溝とみられる地割線も存在する。平安時代中期になると国府は飽田郡に移ったとみられるが 公園の西側にあたる所に水前寺廃寺が建てられている。平安時代後期には健軍荘内の健軍社が 阿蘇四社に組み入れられて栄え、平安時代末の12世紀初めには神宮寺の存在も知られている。 現在の健軍社周辺や庄口川右岸には平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺物が多い。昭和49 年の健軍社北側の調査では多くの土器類が出土している。ミョウゲンジヤシキとよばれる神宮 寺の坊の跡と考えられる所からは中世の瓦質土器が発見され、その下の庄口川縁からは鎌倉時 代と考えられる青磁・須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・石鍋片及び布目瓦片等が発見されて いる。この様な歴史環境の中に水源地遺跡を含む江津湖東岸遺跡群は存在し各時代とも庄口川 及び洪積台地端の湧泉を生活の基盤としている。

水源地遺跡は熊本市水源町1-1にあり、昭和48年5月、熊本市水道局による配水地建設工事中に調査されたものである。調査は熊本博物館学芸員富田紘一が主任となり石村友広・村上静雄・高岡直子・山下敏文・西浦博秀諸氏の応援を得て行ったものである。しかし、調査前に工事予定地の内、半分以上はすでにタンク基礎の掘穿により破壊されてしまっていた。また、同地一帯は古くより住宅地等として利用されており、建築物の基礎や塵芥捨て穴等の攪乱が多く、遺構の残存は非常に不完全な状態であった。調査にあたっては、既に掘穿の行なわれた部分を中心に東・南・西・北の各部分をA・B・C・Dの各地点に分けて調査を行なった。この内、B・Dの両地点はほとんど掘穿が済んでおり、A・Cの両地点の調査に主力を注いだ。調査により確認した遺構・遺物は各時代・各時期に渡るものである。縄文時代では早・前・中・後・晩の各期の土器があり、御領式土器を出す住居址も1カ所検出した。弥生時代では後期の土器片が少量みられる。古墳時代では方形周溝墓・円形周溝墓・土壙墓の墳墓群のほか住居址

1 カ所もみられ、調査地域の中心となる時代である。このほかに平安時代とみられる須恵器片・中世と考えられる瓦質土器なども存在した。この地域は中世健軍城の跡とされている所であるが、その時代の遺物は少なかった。以下、各地点の遺構・遺物の概略を記してゆきたい。尚、本遺跡の発掘記録は現在整理中であり、ここで発掘調査時の呼称を以て述べてゆく。その為、後日詳細な報告を行なう場合とでは呼称等が異なる可能性がある事を御容赦いただきたい。

A地点

1号周溝墓 ほぼ完全な姿で発掘された円形周溝墓で、直径約10mを計る。中央に木棺かと考えられる主体部がある。周溝の西南に陸橋部があり、これは主体部の長軸線の延長上にあたる。遺物は主体部からの出土はなく、陸橋部北側の周溝内に集中してみられた。遺物としては鉄器・砥石・土器がある。土器には須恵器と土師器があり、その内容は、須恵器坏2個・土師器坏3個以外には底部に穿孔したものもみられる。

2号周溝墓 円形周溝墓の一部分を発掘したものである。溝幅も広く、大形のものと考えられ、推定直径は20mを越えると考えられる。周溝は過去の攪乱と工事により掘穿で続存が悪い状態であった。西側北寄りに陸橋部がみられる。溝内には多数の土師器が存在し、器形的には壺形・高坏の二種類である。壺形土器には底部に穿孔したものもある。須恵器はみられない。

3号周溝墓 一部分を調査したのみであるが、陸橋部をもつ円形周溝墓と考えられる。直径は不明であるが、2号周溝墓より小 く1号周溝墓と同じ程度ではないかと想像される。溝内より土器等が発見されている。須恵器と土師器があり、須恵器は蓋付坏が一組、土師器には小形壺・坏などがある。このほかに加工痕のある凝灰岩片がみられた。

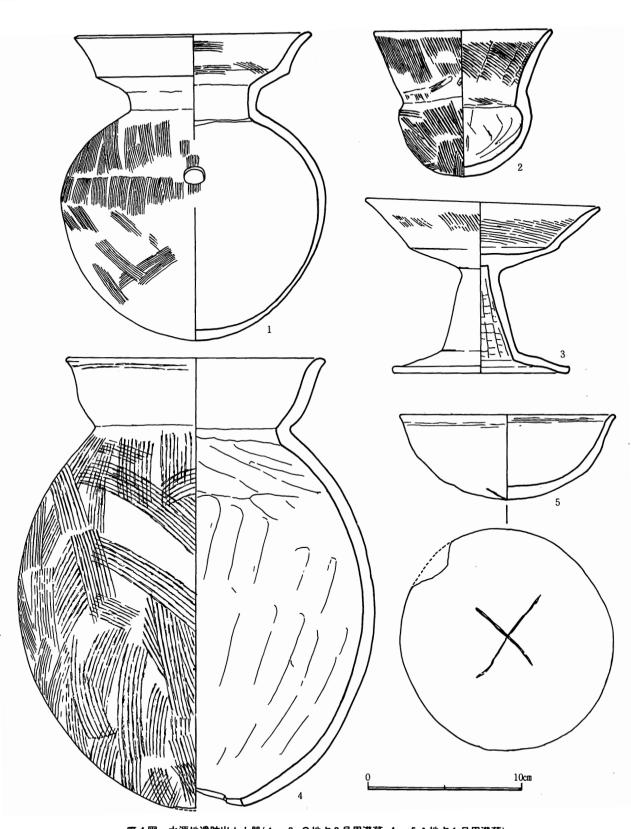
その他 上記の1~3号周溝墓のほかにA地点では土壙墓2カ所・住居址1カ所が認められた。この内、土壙墓は周溝をもたないものであるが、両者とも鉄器の出土がある。住居址は1号周溝墓と3号周溝墓の間に位置し、東西を長辺とする長方形プランをもっと考えられるものである。攪乱により東側が破壊されており、長辺は不明であるが、現存長約3mである。短辺は3.75mを計る。住居址覆土中からは壺形・高坏を中心とする土師器が出土しているが、須恵器はみられない。このほかに点々と縄文後晩期の土器片がみられた。この中には幾つかのまとまったものもあり、A地点における遺構の確認が縄文後晩期の地表面かややそれより下であるうことが知られる。

B地点

調査開始前にほとんど掘穿が済んていた部分である。少面積を発掘したが過去の建築物の基礎とみられるコンクリートが地山層(ローム)に達しており、今回の工事以前に遺跡は消滅していたと考えられる。攪乱土中より少量の土師器片を得ている。

C地点

1号周溝墓 台地端から2号周溝墓を隔てて東寄り(A地点寄り)にみられた円形周溝墓である。工事により半分が切られ、また残存部における攪乱も多い。これにより直径は計り得ないが、復原すると約13mとなる。中央に主体部があり、南北方向を示す木棺墓と考えられる。工事の掘穿により縦位に東半分が削り取られていた。主体部内には少量の鉄錆の痕跡があり、



第 4 図 水源地遺跡出土土器 $(1 \sim 3 \cdot C$ 地点 2 号周溝墓、 $4 \sim 5$ A 地点 1 号周溝墓)

鉄器は破損時の土に含まっていたらしい。周溝内での遺物の出土はなく、また、攪乱が多く陸 橋の存在も不明である。

2号周溝墓 台地端に位置する方形周溝墓で、西側半分はすでに削除されていた。当周溝墓でも残存部分にも攪乱が多くみられた。方形周溝墓は南北約17.5 mを計り、東側と南側の溝を発掘した。主体部は粘土被覆の石棺と考えられるが、石棺はすでに抜き取られ、粘土被覆の一部が残存していた。この石棺は昭和33年に故志方正和氏により調査されたものにあたるらしい。周溝内からは多くの土師器が出土している。器形としては高坏と壺の二種類がみられる。壺形土器の中には器壁に叩目技法による整形痕を残すものもある。

3号周溝墓 台地端、2号周溝墓の南に並んで位置する方形周溝墓である。西側の溝は2号と同じく削り取られており、東側の溝も工事のために半分ほどが削除されていた。南北約25mを計る巨大な方形周溝墓で、塚原古墳例と同様の大きさを誇っている。溝中には土器はみられなかった。周溝墓内、やや南寄りに主体部が存在する。主体部は粘土被覆の箱式石棺で、中には人骨1体分がみられた。棺蓋の上には刀子が1点置かれ、棺内には遺体の上を覆ったとみられる布が残存していた。又、周溝墓内より縄文後期末御領式土器を出す住居址が検出された。

D地点

D地点は工事範囲外であるため、現状保存をする事となり、従って調査も行なっていない。 その後、D地点北側にあたる台地端の斜面が削られた時に箱式石棺が1基発見された。この際、 石棺にともなう周溝の一部を調査した結果、円形周溝墓であることが確認された。また、この 周溝墓付近からも御領式土器がまとまって発見されている。

水源地周溝墓群の推移

これまで述べたのが水源地周溝墓群の概略である。調査を行った周溝墓は都合7基あり、それは方形周溝墓2基と円形周溝墓が5基である。この内、方形周溝墓は西側の台地端に並んで認められ、円形周溝墓は端から離れた東側に存在している。当遺跡と一連をなすと考えられる広木方形周溝墓も台地端に存在している。出土した遺物からみるとA地点1号・3号周溝墓では須恵器が出土しており6世紀代の所産とみられる。これに対してC地点2号周溝墓では土師器壺に叩目技法が用いられており、これは土師器の中でも古式の伝統をうけたものである。C地点3号周溝墓では、まとまった土器群の出土はないが、周溝墓内から出土した土師器壺の口縁部は前者の叩目技法を用いた土器に類似するものがある。

また、広木方形周溝墓の溝中より出土した土器の中にも叩目技法を用いたものがある。この様な点からみると、水源地・広木周溝墓群では、まず台地端に方形周溝墓が並んで作られたらしい。その後、東寄りに作り進められ、形態も円形周溝墓へと変化していったと考えられる。

尚、詳細については現在整理中であり、後日報告書を刊行の予定である。 (富田) 註1. 「熊本市文化財の栞」熊本市教育委員会、昭和47年

この遺跡群に属するものとしては次の様なものがある。水源地遺跡・泉ケ丘小学校々庭遺跡・広木方形周溝墓・陣内城跡などがある。

- 註2. 富田紘一「熊本市秋津町沼山津貝塚発掘報告」熊本博物館報No.1 昭和44年 富田紘一「熊本市沼山津貝塚と出土土器」考古学ジャーナル第50号、昭和45年
- 註3. 小谷凱宣他「熊本市健軍町上ノ原遺跡発掘報告書」熊本市教育委員会、昭和46年 富田紘一「上ノ原遺跡」熊本市東部地区文化財調査報告書、熊本市教育委員会、昭和47年
- 註 4. 富田紘一「健軍神社境内遺跡」熊本市東部地区文化財調査報告書、熊本市教育委員会、 昭和47年、
- 註 5. 東光彦「出水神水遺跡」仝上報告書
- 註 6. 緒方勉「江津湖苗代津遺跡」熊本県教育委員会、昭和49年
- 註7. 吉田雅人・福田正文氏資料による。
- 註8. 志方正和「重富出土の土師器について」 褧衣 4号、昭和33年
- 註9. 松本雅明「肥後国国分僧寺」「肥後国国分尼寺」熊本市南部地区文化財調査報告書・熊本市教育委員会、昭和50年
- 註10. 米倉二郎「九州の条里」九州アカデミー1号、昭和35年
- 註11. 小林久雄・松本雅明「水前寺廃寺の塔礎石群」熊本史学12号、昭和32年 松本雅明「水前寺廃寺の塔」熊本市東部地区文化財調査報告書・熊本市教育委員会、昭和 47年
- 註12. 森下功「健軍神社」仝上報告書

尚、本稿のうち(1)熊本市健軍町広木遺跡については、『熊本市東部地区文化財調査報告書』 (熊市市教育委員会、昭和46年) に掲載の「広木方形周溝墓」を同教育委員会、執筆者の同意を得て再録を御願いした。 (編集者記)

塚原

無本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査熊本県文化財調査報告第16集熊本県教育委員会発行 1975年3月

付論8 火君と塚原古墳群

熊本大学法文学部 松本 雅明

1 火 国

火国(肥国)は火君に由来するけれども、それが実証的に考えられたことはなかった。たとえば八木田政名(桃水)の『新撰事蹟通考』には、『日本書記』や『肥後風土記』『肥前風土記』の逸文を引いて、地名や火国の火の由来の考証をしているが、伝説にもとづくところが多く、実際の資料によるところはほとんどなかった。それは『肥後国誌』などにもうけつがれ、その後もそれ以上に問題にされたことはなかった。それが古墳文化とからみあわせて問題にされたのは戦後、ことに昭和33年から37年まで熊本日日新聞に「熊本の歴史」を連載し、5冊の単行本として纒めたときであった。

しかし、『紀』『記』や『風土記』の記事が全く無意味かというと、それは少くとも7世紀頃の肥後の伝説を記していることに間違いはない。それは6世記に遡れるものを含んでいるかも知れない。そこでもう一度ふりかえってみよう。『肥後風土記』逸文(『釈日本紀』引)には、

肥後国者、本与肥前国合為一国。昔崇神天皇之世、肥後国益城郡朝来名峰、有土蜘蛛、名 曰打猨・頸猨、二人率徒衆百八十餘人、蔭於峯頂、常逆皇命,不敢降服。天皇賴肥君等祖 建緒組、遺誅彼賊衆。建緒組奉賴到来、皆悉誅夷。便巡国襄、兼察消息、刀到八代郡白髮山、 日晚止宿。其夜虚空有火、自然而燎、稍々降下著焼此山。建緒組見之、大懷驚恠。行事旣 軍、参上朝延、陣行状秦言云々。天皇下詔曰、剪拂賊徒、頗無西眷、海上之勲、誰人比之。 又火從空下焼山、亦恠火下之国、可名火国。

とあり、『肥前風土記』逸文(同前)には、次のようにしるす。

肥前国者、本与肥後国合為一国。昔者磯城瑞籬宮御宇御間城天皇 素禮之世、肥後国益城郡朝来名峯有土蜘蛛打猴、頸猨二人。師徒衆一百八十餘人、拒捍皇命、不肯降伏。朝廷勅遣肥君等祖健緒組伐之。於茲健緒組奉勅、悉誅滅之。兼巡国襄、観察消息、到於八代郡白髮山、日晚止峯。其夜虚空有火、自然熛稍々下降、就比山燎之。時健緒組見而驚怪、参上朝廷奏言。臣辱被聖命、誅西戎、不霑刀刃、梟師自滅。自非威靈何得然之。更挙燎火之状奏聞、天皇勅日、所奏之事、末曽所聞、火下之国、可謂火国、即挙健緒組之勲、賜姓名日火君健緒純、便遣治比国。因火日火国、後分両国為前後。

両書は少しの異同のほかは、ほぼ同文である。注目されるのは益城郡の朝来名峰に賊がいて それを肥君の祖が討伐したこと、八代郡の白髪山で火が虚空から降って山を焼き、そこから火 国と名づけられたことなどである。伝説的な要素を除くと、火君、火国はその地方に関係があ ることが述べられている。もちろん、その頃、大和の将軍が、中部九州を征することはありえ ない。

火国はまた『書紀』『風土記』の景行天皇の条の、球麿贈唹征伐のあとの物語にみえる『書紀』には、

景行天皇十八年四月壬戌朔甲子到熊縣、壬甲自海路泊於葦北小島云々。五月壬辰朔從葦北 発船、到火国、於是日没也、夜冥不知所著、遙視火光、天皇詔挾抄者曰、直指火處、因指火 往之、即得著岸。天皇問其火光處、何謂邑也。国人對曰、是代縣豊村、亦尋其火是誰人之火 也。然不得主、兹知非人火、故名其国、曰火国。

『肥後風土記』には、

『肥前風土記』には同じことを、

穩向日代宮御宇大足彦 天皇^{景行}、 誅球磨贈 唹、而巡狩筑紫国之時、從 章北火流浦発船、 幸於火国渡海之間、日没夜冥、不知所著。 忽有火光、 遙視行前。天皇勅棹人曰、直指火 處。 応勅而往、果得著崖。天皇下詔曰、何謂也。国人奏言、此是火国八代郡火邑也、但不 知火主。干時天皇詔群臣曰、今此燎火非是人火、所以號火国、知其爾由。

とする。これによれば、熊県や球磨贈啉と異り、葦北の火流浦から舟行したところに、八代郡の火邑があることが知られる。火流浦は一般に云われているように、日奈久の古名であろう。しかし火邑は、『書紀』には八代県の豊村となっている。火邑はおそらくのちの肥伊郷(『和名抄』)で、『續日本紀』 和銅6年5月の詔に「畿内七道諸国郡郷名著好」とあり、『延喜式』民部式に「凡諸国部内郡里等名并用二字、必取嘉名」とあるによって、火を肥とし、「伊」をつけて二字にしたものであろう。

「熊本の歴史」編集のとき、宮原町・竜北町の間を通る氷川はかって火川で、好名によって火を氷にかえさことを論じ、従って肥後郷は宮原付近にあったのではなかろうか、と想定したことがあった。豊村はその北の松橋町付近しか考えられない。中世の豊福荘・豊田荘などはその遺命であろう。しかし海岸であるから松橋付近を考えるのがもっとも穏当であろう。旧松橋町・当尾村は古くは宇土郡豊福村、小川町は八代郡であったと思われる。そこから竜北町・宮原町付近は火君の本拠で、彼らの墳墓が野津古墳群、すなわち中ノ城・姫ノ城・端ノ城・物見櫓などの100mから70mに及ぶ巨大な前方後円墳群と大野窟古墳などの大巨石墳であると考えられた。物見櫓古墳は単に松林とみられていたのを、昭和35年頃、筆者が尚絅高校歴史研究クラブと共に発見したものである。大野窟は昭和37年の調査によって天井の高さ約8m、石室の長

さ約13m あって、天井の高さでは日本で二番めの大巨石墳であることが判った。円墳の径は約40m とみられていたが、その後の東北部の崩壊によって、現在の家並の間の道路が周溝と思われ、そうすると旧墳丘は社殿や民家を含み径約80mの円墳とみられるにいたった。これは筑紫君とならんで、中部九州最大の豪族である火君の墳墓とするにふさわしいものである。

2 火君の発生と移動

しかし野津古墳群は5世紀の後半を遡らないものであり、ことに姫ノ城古墳は周囲より靫・きぬがさ・さしば・楯などを出土し、中ノ城古墳の東の天堤古墳からは巨大なきぬがさを出し、装飾古墳に平行するものと思われた。中ノ城の北斜面から舟形石棺一基が出土したが、それは火君に伴うものとは思われなかった。物見櫓を除くほかは前方部がかなり高くなっている。物見櫓の調査は行っていないが、前方部が低いのは、丘陵上の立地の条件によるのかも知れない。

しかし昭和40年頃から、宇土半島の基部に続々と前方後円墳が発見された。それまで古保里の夫婦塚の女塚だけであったのが、弁天山・国越・スリバチ山・迫ノ上・城ノ越・仁王塚・天神山・向野田・松橋大塚などの10基の大前方後円墳が発見された。天神山は全長約120m、スリバチ山は約100m、いずれも60m余である。このうち多くが蜜柑栽培や採土のために削られ、昭和40年いらい弁天山・迫ノ上・国越・向野田の4古墳が発掘調査され、城ノ越古墳が破壊された。向野田以外は盗掘に遭っていた。

このうち弁天山は竪穴式石室に割竹式木棺を埋め、周囲に二重口縁で底に穴を穿った土師器の壺をめぐらし、ほぼ4世紀初期と思われた。おなじ様式をもつ迫ノ上が、それにつぎ、その西背後に聳えるスリバチ山もおなじ頃のものと思われる。向野田は竪穴石室のなかに長大な凝灰岩の舟形石棺を蔵し、若い女性人骨、鏡3面(内行花文鏡・方格規矩鏡・鱗鳳虺竜鏡)、車輪石のほか数多くの刀剣類、貝の腕輪・玉類が出土した。破壊された城ノ越の内部は不明であるが、三角縁神猷鏡1面を出土し、向野田と同じく4世紀後半と思われた。国越は石室内部に組合式家形石棺を蔵し、その内部に直弧文を彫って彩色し、5世紀後半もしくは6世紀初期と思われる。この付近にはそれより後と思われる前方後円墳はなく、いずれも小形の円墳となるので勢力の推移が考えられるのである。

しかも先の八代平野の野津古墳群や大野窟古墳は、装飾古墳の時代と思われるので、5世紀末から6世紀初に宇土の古墳構築者の主流が、八代平野に移動したと考えられるのである。古文献の伝承のなかに、火国の起源が豊村とか火色とかあるのは、この両地方の伝承が残っていたからにちがいない。

それならなぜ八代地方に移ったのであろうか。宇土地方に根拠をもち、肥後でもっとも古い 大前方後円墳を形成したのは、海洋進出と同時に、熊本、八代の両平野をおさえるためであっ たと思われる。それが5世紀末より本拠を移しはじめたのは、大和朝廷の圧力が朝鮮出兵にか らんで、九州の国造らに強く加わり、それを避けるためであろう。しかも 527~8年に磐井が 反乱をおこすと、磐井には加担しなかったけれども、少くとも、筑紫君と縁組みしていたので

註2

(『百済本紀』)、大和朝廷の重圧はさらに加わり、一層それをさける必要に迫られたと思われる。同時に八代平野の開発も見遁しえないであろう。

このようにわれわれは火君は4世紀初に宇土半島の基部におこり、その中心は5世紀より6 紀初期にかけて八代平野の宮原・竜北付近に移動したと考えた。

しかし昭和47年より49年にかけて、九州縦貫高速道路の熊本〜松橋線において、下益城郡城 南町の塚原古墳群内が発掘調査されると、盗掘もしくは破壊された古墳の石棺や周溝が続々と 現れ、さらに多数の方形周溝墓が発見された。方形周溝墓は北の斜面から丘陵の頂上部にかけ て群集し、その南は円墳となり、前方後円墳が二基みられた。東の測面には円墳がある。また 南より北に登る二本の墓道もみられた。方形周溝墓は道路内だけで34基に及び、古墳の総数は 90余基である。方形周溝墓も近畿・関東の一辺4~5mのものではなく、最大なものは一辺27 mで、20m以上が4基、最少のものでも10m及んでいる。全面が調査されるなら100基以上に 及ぶと思われる。古墳全体の数は 500~ 600基以上とみられている。ここでは方形周溝墓から 円墳・前方後円墳への移行がみられ、日本でも稀有の重要な遺跡であることがわかった。

方形周溝墓は熊本県では、八代郡竜北村高塚、上益城郡益城町秋永、熊本市健軍町広木、同水源などから発見されている。北九州では福岡県那珂川町の炭焼古墳(6基)、古い伊都国である糸島郡の平原、佐賀県の姫方などが発見されている。しかし瀬戸内海沿岸になく、岡山県では別に弥生時代の後半以後、丘陵や山頂に立地する方形台状墳が発見されている。都月二号墳、鋳物師谷二号墳、伊与部山一号墳などがそれである。九州でも久留米祇園山古墳はその形式をとり、墳頂に大形の箱式石棺、その下段に石蓋土壙墓、箱式石棺、甕棺など60余の埋葬施設が見つかっている。

この西国、東国の方形周溝墓を比較すると、(1)東国は弥生中期(一部は前期)からみられ、年代が古いこと、(2)東国では一辺 4~5 m のものが最も多く、周溝のない土壙墓の中に混在していること、(3)西国のは大きく10m から27m に及んでいること、(4)方形台状墳と同じ性質をもつとみられること、(5)西国と東国の中間地帯にみられないこと、などの相違がある。

しかも最も重要なのは西国のものは漢の方墳の影響と思われることである。中国では殷・周時代には墳を築かないことを礼としたが、戦国民末には斉・趙・秦・楚などの周辺の異民族の国が方形の高塚を築き、秦の始皇帝の統一以後はそれが習慣となった。したがって漢による南満州・朝鮮の支配・漢人の北朝鮮亡命などによって、北朝鮮ことに高句麗は方墳の制をとった。ことに平壌付近におかれた楽浪郡の影響が大であった。しかし後漢末から魏晋にかけて、国家財政の窮乏から薄葬が主張され、丘陵の端を切りとって墳丘を築くようになり、排土量の少ない円墳が一般的になる。朝鮮支配の中心は京城付近の帯方郡に移り、そこから百済・新羅は円墳の制をとるようになる。

このように見ると、南朝鮮→玄界灘沿岸→瀬戸内海→近畿へと通ずるルートでは、方墳は発生しえない。少くとも大陸との直接の交渉が考えられなければならない。それは中部九州から 天草北部を経て、五島列島、濟州島西、朝鮮西海岸を経由して遼東半島・山東半島に通ずる道 である。縄文後晩期に黒陶・小兒甕棺・抜歯の風習・稲が伝来したのも、このルートのほか考 えられない。

そうすると、東国に古い方墳がおこり、西国にそれより後れて方墳が発生するとみることは、 歴史的・地理的にも不可能である。現在のところ私は、西国と東国とでは発生の要因を異にし ていると考えたい。西国のものが中国の方墳の影響であるのに対し、東国のものは身分を示す ために墳墓の周囲にめぐらされた濠とみたい。

かくみると塚原の方形周溝墓群は漢の方墳の影響で、ここを宇土の古墳群に先立つ火君の発祥地と見ることは可能である。その祖先は城南町宮地の台地に居住し、住居址をはさんで、北と南に甕棺・箱式石棺の墳墓をもつ弥生人である。それが浜戸川をやや遡って、宮地から沈目・陳内の台地に進出し、浜戸川の平野をはさんだ対岸の塚原の丘陵に墳墓をきずいたと思われる。塚原の方形周溝墓からはC14測定の資料が出なかったけれども、同質の土師器を出す城南町沈目遺跡の住居址ではC14測定の結果、紀元 255年という結果が出ている。

3 宇土の火君

このように火君は塚原・沈目付近におこり、ついで宇土半島基部に進出して、そこを本拠とし、5世紀後期から八代平野に移動している。しかしそのときも益城・宇土の地方を確保していたことは、奈良・平安・鎌倉の文書によって明らかである。

火君が塚原から宇土に移る過程を示す重要な記録が朝鮮の『三国史記』に見えている。それ ニシクム は新羅本紀の治解尼師今田3年 (249) 夏4月に、倭王の将軍干道朱君が来襲し、舒弗干の于 老を殺したとあることである。于老の列伝には同年の7年(253) となっている。本紀は列伝に 拠ったと思われるので、 列伝の年紀が正しいであろう。 列伝の記事は次のようである。

7年(癸酉)、倭国の使臣の葛那古が館にいたとき、于老は彼を主とし、客と戯れて、「早晩、汝の王を塩奴とし、王妃を爨婦となさん」といった。(塩奴は塩焼人夫、爨婦は炊業婦である。)倭王はこれを聞いて怒り、将軍于道朱君を遣わして討った。大王(新羅 = 斯盧王)は出でて神村に居た。于老は「今この患いは、私が言を慎まなかったからで、私がこれに当たろう」と言ったついに倭軍に抵って、「前日の言は戯れに言っただけだ。どうして師を興こして正此に至ると思おう」と云った。倭人は答えないで、これを執え、柴を積んでその上に置き、これを焼き殺した。

この時、于老の子は幼弱で歩くことができなかったので、人が抱いて馬に乗せて帰った。のちに訖解尼師今となった。味鄒尼師今のとき、倭国の大臣が来聘した。干老の妻は国王に請い、私に倭の使臣を 饗し、かれが泥酔するに及んで、壮士をして夜に曳きおろしてこを焚き、前の怨みを報じた。倭人は忿って金城を攻めたが、克てないで引帰した。

このことは『日本書紀』神功皇后紀に引く一説(一云)にみえている。新羅王の宇流助富利 **** 智干をとりこにし、海辺で殺し砂のなかに埋めた。日本軍は一人の宰を駐留させて帰ったが、 新羅王(宇流)の妻は夫が埋められている場所がわからないので、宰をあざむき、「あつくお礼し てあなたの妻になろう」と言って夫の屍のありかを知り、宰を殺した。宰の屍の上に王の柩をお き、「卑しい日本の宰の屍の上に尊い王の棺をおくのが、尊卑の順序にかなっている」と言っ た。天皇は大いに怒って軍を興し、軍船は海に満ちたので、新羅国はなすところを知らず、王 の妻を殺して罪を謝した。

『書紀』には新羅王とするが、宇流(于流)はソボルカン(舒弗邯・角干)すなわち大臣である。『三国史記』によると、于老は奈解尼師今の子で、太子・伊飡・舒弗邯を歴任しており、その間に、大将軍・知兵馬事などの官を兼ねていて、軍略に長じていたことがわかる。于老が『書紀』にみえることは、『書紀』が成立する前、おそらく新羅の真興王6年(545)に編集された新羅の『国史』を見ており、それを神功紀に結びつけていることが知られる。于老の記事、同時に倭国使臣葛那古、将軍于道朱君の記事は、『三国史記』4世紀以前に出てくる唯一の具体的な倭人の人名もしくは氏族名として貴重である。

于老が葛那古を饗したのはおそらく正月の宴であろう。しかも于老が殺されたのは4月である。すなわち1月から4月までの間に、使者の送遣・報告・倭王の于道朱君に対する命令、朱君による軍隊や軍船の編成、渡海、戦争がきわめて迅速に行われていることがわかる。倭王と宇土朱君が近距離に居住し、緊密な連絡をとっていたと見るほかないであろう。

この将軍名の于道はウトで、朱君はヒノキミであろう。朱は火の色であるから、その意味を とったと思われる。たんに朱君とせず于道と地名を付したのは朱君(火君)の本拠が別にあり、 于道はその支族の居る場所を示していると思われる。

昭和49~50年に宇土市の西岡台が調査された時、この中世の宇土・名和氏の城址の頂上の千疊敷(海抜39.1 m)に幅4 m、深4 mのV 字形の直角の溝が発見され、北と東に向って切り落されていることがわかった。東部や千疊敷の発掘調査はまだなされていないが、これが古墳初期の高地性集落址、すなわち城砦であることは明らかである。しかも出土の土器は塚原の方形周溝墓にきわめて類似する。

于道朱君の年代は于老列伝によると、253年とあるが、この時代の記事はほぼ30余年早くなっている。また倭王は男性で妃がいるので、女王卑弥呼や壱(壹)与の時代ではありえない。 少くともその次の時代、すなわち280~290年代が考えられるであろう。

このようにまず宇土半島基部に支族を遣わした火君が、その主力をここに移すのは4世紀になってからであろう。西岡台の西の綱津がオホツと呼ばれるのはそれが大津、すなわち港を意味したのではなかろうか。

今まで塚原の方形周溝墓の年代に問題があり、4世紀末、或いは5世紀初といわれていたが、上述のことは土師器の起源、編年に再考の余地があることを示すのではなかろうか。それは、弥生文化が朝鮮半島を経由して伝来したのに対し、古墳文化は大陸から直接伝来し、もっとも大陸交通の便をもつ有明海沿岸におこったとみることは不可能でない。すなわち土師器の文化がまず有明海岸におこり、北上して弥生文化を駆逐したと考えるなら、土師器の編年には、再考の余地があるであろう。しかもこのルートはのちに装飾古墳が伝来し拡がったルートと全くおなじである。

それは沈目の住居址のC、4測定の結果 255年と出ていることからも推測される。

4 火君の消長

漢代には墓域に墳のほかに、衣冠机杖を収める寝、木主(位牌)をまつる廟をおいたが、後漢末いらいの薄葬思想によって、丘陵を削って墳(円墳)をつくると同時に丘陵の一部分を削平して廟寝(魏晋には一体)もしくは石殿をつくる方形の場所を設けた。それは時に前方後円のような形をとった。河南省密県打虎亨1号後漢墓、内蒙古和林格、後漢墓など多く発見されつつある。最近まで日本で固有に発生したと思われた前方後円墳が、そうでないことが実証されつつある。そのようなものは、朝鮮半島にはみられないので、前方後円墳伝来のルートもまた大陸から朝鮮半島の西、済州島の西、五島列島を経由してきたと考えざるをえない。おそらく最初の前方後円墳は、(1)丘陵の先端を切りとったものであること、(2)前方部は墳丘に比してかなり低いこと、(3)前方部は短く、丘陵からの切断部は形式的で浅いこと、(4)周溝は存在しないが、きわめて浅くもしくは狭いこと、などが考えられるであろう。そのような前方後円墳を古式古墳のなかから探すと、次表のように宇土半島基部に集中していることが知られる。すなわち火君の古墳群のなかで発生し、4世紀末以後、北九州・瀬戸内海・近畿にひろがっているさまがみられる。

表 1 前方後円墳計測数値

表2 前方後円比例数値(全長を10とする)

	古	墳	名	全 長	後円径	前方幅	前方長	後円高	前方高
北九州	石	塚	山	120	70	45	50	10	4
州	赤		塚	20	23	15	17	4	
	弁	天	山	53	35	20	18	6	3
中	迫	,	上	58	39	15	20	4	2
部	スリ) バ-	チ山	100	62	25	38	12	6
九	向	野	田	86	52	39	39	9	6
州	山		下	58	37	22	20	8	5
711	院		塚	78	43	26	35	6	3
	桜	井茶 F	山山	208	109	110	138	25	15
近	箸		墓	275	150	125	108	29.4	16
	崇	神	陵	240	160	96	95	23	14.6
畿	景	行	陵	300	165	170	130	23. 1	23.7
	椿	井 大	、塚	200	80	60	120	20	5

	世	ī 墳	名	全	長	後円径	前方幅	前方長
北九	石	塚	山	10		5.83	3.87	4.17
州	赤		塚	10		5.75	3.75	4.25
	弁	天	山	10		6.60	3.77	3 .39
中	迫	1	上	10		6.72	2.59	3.46
部	ス	リバー	チ山	10		6.20	2.50	3.80
九	向	野	Ħ	10		6.05	4 .45	4.45
州	山		下	10		6.38	3.79	3.45
	院		塚	10		5.51	3.33	4.48
	桜	井茶日	山臣	10		5.24	5.29	6.50
近	箸		墓	10		5.25	4.26	3, 93
	崇	神	陵	10		6.67	4.00	3.96
畿	景	行	陵	10		5.50	5.67	4.33
	椿	井丿	塚	10		4.00	3.00	6.00

装飾古墳も南朝鮮にはないので、大陸もしくは高句麗より伝来したとみるほかない。それは(1) 天草北部より熊本・八代平野、(2)菊池川流域、(3)筑後川流域において特殊な発展をしている。 鴨籠・長砂連・井寺古墳などまず火君文化圏におこっている。切石や割石積みの高句麗式の横 穴石室も、ここで最初におこっている。これらは5世紀から6世紀にかけて発展し、6世紀末 ・7世紀になって海路・瀬戸内海・近畿・関東・東北などへ拡がっている。

このような時代を経て律令時代になると、肥君(火君・肥公)の一族は、九州から近畿にひろがる。筑前国嶋郡川辺里に郡の大領として肥君猪手がいて、 144人も大家族を擁しているが、これは磐井乱の後、その跡におかれた「筑紫君の兒・火中君の弟」(『書紀』引『百済本紀』)

しかし肥君(公)の勢力が益城を中心に根づよく存在したことは、淨水寺(下益城郡豊野村郷)の延暦20年の燈楼台に、

共善和上御願造奉燈楼一基延暦廿年七月十四日

真上日乙

肥公馬長

化僧薬蘭

とあることによって知られる。肥公馬長は益城郡の大領、真上日乙は益城郡の小領で当麻郷の長であろう。浄水寺は延暦9年(790)に弉善によって建てられ、薬蘭はその二代目である。寺院は法隆寺式のプランをとる。肥後最古の白鳳期の陳内廃寺や益城国府が肥公の本拠につくられたのも、その勢威にもとづくものであろう。

この肥公はその後も益城を中心として蟠居していた。すなわち寛弘8年(1011)2月11日注申の「阿蘇郡四境注文」(『阿蘇家文書』下)に国使介肥の署名と花押があるので、平安中期にはすでに国衙を代表していることが知られる。

それは鎌倉時代初頭までつづく。建久6年(1195)2月8日の「肥後国司庁宣」「甲佐社領文書案」(『阿蘇家文書』7の8)は阿蘇・健軍・甲佐社の不輸租を決定したときの文書であるが、そのなかに肥後国の雑任国司9名が連署している。そのなかに3人の権介肥宿禰、2人の権介佐伯朝臣のほか、権介中原朝臣、権介紀朝臣、権介清原真人、権介真上真人、がみえている。このうち佐伯朝臣は益城郡佐恵木(佐伯・才木=現城南町西部)に本拠をおき、紀朝臣は他の文書によって宇土郡司であることが判り、眞上眞人は浄水寺碑文の眞上日乙の子孫であることが知られる。清原眞人は、嘉応元年(1169)3月16日の「藤崎宮三郎丸田地賣券案」(『詫麻文書』9)に飽田郡司散位清原眞遠とあるので、その子孫であろう。飽田郡司は奈良本で安前期には建部氏であったが、末期には清原氏が中心となったとみられる。おそらく肥後守清原元輔の一族の子孫で、清原氏の荘園の中心は西国の小野荘にあるから、清原眞人の本拠は植木町小野にあったと思われる。中原氏は分らない。

このように9人の雑任国司のうち7人が益城・宇土地方にあり、この地方の勢力が国衙の実権を持っていたことがわかる。しかも同じく建久6年3月「甲佐社領立券」(『阿蘇家文書』8)の中には、益東権介肥宿禰・書生権介肥宿禰の二人がみえ、先の肥宿禰と花押が異るので、鎌倉初期には5人の肥宿禰がみえることになる。益東は益城の東部が一時独立して、一郡を立てていたことを示すものである。

それが仁治2年(1241)の「肥後国留守所下文」(『寿福寺文書』 1 になると郡司紀・書生・大使とあって、宇土郡司の紀氏のみみえている。大使は国使(司)で、或いは肥宿禰かとも思われるが、具体的な名はみえない。以後、肥宿禰は全くあらわれることはない。肥公の一族がすべて滅んだとは云えないが、新しい荘園のもとで、この古代的勢力は衰え、南北朝の動乱によって全く姿を消すと思われる。3世紀に起った火君はその命脈を13世紀まで維持したのである。

註

- 1. 富樫卯三郎「弁天山古墳調査概報」(『熊本史学』第30号、昭和41年)。
- 2. 『日本書紀』欽明16年注引。筑紫の火君について「筑紫君の児、火中君の弟」という。 筑紫君の女が火君に嫁して生んだ子の意。
- 3. 松本雅明「東シナ海と有明海」(『倭と倭人の世界』昭和50年)。
- 4. 松本雅明「古墳文化の成立と大陸」(九州文化論集』1、昭和49年)。同「中国古代文化と日本」 (『アジアの古代文化』1976年春)。
- 5. 松本雅明「邪馬台と肥の国」1~7(『熊本日日新聞』昭和50年11月11-17日)。
- 6. 松本満『城南町史』昭和40年。
- 7. 竹内理三編『平安遺文』巻7、昭和38年、2734頁。
- 8. 熊本県編『熊本県史料』中世編第一、昭和35年。
- 9. 上掲『城南町史』隈牟田荘・豊田荘参照。

編集後記

日々に冬の寒さが、待ち焦がれた春の優しさに変ってい く今日、二度の酷暑と厳寒を耐え潜ぐり、遂行された発掘 の記録を纒めることができた

厖大な新事実と資料を前にして、この報告書は万全を尽くそうと意図したにもかかわらず、すでに編集の最中においても、多くの不備を発見したが、今はどうする術もないしかしこの点は、今後あらゆる機会をみて、整理公表し、その責務を果たしたいと想う

私事ながら、この塚原の地に幾度となく足を運ばれ、貴重な助言・指導を賜わりながらも、本書の刊行を待たずして、幽界に旅立たれた故坂本経堯先生、ならびに城南の地において、永年の考古学活動に先駆的な足跡を残された故小林久雄先生に、このささやかな報告を捧げたいと想う

尚、本書の編集にあたり、御世話になった方々の御芳名 を記して深謝の意を表したい

白石 嚴·杉村彰一·板楠和子·松村道博·佐藤征子 西町圭子·津川朱美·山本幸子

昭和50年2月11日 野田 記す

熊本県文化財調査報告第16集

塚原

一熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査— 1975年3月31日発行

編 集 熊本県教育委員会

発 行 熊本市水前寺 6 丁目18番 1 号 〒862

印 刷 株式会社 城野印刷所

熊本市琴平1丁目4番1号

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第16集を底本として作成しました。 閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用 してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用 方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名:塚原

発行:熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話: 096-383-1111

URL: http://www.pref.kumamoto.jp/

電子書籍制作日:2016年3月31日